

クロスアンジュ  
LIGHTNING EDITION ～  
天使とドラゴンと五人  
の巨人使い～

ヒビキ7991

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これは、とある国に古来から伝わる伝説である。

四本の腕を持ち、戦場に勝利の音楽を奏でる奏者の巨人。銀色に輝く鋼の甲冑を身に纏い、戦場に勝利をもたらす騎士の巨人。雷鳴を轟かせ、その腕はどの様な災いからも我々を守るとされる雷の護星神。気高く力強い声援で闘志を奮い立たせ、自陣を勝利へと誘う戦旗士の巨人。力強く大空を舞い、白き翼で風を操り、戦場に嵐を巻き起こす天馬の巨人。

それぞれの巨人の力を持つ少年達が現れ、二人の女神が歌うとき、巨人の力は一つと

なり、あの世とこの世、全ての民を救う存在とならん・・・。

今、この伝説が現実になろうとしている・・・。

# 目次

E P. 01 / 天馬とアンジュリーゼ

1

E P. 02 / 孤島の軍事施設！アルゼナ

ル！

E P. 03 / アンジュの改心！解き放た

れた力！

E P. 04 / 雷門サッカー部四人集、現

る！

E P. 05 / 信じ合うためには

E P. 06 / アンジュと天馬の漂流記

《前編》

E P. 06 / アンジュと天馬の漂流記

《後編》

E P. 07 / 密航侍女モモカ・荻野目

215

E P. 08 / 不思議な夢の出来事

262

E P. 09 / 鋼のガールフレンド《前編》

316

E P. 09 / 鋼のガールフレンド《後編》

353

E P. 10 / アルゼナル脱走計画

379

E P. 11 / 再会と裏切りの我が故郷

《前編》

422

190

- E p. 11 / 再会と裏切りの我が故郷  
 《後編》 453
- E p. 12 / 信じ合える者達 《前編》
- 488 E p. 12 / 信じ合える者達 《後編》
- 519 E p. 13 / 天使と竜の輪舞
- E p. 14 / 明かされる過去、明かされる真実 597
- 629 E p. 15 / 皇帝の落日 《前編》
- E p. 15 / 皇帝の落日 《後編》
- 664 E p. 15 / 皇帝の落日 《後編》
- E p. 16 / 世界の片隅で 《前編》
- 697 E p. 16 / 世界の片隅で 《後編》
- 720 E p. 17 / 遭遇！アウラの民！
- 754 E p. 18 / 対決！アンジュvsサラマ  
 ンディーネ！ 《前編》 805
- E p. 18 / 対決！アンジュvsサラマ  
 ンディーネ！ 《後編》 837
- E p. 19 / 伝説の五大巨人 898
- E p. 20 / 激突！破壊天使vs機動戦士！ 932

E P. 2 1 / 深海の攻防！天馬 v s ジル  
 ! 《前編》 | 973  
 E P. 2 1 / 深海の攻防！天馬 v s ジル  
 ! 《後編》 | 1010  
 E P. 2 2 / 世界の調律者、エンブリヲ  
 《前編》 | 1040  
 E P. 2 2 / 世界の調律者、エンブリヲ  
 《後編》 | 1069  
 E P. 2 3 / 時空融合 《前編》 | 1088  
 E P. 2 3 / 時空融合 《後編》 | 1151  
 E P. 2 4 / 対決！創造主 v s 破壊者  
 《前編》 | 1139  
 E P. 2 4 / 対決！創造主 v s 破壊者

《後編》 | 1173  
 E P. 2 5 / Stand by Me  
 ~ 本先に大切なもの 《前編》 | 1220  
 E P. 2 5 / Stand by Me  
 ~ 本先に大切なもの 《後編》 | 1249  
 E P. 2 6 / 発動！ラストリベルタス  
 1299  
 E P. 2 7 / 世界消滅へのカウントダウン  
 《前編》 | 1337  
 E P. 2 7 / 世界消滅へのカウントダウン  
 《中編》 | 1374  
 E P. 2 7 / 世界消滅へのカウントダウン  
 《後編》 | 1411

- E P. 28 / 最終決戦！俺達の世界を救  
え!! 《前編》 1442
- E P. 28 / 最終決戦！俺達の世界を救  
え!! 《中編》 1478
- E P. 28 / 最終決戦！俺達の世界を救  
え!! 《後編》 1507
- 最終回／そして始まる、新たな物語  
1551
- 番外編①／激闘？天馬の妻に相応しいの  
は誰だ!?! 《前編》 1588
- 番外編①／激闘？天馬の妻に相応しいの  
は誰だ!?! 《後編》 1613
- 番外編②／対決！雷門vsアルゼナル！





# Ep. 01 / 天馬とアンジュリーゼ

私立雷門中学校 1-A

ここは東京都のとある町、稲妻町にあるサッカーの名門、私立雷門中学校。

天馬

「よし、忘れ物なし！」

彼の名は松風天馬。雷門中学校の1年生でありながら、キャプテンとして雷門中サッカー部を率いるサッカー少年である。

天馬

「じゃあまた明日！」

生徒1

「じゃあな天馬。」

天馬は教室を後にした。

生徒2

「ところで聞いたか？隣のクラスの山本、登校中に警察に逮捕されたらしいぜ？」

生徒1

「山本って、あの山本か？嘘だろ？あんな生真面目で礼儀正しい山本が警察に逮捕されるなんてよ。」

生徒3

「隣のクラスじゃあいつの噂で持ちきりだぜ。噂によれば、山本はノーマだったから逮捕されたんじゃないかとも言われてる。」

生徒2

「ノーマ……。」

---

く稲妻町 河川敷グラウンドく

その後、天馬は河川敷のグラウンドでドリブルの練習を行っていた。

天馬

「ふう〜…」

天馬はセンターサークルの中で一旦立ち止まり、少し休憩した。

天馬

「よし、もういっちょよ！」

そして直ぐに走り出し、ドリブルの練習に戻った。すると、堤防の上を一台の白いリムジンが通りかかった。

キキキキーツ！

リムジンは急ブレーキをして停車。天馬はタイヤの音に気付き足を止め、リムジンの方を見た。

天馬

「リムジン？神童さんの家のかな？」

ガチャツ

後部側のドアが開き、メイド衣装を纏った一人の少女が姿を見せた。紫色のショートヘアにオレンジ色の透き通った瞳をしている。

天馬

（誰だろう、あの人。）

???

「もし、そのあなた。」

少女は天馬に声をかける。

天馬

「はい。」

天馬は少女に向かって返事をした。少女はゆっくりと階段を下り、天馬に近づいた。

???

「大江戸国際空港に向かいたいのですが、ご存知であれば道を教えていただけませんか？」

天馬「大江戸国際空港にですか？ちょっと待つてください。」

天馬はバッグからスマートフォンを取り出し、マップアプリを起動した。

天馬

「この道を真っ直ぐ行って、この大通りにです。そしたらここを左折して・・・」

???

「・・・あの、ご迷惑でなければ空港までナビゲートしてください。私、知らない土地で

道順を覚えるのはちよつと苦手で・・・」

少女にそう言われ、天馬は少し困った顔になるが。

天馬

「分かりました。俺が空港までナビしましょう。」

???

「ありがとうございます！えーつと・・・」

天馬

「あ、自己紹介が遅れました。私立雷門中学校1年、及び雷門中サッカー部キャプテン、松風天馬です。」

???

「《モモカ・荻野目（おぎのめ）》です。ミスルギ皇国の第一皇女、アンジュリーゼ様の筆頭侍女しております。」

すると・・・。

「モモカ、まだなの?」

リムジンの窓から別の少女が顔を出した。金色の長く美しい髪、透き通った赤い瞳からは気高いオーラが伝わってくる。

天馬

「モモカさん、もしかしてあの人が……。」

モモカ

「はい。我らがミスルギ皇国の第一皇女、《アンジュリーゼ・斑鳩（いかるが）・ミスルギ》様でございます!」

天馬

「うう……。」

モモカ

「アンジュリーゼ様、この方が空港まで道案内をしてくれるそうです!」

アンジュリーゼは天馬に目を向け、天馬は彼女からの視線で緊張し震えている。だが、彼女は天馬に優しく微笑んだ。

アンジュリリーゼ

「そうですか。では連れてきてください。」

モモカ

「はいっ！」

天馬とモモカはリムジンに乗り込み、リムジンは河川敷を出発。大江戸国際空港へ向けて走り出した。

-----

く 高速道路 リムジン車内く

少し経ち、一同を乗せたリムジンは高速道路を走っていた。

天馬



「このまま道なりに行ってもらえれば、次のジャンクションで空港のターミナルに繋がる道路に入れます。」

運転手

「わかりました。」

天馬はリムジンの運転手に道を教えた。車内には他にも、アンジュリーゼの父でありミスルギ皇国皇帝《ジュライ・飛鳥・ミスルギ》。アンジュリーゼの母でありミスルギ皇国皇后《ソフィア・斑鳩（いかるが）・ミスルギ》。アンジュリーゼの兄でありミスルギ皇国の皇太子《ジュリオ・飛鳥（飛鳥）・ミスルギ》。アンジュリーゼの妹でありミスルギ皇国の第二皇女《シルヴィア・斑鳩（いかるが）・ミスルギ》が乗車している。

ソフィア

「申し訳ありません。空港まで道案内をしていただいて・・・。」

ソフィアは天馬に頭を下げた。

天馬

「気にしないでください。ところで、日本へは何をされに来られたのですか？」  
ジュライ

「ただの観光だよ。このシルヴィアが、どうしても日本に遊びに行きたいと言いつつも  
のだからね。」

天馬の質問にジュライは答えた。シルヴィアは窓に張り付きながら外の景色を眺め、  
ジュリオは不機嫌な顔をしながら窓の外を眺めていた。

天馬

「皇帝は子供思いなんですネ。」

ジュライ

「ハハハッ。」

天馬の一言にジュライは笑顔を見せた。ソフィアも静かに優しく微笑んだ。

アンジュリーゼ

「・・・あの、天馬さん。」

突然、アンジュリーゼが天馬に声をかけた。

天馬

「はい？」

アンジュリーゼ

「あなたはマナとノーマについてご存知ですか？」

天馬

「名前は聞いたことがありますが、詳しくは分かりません。マナとノーマって、いったい何なんですか？」

アンジュリーゼ

「マナとは、人類が進化の果てに得たとされる技術で、今の世界ではマナを扱えることが普通の人間の絶対条件とされています。念動力のように物質を浮遊・移動させたり、拘束・防護用の結界を張ることも可能。また、統合システムへのアクセスによって情報共有が可能になり、マナ使い間でのコミュニケーションツールともなっています。これらマナ技術の発展により、我々の国は戦争や貧富の差も消滅したとされています。一方ノーマとは、マナの力を持たず、それを無効にしてしまう人間の突然変異種で、強欲的

で反社会的な化け物で、何故か女性だけ発生するのです。ノーマがこの世に生まれる原因を突き止め、この世から全てのノーマを根絶すれば、この世界がさらに平和になることを私は願っているのです。」

天馬

「それはどうでしょう?」

アンジュリーゼ

「えっ?」

天馬の返答に、アンジュリーゼは驚いた。

天馬

「俺は、そのノーマの様に突然変異で生まれ怪物扱いされ続けた少年達を知っています。でも、どんな変異で生まれてきたとしても同じ人間。同じ環境で共に暮らしていけるはずなんです。普通じゃないからって怪物扱いするのはどうかと俺は思います。」

アンジュリーゼ

「天馬さん・・・」

ノーマを撲滅しようと考えてるアンジュリーゼは、天馬の共存するという考えが理解出来なかったが、否定はしなかった。

ジュライ

「・・・天馬君、君に頼みがある。」

突然、ジュライが天馬に声をかけ、天馬に金色に輝くカードを渡した。

天馬

「このカードは？」

ジュライ

「ミスルギ皇国の王室御用達入国パスポート兼オールマイティーカードだ。これがあればいつでもミスルギ皇国に行くことが出来るし、国内の交通機関は全て乗り放題さ。」

天馬

「なぜ、俺にこれを？」

ジュライ

「君にはアンジュリーゼの友達になってほしいんだ。」

「っ!?」

ジュライの言葉に、その場にいた誰もが驚いた。

ジュライ

「私は、君からマナとは違う別の力を感じる。アンジュリーゼと天馬、君たち二人は国も違えば思想も違う相容れぬ存在かもしれないが、その純粋で優しい心を持つ君なら、きつとアンジュリーゼと良い友達になれるはずだ。」

天馬

「俺が、アンジュリーゼ様と・・・」

天馬とアンジュリーゼは互いに目を合わせた。そして二人は静かに微笑み、ジュライに顔を向けた。

天馬

「わかりました、ジュライ皇帝。」

アンジュリーゼ

「わかりましたわ、お父様。」

二人の笑顔を見て、ジュライは笑顔で頷いた。

天馬

「俺は私立雷門中学校1年、松風天馬です！」

アンジュリーゼ

「私はミスルギ皇国第一皇女、アンジュリーゼ・斑鳩・ミスルギです。今後ともよろしく  
お願いいたします。」

天馬とアンジュリーゼは自己紹介をし、握手を交わした。ジュライとソフィアは笑顔  
で見守り、モモカとシルヴィアは拍手したが、ジュリオは不機嫌な顔をしていた。

—————

く 大江戸国際空港 ターミナルビル前く

数分後、一同を乗せたリムジンは大江戸国際空港に到着した。運転手はリムジンをピルの入り口付近に止め天馬を降ろした。

アンジュリーゼ

「空港まで御一緒していただき、ありがとうございます。」

リムジンの窓からアンジュリーゼが天馬に礼を言った。

天馬

「近い内に、必ずミスルギ皇国に行きますね！」

アンジュリーゼ

「その時は是非、皇殿に遊びに来てくださいね。」

天馬「はい！」

天馬とアンジュリーゼは握手を交わした。



アンジュリーゼ

「では、私達はこれで失礼します。」

アンジュリーゼは窓を閉め、リムジンはその場を離れ滑走路へと繋がるゲートに向かった。

天馬

「……さて、俺も帰ろうか。」

天馬は駅へと向かい、そして電車で稲妻町へと帰った。



く大江戸国際空港 国際線ターミナルく

それから一週間後、天馬は秋と共に大江戸国際空港の国際線ターミナルへとやって来た。背中には一週間分の荷物を詰め込んだリュックを背負い、両手にはアンジュリーゼ

達へのお土産のお菓子を大量に持ち、ポケットにはジュライのくれたパスポートを入れている。

天馬

「荷物の再確認よし。」

秋

「天馬にとって始めての海外旅行ね。」

天馬

「ミスルギ皇国、真名部と皆帆の話じゃ近未来の技術で作られた国らしい。」

ピンポンパンポーン

アナウンス

『アイランド航空から出発便のご案内をいたします。アイランド航空ミスルギ皇国ミスルギ国際空港行き、12時30分発、1273便は、ただいま皆様を機内へのご案内中でございます。ミスルギ皇国ミスルギ国際空港行き、12時30分発、1273便をご利用のお客様は保安検査場をお通りになり、8番搭乗口よりご搭乗ください。』

天馬

「じゃあ秋姉、行ってくる！」

秋

「気を付けてね、天馬。」

天馬はミスルギ国際空港行き便に乗るため8番ゲートに向かった。そしてその数分後、天馬の乗るアイランド航空1273便は定刻通りに離陸し、大空へと飛び立った。

-----

く1273便 機内く

天馬

「目的地のミスルギ国際空港まで約10時間か。到着するまで、ちよつと寝ようかな．．．。」

天馬はアイマスクをし、深い眠りについた。そして天馬が深い眠りについた頃、一人の乗客が機内のモニターで国際ニュースを見ていた。

キャスター

『次のニュースです。先日、ミスルギ皇国内にて1203—77号ノーマとして拘束されたアンジュリーゼ・斑鳩・ミスルギ第一皇女は先日未明、ノーマ収容施設へ無事送還されたとの情報が入ってきました。なおジュリオ・飛鳥・ミスルギ皇太子が新皇帝を勤めることとなり、ノーマ撲滅への動きがより活発化されると思われる。』

—————

くミスルギ国際空港 ターミナルビル前く

10時間後、天馬は無事ミスルギ国際空港に到着した。空は快晴、太陽はキラキラ輝いている。町中は近代的な建造物が建ち並び、車や電車が宙を浮きながら走り回り、まさに未来都市そのものだった。

天馬

「これがミスルギ皇国！スゴい！」

そんな中、天馬は町の中央に聳え立つ巨大な塔を見た。

天馬

「あれが皇殿。早速行ってみよう。アンジュリーゼ様やジュライ皇帝は元気にしてるかな？」

天馬は皇殿に向かって歩き始めた。だが、彼は皇殿で思いもしない真実を知ることになる。

To Be Continued...

## E p. 02 / 孤島の軍事施設！アルゼナル！

くミスルギ皇国 皇殿 皇帝の間く

天馬は皇殿内、皇帝の間を訪れた。だが、皇帝の椅子に座っているのはジュライ皇帝ではなく、ジュリオ皇太子だった。

天馬

「ジュリオ皇太子様、ご無沙汰しております。」

ジュリオ

「ジュリオ皇太子様か… 出来ることなら、私の事は皇帝陛下と呼んでいただきたい。皇帝陛下ジュリオ一世と！」

ジュリオは不気味な笑みを浮かべそう答えた。天馬はこの間まで皇太子であったジュリオが何故皇帝になったのかが理解出来なかった。

天馬

「ジュライ皇帝はどうなされたのですか？」

ジュリオ

「お父様は、ジュライは皇帝の座から引きずり下ろしました。今は牢獄の中で大人しくしています。」

ジュリオの発言に、天馬は驚いた。

ジュリオ

「しかも、彼は我が妹アンジュリーゼがノーマであることを隠し続けていました。」

天馬

「アンジュリーゼ様が、ノーマ・・・？ジュリオ皇帝、アンジュリーゼ様は今何処に？」  
ジュリオ

「2日ほど前に、辺境の軍事基地アルゼナルへと連行されました。一応言っておきますが、自分もアルゼナルへ行こう等と思わない事をオススメしましょう。あそこは言わば地獄も同然ですから。」

天馬

「・・・。」

天馬は静かに皇帝の間を後にした。

ジュリオ

「松風天馬。彼も次期に、私の障害となるかな・・・」

|||||

く 皇殿 地下牢く

天馬は皇殿の地下にある牢獄へとやって来た。牢獄の一つには、囚人服を着たジュライ皇帝の姿があつた。

天馬

「ジュライ皇帝！」



ジュライ

「その声……まさか、天馬君か?」

天馬はジュライの牢獄の前で腰を下ろした。

ジュライ

「すまない……こんな形で再開する事になるとは……。」

天馬

「いったい、何があったんですか?」

ジュライ

「2日ほど前、アンジュリーゼがノーマという事実が国民の前で公になった。アンジュリーゼはアルゼナルへと連行され、ソフィアは銃撃されて他界し、私は皇帝の座から引きずり下ろされた……天馬君、君に頼みがある。」

天馬

「俺に?」

ジュライ

「アルゼナルに行き、娘の側に居てやってほしい。娘はきつと、自分が置かれている状況

を理解できず錯乱状態になっているだろう。だが、君が娘の側に居てやってくれば、娘は少しは安心するだろう。今、国中の人間はジュリオしか信用していない。君しか頼れる人間は居ないんだ……」

ジュライの頼みに、天馬は笑顔で応答した。

天馬

「……わかりました。俺、アンジュリーゼ様を全力でお守りします！」

ジュライ

「ありがとう、天馬君……。君を娘の友達に選んで正解だったかもしれない……。」

天馬

「それで、そのアルゼナルへはどうやって行けば良いんですか？」

ジュライ

「空港からアルゼナルへ物資を運ぶ輸送機が定期で運航されている。上手くいけば、それに乗ってアルゼナルへ行けるかもしれない。」

天馬

「情報、ありがとうございます。それから……。」

天馬は土産袋の中から菓子箱を一つ取り出し、ジユライに渡した。

ジユライ

「これは？」

天馬

「日本のお土産です。本当は、アンジュリーゼ様や皆様と一緒に食べたのですが、良かったらどうぞ。それでは……。」

天馬は牢獄を後にした。ジユライは包み紙を剥がし箱を開けると中にはどら焼きや栗饅頭等が入っていた。

ジユライ

「……ありがとう。最後の最後に、大好きなお菓子を口にすることが出来るなんて、私はなんて幸せな男なんだ……。」

アンジュリーゼを頼むぞ、天馬君……。」

ジュライは一人静かに涙を流し、静かに菓子を味わった。



くミスルギ国際空港 ターミナルビルく

夕方、空港に戻った天馬はアルゼナルへ物資を運ぶ輸送機を探していた。

天馬

「とりあえず空港に戻ってきたけど、アルゼナルへの輸送機なんて、何処にあるんだ？」

天馬は空港の窓から滑走路を見渡した。すると、貨物ターミナルの近くで奇妙な形の飛行機が荷物を積み込んでいた。

天馬

「何だろう、あれ。」

天馬は貨物ターミナルへと向かった。

—————

くミスルギ国際空港 貨物ターミナルく

貨物ターミナルに着くと、そこには輸送機が3機並列に並んでいた。

天馬

「もしかして、これがアルゼナル行きの輸送機?」

天馬は辺りを見回した。すると、目の前の大きな木箱の側面に《Arsenal》と赤い印がしてあった。

天馬

「これか、アルゼナル行きの荷物。」

すると・・・

警備員

「誰だ！」

巡回中の警備員に見つかった。

警備員

「マナの光よ！」

警備員は天馬の周囲に四角錐の障壁を展開した。

天馬

「ちよ、ちよっと待ってください！俺は別に怪しい者じゃ・・・。」

天馬は警備員の元へと近づく。  
すると……

バリーン!

天馬が障壁に触れた途端、障壁が粉々に砕け散った。

警備員

「なっ!?! マナの光を破壊した……!?! お前、ノーマだったのか……!?!」

天馬

「俺が、ノーマ?！」

警備員も天馬も、突然の事態に驚いていた。

警備員

「し、しかし、ノーマは女性しか存在しないはずだが、何故男性のハズである君が……。」

天馬

「俺にも分かりません……。ですが、これでコソコソしないで済む。俺はある人に会うために、アルゼナルに行きたいんです。本当は荷物に隠れて密航するつもりでしたが、これで堂々とアルゼナルに行ける。」

警備員

「……。わかった。君の理由はさておき、君をノーマ管理法に基づき、アルゼナルに連行する。次の貨物便と一緒に、君をアルゼナルまで連れていこう。」

天馬

「ありがとうございます。」

こうして、天馬はノーマとしてアルゼナルへと連行されることになった。

天馬

（アンジュリーゼ様、待っていてください！俺、今からアンジュリーゼ様のところに行きます！）

輸送機のハッチが閉まり、輸送機は離陸。天馬とアルゼナル行きの荷物を載せた輸送

機はアルゼナルに向けて飛び立った。





「アルゼナル デツキ」

深夜、天馬を乗せた輸送機は孤島に作られた軍事施設アルゼナルに到着した。デツキでは複数の女兵士と黒髪の女性、緑髪のメガネの女性が輸送機を待っていた。

作業員

「ジル総司令官殿、定刻通り輸送物資のお届けに参りました!」

黒髪の女性はアルゼナルの総司令官、ジル。

ジル

「ご苦労です。ところでエマ、そちらの少年は?」

緑髪のメガネの女性はノーマ管理委員会からアルゼナルに送り込まれた監察官兼ア

ルゼナルの軍務官、エマ・ブロンソン。アルゼナルで唯一のmana使いである。

エマ

「1203―78号ノーマ、松風天馬。出身は日本の東京、13歳。情報によると、この少年は世界初の男性のノーマだそうです。」

エマの発言に、その場にいた全員が驚いた。

エマ

「あなたには、ここアルゼナルへ入隊。兵士として戦うことを義務付けます。」

天馬

「兵士……ですか？」

エマ

「取り合えず、あなたの所持品は預からせていただきます。」

天馬

「わかりました……。」

エマは天馬の荷物を全て預かり、兵士と共に徹底的にチェックを行った。

エマ

「大量のお菓子と着替えと洗面道具。それ以外に目立った物は全く無いです。」

ジル

「取り合えず精密検査に出しておけ。それで問題が無いと分かれば後で返しておけ。」

天馬

「ジル総司令官。一つお伺いしたいことが。」

ジル

「何だ?」

天馬

「ミスルギ皇国第一皇女、アンジュリーゼ・斑鳩・ミスルギ様がここに連行されたとミスルギ皇国の皇帝から聞いたのですが、それは本当ですか? 本当でしたら、アンジュリーゼ様に会わせてください。」

ジル

「・・・いいだろう。天馬、私について来い。」

ジルは天馬を連れてその場を離れた。エマはマナの力で天馬の荷物を動かし、ジルを追いかけた。

—————

### アンジユの部屋

ジルは天馬をアンジユリーゼの部屋へと連れてきた。だが、彼女は身体中に包帯を巻かれた状態でベッドに拘束されて眠っていた。

ジル

「こいつがお前の会いたがっていた女、アンジユだ。」

天馬

「アンジユ？アンジユリーゼ様・・・ではないんですか？」

ジル

「ここへ連行されたノーマ達は皆、名前を改名されることになっている。だから天馬、お前は今日から松風天馬ではなく、ただの天馬となる。いいな？」

天馬

「はい。」

ガチャツ

部屋の扉が開き、藍色ツインテールと茶色い瞳の少女《サリア》と、桃色ロングヘアーと緑色の瞳の女性《エルシャ》が入ってきた。サリアの手にはシートとボロボロの紙幣の束。エルシャの手には天馬の所持品があった。

サリア

「今日からあなたは、このアンジュと同じ部屋で生活してもらいわ。生活するうえで足りない物があれば、これで調達してちょうだい。」

エルシャ

「それから、あなたの所持品は全て御返しすることになったわ。」

天馬

「態々ありがとうございます。えーつと・・・。」

サリア

「私はパラメール第一中隊の隊長、サリア。こっちはエルシャ。」

エルシャ

「よろしくね〜♪」

天馬

「松……じゃなくて、天馬です。よろしくお願いします。」

天馬は二人にお辞儀をし、荷物を受け取った。サリアはアンジュを睨み、エルシャは心配そうな表情を見せている。

天馬

「……アンジュリーゼ様、いったい何があつたんですか？」

サリア

「言いたくないわ。ただ、その女と暮らすのなら一つだけ忠告しておく。そいつは疫病神よ。」

サリアはそう言うのと部屋を後にした。ドアが閉まって直ぐ、エルシャは話し始めた。

エルシヤ

「私達ノーマがここに運ばれてくるのは、兵士としてドラゴンを討伐するためのなの。」

天馬

「ドラゴン?ドラゴンって、あのドラゴンですか?鋭い爪と牙があつて大きな翼があつて口から火を吹く。」

ジル

「次元を越えて侵攻してくる巨大攻性生物、Dimensional Rift Attuned Gargantuan Organic Neototypesの単語の頭文字を取った通称だ。ま、外見はおとぎ話に登場するドラゴンに酷似しているから難しく考えなくて良い。」

エルシヤ

「2日前、アンジュちゃんは私達パラメイル第一中隊に入隊して、私達と一緒にドラゴン討伐に向かったわ。でもね、アンジュちゃんは戦闘に参加せず、国に帰るって言つて逃亡。その時に新兵二人とその時の第一中隊の隊長を戦死させてしまったの・・・。彼女は辛うじて一命をとりとめたけど、他のみんなは彼女を人殺しって呼んでいたわ・・・。」

天馬

「・・・。」

ジル

「天馬。早速だが明日、第一中隊のもとで訓練を行う。今日はもうゆつくり休むと良い。」

天馬

「わかりました。ありがとうございます。」

ジルとエルシヤは部屋を後にし、天馬はアンジュが眠るベッドの隣のベッドに腰を下ろし、アンジュを見つめた。

天馬

(アンジュリーゼ様……)

天馬はそのまま眠りについた。そして次の日の朝、天馬が目覚めた時には既にアンジュは姿を消していた。天馬はユニフォーム姿で部屋を後にした。

-----



「墓地」

天馬は訓練施設に向かう途中、墓地の近くを通り掛かった。

天馬

「戦死したノーマ達は、ここに眠るのか……。」

墓地の奥にアンジュとジル、さらに商売人ジャスミンの姿があった。天馬は門の影に隠れ三人の様子を見た。

アンジュ

「私はこれから、どうすればよいのですか……」

ジル

「戦ってドラゴンを倒す、以上だ。」

アンジュ

「そもそも、ドラゴンとは何なのですか? 何故、私があんなモノと……。」

ジル

「授業を聞いていただろうか？ドラゴンを倒すための兵器。それが我らノーマに許された、たった一つの生き方だ。」

ジャスミン

「皇女様としては本望だろうか？世界のために戦えるんだからね。」

ジル

「ここでノーマ達がドラゴンを倒してくれているお陰で、マナの世界はずっと平和なのだ。平和ボケしたあんたの世界は、ここで死んでいったノーマが守っていた。だからアンジュ、今度はお前が守る番だ。」

ジルの言葉に、アンジュは納得出来なかった。

アンジュ

「知りません…そんなこと… 私はノーマではないのに、どうしてこんな場所に…」  
ジル

「ノーマでないと言うのなら、証拠を見せてみる。」

ジルはアンジュに1本のペンを渡した。アンジュはマナの光でペンを動かさそうと

思っていたが、彼女がマナの光を放つことは無かった。アンジユは膝をつき、絶望した。

アンジユ

「そんな… 今だけ…少しマナが使えないだけです… それなのに、何でこんな地獄みたいな所…理不尽です…」

ジャスミン

「それを決めたのはお前さん達だろ? お前さんは、お前さん達が作ったルールに従ってここに来たんだよ。他のノーマの娘たちも、みんなね。」

ジル

「ノーマは人間じゃない…か。」

「だったらアンジユ、お前は何だ! 皇女でもなく、マナも使えず、敵前逃亡し、年端もいかぬ仲間を死なせたお前は、いったい何なんだ!?!」

ジルはアンジユの服の襟を掴み叫んだ。アンジユは泣いていた。

ジル

「死んだ仲間の方もドラゴンを殺せ！それが出来ないなら、死ね！」

アンジユ

「では、殺してください…」

ジル

「駄目だ。この者達と同じくドラゴンと戦って死ぬか、年老いて命が燃え尽きて死ぬかしか許されぬ。」

天馬（戦って死ぬか、年老いて命が燃え尽きて死ぬかしか許されないか…）

天馬は静かに墓地を離れた。そして、天馬と入れ違う様にサリアが墓地に現れた。

サリア

「長官、ドラゴンが…。」

ジル

「そうか。アンジユ、出撃だ。」

アンジユ

「はい…」

サリア

「ですが、パラメイルはもう天馬の分しか残っていません。彼女に回せる機体は……。」  
ジル

「あるじゃないか、アイツが。」

—————

くデツキ パラメイル格納庫く

天馬は途中、パラメイル格納庫を訪れた。格納庫には色とりどりのパラメイルが待機しており、天馬は白いボディに水色の翼のパラメイルを見ていた。

天馬

「これが、パラメイル。」

???

「対ドラゴン様の人型機動兵器で、通称は《ノーマの棺桶》なんて言われてる。全種類が戦闘機形態フライトモードと、人型形態アサルトモードの2形態へ変形できて、飛行形

態になることで高速移動することが可能なんだ。」

天馬にパラメールの説明をした藍色ツインテールの少女は、第一中隊の整備班長メイ。メイは天馬の隣に立ち止まった。

メイ

「でもってこいつはお前の機体、グレイブ！新兵に配給される量産機で、こいつみたいは無装備状態の機体は通称ノーメイクって呼ばれてる。他のパラメールより機体性能は劣るが、近接戦闘、後方支援など多くのバリエーションがあつて、ライダー各自の手で多様なカスタマイズをするのも可能なんだ。」

天馬

「よろしくな、グレイブ！」

メイ

「じゃ、私やることあつから。」

メイはその場を後にし、天馬は自分のパートナーとなるグレイブのコックピットに乗った。

天馬

「コックピットはバイクに似てるな。これが操縦桿で、これがアクセルだな。でもつて……。」

すると……

ガコンツ

突然、天馬のグレイブがゆっくりと動き始めた。

天馬

「うわっ! な、何だ!？」

-----

くデツキ カタパルトく

ガコンツ

天馬のグレイブは、他のパラメイルと共にカタパルトへセットされた。さらにその後、各々のパラメイルにライダーが搭乗し、天馬の斜め右前方の水色のパラメイル、アーキバスサリア・カスタムにはサリアが、右隣のオレンジ色のパラメイル、ハウザーエルシャ・カスタムにはエルシャが、左隣の白い傷だらけのパラメイル、ヴィルキスにはアンジユが乗っていた。

天馬

「ど、どうなってるの…」

エルシャ

『あら？もしかしてその声、天馬君？』

グレイブの通信機からエルシャの声がした。さらに右ハンドル側の画面にはサリアが映っている。



サリア

『て、天馬!? あんた、何でパラメイルに乗ってるのよ!? 訓練施設にいるんじゃないの!?』

天馬

「いや・・・その・・・自分の乗る機体を見てみようと思つて格納庫に行つたんですけど、試しに乗つてみたらこうなりました・・・。」

???

『なるほど、じゃあ訓練も受けずに早速実戦つて訳だ。操縦謝つて落ちるのがオチだね。』

『ハハハ!!』

赤いパラメイル、グレイブヒルダ・カスタムに乗る赤色ツインテールとパープルの瞳の少女《ヒルダ》がキヤグ混じりの悪口を言い、黄色いパラメイル、グレイブロザリー・カスタムに乗る橙色のショートヘアーと青色の瞳の少女《ロザリー》と、黄緑のパラメイル、ハウザークリス・カスタムに乗る銀髪の三つ編みポニーテールと桃色の瞳の少女クリスが大笑いした。

???

『気にしない気にしない！パラメイルの操縦なんて思ったより簡単だから問題無いよ！』

ピンクのパラメイル、レイザーに乗るヒルダとは違う赤色のシヨートヘアーとイエローの瞳の少女《ヴィヴィアン》が励ました。

サリア

『まったく……じゃあ天馬、今日は戦闘に参加せず、後方にて待機。私達が日々どんな戦いをしているのか、その目に焼き付けておきなさい。』

天馬

「はいっ！」

サリア

『それじゃあ行くわよ。サリア隊、発進します！』

サリアの掛け声と共に、サリアのアーキバスサリア・カスタムは発進。それに続いて、他のメンバーのパラメイルも次々発進した。天馬のグレイブも一同に続いて発進し、ア

ンジユのヴィルキスもグレイブに続いて発進。第一中隊のパラメイルは大空へと飛び立った。

ロザリー

「まったく、仲間殺しのイタ姫だけじゃなく、訓練もマトモに受けてない少年兵とも一緒に出撃なんて……。」

クリス

「面倒くさい。」

ヒルダ

「でも彼、どうやらやる気みたいよ。」

天馬はグレイブを上下左右に動かし、機体のコツを掴もうとしていた。

天馬

「なるほど、大体分かった!」

天馬はグレイブのエンジン出力を上げ、第一中隊の遙か左側へ移動。そして並走状態

でアーキバスサリア・カスタムに猛スピードで突っ込む。

サリア

「ちよ、ちよつと何!?!うわあああああ!?!」

天馬

「それっ!」

天馬はグレイブを右に180度旋回させ逆さまになり、アーキバスサリア・カスタムとグレイブヒルダ・カスタムの真上を通過。さらに機体を右に180度旋回させ、グレイブヒルダ・カスタムの右隣で静止した。サリアとヒルダは天馬の飛行を見て嘩然とし、アンジユ以外全員は彼に声援を送った。

サリア・ヒルダ

「お、お見事…」

「「「おおー!」」」

天馬は静かに後方へと移動した。

すると・・・

エルシヤ

「12時の方向、敵影確認！」

サリア

「くるぞー！」

第一中隊の前方の海中から、紫色の巨大なドラゴンが空中に姿を現した。ドラゴンは左胸が凍っている。

サリア

「天馬機以外全機、駆逐形態！凍結バレット装填！天馬機は後方にて待機！」

天馬

「了解！」

「イエス、マム！」

天馬はエンジンの出力を下げスピードを落とした。第一中隊はパラメイルをフライ

トモードからアサルモードへ変形させ、左腕に氷結バレットを装填し、ドラゴン目掛けて突っ込む。すると、ドラゴンは自身の真下に巨大な魔方阵を出現させ、海中から無数の光る球を飛ばし第一中隊を攻撃。第一中隊のパラメイル達は腕や足、装備していた武装等を破壊された。

天馬

（凄い……。これが、ドラゴン……。くそっ！せめて銃さえ装備していれば遠距離から援護出来るのに、何で俺のグレイブはノーメイクなんだよっ！）

武器を装備していない天馬は、遠くから戦いを眺めている事しか出来なかった。すると、前方にアンジュの乗るヴィルキスを発見した。ヴィルキスはフライトモードのままドラゴンへと突っ込んでいく。

天馬

「アンジュリーゼ様のパラメイル。なんでフライトモードのままなんだ？」

『もうすぐ……。もうすぐよ……。』

天馬

『この声……アンジュリーゼ様?』

通信機からアンジュの声が聞こえてきた。

『もうすぐ、サヨナラ出来る…』

天馬

「もうすぐサヨナラ出来る……まさか!?!」

天馬はグレイブのエンジンを吹かし、最大出力でアンジュの乗るヴィルキスの元へと向かった。

天馬

「やめるんだ!アンジュリーゼ様!」

T  
o  
B  
e  
C  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
:



# E p. 03 / アンジュの改心! 解き放たれた力!

『もうすぐ、サヨナラ出来る…』

天馬

「もうすぐサヨナラ出来る・・・まさか!？」

天馬はグレイブのエンジンを吹かし、最大出力でアンジュの乗るヴィルキスの元へと向かった。

天馬

「やめるんだ! アンジュリーゼ様!」

サリア

『ちよつと天馬、何してるのよ!? 命令よ! 戻りなさい!!』

サリアの命令を聞かず、天馬は猛スピードでヴィルキスを追いかける。そしてヴィル

キスに追いつき並走。

アンジュ

「ちゃんと、ちゃんと死ななきや…」

ドラゴンはヴィルキスに向かってゆつくりと手を伸ばす。

天馬

「まずい！」

ガツンッ！

天馬のグレイブはサイドからヴィルキスにアタックし進路を変えた。だがアタックの拍子に二機はバランスを失い、二機は海へと墜落した。

ザバーン！

サリア

「アンジュ! 天馬!」

ロザリー

「まさかアイツ、自殺しようとしたイタ姫を助けるためにあんなことを・・・?」

ヒルダ

「そんな事はどうだっていい。それより今は早いとこドラゴンを殺して、賞金を頂くわよ。」

一同はドラゴン殺しに専念した。



く 無人島 砂浜く

その数分後、天馬のグレイブとアンジュのヴィルキスは戦場から少し離れた無人島の砂浜に漂流していた。

天馬

「はあ…はあ…た、助かった…」

天馬はグレイブを降り、アンジユのヴィルキスの元へと向かった。アンジユは自分の両肩を押さえ、震えていた。

天馬

「大丈夫ですか？アンジユリーゼ様。」

アンジユは自分の旧名を呼ばれ驚いた。そしてアルゼナルに来て初めて、二人は顔を合わせた。

アンジユ

「天馬…君？何故、あなたがパラメールと共にここにいます…？ここはノーマが来る場所。あなたの様な人間が来る場所では…」

天馬

「俺もノーマだったんです。だからアルゼナルに来ました。ですが本当はジュライ皇帝

の願いで、アンジュリーゼ様を御守りするために来たんです。」

アンジュ

「お父様の、願いですか？」

天馬

「皇女からいきなりノーマ扱いされて錯乱してるんじゃないかって、心配していましたよ。でも、元気そうでしたよ。」

天馬はアンジュに笑顔を見せた。だが、アンジュの表情は暗かった。

アンジュ

「私に、守られる価値などありません…むしろ私は、死ななければならぬというのに」

…

天馬

「っ!？」

アンジュの発言に、天馬は動揺した。

天馬

「どうしたんだよ、アンジュリーゼ様…… どうして、あなたがそんなことを口にするんだ……」

アンジュ

「今の私は、皇女でもなければ人間でもない…… おまけに命令に背き、兵士を3人も殺してしまった…… 私に残された選択肢はドラゴンと戦い、そして死ぬこと…… そうすれば、こんな地獄のような世界からサヨナラ出来ますし、元のアンジュリーゼの名前を返してもらえる…… こんなに嬉しいことは無いでしょう……」

アンジュは涙を流しながら静かに笑った。天馬は拳を握り、歯を食い縛り怒りを抑えていた。

天馬

「……アンジュリーゼ様。いや、皇女アンジュリーゼ・斑鳩・ミスルギ。」

アンジュは天馬に旧名を呼ばれたが、振り向く気力すら残っていないかった。

アンジュ

「・・・嬉しいですね・・・最後に私の名前を覚えてくれていてる方に名前を言ってもらえるなんて・・・」

天馬

「っ!!」

アンジュのこの一言が、天馬の怒りを爆発させた。

パシンツッ!

天馬はアンジュの頬をひっぱたき、襟元を掴み引き寄せた。

天馬

「いい加減にしろ、アンジュリーゼ!! あんた、本気で死にたいと思ってるのか!? 自分が死ねば、自分が殺した人たちへの償いになるとでも思ってるのか!?! あんたも人間だろ!?! 人間なら、命ある限り生き続けろよ!!」

アンジュ

「人間ではありません… マナの使えない私はノーマ、化け物です…」

天馬

「ノーマは化け物、か…」

ドサツ

天馬はアンジュの襟元を放し、近くに落ちていた金属片を拾い…

天馬「だったら…」

グサツ！

天馬

「くっ！くっ…」

金属片を自身の左手に突き刺した。そして、血塗れになった左手をアンジュに突き出



した。

天馬

「これを見ろ! 俺もアンタもノーマだが、身体の中にはこの赤い血が流れてる! これが人間の証だ! この証は、マナを持っていようがいなかろうが関係無い!」

アンジュ

「人間の…証…」

天馬

「人間いつ死ぬかは分からない! だからこそ、最後の時を迎えるその時まで全力で生きるんだ! 自分よりも先に死んでいった人達の間も! 志半ばで倒れた仲間の間も!」

『生きるのです…アンジュリーゼ…』

『アンジュリーゼ様! 私も連れてってください! 私も、魔法の国に!』

アンジュの頭を、亡き母ソフィアと戦死した新兵ココの言葉が過った。

アンジュ

「お母様……ココ……」

天馬

「それに、俺があなたを守るためにここに来た理由は、皇帝からの要望でというだけじゃない！俺はあなたの友達だから、友達を守りたいという自分の意思でここへ来たんです！」

アンジュ

「っ!!」

天馬

「……俺の言いたい事は全て言いました。俺はサリア隊のところに戻り戦います。アンジュリーゼ様、後はあなたが決めてください。自殺か、それとも最後まで生き続けるか。」

天馬はアンジュに背を向け、その場を離れようとした。

アンジュ

「死にたくない……」

天馬

「っ!!」

天馬は足を止め、アンジュの方に目を向けた。アンジュの目は以前のアンジュリリーゼの目に戻り、力強いオーラが伝わってくる。

アンジュ

「天馬君、あなたの言葉で目が覚めました。私は生きたい・・・死にたくありません。」

天馬

「アンジュリリーゼ様・・・」

アンジュ

「私は生きる・・・生きるために戦います! そしてもう、誰も死なせません!」

天馬

「それなら、最後に俺からひとこと言わせてください。」

「・・・命落とすな! 敵落とせ!!」

アンジュ

「はいっー!」

アンジュのヴィルキスは飛び立った。天馬もグレイブに乗り込み飛び立ち、二人は第一中隊が戦っているエリアへと急いだ。



その頃、第一中隊はドラゴンとの戦闘に悪戦苦闘していた。銃弾は撃ち尽くし、ほとんどのパラメイルはドラゴンの攻撃により損傷。まともに戦える機体は残っていないかった。

サリア

「このままじゃ殺られる。どうすればいいの……。」

その時だった。

天馬

『隊長! あとは俺達に任せてくれ!』

ドラゴンの後方から、ヴィルキスとグレイブが接近してきていた。

アンジュ

「私は戦う。だからヴィルキス、お願い。私に力を貸して!」

キイイイイイインツ!

アンジュ

「っ!?!」

アンジュの左手の指輪が光だし、それと共にヴィルキスのボディがひび割れ、光が漏れだした。

ガシャーン!

傷だらけのボディが剥がれ、内側から新たに白いボディが姿を現した。アンジュはヴィルキスをアサルトモードに変形。フレームは黄金に輝き、純白のアーマーと巨大な青い翼を装備し、赤いバイザーと白い目。額に女神のオブジェをあしらっていた。

天馬

「俺はアンジュリーゼ様を：大切な友達を守りたい！だからグレイブ、俺と一緒に戦ってくれ！」

アンジュに続いて天馬もグレイブをアサルトモードに変形させた。すると・・・。

キイイイイイインツ！

天馬

「っ!？」

突然、グレイブのボディが光だした。

ガシャーン!

翼が砕け、そこから新たに鳥の様な白い巨大な翼が現れた。バイザーは黒に変わり、目は黄色に変化。さらに頭部はペガサスを模した兜の様な形状に変化。フェイスマスクとフレームは赤褐色に変わり、白いアーマーの水色部分は全て金色に変わり、そして後頭部から赤く長い髪が現れた。

エルシャ

「グレイブの姿が変わった!?!」

ヴィヴィアン

「カッコいいー!! ペガサスだー!!」

天馬

「アンジュリーゼ様、いきますよ!」

アンジュ

「ええ!」

アンジユのヴィルキスと天馬のグレイブはドラゴン目掛けて突っ込んだ。ドラゴンは自身の身体から光の球を無数に出現させ、ヴィルキスとグレイブに向かって放った。

天馬

「やらせるか！」

ビューー！

グレイブは翼を羽ばたかせ突風を起こす。突風により光る球は全て返され、ドラゴンの腹部に命中した。

ドラゴン

「ギャアアアアアア！」

天馬

「今だ！」

アンジユ



「氷結バレット、装填!」

ヴィルキスは左腕に氷結バレットを装填し、ドラゴン目掛けて突っ込む。そしてドラゴンの胸部に氷結バレットを打ち込んだ。氷結バレットを打ち込んだ途端、ドラゴンの胸部から無数の氷柱が生え、ドラゴンは動きを止め海に落下。落下した場所を中心に辺りの水面が瞬時に凍りついた。

アンジュ

「はあ…はあ…」

天馬

「やりましたね、アンジュリーゼ様!」

アンジュ

「…天馬、これからは私のことはアンジュと呼んで。それが、今の私の名前。」

天馬

「…わかりました、アンジュさん!」

アンジュと天馬はお互い笑顔になり、グレイブとヴィルキスでハイタッチをした。



くアルゼナル 墓地く

夕方、アンジュと天馬はアルゼナルの墓地を訪れた。

アンジュ

「さようなら、我が故郷ミスルギ王国……。さようなら、お父様、お母様、お兄様、シルヴィア……。」

ジャキンツ！

アンジュはナイフを手にし、自ら髪を切り落とした。

アンジュ

（私にはもう、過去も名前も、何もいらぬ。でも、私は生き続ける。地面を這いつく

ばつてでも、泥水を啜つてでも、私は生きる。たった一人の友と共に・・・。」

天馬

（ごめん、秋姉・・・。俺、旅行のつもりでこっちに来たけど、もう日本には帰れそうにない・・・。でも、心配しないで。俺は死なない。俺はこのアルゼナルで、命が尽きるまで戦う。大切な友達、アンジュさんを守るために・・・。）

天馬とアンジュは決意を新たにし、互いに顔を合わせた。

アンジュ

「これからもよろしく、天馬！」

天馬

「はい、アンジュさん！」

天馬とアンジュは、互いに力強く握手を交わした。



く雷門中学校 サッカー棟 部室く

その頃、雷門中学校のサッカー棟にあるサッカー部の部室では、神童・剣城・信助・霧野がいた。

剣城

「ニュース見ましたか？」

神童

「ああ、天馬がミスルギ皇国でノーマとして連行されたと、今朝のニュースで報道してたな。」

霧野

「まさか天馬がノーマだったなんてな……。これからどうする？」

信助

「天馬が居ないとサッカー部って感じがしないし、他のみんなも天馬がノーマだったって情報を知ってるはずだから……。」

剣城

「このままだと、サッカー部は上手く機能しないかも知れませんね……。」

バーン!

突然、部室に大勢の警官が押し寄せてきた。警官達は四人に銃を向け四人の動きを封じた。

神童「な、何だ!？」

霧野「警察?」

すると、今度はコートを着た刑事とおぼしき男性が現れた。

刑事

「雷門中学校一年生、剣城京介君、西園信助君。及び二年生、神童拓人君、霧野蘭丸君だね?」

剣城「そうですけど・・・?」

信助「あの・・・僕達、何か悪いことしました・・・?」

刑事「ノーマ管理法第一条第三項に基づき、君達を各々、1203—79号ノーマ、1203—80号ノーマ、1203—81号ノーマ、1203—82号ノーマと認定し、拘束する。」

「!?!」

To Be Continued...

# E p. 04 / 雷門サッカー部四人集、現る!

くパラメール格納庫く

天馬の初出撃の日の翌朝、天馬とアンジユはパラメール格納庫に来ていた。二人の目の前には天馬のパラメール、グレイブがいた。

アンジユ

「天馬のパラメール、最初に見たときより雰囲気変わったわね。翼が生えて色も変わって、何だか遅しくなったって言うか……。」

天馬

「お前は俺だけのパラメールだ。改めてよろしくな、グレイブ。いやペガサス。」

アンジユ

「ペガサス?」

天馬

「そういう気がしたんです。」

ん?」

突然、天馬があるものを見つけた。アンジュも天馬の見る方向を見ると、目線の先にはサリアとジルとエマが共にデッキへ向かっていた。

天馬

「サリア隊長とジル長官とエマ監察官？」

アンジュ

「何かあったのかしら？」

天馬とアンジュは二人の後を追いかけた。

—————

くデッキく

デッキに到着すると、そこにはサリアとジルとエマと警備兵が数名。さらに輸送機が一機止まっていた。



天馬

「ジル長官！サリア隊長！エマ監察官！」

二人はジルとサリアとエマに近づいた。

ジル

「天馬にアンジュか。丁度良い、たった今新しいノーマを乗せた輸送機が到着したところだ。」

アンジュ

「新しいノーマ？」

ジル

「ああ。それも天馬、お前に馴染みの深い連中だ。」

輸送機のハッチが開き、中から四人の人影が姿を現した。天馬はその四人を見て仰天した。

天馬

「ええええええ!! 神童さんに劍城に信助に霧野さん!」

輸送機から出てきたのは、ユニフォーム姿の神童・劍城・信助・霧野だった。声に気付き、彼らも天馬の存在に気付いた。

神童

「天馬か!」

信助

「天馬―!」

四人は輸送機から急いで降り、天馬の側に集まり喜んだ。

天馬

「みんな、どうしてここに?」

劍城

「それが、俺達もノーマと認定されて連行されたんだ。」

アンジユ

「ねえ、もしかして天馬の知り合い?」

霧野

「知り合いなんて仲じゃない!俺達は天馬とサッカーで共に戦った仲間だ!」

エマ

「1203—79号ノーマ神童拓人、1203—80号ノーマ劍城京介、1203—81号ノーマ西園信助、1203—82号ノーマ霧野蘭丸。全員天馬君と同じく、東京の雷門中学校出身です。学年は劍城君と西園君が一年、神童君と霧野君が二年です。」

ジル

「お前達にはこのアルゼナルで、兵士としてドラゴン討伐を行ってもらおう。詳しい説明は後程する。サリア、四人を寝室に案内してやってくれ。」

サリア

「イエス、ママ。あなた達、私についてきて。」

サリアはその場を後にした。

信助

「じゃあ後でね！」

天馬

「バイバイ！」

神童・劍城・信助・霧野はサリアの後に続いた。

アンジユ

「・・・ねえ、あの霧野って人、女の子？」

天馬

「一応男です・・・。よく女の子に間違えられますが・・・。」

—————

くジャスミン・モールく

朝食を済ませた二人はジャスミン・モールへとやって来た。ここはジャスミン曰く、金さえあれば下着から列車砲まで何でも手に入るらしい。

天馬

「う〜ん…」

二人はパラメイル用武器のスペースで武器を選んでいた。

天馬

「どれがいいかなあ…」

アンジユ

「天馬的にはどんなのがいいの?」

そこへジャスミンが愛犬兼用心棒のバルカンを連れて現れた。

ジャスミン

「お前さん、武器をお探しかい?」

天馬

「あ、ジャスミン”オバさん”。」

ジャスマミン

「アタシはお姉さんだよ……。」

天馬

「実はメイさんに、”悪いがお前のパラメイル用の武器はまだ用意できてないんだ。代金はアタシが後で払つとくから、ジャスマミンとここで自分のパラメイルに装備する武器を選んでこい!”って言われたので、探しに来たんです。」

ジャスマミン

「なるほど。希望は？」

天馬

「大砲とマシンガンが使える銃があればいいなって思ってるんですけど、ありますか？」

アンジュ

「天馬、流石にそれは……。」

ジャスマミン

「もちろんあるよ。この間入荷した新装備の中に、おあつらえ向きの品があつたはずだ。ちよつとついてきな。」

-----

く倉庫く

ジャスマミンは二人を倉庫へと連れて来た。目の前には、パラメイルスケールの少々メカメカしいライフルが置いてある。

ジャスマミン

「こいつがこの間入荷したばかりの新型光線銃、ソニックバレット。マシンガンと高出力ビームを発射出来るバスターの二種類が使える優れたものさ。どうだい？」

天馬

「いいなあ。俺、コイツにします！」

ジャスマミン

「あいよ、まいどあり。次いでに近接用の武器も仕入れといたらどうだい？ いいのが揃ってるよ。」

天馬

「そつちは今のところ大丈夫です。」

ジャスマミン

「そうかい。まあ金が入って欲しい物が見つかれば、いつでも買いに来な。買いに来る客なら年中無休いつでも大歓迎だから。」

ジャスミンはその場を離れた。

天馬

「アンジュさんは何か買わないんですか？」

アンジュ

「私は今は何も買えないの。死なせてしまった三人のお墓の代金、払わないといけないから……。」

天馬

「……すみません。」

天馬はアンジュに頭を下げて謝った。その後、二人は静かに倉庫を離れた。





くシミュレータールームく

その後、神童達は第一中隊に入隊が決まり、神童はサリア、劍城はヒルダ、信助はヴィアン、霧野はエルシャの監視の下でシミュレーター訓練を受けていた。が・・・。

信助

『うわあああああ!』

劍城

『おい待て待て待て!どわああああ!』

神童

『くっそおおお!』

霧野

『コンヤロー!』

四人とも、初めてだけあってかなり苦戦していた。

ヒルダ

「随分と苦戦してるな… そつちはどう？」

サリア

「天馬やアンジュに比べたら、まだまだだね。」

サリアは呆れた顔で答えた。

ヴィヴィアン

「さーて、ここでクイズです！この四人の中で、誰がパラメイルを一番早く操縦出来るようになるでしょうか？」

ヴィヴィアンが突然、クイズを出した。

エルシャ

「さー、誰かしら？」

エルシャは笑顔で答えた。

神童

『天馬に比べたらまだまだだって?』

劍城

『上等だ。俺が一番に乗りこなしてみせようじゃないか!』

霧野

『年下だからって手は抜かないぞ劍城。一番は俺だ!』

信助

『いや僕だ!』

サリアとヴィヴィアンの一言で、四人はどうやら気合が入ったようだ。

サリア

(何? 天馬に負けるのがそんなに嫌なの?)

そんな最中、別のシミュレーターでは天馬とアンジュが独断訓練を行っていた。

-----

（屋上）

訓練後、天馬・劍城・神童・信助・霧野・アンジュは屋上で昼寝をしていた。劍城・神童・信助・霧野は既にクタクタの様だ。

信助

「はあく、疲れた…」

神童

「シミュレーションとはいえ、随分とハードだったな…」

霧野

「天馬もあのシミュレーターの訓練受けたのか？」

天馬

「いえ、俺なんかここに来た次の日にぶつつけ本番でした…ところで、雷門中サッカー部はどんな調子でしたか？」

劍城

「お前が居なくなつて、みんな練習に身が入らなくなつてた。お前がノーマだった事に

ショックを受けてたのかもな……」

信助

「秋さんも葵ちゃんも心配してたよ。」

天馬

「そっか……」

アンジユ

「寂しい?」

天馬

「そりゃ寂しいです。今すぐ稲妻町に戻って、またみんなとサッカーがしたいです。でも、今の俺にはやる必要があります。みんなと一緒にドラゴンを倒す。それが、今の俺の使命です。」

神童

「……そうだな。」

すると、屋上にサリア・ヒルダ・ヴィヴィアン・エルシャの四人がやって来た。

ヒルダ

「劍城。いるかい？」

劍城はヒルダに呼ばれ立ち上がった。

劍城

「ヒルダさん。何か俺に用ですか？」

ヒルダ

「いや、せっかくだからこのアタシが直々にアルゼナルの中を案内してやろうかなって  
思ってます。」

劍城

「本当ですか？ありがとうございます。」

ガシツ

すると突然、ヒルダは劍城の右腕に抱きついた。

ヒルダ

「でき、モノは相談だけど、今日からアタシの部屋で一緒に住まない?」

剣城

「・・・へ?」

剣城が初めて惚けた声を出した。

ヒルダ

「いいだろう? ジルと隊長には話通しとくからさ。」

ヒルダは剣城の腕に自身の胸を押しつけ誘惑。剣城はヒルダの誘惑で顔が真っ赤になつていた。

剣城

「まあ・・・俺はどちらでも構いませんが・・・。」

サリア

「私も構わないわよ?」

ヒルダ

「じゃあ決まりだね！」

劍城

「ええっ!?!ちよちよつと!?!」

ヒルダは劍城の腕を引っ張り、その場を離れた。

天馬

「劍城・・・大丈夫かな？」

と、気付けば劍城以外の男性メンバーも居なくなっていた。

サリア

「神童君、戦闘時のフォーメーションを考えるの手伝ってくれる？」

神童

「いいですよ。」

ヴィヴィアン



「しんすけー!一緒にかくれんぼで遊ぼうよー!」

信助

「いいですよ!負けませんからね!」

エルシヤ

「幼年部の子供達にあなたを紹介したいんだけど、いいかしら?」

霧野

「いいですよ。何なら俺も子供達の面倒を見るの手伝いしましょうか?」

エルシヤ

「助かるわあ。幼年部の子供達はね、あなたみたいなお姉さんが大好きなの!」

霧野

「男ですよ・・・俺。」

いつの間にか屋上には天馬とアンジュだけとなっていた。

アンジュ

「みんな、大人気ね。」

天馬

「アハハハハ…はあ〜…」



〜パラメイル格納庫〜

その日の夜、天馬は格納庫で一人ペガサスのボディを磨いていた。機首にはジャスミン・モールで購入したソニックバレットを装備している。周囲には第一中隊のパラメイルの他に、神童達が乗ると思われるグレイブが4機置いてあった。

天馬

「…」

『お前が居なくなつて、みんな練習に身が入らなくなつた。お前がノーマだった事にシヨックを受けてたのかもな…』

『秋さんも葵ちゃんも心配してたよ。』

天馬は昼間の剣城と信助の言葉が気になっていた。そこへ……。

メイ

「こんな時間にボディ磨きか？」

メイが近づいてきた。

天馬

「メイさん。」

メイ

「つたく、高い武器を選んでくれたもんだよ……。壊れたときは治してやるけど、修理出来ないくらいにまで壊れた時の交換費は自腹だからな。」

天馬

「わかりました。」

すると・・・。

ビー！ビー！ビー！ビー！

『第一種遭遇警報発令！パラメイル第一中隊、出撃準備！』

天馬

「来た。」

メイ

「つたく、タイミング悪いなあ！」

ガコンツ！

—————

くデツキ カタパルトく

天馬のペガサスと第一中隊のパラメイル全機がカタパルトにセットされた。第一中隊はそれぞれの機体に騎乗し、神童・劍城・信助・霧野もそれぞれのグレイブに乗り込んだ。

神童

「いよいよ実践だな。」

劍城

「今回はあくまで、第一中隊の補助要員らしいです。向こうから命令を出すか、敵がこっちに攻撃してくるまで手を出すなど。」

信助

「援護もしちゃダメなの?」

霧野

「パラメイル隊の給料は、ドラゴンを倒した分の報酬で支払われるらしい。俺達が援護して報酬を減らされたくないんだろう。」

サリア

「もう、お喋りはおしまい! サリア隊、出撃します!」

サリアを先頭に第一中隊は出撃。神童達も第一中隊に続いて飛び立った。そして飛び立って間もなく、第一中隊の前に円形の門が開き、大小様々なドラゴンが多数出現した。

サリア

「全機、駆逐形態！神童達はドラゴンがそっちに襲ってきたら攻撃しなさい！無理に突っ込まないで！」

『イエス！マム！』

第一中隊はパラメイルをアサルモードに変形させ、神童達のグレイブ4機を除く8機がドラゴンの群れに突っ込む。だが……。

「ギャアアアアア！」

大半のドラゴンが第一中隊を素通りしていった。

ロザリー

「何で素通り!？」

天馬

「もしかして……。」

危険を察知した天馬はペガサスの機首を反転させ、ドラゴン達の後を追った。アンジユもヴィルクスの機首を反転させペガサスを追いかけた。ドラゴンを追いかけていくと、神童達が大量のドラゴンに襲われていた。

信助

「うわああああ!」

天馬

「みんな!」

ダダダダダダダダダダダッ!

ペガサスはソニックバレット、ヴィルクス是对ドラゴン用アサルトライフルを乱射しドラゴンを攻撃し、神童達を援護した。

アンジュ

「大丈夫!？」

劍城

「ああ、助かった。」

天馬

「予想以上にドラゴンの数が多い……。これじゃあサリアさん達の援護に向かえないよ……。」

天馬とアンジュが合流した途端、6機は既にドラゴンに囲まれていた。サリア隊も大物ドラゴンの側で群れを成すドラゴンに悪戦苦闘している。

神童

(くそっ……。俺たちにもっと力があれば……。)

霧野

(俺たちのせいで、チームの足を引っ張ってる……。もっと、もっと戦える力が欲しい。)

劍城



（誰でもいい。俺たちに力をくれ！）

信助

（みんなを守れる、大きな力を！）

キイイイイインツ！

力を求める彼らに反応するかの様に、グレイブ4機が光だした。

ガシャーン！

劍城のグレイブの翼が砕け、そこから劍の様に鋭い刃を持った新たな銀色の翼が現れた。フレームとバイザーは赤に変わり、アーマーは銀色に輝き、背中に紅のマントを模した大型スラストが現れ、頭部は二本角のある西洋騎士の兜の様な形状に変化した。神童のグレイブは翼が腕へと変化し、ボディと二の腕のフレームとアーマーが紫、肘から先が黄緑に変化。下半身はフレーム・アーマー共に白で統一され、東部は水色に変化。さらに肩のアーマー部分に大型のスピーカーが出現した。

信助のグレイブは翼が丸みを帯びた形に変わり、フレームは全て金色、アーマーは青、

バイザーは白に変化。さらに肘から先が巨大化し、頭部に青紫色の鬘が現れた。

霧野のグレイブは頭部と以外のボディカラーが反転し、フレームは黒、頭部はピンクに変化しバイザーは緑に変化。さらに後頭部から桃色の長い髪が出現し、右手には槍の様な先端をした旗が現れた。

ヒルダ

「おい、あれ見ろよ！」

クリス

「また姿が変わった。」

ロザリー

「どうなってるんだ……。確かアイツらの機体って量産品のグレイブだったよな？グレイブにあんな機能あったっけか？」

神童

「いつたい、何があつたんだ……。？」

劍城

「わかりません。ただ……。」

霧野

「何だか、さつきとは全然違う力を感じる!」

信助

「今の僕達なら、何でも出来そうな感じだ!」

4機はそれぞれアサルトライフルを装備し、周囲を取り囲むドラゴンに向かって乱射。粗方のドラゴンを片付けた。

神童

「進路確保!」

劍城

「行くぞ!」

天馬・アンジュ・劍城・神童・信助・霧野はサリア隊のところへと向かった。一方のサリア隊は巨大なドラゴンと戦っていた。

ロザリー

「雑魚が邪魔で、思い通りに近づけねえ！」

ドラゴンは顔の前に魔方陣を出現させ、そこから雷の様な電撃を放った。

信助

「やらせない！マジン・ザ・ハンド！」

信助のグレイブは両手を前に突き出しシールドを展開。ドラゴンの電撃を防いだ。

ヴィヴィアン

「ドラゴンの電撃を防いだ！」

エルシャ

「凄いわね……」

劍城

「雑魚の相手は俺がやる！」

霧野

「いくぞー！」

劍城のグレイブは高速で飛行しながら翼でドラゴンを切り裂き、霧野のグレイブは旗を振り回し周囲のドラゴンを凧ぎ払った。

神童

「俺が奴の動きを封じる！天馬とアンジュさんはその隙に奴を仕留めるんだ！」

天馬

「はい！」

アンジュ

「……。」

神童

「デュアルスピーカーキャノン、発射！」

ドーン！

神童のグレイブは両肩のスピーカーから高出力の音波を巨大ドラゴンに向かって発

射。巨大ドラゴンは動きを止めもがき苦しみ始めた。

アンジュ

「いくわよ、天馬！」

天馬

「はい！」

天馬とアンジュはドラゴンが動かない隙に懐へと突っ込む。

ロザリー

（今だ！）

バーン！

ロザリーのグレイブロザリー・カスタムはヴィルキスに向かって砲撃。

ドカーン！

天馬

「どわあっ!」

だが狙いが外れ、砲弾は天馬のペガサスに命中してしまった。

ロザリー

「やっぱ…」

アンジユ

「天馬!」

天馬

「俺のことは気にしないで、ドラゴンに止めを!」

アンジユ

「・・・わかった!」

ヴィルキスは左腕に氷結バレットを装填し、ドラゴン目掛けて突っ込む。

アンジユ

「食らいなさい！」

そしてドラゴンの胸部に氷結バレットを打ち込んだ。氷結バレットを打ち込んだ途端、ドラゴンの胸部から無数の氷柱が生え、ドラゴンは動きを止め海に落下。落下した場所を中心に辺りの水面が瞬時に凍りついた。

ヒルダ

「ちっ……」

サリア

「……ミツション終了。帰るわよ。」

第一中隊は全機フライトモードに変形し、アルゼナルへと向かった。だが、天馬のペガサスはエンジンを損傷したため遅れていた。

天馬

「参ったな…… 右側のエンジンがダメになっちゃって上手く飛べない…… こうなりや仕



方ない……」

天馬はペガサスのエンジンを切り翼を動かす。そして羽ばたき飛行でゆっくりとアルゼナルに向かった。

—————

「アルゼナル デツキ」

アルゼナルに到着したのは次の日の早朝だった。

ヒルダ

「じゃ、報酬貰いに行こうぜ？」

ヴィヴィアン

「今回はいくら入ったかな？」

一同はワクワクしながら受取所へ向かう。すると……。

劍城

「ロザリーさん。」

ロザリーは劍城に呼び止められた。

ロザリー

「何だよ劍城。アタシに何か用？」

ガシッ！ ギギギギギギ・・・！！

劍城はロザリーの右手首を掴み、力一杯握った。

ロザリー

「イダダダダダダッ！」

劍城

「ロザリーさん、もうさつきみたいな事はやらないと誓ってもらえますか？」

ロザリー

「さつきみたいいな事!?!いきなり何だよ!?!」

劍城

「惚けるな!さつきあんたのパラメールが天馬のパラメールを撃つたのを知ってるんだぞ!」

ロザリー

「み、見てたのか!?!あれは、アンジュのパラメールを狙おうとしただけで、天馬を狙ったわけじゃ……。」

劍城

「同胞に引き金を向ける兵士が何処にいる!!」

ギユウウウウ!

ロザリー

「イダダダダダダッ!」

劍城はさらに力を加える。

ロザリー

「放して！マジで折れるって！」

劍城

「ではもうしないと約束しますか？相手が誰であろうと。」

ロザリー

「しない！約束する！もう相手が誰でも同士撃ちはしない！」

劍城

「ならば結構。」

劍城は手を放しロザリーを解放。ロザリーはひと安心し、劍城は受取所に向かって静かに歩きだした。

クリス

「大丈夫？」

ロザリー

「ったあゝ…マジで骨折れるかと思った…何者だアイツ？」

「劍城……」  
天馬

T  
o  
B  
e  
C  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
:

## E p. 05 / 信じ合うためには

〈司令室〉

ある日の夜、司令室にはジルと第一中隊のサリアとメイ、ジャスミンとバルカン、そして軍医のマギーがある資料を見ていた。見ているのは第一中隊の1週間の撃墜報告書。

ジル

「3度の撃墜でこの撃墜数、けっこうけっこう。」

マギー

「誰もまともに動かさなかったあの機体を、こども簡単にねえ…」

メイ

「多分、ヴィルキスがアンジュを認めた…」

サリア

「じゃあ、あの子が……。」

ジャスミン

「・・・もう一個気になるのは、小僧達のパラメイルだ。あの子達のグレイブは他の量産品と全く同じハズなのに、どうしてあの子達が乗ったグレイブが次々に姿を変えていったのかが不思議でしょうがない。」

ジル

「おそらく、マナとは違う何か別の力が働いているのかもな。それも、アイツら自身が内に秘めている力・・・。」

始めるとしようか、リベルタスを。」

サリア

「・・・。」

サリアは一人、浮かない顔をしていた。

ジル

「不満か？サリア。」

サリア

「あの子、すぐ死ぬわ……。」

マギー

「みんなの隊長と、可愛い新兵を殺したド悪投。恨まれて当然かもな。」

サリア

「私なら、上手くやれる。私なら、もつと上手くヴィルキスを使いこなせる。なのにどうして……！」

ジル

「適材適所ってやつさ。それにヴィルキスには……いや、アンジュには天馬がいつも側にいる。アイツはアンジュを守るために、自分の意思でここに来た。アイツが側にいる限り、アンジュは死なないさ。」

メイ

「もしヴィルキスに何かあったら、その時はメイが命を掛けて治す！それが、私達一族の使命だから！」

ジル

「サリア、お前はお前の使命を果たすんだ。」

サリア



「・・・はい。」



↳ 報酬受取所↳

そのまた別の日、第一中隊はドラゴン退治を終え報酬を受け取っていた。

係員

「今週分、17万キヤツシユ。」

ロザリー

「ちきしょー、これっぽつちかよ・・・。」

クリス

「いいじゃない。私なんか一桁だよ・・・。」

劍城

「これだけあれば、しばらくは持ちそうだ。」

## 神童

「確か、ジャスミン・モールの倉庫に古いアップライトピアノがあったな。これで買えるだろうか？」

続いて天馬・アンジュ組。

## 係員

「はい、今週分二人で合計700万キャッシュユ。」

異形な数字に一同は驚いた。

ヴィヴィアン

「アンジュに天馬やるー！」

信助

「スゴい！」

エルシャ

「二人とも大活躍だったものね。」

ヴィヴィアンとエルシャと信助は笑顔で二人を誉めた。

天馬

「俺なんか、全くですよ… ほとんどアンジユさんの手柄ですし…」

アンジユ

「はい天馬、これ今回の分。」

アンジユは天馬に200万キャッシュユ程を渡し、残りを預金に入れた。

天馬

「いつもありがとうございます。」

アンジユ

「さ、行きましょ。」

アンジユは天馬以外のメンバーに見向きもせず、天馬と共にその場を離れた。

ヴィヴィアンとサリアと信助から笑顔が消え、一同は気まずそうな表情を浮かべた。

霧野

「あのアンジュって人、どうやら天馬以外の人間は信用していないみたいだな。」

神童

「ああ。」

—————

く ロツカールームく

一同はロツカールームへとやって来た。

ガチャツ

アンジュは自分のロツカーを開けた・・・。

アンジュ

「あっ……。」

天馬

「どうしました？……うわっ、何じゃこりゃ……。」

ロッカーの中にかけてあったアンジュの制服は、出撃の間にボロボロにされていた。

ヴィヴィアン

「どうしたの〜？……んっ？ワオ！」

エルシャ

「まあ……。」

神童

「これは酷い……。」

ヴィヴィアン・エルシャ・神童・霧野・信助・剣城も、アンジュの制服を見て驚いた。

サリア

「またアナタ達ね？」

サリアはヒルダ・ロザリー・クリスに目を向けた。

ロザリー

「さあ〜ねえ〜。」

アンジュ

「うざっ……。天馬、悪いけどしばらくの間、あなたのジャージ貸してくれる？」

天馬

「あ、はい……。」

天馬はアンジュに自分のジャージを渡し、アンジュはライダースーツの上からジャージを着た。そしてアンジュと天馬はロッカールームを後にした。

ヴィヴィアン

「うわあ、アンジュのご機嫌斜め45度だね。」

信助

「大丈夫かなあ天馬……。」



く 食堂 く

食堂では、エマ監察官がマナを使って父と話をしていた。

エマ

「大丈夫よパパ。こっちでの仕事も覚えたし、ノーマにもなれたわ。私が目を光らせている限り、変なことをするノーマなんて一匹足りとも・・・ん？」

通話中のエマの前を、ジャージ姿のアンジュとユニフォーム姿の天馬が通り過ぎた。

エマ

「ちよつとアンジュ！」

アンジュ

「ん？」

アンジュと天馬は足を止め、エマに体を向けた。エマは一旦通信を切り、アンジュに近づいた。

エマ

「その格好は何？」

アンジュ

「見ての通り、ジャージですが？」

エマ

「制服はどうしたの？」

天馬

「それが、知らないうちにボロボロにされてたんです。」

エマ

「だったら治すか買いなさい！これは命令よ！」

アンジュ・天馬

「はあ…」



く ロツカールームく

一方、ロツカールームには制服姿のヒルダ・ロザリー・クリス、そしてジャージ姿の剣城の四人が残っていた。

ロザリー

「あのアマ、もっと徹底的にやんねえとダメだ！」

クリス

「うん、泣いて許しを乞うまでね！だよね、ヒルダ？」

ヒルダ

「ああ……」

ヒルダは一人、ロツカールームを離れた。

剣城

「ヒルダさん、何かあったんですか？」

劍城が質問をすると、ロザリーとクリスの表情が険しくなった。

ロザリー

「・・・あんたらやアンジュが来る前、第一中隊はゾーラお姉様が仕切ってたんだ。ゾーラお姉様は、アタシ達やヒルダの姉貴分だったんだ。」

クリス

「でも、この前の戦闘でアンジュが命令違反したせいで隊長は死んで、そのショックを一番受けてるのがヒルダなんだ・・・。」

劍城

「・・・まさか、そのゾーラ隊長の敵討ちでもしようなんて、思っちゃいませんよね？」

ロザリーとクリスは顔をしかめた。

クリス

「・・・思ってるって言ったら？」

### 劍城

「同胞に武器を向け、傷を負わせる以外は手を出しません。ですが程々にしておいた方が身のためです。それに敵討ちなんてしても、死んだ誰かが帰ってくる訳じゃない。結局は何も意味がありませんよ。」

劍城はジャージのポケットに手を入れ、静かにロッカールームを出ていった。

クリス

「敵討ちは意味が無いか……。」

ロザリー

「気にすんな、あんなの。お姉様の敵は、アタシ達が必ず討つんだ！ヒルダの分もな！」



〈食堂〉

次の日、ロザリーとクリスはアンジュへの敵討ちを決行した。

ロザリー

「あくらよつと！」

ロザリーはアンジュに向けてカレーの盛りられた皿を投げた。

天馬

「ん？なんだ？」

ベチヨツ！

ロザリー

「げっ…」

だがカレーは振り向いた天馬の顔に命中し、天馬の顔はカレーまみれになってしまった。

アンジュ

「だ、大丈夫？」

天馬

「大丈夫……です……。」

—————

「シミュレータールーム」

次に二人はシミュレータールームで仕掛けることにした。

ロザリー

「今だ！」

クリス

「うん。」

クリスはアンジュがシミュレーターに入っている隙に、アンジュの水のボトルと下剤

を混ぜた水のボトルをすり替えた。

クリス

「これでよし。」

ロザリー

「ニヒヒヒヒッ！」

二人は静かにシミュレーターの影に隠れた。

プシュー

天馬

「ふう、前より上達したんじゃないかな？」

だが、シミュレーターから出てきたのは天馬。

アンジユ

「お疲れ様天馬。」

天馬

「アンジュさんも、お疲れ様です。」

そしてアンジュが出てきたのは隣のシミュレーター。

クリス

(まづい……！)

天馬はクリスの置いたボトルを手に取り、蓋を開けて水を飲んだ。

ロザリー

(やめろ！飲むな！)

天馬

「ゴクツ……ゴクツ……ぷはあ！」

ギョルルルル

天馬

「うっ…」

案の定、天馬は激しい腹痛に襲われた。

アンジユ

「天馬?」

天馬はその場から突然走り出しトイレに向かった。

—————

トイレ

そして数分後・・・。



ジャー・・・

ガチャツ

トイレから出てきた天馬はゲツソリしていた。

アンジユ

「ちよつと、大丈夫？」

天馬

「はあ…はあ…え、えらい目にあつた…」

—————

く ロツカールームAく

その後、ロザリーとクリスはアンジユがシャワールームに入っている間に、アンジユの服を漁っていた。

クリス

「ちよ、ちよつとロザリー、これ見てよ！」

クリスが発見したのは、イヤに際どい下着。ロザリーもそれを見て興奮気味の様子。

ロザリー

「こ、こんなの履いてるの!?あのアマ、とんだアバズラじゃねえか！」

すると……

ガチャツ

エルシャ

「ふう、いいお湯だった。……あら？」

シャワールームからエルシャが出てきた。エルシャは直ぐロザリーとクリスの存在

に気づいた。

ロザリー

「廊下に貼り出してやろうぜ！」

クリス

「うん！ブス雌豚の色呆けビッチパンツ、晒し者にしちゃおう！」

エルシャ

「・・・もう一回、言ってくれる？」

クリス

「だから、ブス雌豚の色呆けビッチパン・・・ツ。」

どうやら二人が見つけたのはエルシャの下着だったようだ。

エルシャ

「は〜い、ブス雌豚の色呆けビッチで〜す♪」

ロザリー・クリス

「ヒイツ!?!」

ロツカールームB

ちなみに、天馬とアンジュはシャワールームを挟んで向こう側のロツカールームにいた。

エルシヤ

『エルシヤ・ラリアット!』

ドカツ!

ロザリー

『ぐはっ!』

エルシヤ

『エルシヤ・テイカ・マグナム!』

バキツ！

クリス

『ぐえっ！』

ロザリー

『た、助けてええ！』

エルシヤ

『まあまあ、ゆっくりしていつてくださいね〜♪』

天馬とアンジュは目を細め、互いを横目で見た。

天馬

「知らなかった事にして、出ましようか…」

アンジュ

「そ〜つとね…」

天馬とアンジュはそくつとロッカールームから出ていった。

エルシャ

『真空…エルシャ車!!』

ドカーン！

ロザリー・クリス

『ギャアアアアアア!!』



く第一中隊 ミーティングルームく

その後、ロザリーとクリスはサリアに呼び出されミーティングで説教をされていた。ミーティングルームには他にも、ヴィヴィアンとエルシャ、さらに神童もいた。

サリア

「ガス抜きと思つて見逃してきたけど、このところちょっと目に余るわね。あの子が気に入らないのは分かるけど…」

ロザリー

「あんたら、何も思わないのか!?!隊長と新兵二人、大切な仲間を殺したあの女が生きてるつてことにき!?!」

エルシヤ

「でも、アンジユちゃんはみんなのお墓も買ったし戦場にも戻ってきた。贖罪は十分果たしてるわ。」

ガチャツ

ドアが開き、ヒルダが入ってきた。

ヒルダ

「それだけで納得しろつて? あんたみたいな優等生ならともかく、私ら凡人には無理だね。」

サリア

「ヒルダ……。」

ヒルダ

「司令も、あの女にポンコツ機を与えた以外はお咎め無しとはね。何を考えてるんだか…… あー、わかった。きつと司令も気に入っちゃったんだ、あの女が。まあ、そう考えれば変に優遇されてるのも納得出来るか。あの司令をたらしこむなんて、大したもんだねえ。皇女殿下はベッドの上でも優秀ってか？」

サリア

「くっ！上官侮辱罪よ!!」

ヒルダ

「だったら？」

怒りがヒートアップしたサリアがナイフを構え、ヒルダはサリアに銃口を向けた。一同が動揺する中、神童が二人の間に立った。

神童



「待ってください！」

ヒルダ

「退きな神童！でないと撃ち殺す！」

サリア

「これ以上、アンジュに手を出すことは許さない！」

ヒルダ

「ゴミ虫みたいに見下されて、まだ庇うのか？」

サリア

「命令よ！」

ヒルダ

「……ちつ。わかったよ、隊長。」

ヒルダは銃を収め、ロザリーとクリスを連れてミーティングルームを去った。

サリア

「……ところで神童君、前から聞きたかったことが一つあるんだけど、アナタ達五人が乗ったパラメイルが姿を変えた理由、アナタなら何か知ってる？」

神童

「いえ、俺はまったたく……。ただ一つだけ、天馬を除く俺たち四人に共通している点があります。

サリア

「それは？」

神童

「力が欲しい」と強く願った事です。」

サリア

「力が欲しいと強く願った……。ね。ありがとう。」



く食堂く

その日の夜、天馬とアンジュは食堂でカレーを食べていた。

アンジュ

「あれ？このカレー……。」

天馬

「いつもより、美味しい。」

ヴィヴィアン

「どうだー！ウマイだろー！」

そこへヴィヴィアンがやって来た。ヴィヴィアンはアンジュと天馬の正面に座った。

ヴィヴィアン

「ここでクイズです！さてさて、このカレーはいったい誰が作ったカレーでしょうか？」

ヴィヴィアンにクイズを出題され、天馬はふと厨房の方を見た。厨房には見覚えのある桃色ロングヘアーの女性がいた。

天馬

「もしかして、エルシャさん？」

エルシャ

「は〜い、せい〜い♪」

エルシャはこちらに顔を向け手をふった。

ヴィヴィアン

「エルシャのカレーは超美味カレー！いったただつきま〜す！」

ヴィヴィアンは美味しそうにカレーを食べ始めた。

ヴィヴィアン

「あ、そうだ！二人にコレあげる！」

ヴィヴィアンはアンジュと天馬に、継ぎ接ぎだらけの熊のマスコット、ペロリーナのストラップを3つ見せた。

ヴィヴィアン

「クイズ！コレ、な〜んだ？」

アンジユ

「えっ? ええ…」

ヴィヴィアン

「ブー! 時間切れー! 正解は、”お揃い!”」

アンジユ

「お揃い?」

ヴィヴィアン

「私とヒルダとアンジユと天馬と剣城でフォワード組んだら、今よりもーつと凄い連携出来ると思うんだよねえ!」

天馬

「ファイブ・トップの超攻撃型フォーメーションですか…。確かに、俺たちならいけるかもしれない!」

ヴィヴィアン

「でしょ!?! だから、その証!」

ヴィヴィアンは笑顔でストラップを渡し、天馬は笑顔で受け取った。だがアンジユは受け取らなかつた。

アンジュ

「・・・一人で大丈夫よ。」

アンジュは静かに席を立ちその場を離れた。ヴィヴィアンとエルシャ、そして天馬は暗い表情を見せた。

天馬

「・・・。」

-----

くアンジュの部屋く

その後、アンジュと天馬は部屋に戻り、アンジュはベッドで横になった。

天馬

「アンジユさんって、馴れ合うの嫌いなんですか？」

アンジユ

「信用出来ないのよ、アイツら。後ろから狙ってきたりイタズラしてきたり……。あんな奴らと組む程度なら、一人でドラゴンを狩ってる方がマシだわ。」

天馬

「ヴィヴィアンさんとエルシャさんも同類ですか？」

アンジユ

「っ!?それは……。」

天馬

「……。」

アンジユ

「……もう寝ましょ。おやすみ！」

アンジユは毛布で体を包み、天馬に背を向けた。天馬も部屋の灯りを消し、ベッドで仰向けになった。

天馬

(どうすれば、みんなと信じ合えるのかな・・・。)



くパラメール格納庫く

一方その頃、格納庫では整備班がパラメールの整備点検を行っていた。

メイ

「一同集合！」

メイは整備員達を呼び寄せた。

メイ

「今日の作業はここまで！解散！」



メイは整備班を解散させ、自身も格納庫を離れた。そしてその数分後、格納庫にヒルダが現れた。

ヒルダ

「へっへっへ．．．。」

ヒルダはアンジュのヴィルキスに近づき、そして数分後に格納庫を後にした。

ヒルダ

「これで、あのイタ姫様も終わりだね。」

To Be Continued:

## E p. 06 / アンジユと天馬の漂流記 《前編》

くアンジユの部屋く

トラブル続きだった日の翌日、朝日が部屋に差し込む頃。

ビー！ビー！ビー！ビー！

『第一種遭遇警報発令！パラメイル第一中隊、出撃準備！』

天馬

「こんな朝早くから出撃なんて・・・。」

天馬は警報で目を覚まし起き上がる。

アンジユ

「ドラゴンは私達の都合なんてお構い無しなのよ。行きましょ。」

アンジュは支度を済ませ部屋を後にし、天馬も慌ててアンジュを追いかけた。

-----

くデツキ カタパルトく

デツキに到着し、第一中隊はそれぞれのパラメイルに乗り込み最終確認を行った。

天馬

「エンジン出力、臨界到達！異常無し！」

アンジュ

「ライフル残弾数、確認ヨシ！指示系統問題なし！」

メイ

「全機、最終確認ヨシ！総員、デツキより待避！」

メイは整備班と共にデツキを離れた。

『進路クリア。発進どうぞ。』

サリア

「サリア隊、発進します。」

サリアを先頭に第一中隊は出撃。

天馬

「ペガサス、出撃する！」

アンジユ

「ヴィルキス、発進します。」

神童

「マエストロ、出るぞ！」

劍城

「ランスロット、出る！」

信助

「タイタニアス、いきますー！」

霧野

「ブリュンヒルデ、テイク・オフ！」

天馬・アンジュ・劍城・神童・信助・霧野も発進した。そして第一中隊はシンギュラーの発生ポイントへと向かった。

『シンギュラーまでの距離、12000。』

サリア

「全機、セーフティー解除。ドアが開くぞー！」

第一中隊の前に紫色の雷が光り、シンギュラーが開いた。シンギュラーの中から小型の赤いドラゴンが多数出現した。

サリア

「ファイアー！」

ダダダダダダダダダダッ！

バーン！

第一中隊はドラゴン集団に向かって一斉射。そんな中、アンジユは一人ドラゴンに向かって先行。

天馬

「アンジユさん、待って！」

天馬はエンジンを吹かしアンジユを追いかけた。

サリア

「アンジユ、天馬！勝手に突っ込むな！」

アンジユ

「はあああああ！」

ドカーン！

アンジュ

「っ!？」

突然、ヴィルキスのエンジンから黒煙が吹き出し、エンジンは停止した。ヴィルキスは推進力を失い急降下し始めた。

サリア

『どうしたのアンジュ!?早く機体を立て直さない!』

アンジュ

「無理よ!急にエンジンが止まって、再起動しようとしても動かないの!」

天馬

『アンジュさん!』

その時、天馬のペガサスがヴィルキスの真下を飛行していた。

天馬

「ペガサスの上に乗って！」

アンジュ

「天馬……。わかったわ！」

アンジュは急降下中にヴィルキスをアサルトモードに変形させ、ペガサスの上に着地。

ガンツ！

ペガサスは着地の拍子に一瞬バランスを失うが、直ぐに立て直した。

アンジュ

「助かったわ！」

天馬

「このまま突っ込みますよ！」



ペガサスはドラゴンの集団に向かって急上昇を開始した。だが……。

ドカーン！

天馬

「どわっ！」

今度はペガサスのエンジンが故障した。

天馬

「エンジントラブル!? くそっ！こんな時に！」

アンジュ

『ちよつと天馬！前！』

ドーン！

ドラゴン

「ギャアアアアアアア!!」

ペガサスは正面から突っ込んできたドラゴンと衝突。両者は纏れながら、またしても急降下。

天馬・アンジュ

「うわああああああ!」

ザバーン!

ペガサスとヴィルキスはドラゴンと共に海へと消えた。

サリア

「アンジュ!」

神童

「天馬!」

エルシャ

「サリアちゃん、大きいのが来るわよ！」

門から、以前と同じ紫色の巨大ドラゴンが現れた。

サリア

「……目標、前方のブリック級。総員掛かれ！」

第一中隊はブリック級ドラゴンの殲滅へと向かった。

信助

「天馬……。」

ヴィヴィアン

「アンジュ……。」



く 無人島 砂浜く

その数分後、海中からアサルトモードのペガサスがヴィルキスを背負い姿を現した。

ガシン…ガシン…ガシン…ガシン…

ペガサスはヴィルキスを背負い浜辺に到達。砂浜の上にヴィルキスを仰向けに寝かせた。

ヒュウツ…ガシヤンツ！

その直後、ペガサスも機能を失い砂浜に倒れた。倒れた直後コックピットのハッチが開き、中から天馬が出てきた。

天馬

「いたたたた…助かった…」

天馬はペガサスを降り、ヴィルキスのもとへと向かう。そしてヴィルキスのコック

ピットのハッチを開け、中からアンジュを引っ張り出した。

天馬

「アンジュさん！アンジュさん！」

アンジュは気を失っていた。息はあるが、身体は冷たく冷えきっていた。

天馬

「ここに待っていてください。」

天馬はアンジュを砂浜に寝かせ、一人ジャングルの中へと入っていった。そして数分後、天馬は大量の枝を持って砂浜に戻った。だが、アンジュは砂浜から姿を消していた。

天馬

「アンジュさん？アンジュさん！……どこ行っただけ？」

天馬は集めた枝を置き、再びジャングルの中へ入った。

〜ジャングル 住処〜

しばらく歩くと、人間の住処とおぼしき場所を見つけた。住処には釜戸と作業台、さらにテーブルとベッドまである。

天馬

「誰が住んでるのかな? . . . げっ!？」

その時、天馬は良からぬモノを見てしまった。作業台にはアンジュのライダースーツがあり、アンジュが裸でベッドの上で腕を縛られ、さらに男が覆い被さっていた。

天馬

「大変だ!」

天馬は走り出し、男の尻に強烈な跳び蹴りを叩き込んだ。

天馬

「セイヤー！」

???

「えっ？」

ドカツ！

???

「だあああああ!？」

ドカーン！

男は蹴られた拍子に壁に激突した。

天馬

「アンジュき……おっと。」

天馬はアンジュの姿を見た途端、体を反転させた。

アンジュ

「見てもいいから助けて！このロープ何とかして！」

天馬

「は、はいっ！」

天馬はアンジュのライダースーツのホルスターからナイフを取り出し、アンジュの腕を縛るロープを切断。二人はライダースーツを持って急いで住処を離れた。

—————

く砂浜く

途中アンジュはライダースーツを装着し、二人は砂浜に戻った。



アンジュ

「・・・ダメ、動かない。」

アンジュはヴィルキスのコックピットに乗り込みヴィルキスを動かそうとするが、ヴィルキスは動かなかった。すると・・・。

天馬

「・・・ん？」

天馬が何かを発見した。

天馬

「通風口の中に、何か入ってる？」

天馬はヴィルキスの通風口を開ける。すると、中から何か大量に出てきた。

天馬

「これは・・・アンジュさん！」

天馬はアンジュを呼び、アンジュにダクトから出てきたモノを見せた。

天馬

「通風口の中から、こんなモノが・・・。」

アンジュ

「ブラに・・・パンツ？」

出てきたのは、焦げた大量の下着だった。

アンジュ

「アイツか・・・！」

???

「酷いじゃないか・・・。」

するとそこへ、先程の男が現れた。男は焦げ茶色のショートヘアとヒルダとは異なる紫色の瞳。そして中々の美形だった。

???

「いきなり後ろから跳び蹴り叩き込むなんて・・・。」

アンジュは銃を構え、男の足元に発砲した。

バーン！

???

「ひいつ!？」

アンジュ

「それ以上近づいたら撃つわよ！」

???

「おお落ち着け！俺は君達に危害を加えるつもりは無い！」

アンジュ

「縛って脱がせて抱き付いておいて……あのまま目覚めなければ、もつと卑猥で破廉恥なことをするつもりだったんでしょ!？」

???

「もつと卑猥で破廉恥!?!はあく……女の子が気を失ってる隙に大きくて形の良い胸の感触を存分に確かめようとか、無防備な肉体を存分に味わおうとか、得体の神秘を存分に観察しようとか、そんな事をするような人間に見える!?!」

アンジユ

「そんな事をするような奴だったの!?!この変態!」

???

「ご、誤解だよ!」

アンジユ

「信用出来るもんですか!!」

その後、男は結局アンジユに信じてもらえず、ロープで体を縛られジャングルの中の木に吊るされた。

アンジユ

「変態！ケダモノ！発情期！」

アンジュは顔を赤くしながらその場を離れた。

???

「あゝ、もしもゝし。」



ゝアルゼナル デツキゝ

一方、アルゼナルではサリアとメイがヴィルクス及びアンジュ回収のためオスプレイに乗り込もうとしていた。そこへ……。

ヴィヴィアン

「メイー！」

ヴィヴィアン・エルシャ・信助がやって来た。エルシャの手には弁当箱と水筒がある。

信助

「回収行くんですよね？僕達も手伝います！」

メイ

「でも、みんなさつき帰って来たばかりじゃ……。」「

ヴィヴィアン

「直ぐ行かないと死んじゃうかも！」

サリア・メイ

「っ!?!」

ヴィヴィアン

「アンジュと天馬生きてる！分かるもん！」

エルシャ

「早く見つけてあげなくちゃ。二人ともきつとお腹空かしてるわ。」

ヴィヴィアン

「ほらほら、早く行こうよ！」

ヴィヴィアン・エルシャ・信助はオスプレイに乗り込んだ。サリアとメイも乗り込み、一同を乗せたオスプレイは飛び立った。



く 無人島 砂浜く

その頃、アンジュと天馬は各々のパラメイルの中を探っていた。

アンジュ

「棺桶って言うだけあって、非常食も積んでないのね。」

天馬

「あったのは、これだけですな…」

天馬の手には、ヴィヴィアンから貰ったペロリーナのストラップ。どうやらペガサスのコックピットに飾っていた様だ。

アンジュ

「これからどうするの？．．．ん？」

気がつけば、ヴィルキスの二の腕付近まで海水に浸かっていた。

天馬

「マズい、満潮だ！」

アンジュ

「うそ!？」

天馬とアンジュは急いで砂浜から避難し、ジャングルの中へと入った。

ザザザザザザザ．．．。

ゴロゴロ．．．

ジャングルに入るや否や、雨が降り雷が鳴り出した。



天馬

「雨か…」

アンジュ

「…。。」

ドスーーーーーン！

アンジュ

「きゃっ！」

だ。二人の目の前の木に落雷が落ちた。木は一瞬で燃え、アンジュは驚きしやがみこんだ。

天馬

「大丈夫ですか？」

アンジュ

「ええ…大丈夫…」

すると、運よく近くに一人一人入れるほどの大きさの樹洞があった。

天馬

「アンジュさん、あそこで。」

アンジュ

「うん。」

アンジュは樹洞の中に腰を下ろした。すると…。

アンジュ

「痛っ！」

アンジュの左脚に痛みが走った。見てみると、左腿の内側に蛇が噛みついていて、アンジュは立ち上がり蛇を追い払ったが時既に遅し。

天馬

「大丈夫ですか!？」

アンジュ

「ごめん、足が痺れて、歩けそうにない……。」

天馬

「……仕方ない。」

天馬はアンジュを背負い、急いでその場を離れた。すると……。

???

「あのく、どうしたの?？」

先程アンジュに宙吊りにされた男に会った。

天馬

「助けてください! 蛇に脚を噛まれたみたいなんです!」

???

「何だって!？」

男は隠し持っていたナイフでロープを切り、ぬかるむ地面に着地。天馬とアンジユの元へと向かった。

???

「噛まれたのは彼女かい？」

天馬

「はい。左脚の股関節付近を。」

???

「早く毒を吸い出さなきゃ。彼女を寝かせてくれ。」

天馬

「はいっ!」

天馬はアンジユを地面に寝かせ、男は傷口から毒を吸い出した。

アンジユ

「うっ……！」

天馬

「少し痛むかもしれませんが、我慢してください。」

???

「……よし、毒は吸い出した。住処に戻って治療しなきゃ！」

男はアンジュを抱き抱え、3人は住処へと向かった。

—————

くジャングル 住処く

アンジュ

「う、うくん……」

アンジュが目を覚めたのは、その日の夜だった。服は気付けばライダーズスーツから白いYシャツに変わり、左脚の腫まれたところには包帯が巻かれていた。

アンジュ

「ここって…」

天馬

「お、目が覚めました？」

釜戸の方には、天馬と男が夕食を作っていた。

???

「無理しない方がいいよ。毒は吸い出したけど、まだ痺れが残ってるはずだから。」

アンジュ

「あんた、また…」。

アンジュは男を睨んだ。男はスプーンの入った器を持ってアンジュに近づいた。

???

「言っておくけど、動けない女の子にエッチなことなんかしてないからね。もう少し治

療が遅ければ、危ないところだったんだ。これに懲りたら、迂闊な格好で雨の森に入っちゃダメだよ。」

アンジュ

「余計なお世話よ……。」

天馬

「アンジュさんもご飯にしたらどうですか？この海蛇スープ、けっこうイケますよ。」

と、天馬は美味しそうにスープを食べていた。

???

「君、アンジュって言うんだ。良い名前だね。」

アンジュ

「そういえば、名前言ってなかったわね。」

天馬

「俺、天馬って言います。」

???

「僕は《タスク》で、食べる？」

アンジュ

「この際だから、頂くわ。」

アンジュは口を開け、タスクがスプーンでスープを救い口に運んだ。

アンジュ

「・・・不味い。でも、嫌いじゃない。」

タスク

「良かった。出来れば、もう殴ったり撃ったり簧巻きにしないでくれないかな？」

アンジュ

「考えとく。ところで・・・。」

タスク

「ん？」

アンジュは顔を赤くして傷口の方を見た。

アンジュ



「さっき、毒を吸い出したって言ったっけ？」

タスク

「うん。」

アンジュ

「口で？ここから!？」

タスク

「うん．．．えっ!?!い、いや、あの、その．．．。」

アンジュ

「このー!」

アンジュはタスクの頬を思いつきりつねった。

タスク

「イデデデデデデデ！」

アンジュ

「つねらないとは言っていない!」



くアルゼナル デツキく

次の日の早朝、捜索隊は一旦アルゼナルへと戻り、補給を行っていた。

作業員

「補給完了まで、30分です！」

メイ

「遅い！15分で終わらせろ！」

エルシヤはデツキの端で水分補給をしていた。そこへ……。

ヒルダ

「分かんないなあ。天馬はともかく、何でアンジユを助けようとすんのか。」

エルシヤ

「ヒルダちゃん……。」

ヒルダ

「エルシャお得意のお節介ってやつ？」

エルシャ

「・・・ヒルダちゃんがアンジュちゃんを許せないのも分かるわ。機体を落とすたくなくなるくらいにね。」

ヒルダ

「・・・。」

エルシャ

「でも、誰かが受け入れてあげないと、彼女はずっと誰も信じない。同じノーマ同士なのに、そんなの寂しいじゃない？それにアンジュちゃんって似てるのよ。昔のヒルダちゃんに。」

ヒルダ

「はあ？あんなクソ女とアタシが似てる？殺しちゃうよ？」

ヒルダはそう言うとその場を離れた。そのすぐ後、ヒルダは剣城とすれ違った。

剣城

「なるほど、アナタがアンジュさんの機体に細工をしたのか。」

劍城は足を止めて眩き、ヒルダも足を止めた。

ヒルダ

「・・・天馬の機体には細工してねえからな。」

劍城

「これはあくまで俺の勘ですが、アンジュさんが一人で戦う目的は、単に隊員を信用できないだけじゃないと思うんです。」

ヒルダ

「・・・他に何かあるんだよ?」

劍城

「死んだ者達への償い。誰も死なせないために皆の危険は全て自分一人で受ける。過去の彼女を知ってから、俺はそう思っているんです。」

ヒルダ

「・・・くだらねえ。考えすぎだよ。」

そう言うと、ヒルダはその場を離れた。

劍城

「・・・考えすぎか。確かに、そうかもな・・・。」

劍城も静かにその場を離れた。

## E p. 06 / アンジユと天馬の漂流記 《後編》

く 無人島 砂浜く

無人島では、タスクと天馬がヴェルクスの修理をしていた。

タスク

「天馬君、マイナスのドライバー取ってもらえる？」

天馬

「はい。」

そこへアンジユがやって来た。

アンジユ

「朝っぱらから何やってるの？」

天馬

「アンジュさん。タスクさんとヴィルキスの修理中です。」

アンジュ

「修理出来るの？」

タスク

「まあね。ここには時々、バラバラになったパラメイルの残骸が流れ着くんだ。それを調べてるうちに、何となく知恵が付いてき。」

アンジュ

「何でヴィルキスを治すの？天馬のペガサスは？」

天馬

「ペガサスはエンジンが完全にブローしちやって、修理できないんです。だから、ペガサスの使えるパーツをヴィルキスの修理に使おうってことになったんです。」

アンジュ

「ふーん。」

天馬はタスクにマイナスドライバーを渡し、タスクは修理を続けた。そのやり取りを見て、アンジュは疑問に思った。

アンジユ

「ねえタスク、どうしてマナを使わないの？」

タスク

「・・・。」

タスクは手を止めた。

アンジユ

「あなた、いったい何者？この島で何をしているの？」

タスク

「・・・ただのバカンスって理由じゃ駄目かな？」

アンジユ

「・・・そう解釈しとくわ。それで、治せそう？」

タスク

「エンジンは問題無かったけど、出力系の回路が駄目になってる。これさえ修理できれば無線が使えるから、それで仲間と連絡を取ればいい。」

アンジユ



「連絡したって無駄。誰も助けに来ないし、誰も待つてない……。」

タスク

「そっか……。あの……。治すって言っても暫くかかるからさ、よかつたら治るまでの間ここにいたらどうかな？ その、変なことしたりしないし……」

アンジュ

「……そうね。」

—————

く ジャングル 住処く

その日の夜、アンジュはタスクの住処にカーテンを設置し住処を分断した。

アンジュ

「私はカーテンの向こうで寝るわ。もしこのカーテンを越えたら死刑よ！ いいわね？」

タスク・天馬

「はい。」

アンジュはカーテンの向こうでタスクのベッドで眠り、タスクと天馬はカーテンの外で寝袋に入り眠りについた。



く岩壁く

それから暫くの間、アンジュと天馬はタスクと行動を共にした。ある日は海で大物を釣り上げ……。

アンジュ

「天馬、引いてるわよ！」

タスク

「コイツは大物だ！」

天馬

「でえええええりやああああ!!」

ザバーン！



く ジャングル 住処く

ある日は天馬手作りのカレーを食し・・・。

天馬

「どうです？」

タスク

「美味しいよ！今まで食べてきたカレーの中で一番だ！」

アンジュ

「ほんと。エルシャと良い勝負じゃない？」



く砂浜く

そしてある日は雨の中、三人で協力してヴィルキスの修理を行った。

天馬

「ここを、こうして・・・。」

タスク

「そうそう、そんな感じ。」

アンジュ

「タスク、この部品はどうすればいいの？」

タスク

「これかい？これはね・・・。」

日が経つにつれてアンジュとタスクの仲は徐々に修復されていき、少しずつだが互いに身を寄せ合うようになった。だが、天馬がその事を知ることにはなかった。



く河辺く

そして一週間が経ったある日の夜、三人は島の河辺で星空を眺めていた。

アンジュ

「星がいっぱいね。」

タスク

「気付かなかった？」

アンジュ

「空なんて、ずっと見てなかったから。・・・綺麗。」

タスク

「・・・君の方が、綺麗さ。」

タスクの一言で二人は頬を赤く染め、静かに互いの手を重ねた。すると・・・。

天馬

「……ん？何だ？」

天馬が何かを発見した。二人は天馬の視線の方向に目を向ける。すると、氷付けにされた大型のドラゴンが数機の輸送機によって運ばれる光景が見えた。

アンジユ

「あれって、ドラゴン？何処に連れていくの？」

「ギヤアアアアアアア!!」

突然、ジャングルの方からドラゴンの鳴き声が響き、一匹の赤い小型ドラゴンが飛び立った。

天馬

「あれって、俺達と一緒に海に落ちたドラゴン？」

砲。  
赤いドラゴンは輸送機集団の周囲を飛び回り、輸送機は赤いドラゴンに機銃を向け発

ドカーン！

だが結果的に互いが互いを撃ち落とす形となり、輸送機集団と大型ドラゴンはアンジュ達の遙か前方の森に墜落した。

タスク

「今すぐ逃げよう！」

三人は急いでその場を離れる。だが、今度は三人の目の前に赤いドラゴンが落ちてきた。ドラゴンは翼に穴が開き、空を飛べる状態ではなかった。

ドラゴン

「ギャアアアアアアアアア！」

アンジユ

「出たわねドラゴン！」

アンジユはホルスターから拳銃を取り出し、ドラゴンに銃口を向け構えた。

タスク

「そんな銃で倒せる相手じゃない！」

アンジユ

「じゃあ、黙って食い殺されろって言うの!？」

天馬

「そうだ、ヴィルキスでなら！」

タスク

「でも、まだ修理が出来てない！」

アンジユ

「だったら治して！今すぐ！」

タスク

「・・・ああ、わかった！」



三人は急いでジャングルへと入り砂浜へと向かう。ドラゴンは三人を走って追いかけた。

-----

「砂浜」

砂浜に着くとアンジュとタスクはヴィルキスの修理に向かい、天馬はドラゴンと対峙した。

天馬

「俺がドラゴンの相手をします！その間に、二人は早く修理を！」

タスク

「わかった！」

アンジュ

「気をつけて！」

天馬

「……はあああああああつ！」

天馬が両手を広げて叫ぶと、彼の背中から深い藍色のオーラが出現した。オーラは翼を形成するかのように形を成していき、オーラが消えると、背中から真つ白な翼を生やし、強固な肉体とポリウムのある長い赤髪を持ち、頭にペガサスを模した装飾を着けた巨人が雄叫びを上げながら現れた。

天馬

「魔神ペガサスアーク！」

ペガサスアーク

『オオオオオオオオオオ!!』

アンジュ

「な、何よアレ!?!」

タスク

「天馬君の体から、巨人が!?!」

アンジュとタスクは突然の出来事に驚きを隠せず困惑している。

天馬

「さあ、かかって来い！」

ドラゴン

「ギャアアアアアアアア!!」

ドラゴンは天馬に向かって突進。

天馬

「はあああああああ!」

天馬は両手を突き出した。ペガサスアークも天馬の動きに合わせて両手を突き出し、ドラゴンを受け止めた。

ドラゴン

「ギャアアアアアアアア!!」

ペガサスアーク

『オオオオオオオオオ!!』

ペガサスアークはドラゴンを突き飛ばし、ドラゴンは砂浜を転がりヤシの木にぶつかった。

アンジユ

「スゴいわね、あれ…」

タスク

「アンジユ！修理完了だ！」

ヴィルキスの修理が終わり、アンジユはコックピットに乗り込んだ。

アンジユ

「残りのエネルギーを全部、右腕に集中させて…」。

アンジユはヴィルキスを操り、右腕のライフルをドラゴンに向け発砲。

アンジュ

「くたばりなさい！」

ダダダダダダダダダダダダッ！

ドラゴン

「ギャアアアアアアアア!!」

銃弾はドラゴンの腹部に命中し、傷口から大量の血が噴き出した。

天馬

「いくぞー！」

天馬はドラゴンに向かって走り出し、ドラゴンも体の痛みには耐えながら天馬に向かって突進してくる。

天馬

「今だ！」

天馬は急停止し、体を屈めドラゴンの下へと潜り込んだ。

天馬

「ペガサスアッパー！」

ペガサスアーク

『オオオオオオオオオ!!』

ドーン！

天馬とペガサスアークはドラゴンの腹部に強烈なアッパーを叩き込み、ドラゴンは空中へと飛ばされた。

ザバーン！

そして海へと落ち、海底に沈んだ。ペガサスアークは藍色のオーラへと姿を変え、天馬の背中へと戻った。

天馬

「ハア…ハア…」

タスク

「何だったんだろう、今の。」

アンジュ

「分からない。でも一つ確かなのは、あれはマナの力じゃない。マナとは違う、何か別の力……。」

その後、日の出と共に二人は天馬に先程の現象について質問をした。

天馬

「あれは化身です。」

タスク

「化身？」

天馬

「人の心の強さが気の塊として形になったもので、化身が出せる人は化身使いって呼ばれてて、凄いパワーを発揮できるんです。」

アンジュ

「なるほど。(もしかしたら、お父様が言ってたマナとは違う別の力って、あの化身のこどだったのかしら?)」

天馬

「それより、これからどうしましょうか?もうここには居られないみたいです……。」

先程の墜落で、森の一部が火事になっていた。

タスク

「……アンジュ、よかつたら一緒に来ない?」

『……アンジュちゃん応答願いまーす。』

突然、ヴィルキスに通信が入った。



『もう死んじやってますか？死んじやってるなら死んじやってるって言うてくださいー  
い。』

アンジュ

「この声、ヴィヴィアン！」

アンジュはマイクをオンにした。

アンジュ

「こちらアンジュ！生きてます！」

ヴィヴィアン

『うそ?! ホントに、ホントにアンジュなの!?!』

信助

『アンジュさん、天馬は一緒ですか!?!』

アンジュ

「天馬も無事よ。救助を要請します。」

ヴィヴィアン

『りよ、了解!!』

アンジュはヴィルキスを降り、タスクに近づいた。

アンジュ

「私、帰るわ。今はあそこしか、私の戻る場所はないみたいだから……。それに、やられたらやり返さないと。」

タスク

「そっか……。」

天馬

「今日まで、ありがとうございました。」

アンジュ

「タスク、ありがとう。私達だけじゃ、多分死んでた……。」

タスク

「どういたしまして。じゃあ、二人とも元気で……。」

タスクは二人に手を振り、その場から走り去った。

アンジュ

「変な人。」

天馬

「また、会えるでしょうか？」

アンジュ

「・・・分からない。」



くオスプレイ 機内く

その後二人は無事に救助された。

エルシャ

「はい、アンジュちゃん。」

エルシヤはコップにスープを注ぎ、アンジユに渡した。

アンジユ

「ありがとう、エルシヤ。」

エルシヤ

「あら？あらあら。」

アンジユのありがとうにエルシヤは驚き、微笑んだ。

アンジユ

「ねえヴィヴィアン、あの変なマスコット、まだある？」

ヴィヴィアン

「アンジユ、今アタシの名前……。」

ヴィヴィアンは初めて名前を呼ばれ驚いた。

アンジュ

「私のコックピット、何も無いから……。」

ヴィヴィアン

「もちろん、あるある！」

サリアとメイはアンジュの変化に驚いている。

サリア

「この間とは別人みたいね。」

メイ

「無人島にいる間に、何かあったのか？」

アンジュ

「ねえ天馬、サッカーってマナを持ってなくても出来る？」

天馬

「ええ、もちろん！」

アンジュ

「ならば、アルゼナルに帰ったら私にサッカーを教えてよ！」

エルシヤ

「私もいいかしら？」

ヴィヴィアン

「アタシもやるー！」

天馬

「もちろん、喜んで！」

To Be Continued...

## E p. 07 / 密航侍女モモカ・荻野目

くアルゼナル 司令室く

アンジュと天馬がアルゼナルに帰還して数日後、ジルとジャスミンとマギーはサリアが入手した5枚の写真を見ていた。写真に写っているのは、一本の指揮棒と四本の腕を持つ水色のウェーブがかかった髪指揮者の巨人、《奏者マエストロ》。剣と盾を携え真紅のマントを翻す甲冑の騎士、《剣聖ランスロット》。大木のような剛腕を持つ青を強調した剣闘士のような鎧を着けた巨人、《護星神タイタニアス》。巨大な旗と盾を携え水色のアーマードレスを身に纏う桃色の長い髪の女の巨人、《戦旗士ブリュンヒルデ》。そして魔神ペガサスアーク。

マギー

「化身、人の心の強さが気の塊として形になったもの……。噂で聞いたことはあったが、まさか実在したとはねえ。」

ジル

「なるほど。となるとアイツらのパラメイルが突然姿を変えた原因は、その化身にあると考えていいだろう。」

サリア

「どういうこと?」

ジル

「アイツらの化身がアイツらの心と共鳴し、パラメイルに新たな力を与えたんだろう。」

ジャスミン

「フッフツ、面白い連中が転がり込んで来たもんだね。」

ジル

「ああ、上手くやればリベルタスの大きな戦力になる。フツ。」

薄暗い司令室の中、ジルとジャスミンは怪しく微笑んだ。



くアルゼナル グラウンドく



同じ日の午後、アンジュ・ヴィヴィアン・エルシャはグラウンドで天馬とサッカーの練習をしていた。

天馬

「最初は手を使えなくて不便に思うかもしれませんが、慣れれば案外簡単にコントロール出来ると思いますよ。」

アンジュ

「わかったわ。」

ヴィヴィアン

「よっし、やるぞー!」

3人はまずリフティングから始めた。

アンジュ

「よっ、ほっ、ほっ、ほっ……」

ヴィヴィアン

「よっ、それっ、ほいっ……」

天馬

「そうそう！二人とも上手！」

アンジュとヴィヴィアンは飲み込みが早く直ぐにコツを掴んだ。

エルシャ

「それっ！あらら．．．。」

だが、エルシャは中々上手くいかず．．．。

天馬

「ドンマイドンマイ！まだ最初ですから、ゆっくり上手くなっていきましょう！」

エルシャ

「は〜い。」

エルシャは笑顔で返答した。すると．．．。

ビー！ビー！ビー！ビー！

アルゼナル全体に警報が鳴り響いた。

天馬

「遭遇警報？」

アンジユ

「いや、違う。」

『総員に告ぐ！アルゼナル内部に侵入者あり！目標は現在、グラウンドへ向け逃走中！  
付近の者は確保に協力せよ！』

ヴィヴィアン

「侵入者!？」

エルシャ

「( )に來るわ！」

一同は銃を構え、遭遇に備えた。すると、入り口から一人のメイド姿の少女が現れた。

ヴィヴィアン

「いた!」

ヴィヴィアンが存在に気付き、四人は少女に銃を向けた。

???

「マナの光よ!」

ピカーン!

少女は両手に障壁を展開し、身を屈めた。

アンジユ

「マナの光!?!」

???

「やめてください！私は、アンジュリーゼ様に会いに来ただけです！」

天馬

「っ!?あなた……。」

アンジュ

「モモカ!?!」

天馬とアンジュは聞き覚えのある声に驚き、アンジュはモモカの名前を呼んだ。少女は名前を呼ばれ、アンジュの方に顔を向けた。

モモカ

「もしかして、アンジュリーゼ様……?」

アンジュ

「どうして……。」

モモカ

「アンジュリーゼ様ああ!!」

モモカは泣きながらアンジュに抱きついた。エルシャとヴィヴィアンと天馬は呆然

としている。

天馬

「どうなってるの・・・?」



〈指令部〉

その後、モモカの情報指令部に送られ、エマが電話で委員会と会談していた。

エマ

「モモカ・荻野目。元皇女アンジュリーゼの筆頭侍女です。・・・はい・・・えっ!? わ、分かりました・・・はい。」

エマは電話を切り、椅子に寄りかかった。

ジル

「ひよつとして、監察官殿の予想通りですか？」

エマ

「あの娘を国に帰せば、ドラゴンやそれと戦うノーマ……最高機密情報が世界中に公になると……。何とかならないのでしょうか？」

ジル

「ノーマである私に、人間の決めたルールを変える力はありません。ですがせめて、一緒に居させてあげようじゃありませんか。今だけは……。」



く居住区く

一方、アンジュと天馬とモモカは居住区にいた。

モモカ

「あの……えつと……。」

モモカは何を話せばいいのか分からず、言葉を詰まらせる。

モモカ

「・・・おぐし、短くされたのですね？良いと思います！大人の雰囲気と言うか、これまでの姫様から脱皮されたような・・・。」

アンジュは口を閉ざしたままである。

天馬

「そういえば、アンジュさん髪切るとき思いきってナイフでバッサリ切ってました！あれはもう大胆って言うか何と言うか・・・。」

モモカ

「そうなんですか？凄いですね！」

天馬も話題に加わるが、アンジュは黙ったままだった。



天馬

(会話が進まないなあ……。)

天馬は気まずい表情を浮かべた。

—————

くアンジユの部屋く

3人はアンジユの部屋に到着した。

モモカ

「ここが、アンジユリーゼ様の部屋なのですね？」

アンジユ

「天馬、悪いけどあっち向いといてくれる？」

天馬

「はい。」

天馬はアンジュに背を向け、アンジュは制服を脱ぎ捨てスポーツブラを身に着けた。

モモカ

「お召し替えですね？ 畳みます。」

モモカはマナの光で制服を畳み始めた。

アンジュ

「へー、マナってそうやって使うんだ。」

モモカ

「あつ。」

モモカは慌ててマナを使うのを止めた。

モモカ

「申し訳ありません…」

モモカは頭を下げ謝った。

アンジュ

「・・・天馬、もういいわよ。」

アンジュは自分のベッドに腰を下ろし、天馬も自分のベッドに腰を下ろした。

天馬

「モモカさんも座ってください。」

モモカ

「はい・・・」

モモカは天馬の隣に腰を下ろした。

アンジュ

「それで、どうして来たの？」

モモカ

「もちろん、アンジュリーゼ様のお世話をするためです！」

アンジュ

「・・・悪いけど、私はもう皇女アンジュリーゼじゃないわ。今の私はノーマのアンジュよ。一応命令だから、明後日まで私達があなたのお世話をするわ。だから、私には構わないで。」

アンジュはそう言うと、自分の制服を畳み始めた。だが、モモカはアンジュの制服を取り上げた。

モモカ

「やめてください！アンジュリーゼ様はアンジュリーゼ様です！私、帰りません！離れませんか！これからは、私がお世話致します！」

アンジュ

「帰る場所、ないもんね・・・」

モモカ

「えっ?」

アンジユ

「ミスルギ皇国、もう無いんでしょ？」

天馬

「えっ!？」

天馬は突然の発言に驚き立ち上がった。

天馬

「ウソでしょ!?!ミスルギ皇国が、もう無いって…」

アンジユは表情を暗くし、語り始めた。

アンジユ

「・・・ここに来て直ぐだったんだけど、私はミスルギ皇国と関わりがあった各国に嘆願書を送ったの。ローゼンブルム王国、マーメリア共和国、ヴェルダ王朝、エンデラント連合、ガリア帝国。でも、どの国からもミスルギ皇国も皇女アンジユリーゼも知らないうって受け取りを拒否されて、その時にミスルギ皇国はもう存在しないって告げられた

の。」

天馬

「そんな…」

アンジュ

「私がノーマだったから、お母様は死に、国は滅んだ…」

モモカ

「そんな、違います！」

アンジュ

「ねえ、いつから知ってたの？私がノーマだって。」

アンジュはモモカを見て言った。

アンジュ

「・・・最初からに決まってるわよね。私にマナを使わせないために、お父様が連れてきたのがアナタ。でしょ？」

「どうでもいつか、今となっては…」

アンジュはベッドで横になり、天馬は近くにあつた椅子に腰掛けた。

天馬

「モモカさんは明後日まで俺のベッドを使ってください。寝心地は悪いかもかもしれませんが、無いより良いかと・・・。」

モモカ

「私の居場所はアンジュリーゼ様の御傍だけです。追いかけて追いかけて、やっと御会  
いできたんです。どうか、このままアンジュリーゼ様の御傍においてください・・・」

モモカはアンジュに向かって土下座をした。

アンジュ

「ここは、アナタみたいな人間の住む場所じゃない・・・」



〈食堂〉

次の日の朝、モモカはアンジュと天馬と共に食堂で配給の列に並んでいた。遠くの席からはサリア・ヴィヴィアン・エルシャ・神童・信助・霧野が食事をしながら見ていた。

エルシャ

「やっぱり私達とは住んでた世界が違うのね、アンジュちゃん。」

ヴィヴィアン

「侍女って何ぞ？」

サリア

「高貴な身分の方のお世話をする人の事よ。」

信助

「メイドさんとは違うのかな？」

神童

「呼び方が違うだけで基本的には同じらしい。」

霧野

「しかも彼女はアンジュさん専属の筆頭侍女。侮れないな。」

ヴィヴィアン



「専属ってことは、アンジュだけのモノって事!? スゴい!」

一同を尻目に、アンジュは配給が終わると空いている席を探しに行った。モモカと天馬は互いに1列ずつ詰めた。

### 配給係

「あんた、ノーマじやないんだろ? だったらあんたの分は無いよ。食いたきや金出しな。」

モモカ

「か、かね?」

天馬

「お金が必要ななら、彼女の分は俺が払いましょう。」

天馬はポケットから1万キャッシュ分の札束を取り出し、配給係に渡した。配給係は札束の枚数を確認した。

天馬

「足りなければもう少し出しますけど?」

配給係

「これだけあれば十分だよ。．．．あれ?」

気が付けば、モモカはトレーを置いてその場から居なくなっていた。辺りを見回すと、モモカはヒルダ・ロザリー・クリス・剣城が座っているテーブルの側で立っているアンジユの隣にいた。

モモカ

「アンジュリーゼ様に席を譲りなさい!」

モモカはヒルダ達に席を譲るよう訴えていた。

天馬

「まったくもう．．．。」

天馬はトレーを置き、急いでアンジユとモモカの元へと駆け寄った。

天馬

「モモカさん、落ち着いてください。」

モモカ

「落ち着いていられませんよ！ アンジュリーゼ様を御待たせするなんて！」

天馬

「アンジュさんはノーマとしてここにいます。ここにいます以上は、皇女の身分なんて役に立ちません。以前まで皇女であつても、ここでは身分は皆同じなんです。」

モモカ

「ですが、アンジュリーゼ様はアンジュリーゼ様です！」

ヒルダ

「席を譲れだつて？ ふざけんなよゴミ女！」

ロザリー

「調子乗ってんじゃねえぞ！」

クリス

「ホンつと目障り。」

ヒルダ達が続けて悪口を言う中、剣城は食事を済ませ席を立った。

剣城

「よかつたら、ここ使ってください。」

ガシッ！ ドンッ！

だが、ヒルダに腕を掴まれ席に戻された。

ヒルダ

「あんな奴に席を譲る必要無いって。」

剣城

「ですが、アンジュさんに席を譲れば収まる話では？」

ヒルダ

「ほつときな。いつかの何処かの誰かさんみたいに、何にも分かってないイタ侍女に従う必要なんて無いさ。」

アンジュ

「低俗ね、相変わらず。」

ヒルダ

「ノーマなもんでね。」

アンジュとヒルダは互いを睨み合った。

モモカ

「これ以上の姫様への無礼は私が…私が…」

バタツ

ヒルダ・ロザリー・クリス

「えっ?」

アンジュ・劍城

「っ?」

突然、モモカは目を回して倒れた。

天馬

「ちよつと、モモカさん!？」

――――  
くジャスミン・モールく

その後3人は食堂での食事を諦め、ジャスミン・モールに設置されている自動販売機でハンバーガーとジュースを購入した。

天馬

「3日も飲まず食わずだったなんて、知りませんでした…」

モモカ

「申し訳ありません。アンジュリーゼ様に御会いすることで頭がいっぱいでして…」

すると、アンジュはモモカに100キャッシュユ札を数十枚程渡した。

アンジユ

「これからはそれで何とかしなさい。」

モモカ

「これが、お金というものなんです。ありがとうございます！ 貨幣経済なんて不完全なシステムと思ってましたけど、これはこれで何だか楽しいですね！」

アンジユ

「そう？」

「ぐあああああああー！」

突然、デツキの方から血塗れのメイルライダーがマギーを含む複数のドクターに搬送される光景が見えた。メイルライダーは3人の前を通り過ぎただけだったが、その光景を見たモモカにはかなり応えた様だ。

モモカ

「うえ…何なのですか… ここは、何をする場所なのですか？」

アンジュ

「狩りよ。私もいつああなることか……。」

アンジュは静かにジャスミン・モールを離れた。取り残されたモモカと天馬は、暗い表情を浮かべていた。

モモカ

「あんなの、私の知っているアンジュリーゼ様じゃありません……私の知っているアンジュリーゼ様は、何処へ行ってしまったのですか……」

天馬

「アンジュさんは色々あって、少し傷付いてるんですよ。心の傷は日にち薬で治る時もあります。しばらくすればきつと……。」

モモカ

「はい……」





く射撃場く

その日の午後、第一中隊はライフルでの射撃練習を行っていた。的のベニアボードにはドラゴンが描かれており、頭・胴・左右腕の計4ヶ所にターゲットマークが描かれている。

霧野

「よく狙って……。」

バーン！

霧野の放った弾丸は右腕のターゲットの右側へ。

バーン！

神童の放った弾丸は胴のターゲットの真ん中より左寄り。

バーン！

エルシヤの弾丸は的から大きく外れ。

エルシヤ

「あら……。」

バーン！

サリアの放った弾丸は頭のターゲットのど真ん中に命中。

エルシヤ

「ど真ん中！お見事〜♪」

エルシヤは胸の谷間からハンカチを取り出しヒラヒラと振った。

エルシヤ

「いつまで経ってもサリアちゃんみたいになんて上手く撃てないわねえ。何がいけないのかしら?」

サリア・神童・霧野は、どうやら原因が分かっただらしい。

サリア

「四次元バストが…」

神童

「大きければ良いと言うわけでも無さそうだな。」

霧野

「だな。」

一方、別の射撃場ではアンジュ・天馬・剣城が射撃練習を行い、ヒルダ・ロザリー・クリスは立ち話をしていた。

ロザリー

「ええっ!?あの侍女がこころされるって!」

天馬・アンジュ

「っ!？」

クリス

「どういうこと? ヒルダ。」

ヒルダ

「アルゼナルとドラゴンの存在は、一部の人間しか知らない極秘事項なんだ。こんなところにやってきて、アルゼナルとドラゴンの秘密を知っちゃった人間を……。」

クリス

「素直に帰すわけない……か。」

ロザリー

「ハッハー、酷いもんだねえ! あの女を慕った奴はみーんな死ぬんだから! ココもミランダも、そしてあの侍女も……。」

バーン! バシユッ!

ロザリー

「うわあ!？」

突然、ロザリーの足元に銃弾が突き刺さった。発砲したのは劍城だった。

ロザリー

「ちよ、てめえ何しやがる！」

バーン！ バーン！ バーン！ バーン！

劍城はライフルをロザリーの足元に乱射。ロザリーはジャンプやステップで銃弾を避け……。

カチツ カチツ

ついにライフルの銃弾が尽きた。すると、ライフルを投げ捨て今度は腰のホルスターからハンドガンを取り出した。

ロザリー

「待てよ剣城！何の真似だ!？」

剣城

「軽々しく死ぬって言うのが気に食わないですよ。特に、他人であれ誰かのせいにされるのがね!」

剣城はハンドガンをロザリーに向けた。

ロザリー

「・・・何なんだよもうっ!」

クリス

「ちよつと、ロザリー!」

ロザリーは射撃場から走って逃げ、クリスはロザリーを追いかけた。剣城はハンドガンをしまいライフルを拾った。

ヒルダ

「お前、タマにえげつない事するねえ。嫌いじゃないよ。」

ヒルダは静かに射撃場を離れ、それに続く様に劍城も射撃場を後にした。天馬とアンジユはライフルを構えた体勢から全く動かなかったが、モモカが殺されることを知り動揺していた。



くグラウンドく

その日の夜、天馬はグラウンドの端のベンチで空を眺めていた。

天馬

「やっぱり、無人島で見たときの空と随分違うなあ…」

すると……。

アンジユ

「ここに居たんだ。」

アンジュとモモカがやって来た。

天馬

「アンジュさん、モモカさん。」

アンジュとモモカは天馬の座るベンチに腰掛けた。

モモカ

「久しぶりですね、こうやって外で一緒に空を眺めるのは。」

アンジュ

「・・・ん？」

アンジュがモモカの右腕に切り傷の跡があることに気づいた。

アンジュ



「その傷跡。」

モモカ

「あ、これですか？ マナを使えば元通りになると言われたのですが、これはアンジュリーゼ様との思い出の傷なので……。」

天馬

「思い出の傷？」

モモカ

「7年前、私とアンジュリーゼ様がまだ幼かった頃、私はアンジュリーゼ様の大切なお人形を壊してしまい、右腕を怪我してしまつたんです。その時アンジュリーゼ様が、大切なドレスの裾を破つて治療してくれて……。」

天馬

「そうだったんですか……。」

アンジュ

「そんな昔のこと……。」

モモカ

「私は、決して忘れません。今の私は、アンジュリーゼ様で出来ていますから。これから……。」

モモカはアンジユに身を寄せ、アンジユの手を握った。

モモカ

「これからもずっと、御慕いしております。アンジユリーゼ様…」

アンジユ

「・・・出ていきなさい。」

モモカ

「えっ?」

アンジユ

「今すぐ出ていくのよ! マナの光があれば、空を飛んだり海を潜ったりできるんですよ!?! 逃げなさい、モモカ!!」

モモカ

「あ・・・やつと呼んでくれました、モモカって……。ですが、時間の許す限りアンジユリーゼ様の御傍に居させてください。」

アンジユ

「どうして!?!」

モモカ

「・・・モモカ・荻野目は、アンジュリーゼ様の筆頭侍女ですから。」

アンジュ

「・・・バカ・・・」

ビー！！ビー！！ビー！！

『第一種遭遇警報発令！パラメイル第一中隊、出撃準備！』

天馬

「こんな時間にか。行きましょう！」

アンジュ

「ええっ！」

天馬とアンジュはベンチから立ち上がった。

モモカ

「アンジュリーゼ様、どうかご無事で。」

アンジュ

「・・・。」

モモカ

「天馬さん、アンジュリーゼ様をお願い致します。」

天馬

「・・・はい。」

二人はベンチにモモカを残し、カタパルトへと急いだ。

-----

く太平洋 上空く

第一中隊はパラメイルに乗り込み、シンギュラー発生ポイントに向かっていた。

アンジュ

「・・・何が筆頭侍女よ。ずっと騙してきたくせに。」

天馬

『アンジュさん。』

飛行中、天馬から通信が入った。

天馬

「モモカさんのこと、どう思ってるんですか？」

アンジュ

「救いの無いバカ。逃げろって言ったのに逃げようとしな。明日になれば、殺されるのに・・・。」

天馬

「アンジュさんは、モモカさんを失うのが怖いんですよ？だから、今すぐアルゼナルから出るようモモカさんに言った。でも、内心はモモカさんといつまでも一緒に居たいと思ってる。違いますか？」

アンジュ

「・・・何もかもお見通しして訳ね・・・天馬、今回限りで良いから、私のワガママに付き合ってくれない？」

天馬

「いいですよ。俺は、アンジュさんの友達ですから！」

アンジュ

「・・・ありがとう！じゃあ、行くわよ！」

天馬

「はいっ！」

アンジュと天馬はお互いエンジンの出力を上げる。そしてヴィルキスとペガサスはシンギュラー発生ポイントへと突っ込んで行った。



くデツキ カタパルトく

次の日の夜明け前、第一中隊はドラゴン退治から戻ってきた。だが、ロザリー・クリス・サリアはカンカンに怒っていた。ロザリーのグレイブのボディには大きな傷が見える。

ロザリー

「あのクソアマっ！戦闘中にアタシの機体を蹴り飛ばしやがって!!」

クリス

「私のこと、邪魔って!!」

ヴィヴィアン

「いやー、今日のアンジュと天馬超キレツキレだったにやー!」

サリア

「何言ってるの!?!二人だけでドラゴンを全部狩るなんて、とんでもない命令違反よ!!アンジュはともかく、あの天馬まで!!」

エルシヤ

「……ねえ、天馬君って今まで命令違反とかしたことがあった？」

エルシヤは神童に質問をした。

神童

「いや、あんな天馬は今まで見たことありませんでした。」

信助

「何かあったのかな？」

一方、デッキの方では輸送機が待機していた。輸送機の側には、ジル・エマ・モモカ、さらに野次馬ノーマと警備兵がいた。

モモカ

「では、お世話になりました。僅かな間でしたがとっても幸せでしたと、アンジュリーゼ様に御伝えいただけますでしょうか？」

エマ



「分かったわ・・・。」

モモカは警備兵に連れられ、輸送機に向かって歩き始めた。その時・・・。

「待つてくださいい！」

「待ちなさい！」

モモカ

「っ!？」

アンジュと天馬が両手に紙袋を持って野次馬の中から現れた。

アンジュ

「その子、私達が買います！」

ドサッ！

天馬とアンジュはジルとエマの前に紙袋を置いた。紙袋の中には大量の紙幣が詰め

込まれていた。

エマ

「は？はあ!？」

エマを始め、野次馬達や偶然遭遇した第一中隊は驚いた。

天馬

「お願いします！その方を譲ってください！」

エマ

「ノーマが人間を買う!?!こんなボロボロの紙くずで!?!」

ジル

「いいだろう。」

エマ

「えっ?」

ジルは即答で答えた。

ジル

「移送は中止。その者はコイツらのモノだ。」

エマ

「ですが司令！」

ジル

「金さえ注ぎ込めば何でも手に入る。それがこの、アルゼナルのルールですから。」

天馬

「司令官……ありがとうございます！」

ジルは笑顔で答え、静かにその場から歩き出した。天馬は頭を下げ、エマはマナの光で紙袋を操りジルを追いかけた。そして輸送機が飛び立ち、アンジュと天馬はモモカと対面した。モモカは目から大粒の涙を流し笑っていた。

モモカ

「ここに……アンジュリーゼ様の御傍に、居ても良いのですか？」

アンジュ

「・・・私はアンジュよ。それから、私は天馬と看破してアナタを買ったの。だから、今は天馬の言うことも聞いてもらおうよ。」

モモカ

「はい、アンジュリーゼ様！」

モモカはアンジュに抱き着き、アンジュはモモカを優しく抱きしめた。彼女はアンジュリーゼと呼ばれるのにうんざりしていたが、それ以上にモモカと共に居られることが嬉しかった。

アンジュ

(・・・別にいつか、アンジュリーゼでも。)

アンジュは優しく微笑み、天馬も二人の笑顔につられ微笑んだ。

天馬

(守らなきや。アンジュさんと、アンジュさんの大切な存在を・・・。)

T  
o  
B  
e  
C  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
:

## E p. 08 / 不思議な夢の出来事

（墓地）

ある日の夜、アンジユは天馬とモモカと共に墓地を訪れた。二人の前には、アンジユと同じ第一中隊のメンバーだった3人の墓がある。

アンジユ

「《ココ・リーヴ》、《ミランダ・キャンベル》、そして第一中隊隊長だった《ゾーラ・アクスバリ》……。みんな、私が死なせてしまった兵士達……。」

天馬

「……。どんな人達だったんですか？」

アンジユ

「ゾーラ隊長は面倒見が良くて、サリアやヒルダ達第一中隊のみんなに慕われてたけど、彼女すっごいレズビアンだったの。」

モモカ

「・・・詳しくは聞かないでおきます・・・」

アンジュ

「ココとミランダは私の同期で、ミランダは面倒見のいいしつかり者。ココはミランダの友人で、12歳になったばかりだった。私が絵本に出てくる強く賢く美しいおとぎ話のお姫様に見えたみたいで、私にベタ惚れだったらしいわ。」

天馬

「・・・聞かせてくれませんか？亡くなるまでの経緯。」

アンジュ

「・・・私の初出撃の日、私は命令を無視して逃亡し国へ帰ろうとした。でもその時ココが、自分も魔法の国に連れてってほしいって言うてついてきたの。でもその直ぐ後、私達の真上にシンギュラーが開いて、ココがシンギュラーから出てきた大型ドラゴンの攻撃を受けて亡くなった。ミランダもその後、機体から放り出されてドラゴンの餌食になった・・・。」

モモカ

「そんな・・・。」

アンジュ

「私は恐怖のあまり錯乱して、ゾーラ隊長の機体にしがみついた。でもそれが命取りと

なって、私とゾーラ隊長は大型ドラゴンの攻撃を受けて墜落。ゾーラ隊長は戦死して、辛うじて生きてたのは私だけだった……。」

天馬

「アンジユさん……。」

アンジユ

「最初は、3人が死んだのは自分のせいじゃないって思い込んでた。でも、やっと分かったの。悪いのは現実を受け入れようとせず、元の世界に戻りたいと思っていた自分だつて。そしてあの時、天馬に言われて改心した。もう誰も死なせないって。でも、出来ることならもう一度、3人の笑顔を見たいって思うときがあるの。いつそのこと、過去の自分と入れ替わって3人を助けてあげたいって。」

天馬

「過去を振り返ってばかりじゃなく、前を向いて今どうするかを考えるのが重要です。過去に辛い経験をしたのなら、今後同じ経験をしないようにはどうすれば良いのか。それが重要です。司令官も言ってたじゃないですか。死んだ仲間の分もドラゴンを倒せて。」

アンジユ

「……そうね。」



天馬

「でも、正直俺もアンジユさんと同じ気持ちなんです。俺はその3人の事を全く知りませんが、出来ることなら俺も過去へ行って、3人を死の運命から守ってやりたい。」

アンジユ

「天馬・・。」

くアンジユの部屋く

アンジユ

「じゃあ、おやすみ。」

天馬

「おやすみなさい。」

モモカ

「おやすみなさい、アンジユリーゼ様。」

その後、3人は部屋に戻り、アンジュとモモカはベッドで眠りについた。

天馬

(もしも、過去へ行くことが出来たら・・・。)

天馬も椅子に腰掛け静かに眠りについた。

~~~~~

くデツキ カタパルトく

眠りについた天馬は夢を見ていた。夢の中で、彼はアルゼナルのデツキにいた。時刻は夜なのか、外は暗い。

天馬

(ここは、アルゼナル?)

天馬の周りには第一中隊のパラメイルがスタンバイしており、中には見慣れない紫色のアーキバスベースのパラメイルとグレイブを2機発見した。紫色のパラメイルには金髪の女性、グレイブ2機にはロングヘアーのアンジュと黒いライダースーツを着た緑色のショートヘアーの少女が乗っていた。さらに辺りには天馬達雷門メンバーのパラメイルの姿が見当たらない。

天馬

(どうなってるんだ？俺達のパラメイルどころか、アンジュさんのヴィルキスの姿も見えない。)

天馬はふと後に目を向ける。すると、白いライダースーツを着た藍色ツインテールで薄紫色の瞳の少女がいた。天馬は初めて今の自分を認識した。

天馬

(もしかして俺、この子のパラメイルになったの!?)

天馬は少女の乗るグレイブになっていたのだ。

???

『ゾーラ隊、出撃！』

謎の誰かの掛け声と共に、第一中隊は出撃。グレイブとなった天馬も少女と共に出撃した。

???

『モノホンのパラメイルはどうだ？振り落とされるんじゃないよ！』

???

「は、はいっ！」

天馬

（やっぱり俺、この子のパラメイルになってるみたい。）

第一中隊はゆつくりとフォーメーションを組み始める。すると突然アンジユのグレ

イブが左後方へ離脱し、サリアのアーキバスが追いかけた。

天馬

(アンジュさんのパラメイル、何処へ行くんだ?)

サリア

『アンジュ、もうすぐ戦闘区域よ!戻って!』

アンジュ

『私は、アンジュリーゼ・斑鳩・ミスルギです!私は、私の元居た国へと帰ります!ミスルギ皇国へ!』

天馬

(敵前逃亡し国へ帰ろうとする……。アンジュさんから聞いた話と同じ展開だ。)

すると突然、天馬のグレイブが機首を反転し、アンジュを追いかけた。

???

「アンジュリーゼ様!私も連れてってください!私も、魔法の国に!」

天馬

(魔法の国に憧れアンジュを追う少女。もしかして……。)

???

『何言ってるのココ！戻ってきなさい！』

もう1機のグレイブが後を追う。

天馬

(この人が、戦死した新兵の一人、ココ・リーヴ！)

ココがアンジュとサリアに追いついた途端、3人の真上にシンギュラーが出現。中から紫色の大型ドラゴンが姿を見せた。

天馬

(まさか……。)

ドラゴン

「ギャアアアアアアアア!!」

ドラゴンは真上から青い光を放ち、光はココの腹部とグレイブのボディを貫通。

ココ

「っ!？」

ココは身体を真っ二つにされ口から大量の血を吐き、グレイブはコックピットから真っ二つにされた。

天馬

(あ．．．あ．．．)

???

「ココ? ココーっ!」

ココとグレイブは共に海へと落ち、グレイブは爆発した。

ドカーン！

~~~~~

天馬

「わああああああ！」

天馬は目を覚まし飛び起きた。窓には日が差し込み、時計は5時丁度。アンジユもモモカも目を覚ましていない。

天馬

「今の、夢……だったのかな？」

~~~~~



く食堂く

その後、天馬は食堂で朝食を食べていたが、先程の夢の事を考えていたので食が進まなかった。

天馬

(さっきの、本当に夢だったのかな…)

隣にはアンジュとモモカ、そして機嫌の悪いエマがいた。

エマ

「あり得ない、あり得ないわ！人間がノーマの使用人になるなんて！ノーマは反社会的で好戦的で無教養で不潔で、マナの使えない文明社会における不良品なのよ！」

アンジュ

「ハイハイ・・・。」

エマがグダグダ言うのを他所に、モモカは空の皿を片付け次の料理を出した。

エマ

「モモカさん、アナタ自分が何をしているのか分かってるの？」

モモカ

「はい！私、とても幸せです！」

隣のテーブルには、サリア・エルシャ・ヴィヴィアン・神童・霧野・信助がいた。

信助

「モモカさん、よかったですね。アンジュさんと一緒に居られて。」

ヴィヴィアン

「うん！」

エルシャ

「はあく……」

エルシャは自分の通帳を見ながらため息をついた。

霧野

「どうしました？」

エルシャ

「もうすぐフェスタの時期でしょ？ 幼年部の子供達に、色々用意してあげたいって思ってるんだけど……。」

神童

「いわゆる、予算不足ですか……。」

サリア

「原因はアンジュね。何とかしなくちゃ……。」

ヒルダ

「どう何とかしてくれるのさ？」

一同のもとに、ヒルダ・ロザリー・クリス・剣城がやって来た。

ヒルダ

「どんな罰でも金で何とかするだろうね、あの成金姫。何より、アンタの言うことなんか

聞きやしないさ。」

サリア

「何が言いたいのか？」

ヒルダ

「ナメられてんのよあんた。ゾーラが隊長だったころは、こんなあり得なかつたじゃん。隊長かわってあげようか？」

サリア

「……。」

サリアは無言のまま席を立ち、食堂を離れた。

サリア

（みんな好き勝手言っちゃって。私だって、好きで隊長やってるわけじゃ…）

ロザリー

「……ん？」

ロザリーはふと天馬の姿が目に入った。

ロザリー

「天馬のやつ、調子でも悪いのか？」

信助

「今朝からあんな感じで、暗い表情を浮かべてるんです。」

クリス

「いつもは元気なのに。不気味……。」

劍城

「天馬……。」

劍城は心配そうな表情を浮かべた。

-----

くジャスミン・モールく

その後、アンジュ・天馬・モモカはジャスミン・モールへとやって来た。アンジュとモモカの寝間着を買うためだ。

アンジュ

「いつまでも下着で寝させるわけにいかないでしょ？」

モモカ

「私は別に構わないのですが。」

アンジュ

「私達が構うのよ。特に天馬は免疫低いんだから。」

天馬

「アハハ、申し訳ありません…」

アンジュは服を何着か選ぶと、モモカを連れて試着室に向かった。天馬はその間、ジャスミンのところに向かった。

ジャスミン

「何かお探しかい？」

天馬

「2段ベッドが欲しいんですけど、ありますか？」

ジャスミン

「組み立て前のでいいなら倉庫にあるよ。」

天馬

「分かりました。ありがとうございます。」

—————

く ジャスミン・モール 倉庫く

倉庫にやって来た天馬は、組み立て式2段ベッドを探した。

天馬

「・・・あつた！」

偶然にも、お目当ての品は入り口から近いところに置いてあつた。

天馬

「台車無いかな？」

天馬は運び出すため台車を探した。すると・・・。

「愛のパワーを集めてギュツ！恋のパワーでハートをキュン！」

天馬

「ん？？」

近くで女の人の声がした。声を辿っていくと・・・。

サリア

「美少女聖騎士、プリティ・サリアン！あなたの隣に突撃よ！」

そこにいたのは魔法少女のコスプレをしたサリア。衣装の感じからして、桃髪ツイン



テールのあの人を連想しなくもない・・・。

サリア

「はあく、やっぱりこれ、癒される。よし、次いくわよ！」

サリアはステッキを振り回し魔法を発動。

サリア

「シャイニング・ラブエナジーで、私を大好きになあれ！」

ガンツ！

天馬

「あたっ！」

サリア

「っ!?!」

突然、近くにはいた天馬の頭上から一斗缶が落ち、天馬の頭に当たった。サリアは声に気づき駆け寄った。

サリア

「て、天馬!?!」

天馬

「イテテテテ．．．あ、サリアさん．．．何してるんですか？」

天馬はサリアのコスプレ姿を見て首を傾げた。サリアは赤面しながら腕で体を隠した。

サリア

「これは、その．．．趣味って言うか、過度のストレスによって傷ついた私の心を癒す、精神的メンテナンスみたいなものよ!」

天馬

「まあ、皆には内緒にしときますから。それに丁度よかった。ちよつと頼みがあるんですけど．．．。」

サリア

「た、頼み？」

天馬

「戦死したゾーラ隊長と新兵のココさんとミランダさんの顔写真、後程見せていただけないでしょうか？」

サリア

「いいけど、何で？」

天馬

「ちよつと確かめたい事がありまして……。」

サリア

「わかったわ、夜までには用意するわね。」

天馬

「ありがとうございます。では……。」

天馬はその場を離れ、台車探しに戻った。この後アンジュがサリアの秘密を知り、後に風呂場で大乱闘となったのは言うまでもない。

くアンジユの部屋く

夜、天馬は2段ベッドを組み立て終え自分のベッドで横になりながら、サリアから受け取ったゾーラ・ココ・ミランダの写真を見ていた。

天馬

(やっぱり、夢で見た人達と同じだ。どうなってるんだろう……。)

2段ベッドの上の段にはアンジユが毛布を被って眠り、下の段ではモモカがアンジユの反省文を書いていた。

天馬

「……俺、散歩してきます。」

天馬はベッドから降り、部屋を出た。

モモカ

「行ってらっしゃいませ。」

くグラウンドく

天馬はグラウンドを訪れ、ベンチに座り込んだ。

天馬

「・・・。」

天馬はいつの間にか眠りについた。

く太平洋上く

しばらくして、天馬は再びココのグレイブになった夢を見た。

ゾーラ

『モノホンのパラメイルはどうだ？振り落とされるんじゃないよ！』

ココ

「は、はいっ！」

第一中隊はゆっくりとフォーメーションを組み始める。

天馬

「この間と同じ展開だ。」

ココ

「誰？」

ココが突然、目ををキョロキョロさせ何かを探し始めた。

天馬

「もしかして……。あーあー、聞こえますか？」

天馬は試しに喋ってみた。

ココ

「えっ？ねえ、誰なの？」

ココはまたもや何かを探し始めた。どうやら天馬の声が聞こえているようだ。

天馬

「どうやら、俺の声が聞こえてるみたいですね。」

ココ

「誰？ねえ、何処にいるの？」

天馬

「一言で言うなら、パラメイルからかな？」

ココ

「パラメールから？」

天馬

「俺は天馬。どういう成り行きかは知りませんが、俺は今あなたのパラメールになつて  
るみたいなんです。」

ココ

「えっ？ええっ!!？」

ゾーラ

『ココ、どうした？』

突然、ゾーラが通信してきた。

ココ

「い、いえ、何でもありません！」

ゾーラ

『まあいい、しくじるんじゃないよ！』



ゾーラは通信を切断した。すると突然アンジュのグレイブが左後方へ離脱し、サリアのアーキバスが追いかけた。

サリア

『アンジュ、もうすぐ戦闘区域よ！戻って！』

アンジュ

『私は、アンジュリーゼ・斑鳩・ミスルギです！私は、私の元居た国へと帰ります！ミスルギ皇国へ！』

すると突然、ココがグレイブの機首を反転させアンジュを追いかけた。

ココ

「アンジュリーゼ様！私も連れてってください！私も、魔法の国に！」

ミランダ

『何言ってるのココ！戻ってきなさい！』

ミランダがココの後を追い、ココがアンジュとサリアに追い付いた途端3人の真上にシンギュラーが出現。中から紫色のガレオン級大型ドラゴンが姿を見せた。

天馬

「左に寄って！」

ココ

「えっ？」

天馬

「早く！」

ココ

「は、はいっ！」

ココは天馬の指示に従い機体を左に寄せた。すると・・・

バシユーン！

グレイブの直ぐ右を青い光が通り過ぎ、3機がシンギュラーを通過した途端、ガレオ

ン級大型ドラゴンがシンギュラーから本体を現し、同時にスクウナー級ドラゴンが多数出現した。

アンジュ

「なに…これ…」

『ドラゴン補足。ガレオン級1、スクウナー級22。』

ロザリー

「22!?!」

ヒルダ

「つたく、うじゃうじゃ出てきやがって…」

ゾーラ

「総員聞け。新兵教育は現時刻をもって中止。まずはカトンボ共を殲滅し、航空優勢を確保する。全機駆逐形態。」

第一中隊はパラメイルをアサルトモードに変形させた。

サリア

「命令違反の処分は？」

ゾーラ

「後にしろ！」

サリア

「イエス・マム。」

サリアはアーキバスをアサルトモードに変形させ第一中隊のもとに向かった。

ミランダ

「隊長、私達は？」

ゾーラ

「こつちが片付くまで生き残りな！砲撃開始！」

ダダダダダダダダダダダッ！

バーン！ バーン！

第一中隊は一斉に砲撃を開始し、スクウナー級ドラゴンを次々に撃ち落としていく。すると、またしてもアンジユが進路を変えその場を離れようとした。

ミランダ

「アンジユ、何処行くの!?!」

ミランダとココは直ちにアンジユを追いかけた。

アンジユ

「帰ります！ミスルギ皇国に!」

ミランダ

「本気で言ってるの!?!燃料は戦闘1回分しか積まれてないんだよ!アンタの国が何処だか知らないけど、たどり着けるわけ無いじゃん!」

アンジユ

「それでも構いません!戦いに戻らずに済むのなら!」

アンジュはエンジンを吹かし、その場から離れた。

ココ

「アンジュリーゼ様、待って！」

ココとミランダはアンジュを追いかけた。

ミランダ

「ココー！アンタ、何夢見てるんだよ!?何が魔法の国だよ！私達はノーマなんだぞ！」

ココ

「でも・・・！」

ドラゴン

「ギャアアアアアア！」

ドンツ！

突然、ミランダのグレイブの上からドラゴンが突進。ミランダは機体から放り出された。

ミランダ

「た、助けてええええ！」

ミランダとグレイブは海へと落ちていく。

ココ

「ミランダー！」

天馬

「エンジン全開で急降下だ！」

ココ

「はいっ！」

ココは急降下開始と共にエンジンを全開にし、落下していくココを追いかけた。ココと並走するように、1体のスクワナー級ドラゴンが口を開け追っていた。

ココ

「お願い、間に合つて！」

ココはミランダの下へ回り込み、ドラゴンに捕まる直前でミランダをコックピットに乗せた。ココは直ぐに舵を引き上昇。ミランダのグレイブは海へと墜落し爆発した。

ココ

「危なかつたあ……」

ミランダ

「ありがとう、ココ！」

すると、今度はアンジュにスクウナー級ドラゴンが襲いかかってきた。

アンジュ

「いやあああああ！」



アンジユはグレイブをアサルトモードに変形させ逃げ回る。ココとミランダはアンジユの後を追いかけた。

ダダダダダダダダダダダッ！

一方、第一中隊はスクウナー級ドラゴンを全て撃ち落とし、ガレオン級ドラゴンと戦っていた。

ゾーラ

「あとはお前だけだよ、デカブツ！総員、氷結パレット装填！」

第一中隊のパラメイルは左腕に氷結パレットを装填し、ガレオン級ドラゴンへと突っ込む。

ドラゴン

「ギャアアアアアア！」

ドラゴンは自身の身体から光の球を無数に出現させ、第一中隊に向かって放った。第一中隊は光の球を避けながらドラゴンの胸部に次々と氷結バレットを発射していく。

ゾーラ

「こいつで仕舞いだ！」

そしてゾーラのアーキバスが止めを刺そうとしたその時……。

アンジュ

「いやあああああ！」

アンジュのグレイブが助けを求めしがみついてきた。

アンジュ

「た、助けてええっ！」

ゾーラ

「何しやがる、離れろ！」

アンジユとゾーラがもめている隙に、ドラゴンはゾーラの後方で右翼を大きく振り上げた。

ゾーラ・アンジユ

「っ!?!」

ミランダ

「隊長! アンジユ!」

天馬

「アサルトモードで二人の横っ腹に突っ込むんだ!」

ココ

「はいっ!」

ココはグレイブをアサルトモードに変形させ、エンジン全開で突っ込んだ。

ミランダ

「えっ? ちょっとココ!?!」

ドンツ！

ココのグレイブは2機の横っ腹に突っ込み、3機はドラゴンの正面から退避。その直後ドラゴンは右翼を振り下ろした。

ビューー！

アンジユ・ココ・ミランダ・ゾーラ

「うわあああああああ！」

3機は突風に巻き込まれ、遥か彼方へと消えた。

ヒルダ

「ゾーラ!!」

-----

く無人島く

気がつくと、4人はパラメール3機と共に無人島の浜辺に打ち付けられていた。パラメール3機は大破しコックピットがむき出しになっている。全員重傷だったが、一命はとりとめた。

アンジユ

「うっ・・・ここは？」

ミランダ

「私達、助かったの・・・？」

ゾーラ

「どうやら、命だけは落とさずに済んだようだな・・・。」

ココ

「みんな・・・。」

天馬

「よかった、みんな無事みたいですわね。」

アンジュ・ゾーラ・ミランダ  
「っ!？」

アンジュ・ゾーラ・ミランダは天馬の声に気付き、辺りを見回した。

ゾーラ

「おい、誰かいるのか？」

天馬

「本当に、本当によかった・・・。」

ヒュウウウウ・・・

コックピットのモニターが落ち、ココのグレイブは完全に機能を停止した。

ミランダ

「今の声、もしかしてパラメイルから・・・？」

ココ

「分からない。けど、1つだけ分かったことがある。」

あの人、私達を助けてくれた……。」

~~~~~

くグラウンドく

天馬

「う、うくん……」

天馬は眠りから目を覚ました。目の前には何故かマスクとマフラーとどてらを身につけたアンジユとモモカ、そしてヒルダと剣城を除く第一中隊のメンバーが集まっていた。時刻は正午である。

天馬

「皆さん。」

アンジユ

「昨日の夜から帰ってないと思えば、こんなところで寝てたの？」

天馬

「すみません……て言うか、何ですかその格好？」

モモカ

「実は今朝から風邪をひいてしまわれたのですが、アンジュリーゼ様がどうしても任務に参加すると聞かないものでして、私が着せたんです。」

アンジユ

「仕方ないでしょ。あなたの生活を養うにはお金が要るんだから。」

天馬

「もしかして、俺が眠ってる間に……。」



サリア

「とつくに終わってるわよ。」

アンジュを除く一同の手には大量の札束が握られていた。

ロザリー

「残念だったなあ。寝坊さえしてなきや、お前も大金ゲット出来てたのに。」

クリス

「でも、この大金を手にできたのはアンジュのお陰なんだ。」

天馬

「アンジュさんの?」

サリア

「実はね……。」

サリアは今回のドラゴンとの戦いについて説明をした。第一中隊は今回、過去に遭遇歴の無いドラゴン、通称《初物》に遭遇した。だがその初物の重力攻撃により絶体絶命のピンチにまで追い込まれるが、アンジュがドラゴンの重力攻撃を無効化してくれたお

陰で助かったと言う。

天馬

「・・・なるほど。」

神童

「で、大金を手にする事が出来たお陰でロザリーさんとクリスさんとは和解出来たんだが、ヒルダさんは裏切られたと思いい込んで姿を消したんだ。」

天馬

「そうだったんですか・・・」

霧野

「まあ、ヒルダさんには劍城が傍に居るから問題無いだろう。」

「へー、あのヒルダが男と一緒にとはねえ。」

突然、あまり聞き覚えの無い女性の声が聞こえてきた。一同が声のする方向を見ると、そこに居たのは・・・。

サリア

「ゾーラ隊長。」

そこに居たのは、ゾーラ・ココ・ミランダの3人のだった。

ロザリー

「ゾーラ姉様！身体はもういいんですか？」

ゾーラ

「ああ、この通りピンピンだよ！」

天馬

「えええっ!？」

天馬はゾーラ達を見て驚き、ベンチから立ち上がった。

天馬

「ゾーラ隊長にココさんにミランダさん!？」

ゾーラ・ココ・ミランダは、見ず知らずの人に名前を呼ばれ戸惑っている。

ロザリー

「そういえば天馬達男軍団は会うの初めてだよな？元パラメイル第一中隊隊長のゾーラお姉様と、新兵のココとミランダ。お前達が来る前、3人はドラゴンとの戦いで重傷を負って入院中だったんだ。」

天馬

「で、でも3人って確か…」

ココ

「…ん？その声、何処かで…あつ！」

ココは何かを思い出したかのように目を見開いた。

ココ

「もしかして、私のパラメイルの中にいた天馬さん？」

ココの突然の発言に、その場にいた全員が驚いた。

ヴィヴィアン

「天馬がココのパラメイルの中にいたあ!？」

エルシャ

「ねえ天馬君、どういうこと？」

天馬

「俺にも何が何だか全く分からないんですけど、実は俺、夢を見ていたんです……。」

天馬は眠っている間に見た夢の中の出来事について話した。

ゾーラ

「うくん……」

ミランダ

「彼の夢の内容と、私達の経験と一致する点が多いですね。」

ゾーラ

「まさかとは思うけど、彼が夢の中でココのパラメイルに乗り移って、私達を助けたと言

うのかい？」

アンジユ

「信じられないわね。」

ココ

「私は信じます！」

ココは天馬に近寄り、天馬の左腕にしがみついた。

ココ

「天馬さんが夢の中で、私達を助けてくれた！それ以外にどんな理由があるんですか？」

ゾーラ

「ま、まあ確かに他に理由は無いが……」

ココ

「……私、天馬さんにずっとお礼が言いたかったんです。助けてくれて、ありがとうございます！」

天馬

「ココさん……。」

ロザリー

「・・・まあアレだ。こうして3人が無事に帰って来たんだから、過去はどうあれ結果良ければ全て良しってやつで！」

ゾーラ

「それもそうだね。」

と、ゾーラはアンジュの肩に手を置いた。

ゾーラ

「アンジュ、せっかくだし後でこの間の続きとでもいこうじゃないか？」

アンジュ

「えくつと・・・それだけは勘弁してええええ！」

アンジュは逃げ出し、ゾーラが追いかけて、さらにモモカが後を追う。3人は第一中隊の周りをぐるぐる走り回った。3人の行動を見て第一中隊は自然に笑顔になり、次第に笑い声が聞こえてきた。



くアンジユの部屋く

その日の夕方、アンジユ・天馬・モモカは寝室にいた。アンジユはゾーラに捕まらな  
に済み、おまけに熱も下がった。

アンジユ

「まったく、酷い目に会った…」

天馬

「でも良かったじゃないですか。走り回ったお陰で熱も下がりましたし。」

モモカ

「そうですよ。・・・ん？」

突然、モモカが何かを感じ取った。



アンジュ

「どうしたの？」

モモカ

「マナの通信です。これ、皇室の極秘回線!？」

アンジュ・天馬

「えっ!？」

モモカは直ちに回線を繋いだ。

『モモカ、聞こえる!？』

モモカ

「シルヴィア様！」

アンジュ

「シルヴィア!？」

アンジュは声を聞いて驚いた。モモカの通信の相手はアンジュの妹、シルヴィアだった。

天馬

「シルヴィア様って確か、アンジュさんの妹の。」

アンジュ

「ええ、ミスルギ皇国の第二皇女よ。」

シルヴィア

『アンジュリーゼお姉様には会えた？そこにお姉様は居るの？・・・だ、誰!？』

アンジュ・モモカ・天馬

「っ!？」

シルヴィア

『助けてお姉様!アンジュリーゼお姉様ああ!!』

ザザザザザザザザ・・・

通信は途中で途切れた。

アンジュ

「シルヴァア…」

T  
o  
B  
e  
C  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
:

## E p. 09 / 鋼のガールフレンド 《前編》

くアルゼナル グラウンドく

アンジユが第一中隊と和解した日の翌日、天馬はアンジユ・ゾーラ・ココ・ミランダと共にグラウンドの端でサッカーのパス練習を行っていた。

天馬

「足の裏を使って、蹴る。」

アンジユ

「よっ。」

トンッ

アンジユはゾーラに向かってパスし、ゾーラはボールを受け取った。

天馬

「そうそう！アンジユさんスゴく上手くなりましたよ！」

アンジユ

「そう・・・かな？」

アンジユは天馬に褒められ少し照れた。

ゾーラ

「アンジユは新兵の中じゃ、基礎体力・運動神経・格闘対応能力・戦術論の理解度共に飛び級だったからなあ。この程度はお茶の子サイサイってか？」

ミランダ

「最初はドラゴンとの遭遇で泣き叫ぶくらいメンタル弱かったけどね・・・」

アンジユ

「アハハ、面目ない・・・」

アンジユは苦笑いをしたが、直ぐに表情を暗くした。

ミランダ

「妹さんのこと、考えてるの？」

アンジュ

「えっ？」

ココ

「今朝、モモカさんから聞きました。昨日の夜、アンジュリーゼ様の妹のシルヴィア様から助けを求める連絡があったと。」

アンジュ

「心配するだけ無駄よ。今の私には、どうすることも出来ないし……。」

ゾーラ

「そうだけどき、よっ。」

ゾーラは天馬に向かってボールを蹴る。だがボールは崖の方へ跳び、フェンスを越え崖から海へと落ちていった。

ゾーラ

「あ、ごめん……」

天馬

「いえ、お気になさらず・・・ん？」

天馬はふと海の方を見たとき、海の上に浮かぶ何かを発見した。目をこらしてよく見てみると・・・。

天馬

「人だ！」

ゾーラ

「えっ?」

天馬はフェンスを越え崖から飛び降り、海へと飛び込んだ。

ザバーン!

アンジュ

「天馬!」

天馬は直ぐ海面に姿を現し、泳いで漂流者のもとへと向かう。アンジュ・ゾーラ・ココ・ミランダはグラウンドを離れビーチへと向かった。

—————

くビーチく

ビーチに到着すると、天馬が漂流者を連れて泳いで向かっていた。アンジュはロープを結んだ浮き輪を持ち、天馬のもとへ泳いで向かった。

天馬

「アンジュさん！」

アンジュ

「これにつかまって！」

天馬は浮き輪につかまり、アンジュはロープを数回引きゾーラ達に合図を送った。



ゾーラ

「合図だ！ 思いつきり引つ張りな！」

ココ・ミランダ

「はいっ！」

ゾーラ・ココ・ミランダはロープを引つ張り、アンジュと天馬と漂流者を引き上げた。天馬は漂流者を砂浜に寝かせた。漂流者は少女で、エルシャとは少し異なる桃色の髪を両耳の上でお団子状にした後、髪留めから細く垂らし、後ろはポニーテール状に結わえトリプルテールをしていた。

ゾーラ

「脈がある。死んではないない。」

天馬

「アンジュさん。」

アンジュ

「わかったわ。」

アンジユは少女の口に自分の口を当て、人工呼吸を数回行った。

???

「・・・ゲホッ！ゲホッ！」

少女は意識を取り戻し、ヒルダとは異なるパープルの瞳が姿を現した。一同は少女が意識を取り戻したことにホッとした。

???

「・・・ここは、どこ？」

アンジユ

「よかった、意識が戻ったみたいね。」

???

「・・・あなたは？」

アンジユ

「私はアンジユ。あなたは？」

???

「私はナオミ。《ナオミ・東雲》……。」



〈指令部〉

ナオミはその後病室に搬送され、エマがナオミの情報を調べていた。

エマ

「ナオミ・東雲、14歳。先日エンデラント連合で発見された、1203—83号ノーマ  
です。」

ジル

「何故漂流していたんだ？」

エマ

「委員会からの情報ですと、彼女を運んでいた輸送機は昨夜、ハリケーンに巻き込まれて  
消息不明となったらしいんです。」

ジル

「なるほど。」

エマ

「それで、どうされますか？」

ジル

「まあ彼女がノーマである以上、ルールに基づきアルゼナルで保護します。」

エマ

「分かりました。でも、ちよつと変なんです。」

ジル

「変？」

エマ

「委員会から送られてきた情報によれば、彼女は……。」



くミーティングルームく

それからナオミの体力は無事に回復し、約1週間後に退院。同時にパラメイル第一中隊への配属が決定した。サリアは第一中隊メンバーをミーティングルームに集め、ナオミの紹介を行った。

ナオミ

「今日からこの第一中隊に配属になりました、ナオミです！よろしくお願いします！」

サリア

「パラメイル第一中隊隊長のサリアよ。で、副隊長のヒルダ、突撃兵のヴィヴィアン、軽砲兵のロザリー、重砲兵のエルシャとクリス、それからゾーラ元隊長、新兵のココとミランダ、アンジユ、天馬、剣城、神童君、信助、霧野君よ。」

ヴィヴィアン

「ふくん、随分と可愛い新兵さんだね。」

信助

「スタイルはアンジユさんに近いですかね。」

ナオミ

「一応お伺いしますが、天馬君達は男性ですよね？」

サリア

「ええ。ただどういう訳か男のノーマと断定されて、最近ここに放り込まれたの。実質、5人がノーマっていう事実は確定しているわ。」

ナオミ

「そうなんですか・・・。」

ナオミは天馬に目を向けると、天馬の隣に駆け寄った。

ナオミ

「天馬君、この間は助けてくれてありがとう！」

天馬

「こちらこそ、無事でなによりです。」

サリア

「それから言い忘れてたけど、ナオミはアンジュと天馬と共に同居してもらいます。」

天馬

「えっ?！」

アンジュ

「なんで？」

サリア

「彼女の希望よ。天馬に助けられた事を知ってから、どうも天馬に惚れてるらしいの。ベッドはジャスミンにお願いしてあるから、後で受け取ってちょうだい。」

天馬・アンジユ

「は、はあ…」

ギユツ

ナオミは天馬の右腕にしがみついた。

ナオミ

「これからよろしくお願いします！」

天馬

「よ、よろしく願います…」

天馬は苦笑いし、一同は微笑んだが…。

ココ

「ウウウウウウウ……。」

ココは後ろからナオミを睨み付け、赤黒いオーラを放っていた。

ミランダ

「ちよつと、ココ……？」

ガタンツ　ギユツ

ココは席を立ち、天馬の左腕にしがみついた。

天馬

「ええつ、ココさん？」

ココ

「……天馬さんは渡さない。」



ナオミ

「・・・その言葉、そのままお返しいたします。」

天馬は二人からプレッシャーを感じ冷や汗を流す。

霧野

「ココさん、どうしたんだ？」

神童

「ココさんも天馬に助けられた事を知ってから、身を寄せるようになったらしいんだ。」

アンジユ

「なるほど、これが若さか・・・。」

ロザリー

「いやアンタいくつだよ・・・」

アンジユのコメントにロザリーが突っ込んだ。すると・・・。

ゾーラ

「ああああ何だか痒い痒い！背中を通り越して尻が痒くなってきた！」

ゾーラが席を立ち尻をかきはじめた。

エルシャ

「大丈夫ですか？」

クリス

「もしかして痔なんじゃ・・・。」

ゾーラ

「それは断じて違う！」



くジャスミン・モールく

その後、天馬はベッドを受け取るためジャスミン・モールを訪れた。モールでは買い物客に混じってエルシャと霧野が後日開かれるフェスタの準備をしていた。

天馬

「こんにちは。」

ジャスミン

「おお、お前さんか。ベッドなら倉庫に用意してあるから好きに持っていくといいよ。」

天馬

「分かりました。それから、前に頼んでたヤツ届いてます?」

ジャスミン

「ああ、メイに依頼してパラメイルに装着済みさ。」

天馬

「分かりました。ありがとうございます。」

—————

く ジャスミン・モール 倉庫 く

倉庫に来てみると、以前2段ベッドが置いてあった場所に同じタイプの2段ベッドが

置いてあった。

天馬

「え〜つと、台車何処にあつたつけ？」

天馬は台車探しに向かった。すると・・・。

「えつと…恥ずかしくもないですか、これ？」

「何言ってるの？二人とも超可愛いわよ！」

「そうですけど、これは…！」

倉庫の何処から3人の女の人の声がした。声を辿っていくと、魔法少女のコスプレをしたサリア。さらに桃色の猫(?)の着ぐるみをしたナオミと、水色の猫(?)の着ぐるみをしたココを発見した。

天馬

「サリアさん、何やってるんですか？」

天馬が声をかけると、サリアは声に気付き振り向いた。ナオミとココは顔を赤くしてモジモジしている。

サリア

「天馬、ちようど良かったわ！これ見てくれる？」

天馬

「これって、着ぐるみ？猫・・・ですか？」

サリア

「魔法少女と謎の生き物は、いつだってセットなの！常識でしょ？」

確かに謎の生き物が出てくる魔法少女作品は多いが…

サリア

「それで、どっちが似合ってると思う？」

天馬

「そうですねえ、二人とも可愛いですし、よく似合ってます。」

ナオミ

「そ、そう・・・？」

ココ

「あ、ありがとう・・・。」



く 食堂く

それから数分後、天馬は食堂で食事をしていたが・・・。

ナオミ

「どっちが1番可愛かったの？」

ココ

「ハッキリしてください！」

天馬

「え〜っと・・・どっちもじゃダメ？」

ナオミ・ココ

「ダメです！」

ナオミとココから迫られ食が進んでいなかった。近くの席からアンジユ・モモカ・ヒルダ・ゾーラ・剣城が様子を見ていた。

モモカ

「天馬さん、モテモテですね。」

アンジユ

「大変ね、モテる男って。」

ゾーラ

「ああああ！また尻が痒くなってきた！」

ゾーラは下半身をモジモジさせている。

ヒルダ

「大変だなあ……」

## 劍城

「やっぱり痔なんじゃ…」

ゾーラ

「だから違う！」

それからナオミとココが天馬の側を離れる事は無く…。



く露天風呂く

ある時は天馬が風呂に入っているとき。

天馬

「あの…二人ともちよつと近すぎじゃ…」

ココ・ナオミ

「そんなことありません♪」





くアンジユの部屋く

モモカ

「・・・あの、御二人とも自分のベッドで寝られては？」

ナオミ

「ここがいいです。」

ココ

「私も。」

そして挙げ句の果てには二人で天馬のベッドにまで押し掛けていた。

アンジユ

「そんなにベツタリ引つ付けてちゃ天馬が寝にくいでしょ？上のベッドが空いてるんだから、せめて二人が上で寝たら？」

ナオミ・ココ

「……は〜い。」

二人は仕方なく上のベッドに移動した。そして明かりを落とし、5人は眠りについた。



くパラメイル格納庫く

次の日、天馬・アンジュ・モモカ・ココ・ミランダ・ナオミはパラメイル格納庫を訪れた。目の前にはアンジュのヴィルキスト、新しくアブソープシールドを装備した天馬のペガサス。さらにナオミの乗るノーマルグレイブと、完全に修復され元通りになったゾーラのアーキバスゾーラ・カスタム。そして二人乗りに改造され機体のあちこちに10個のシールドビットを装備し、全体的に白と緑で塗装されたグレイブのカスタム機、グレイブココ・カスタムが置いてあった。

天馬

「ココさんのグレイブ、二人乗りに改修されたんだ。」

ミランダ

「ココがパラメイルの操縦を担当して、私が後部座席でリーダーと燃料と銃弾の監視及びビットの操作をするの。」

ナオミ

「私もいつぱい稼いで、みんなに負けなくらい強いパラメイルにしてくちゃー！」

アンジユ

「頑張ってるね、ナオミ。」

ナオミ

「はいっ！」

アンジユ

「でもって、天馬のこの盾は何？」

天馬

「アブソープシールド。ビームや電撃等のエネルギーを吸収して、溜め込むことが出来るシールドです。溜め込んだエネルギーは自身の稼働するためのエネルギーとして

使ったり、ソニックバレットにエネルギーを送って強力なビーム攻撃を放ったりと、色々出来ます。」

ココ

「何だかハイテクですねえ。」

すると……。

ジル

『パラメール第一中隊のメールライダー達に通達する。直ちに司令室へ集合せよ。繰り返し、直ちに司令室へ集合せよ。』

天馬

「司令官からの呼び出し?」

アンジユ

「何かあったのかしら?」

一同はジルの待つ司令室へと向かった。だがこの後、第一中隊は衝撃の真実を知ること

とになる。



司令室へ

数分後、第一中隊のメイルライダー全員が司令室に集まった。司令室にはジルの他に、エマとマギーもいる。

ジル

「皆集まったようだな。」

エマ

「みんな、早速だけどコレを見てくれる?」

エマはマナの巨大ディスプレイを出現させ、ある記事を写し出した。20XX年7月4日発行の、始祖連合国新聞の記事の一部だ。

アンジュ

「なになに・・・7月3日、エンデラント連合郊外にあるロボット工学研究所にて原因不明の爆発事故が発生。当時研究所で勤めていた職員は全員無事であったが、所長の《アキレス・東雲》33歳が爆発に巻き込まれ右腕を折る重傷。また所長と共にいた娘のナオミ・東雲ちゃん14歳が内蔵を損傷し意識不明の重体？」

ジル

「ああ。しかもこの1週間後、このナオミという少女は無くなっているらしい。」

ジルの発言に、第一中隊全員は驚いた。

ロザリー

「じゃ、じゃあナオミは？ここにいるナオミはいったい何者なんだ!？」

マギー

「真正正銘の、ナオミ・東雲さんだよ。だが、彼女はもう人間とは呼べない存在になっ  
てるんだよ。」

クリス

「人間じゃないから、アルゼナルに送られたんじゃないの?」

マギー

「いや、それ以上に面倒なのさ。」

マギーは一枚のレントゲン写真を見せた。

第一中隊

「・・・っ!？」

エマ

「・・・っ!？」

ナオミ

「うそ・・・。」

レントゲン写真を見た一同は驚愕した。レントゲン写真に写っていたのはナオミの身体だったが、いくつかの臓器が機械で構成されていた。

マギー

「こいつはいくつかの臓器が機械で作られた、言わば“サイボーグ”なんだよ。」

サリア

「サイボーグ？」

ヴィヴィアン

「サイボーグって何ぞ？」

神童

「体の一部を人工的な機器に置き換えた人間のことです。」

ナオミ

「私が、サイボーグ……。」

マギー

「恐らく娘を失うのが怖かったお前の親父さんが、お前さんの身体のダメージを受けた臓器を人工臓器に置き換え、蘇生させたんだろう。」

ナオミ

「わ、私は……。確かに私はお父さんの研究所で事故に巻き込まれて、それから約1年間意識不明だったとお母さんから聞きました。」

エマ

「自分がサイボーグだと、今まで知らなかったのね？」

ナオミ



「はい……。」

ナオミと第一中隊は動揺していた。

ロザリー

「まさか、ナオミがサイボーグだったなんて……」

エルシヤ

「不気味……」

ナオミ

「……。」



くビーチく

その後、ナオミは一人夕日の照らすビーチにいた。

ナオミ

「私は、サイボーグじゃない。私はノーマ。サイボーグなんかじゃない！」

ナオミは頭をおさえながら自分に訴えていた。そこへ……。

天馬

「ナオミさん……。」

天馬とココ、アンジュとモモカがやって来た。

ナオミ

「天馬君、ココさん、アンジュさん、モモカさん……。」

四人はナオミを中心に座り込んだ。

モモカ

「信じられないんですか？自分がサイボーグだって。」

ナオミ

「信じられないんじゃないやなくて、そう思いたくないの。今まで人間と思つて生きてきたのに、急にあんな事を聞かされて、信じられると思う？」

アンジュ

「無理ね……。私も少し前まで人間の皇女として生きてたけど、急にノーマ扱いされてここに放り込まれたから……。」

天馬

「……。ナオミさんは立派な人間ですよ。」

ナオミ

「えっ?！」

天馬

「俺の友達に、以前突然変異で特殊な力を持つて生まれてきた人達がいて、周りから怪物扱いされていました。彼は自分達が未来のために生み出された優れた存在だと世界に認めさせるため、俺と俺の仲間達と戦つて、その時彼に言ったことがあるんです。どこが違うの? 優れていてもいなくてもみんな同じ人間でしょ? 一人一人違つて当然だよつて。」

ココ

「言われてみれば……。」

天馬

「マナが使えないノーマであつても、身体の臓器を機械にされても、こうやって人としてこの世に生まれ、こうやって対話ができ、相手のことを思い、身体の中には赤い血が流れている。人間じゃなきゃあり得ないことです。だからナオミさん、あなたは列記とした一人の人間です。」

ナオミ

「人間……。」

天馬

「外の世界の人たちは皆、俺たちノーマを人間じゃないって言いますけど、本当に人間じゃないなら俺たちと同じ、泣いたり笑いあう事だつて出来ない。悩んだり苦しんだりすることも、感情がある人間の証です。ナオミさんがどんなだろうと、ナオミさんはナオミさんです。パラメイル第一中隊のメイルライダーで、俺とアンジュさんとモモカさんのルームメイトで、俺たちと同じ人間で、俺たちの仲間であるナオミさんです！」

ナオミ

「天馬君……。」

モモカ

「天馬さんの言うとおりですよ、ナオミさん。」

アンジュ

「そういうことだから、元気出しなさい。あんたがどんなだろうが、私たちは仲間でしょう？」

ナオミ

「仲間……。」

天馬・アンジュ・モモカ・ココはナオミに笑顔を見せ、ナオミも少し微笑みかけた。すると……。

ビーー！ビーー！ビーー！

『第一種遭遇警報発令！パラメイル第一中隊、出撃準備！』

アンジュ

「まったく、タイミング悪いわねえ……」

ココ

「行きましょう。」

アンジュ・モモカ・ココは立ち上がり、ビーチを後にした。

天馬

「ナオミさん、俺たちも行きましょう。」

天馬もその場で立ち上がった。

ナオミ

「待って。」

天馬

「はい?」

ナオミは立ち上がり、天馬の方に顔を向けた。

ナオミ

「天馬君、ありがとう。私、少し自信が持てた。私は、一人の人間だって！」

天馬

「ナオミさん……。」

ナオミ

「それで、えつと、その……。」

ナオミは言葉を詰まらし……。

ナオミ

「天馬君、私と友達になってください！」

天馬

「……俺たち、もう友達ですよ。」

ナオミ

「えっ？」

天馬

「友達っていうのは、なろうと言つてなるものじゃありません。こうやって言葉を交わ

し、思いをぶつけ合ううちに、いつの間にかなるものなんです。だから、俺たちはもう友達です！」

ナオミ

「・・・うん！それから、私のことは」ナオミさん「じゃなくて、」ナオミ「って呼んで。それから、今後はタメ口でかまわないから。」

天馬「・・・じゃあ、今後ともよろしく、ナオミ！」

ナオミ

「うん！」

ナオミと天馬は笑顔を見せ、二人は急いで格納庫へと向かった。



# E p. 09 / 鋼のガールフレンド 《後編》

く 太平洋 上空く

第一中隊は夜の海を飛行し、シンギュラーの発生ポイントに向かっていった。

クリス

「ねえナオミ。」

ナオミ

「何ですか？クリスさん。」

クリス

「さつきはごめん、アンタのこと不気味だなんて言つて…」

クリスは気まずい表情を浮かべた。だが、ナオミは笑顔で答えた。

ナオミ

「気にしないでください。私、もう大丈夫ですから。」

ロザリー

「・・・なんか少し雰囲気変わったなあ。何かあったのか？」

ゾーラ

「コラ、もう隊長じゃないから言える口じゃないかもしれないけど、私語はその辺にしときなよ。」

『シンギュラーまでの距離、約200000。』

サリア

「全機、セーフティー解除。ドアが開くぞ！」

第一中隊の前に紫色の雷が光り、シンギュラーが開いた。シンギュラーの中からガレオン級大型ドラゴン3体と、スクウナー級ドラゴンが大勢出現した。

ヒルダ

「ウジャウジャ出てきやがった！」

ゾーラ

「今まで幾度となくドラゴンと戦ってきたけど、一度にこれだけ多くのドラゴンと遭遇したことは無いぞー！」

『ドラゴン補足。ガレオン級3、スクウナー級77。』

エルシヤ

「ガレオン級3にスクウナー級77!?」

神童

「物凄い数だな…」

サリア

「まずは小さいドラゴンから落としていくわよ！」

第一中隊はライフルを装備し発砲。

ダダダダダダダダダダ!

ミランダ

「行きなさい、シールドビット！」

ミランダはシールドビットを飛ばしオールレンジ攻撃。スクウナー級ドラゴン数体を落とした。

「ギャアアアアア！」

ガレオン級ドラゴン3体は口から光線や電撃を放ち第一中隊を攻撃。第一中隊は攻撃をかわし、天馬のペガサスはアブソープシールドを展開し攻撃を吸収した。

《ENERGY FULL—CHARGE》

天馬

「よし、デイスチャージだ！」

ガシヤン！



「ギャアアアアア！」

天馬

「っ!?!」

仲間を倒されたことに怒り、スクウナー級ドラゴン数体がペガサスに照準を絞り襲いかかってきた。ペガサスは機敏に動きドラゴン達を避けるが・・・。

ガンツ！ バンツ！

天馬

「どわあ!?!」

ドラゴンからのタックルを食らい、ペガサスはバランスを崩した。

天馬

「くそっ！」

ゴオオオオオオオオツ!!

天馬は直ぐペガサスの体制を立て直し、空中で静止した。

天馬

「ふう…危なかった…」

だが安心したのも束の間だった。

「ギャアアアアア！」

後方からガレオン級ドラゴンが襲い掛かってきた。

天馬

「っ!?!」

ナオミ

「天馬君！」

ガツンツ！

ナオミのグレイブはサイドからペガサスにアタックし進路を変えた。アタックの拍子にペガサスはバランスを失ったが、天馬がペガサスのエンジンを操作し体制を立て直した。

ガシヤン！

ナオミ

「きやああああ！」

だが、ナオミのグレイブがガレオン級ドラゴンに捕まった。

天馬

「ナオミ！」



天馬はペガサスをフライトモードに変形させガレオン級ドラゴンを追いかける。ガレオン級ドラゴンは自身の身体から光の球を無数に出現させ、ペガサスに向かって放つた。

天馬

「このっ！」

ペガサスは光の球を避けながらガレオン級ドラゴンを追いかける。

ナオミ

「天馬君！私のことは気にしないで、ドラゴンを倒すことに専念して！」

天馬

「そんなわけにいかないよ！」

ダダダダダダダダダ！

天馬はペガサスをアサルトモードに変形させ、マシンガンを乱射しガレオン級ドラゴンを攻撃。だが……。

ガシヤン！

天馬

「なにっ!？」

「ギヤアアアアア！」

ペガサスはもう一体のガレオン級ドラゴンに捕まった。

信助

「天馬とナオミさんがドラゴンに捕まった！」

神童

「何だどっ!？」

ココ

「隊長、今すぐ天馬さん達を助けに！」

サリア

「わかったわ。全機、天馬とナオミの救出に向かうわよ！」

『イエス・マム！』

第一中隊は天馬とナオミの救出へと向かう。

「ギャアアアアア！」

だが、前方にスクウナー級ドラゴンが壁を作り行く手を塞いだ。

アンジユ

「アンタ達に構ってられないのよ！」

ダダダダダダダダダダ！

天馬

「みんな…」

ドカーン！

突撃、ペガサスの頭上で爆発音が響き、ペガサスがドラゴンの手を離れ落下。天馬はペガサスのエンジンを操作し、海面ギリギリで静止した。

天馬

「な、何だ!?!」

天馬は上空に目を向ける。すると、ナオミのグレイブが天馬の捕まっていたガレオン級ドラゴンにライフルを向けていた。

天馬

「ナオミ。」

ナオミ

「天馬君！今のうちにドラゴンを！」

ガンツ！

ナオミ

「キャツ！」

「ギャアアアアア！」

ガレオン級ドラゴンはグレイブを握り潰そうとしていた。

天馬

「ナオミ!?!」

ナオミ

「天馬君・・・後は、頼んだわよ！」

ガシャーン！

天馬

「っ!？」

ナオミのグレイブは握り潰されバラバラになり、海へと落ちていった。

天馬

「ナオミ……うわああああああ!!」

キイイイイインツ!

突然、ペガサスの目が黄色から赤に変わり、ボディと翼が徐々に白から赤へと変色した。

アンジュ

「……っ!?!ちよつと、みんなあれ!」

アンジュはペガサスの異変に気付き、第一中隊一同はペガサスの姿を見て仰天した。

霧野

「ペガサスが……。」

ヴィヴィアン

「赤くなつた！」

ダダダダダダダダダダダッ！

ペガサスは頭上のガレオン級ドラゴンにソニックバレットを向け発砲。弾は全てドラゴンに命中し、ドラゴンは身体から大量の血を吹き出し海へと沈んだ。

天馬

「……！」

すると今度は第一中隊の交戦する高度まで上昇し、翼を羽ばたかせスクウナー級ドラゴン達に向けて突風を起こす。

ビューー!

ズパツ!ドピユツ!

突風を受けたスクウナー級ドラゴンの身体中に無数の切り傷が現れ、スクウナー級ドラゴンは大量の血を吹き出しながら次々と海へと落ちていった。

ヒルダ

「何だ!?何が起きやがった!?!」

ゾーラ

「こりやきつとカマイタチだ。」

ココ

「カマイタチ?」

ゾーラ

「風が作り出す真空の刃。何も触れていないのに突然、刃物で切られたような傷がつかつていう現象だ。おそらくペガサスが翼を羽ばたかせたときに、突風と一緒にカマイタチを発生させたんだ。」



「ギヤアアアアア！」

ペガサスに恐怖したのか、生き残ったスクウナー級ドラゴン数体とガレオン級ドラゴンは急いでシンギュラーへと引き返す。だが、ペガサスがガレオン級の前に立ち塞がった。

天馬

「お前だけは・・・絶対に許さない!!」

「ギヤアアアアア！」

ガレオン級ドラゴンは口から電撃を放ちペガサスを攻撃。ペガサスは電撃を避けながらドラゴンの懐へと突っ込む。

天馬

「はあああああああつ！」

グサツ！

天馬はペガサスの右腕をドラゴンの胸の中心に突き刺した。

「ギャアアアアア！」

天馬

「でやあああああ！」

グシヤツ！

ペガサスはドラゴンから心臓を抉り取った。ドラゴンは動きを止め海へと沈んだ。

天馬

「ハア…ハア…」

ペガサスのボディは徐々に白へ戻り、目も赤から黄色へと戻った。第一中隊は未だ仰天している。

ロザリー

「すっげえ…」

クリス

「何だか、怖い…」

サリア

「天馬、大丈夫？」

天馬

「サリア隊長、俺、ナオミを…」

『ザザザザザザザザザザ．．．もしもし、誰か応答願います。』

突然、何処かから通信が入った。

天馬

「ナオミの声に似てる…」

『誰か応答してください。こちらナオミです。』

天馬

「っ!？」

天馬はふと下を見た。すると、海に浮かぶグレイブの残骸の上から手を振る、桃色の髪の人影を見つけた。

天馬

「ナオミ！無事だったんだ！」

ナオミ

『うん。グレイブは完全にバラバラになっちゃったけど、運良く助かったみたい。誰か、救助をお願いします。』

サリア

『了解！』

天馬

「良かった…ナオミが無事で…」

天馬はホツと笑顔になり、第一中隊はナオミとグレイブの残骸を回収しアルゼナルへと戻った。帰還後、ナオミはマギーに治療を受けたが、機体をバラバラに破壊されたわりに傷は軽症で、少しの治療で済んだという。



くデツキ カタパルトく

次の日の夕方、第一中隊はジルとマギーを呼びデツキに集まった。一同の前にはペガサスがガレオン級ドラゴンから抉り取った巨大な心臓がある。

天馬

「よし、じゃあ始めますよっ？」

ジル

「ああ、頼む。」

シヤキン！

天馬はナイフを片手に心臓の解剖を始めた。

マギー

「しっかし、いったいどうやって心臓を抉り取ったんだ？」

サリア

「私達にも分からないの。ガレオン級にナオミのグレイブを落とされて、その後天馬が叫んだと思ったら、ペガサスが急に赤色に変わって、マシンガンでガレオン級を落とすわカマイタチを起こしてスクウナー級を一度に大量に殺すわ、最後にはナオミのグレイブを破壊したガレオン級から心臓を抉り取るわで、もう何が何だかさっぱり……」

ジル

「そうか。」

ジャララララララッ！

突然、心臓の中から赤い結晶が大量に出てきた。

天馬

「なんだこれ？」

解剖をしていた天馬と第一中隊一同、さらにジルとマギーは各々欠片を手を取った。

アンジユ

「なにこれ？ 宝石？」

ココ

「きれい…」

ヴィヴィアン

（なんだろう、この石を持つてると不思議な気分になってきた。）

エルシヤ

「ドラゴンの心臓からこんなものが出てくるなんて、知らなかったわ。」

神童

「触った感じは特に害は無さそうだな。」

モモカ

「ですが、何だかマナに近いような力を感じます。」

天馬

「マナに近い力……。」

—————

くグラウンドく

その後、ドラゴンの心臓と謎の赤い結晶は研究サンプルとして保管されることとなった。その日の夜、天馬はアンジュと共にグラウンドのベンチに腰かけていた。

天馬

「ドラゴンを氷付けにして、遺体を回収する理由……。そしてドラゴンの心臓から出てきた、マナに近い力を放つ赤い結晶……。俺たち、ドラゴンについて何一つ知らないんですね……。」



アンジユ

「ドラゴンを倒すことだけ命じられて、他は何も教えてもらえなかった。きつと、司令は何か隠してるに違いないわ。私たちに知られたくない秘密を……。」



〈司令室〉

同じ頃、司令室ではジルが一人考え事をしていた。

ジル

（まさか、あいつらのパラメイルがラグナメイルと同等か、それ以上の力を秘めていると言うのか？・・・まさかな。いくらパラメイルを強化しても、ラグナメイルの性能に敵うまでには至らない。だがサリアの情報と私の勘が確かなら、リベルタスの大きな戦力になるのは間違いない。もう少し、様子を見てみるとしよう。）

ジルは席を立ち、部屋の灯りを消し司令室を後にした。

バ  
タ  
ン  
ツ

T  
o  
B  
e  
C  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
:

## E p. 10 / アルゼナル脱走計画

〜ビーチ フェスタ会場〜

ある晴れた日のこと、ビーチではアルゼナル恒例、年に1度だけの公休兼お祭りである《マーメイド・フェスタ》が開催されていた。会場では様々な屋台や露店が軒を列ね、映画館にエステ、さらに豚レースやメリーゴーランド等のアトラクションが設置され、さらにメリーゴーランドの近くでは二人のペロリーナが子供達に風船を配っていた。ノーマ達は色とりどりの水着姿をしていた。

アンジュ

「これがフェスタ？」

サリア

「年に1度だけ、人間達が私達ノーマに休みを与えてくれた日よ。」

ミランダ

「明日までは一切の訓練は免除。私達ノーマにとっては、たった1日だけのお祭りな

の。」

ゾーラ

「過酷な明日を生き抜くための、希望の1日なんだ。」

天馬

「でも、何でみんな水着なんですか？」

ココ

「伝統です。制服とライダースーツでは、息が詰まるからと。」

ナオミ

「なるほど。」

アンジュ

「けどさサリア、あんた恥ずかしくないの？」

サリア

「なっ!?!」

サリアは咄嗟に自分の胸をおさえた。

アンジュ

「そうじゃなくて、水着でいることがよ…」

ちなみに天馬達男性陣はいつも通りのユニフォーム、モモカはいつも通りのメイド服姿である。



〈指令部〉

オリビエ

「むっすう…」

そして皮肉なことに、緑髪の新米少女オペレーター《オリビエ》は指令部で1人留守番を任されていた。



く別荘く

その頃、フェスタ会場の近くに設けられた別荘では、アンジュとは異なる金髪カールと水色の瞳の少女、ローゼンブルム王国王女、《ミスティ・ローゼンブルム》がエマと会談していた。

エマ

「ようこそおいでくださいました、ミスティ・ローゼンブルム妃殿下。」

ミスティ

「アルゼナルの管理運営は、我がローゼンブルム家の責務ですから。」

「……ところで、こちらにミスルギ皇国第一皇女のアンジュリーゼ様がいらつしやると伺ったのですが……。」

エマ

「そ、その様な者、ここには……」

ミスティ

「では探してください。どうしても、会いたいんです。」



くフエスタ会場く

一方、アンジュ・天馬・モモカ・ナオミ・ココ・ミランダはパラソルの日陰で休んでいた。近くにはペロリーナの着ぐるみが置いてある。

ロザリー

「いつけええ豚骨インパクトオオ！」

豚レース会場ではロザリーが金を掛けた豚を応援し、クリスはヒルダを探し・・・

エルシャ

「はああああ・・・」

エルシャはエステでマツサージを受け・・・

パンツ！

ゾーラ

「よし、ジューズゲット！」

霧野

「次は俺だ！」

信助

「負けませんからね！」

霧野・信助・ゾーラは射的で勝負し・・・

サリア

「う、うううう・・・」

神童

「・・・。」



神聖とサリアは映画観賞

ヴィヴィアン

「たこ焼き超ウマ！」

メイ

「よく食べるなあ、ヴィヴィアンは。」

ヴィヴィアンとメイは屋台を食べ歩き・・・

ヒルダ

「・・・」

劍城

「さつきから何を探してるんですか？」

ヒルダ

「えっ？ ああ、ちよつとな・・・」

そしてヒルダと劍城は共にフェスタ会場をうろうろしていた。

モモカ

「賑やかですねぇ。」

アンジュ

「ええ、鳳凰院の学園祭を思い出すわ。」

天馬

「鳳凰院？」

ナオミ

「ミスルギ皇国にある名門学院ですよ？確かエアリアで有名だったような……。」

ココ

「エアリアって何ですか？」

アンジュ

「二人一組でタンDEM式のエアバイクに乗って、一人は操縦、一人はラクロスに似たステイックを振るってボールを奪い合い、ボールを相手チームゴールのサークル内に入れてポイントを競う競技よ。」

ミランダ

「何だか楽しそうね。」

アンジユ

「でも、エアバイクを動かすにはマナの光が必要な。だから私達ノーマじや、エアリアは出来ないわ。」

ココ

「そうですか…」

すると…。

モモカ

「あつ、通話です！」

アンジユ

「シルヴィア!？」

モモカ

「いえ、エア監察官さんからです。」

アンジユ

「あ、そう…」

モモカは回線を開き通話を始めた。

モモカ

「はい、モモカです。．．．えっ？．．．わ、わかりました。」

モモカは回線を切断した。

モモカ

「アンジュリーゼ様にお会いしたい方がいらっしやるそうです。」

アンジュ

「私に？誰？」

モモカ

「ミスティ様だそうです。」

アンジュ

「ミスティって、もしかしてミスティ・ローゼンブルム？」

天馬

「知り合いですか？」

アンジュ

「ええ。ローゼンブルム王国の王女で、私が皇女アンジュリーゼだったときの知り合  
い。」

モモカ

「何でも、今回の慰問団の代表なのとか。ぜひとも一目……。」

アンジュ

「会ってどうするの？ 笑い者にでもしたいわけ？」

モモカ

「そ、それは……。」

すると、アンジュは椅子から立ち上がり、近くにあったペロリーナの着ぐるみを着た。

A. ペロリーナ

「悪いけど、面倒だから消えるわ。あなた達が側にいると直ぐにバレるから、近づかない  
でね。」

そういうと、ペロリーナはその場を去った。

モモカ

「ペロリーナ様…」

その後、残された四人はフェスタ会場内を回っていたが、途中エマにアンジユを探すように指示を受け、手分けしてアンジユ捜索に向かった。



くメリーゴーランドく

一方、ペロリーナの着ぐるみを着たアンジユはメリーゴーランドの側にいた。

A. ペロリーナ

(暑い…蒸れる…酸っぱい……ん?)

アンジユはふと、一頭の木馬に乗る少女の姿が目に入った。すると…。

ガシヤン!

少女

「きゃあああ!」

A. ペロリーナ

(っ!?)

突然、少女の乗る木馬が外れ倒れ、少女が投げ出された。その光景を見たアンジユは、咄嗟に安全柵から身をのり出し少女を受け止めた。

A. ペロリーナ

「はあ…はあ…だ、大丈夫ペロ?」

少女

「う、うん。ありがとう、ペロリーナ!」

—————

くデツキく

その後、アンジュはデツキの日陰で横になり涼んでいた。

アンジュ

「涼しい〜…」

天馬

「あつ、いたいた！」

するとそこへ天馬がやって来た。

アンジュ

「あら天馬。」

天馬

「ここに居たんですか。エマ監察官さん、カンカンになってアンジュさんを探してましたよ。」



アンジユ

「知ったこつちや無いわよ。」

天馬

「もう…」

天馬は少し呆れながらアンジユの側に腰を下ろした。

天馬

「…一つ、聞いてもいいですか？」

アンジユ

「なに？」

天馬

「シルヴィア様って、確か車椅子に乗ってたと思うんですけど、生まれつき足が悪かったんですか？」

アンジユ

「…シルヴィアの足はね、私が動けなくしたの。」

天馬

「えっ?」

アンジュ

「もう1年か2年くらい前になるんだけど、私がシルヴィアを馬に乗せて遠乗りに出掛けてた時、シルヴィアが馬から落ちて怪我をってしまったの。それ以降、シルヴィアは車椅子の生活になってしまったの…」

天馬

「そんなことが…」

アンジュ

「私は、あの子から自由を奪ってしまった。だから、私が守らなくちゃいけない。でも…」

天馬

「……。」

天馬はゆっくりと立ち上がった。

天馬

「シルヴィア様を助けに行きましょう。」

アンジユ

「どうやって？脱走するにしても、シンギュラー反応が無い限り明日までパラメイルは飛ばせないし、第一パラメイルの燃料を満タンにしても陸までたどり着けないわ。」

天馬

「1つだけ、方法があります。」

アンジユ

「方法？」

天馬

「ミステイ様に、協力を依頼するんです。」



く居住区く

その頃、モモカは両手にジュースを持ってアンジュ（ペロリーナ）を探していた。

モモカ

「ペロリーナ様く、どちらですかく？・・・ペロリーナ様、脱水症状になってなければいいのですが・・・」

すると、モモカはヒルダと会った。

ヒルダ

「よう、モモカ。」

モモカ

「あれ？今日はヒルダさん御一人ですか？」

ヒルダ

「まあな。それよりも・・・。」

カチャ

ヒルダはモモカに銃を向けた。

モモカ

「っ!?!」

ヒルダ

「ちよつと付き合ってくれる?」



く別荘く

一方、ミステイはアンジュが来るのを待っていた。

『だ、誰だお前は!?!』

ドカツ！ ゴンツ！

突然、ドアの向こうで殴るような鈍い音が聞こえてきた。

ガチャツ

ドアが開き、アンジュと天馬がやって来た。

アンジュ

「会いに来てあげたわよ、ミスティ。」

ミスティはかつてのアンジュリーゼの面影を見た。

ミスティ

「まさか、アンジュリーゼ様!?!」

アンジュ

「久しぶりね、ミスティ。」

アンジュはソファアに腰を下ろし、ミスティは天馬に目を向けた。

天馬

「初めまして、ミスティ様。」

ミスティ

「あなたは？」

天馬

「俺は天馬。アンジュさんの友達です。」

アンジュ

「それで、私に何か用？」

ミスティ

「ずっと・・・ずっと、お会いしたいと思っていました。アンジュリーゼ様に。信じられませんでした・・・。私の永遠の憧れ、アンジュリーゼ様がノーマだったなんて・・・何かの間違いよ！」

アンジュ

「・・・私はノーマ、それが真実で全てよ。これじゃ納得できない?」  
ミスティ

「えっ? い、いえ…」

アンジュ

「よかった。じゃあ今度は、私達のお願ひ聞いてくれる?」

ミスティ

「脱走を手伝ってほしい・・・ですか?」

アンジュ・天馬

「・・・っ!?!」

アンジュとは自分達の考えを読まれたことに仰天し、ミスティはそのリアクションを待っていたかのように微笑んだ。

ミスティ

「もちろん、協力させていただきます。アンジュリーゼ様には、どうしてもミスルギ皇国へ行っていただかなければなりませんから。」

アンジュ



「どうして・・・？」

ミスティ

「ミスルギ皇室の方々を御助けするためです。」



「フェスタ会場」

その頃、ココとミランダとナオミは未だにアンジユを探していた。

ココ

「アンジユ様、何処に行ったのかしら？」

ミランダ

「もしかして、フェスタ会場には居ないのかな？」

すると、三人はゾーラに会った。

ゾーラ

「ようお前ら。ヒルダのやつ見てねえかい？」

ココ

「ゾーラ隊長。」

ミランダ

「いえ、見てないですけど……。」

ゾーラ

「あいつ、フェスタの大運動会は毎年欠かさず出てんのに、今年は何故か大運動会に出てないんだ。」

ナオミ

「私達はアンジュさんを探してるんですが……。」

ゾーラ

「……あいつ、もしかしたら……。」



「ジャスミン・モール」

一方、アンジュ・ミステイ・天馬は無人のジャスミン・モールで銃や手榴弾等を大量に買い占めていた。番犬のバルカンはハンバーガーで足止めしてある。

アンジュ

「処刑!?!」

ミステイ

「はい。国民を欺いた罪で、ミスルギ皇室の方々はいずれ……。」

天馬

「じゃあ、まさかシルヴィア様も……。」

アンジュ

「……急がなくちゃ!」

アンジュは大量の札束をデスクに起き、三人は武器をカートに積めてデスクに向かった。だがデツキに到着すると、ローゼンブルム王家専用輸送機の近くにヒルダとモモカがいた。

アンジュ

「モモカ!?!」

モモカ

「アンジュリリーゼ様に天馬さん。それにミステイ様!?!」

天馬

「どうして、ヒルダさんと?」

モモカ

「ヒルダさんが、”脱走するからこの船を飛ばせ”と…」

アンジュ

「脱走?何で?」

ヒルダ

「アンタには関係無いだろ?」

ヒルダはアンジュに拳銃を向け、アンジュはヒルダにマシンガンを向け構えた。

アンジュ

「悪いけど、させないわ。」

ヒルダ

「へえ、止めるってのかい？」

ミスティ

「この輸送機は、私達が使うからです。」

ヒルダ

「はあ!？」

モモカ

「まさか、シルヴィア様を!？」

アンジユ

「・・・あの子は私が守らなきゃいけないの。モモカ、一緒に来てくれる?」

モモカ

「・・・よ、喜んで!」

アンジユの問いに、モモカは笑顔で答えた。

ヒルダ

「へへっ、利害の一致ってやつか。だったら協力しない?」

アンジュ

「お断りよ！」

ヒルダ

「じゃあ、どうやってこの輸送機の拘束を外す？」

天馬

「拘束？」

「その輸送機はアレステイングギアで拘束されているんだ。ヒルダなら解除できる。この日のために、必死に準備してたからねえ。」

突然、アンジュ達の後ろから声がした。後ろを向くと、そこにはゾーラ・ココ・ミランダ・ナオミがいた。

天馬

「ゾーラ隊長！ココさん！ミランダさん！ナオミ！」

ヒルダ

「ゾーラ……」

ゾーラ

「アタシも脱走に手を貸してやるよ。」

「えっ!？」

アンジュ・天馬・ヒルダ・モモカ・ミスティは驚いた。

ゾーラ

「でも勘違いするなよ? アタシは天馬に助けられた借りを返したいだけだから、天馬がアンジュと行くって言うのなら手を貸してやる。」

天馬

「・・・ゾーラ隊長、お願いします!。」

ゾーラ

「よっしゃ! そいで次いでと言っちゃ何だけど、ココとナオミも連れてってやってくれねえか?」

天馬

「ナオミとココさんを?」

ナオミ

「私、お父さんとお母さんに会いたい！今は何処にいるのか分からないけど、せめてもう一度……もう一度だけ会いたい！」

ココ

「私は、アンジュ様の育った国がどんな国なのかを見てみたいんです！」

アンジュ

「……わかったわ。」

ゾーラ

「よしきた！それで、どうすればいい？」



くフェスタ会場く

日が陰ってきた頃、フェスタ会場ではファイナーレの花火が打ち上げられていた。



ヴィヴィアン

「うっひょー！」

信助

「たーまやー！」



くデツキく

一方で、デツキでは脱走の準備が着々と行われていた。アンジュ・天馬・ココ・ナオミは輸送機に荷物を積み込み、モモカとミステイはコックピットに待機。そしてヒルダとミランダは制御板の近くで待機している。

ゾーラ

『こちらゾーラ。指令部の制圧完了！』

ヒルダ

「みんな急げ！フェスタが終わるよ！」

ヒルダはピッキングで制御板のロックを解除し、複数のレバーを出現させた。

ヒルダ

「緊急射出システム、スタンバイ！」

モモカ

『了解！発進準備開始します！』

ミスティ

『エンジン、回転数安定。いつでも大丈夫です！』

ヒルダ

「アタシが合図したら、拘束を解除して発進だ。」

アンジュ・天馬・ココ・ナオミは輸送機に乗り込み、一同は合図を待った。

ヒュウウウウウ

ヒルダ

「今だ！」

ミランダ

「はい！」

バーン！

ガコンツ！

花火のタイミングに合わせて拘束を解除し、輸送機はゆっくりと動き出した。

ヒルダ

「よしっ！」

ミランダ

「やった！」

ヒルダは急いで輸送機を追いかける。だが、突然輸送機のスピードが上がった。

ヒルダ

「えっ？おい、何のつもり!?」

アンジュ

「・・・ブラジャーの恨み、忘れてない。あのおかげで、私も天馬も大変な目に会ったんだから…」

ヒルダ

「そんな、昔の話だろ！」

アンジュ

「それだけじゃない。後ろから狙い撃つ。手下を使ってイタズラをする。おまけにモモ力を脅した。アンタは信用出来ない。お友だちと仲良く暮らすのね。」

輸送機はさらにスピードを上げ、離陸体制に入った。ヒルダは諦めず、全力で輸送機を追いかける。

ヒルダ

「ふざけんな！アタシはこのために、何年も待ったんだ！生き残るためなら、ゾーラのオ

モチャにもなった！面倒な奴等と友達になってやった！ずっと待ってたんだ！

絶対に帰るんだ・・・ママのところに！！

アンジユ

「っ!?!」

その時・・・。

ガシッ

ヒルダ

「なっ!?!」

誰かがヒルダを抱き、全速力で輸送機を追いかけてきた。

天馬

「劍城!？」

劍城

「でえええりやああああ!!」

劍城はヒルダを抱えながら全力でジャンプし、輸送機の後部ハッチに飛び乗った。

天馬

「劍城……。」

ヒルダ

「お前、なんで……。」

劍城

「……見てみたくなっただですよ。ヒルダさんの生まれ故郷を。」

ヒルダ

「お前……。」

劍城

「連れて行ってください。ヒルダさんの生まれ故郷に！」

ヒルダ

「……つたく、しょうがねえなあ。」

劍城とヒルダは互いを見つめ合い、アンジユはモモカに通信を入れた。

アンジユ

「モモカ、後部ハッチ閉めてくれる?」

モモカ

「了解です。」

輸送機のハッチが閉まり、輸送機はアルゼナルから飛び立った。そして飛び立った直後、ジル・ジャスミン・マギー・エマがデッキにやって来た。

マギー

「くそつ、遅かったか……。」

エマ

「どうしましょ!?! ミステイ様がノーマに!!」

ジル

「ジャスミン、あの坊やに連絡を。」

ジャスミン

「・・・あいよ。」



↳ ローゼンブルム王国 郊外↳

次の日、アンジュ達を乗せた輸送機はローゼンブルム王国郊外の森の中にいた。

ミスティ

「この森を向こうの方に抜ければ、ミスルギ皇国とエンデラント連合の国境に繋がる道に出られます。」

アンジュ

「ありがとう、ミスティ。」



ミステイ

「グッドラックです、アンジュリーゼ様。どうかお気をつけて。」

ミステイは輸送機を操作し、輸送機は飛び立った。

—————

くガソリンスタンド跡く

その後、一同は道中に古いガソリンスタンドを見つけた。

劍城

「・・・おっ?」

ガレージの中には、シートを被った青い車が置いてあった。シャッターを開けシートを退かすと、大きなボディと丸いテールランプが特徴のスポーツカーが姿を見せた。

天馬

「日産スカイラインGT-RのR34だ！」

アンジユ

「知ってるの？」

天馬

「日産自動車GT-Rシリーズの第2世代最後にして、スカイラインGT-Rシリーズ最後の型として発売した車です。」

天馬はボンネットを開け、エンジンルームを見た。

天馬

「ラッキー、これならまだ使えるぞ。」

-----

く三叉路く

一同は三叉路にやって来た。右に行けばエンデラント連合、左に行けばミスルギ皇国へと行ける。

ヒルダ

「ここでお別れだね…」

アンジユ

「うん…」

ヒルダ

「アンジユ、命だけは大事にしなよ。」

アンジユ

「そっちもね、ヒルダ。」

天馬

「気を付けてね、劍城。」

劍城

「天馬も、気を付けてな。」

ココ

「お父さんに会えるといいですね。」

ナオミ

「ありがとうココさん。気を付けてね。」

ブオオオオオオオオオ

劍城・ナオミはヒルダの運転するR34に乗り込み、三人はエンデラント連合を目指して走り出した。

天馬

「・・・俺達も行きましょう。シルヴィア様を助けに！」

アンジュ

「ええ。」

天馬・アンジュ・ココ・モモカはミスルギ皇国目指して歩き出した。

カシャツ

そんな三人を近くの丘から一人の男が胸にかけてるマゼンタのトイカメラで撮影した。

???

「・・・なるほど、ここが今回の俺の旅の舞台か。」

男は写真を撮り終わると、マゼンダ・ホワイト・ブラックで塗装された大型スクーターに乗り込み、その場を離れた。

T o B e C o n t i n u e d . . .

## E p. 11 / 再会と裏切りの我が故郷 《前編》

くエンデラント連合 無人駅く

アンジュ達と別れたヒルダ・剣城・ナオミは、エンデラント連合とローゼンブルム王国の国境付近にある無人駅を訪れた。

ヒルダ

「本当に、ここでもいいのか？」

ナオミ

「はい、ここからは私一人で大丈夫です。」

ヒルダ

「そっか、気を付けなよ。」

ナオミ

「ありがとうございます。」

ブオオオオオオオオオ

ヒルダと剣城は無人駅にナオミを残しその場を去った。その後、ナオミは無人駅に停車していた貨物列車に乗り込んだ。

ナオミ

(お父さん、お母さん、待っててね。)

ピー!

ゴトン……ガタングトン……ガタングトン……

ナオミの乗る貨物列車はゆっくりと駅を出発した。



くミスルギ皇国 ガルーダシティく

その日の夕方、アンジュ・天馬・モモカ・ココは、ミスルギ皇国の郊外にある町、ガルーダシティの川にかかる橋の下にいた。

ココ

「今のところ、気付かれてはいないみたいです。」

アンジュ

「OK、ありがとう。」

ココと天馬は見張りを担当し、アンジュとモモカは武器の手入れをしていた。が、モモカはライフルを抱いて眠っている。

天馬

「・・・アンジュさん。」

アンジュ

「何?」

天馬



「アンジュさんが……いや、アンジュリーゼ様がノーマとして連行された日って、何か大事な日だったんですか？」

アンジュ

「……その日はね、私の16歳の誕生日だったの。」

ココ

「アンジュ様の誕生日？」

アンジュ

「ええ。パレードの後、あの暁ノ御柱で洗礼の儀を受けていたときに、お兄様から私がノーマだと国民全員に暴露された。私はお母様と共に暁ノ御柱から脱出しようとしたけど、あと少しというところで私は警官隊に捕まり、お母様は私を守ろうとして銃撃され命を落とした……。私がノーマだったから、お母様は死んでしまった……。」

アンジュの目から一滴の涙が零れた。

天馬

「……助けましょう！必ず、シルヴィア様を！」

アンジュ

「ええ！」

アンジュはふと、夕焼け空を見た。

アンジュ

「お母さんに会えたかな、ヒルダ……」



くエンデラント連合 中心街く

ジリリリリリリッ！

夜、ヒルダと剣城はエンデラント連合の中心街にある洋服店に忍び込み泥棒を働いた。

ガシャーン！

二人は店の窓を割り、警察に見つからないように路地へと逃げ込む。そして直ぐさま R34 で街を離れた。

劍城

「こんなもの盗んで、いったいどうするんですか？」

二人が盗んだのは、ピンク色の服とスカート。

ヒルダ

「ママに、アタシを思い出してもらおうと思ってさ。いきなり行っても、多分わからないだろうから…」

劍城

「ヒルダさん…」



くミスルギ皇国 鳳凰院く

その頃、アンジュ・モモカ・天馬・ココは鳳凰院にいた。

アンジュ

「私とモモカが、中に入ってエアバイクを盗んでくる。二人はここで、私達が来るのを待っていて。」

天馬

「わかりました。」

モモカは校舎の勝手口を開け、アンジュとモモカは校舎に侵入した。するとその直後……。

「よう、ちよつといいか?」

天馬とココの前に、ピンクじみたマゼンタと黒と白のボディに、グリーンの複眼とバーコード状の縞々フェイスの仮面の男が現れた。

天馬

「だ、誰だ!？」

???

「落ちて着け。捕って食ったりはしない。」

男はゆっくりと二人に近づく。

???

「俺の名前は、『仮面ライダー・ディケイド』。ただの通りすがりの仮面ライダーだ。」

ココ

「仮面……ライダー?！」

天馬

「ディケイド?！」

ディケイド

「状況は大体わかった。お前たち、あそこに向かおうとしてるんだろ?！」

デイケイドは向こうに見える暁ノ御柱を指差した。天馬とココは考えが読まれたことに驚いた。

天馬

「なんで、あなたがその事を?!」

デイケイド

「だから大体わかったと言っただろ?」

すると、デイケイドは左腰の《ライドブッカー》から二枚のカードを取り出し、腹部に装着してあるベルト、《デイケイドライダー》にセットした。

《ATTACK RIDE 『AUTOVAJIN』!》

《ATTACK RIDE 『MACHINE TORNADER』!》

すると、二人の前にシルバーのオフロードバイクと、赤色と金色の中型ツアラーバイクが現れた。

デイケイド

「マシントルネイダーとオートバジンだ。貸してやる。」

天馬

「えっ？」

《ATTACK RIDE 『INVISIBLE』!》

デイケイド

「じゃあな、少年。」

デイケイドは手を振りながらその場から姿を消した。すると、ガレージからアンジユとモモカがエアバイクに乗って現れた。

モモカ

「お待ちせしました！」

アンジユとモモカはすぐ、マシントルネイダーとオートバジンの存在に気づいた。

アンジユ

「そのバイク、どうしたの？」

ココ

「その・・・デイケイドっていう、仮面の方が出してくれたんです。」

天馬

「詳しい事は、移動中にします。」

アンジユ

「いいけど、私達は水路を通るのよ？こんなバイクじゃ・・・。」

ガシヤンガシヤンガシヤン！

突然、オートバジンとマシントルネイダーが変形し、オートバジンは人形のバトルモードに。マシントルネイダーは空中飛行可能なスライダーモードに変形した。

ココ

「へ、変形した！」



天馬

「どうなってるの……?」

すると、オートバジンは天馬に背を向けしやがみこんだ。

天馬

「君に、乗れってこと?」

オートバジン

『……』

オートバジンは頷いた。天馬は恐る恐るオートバジンの背中に乗ると、オートバジンは足のスライダーを起動し飛んだ。

天馬

「と、飛んだ!?!」

すると、今度はココがマシントルネイダーに乗った。するとマシントルネイダーの前

後の車輪が回転し、マシントルネイダーは宙に浮いた。

ココ

「凄い！浮いた！」

アンジユ

「何がどうなってるの・・・？」

モモカ

「と、とりあえず行きましょう・・・。」

—————

く 中心街 水路く

四人は水路に沿って皇宮へと向かう。

アンジユ

「いきなり現れて、バイクを呼び出して消えた・・・。」

モモカ

「仮面ライダーディケイド……。」

天馬

「少なくとも、俺達にこうやってマシンを貸してくれましたから、敵ではないと思うんですが……。」

アンジユ

「詳しく考えるのは後よ。今は急いで、皇宮に向かわないと。」

天馬とココからは、アンジユの表情が少し暗く見えた。

ココ

「……何かあったんですか？」

アンジユ

「……ガレージで、皇女時代の友達に会ったの。私は、ここに来たことは秘密にしておいてほしいって頼んで、彼女は了承してくれた。でも、彼女は約束を破った……。」

モモカ

「アンジュリーゼ様……。」

アンジュ

「別によかったのよ。分かってたから・・・。」

――――  
　　ゝ 皇殿　西側 　　ゝ

四人は皇殿の西側にやって来た。

アンジュ

「皇殿の中に入ったら、二人とも私についてきて。」

天馬・ココ

「はいっ!」

モモカ

「いきます!」

モモカはエアバイクを操作し、塀を飛び越え皇殿の敷地内に侵入。天馬のオートバジ  
ンとココのマシントルネイダーも後に続く。

アンジュ

「左へ！」

アンジュはモモカに指示を出し、二人は森の中へと侵入。天馬とココも後に続いた。

モモカ

「あの、いいんですか？ どんどん皇宮から離れていきますけど…」

アンジュ

「大丈夫よ。」

すると、前方に大勢の警官と5台のパトカーが道を塞いでいた。

ココ

「待ち伏せ!？」

天馬

「オートバジン、頼む！」

オートバジン

『……！』

ダダダダダダダダダッ！

オートバジンは左腕のシールドを回転させ無数の弾丸を放つ。弾丸はパトカーに命中し、パトカーは爆発・炎上。四人は炎の中を通り突破。警官達は他のパトカーに乗り込み四人を追いかけた。

アンジユ

「つたく、しつこいんだから！」

ダダダダダダダダダッ！

アンジユはマシンガンでパトカーを攻撃するが、マナの障壁で防がれてしまう。

アンジュ

「やっぱりマナの光相手じゃダメか…」

天馬

「だったら!」

天馬はオートバジンの左ハンドルグリップを抜き取り、赤いフォトンブラッドの刃を持つ剣、《ファイズエッジ》を装備した。

《READY…》

ファイズエッジにエネルギーが充填され、フォトンブラッドの刃が赤く輝く。そして赤いエネルギーの刃をパトカーに向けて放った。パトカーは縦に真っ二つに切断され爆発した。

天馬

「よしっ!」

だが、今度は前方に輸送機と共に複数の兵隊が姿を現した。兵隊達はアンジュにネットガンを向け構えた。天馬とオートバジンはアンジュの前に移り、天馬はファイズエッジを構えた。

《READY…》

ドーン！ドーン！ドーン！

天馬

「やらせない！」

天馬はファイズエッジで次々放たれるネットを切断。その隙に、ココが輸送機の右エンジンに手榴弾を投げた。

ドカーン！



手榴弾はエンジンの中に侵入し爆発。輸送機はエンジンから火を吹き墜落した。

ココ

「やった！」

すると、前方に水路と小さな滝が見えてきた。

アンジユ

「あそこに突っ込んで！」

モモカ

「はいっ！」

アンジユの指示に従い、モモカ・天馬・ココは滝へと突っ込んだ。

バシャーーン！バシャーーン！バシャーーン！

四人は滝の向こうに消え、警官達は滝の前にパトカーを止めた。

〱 隠し通路〱

一方、アンジュ達は……。

天馬

「うわぁ。」

ココ

「隠し通路ですか。」

アンジュ

「あとは道なりに進むだけ。そうすれば皇宮の正面に出られるわ。」

モモカ

「知りませんでした。こんな抜け道があったなんて……」

アンジュ

「皇族だけが知ってる通路よ。夜遊びに行くとき、よく使ったっけ？」

モモカ

「そうなんですか？」

天馬

「て言うか、皇女でも夜遊びとか行くんですね…」

ココ

「ね…」

—————

く 皇宮 正面く

三人は隠し通路を抜け、皇宮の正面に出た。

天馬

「皇宮だ！」

四人はマシンを降りて入り口へと向かう。だが、入り口の前では2台の装甲車と複数

の兵隊が待ち構えていた。

ココ

「また待ち伏せ!?!」

「お姉様!」

突然、2階から声がした。2階には、兵隊達に拘束されたシルヴィアの姿があった。

アンジュ

「シルヴィア!」

シルヴィア

「アンジュリーゼお姉様! 助けてください!」

アンジュ

「シルヴィアを・・・放しなさい!」

ダダダダダダダダダダッ！

アンジュとココは地上の装甲車に向けてマシンガンを乱射し、兵隊達の動きを封じる。

《READY…》

天馬

「でりゃあー！」

その隙に天馬がファイズエツジからエネルギーの刃を放ち、装甲車を破壊した。

ダダダダダダダダダッ！

さらに2階に向けてマシンガンを乱射し、シルヴィアを拘束する兵隊を追い払った。

アンジュ

「シルヴィア、おいで！」

シルヴィア

「は、はい！」

シルヴィアはマナの光で車椅子を操り、笑顔でアンジュ達の前に降りた。だがその時、天馬はシルヴィアの右手に銀色の刃を見た。シルヴィアは右手をアンジュ目掛けて伸ばす。

《《REAYDY…》》

キーン！

天馬はファイズエッジをアンジュの前に突き出し、シルヴィアのナイフを弾き飛ばした。

アンジュ

「……っ!？」

天馬

「はあ…はあ…」

シルヴィア

「邪魔をしないで！」

シルヴィアは右手首を抑え天馬を睨んだ、シルヴィアからは笑顔が消え、その目はまさに敵を見る目だった。

アンジユ

「シルヴィア…」

シルヴィア

「馴れ馴れしく呼ばないで！あなたなんて、姉でも何でもありません！この化け物!!」

アンジユ・天馬・モモカ・ココ

「っ!?!」

アンジユ・天馬・モモカ・ココは驚愕した。アンジユを限りなく愛していたハズのシルヴィアが、実の姉を化け物と呼んだことに。

シルヴィア

「どうして? どうして生まれて来たのですかあ? あなたさえ生まれてこなければ、お父様もお母様もお兄様も私も、みんな幸せだった。あなたがいなければ、私が歩けなくなること、お母様が死ぬこともなかった。あなたが全部奪って、壊したんです……。」

お母様を返して! この化け物! 大ツツキライ!!」

シルヴィアは叫び、アンジユは絶望し膝を落とした。すると、2階から兵隊がネットガンを放ち、アンジユ・天馬・モモカを捕らえた。

天馬

「こんなもの!」

天馬はファイズエッジでネットを切断しようとする。

シューウウウウ……



だが突然、ファイズエッジとオートバジン、さらにマシントルネイダーが消えた。

天馬

「そんな・・・。」

「無様な姿だな。落ちぶれ果てた皇女殿下の、哀れな末路に相応しい。」

すると、シルヴィアの後ろから一人の男が現れた。

モモカ

「ジュリオ様……」

アンジュ

「お兄様……」

ジュリオ

「そうそう、その間抜け面が見たかったのだよ。」

天馬

「まさか、全部あなたが仕組んだんですか!？」

ジュリオ

「そう。最愛の妹の危機を餌に誘き寄せ捕らえる。お前達は見事に、私の仕掛けた罠に  
はまったのさ。」

ココ

「あ……あ……」

ココは後退りし、その場を離れようとした。

ジュリオ

「どうやら、捕え損ないがあつたようだ。」

ジュリオは兵隊数名をココの確保に向かわせた。

天馬

「ココさん、逃げて！」

ココ

「は、はいっ!」

ココは急いでその場を離れようとしたその時……。

ドシーン!

ココ

「っ!?!」

ココの目の前に、一体のロボットが現れた。ロボットはパラメイルの倍以上のサイズで、パラメイルとは異なるボディ形状をし、ボディを白と青で統一され、クリアグリーン目の目と額には金色の二本角。さらにボディの至るところにクリアグリーンに輝くビームの刃を装備していた。

兵隊

「な、なんだこれは!?!」

天馬

「あれは、ロボット?」

アンジユ

「でも、パラメイルとは違う。」

キイイイイイインツ!

突然、ロボットのビームの刃が強く光りだし、ロボットとココは光に包まれた。そして光が消えると、ココとロボットは姿を消していた。

シルヴィア

「今のはいったい…」

ジュリオ

「分かん。だがそんな事はどうでもいい。ついにアンジュリーゼを捕らえることが出来たのだから。フハハハハハハッ!ハハハハハハッハッハッハッハッハッ!!」

深夜の皇殿に、ジュリオの気高い笑い声が響き渡った。

E p. 11 / 再会と裏切りの我が故郷 《後編》

く 木枯らし荘 リビングく

ココ

「う、うくん……」

気がつけば、ココはソファアの上で横になっていた。

「気がついた？」

隣には秋が座っていた。

ココ

「……あなたは？」

秋

「私は木野秋。このアパートの管理人よ。」

ココ

「アパート・・・？」

秋

「あなた、名前は？」

ココ

「えっと・・・ココです。」

秋

「ココちゃんね。ちょっと待ってて、ご飯作ってくるから。」

秋はそう言うとりビングを後にした。ココは体を起こし、辺りを見回した。窓からは太陽の光が差し込み、外ではスズメが鳴いている。

ココ

「私、助かったの・・・？」



く皇殿 地下牢く

ガシャン！

一方、アンジュ・天馬・モモカは捕まって早々、武器を全て取り上げられ地下牢へと放り込まれた。

ジュリオ

「アンジュリーゼ、本日正午より暁ノ御柱の前でお前の断罪の儀を執り行う。それまでゆっくり、仲間との時間を過ごすんだな。」

そう言うと、ジュリオとシルヴィアは地下牢から出ていった。

アンジュ

「ごめん、二人とも・・・。」

モモカ

「アンジュリーゼ様…」

天馬

「気にしないでください。俺も、まさかジュリオ皇帝の罠だったなんて思いもしませんでしたから…」

モモカ

「シルヴィア様には裏切られて捕らえられ、ココさんは行方不明。おまけにマナも使えないなんて…」

アンジュ

「この牢は《ゲルトニウム》っていう、マナの光を無効化する特殊な金属で出来てるの。」

天馬

「…みんな、今頃どうしてるでしょうか？ 剣城とヒルダさんは、お母さんに会えたでしょうか？」

アンジュ

「ヒルダ…」。





くエンデラント連合 アップビレッジく

ヒルダと劍城はエンデラント連合郊外にある《アップビレッジ》に来ていた。時刻は夜明け前。外はまだ薄暗い。

劍城

「ここですか？」

ヒルダ

「ああ。ここがアタシの生まれ故郷、アップビレッジさ。」

ヒルダは街で盗んだ服に着替え、二人は車を降りた。辺りには立派なリンゴの木が何本も立ち、赤く熟れたリンゴをいくつも実らせていた。

ヒルダ

「この村は、エンデラント連合の中じゃ一番リンゴの収穫量が多いんだ。そして……。」

ヒルダの見つめる遙か先には、一件の家が見える。

ヒルダ

「あれが、アタシの育った家……。」

プチッ

ヒルダは近くのリンゴの木からリンゴを二個もぎ取り、一個を剣城に投げ渡した。

ヒルダ

「腹減ってるだろ？食いなよ。」

剣城

「ありがとうございます。」

シャキッ

剣城はリンゴを噛り、味わった。

劍城

「これが、ヒルダさんの故郷で育ったリンゴの味……。」

ヒルダ

「美味いだろ？アタシはこのリンゴで作る、ママのアップルパイが好物なんだ。」

劍城

「いつ頃から、アルゼナルに？」

ヒルダ

「11年前……まだアタシが幼かった頃だ。雨の降る中、アタシはパトカーに無理矢理乗せられ、連れていかれたんだ。それから今まで、アタシはママのところに帰るためだけに生きてきた……。」

劍城

「ヒルダさん……」

ヒルダ

「……夜通しぶっ飛ばしたから、少し疲れた。悪いけど、ちよつと寝る。」

そう言うと、ヒルダはR34の運転席に座り眠った。

劍城

「……。」

劍城も助手席に座り眠りについた。



く木枯らし荘 食堂く

夕方、ココはリビングを離れ食堂にいた。

秋

「はい、沢山食べてね。」

秋はココの前に料理を並べた。メニューは白ご飯、野菜炒め、豆腐の味噌汁、沢庵である。

ココ

「いただきま〜す！」

ココは箸とお茶碗を持ち食事を始めた。

ココ

(もぐもぐ……。)

秋

「よく噛んでね。」

ココ

「おいしい〜♪……っ!?ゴホツ！」

案の定、ココは喉を詰まらせた。ココは味噌汁を飲み流した。

ココ

「ふう……」

秋

「大丈夫？」

ココ

「すみません、秋さんのご飯があまりにも美味しいもので…」

秋

「ありがとうございます。」

秋はココの正面の椅子に腰かけた。

秋

「それにしても、ビックリしたわあ。変な物音がしたと思ったら玄関にあなたが倒れてたんだもの。」

ココ

「そういえば、私どうしてこんなところに……。」

秋

「・・・ココちゃん。一つ聞いてもいい？」

ココ

「なんですか？」

秋

「あなた、もしかしてノーマ？」

ココ

「・・・っ!？」

秋の一言で、ココは箸を止めた。

ココ

「・・・。」

黙り混むココに、秋は優しく微笑んだ。

秋

「やっぱりね。マナで治療しようとしても上手くいかなかったから、もしかしたらつて。」

ココ

「・・・あの、怖くないんですか？」

秋

「ううん、全然。私にとつちや、人間もノーマも関係無いの。」

ココ

「えっ?」

秋

「ノーマでも同じ家で生まれたなら家族。そりやマナが使えなくて不便かもしれないけど、それ以外は普通の人と変わらないじゃない?」

ココ

「た、確かに・・・」

秋の発言にココは驚いた。ココにとつて、モモカ以外の人間は全てノーマを化け物として恐れ、拒絶していると思ひ込んでいたからだ。



秋

「あなた達ノーマが人をどう捉え、他の人達がノーマをどう捉えているのかは知らないけど、私はノーマを拒絶する気は無いわ。人として生まれたのなら、同じ人として接していこうと思うの。ダメ？」

ココ

「い、いえ…」

ココは少し戸惑いながらも少し微笑んだ。秋もココを見て笑顔になった。

秋

「ささ、早く食べないと冷めちゃうわよ？」

ココ

「は、はいっ！」



↳ エンデラント連合 ヒルダの家↳

一方エンデラント連合のヒルダと劍城は、ヒルダの家の前に来ていた。

ヒルダ

「……。」

ヒルダは玄関のドアに手を伸ばしたが、ドアノブを掴む前で止めた。

劍城

「ヒルダさん？」

ヒルダ

「大丈夫。心の準備がまだただただけさ……。」

ヒルダはその場で静かに深呼吸をし、玄関を開け、二人は家の中に入った。

—————

くヒルダの家 リビングく

二人はリビングに来たが、ここに来るまで家の人には会わなかった。

劍城

「留守でしようか？」

ヒルダ

「さあ……ん？」

ヒルダはテーブルの上の小さな木の箱を見つけた。蓋を開けるとオルゴールが動き出し、優しい音が聞こえてきた。

ヒルダ

「懐かしい……」

劍城

「いい音色ですね。」

ヒルダ

「小さい頃、このオルゴールの音が大好きだったんだ…」

すると……。

「どなた？」

奥の部屋から一人の女性が現れた。女性はヒルダと同じ赤い髪とパープルの瞳をした優しそうな人だった。

???

「どなたかしら？」

ヒルダは女性を見て目に涙をうかべた。

ヒルダ

「ママ……」

???

「えっ?」

彼女の名は《エミリア・シユリーフオークト》。ヒルダの実の母親である。

ヒルダ

「ママ、アタシ……。」

エミリア

「ああ、”娘”のお友達?」

ヒルダ

「えっ? あ、その……」

エミリア

「まあまあ、いらっしやいませ。」

エミリアはマナの光でカーテンを開け、テラスに通じる窓を開けた。テラスにはティーテーブルと椅子が置かれており、さらに庭には立派なリングの木があった。

劍城

「凄い…」

エミリア

「ゆつくりしていつて下さいね。あの子、もうすぐで帰ってくるから。あ、そうそう、もうすぐアップルパイが焼き上がるの。あの子の好物なのよ。フフフツ。」

エミリアは笑顔でリビングを離れた。ヒルダと剣城は庭に出て、リンゴの木に近づいた。

剣城

「立派なリンゴの木ですね。」

ヒルダ

「ああ…」

ヒルダはリンゴの木に手をあて、静かに涙を流した。

ヒルダ

「アタシ、帰ってきたんだ…」

劍城はヒルダを隣で静かに見守った。だが、一つ気になることがあった。

劍城

（お母さんはまだヒルダさんに気づいていない。だがさつき、俺達に娘の友達かと聞き、もうすぐ娘が帰ってくると言った。

・・・嫌な予感がするな…）



く木枯らし荘 食堂く

その頃、ココは食事を終え秋と話をしていた。

秋

「ココちゃん達ノーマって、何処で暮らしてるの？」

ココ

「詳しくは言えないんですけど、アルゼナルっていう施設で暮らしています。」

秋

「もしかして、天馬もそのアルゼナルに？」

ココ

「天馬さんのこと、ご存知なんですか？」

秋

「ええ。私は天馬の親戚の姉で、この前までここで暮らしてたの。」

ココ

「そうだったんですか・・・あつ！」

ココが何かを思いだし立ち上がった。

秋

「どうしたの？」

ココ

「大変なんです！天馬さんが！」



「秋、いるか？」

突然、食堂に数人の男性がやって来た。雷門中サッカー部の監督《円堂守》と、日本少年サッカー協会の会長《豪炎寺修也》。そして帝国学園総帥《鬼道有人》と雷門中サッカー部である。

秋

「円堂君。それに豪炎寺君に鬼道君にサッカー部のみんなまで。」

ココ

「知り合いですか？」

秋

「うん、私の友達と天馬の仲間達よ。どうしたの？」

豪炎寺

「テレビを見てくれ！天馬が大変なんだ！」

秋「えっ!?!」



くヒルダの家 テラスく

その頃、ヒルダと劍城はテラスでアップルパイが焼き上がるのを待っていた。

ヒルダ

「わからないよね、こんなに大きくなったんだもの……」

すると……

エミリア

「はい、お待ちせ。」

エミリアが焼きたてのアップルパイとティーセットを持ってきた。

劍城

「うわあ、凄く美味しそうですね。」

エミリアはアップルパイを切り分け皿に載せ、ヒルダと剣城に一切れずつ渡した。

エミリア

「さあ、召し上がれ。」

剣城

「ありがとうございます。」

剣城は早速食べ始めた。

剣城

「美味しい！」

エミリア

「フッフツ、ありがとうございます。」

エミリアと剣城は笑ったが、ヒルダはアップルパイに手をつけず表情を暗くしてい

た。

エミリア

「どうしたの？お腹でも痛いの？」

ヒルダ

「あの…その…」

ガチャツ

「ただいまー！」

玄関のドアが開き、一人の少女がテラスに現れた。少女はヒルダと同じパープルの瞳と赤い髪で、髪型はショートヘアだった。

???

「ただいま、ママ！」

エミリア

「お帰りなさい、ヒルダ。」

エミリアは少女をヒルダと呼び、二人は驚いた。この少女はエミリアの娘で、ヒルダの妹にあたる人物なのである。

エミリア

「お泊まり会楽しかった？」

ヒルダ（妹）

「うん！あ、アップルパイだ！食べてもいい？」

エミリア

「もう、ちゃんと手を洗ってからね。」

ヒルダ（妹）

「はいー！」

すると、ヒルダ（妹）は剣城とヒルダに気づいた。

ヒルダ（妹）

「ねえママ、このお兄ちゃんとお姉ちゃんは誰？」

エミリア

「えっ？あなたのお友達じゃ……。」

ヒルダ

「どうして……。なんで、なんでその子がヒルダなの……？」

エミリア

「えっ？」

ヒルダは立ち上がり、剣城はヒルダを抑えようとした。

剣城

「落ち着いてください、ヒルダさん！」

エミリア

「ヒルダ？」

ヒルダ

「そうよ！ヒルダは私！《ヒルデガルト・シユリーフオークト》！11年前に離ればなれになった、ママの娘よ！」

エミリア

「っ!？」

エミリアは驚愕した。11年前に離ればなれになった最愛の娘が、自分の目の前にいたのだから。

エミリア

「生きていたの・・・？何で、帰ってきたの・・・？」

ヒルダ

「何でって、ママに会いたかったからに決まってるじゃない!!」

エミリア

「帰って・・・早く帰って！二度と来ないで！」

ヒルダ

「ママ……?」

エミリア

「ママじゃないわ! 私の娘は、ヒルダはこの子だけよ!」

ヒルダ・劍城

「っ!?!」

ヒルダと劍城は驚愕した。エミリアは既に過去と決別し、ヒルダと同じ名前を持つ妹と新たな家庭を築いていたのだ。

ヒルダ(妹)

「ママの娘?じゃあこの人、もしかして私のお姉さん?」

エミリア

「違うわ!こいつは化け物よ!」

ヒルダ

「化け物……私が……。」



ヒルダは最愛の母に化け物呼ばわりされ、絶望した。

ヒルダ（妹）

「化け物……まさかノーマ!?」

ヒルダ

「ママ……。」

エミリア

「それ以上近づかないで！」

ヒルダは足を止め立ち止まった。

エミリア

「やつと悪夢を忘れて、幸せになれたの。その幸せを奪わないで。」

ヒルダ（妹）

「ママ?。」

エミリア

「ねえ、どうしようもない事って、この世の中にあるわよね? 私がノーマを生んだの。あ

なたがノーマだったの！」

エミリアは地面に膝をつき、頭を下げた。

エミリア

「あなたがここに来たことは誰にも言わないわ。だから……。」

ザザザザザザザ……。

空からまるで、ヒルダの絶望の様な雨が振り出した。

劍城

「……どうして……」

エミリア

「えっ？」

エミリアは劍城の声を聞き顔を上げた。劍城の目からは大粒の涙が流れていた。

劍城

「どうしてだよ．．．どうして、ヒルダさんを受け入れてあげれないんですか．．．ヒルダさんはあなたに会うためだけに、11年もの間生き続けたんだ。なのに、ノーマっただけでヒルダさんを拒絶するんですか？最愛の娘だったんでしょ？ たった一人の大切な娘だったんでしょ？なのになんで．．．なんで．．．！」

ヒルダ

「もういいよー！」

ヒルダは大声を出し、劍城を止めた。

ヒルダ

「もういいよ劍城。もう．．．。」

ヒルダは目から涙を流し、その場から走り出した。劍城は急いで後を追いかけた。

エミリア

（ごめんなさい、ヒルダ。私、もうあなたを受け入れられないの・・・。）  
ヒルダ（妹）

—————

（R34 車内）

劍城はヒルダを助手席に乗せ、大雨の中急いでアップビレッジを離れた。

ヒルダ

「うう…うう…」

劍城

「ヒルダさん・・・。」

劍城はそつとヒルダに左手を差し出した。手にはグシャグシャになった一切れのアップルパイがあった。

ヒルダ

「劍城、これって……。」

劍城

「ヒルダさん、結局食わず仕舞いだったでしょ？だから、家を離れる際に一切れ取って来  
たんです。ただ生憎、握り潰してしまいましたけど……。」

ヒルダ

「……ありがとう、劍城……」

ヒルダはグシャグシャになったアップルパイを手に取り、静かに口へ運んだ。

ヒルダ

「うう……うう……うわああああ!!」

ヒルダの泣き叫ぶ声が辺り一面に響いた。



くミスルギ皇国 皇殿 地下牢く

その頃、ミスルギ皇国のアンジュ・天馬・モモカは眠りについていた。

ガシヤンツ

牢の扉が開く音に気づき、三人は目を覚ました。三人の前にはジュリオとシルヴィアがいる。

ジュリオ

「時間だ、アンジュリーゼ。」

アンジュ

「・・・。」

ジュリオ

「さあ、断罪を始めようか。お前という罪の。」

T  
o  
B  
e  
C  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
:

## E p. 12 / 信じ合える者達 《前編》

くミスルギ皇国 暁ノ御柱前く

正午の暁ノ御柱前では、大勢の国民の前で  
アンジユの断罪の儀が行われていた。

シルヴェイア

「これは私を馬から落とした罪！」

バシンツ！

アンジユ

「ぐあっ！」

シルヴェイア

「これは私を歩けなくした罪！」



バシンツ！

アンジユ

「ぐあっ！」

シルヴィア

「これは私達に近づいた罪！」

バシンツ！

天馬

「ぐあっ！」

シルヴィア

「そしてこれは、生まれてきた罪です！」

バシンツ！   バシンツ！

アンジュ・天馬

「ぐあつ!!」

国民

「うおおおおお!」

アンジュ・天馬は体を拘束され、拷問台の上でシルヴィアからのムチ打ちを受けていた。モモカは側で兵士達に拘束され、ジュライとその補佐兼ミスルギ皇国近衛長官《リイザ・ランドック》は拷問台の下からその様子を眺め、国民はシルヴィアがムチで打つ度に歓声をあげる。

モモカ

「どうかお止めくださいシルヴィア様!こんな酷いこと…」

シルヴィア

「酷いですつて?このノーマが、汚らわしく強欲的で反社会的な化け物が、私のお姉様だったのですよ!それ以上に酷いことが、この世にあつて?謝りなさい!私がノーマだから悪いんです!ごめんなさい」つて!」

アキホ

「シルヴィア様の言う通りよ！」

マミ

「私達の人生を返して！」

トモミ

「友達面しやがって！このクソ女！」

元アンジュの友人、《アキホ》、《マミ》、《トモミ》が次けて言った。

ジュリオ

「感謝しているよ、モモカ。私達に断罪の機会を与えてくれたことを。」

モモカ

「えっ？」

ジュリオ

「洗礼の儀でアンジュリーゼの正体を暴いたのは、この私だ。16年もの間皇室に巣食っていた害虫はようやく駆除され、あとは地獄に送られ別の化け物に食い殺されたという報告を待つのみだった。だが驚いたことにコイツは死ななかつたのだよ。このままではのうのと生きのびかねない。そこでだ、お前を送り込んでやったのさ。私の手

でね。」

モモカ

「っ!?!」

ジュリオ

「二階の侍女が世界の果てに追放されたノーマに、簡単に会えるわけないだろう？ 踊らされていたとも知らずシルヴィアのために戦うお前達の必死の姿、実に滑稽だったよ。」

モモカ

「そんな…」

ジュリオは横目で怪しい笑みを見せた。モモカは自分がアンジュを誘き寄せるための駒だったと知り絶望した。

ジュリオ

「ノーマを守ろうとした馬鹿な皇后は死に、国民を欺いた愚かな皇后は処刑された!」

アンジュ

「処刑ですって!?!」

天馬

「そんな・・・ジュライ皇帝が処刑されたなんて・・・」

ジュリオ

「皇家の血を受け継ぐ忌まわしきノーマ、アンジュリーゼ！そして愚かな皇帝に従いアンジュリーゼに味方した愚かなノーマの男、松風天馬！お前達の断罪を以て皇家の肅清は完了する！今宵、この国は生まれ変わる！神聖ミスルギ皇国として！初代神聖皇帝ジュリオ一世がここに命ずる！このノーマ共を処刑せよ！」

「うおおおおお！」

ジュリオの言葉に、国民は大歓声をあげた。

アキホ

「アハハッ！惨め！」

マミ

「私達を騙していた罰よ！」

天馬

「どうして・・・どうしてアンジュさんが、こんな仕打ちを受けなきゃならないんですか

!? いったい何の罪で……!」

グシヤツ

アキホは天馬の顔に生卵を投げつけた。

アキホ

「黙れ、ノーマの男! 私があの女に何をされたか知ってるの?」

アンジユ

「ちよつと蹴飛ばして、す巻きにしたらだけよ! 大袈裟じゃないの? 死刑にされるほどの罪じゃない!」

マミ

「それは人間の場合でしょ!? アンタはノーマ、人間じゃない!」

トモミ

「沢山の人を不快に不幸にしたの。だから死刑なの。」

天馬

「それで黙って、殺されろって言うんですか!？」

アキホ

「悪いのはノーマよ！だから全部、アンジュリーゼが悪いのよ！」

トモミ

「ジュリオ様が死刑って言ってるんだから、死刑でいいじゃない！」

「そうだそうだ！」

「ノーマは処刑だ！」

モモカ

「アンジュリーゼ様は何も悪くありません！私はアンジュリーゼ様のおかげで幸せに  
…」

「つーるーせ！つーるーせ！」

モモカの言葉は国民達に届かず、国民は全員でコールを始めた。

アンジュ

(モモカと天馬と、あその人たちだけね。差別や偏見、ノーマだとか関係なく、私を受け入れてくれたのは。それに比べて、これが平和を愛するミスルギ皇国の民？言葉の通じない、醜くて汚い豚どもよ。

こんな連中を生かすために、私達ノーマは…)

すると・・・

「ラ〜ラ〜ラ〜ラ〜ラ〜ラララ〜、ラア〜ラ〜ラ〜ラ〜ラ〜ララ〜」

突然、見慣れない男が鼻唄を歌いながら拷問台の上に現れた。男は黒いズボンにピンクのシャツとグレーのジャケット姿。そして胸にマゼンタの2眼レフカメラをかけていた。

???

「ある人が言った。”人間は全て、生まれてきた罪を持ってこの世に生まれてくる”と。つまり、生まれてきた罪というのはノーマに限ったことじゃない。」

ジュリオ



「誰だ？」

???

「《門矢司》。只の通りすがりの写真家だ。」

ジュリオ

「わざわざ処刑の様子を撮りに来たわけか？いいだろう、いくらでも撮って帰るがいい。」

司

「ああ、好きなだけ撮らせてもらうぜ。」

と、司はジュリオにカメラのファインダーを向け撮影した。

カシヤツ

司

「アンタの間抜け面をな。」

ジュリオ

「はあ!？」

すると、司はアンジュと天馬に目を向けた。

司

「さっきの歌、《永遠語り》って言ったか？」

アンジュ

「えっ？ええ…」

天馬

「知ってるんですか？」

アンジュ

「ええ、お母様が教えてくれた歌よ。」

司

「歌ってみてくれよ。俺はアンタの歌う永遠語りが聴きたいんだ。」

アンジュ

「・・・わかったわ。」

アンジュは司に言われ、歌い始めた。国民達はコールを止めた。

シルヴィア

「それはお母様の歌よ！ノーマの分際で汚さないで！」

司

「いいじゃないか。俺が頼んだんだから。」

シルヴィア

「ですが！」

ヒュウウウウウ……ドーンッ！

突然、上空で閃光弾が炸裂し、暁ノ御柱の周囲を光で包み込んだ。その場にいた全員が目を瞑り、その隙にもう一人の男が黒いエアバイクに乗って拷問台の上に現れた。男はエアバイクを降り、アンジュと天馬の傍の兵士を殴り倒し、アンジュと天馬の縄を切った。光がおさまると、男の正体が発覚した。

タスク

「アンジュ、大丈夫？」

アンジュ

「た、タスク!?!」

アンジュと天馬の前に現れたのは、無人島で寝食を共にしたタスクだった。司はタスクのところへゆつくりと近づいた。

司

「遅いぞ、タスク。」

タスク

「すみません、タイミングを計ってたもので…」

天馬

「知り合いだったんですか?」

タスク

「最近知り合ったんだけどね…」

リイザ

「近衛兵! コイツらを取り押さえろ!」

リイザの指示で、近衛兵はアンジュ達の周囲を取り囲み銃を向けた。すると・・・。

「待ちやがれ！」

突然、何処かから別の男の声が聞こえてきた。拷問台とその周辺にいた全員が辺りを見回す。すると、絞首台のロープを固定する枠の上に、赤鬼と青鬼の仮面を被った二人の男が立っていた。

シルヴィア

「何ですか、あれ!？」

天馬

「鬼?！」

ジュリオ

「だ、誰だ!？」

赤鬼

「そう言うと思っていましたよ。」誰だお前達は? そんな仮面を被っていないで、下りて正体を見せたまえ。」そう言いたいのでしょ? 神聖皇帝ジュリオ一世殿。」

ジュリオ

「なっ!?!」

青鬼

「お望み通り、下りて俺達の顔を見せてやる。だがその前に、まずはソイツらを自由にしてからだ!」

赤鬼と青鬼は枠から飛び降り、赤鬼は天馬

・アンジュ・タスク・司のところに着地し、周囲の兵を回し蹴りで払った。青鬼はモモカを拘束している兵士に飛び蹴りを叩き込んだ。

ガッツ!

兵士は気を失い倒れ、赤鬼は天馬とアンジュの腕の拘束具を破壊し、青鬼はモモカを連れてアンジュ達の元へ駆け寄った。そしてアンジュがモモカの腕を拘束するマナの光を破壊した。

アンジュ

「助かったわ……。」

モモカ

「助けていただいて、ありがとうございます！」

天馬

「あの、あなた達は？」

青鬼

「やだなあキャプテン。俺達のこと、忘れちゃったんすか？」

赤鬼と青鬼は静かに仮面を外し顔を見せた。二人の顔を見て、天馬は思わず自分の目を疑った。

座名九郎

「お久し振りです、キャプテン。助けに来ました。」

天馬

「座名九郎！」

九坂

「いやあ、マジでヒヤツとしましたよ。ホントさつきまでリアルにムチ打ちされてたん

スから。」

天馬

「九坂！」

天馬とアンジュの前に現れたのは、かつてアースイレブンで天馬と共に戦った戦友、《九坂隆二》と《市川座名九郎》だった。

ジュリオ

「おのれえ、ノーマに与するテロリスト共め……！衛兵、そいつら全員まとめて撃ち殺してしまえ!!」

ダダダダダダダダダダダッ！

舞台の周りを取り囲む兵士達があらゆる方向からアンジュ達に銃を乱射。

モモカ・九坂・座名九郎

「マナの光よ！」



モモカ・九坂・座名九郎は障壁を展開し、弾丸からアンジュ達を守った。

ジュリオ

「なっ!?!お前たち、人間だったのか!?!」

九坂

「そう、俺達はマナ使いよ!」

座名九郎

「ですが、助けに来たのは我々だけではありません!」

ドタツ!

バキツ!

ドンツ!

突然、銃を乱射していた兵士達が次々に倒れていった。そして、倒れた兵士に代わって姿を現したのは……。

三国

「大丈夫か天馬！」

狩屋

「ちゃんと生きてる？幽霊じゃないよね？」

井吹

「すまない！遅くなった！」

野咲

「キャプテン！」

現れたのは、雷門中サッカー部とイナズマジャパンの選手たち。

天馬

「みんな！」

選手一同は天馬達の周りに集まった。さらに・・・。

ドーン！

兵士

「ぐはっ！」

ドーン！

兵士

「ぐほっ！」

ドーン！

兵士

「があっ！」

国民集団の方から突然、3つのサッカーボールが勢いよく飛んで来た。サッカーボールはジュリオの左右の兵士の顔面に激突し兵士は気絶。そして国民集団の中にいたの

は・・・。

白竜

「俺たちもいるぞ！」

シュウ

「天馬、無事かい？」

太陽

「天馬君、助けに来たよ！」

そこにいたのはアンリミテッド・シャイニングの白竜とエンシエント・ダークのシュウ、新雲学園の雨宮太陽だった。白竜・シュウ・太陽は大きくジャンプし、天馬達の前で着地した。

天馬

「太陽！白竜！シュウ！」

タスク

「あの、君たちは？」

三國

「俺達は雷門中学サッカー部。天馬の仲間だ。」

井吹

「同じく、F F I 日本代表イナズマジャパン！」

白竜

「同じく元ファイフセクター、アンリミテッド・シャイニングの白竜！」

シユウ

「同じくエンシエント・ダークのシユウ！」

太陽

「同じく新雲学園サッカー部の雨宮太陽！」

ジュリオとシルヴィア、そして国民集団は突然の出来事で混乱している。

ジュリオ

「お前たち、何故だ!?! 何故人間であるお前達人間ではないコイツらの味方をする!?!」

鉄角

「はあ? 何言つてやがんだお前? 人間じゃないってんなら、コイツらはいったい何なん

だよ？」

シルヴィア

「そいつらはノーマよ！私達の文明を破壊する、強欲的で乱暴で反社会的な化け物なのよ！」

車田

「ふざけるな！コイツらは人間で、俺達の仲間だ！ただマナが使えないってだけで、どつからどう見てもただの人間だろうが！」

アキホ

「ふざけないで！あんな強欲的で凶暴で乱暴でマナの使えない反社会的な化け物が、人間なわけじゃないじゃない！」

九坂

「……っ！おんどりやあああ!!」

九坂は目を見開き、バンダナを外し怒髪天モードへと変化しアキホを睨んだ。アキホは九坂に睨まれ恐怖した。

アキホ

「ヒイツ!？」

九坂

「だったら教えてくれよ。マナが使えるのにこんなにも凶暴で乱暴な化け物と化した俺の事は、いったいどう説明すればいいんだあ？ ああ!？ 言ってみろ!!」

九坂の怒髪天モードに、その場にいた国民全員が怯えた。

瞬木

「おいあんたら。」

瞬木は鳳凰院の生徒達に目を向けた。

瞬木

「沢山の人を不快に不幸にしたの。だから死刑なの。」そうさつき言ったよな？ じゃあ、彼女がノーマだと知らなかった間はどうなんだよ？ 彼女がいて不快だったか？ 彼女がいて不幸だったか？ 違うだろ？ 何事も無く生活出来てただろうが！ それが何だよ……。たかがノーマってだけで、掌返して死刑だとか吊るせとか、人生を返せとか

好き勝手言いやがって……。

どっちが化け物だ!!この腐れ切った愚民ども!!」

瞬木の発言に国民達は動揺したが、何も言い返せなかった。

シルヴィア

「わ、私があります！私はお姉様のせいで歩けなくなりました！お姉様が生まれて来なければ、私の足が動かなくなることは無かった……!」

真名部

「それ、彼女がノーマだと分かってからそう思い始めたのでは？」

シルヴィア

「えっ……?」

皆帆

「君は姉である彼女を心から愛していたはずだ。もし彼女がノーマだと知る前から足のことと彼女を恨んでいるというのなら、それは仕方ない。でも、彼女がノーマだと分かるまで君は彼女を慕っていた。なのに彼女がノーマと判明すれば結果がこれだ。どう



考えても都合が良すぎるよ。」

木葉

「姉妹なのに、酷い…」

シルヴィア

「黙れ…！黙れ黙れ黙れ！黙れえええええ!!」

シルヴィアは耳を塞ぎ頭を屈めた。

白竜

「これ以上ここに居ても意味が無い。逃げよう天馬。」

天馬

「でも、逃げようってどうやって…。」

フアーン！

突然、空から警笛と共に列車の様な飛行物体が姿を現した。

天馬

「ギャラクシーノーツ号！」

ドカーン！

ギャラクシーノーツ号は絞首台を破壊し、一同の後方で停車。ドアが開き、今度はシヨートボブの少女が姿を現した。

葵

「天馬、乗って！」

天馬

「葵！」

ジュリオ

「衛兵、そいつらを生かすな！全員まとめて射殺しろ！」

ジュリオは残りの兵士に指示を送り、兵士達はアンジュ達に銃を向けた。

司

「つたく、しょうがねえなあ。」

すると、司はポケットから白いバックルを取り出し腰に装着。そして一枚のカードをベルトにセットした。

《KAMEN RIDE 『DECADE』!》

司

「変身!」

司の周囲に十体の残像が現れ、残像は司に集まる。そして、司は仮面ライダーディケイドへと姿を変えた。

天馬

「あなた、仮面ライダーディケイド!？」

アンジユ

「この人が？」

《ATTACK RIDE 『ILLUSION』!》

デイケイドは更にカードをセット。すると、デイケイドの分身が二体現れた。デイケイドの分身は兵士達に襲いかかる。

デイケイド

「俺の分身が相手をする。その隙に乗り込め。」

天馬

「ありがとうございます！」

デイケイドの分身が相手をしている隙に、天馬・アンジュ・モモカはギャラクシーノーツ号に乗り込み、雷門イレブンとイナズマジヤパンも後に続いた。全員が乗り込んだ後、アンジュが乗り口から姿を見せ、ジユリオとシルヴィアを見た。

アンジュ

「感謝しますわ、お兄様。私の正体を暴いてくれて……。ありがとうシルヴィア。薄汚い人間の本性を見せてくれて。」

シルヴィア

「ヒイツ!？」

そしてアンジュは国民達に目を向けた。

アンジュ

「さようなら、腐った国の家畜ども！」

プシューー!

そう言うと、ギャラクシーノーツ号のドアが閉まり、ギャラクシーノーツ号は飛び立った。タスクとデイケイドはエアバイクに乗り込み後に続いた。

ジュリオ

「追え！絶対に逃がすな！」

タスク

「しっしっいぞー！」

シュツ！ザシュツ！

タスクはジュリオに向け手裏剣を投げた。手裏剣はジュリオの左頬に傷をつけ、傷口から血が吹き出した。

ジュリオ

「ぐあああああー！」

ジュリオは傷口を押さえ、ギャラクシーノーツ号とエアバイクは空の彼方に消えた。

## E p. 12 / 信じ合える者達 《後編》

「ギャラクシーノーツ号 ミーティングルーム」

数分後、タスクと司はエアバイクをオートドライブに切り替えギャラクシーノーツ号に乗り込んだ。一同はミーティングルームに集まった。

モモカ

「ごめんなさい…ごめんなさい…アンジュリーゼ様…」

アンジュ

「何言ってるの？おかげでスッキリしたわ。私には、家族も仲間も故郷も何もないってわかったから…」

モモカ

「アンジュリーゼ様…」

天馬

「それより、みんなどうしてあそこに？」

「ニュースを見て知ったんだ。」

すると、先頭車側から円堂と豪炎寺と鬼道、さらに葵と水鳥と茜、そして秋が現れた。

天馬

「円堂監督！それに豪炎寺さんに鬼道コーチ！葵に水鳥さんに茜さん！秋姉まで！」

円堂

「数時間前、俺達はお前がミスルギ皇国で捕らえられたとニュースで知って、雷門イレブンとアースイレブンのメンバーを集めて、お前達を助けに行くことにしたんだ。」

天馬

「でも、大丈夫なんですか？不法入国したうえにノーマを庇ったなんてことがバレたりしたら……」

鬼道

「それなら心配ない。知り合いに総理大臣の側近がいて、その人に総理の許可を取ってある。」

秋

「それと天馬、あなたに会いたい人がいるの。」



そう言うと、秋の背後から一人の少女が現れた。

天馬

「ココさん！」

ココ

「天馬さん！無事だったんですね！」

ココが現れて、アンジユとモモカは驚いた。

モモカ

「ココさん!？」

アンジユ

「なんで、雷門の人達と一緒にいるのよ？」

ココ

「実は皇宮前でロボットと遭遇した後、気が付けば秋さんの管理するアパートにいたんです。そこで秋さんとお話しをしていたら円堂監督と皆さんがアパートにやって来

て・・・。」

~~~~~

◇数時間前◇

　　木枯らし荘　食堂

　　円堂

「秋、いるか？」

　　秋

「円堂君。それに豪炎寺君に鬼道君にサッカー部のみんなまで。」

　　ココ

「知り合いですか？」

　　秋

「うん、私の友達と天馬の仲間達よ。どうしたの？」

　　豪炎寺

「テレビを見てくれ！天馬が大変なんだ！」

秋「えっ!？」

豪炎寺はテレビをつけた。

キャスター

『次のニュースです。日本時間の今日未明、ミスルギ皇国にて元ミスルギ皇国第一皇女、アンジュリーゼ・斑鳩・ミスルギと、その侍女モモカ・荻野目。さらに元日本の雷門中学校サッカー部キャプテン松風天馬君が拘束されました。神聖皇帝ジュリオ一世は、日本時間の今日深夜12時、暁ノ御柱前にて二人の断罪の儀を執り行うとのことです。ミスルギ皇国の日本大使館は、直ちに松風天馬君の解放を求めています。現在ミスルギ皇国側からの応答は無いとのことです。』

秋

「どういうこと!?!何で天馬がミスルギ皇国に!?!」

ココ

「・・・天馬さんと私とアンジュリーゼ様は、シルヴィア様を助けるために、アルゼナルを脱走したんです。」

秋

「えっ？」

葵

「秋さん、この人は？」

秋

「この子はココちゃん。ノーマよ。」

狩屋

「ノーマってなると、天馬君と同じか。」

鬼道

「シルヴィア・斑鳩・ミスルギ。確か皇女アンジュリーゼの妹だったな。」

ココ

「以前、アンジュリーゼ様のもとにシルヴィア様からのSOSが届いて、私と天馬さんはアンジュリーゼ様と共にアルゼナルを脱け出し、ミスルギ皇国に向かいました。」

豪炎寺

「だが本当の目的は、アンジュリーゼを誘き寄せ処分することだった。ノーマ嫌いのジュリオ皇帝ならやりそうなことだ・・・。」

ココ

「はい。私は運よく捕まらず逃げたのですが、突然目の前に大きなロボットが現れて、気が付けばこの木枯らし荘にいました。」

円堂

「ロボットか……。気になるがその件は後回しだ。」

鬼道

「円堂、既に伊吹達には連絡を入れている。あと一時間もすれば、全員がサッカーガーデンに集まるだろう。」

豪炎寺

「こつちも既に、太陽と白竜に連絡を入れている。直ぐに来てくれるそうだ。」

円堂

「よし、俺達もサッカーガーデンに向かおう。」

サッカー部

「はいっ！」

円堂

「秋、お前も一緒に来てくれ。」

秋

「わかったわ。」

ココ

「何をするのです？」

天城

「決まってるド！天馬を助けに行くんだド！」

ココ

「・・・どうして、そこまでするんですか？私達ノーマは、あなた達人間にとっては化け物です。なのに何で・・・。」

錦

「何でって、仲間だからに決まってるぜよ！」

錦の発言に、ココは驚いた。

水鳥

「天馬がノーマだったのは確かにショックだが、だからって見捨てる訳にはいかねえ！」

輝

「天馬君はキャプテンとして、僕たち雷門中サッカー部を率いてくれました！」

倉間

「天馬は、俺達に本当の雷門サッカーを思い出させてくれた。俺達を助けてくれたんだ！」

茜

「だから今度は、私達が助ける番。」

一乃

「人間でもノーマでも、そんなのは関係ない。」

青山

「天馬は俺達の仲間。仲間は、ずっといつまでも仲間なんだ！」

ココ

「仲間……。」

~~~~~

ココ

「それで私、この方達を信じてみようと思い同行させてもらったんです。」

天馬

「みんな……」

速水

「天馬君、良ければこのまま雷門に帰りませんか？」

浜田

「そうっすよ！いつそのこと、アンジュリーゼさんとその彼氏さんとメイドさんとココちゃんも連れてきー！」

天馬

「気持ち嬉しいですけど、今の俺達の居場所は、アルゼナルです。」

アンジュ

「私達は、あそこでやらないといけない事があるから。」

白竜

「そのやらないといけない事ってのは？」

アンジュ

「仲間を守るとか、ノーマの謎を解明するとか、色々・・・。」

シユウ

「なるほど。」

アンジュ

「ところで・・・。」



アンジユはタスクに目を向けた。

モモカ

「そういえばアンジユリーゼ様、この方とはどういった関係で？」

タスク

「えつと……ただならぬ関係で……」

アンジユ

「は、はあ!？」

その場にいた全員が驚いた。

モモカ

「やつぱり! そうでなければ、命懸けで助けに来たりしませんよね! 男勝りのアンジユリーゼ様にも、ようやく春が……。」

アンジユ

「勝手に進めないで! 天馬と一緒に、無人島で1週間程寝食を共にした仲よ!」

伊吹

「それ以外には？」

アンジュ

「・・・それだけ。」

アンジュは頬を赤くして答えた。

野咲

「なんか、間が空かなかった？」

天馬

「・・・でも、どうしてあそこにいたんですか？それに、何で司さんと一緒に？」

タスク

「連絡が来たんだ、ジルから。君達二人を死なせるなってね。」

アンジュ

「司令官から？」

タスク

「それで遠くから君達の様子を伺っているときに、彼に出会った。」

タスクは司に目を向けた。

タスク

「俺が事情を話すと、彼は”大体分かった”って言って協力してくれたんだ。」

アンジユ

「タスク、あなた何者なの？」

タスク

「・・・俺は、ヴィルキスの騎士。詳しくはジルに聞いてくれ。」

アンジユ

「は、はあ…」

天馬

「ところで司さん、あなた何者なんですか？」

司

「何度も言わせるな。俺はただの通りすがりの仮面ライダーだ。」

ココ

「その、仮面ライダーと言うのは？」

司

「そうだな・・・簡単に言うなら、お人好しだな。望めば神や悪魔や支配者にでもなれるほどの力を、悩んだり、責められたり、否定されても、その力を人の為に使ったお人好し。それが、仮面ライダーだ。」

天馬

「じゃあ、もしかして司さんも?」

司

「まあな。俺もかつては、世界の破壊者、と言われていたが、今は自分の死場所を探し旅をしている。その時に困っている奴を見かけたら助ける。それだけだ。」

天馬

「司さん・・・」

司

「だが、この世界に来て一つ分かったことがある。」

モモカ

「分かったこと?」

司

「この世界の人間はまともな人間じゃない。少なくとも、ここにいるあんた達は一番人

間らしく見える。強い欲を持ち、気に入らなければ逆らい、目的のために一生懸命になつて戦うあんた達がな。」



く太平洋 孤島く

一時間後、ギャラクシーノーツ号は太平洋に浮かぶ小さな孤島に到着した。

円堂

「本当にここでもいいのか？」

天馬

「はい。ここから先はタスクさんに送ってもらいます。」

アンジュ

「アルゼナルの秘密を知った人間は、タダじゃ済まされないからね。」

三国

「天馬、帰ったら神童達によく言っておいてくれ。」

秋

「気をつけてね、天馬。」

葵

「いつか、帰ってきてね!」

天馬

「秋姉、葵……ありがとう!」

天馬・アンジュ・モモカ・ココ・タスク・司を孤島に残し、ギャラクシーノーツ号は孤島を去った。モモカの手には、秋特製のクッキーが入った箱がある。

司

「じゃ、俺も失礼させてもらうぜ。」

天馬

「司さん?」

司

「安心しろ。俺はもうしばらくこの世界に止まるつもりだ。機会があれば、また何処か

で会おう。」

そう言うと、司は背中を向けて歩き出した。そして不思議な光のカーテンが現れ、司はカーテンの向こうに消えた。

—————

くアルゼナル ビーチく

その後、タスクはアンジュ達をアルゼナルへと送った。

タスク

「ここでお別れだね。」

天馬

「行くんですか？」

タスク

「まだやり残した事があるからね。」

アンジュ

「ありがとうタスク、来てくれて。」

タスク

「・・・それにしても、綺麗だった。」

アンジュ

「えっ?」

タスク

「あんなに綺麗で、心を捕まえそうになる歌声、初めてだった。それに、歌も良かった。何処か懐かしくて、嬉しいような、不思議な歌だった。また聞かせてね。」

アンジュ

「ええ、約束する。」

タスクはエアバイクと共にその場から離れ、水平線の彼方へと消えた。アンジュ達はタスクを見送った。

「男に送らせるとは、随分といい身分の脱走犯だな。」



後方から突然、ジルが現れた。

アンジユ

「ジル……。」

ジル

「まあ、お前達がただ脱け出したかった訳では無いというのは分かった。こうやって戻ってきたからな。」

アンジユ

「話してほしい事があるんだけど？」

ジル

「いいぞ。ただし……。」

アンジユ

「分かってるわよ。」

アンジユ・天馬・モモカ・ココは大人しく両手をあげた。

ジル

「……素直でよろしい。」

ジルはアンジュ達を連れてアルゼナルの中へと入った。

—————

くアルゼナル 反省牢く

アンジュ・天馬・ココは反省牢へと入れられた。鉄格子の向こうにはジルとモモカとゾーラとミランダが立っている。

ジル

「サリア隊アンジュ・天馬・ココ。お前達は脱走の罪により、一週間の謹慎。ただ今回の件は、お前達がただ逃げ出したという意思ではなかった事が分かった。それに向こうで相当痛い目に会ってるみたいだから、その傷に免じて資産・財産没収は免除してやる。」

ゾーラ

「無事で良かったよ、ホント。」

ミランダ

「それで、妹さんには会えた？」

ミランダの問いに、アンジュは答えなかった。

ミランダ

「アンジュ？」

天馬

「今はそつとしておいてください。」

ゾーラ

「・・・相当酷い目に会ったようだね・・・」

ゾーラはアンジュの身体の無数の傷を見て同情した。

ココ

「ゾーラ隊長・・・」

ジル

「ゾーラ、サリア隊にはお前から伝えておいてくれ。」

ゾーラ

「了解。じゃあなアンジュ、天馬。」

ミランダ

「安心して。モモカは私が預かるから。」

ジル・モモカ・ゾーラ・ミランダはその場を去った。

アンジュ

「……。」

「よう、帰ってきたんだな。」

突然、向かいの牢から聞き覚えのある女の声がした。

天馬

「劍城。それにヒルダさん。」

向かいの牢にいたのはヒルダと劍城だった。二人の顔には幾つものアザがある。

アンジユ

「その顔、どうしたの？」

ヒルダ

「ポリ公50人にボコられたんだ。でも、劍城が全員再起不能にしてやったけど。」

劍城

「そっちはどうだった？シルヴィア様には会えたのか？」

天馬

「会えたよ。でも……。」

アンジユ

「処刑されそうになったわ。」

ヒルダ

「はあっ!?!」

アンジユ

「私も天馬も身体をムチで叩かれて、罵声を浴びせられ、首をつられそうになった。」  
ヒルダ

「へえ、中々じゃん。」

ココ

「お母さんには会えましたか？」

ヒルダ

「・・・さあ・・・」

ヒルダはそう言うと、ベッドでシーツを被り眠りについた。だが次の日・・・。

ヒルダ

「嫌だ・・・嫌だ・・・ママ！」

ヒルダは突然飛び起きた。

ヒルダ

「はあ……………はあ……………」

劍城

「大丈夫ですか？」

ヒルダ

「あ、ああ……」

向かいの牢から、アンジュ・天馬・ココが心配そうに見ていた。

アンジュ

「ヒルダ、どうしたの？」

ヒルダ

「何でもねえよ！何でも……」

天馬

「……もしかして、お母さんに会えなかったんですか？」

劍城

「いや、会うことは出来たんだ。だが……」

劍城は自分達がエミリアに会い、その後警察に捕まるまでの経緯を話した。

ココ

「そんな事が…」

天馬

「知らぬ間にマナを持つ同名の娘を持ち、実の娘である自分は化け物呼ばわりか…。」

ヒルダ

「ママだけは、受け入れてくれると思ってた。ママだけは、ノーマのアタシを許してくれると思ってた。でも、ダメだった。あれがノーマってことなんだ…」

ヒルダの眼から、涙が静かに流れた。

ヒルダ

「外の世界に、ノーマの居場所なんてなかったんだ…」

天馬

「でも、ここには仲間がいるじゃないですか。ヒルダさんを慕ってくれる仲間が。」

ヒルダ

「仲間？ いねえよ、そんなの。生きていくために、ロザリーやクリスに合わせてただけ



「さ。」

天馬

「ヒルダさん…」

ヒルダ

「あーあ、なんもなくなっちゃったな。部屋も金も生きてる理由も。いつそのこと、殺してくれねえかな？」

劍城

「やめてくださいよ、そんなの…」

ヒルダ

「劍城、お前アタシに生きろって言うのかい？こんなドン底なのに、希望だけは捨てずに生きろって？」

劍城

「あなたに希望があるかどうかは分からない。ただ俺は、俺の希望を失いたくないだけなんだ。」

ヒルダ

「…えっ？」

劍城

「ヒルダさんは俺の事を仲間と想ってくれているのかは問いません。ですが、少なくとも俺はヒルダさんを仲間だと思っっています。」

ヒルダ

「劍城…」

アンジユ

「あるのは迫害された現実と、ドラゴンと戦う日常だけ。バカバカしくて笑えてくるわ。偏見と差別に凝り固まった愚民ども。ノーマっただけでバカみたいに否定しか出来ない。でも……。」

『ふざけるな！コイツらは人間で、俺達の仲間だ！ただマナが使えないっただけで、どっからどう見てもただの人間だろうが！』

『天馬君、良ければこのまま雷門に帰りませんか？』

『そうっすよ！いつそのこと、アンジユリーゼさんとその彼氏さんとメイドさんとココ

「ちゃんも連れてさー!」

アンジユの脳裏に、かつての天馬の仲間達の笑顔が浮かんだ。

アンジユ

「天馬の仲間に使われて、少し分かったわ。世の中には、ノーマを受け入れようとしてくれる人間がいるって。」

天馬

「アンジユさん……。」

アンジユ

「でも、大概の人間はノーマってだけであの態度。マナが使えないのがそんなにいけないことなの? 違ってちやいけないの?」

全部嘘っぱちなよ。友情も家族も絆も、何もかも……。

壊しちゃおつか? こんな腐った世界全部。」

天馬

「えっ？」

アンジユ

「出来そうじゃない？パラメイルとアルゼナルの武器があれば。」

ヒルダ

「本気か？地上まで何千キロあると思ってるんだ？」

アンジユ

「長時間稼働できる機体を作ればいいじゃない。」

劍城

「食料は？」

アンジユ

「魚ならいくらでもいるわ。」

ココ

「資材は？」

アンジユ

「何とかなるわよ。」

アンジユは立ち上がり、鉄格子の窓から空を見上げた。

アンジユ

「私を虐げ、辱め、陥れるしかできない世界なんて、私から拒否してやる！ぶっこわしてやるわ、こんなムカつく世界全部！」

ヒルダ

「ははっ、いいねえ！協力してやってもいいよ？アタシもアタシ達を殴ったポリ公に仕返ししてやりたいしねえ。」

天馬

「俺も付き合います。こんなの言うのはアレですけど、俺もミスルギ皇国の人達には頭に来てたんです。特に、ジユライ皇帝を処刑したジユリオ一世に。」

劍城

「同感だな。俺も付き合いますよ。」

ココ

「私も！」

アンジユ

「みんな…」

ココ

「ん？でも全部ってことは日本も含まれるわけだから・・・。」

アンジュ

「少なくとも、天馬の仲間達は生かすつもりよ。助けてもらった恩があるしね。」



くミーティングルームく

それから1週間後、第一中隊はミーティングルームに集まっていた。

ゾーラ

「・・・ってわけだ。」

エルシヤ

「アンジュちゃん、妹さんを助けるために脱走したのね…」

ロザリー

「でもって、ヒルダはホームシック。天馬と剣城とココはそれに同行したってか。」

神童

「・・・そういえば、ナオミさんは帰ってきてないんですか？」

ゾーラ

「ああ。しかも後日ノーマが到着するという情報も一切無い。マジで消息不明ってやつだ。」

信助

「無事かな、ナオミさん…」

クリス

「何れにしたっていい迷惑だよ。2度と出てくるな。」

サリア

「それは無理よ。五人共、今日で謹慎解除だから。」



く反省牢く

一方、反省牢のアンジュ達はすっかりやつれていた。

ココ

「お腹すいたあ…」

ヒルダ

「まあ、ダイエツトだと思えばいいんじゃないね？」

アンジュ

「それよりお風呂よ。今日で何日？」

ヒルダ

「1週間…」

アンジュ

「どうりでそんな臭いがすると思った…」

天馬

「贅沢言いませんから、せめて水浴びしたい…」

劍城

「同感だ…」



ゴゴゴゴゴゴ……。

突然、外から雷鳴が聞こえてきた。天馬・アンジュ・ココは窓の外を見たが、外には雨雲一つ見えない。

天馬

「……気のせいかな？」



く指令部く

一方、指令部にはジルとエマ。オペレーターのパメラ、ヒカル、オリビエが待機していた。すると……。

パメラ

「シンギュラー反応確認！」

ジル

「場所は？」

パメラ

「それが・・・。

「アルゼナル上空です！」

T  
o  
B  
e  
C  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
:

## E p. 13 / 天使と竜の輪舞

く妖魔界く

ここは様々な妖怪達が住む妖魔界。

エンマ大王

「竜の民が遂に動き始めたようだな。」

彼の名は《エンマ大王》。妖怪たちの頂点に立つ妖魔界の大王である。

エンマ大王

「奴が手を出すのも時間の問題か……。」

エンマ大王は手鏡で人間界の様子を伺っていた。

エンマ大王

「少し早いが、やむ追えん。明日人、聞こえるか？」

『はい。』

エンマ大王

「FXと共に、直ちに妖魔界へ戻ってきてくれ。お前に渡したい物がある。」



くアルゼナル 上空く

「ギヤアアアアアア！」

一方、アルゼナルの上空には巨大なシンギュラーが出現し、中から大量のスクウナー級ドラゴンが現れた。



「司令官のジルだ。第一種戦闘体制を発令。基地上空にシンギュラーが発生し、大量のドラゴンが接近中だ。パラメイル隊は直ちに全機出撃。総員、対空火器及び重火器の使用を許可する。総力をもってドラゴンを撃破せよ！」

エマ

「パラメイルを全機出撃させたら、基地は誰が守るのですか!？」

すると、パメラがエマにアサルトライフルを投げ渡した。

ジル

「基地は私達が守るんです。」

エマ

「ええええええええ!？」

ガシャーン!

突然、指令部の正面から一体のスクウナー級ドラゴンが突っ込んできた。ドラゴンは窓を粉碎し中へ侵入。

「ギャアアアアアア！」

エマ

「ヒイツ!?!」

ドラゴンの声を聞いたエマは突然目が虚ろになり、ドラゴンにライフルを向けた。

エマ

「悪イヤツ……死ンジャエー！」

ダダダダダダダツ!

エマは指令部中にライフルを乱射しドラゴンを攻撃。

ガツツ! バーン!

ジルはエマの後ろ首にチョップを叩き込み、腰に装備していたリボルバーでドラゴン



に止めを刺した。

パメラ

「司令、リーダーと通信機が！」

ジル

「現時刻をもつて指令部を破棄。臨時指令部に移行する。」



くデツキ パラメール格納庫く

ダダダダダダダッ！

その頃、パラメール第二・第三中隊が出撃したデツキでは第一中隊と整備班がドラゴンと交戦していた。

クリス

「数が多すぎる！キリが無いよ！」

ゾーラ

「これじゃあパラメイルを出せねえ！」

すると突然、アルゼナル全体に謎の女性の歌が聞こえ始め、ドラゴンがアルゼナルを離れシンギュラーへと戻っていった。

信助

「あれ？ドラゴンが逃げてくよ！」

神童

「それに何だ？この歌は……。」

ドラゴンはシンギュラーを囲むように旋回する。すると、シンギュラーの中から今まで見たことがない三機のパラメイルが姿を見せた。三機は同じ外観をし、それぞれ赤・青・緑のボディカラーと四基のスラストター。さらに腰には見たこと無い銃を装備していた。

サリア

「パラメイル?!」

ミランダ

「でも、あんなの今まで見たこと無い。」

すると、赤いパラメイルが突然金色に変わり、肩の装甲が変形し、肩から竜巻を纏った青い光を発射した。

バシユウウウウウウ!!

光線はパラメイル第二・第三中隊を飲み込み、第二・第三中隊は消滅。さらにアルゼナルの西側に命中し、辺りは眩い光に包まれる。光がおさまると、アルゼナルの西側半分が跡形もなく破壊されていた。

「ギャアアアアアア!」

上空から再び、大量のドラゴンが襲いかかってきた。



く反省牢く

一方、反省牢のアンジュ達は・・・。

アンジュ

「いったあ・・・」

天馬

「いったい何だ？」

天馬は窓から外を見る。すると・・・。

天馬

「つ!?!みんな避けて！」

ドカーン！

突然、スクウナー級ドラゴンが窓のある壁を突き破りアンジュ達の牢へと突っ込んだ。ドラゴンはそのまま鉄格子を破壊し、ヒルダ達の牢へと突っ込んだ。

ココ

「ど、ドラゴン？」

ヒルダ

「どっから飛んできたんだ？」

ドラゴンは大量の血を流し、既に死んでいた。すると・・・。

モモカ

「アンジュリーゼ様！天馬さん！ご無事ですか!？」

反省牢の入り口にある鉄格子のドアの向こうにモモカが現れた。

アンジュ

「モモカ！」

アンジュ達は牢の外へ出るとモモカの元へと向かい、モモカはマナの光で通路のドアを開けた。

天馬

「助かりました！」

モモカ

「いえ・・・ん？」

突然、モモカが後ろを向き鼻を塞いだ。

ココ

「どうしたの？」

モモカ

「あ、いえ！何でも…」

劍城

「つたく、せつかく帰ってきたのに……。いったい誰だ、こんなことしたのは！」  
ヒルダ

「パラメイルのところに行けば、きっと何か分かるだろ？」

アンジユ

「急ぎましょう！」

一同は反省牢を後にし、パラメイル格納庫へ急いだ。



く臨時指令部く

オリビエ

「第二中隊、消滅！」

ヒカル

「第三中隊、隊長機以下四機ロスト！」

ジル

「指揮系統を第一中隊サリアに集約。残存するパラメイルは全てドラゴンの迎撃にあたらせろ。」



くデツキ カタパルトく

その頃、カタパルトにはペガサス、ランスロット、グレイブヒルダ・カスタム、グレイブココ・カスタムを除く第一中隊のパラメイル全機がスタンバイしていた。

ジル

『聞いた通りだサリア。それと、アンジユを復帰させろ。アンジユとヴィルキスでなければ、あの機体は抑えられん。』

サリア

「だったら、私がヴィルキスで出るわ！」

ジル





オリビエ

「第一中隊、出撃しました！」

ジル

「よし。」

ジルはマイクを手に取り、ヴィルキスに通信を送った。

ジル

「アンジユ、お前の相手はあの所属不明機だ。未知の大出力破壊兵器を搭載している。注意しろ。」

『分かってるわ、ジル。』

だが、聞こえてきたのはアンジユの声ではなく、サリアの声だった。

ジル

「サリア!？」



くパラメール格納庫く

その頃、アンジユとヒルダとココはライダースーツに着替え、天馬・劍城・モモカと共にパラメール格納庫へとやって来た。だが格納庫には待機しているはずのヴィルキスが無く、出撃しているはずのアーキバスサリア・カスタムがあつた。

アンジユ

「ヴィルキスが無い!」

ヒルダ

「まさか、吹っ飛んだのか!？」

すると、六人のもとにミランダがやって来た。

ミランダ

「みんな！」

天馬

「ミランダさん！」

ココ

「ミランダ、アンジュ様のヴィルキスを見てない？」

ミランダ

「それが、サリア隊長が勝手に乗っていった…」

アンジュ

「えっ？」



くアルゼナル上空く

その頃、第一中隊がドラゴンと交戦する中ヴィルキスに乗るサリアはフライトモードで所属不明機のもとへ向かっていた。

ジル

『何をしているサリア！命令違反だ、降りろ！』

サリア

「うるさい！黙ってて！」

ジル

『っ!?!』

サリア

「見せてあげる。アレクトラの代わりに私が！」

サリアは通信を切りエンジンの出力を上げる。だが、出力が思った以上に上がらない。  
い。

サリア

「どうしたのよヴィルキス！もつと早く飛べるでしょ！」

すると、後方からスクウナー級ドラゴン三体がヴィルキスを追ってきた。サリアは急

降下しドラゴンを振り切ろうとするが振り切れない。

サリア

「変よ。ヴィルキスがこんなにパワーが無いなんて……。アンジュが乗ってたときはもつと……。」

ダダダダダダダッ！

突然、後方から誰かがスクウナー級ドラゴン三体を撃ち落とした。サリアが後方を見ると、グレイブヒルダ・カスタムに乗るヒルダとアンジュ、グレイブココ・カスタムに乗るココとミランダ、ペガサスに乗る天馬とランスロットに乗る剣城が追いかけてきた。

アンジュ

『ちよつと、胸苦しい！』

ヒルダ

『狭いんだから我慢しろ！』

四機はヴィルキスを挟むように両サイドに別れて飛行する。

アンジュ

「サリア、私の機体返して！」

天馬

「今すぐヴィルキスから降りてください！あの機体は、俺とアンジュさんで！」

サリア

「私のヴィルキスよ！」

サリアはヴィルキスの出力を上げ、所属不明機に突っ込んだ。

天馬

「くそっ…ココさんとミランダさんは、劍城と一緒に残存機の援護に向かってください！ヴィルキスと所属不明機の相手は俺たちが！」

劍城

「了解した！」

ココ

「分かりました！」

劍城・ココ・ミランダはドラゴンと交戦する残存機の援護に向かい、天馬・アンジュ・ヒルダはヴィルキスを追いかけた。

ダダダダダダダッ！

サリアは所属不明機の内の赤い機体と交戦していたが、ヴィルキスの攻撃は全て回避されていた。

サリア

「馬鹿にして！」

『アンジュとヴィルキスでなければ、あの機体は抑えられん。』

突然、サリアの頭の中をジルの声が過った。



サリア

「アンジュなんて、ちよつと操縦が上手くて器用なだけよ！」

ダダダダダダダダッ！

ムキになるサリアは赤い機体に向けて銃を乱射するが当たらない。

『どんなに頑張っても、出来ない奴は出来ない。』

サリア

「違う！そんなこと無い！私は、誰より頑張ってきたのよ！」

『無駄だ。』

バコンッ！

突如、ヴィルキスは赤い機体のキックを食らい、バランスを崩し海へと急降下した。

天馬

「ヴィルキスが！」

アンジユ

「ヒルダ、追って！」

ヒルダ

「何する気？」

アンジユ

「飛び乗るわ！」

ヒルダ

「はあ!?!・・・まあ、あんたらしいか。」

ヒルダは笑顔で答えた。

ヒルダ

「突っ込むよ！」

アンジユ

「OK!」

アンジユはヒルダに抱きつき、ヒルダはグレイブを急降下させヴィルキスを追いかけた。その隙に、所属不明の青い機体はペガサスに。緑色の機体は残存機が交戦するエリアへと向かった。青い機体の接近に気づいた天馬はソニックバレットとアブソープシールドを構え、緑色の機体の存在に気づいた信助がタイタニアスと共に向かった。

天馬

「邪魔はさせない!」

信助

「僕が相手になってやる!」

一方サリアは落下するヴィルキスを動かそうとするが、ヴィルキスは反応しなかった。

サリア

「どうして動いてくれないの!? 動いてよヴィルキス! 動いてくれないと、大好きなアレクトラの役に立てないのよ…」

アンジュとヒルダはヴィルキスの直ぐ後ろまで来ていた。ヒルダは落下するヴィルキスへ慎重に接近し、ヴィルキスのコックピットがアンジュの頭上に来るようにした。

ヒルダ

「今だー!」

アンジュ

「はああああああー!」

アンジュはヒルダのグレイブを飛び降り、ヴィルキスに乗るサリアの後方に飛び乗った。ヒルダはアンジュが飛び乗った事を確認すると上昇し、アンジュはサリアの後方から操縦桿を握り体制を整えた。

アンジュ

「よしっ!」

サリア

「無理よ、既に落下限界点を越えてる。落ちるしかないわ……。」

アンジユ

「無理じゃないわよ、この子なら！」

アンジユは勢いよくスロットルを回す。

キイイイイイイイツ！

すると、ヴィルキスのエンジンが息を吹き返した。

サリア

「えっ？」

アンジユ

「上がれえええええっ!!」

アンジユはヴィルキスのエンジンを全開にし、水面ストレスで上昇した。

アンジユ

「よし！後は……。」

アンジユはヴィルキスを操縦し、ヒルダのグレイブの真上に来た。

アンジユ

「ヒルダ、落とすから拾って。」

ヒルダ

「あいよ、イタ姫！」

サリア

「何する気？」

アンジユ

「アンタを降ろすの。」

アンジユはサリアを持ち上げ、そのまま放り投げた。

サリア

「うわああああああ!？」

ドンツ!

サリアはヒルダの後方に落ち、即座にヒルダの身体に抱き付いた。

アンジユ

「じゃあ、やりましょうか!」

アンジユはヴィルキスをアサルトモードに変形させ、ライフルと剣を装備し赤い所属不明機へと向かった。

???

「ようやく来ましたか。その実力、見せてもらいます。」

赤い所属不明機は右手甲に刃を出現させヴィルキスの剣を受け止め、二機は一定の距

離を保ち回転しながらライフルを撃ち合った。

ヴィヴィアン

「スッゲー！」

ガンッ！

一方、信助のタイタニアスは緑の所属不明機にタックルし突き飛ばした。

信助

「どうだ！」

緑の所属不明機はバランスを失うが直ぐに立て直し、シンギュラーへと向かった。

???

「私の碧龍號のパワーをも凌ぐなんて．．．。」



一方、天馬のペガサスは青い所属不明と格闘戦を繰り広げていた。

天馬

「そこだ！」

ガンツ！

ペガサスは青い所属不明機の頭部に強烈なストレートパンチを叩き込み相手を殴り飛ばした。青い所属不明機はバランスを失うが直ぐに立て直し、シンギュラーへと向かった。

???

「機動性は、私の蒼龍號より上だというのか!？」

ガンツ！

さらにアンジュのヴィルキスが赤い所属不明機の腹部に強烈なキックを叩き込み蹴

り飛ばした。赤い所属不明機はシンギュラーの前で静止し、後方には青と緑の所属不明機。そしてヴィルキスの後方にペガサスとタイタニアスが集まった。

信助

「アンジユさん！」

アンジユ

「天馬！信助！」

???

「♪」

すると、またしても謎の女性の歌が聞こえ始め、赤い所属不明機が金色に変わり、肩の装甲が変形した。

アンジユ

「これって……。」

天馬

「アンジュさん、永遠語りだ！」

アンジュ

「えっ？」

天馬

「相手が歌で攻撃してきたのなら、こっちも歌で対抗するしかありません！」

アンジュ

「アイツみたいになれっの!？」

天馬

「サリアさんがあそこまでヴィルキスに拘るんですから、ヴィルキスはただのパラメイルではないと思うんです！掛けてみる価値はあります！」

アンジュ

「・・・わかった、やってみるわ！」

天馬

「信助、方が一に備えてバリアの展開準備だ！」

信助

「おう！」

天馬のペガサスと信助のタイタニアスはヴィルキスの横に移動し、ペガサスはアブソープシールドを構え、タイタニアスは両手を突き出し方が一に備えた。

アンジュ

「〜♪」

アンジュは天馬に言われた通り永遠語りを歌い始める。

キイイイイイインツ!

アンジュ

「っ!?!」

すると突然、アンジュの指輪とコックピットのディスプレイが光り出し、徐々にヴィルキスのボディが金色に変わり、肩の装甲が変形した。

天馬

「これは!？」

バツシユウウウウウウウウ!!

赤い所属不明機は竜巻を纏った青い光、ヴィルクスは赤い光を放った。両機の放った光は中間で衝突し、辺りは眩い光に包まれた。

天馬

「・・・う、どうなったんだ?」

気が付けば、六機は不思議な空間にいた。

???

「なにゆえ偽りの民が、誠なる星歌を?」

アンジユ

「えっ?」

三機の所属不明機のコックピットのハッチが開き、青い機体からは青色の衣装を纏った紫色の髪と赤い瞳の女性、緑の機体からは緑色の衣装を纏った赤髪と黄色い瞳の女性、そして赤い機体からは桃色の衣装を纏った長い黒髪と青い瞳の女性が現れた。アンジュ・天馬・信助はコックピットのハッチを開け姿を見せた。

アンジュ

「あなたこそ何者？その歌は何？」

アンジュは黒髪の女性に質問で返す。

???

「白き翼を持つお主、いったい何者だ？」

天馬

「聞きたいのはこつちですよ。アナタ達はいつたい……。」

???

「私と力で張り合うなんて、アナタは何者なのですか？」

信助

「あなた達こそ、いったい誰なんですか!？」

キイイイイインツ!

突然辺りが光り出し、一同の前に様々な光景が写し出された。原始時代で生きる人々、刃をぶつけ合う騎士、戦場で兵士に花束を渡す少女、極平凡な学生達の日常、燃え盛る城で刀をぶつけ合う武将、某作品の如く宇宙戦争へと繰り出す兵士達、そして共に同じベッドで眠る恋人。だが、そこにいる人々は全てアンジュ達であった。

アンジュ

「これは……。」

ビビビビツ!ビビビビツ!

突然、赤い機体からブザーが聞こえてきた。

???

「時が満ちるか……真実は、アウラと共に。」

キイイイイイインツ！

再び辺りは眩い光に包まれ、気が付けば謎の機体とドラゴン、そしてアルゼナル上空に開いたシンギュラーは消えていた。

アンジユ

「真実……？」

サリア

（あれが、本当のヴィルキス……。ジルの言うとおりでった……。）  
ヒルダ

「どうにか終わったみたいだね。」

サリアはそっとヒルダの背中に寄りかかった。



ヒルダ

「アンジュと全然違う感触……。」

サリア

「ええ、全然違うわ……。」

ヒルダ達第一中隊と残存機はアルゼナルへと戻った。

サリア

「ところでヒルダ。」

ヒルダ

「あ?。」

サリア

「臭いんだけど……。」

ヒルダ

「はあ!。」

ミランダ

「そういえばココ、アンタも・・・。」

ココ

「ごめんなさい、1週間も反省牢の中だったから・・・。」



くヴィヴィアンとサリアの部屋く

夕方、ヴィヴィアンは自分の部屋に戻りハンモックに横になった。

ヴィヴィアン

「アンジュ、綺麗な歌だったニヤく……。」

ヴィヴィアンはそのまま眠りについた。



くグラウンドく

一方、ジルはマギーと共に破壊された場所を見に来た。

ジル

「これこそ、散々たる有り様ってやつか・・・。」

マギー

「それより大変だよ。プラートがやられた。」

ジル

「なにつ!?・・・どれだけでもっ?」

マギー

「分からん。だが、そう長くはもたない。」

ジル

「・・・そうか。」

ジルはそういうと、その場を後にした。

ジル

(最後の封印を解く鍵は、歌か・・・。)

T o B e C o n t i n u e d . . .

# E p. 14 / 明かされる過去、明かされる真実

くアルゼナル 襲撃跡く

ドラゴンの襲撃があつた日の翌日、アルゼナルは朝から大忙しだった。ジャスミンは所属不明機の謎の攻撃によつて破壊された場所に穴を掘り、そこにドラゴンの遺体を集めた。

ジャスミン

「まさか、ドラゴンが直接アルゼナルを襲撃しに来るとはね．．．。」



くデツキく

一方、司令部ではパメラ、ヒカル、オリビエの三人が瓦礫の撤去と装置の復旧作業。整備班は生き残ったパラメイルのフルメンテナンス。マギーと医療班は負傷者の搬送と手当、そして遺体の回収。そしてジルはサリアとヴィヴィアンを除くパラメイル第一中隊のメンバーと、生き残ったメイルライダーをデッキに集めた。

ジル

「生き残ったのはこれだけか……。指揮経験者は？」

ヒルダ・ゾーラ

「……」

ヒルダとゾーラは静かに右手を上げた。

ジル

「現時刻をもつて、パラメイル部隊を再編成する。暫定隊長ゾーラ。暫定複隊長ヒルダ。パラメイル隊は部隊編成の後、警戒体制に入れ。」

「イエス・マム！」

パラメイル隊は敬礼をし、その場を離れた。だが、アンジユ・天馬・モモカの三人はその場を離れなかった。

ジル

(全て壊して作り直すか……。)

アンジユ

「ねえ。」

ジル

「ん？」

アンジユ

「私と天馬の謹慎、終わったのよね？」

ジル

「ああ。」

天馬

「じゃあ、約束通り全て話していただけますか？」

ジル

「……いいだろう。お前達には随分と世話になったからな。ただし、侍女は無しだ。」

モモカ

「あうう……」



「ヴィヴィアンとサリアの部屋」

一方、ヴィヴィアンは自分のハンモックでぐっすり眠っていた。

「ブチッ！ ドサッ！」

ヴィヴィアン

「いったあ……」

ハンモックを支えてるロープが切れ、ヴィヴィアンはコンクリートの床の上に落ち、





「何でお風呂に？」

ジル

「秘密の話はさらけ出してするものさ。それで、何処から聞きたい？」

アンジュ

「最初から。ドラゴンとあの女、パラメールとお母様の歌、あなたとタスクの関係、全部よ。」

ジル

「・・・昔々、あるところに神様がいました。」

アンジュ

「えっ？」

ジルは突然昔話を始めた。

ジル

「神様は繰り返し返される戦争とボロボロになった地球に、うんざりしていました。」

天馬

「何の話ですか？」

ジル

「何って、最初から全部だ。長々と説明するより、こうやって話した方が聞く方も楽だろ？」

天馬

「は、はあ……」

ジル

「続けるぞ？」

平和、友愛、平等。口先では美辞麗句を歌いながらも、人間の歴史は戦争と憎悪と差別の繰り返しです……。

それが人間の本質。このままでは、世界は滅んでしまいます。そこで神様は、新しく作ることにしたのです。新しい人類を。争いを好まない穏やかな人間。あらゆる物を思考で自在にコントロール出来る高度情報化テクノロジー、マナ。

あらゆる争いが消え、あらゆる望みが叶い、あらゆる物を手にすることのできる理想郷が完成したのです。あとは、新たな人類の発展を見守るだけ……のはずでしたが……」

天馬

「でしたか？」

ジル

「生まれてくるんです。何度システムを作り直しても、マナの使えない女性の赤ん坊が……。古い遺伝子を持った突然変異が……」

突然変異の発生は、人々の不安を掻き立てました。ですが、神様はこの突然変異を利用することにしたのです。

”彼女達は世界を拒絶し破壊しようとする反社会的な化け物、ノーマである”という情報を植え付けたのです。世界はノーマに対処するため絆を強め、人々も差別できる存在がいることに安堵し、安定しました。

生贄、犠牲、必要悪・・・言い方は何だつて構いません。私達は世界を安定させるため、差別させるためだけに作られた存在なのです・・・。」

アンジュ

「・・・バカバカしい。よくもまあ、そんな話を思い付いたわね。」

ジル

「昔、本人に聞いたからな。」

天馬

「本人って、その神様ですか？」

ジル

「まあな。ただ正直に言うなら、神様の存在と言うのが妥当だろう。」

アンジュ

「で、続きあるんでしょ？」

ジル

「そう急かすな・・・。」

こうしてマナの世界は安定し、繁栄の歴史が始まるはずでした。しかし、それを許さない者達がいきました。」

天馬

「許さない者達？」

ジル

「それはかつて“黄金の国”と呼ばれたアジアの島国、日本の民。そして突然世界から追放されたマナの使えない古い人類の生き残り、《古の民》。」

日本の民はノーマを否定する世界に対し、人間とノーマが共存できる社会を作ろうとしました。しかし、世界はそれを許してはくれませんでした。

そこで日本の民は、世界中から逃亡してきたノーマの受け入れを全面的に行い、マナを持つ他国の人間の来港を規制し、マナによって動く乗り物や機械等の導入を全面的に拒絶し、その時は既に見放されていた石油等の地下資源と電気を主流としたテクノロジを再開発し、マナ社会の中で唯一マナのテクノロジを持たない独立国になったの

です。」

天馬

「そうだったのか……。」

ジル

「一方、古の民は自分達の居場所を取り戻すため何度も神様に挑みました。長きにわたる戦いの末、彼らはずいぶん手に入れたのです。」

神の兵器、《ラグナメール》。破壊と想像を司る機械の天使。パラメールの原型となった絶体兵器だ。」

アンジユ

「それが、ヴィルキス……」

ジル

「……これで神様と同等に戦える。古の民はそう思いヴィルキスに乗り込んだ。だが、彼らにヴィルキスは使えなかった……。」

鍵がかかっていたんだ。虫けらむけらごときが使えないようにな。」

天馬

「だから、サリアさんが乗ったときヴィルキスは本来の性能を發揮しなかったのか。」

ジル

「生き残った仲間はあと僅か。古の民は滅びを待つだけであった……。」

そんな時だ。世界の果てに送られたノーマが、パラメールに乗ってドラゴンと戦わさ  
れていると知ったのは。彼らはアルゼナルに向かい、そして出会った。古の民とノ  
マ、捨てられた二つの人類が。彼らは手を組み、ヴィルキスの鍵を開く者の出現に備え  
た……。

そしてついに、鍵を開く者が現れた。その者の名は、《アレクトラ・マリアフォン・レー  
ベンヘルツ》。王族から生まれた、初めてのノーマだ。」

天馬

「アレクトラ・マリアフォン・レーベンヘルツ？」



アンジュ

「聞いたことがある。確か、ガリア帝国の第一皇女よ。でも、確か10歳で病死したつて……。」

ジル

「お前と同じだ。ノーマだってバレたのさ……。」

アルゼナルに放り込まれ自暴自棄になっていたアレクトラだったが、彼女の高貴な血と皇族の指輪が、ヴィルキスの鍵を開いた。

彼女の元に、多くの仲間が集まった。ヴィルキスを守る騎士、ヴィルキスを直す甲冑士、医者、武器屋。そして始まったんだ。捨てられた者達の逆襲、リベルタスが。」

天馬

「リベルタス？」

アンジュ

”自由”を意味するラテン語よ。ローマ神話における自由の女神、”リーベルタース”から来てるって言われてるわ。」

天馬

「自由を求める戦いってことですね。」

ジル

「ああ。地獄のドン底で、私は仲間達と使命を得た。この作り物の世界を壊すという使命を。だが、私には足りなかった……。」

そして、全て吹っ飛んでしまった。指輪も仲間も、右腕も……。だが、死んでいった仲間達のためにも、リベルタスを終わらせる訳にはいかない。

そこにアンジュ、天馬、お前達が現れたんだ。」

アンジュ・天馬

「っ?！」

ジル

「ヴィルキスの最後の鍵は開いた。アンジュ、天馬、お前が壊すんだ。あの歌と化身の力でこの世界を。」

アンジュ

「私を生かしたのは、そのリベルタスのため……」

ジル

「その通り。お前には強くなって貰わなければならなかったからな……」

アンジユは自分の左手の指輪に目を向け、アンジユと天馬は互いを見つめ頷いた。

天馬

「……悪いですけど、答えはノーです。さっきの話が全部本当だったとしても、自分の道は、自分で決めます！」

ジル

「っ!?!」

アンジユ

「それがどんなに崇高な使命であっても、自分で見て、自分で考えて、自分で決める。誰かにやらされるのは御免なの！」

ジル

「では、リベルタスには参加しないと？」

アンジュ

「・・・好きなの。ドラゴンを倒して稼いで好きなものを買う、今の暮らし・・・。」

天馬

「・・・ん？」

突然、天馬が気づいた。

天馬

「そういえばさっきの話、ドラゴンが出てきてないですけど・・・。」

ジル

「フツ。」

ジルは待ってたかのように微笑んだ。



く居住区く

その頃、ヴィヴィアンは部屋を後にし居住区の通路を歩いていた。が、どういう訳か目線がいつもより高い。

ヴィヴィアン

「なんか背が伸びた気がする。成長期かな？」

すると、前方にイライラしているエマを見つけた。

エマ

「もうっ、何で繋がらないの!？」

ヴィヴィアン

「お、エマ監察官さんだ。おーい！」

エマはヴィヴィアンの呼び声に気付き足を止めビクリとする。そして恐る恐る後ろ

を向いた。

エマ

「え……エマ監察官だああああ!!」

エマは叫び、気を失い倒れた。

ヴィヴィアン

「あわわ……大丈夫?」

ヴィヴィアンはエマに自分の手を伸ばす。が、見えているのはドラゴンの手。

ヴィヴィアン

「えっ? な、なんじゃこりゃ!?!」

ヴィヴィアンはふと近くにある鏡を見る。すると、鏡にはスクウナー級ドラゴンと化した自分が写っていた。

ヴィヴィアン

「これアタシ!?」

「何、今の?」

すると、その場にパメラ、ヒカル、オリビエがやって来た。

パメラ、ヒカル、オリビエ

「つ!!きやああああああ!!」

ヴィヴィアン

「うわああああああ!!」

パメラ達はヴィヴィアンの悲鳴をあげ、ヴィヴィアンは叫びながら逃げていった。



〈臨時指令部〉

数分後、パラメール隊が臨時指令部に集結した。

ゾーラ

「ロザリー、クリス、ココ、ミランダはアタシと共に居住区。アンジュ、ヒルダ、天馬、剣城は整備デッキ。エルシヤはサリアを牢屋から出して、神童、信助、霧野と共にジャスミンモールを搜索。残りはここに残って周辺の警備だ。」

「イエス・マム！」

信助

「あの、ヴィヴィアンさんの姿が見えないのですが…」

エルシヤ

「それが、部屋にも居なかったのよ。」

ゾーラ

「ドラゴンに食われていなきやいいが…」





く食堂く

一方、ドラゴンの姿になったヴィヴィアンは食堂にやって来た。

ヴィヴィアン

(お腹空いたなあ… うう、何でこんなことに…)

すると、近くで良い匂いがした。匂いを辿ると、厨房にカレーの入った鍋が置かれていた。

ヴィヴィアン

(やったー、カレーだ！)

ヴィヴィアンはすかさず鍋の取っ手を持つ。すると、鍋が物凄い音をたてて潰れてし

まった。

ヴィヴィアン

(ありや、おつかしいなあ？つて、おかしいのはアタシだ……。)

ガンツ！

ヴィヴィアン

(うわっ!?)

突然、鍋に銃弾が当たった。銃弾の飛んできた方向を見ると、サリア達がライフルを向けていた。

ヴィヴィアン

(サリア！エルシャ！信助！神童！霧野！)

バーン！　バーン！

サリア達はヴィヴィアンに向けて容赦なく銃を発砲。ヴィヴィアンは慌ててその場から走り出した。

信助

「待って！」

霧野

「信助!？」

信助はダツシユでヴィヴィアンを追いかけ、ジャンプしヴィヴィアンの背中に飛び乗った。ヴィヴィアンは信助を乗せたままアルゼナルの外へと出た。



くグラウンドく

一方、アンジュと天馬はグラウンドにいた。すると、崖の下から信助とドラゴン化し

たヴィヴィアンが現れた。

アンジュ

「いた！」

信助

「うわああああああ!!」

アンジュはヴィヴィアンにライフルを向けて構える。すると、ヴィヴィアンが突然変な鳴き声を始めた。

天馬

「これって・・・？」

アンジュ

「死になさい、ドラゴン！」

天馬

「ちよつと待って！」

アンジュ

「えっ？」

アンジユは天馬に呼び止められ銃を下ろした。

天馬

「♪」

すると、天馬が突然永遠語りを歌い始めた。

アンジユ

「ちよつと、何のつもり？」

天馬

「よく聞いてください、あのドラゴンの鳴き声を。」

アンジユ

「鳴き声？」

天馬

「♪」

アンジュはヴィヴィアンの鳴き声を聞く。すると、ヴィヴィアンの鳴き声が永遠語り  
に似ている事に気がついた。

天馬・アンジュ

「♪」

アンジュは天馬に合わせて永遠語りを歌い始める。すると、二人は微かにヴィヴィア  
ンを感じた。

天馬・アンジュ

「!?」

天馬・アンジュ・ヴィヴィアンは歌い続け、ヴィヴィアンは二人の前に下り立った。

ヒルダ

「いたぞー！」

そこへ、ヒルダ達とサリア達が現れた。一同はライフルをヴィヴィアンに向け構える。

アンジュ

「……」

アンジュはヴィヴィアンの頭をそつと触る。すると、ヴィヴィアンが急に白い煙になつた。

信助

「うわあ！」

ドサツ

信助は突然ヴィヴィアンが煙になり地面に落ちた。そして、煙の中から人形のヴィヴィアンが姿を現した。

ヴィヴィアン

「ここでクイズです。人間なのにドラゴンなのって、なーんだ？」

アンジユ・天馬・信助

「っ!？」

ヴィヴィアン

「あ、違うか。ドラゴンなのに人間？あれれ？訳分かんない……。」

ヴィヴィアンは泣き出した。

アンジユ

「私達は分かったよ、ヴィヴィアンだって。」

天馬

「お帰りなさい、ヴィヴィアンさん。」

アンジユと天馬はヴィヴィアンを優しく抱きしめた。



プスッ

ヴィヴィアン

「あ……。」

すると突然、マギーがヴィヴィアンに薬を射ちヴィヴィアンを眠らせた。その場に居合わせた一同は突然の出来事に仰天していた。

信助

「何だったの、今の……。」

モモカ

「アンジュリーゼ様……。」

ヒルダ

「なあ、今の見たか？」

劍城

「まるで、ドラゴンからヴィヴィアンさんが出てきたみたいでした……。」

マギーはヴィヴィアンを抱いてその場を離れ、天馬とアンジュはジャスミンがドラゴンの死体を片付けている襲撃後を見下ろした。

天馬

「人間なのにドラゴン。ドラゴンなのに人間……まさか!？」

アンジュ

「天馬、あなたもそう思う?」

天馬

「ええ、直接確かめなきゃ!」

天馬とアンジュは斜面を滑り降り、ジャスミンのもとへと向かった。

—————

〈襲撃跡〉

襲撃跡に着くと、ジャスミンは集めた死体にガソリンを撒いていた。

バルカン

「ワンツ！ワンツ！」

バルカンがアンジュと天馬に気づき吠え、ジャスミンもアンジュと天馬に気がついた。

天馬

「ジャスミンさん、待って！」

ジャスミン

「危ないから来るんじゃないよ！」

ジャスミンは穴の中に火のついたライターを投げ入れ死体を燃やした。アンジュと天馬は炎に包まれた穴の中を見る。

アンジュ・天馬

「・・・!?!」

そこで二人が見たものは・・・。

To Be Continued...

E p. 15 / 皇帝の落日《前編》

くアルゼナル 襲撃跡く

天馬

「ジャスミンさん、待って！」

ジャスミン

「危ないから来るんじゃないよ！」

ジャスミンは穴の中に火のついたライターを投げ入れ死体を燃やした。アンジユと天馬は炎に包まれた穴の中を見る。

アンジユ・天馬

「・・・!？」

アンジユと天馬は穴の中を見て驚愕した。後から合流したパラメイル隊も、穴の中を

見て自身の目を疑った。

エルシヤ

「何これ……」

穴の中で燃えていたのはドラゴンの死体ではなく、人間の死体だった。

霧野

「どういう事だよ……」

ジル

「よくある話だろ？バケモノの正体は人間でした……なんてな。」

後方からジルが笑いながら言った。その時天馬の脳裏には、以前無人島でドラゴンと格闘したときの映像が流れてきた。

天馬

「俺達、ずっと人殺しをしていたのか……」

ジル

「好きなんだろ？ドラゴンを倒して稼いで好きなものを買う、今の暮らしが。」

平然と口にするジルを、アンジユは睨んだ。

アンジユ

「黙れクソ女！もうヴィルキスには乗らない。ドラゴンもころさない！リベルタスなんてくそくらえよ!!」

ジル

「神様に飼い慣らされたままでいいなら、そうするがいい。」

ジルはタバコを投げ捨て、その場を離れた。

—————

く森く

臨時指令部に向かう途中、ジルの目の前に1人の男が現れた。

???

「神様か。」

ジル

「・・・?」

男は緑色のタキシードを身に纏い、白金の髪と白い肌、そしてエメラルドグリーンに輝く瞳をしていた。

???

「私は自分から名乗った覚えは1度も無いぞ? 《創造主》というのが、正解だな。」

ジル

「・・・っ!」



バーン！

ジルは男に銃を向け発砲。だが、銃弾は男の体を通り抜けた。

ジル

「《エンブリヲ》……！」

エンブリヲ

「怒った顔も素敵だよアレクトラ。いや、今は総司令官のジルか？」

♪ピン、ポン、パン、ポ〜ン♪

ジル

「何だ？」

エンブリヲ

「どうやら来たようだ。」

突然、アルゼナルのあちこちにエアディスプレイが現れ映像が映し出された。

『こちらはノーマ管理委員会直属、国際救助艦隊です。

ノーマのみなさん、ドラゴンとの戦闘ご苦労様でした。これより、みなさんの救助を開始します。水や暖かい食料も十分に用意されています。武器を捨て、脱出準備をしてください。』



く襲撃跡く

その映像はアンジュ達にも届いていた。

モモカ

「アンジュリーゼ様、助けです！」

天馬

「……。」

喜ぶモモカに対し、天馬は疑いの目をしていた。



く太平洋 戦艦エンペラー・ジュリオ一世 ブリッジく

その頃、太平洋上を航行する艦隊の1隻、旗艦を勤める戦艦エンペラー・ジュリオ一世のブリッジの艦長席にジュリオが座っていた。

ジュリオ

「最後の再会といこうじゃないか、アンジュリーゼ。」

ブリッジ要員

「アルゼナル、対空兵器を機動！」

ジュリオ

「やれやれ、平和的に事を進めたかったというのに……」

ジュリオは静かにマイクを取り、艦隊に指示を送る。

ジュリオ

「旗艦エンペラー・ジュリオ一世より全艦艇へ。たった今ノーマはこちらの救援を拒絶した。これは我々、いや全人類に対する反逆である！なんじて見過ごす訳にはいかん！攻撃開始！」

ズドドドドドドドーン!!

ズドーン！ズドーン！

ジュリオの一声で、艦隊はアルゼナルへ向けての攻撃を開始。

ダダダダダダダダ・・!!

アルゼナルも対空砲で対抗するが、撃ち漏らしたミサイルが地上の施設を次々に破壊。そんな中、エアバイクに乗り太平洋の上を猛スピードで駆け抜ける1人の男がい

た。

タスク

「くそつ、遅かったか！・・・アンジュ、天馬君、無事でいてくれよ！」



くアルゼナル 居住区く

一方、居住区ではエルシャが幼年部の子供達にオルゴールを聞かせて気を落ち着かせ、残りのメイルライダーは怪我人の治療をしていた。

ゾーラ

「攻撃してきやがった。」

クリス

「救助なんて嘘だったんだ・・・」

劍城

「人間は、俺達ノーマなんかに救いの手を差し伸べるような事はしない。人間は俺達ノーマを簡単に切り捨ててしまう。たとえ、それが誰よりも自分を愛し、11年間離ればなれになっても、再会という目的のために生き続けた、たった1人の娘だったとしても……。」

ヒルダ

「劍城……」

ロザリー

「……今回ばかりは、その言葉の意味が分かるかもしれないな。」

『諸君、これが人間だ。』

突然、アルゼナル全体にジルの放送が聞こえてきた。

ジル

『奴らはノーマを助けるつもりなどない。物のように我々を回収し、別の戦いのために住職させるつもりなのだ。それを望む者は投降しろ。抵抗する者は共に来い。これよりアルゼナル指令部は人間の管理下を離脱し、反攻作戦を開始する！作戦名はリベルタス！志を同じくする者は武器を持ち、アルゼナル最下層に集結せよ！』

突然の出来事に、ロザリーとクリスは戸惑う。

ロザリー

「反抗ってどういう事だよ!？」

ゾーラ

「要するに司令に従って死ぬか、人間に殺されて死ぬか選べって事だ。」

ヒルダ

「アタシは司令と行くよ。人間達には恨みも憎しみもある。いい機会さ。」

劍城

「俺も、ヒルダさんについて行きます。」

ゾーラ

「そー言うなら、アタシもだ。」

エルシャ

「私も行くわ。」

霧野

「守らないとな、大切なものを。」

いつの間にかヒルダの周りには、アンジュ・天馬・サリア・ヴィヴィアンを除く第一中隊のメンバーが集まっていた。

クリス

「・・・人間に逆らってなんて、生きていける訳無いよ！」

ヒルダ

「やってみないと、分かんないさ。だろ、アンジュ？」

ヒルダはアンジュに呼び掛ける。だが、アンジュの返事は無かった。

ココ

「・・・アンジュ様？」



く最下層 ブリッジく



その数分後、ジル・パメラ・ヒカル・オリビエは、最下層にあるとある一室へと着いた。中は様々な機械が並び、まるで宇宙船の中の様だ。

パメラ

「いつの間に、こんなものが・・・。」

ジル

「パメラ、操縦席に座れ。ヒカルはレーダー席、オリビエは通信席だ。全システム起動、発進する！」



くパラメール格納庫く

その頃、パラメール格納庫ではパラメールの移動作業が行われていた。

メイ

「ヴィルキスが最優先だ！弾薬の装填は後回し！非常エレベーターに乗せるんだ！」

そこへ、第一中隊が到着。

ゾーラ

「メイ、アタシ達のパラメイルは？」

メイ

「いつでも出せるよ！」

すると、一同の前に五人のメイルライダーが現れた。第三中隊のターニャ、イルマ、シャノン、カミラ、ナンシーだ。

ターニャ

「ゾーラ隊長、ターニャ以下5名、出撃準備完了です！」

ゾーラ

「よし、第一中隊出撃だ！」

ゾーラの一声で、ターニャ達は先陣を切って出撃した。すると……。

ミランダ

「みんな、あれ！」

ミランダが何かを見つけ空を指差した。空には大量の円盤型ドローンが飛行している。

シャキンツ！

ドローンは無数の刃を展開し、高速で回転しながら急降下。格納庫の屋根を切断し破壊した。

ドカーン！

頭上から大量の瓦礫が落ち、滑走路を塞いだ。

ヒルダ

「くそっ、やられた！」

ガコン！ヒュウウウ：

突然、格納庫の証明が一斉に落ちた。

信助

「今度は何!!？」

神童

「停電か？」



く最下層 ブリッジく

パメラ

「発電システム停止！基地内の電力、ダウンしました！」

ジル

「補助電源に切り替えろ。」

パメラ

「了解、補助電源に切り替えます！」

ジル

「砲撃による損傷か？」

オリビエ

「いえ、侵入者によるものです！」



く食堂く

その頃、食堂では兵隊4名がノーマ数人を拘束し調べていた。

兵隊A

「該当者、ありません。ホントに殺すんですか？」

兵隊長

「第一目標アンジュリーゼ、第二目標ヴィルキス、第三目標メイライダー数名。それ以外は処分だ。」

兵隊長はノーマ達に銃を向ける。すると……。

バーン！ドサツ

突然、兵隊長は右隣の兵隊Cに頭を撃たれ射殺された。

兵隊B

「貴様、何を……！」

バーン！バーン！ドサツドサツ

兵隊Cは兵隊Aと兵隊Bの頭を撃ち射殺した。

兵隊C

「急いでビーチへ逃げるんだ。そこへ行けば俺の仲間が待ってる。早く行くんだ！」

ノーマ

「は、はいっ！」

ノーマ達は立ち上がり、急いでビーチへと向かった。

兵隊C

「……まさか、ファイブセクターでの戦闘訓練がこんなところで役に立つとはな。

……頼む、逃げ切ってくれ。」



くビーチく

ビーチに着いたノーマ達。ビーチには何故か豪炎寺とギャラクシーノーツ号がいた。

豪炎寺

「急いで来るんだ、早く！」

円堂はノーマ達を呼び寄せた。

ノーマ

「あの、あなたは？」

豪炎寺

「詳しい説明は後だ！それより今は、お前達を一人でも多くここから安全な場所へ連れて行かなきゃならない！早く乗って！」

ノーマ

「は、はいっ！」

ノーマ達は急いでギャラクシーノーツ号に乗り込んだ。





くパラメイル格納庫く

ゾーラ

「敵がアルゼナル内部に!？」

エルシヤ

「いけない!？」

エルシヤは突然走り出す。

霧野

「エルシヤさん、何処行くんだ!？」

エルシヤ

「ごめん、すぐ戻るから!？」

エルシヤはデツキを離れた。

カンッ！カンッ！

その直後、崩壊した滑走路上に兵隊達が押し寄せてきた。

劍城

「くそっ！」

ダダダダダダダダダダダッ！

劍城はランスロットの影からマシンガンを乱射。他のメンバーもパラメイルの影に隠れマシンガンを撃ちまくる。



く病棟く

ダダダダダダダダダダダッ!

一方、病棟ではマギーが兵隊達と交戦していた。

マギー

「重傷者の搬送が最優先だ！ちよつとくらい内臓出てても我慢しろ！」

すると……。

エマ

「助けて！私ノーマじゃない！」

エマが兵隊に助けを求めてきた。だが兵隊は容赦なく発砲。マギーはエマを押し倒し守った。

マギー

「バカっ！殺されたいのか!?!」

エマ

「ヒイツ！」

その隙に、別の兵隊が病室で眠るヴィヴィアンを運び出そうとしていた。

兵隊D

「急げ！早くしろ！」

兵隊E

「分かってる！」

マギー

「おい！その子をどうするつもりだ!？」

兵隊D

「うるさい！引っ込んでろ！」

ダダダダダダダダダダダッ！

兵隊Dはマギーに向けて発砲。マギーは壁の影に隠れたが、その隙にヴィヴィアンを

連れ去られてしまった。

マギー

「ヴィヴィアン！」



↓地下通路↓

一方、アンジュ・天馬・モモカはサリアとジャスミンに連れられ地下通路を進んでいた。

アンジュ

「ここ、危ないんでしょ？逃げる準備なんてしてる場合？」

サリア

「アンタと天馬には大事な使命がある。アンタと天馬、ヴィルキスとペガサスは無傷で脱出させる。それが私の、たぶん最後の使命……」

天馬

「そのために、仲間の命も見捨てろっていうんですか？」

サリア

「仕方ないわ。」

アンジュ・天馬

「。。。。」

アンジュと天馬は足を止め、アンジュはサリアの方を向いた。

アンジュ

「ホンット、あの女そっくり。訳の分からん絵空事や、無意味な使命感に酔いしれているだけ。巻き込まれて死んでく方はたまったもんじゃないわ！」

サリア

「。。。っ!!」

パシンッ！

サリアは怒りのあまり、アンジュの頬をひっぱいた。

サリア

「アンタ何もわかってないのね!! 自分がどれほど重要で恵まれていて、特別な存在なのか!!」

アンジュ

「分かりたくもない。」

モモカ

「それじゃあ、少しだけ息止めてください! アンジュリーゼ様! 天馬さん!」

モモカはポケットから円柱の金属容器を取り出し投げ、辺りに茶色い粉をばらまいた。

ボンツ!

ジャスミン

「な、何だいこりや!?!」

サリア

「アンジュ、何処に……クシユン！」

その隙に、アンジュ・天馬・モモカは通路を戻り、大急ぎで階段を登っていた。

天馬

「いったい何をばらまっくシユン！……ばらまいたんですか？」

モモカ

「塩コシヨウですっくシユン！……いつでもお料理出来るように携帯しておいてっくシユン！……正解でした。」

アンジュ

「随分大胆な事するようになったわね。……クシユン！」

モモカ

「アンジュリーゼ様の影響です。……クシユン！」





く岸壁く

一方、岸壁の下ではタスクがジルと連絡を取っていた。

タスク

「久しぶりだね、アレクトラ。」

ジル

『タスクか。』

タスク

「アンジユは無事かい？」

ジル

「たった今逃げられた。捕獲に協力してくれ。」

タスク

「了解。しようがないなあ…」



く食堂く

天馬・アンジュ・モモカは真つ暗な食堂へとやって来た。モモカはマナの光で食堂を照らす。すると、床には兵隊の死体が数体転がっていた。

天馬

「兵隊？何で？」

「俺がやったんだ。」

突然、3人の前に懐中電灯を持った兵隊Cが現れた。兵隊Cはライフルを捨てメットを取り、素顔を見せた。

天馬

「・・・っ!？」

顔を見た天馬は驚愕した。

天馬

「白竜！」

兵隊Cの正体は白竜だったのだ。

天馬

「どうしてここに？」

白竜

「アルゼナルがミスルギからの襲撃を受けると聞いてな、総理の命令で、俺達アンリミテッド・シャイニングがミスルギの軍に紛れ込み、生き残ったノーマ達をギャラクシーノーツ号へ収容し日本へ帰国するという任務を与えられたんだ。」

天馬

「そうなんだ。で、どうだったの？」

白竜

「最下層へ向かった奴ら以外は出来るだけ収容した。だが・・・。」

白竜は暗い表情を見せる。

天馬

「そうか……。」

天馬も表情を暗くする。すると……。

「大切なものは失ってから気付く。いつの時代でも変わらない心理だ。」

突然、後方から声がした。声がした方向を見ると、そこにはエンブリヲがいた。

エンブリヲ

「まったく酷いことをする。こんな事を許した覚えは無いのだが……」

天馬

「あなた、いったい誰なんですか？」

エンブリヲはアンジュに目を向けた。

エンブリヲ

「神聖皇帝ジュリオ1世。君のお兄さんだよ、この虐殺を命じたのは。」

アンジュ・天馬

「っ!？」

エンブリヲ

「彼は北北東14 Kmの地点に来ている。君を八つ裂きにするためにね。」

エンブリヲは今度は兵隊の死体に目を向ける。

エンブリヲ

「彼らに殺された者達は、その巻き添えを受けた様なものだ…」

天馬

「・・・許さない。下らない目的のために、罪の無いノーマ達を殺すなんて!!」

天馬の怒りが限界に達し、青い瞳が赤へと変わった。

天馬

「許さない、俺はジュリオ皇帝を絶対に許さない!」

エンブリヲ

「ならばどうする?」

天馬

「ぶっ潰してやりますよ、今すぐにでも!」

アンジュ

「・・・考えることは同じね。行きましょう!」

天馬

「はいっ！白竜、君は引き続き生存者の救助を！」

白竜

「わかった。」

天馬・アンジュ・モモカ・白竜は急いでその場を後にした。

エンブリヲ

「……さて、私も行くでしょう。」

エンブリヲはその場から静かに姿を消した。

## E p. 15 / 皇帝の落日 《後編》

くパラメイル格納庫く

パラメイル格納庫では、未だ第一中隊と兵隊達が銃撃戦を繰り広げていた。

ヒルダ

「これじゃがちが明かねえ！」

ロザリー

「どうすんだよヒルダ！」

バシユウウウウウウウ!!

突然、一同の前を一筋の青い光が猛スピードで通過した。

ドーン！



「うわあああああ!!」

青い光は辺りに強力な突風を発生させ、兵隊達を海へと吹き飛ばした。

ゾーラ

「何だ今のは…」

第一中隊が青い光の飛んできた方向を見ると、階段入り口に天馬・アンジユ・モモカがいた。

ヒルダ

「おせえぞお前ら!」

天馬

「すみません、ヒルダさん!」

アンジユはヴィルキス、天馬はペガサスに急いで乗り込み機体のシステムを起動。

キイイイイイインツ！

ペガサスのシステムを起動した途端、ペガサスのボディと翼が赤へと変化した。

劍城

「ペガサスが赤くなった!?!」

ヴィルキスとペガサスはゆっくりと前へ前進する。

ゾーラ

「おい！こんなに瓦礫が堆積してちや、飛ぶのは無理だ！」

アンジュ

「それなら！」

天馬

「排除するまでだ！」

バーン！バーン！バーン！ ドカーン！

ビュー！

ヴィルキスはアサルトライフルからグレネードを発射し瓦礫を破壊。さらにペガサスが翼を羽ばたかせ瓦礫を吹き飛ばした。2機の行動によって、前方に堆積していた瓦礫は全て無くなった。

アンジユ

「進路確保！」

ヒルダ

「つたく、無茶しやがって…」

ヴィルキスとペガサスは空へと飛び立ち、その直後サリアが格納庫へ現れた。サリアは空を飛ぶヴィルキスを見た。

サリア

「行かせない！」



く太平洋上く

その頃、既に出撃していたターニヤ達5人は大量の円盤型ドローンと交戦していた。

ターニヤ

「ゾーラ隊長、ヒルダ副隊長、応答してください！誰か応答して！」

ガシン！ガシン！

ターニヤ

「な、何これ!？」

突然ドローンから無数のワイヤーが伸び、ターニヤとイルマの機体を拘束した。

イルマ

「た、助けてええ！」

ターニャ

「くそっ！放せ、放せ！」

イルマとターニャは機体ごと連れ去られてしまった。



くアルゼナル グラウンドく

同じ頃、ヴィヴィアンを回収した兵隊達はグラウンドにある輸送機へと向かっていった。

ドカーン！

突然、輸送機が爆発。

バーン！ザシュツ！

タスクが後方から銃とナイフで兵隊達を攻撃しヴィヴィアンを解放した。

タスク

「今、アルゼナルの上面に来てる。アンジユはどの辺り？」

ジル

『それがだな、たった今天馬と一緒にヴィルクスで出ていったらしい。』

タスク

「なんだって!?!・・・もう、あのじゃじゃ馬め！」

タスクはヴィヴィアンを抱き上げ、大急ぎでその場を離れた。



「戦艦エンペラー・ジュリオ一世 ブリッジ」

船員

「メイルライダー定数確保。基地内でも確保完了との報告です。」

ジュリオ

「アンジュリーゼはどうした？第一目標アンジュリーゼ、第二目標ヴィルキスと言ったはずだ！」

ビー！

船員

「本艦に急接近する物体有り！第一目標と第二目標です！」

ブリッジの大型モニターに、アンジュとヴィルキス、天馬とペガサスの映像が映し出された。

ジュリオ

「出てきたか、アンジュリーゼ・・・。」



くアルゼナル パラメール格納庫く

パラメール格納庫では、雷門メンバーのパラメールの出撃準備が完了していた。

神童

「マエストロ、出るぞ！」

劍城

「ランスロット、出る！」

信助

「タイタニアス、いきます！」

霧野

「ブリュンヒルデ、テイク・オフ！」



雷門メンバーのパラメイルは空へと飛び立つ。すると、飛び立ってすぐ信助が何かを  
発見した。

信助

「あれって……。」

信助が見る方向には、タスクとヴィヴィアンを乗せたエアバイクが海上を駆け抜ける  
姿が見えていた。信助はタイタニアスの進路を変えタスク達を追いかけた。



く太平洋上く

海上では、ヴィルキスとペガサスが大量のドローンと交戦していた。

ダダダダダダダダダダッ！

ビューー！

ヴィルキスはアサルトライフルで次々とドローンを撃ち落とし、ペガサスは翼を羽ばたかせてカマイタチを起こしドローンを破壊した。

『戻りなさいアンジュ！戻って使命を果たして!!』

ヴィルキスの後方から、サリアのアーキバスが爆煙を通り抜け近づいてきた。サリアはヴィルキスの前で静止しヴィルキスの行く手を塞いだ。

サリア

「何が不満なのよ!?!アンタはアレクトラに選ばれたのよ!?!私の夢も居場所も奪ったんだから、そのくらい!」

アンジュ

「・・・私、ここが好きだった。」

サリア

「えっ?」

アンジユ

「最低で最悪で劣悪で、何を食べてもクソ不味かったけど……ここでの暮らしが好きだった。でも、それを壊されたの、アイツに！」

ザンツ！

ヴィルキスは剣を振り上げ、アーキバスの右腕を切断。

アンジユ

「だから、行くの！」

ザンツ！

今後は剣を振り下ろし、アーキバスの左腕を切断。

アンジユ

「邪魔をするなら、誰だろうと殺すわ！」

キイイイイインツ！

アンジュ

「・・・!?!」

突然、アンジュの指輪とコックピットの画面が光りだし、ヴィルキスのボディが赤へと変わり、剣から赤い光の刃が現れた。

サリア

「許さない・・・勝ち逃げなんて絶対許さないんだから！」

アーキバスは推進力を失い落下。

サリア

「アンジュの下半身デブ!!」



メイ

「ヒルダ、発進準備完了！」

クリス

「行こう、隊長。」

ゾーラ

「よし、ゾーラ隊出るぞ！」

ヒルダ・ロザリー・クリス・ココ・ミランダ

「イエス・マム！」

ゾーラのアーキバスを先頭に、一同は格納庫から離陸。だが……。

ダダダダダダダダダダダッ！

瓦礫の中に紛れていた兵士の生き残りが銃を乱射。銃弾の1発がクリスの頭部に命中した。

ガンッ！ドカーン！

クリスのハウザーは支柱に激突し爆発。瓦礫と共に海へと落下していった。

ロザリー

「クリス！」

ロザリーはクリスを助けに向かおうとするが、大量の円盤型ドローンが行く手を阻む。

ロザリー

「チキショー、てめえら絶対ぶつ殺す!!」



くピーチく

一方、ギャラクシーノーツ号付近にはアンリミテッド・シャイニングのメンバーが集

まっていた。

白竜

「アルゼナルで生き残っているノーマはこれで全てだ。残りは最下層かパラメイルに乗って戦闘中だ。」

豪炎寺

「急いでここから離れよう。このままでは巻き添えを食らう。」

豪炎寺とアンリミテッド・シャイニングのメンバーはギャラクシーノーツ号に乗り込み、ギャラクシーノーツ号は飛び立った。そして即座にワープしその場から消えた。



く太平洋上く

一方、アンジュと天馬はジュリオ率いる艦隊のいる海域へとやって来た。



ズドドドドン！ ドカーン！

1隻の艦が大量のミサイルをヴィルキスに向けて発射。ミサイルはヴィルキスに命中し爆発した。

天馬

「アンジユさん！」

だが、爆煙から出てきたヴィルキスは傷ひとつ付いておらず、全体に光の障壁を展開し身を守っていた。

天馬

「大丈夫ですか!？」

アンジユ

「ええ、ヴィルキスが守ってくれたみたい。」

すると、全ての艦がヴィルキスとペガサスに照準を合わせ砲身に向けた。

アンジュ・天馬

「・・・全体に許さない！」

アンジュはヴィルキスをフライトモードに変形させ、1隻の艦のボディに突っ込んだ。  
だ。

ガンツ！ ドカーン！

ヴィルキスは艦のボディを貫通し、艦は大爆発を起こし沈んだ。

天馬

「デカイのをくれてやる！」

バツシユウウウウウウウウ!!

ペガサスはソニックバレットから高出力のビームを発射し、2隻の艦を同時に破壊。

ジャキーン！

さらにヴィルキスが剣を振るい、一隻を破壊した。

—————

「戦艦エンペラー・ジュリオ一世 ブリッジ」

ブリッジ要員

「ディファイアント、マリポーザ撃沈！フォーチュネイト、オーベルト大破！」

ジュリオ

「何をしている！相手はたったの2機だぞ!？」

ジャキーン！ガシャーン！

突然、ブリッジの前部分が物凄い音と共に落下。ジュリオの目の前にヴィルキスとペ

ガサスが現れ、コックピットのハッチが開きアンジュと天馬が姿を見せた。

アンジュ

「見つけたわよ、ジュリオ！」

ジュリオ

「アンジュリーゼ！それに、天馬！」

バーン！ カンツ！

天馬はジュリオの足元ギリギリのところに銃を発砲した。

ジュリオ

「ひいっ！」

天馬

「死にたくなければ、今すぐ虐殺をやめさせろ！」

ジュリオは恐る恐る回線を繋ぎ、指示を出した。

ジュリオ

「神聖皇帝ジュリオ一世だ！全軍、直ちに全ての作戦を中止し、撤収せよ！」

『撤収!? ノーマ達はどうするのですか!?』

ジュリオ

「構わん！早く撤収しろ!!」

『りよ、了解!』

ジュリオは回線を切断した。

ジュリオ

「や、やめさせたぞ……。」

すると、アンジュと天馬はヴィルキスとペガサスに乗り込み、ヴィルキスは剣を大きく振り上げ、ペガサスはソニックバレットを構えた。

ジュリオ

「ま、待て！話が違う！早まるな！要求は何でも聞く！アンジュリーゼ、お前の皇室復帰を認めてやる！お前達に皇帝の座を譲ってやる！どうだ、悪くないだろ!? だから!!」

天馬

「・・・俺の認める皇帝は、ジュライ皇帝だけだ!!」

アンジュ

「生きる価値のないクズめ、くたばれ!!」

ヴィルキスは剣を振り下ろし、ペガサスはビームを放つ。すると・・・。

ガンツ!

突然、2機の前に巨大な翼を持つ黒と紫の見たことないパラメイルが現れ攻撃を防いだ。そして、謎のパラメイルの肩には食堂で会ったエンブリヲがいた。

アンジュ

「あなた、さっきの。」

ジュリオ

「え、エンブリヲ様!!今すぐコイツらをぶっ殺して下さい!!」

エンブリヲ

「・・・アンジュ、天馬、君達は実に美しい。」

アンジュ・天馬

「えっ?」

エンブリヲ

「君たちの怒りは、純粹で白く、何よりも熱い。理不尽や不条理に立ち向かい、燃やし尽くす炎の様に。そう、強く気高い炎だ。・・・だが、つまらない物を燃やして、その炎を汚してはいけない。」

だから、君たちの罪は私が背負う。」

アンジュ・天馬

「えっ?」

エンブリヲ

「君たちの代わりに、私とこの《ヒステリカ》がやる。」

突然、ヒステリカは急上昇しエンペラー・ジュリオ一世の真上で静止。さらに、エンブリヲが歌い始めた。

エンブリヲ

「♪」

歌を聞いていたアンジュ・天馬・ジュリオは驚いた。

アンジュ

「これって……!」

天馬・ジュリオ

「永遠語り?」

その歌は海上を飛行していたタスクとヴィヴィアン、さらに二人を追いかける信助の



耳にも聞こえていた。

タスク

「あれはまさか!？」

ヴィヴィアン

「この歌、知ってる……。」

信助

「この歌って、アンジュさんの……。」

すると、ヒステリカの肩と翼が展開し、ヴィルキスと同じ武器が現れた。

アンジュ

「ヴィルキスと同じ武器!？」

天馬

「じゃあ、まさか!？」

バツシユウウウウウウウ!!

ヒステリカは竜巻を纏った白い光を放った。光はエンペラー・ジュリオ一世に命中し、エンペラー・ジュリオ一世は瞬く間に消滅。さらに海底には巨大な大穴が出現していた。

天馬

「何て威力なんだ……。」

アンジユ

「あなた、いったい何者なの？」



くアルゼナル 最下層 ブリッヅく

その頃、最下層では……。

ヒカル

「メインエンジン臨界まで、あと10秒！」

パメラ

「生存者の収容完了！アルゼナル内に生命反応無し！」

オリビエ

「水位上昇80%！防水隔壁閉鎖を確認！」

ジル

「交戦中のパラメイルには、合流座標を暗号化して送信。」

パメラ

「了解！」

オリビエ

「水位上昇100%！」

ヒカル

「メインエンジン臨界点！」

ジル

「ガントリーロック解除！ゲートオープン！微速前進！アウローラ、抜錨！」

地下のドックから、巨大な銀色の船が大海原へと発進した。



エンブリヲ

「・・・ん？」

突然、エンブリヲが何かに気づき海を見た。

タスク

「アンジュ、そいつは危険だ！」

海上からタスクとヴィヴィアン、そして信助とタイタニアスが向かっていた。

アンジュ

「タスク!？」

エンブリヲ

「不粋だな。」

♪  
」

エンブリヲは再び歌いだし、今度はヒステリカをタスク達の方に向けた。

天馬

「まさか!?!」

アンジユ

「いけない!」

ヴィルキスとペガサスは急降下し、猛スピードでタスク達の元へと向かう。

アンジユ

「タスク!」

タスク

「アンジユ?」

バツシユウウウウウウウウ!!

ヒステリカから再び光が放たれた。

天馬

「ダメだ！間に合わない！」

アンジユ

「ダメーーーーー!!!」

キイイイイイイイツ！

突然、アンジユの指輪とコックピットの画面が光りだし、ヴィルキスのボディが青へと変わった。そして……。

シュン！

ヴィルキス・ペガサス・タイタニアス・タスク・ヴィヴィアンは突然消え、ヒステリカの光が海底を抉った。

エンブリヲ

「ほう…」

エンブリヲは海底に空いた大穴を見て頷いた。

エンブリヲ

「つまらん筋書きだが、悪くない。」



く妖魔界く

その様子を妖魔界にいるエンマ大王は見逃さなかった。

エンマ大王

「ついに奴が手を出したか。明日人！」

『はい。』

エンマ大王

「時は来た、出撃だ。」

『了解、これより出撃します！』

エンマ大王

「・・・我々の運命を奪わせはしないで、エンブリヲ！」

To Be Continued...



E p. 16 / 世界の片隅で 《前編》

「バー」

天馬

「う、うゝん…」

ある日、天馬は一人とあるバーのカウンターで眠っていた。店の中には自分以外誰もいない。

天馬

「ここ、何処なんだ？俺、確かアンジュさんと一緒に海の上に…」

「お目覚めかな？」

突然、誰かに声をかけられた。顔を上げると、目の前にエンブリヲがいた。

天馬

「あなたは。」

エンブリヲ

「私はエンブリヲ。そしてここは、君の夢の中だ。」

天馬

「俺の夢の中？」

エンブリヲ

「君は海上で私と会ったときに、私がアンジュと君に言った言葉を覚えているかな？」

天馬

「えつと……。」

天馬は海上でエンブリヲの言葉を思い出す。

天馬

「君たちの怒りは、純粹で白く、何よりも熱い。理不尽や不条理に立ち向かい、燃やし尽くす炎の様に。」

エンブリヲ

「そうだ。だが私は、君にもう1つの美を見ている。それは……。」

エンブリヲはコップに水を注ぎ、天馬の前に置いた。

天馬

「水？」

エンブリヲ

「そう。仲間を信頼し、仲間を決して疑う事のない、水のように何処までも限りなく透き通った純粋な優しい心。それが君の持つもう1つの美しさだ。だがその心は君の強さでもあり、弱さでもある。仲間との強い信頼は自らを前進させる力となる。だが、信頼を約束した仲間が裏切り敵になれば、その時の絶望は誰よりも大きい。」

天馬

「絶望。」

エンブリヲ

「もつとも、君は自分が絶望しても必ず立ち上がる者だと私は知っている。君はこれまでに数々の苦難に立ち向かい、勝利してきたのだから。」

『天馬・・・天馬!』

突如、何処かからアンジュの声が聞こえてきた。

天馬

「アンジュさん？」

エンブリヲ

「どうやら時間のようだ。」

エンブリヲはカウンターを離れ、店の入り口へと向かう。

エンブリヲ

「近いうちに、私は君達の前に再び現れる。また会おう・・・。」

ガチャ ピカアアアア!

エンブリヲはドアを開ける。すると、店内は強い光に包まれた。

天馬

「うっ！」

~~~~~

天馬

「う、うん……。」

目を覚ますと、天馬はペガサスのコックピットでうつ伏せで倒れていた。

アンジユ

「天馬！」

信助

「天馬！」

天馬

「アンジユさん……信助……」

天馬はゆっくりと身体を起こす。すると、目の前にはアンジュと信助、そしてドラゴンに姿を変えたヴィヴィアンが心配そうに見ていた。

天馬

「でえええ！ドラゴン!？」

信助

「落ち着いて！これはヴィヴィアンさんだよ！」

天馬

「そ、そうなんだ。よかったあ〜……」

天馬はホッと胸を撫で下ろした。

タスク

「目が覚めたみたいだね。」

今度は後方からタスクに声をかけられた。

天馬

「タスクさん！みんな、無事だったんですね。」

アンジュ

「何とかね。でも……。」

天馬は立ち上がって辺りを見渡した。

天馬

「何だこれ……。」

ペガサスの隣には壊れたヴェルクスとタイタニアスが横たわり、辺りにはビルが何棟もそびえ立っているが、一部は倒壊し、建物や道路や近くの錆びた鉄道橋等全て緑に覆われていた。

天馬

「何処なんですか、ここ？」

アンジュ

「私にもさっぱり。いつの間にかヴィルキスのコックピットの中で気を失ってて、目が覚めたら別世界で、ヴィヴィアンがドラゴン化した。」

ヴィヴィアン

「ウ〜！ウ〜！（アタシもビックリだよ！）」

タスク

「おまけにレーダーや無線機が全く反応しないし、位置センサーも機能してくれないんだ。こんな場所、俺の知る限りアルゼナルの近くにはない。」

アンジュ

「大昔の廃墟とかじゃないの？人類が戦争してたときの。」

天馬

「・・・いや、それは無いと思います。」

アンジュ

「何で？」

天馬

「俺、ここが何処か分かったんです。ここは新宿駅の東側。新宿大ガード下交差点です。」



天馬の発言に皆は驚いた。

アンジユ

「新宿!?!じゃあまさか、ここは日本って事!?!」

天馬

「恐らくは。でも妙なのは、緑が生い茂ってる以外は俺がよく知る新宿の風景と変わらないってことです。」

アンジユ

「じゃあ、私達は遠い未来か別世界に飛ばされた訳?」

タスク

「ヴィルキスなら可能性はあるよ。ヴィルキスは特別な機体なんだ。何を起こしても不思議じゃない。」

アンジユ

「特別……。」

信助

「これからどうしましょう?」

タスク

「取り合えず、俺はヴィルキスの修理をしてみるよ。」

信助

「だったら、僕も手伝います！」

アンジユ

「じゃあ、私と天馬で辺りを散策しましょう。」

天馬

「はい。」

ヴィヴィアン

「ウ〜！ウ〜！（アンジユ！天馬！）」

突然、ヴィヴィアンがアンジユと天馬に背中を向けた。

アンジユ

「乗れってこと？」

ヴィヴィアン

「ウ〜！（そうそう！）」

タスク

「それにしても、君がドラゴンだったとはね…」

ヴィヴィアン

「ウゝ（内緒だよ?）」

天馬とアンジュはヴィヴィアンの背中に乗り、ヴィヴィアンは大空へと飛んでいった。

タスク

「よし、じゃあ始めようか。えつとく…」

信助

「あ、自己紹介まだでしたね… 僕は信助です。」

タスク

「俺はタスク。よろしくね、信助君。」

タスクと信助はヴィルキスの修理を始めた。



く東京上空く

一方、アンジュ・天馬・ヴィヴィアンは東京の上空を東へ向けて飛行していた。

アンジュ

「どう?」

天馬

「やっぱり、東京とみて間違い無いと思います。ただ・・・。」

天馬は前方の更地に目を向ける。更地の中心には巨大な湖があり、その湖の中には倒壊したスカイツリーとおぼしき塔と、スカイツリーより巨大な倒壊した塔があった。

アンジュ

「暁ノ御柱!」

天馬

「あそこは位置的に墨田区。スカイツリーが建っている場所です。でも、俺の知ってる墨田区に、暁ノ御柱はありません。」



↳新宿大ガード下交差点↳

数分後、アンジュと天馬は散策の結果をタスクと信助に話した。

天馬

「現時点で分かっているのは、ここが東京であつて俺の知る東京じゃないって事です。」

タスク

「可能性があるとするとするなら、ここが何処か別の世界か、遠い未来の世界かだね。」

ヴィヴィアン

「Z…z…z…」

いつの間にかヴィヴィアンは眠っていた。すると…。

♪

突然、何処かからオルゴールの音が聞こえてきた。

天馬

「何だ？」

一同はヴェルキスの影に隠れる。するとその直後、四本足の赤いロボットがヴェルキスの前を通り過ぎた。

『こちらは首都防衛機構です。生存者の方はいらつしやいますか？首都第3シエルターは現在も稼働中。避難民の方々を収容しております。』

赤いロボットはそのままガーター橋の向こうへと消えた。

アンジユ

「生存者？」

タスク

「追いかけてみよう。」

アンジュ・天馬・タスク・信助の四人はヴィヴィアンを残し、ロボットの後を追いかけた。

—————

〈首都第3シエルター前〉

四人はロボットを追いかけてシエルターの前へとやって来た。

タスク

「ここがシエルター。」

アンジュ

「ここに生存者が？」

四人は入り口へと近づく。すると……。

『生体反応を確認。収容を開始します。ようこそ、首都第3シエルターへ。首都防衛機構は、あなた達を歓迎いたします。』

シエルターのシステムがアンジユ達を認識し、入り口が開き通路が現れた。

信助

「どうします?」

アンジユ

「入るしか無いわね……。」

四人は恐る恐るシエルターの中へと入った。

-----



くシエルター エントランスく

階段を下りると、広い空間へとたどり着いた。中央の柱に設置された大型ディスプレイに黒髪の若い女性が映し出された。

『現在、当シエルターには1.7%の余剰スペースがあります。どうぞ、快適な生活を。』  
あちこちのシャッターが一斉に開き、シエルター内部が露になった。

アンジユ

「うぐっ！」

天馬

「これは……！」

シエルター内には白骨化した遺体やミイラ化した遺体があちこちに散乱していた。内部の光景を一同は啞然とし、アンジユは酷い臭いのあまり鼻を塞いだ。

タスク

「何だこれ・・・？」

信助

「ここ、ホントにシエルターなの・・・？」

天馬

「・・・。」

天馬は急いでディスプレイの所へ戻った。アンジュ・信助・タスクも後に続いた。

天馬

「あの、さっきの人！いたら出てきてください！」

天馬の呼び掛けに答えるように、再びディスプレイに先程の女性が映し出された。

『管理コンピューター、《ヒマワリ》です。ご質問をどうぞ。』

タスク

「コンピューター・・・だったのか？」

天馬

「ヒマワリさん、俺たち以外に生きてる人はいないんですか？この世界で、いったい何があつたんですか？」

アンジユ

「教えなさいよ！コンピューターのあんたなら、全部知ってるんでしょ!？」

ヒマワリ

『・・・質問を受け付けました。回答シークエンスに移行します。』

パンツ

辺りの証明が一斉に消え、エントランス全体に映像が映し出された。映っていたのは、高度に発展した都市に降り注ぐミサイルの雨。多数の戦車・戦闘機・軍艦が攻撃する映像だった。

アンジユ

「何これ？映画か何か？」

ヒマワリ

『実際の記録映像です。統合経済連合と半大陸同盟機構による、大規模国家間戦争。通称第7次大戦、ラグナレクD5等と呼ばれるこの戦争により、地球の人口は11%にまで減少。膠着状態を打破すべく、連合は絶体兵器ラグナメールを投入。』

映像にヒステリカと、ヴィルキスによく似た黒い機体が6機映っていた。

天馬

「あれって、ヒステリカ？」

アンジユ

「それにあれは、黒いヴィルキス？」

ヴィルキスに似た6機とヒステリカが竜巻を纏った白い光を放ち世界中の都市や軍隊を破壊する様と、暁ノ御柱が倒壊し大爆発する映像が映し出された。

ヒマワリ

『こうして戦闘は終結。しかし、ラグナメールの次元共鳴変異によって、世界中のドラグニウム反応炉が共鳴爆発を起こし、地球は全域にわたり生存困難な汚染環境となり、全

ての文明は崩壊しました。以上です。』

アンジュ

「なにこれ・・・なんの冗談よ・・・。」

ヒマワリの回答に、一同は困惑した。

信助

「それって、いつの話なんですか？」

ヒマワリ

『今から538年193日前です。』

ヒマワリの回答に、一同は仰天した。

ヒマワリ

『世界各地20976カ所のシエルターに、熱・動体・生命反応無し。現在地球上に生存する人間は、あなた方4人だけです。』



◇新宿大ガード下交差点◇

その後、四人は交差点に戻り焚き火をして暖をとった。

天馬

「500年か……。500年経っても町が原形をとどめているのが不思議だなあ……。」

アンジュ

「あんな紙芝居、信じるの？」

タスク

「あの白骨やミイラを見ればね……。」

アンジュ

「作り物かも知れないじゃない。」

信助

「そうだとっても、いったい誰が……。」

アンジユ

「知らないわよ！私はこの目で見たモノしか信じない！」

アンジユはイライラしながらヴィヴィアンの背中に乗り、大空へと飛び立った。

アンジユ

(認めない！ここが500年後の未来だなんて！)

天馬

「・・・俺達はどうしましょうか？」

タスク

「取り合えず、ヴィルキスの修理を進めよう。少しでも早く直さないと。」

信助

「はい。」

天馬・タスク・信助は工具を取り、ヴィルキスの修理を始めた。

## E p. 16 / 世界の片隅で 《後編》

数時間後、アンジユとヴィヴィアンが交差点に戻ってきたが、アンジユのイライラは酷くなり、ヴィヴィアンは疲れきっていた。

アンジユ

「ちよつとヴィヴィアン！起きてよ！」

ヴィヴィアン

「ウゝ・・・。」

天馬

「アンジユさん落ち着いて。無理させちゃダメですよ。」

アンジユ

「ムッ・・・。」

アンジユは天馬を睨み、天馬は少しひいた。



アンジユ

「起きなさい！この役立たず！」

ヴィヴィアン

「っ!？」

ヴィヴィアンはアンジユに役立たずと言われ、ショックのあまりその場から逃げた。

信助

「あっ、ヴィヴィアンさん待って！」

信助は慌ててヴィヴィアンを追いかけた。

タスク

「何てこと言うんだ！」

アンジユ

「うるさい！」

天馬

「・・・少し休みましょう。」

アンジュ

「休んでどうなるの？こんな訳の分からない世界にいろって言うの!？」

天馬

「休んで気を落ち着かせるんです。イライラしてちや、見えるモノも見えなくなるし、得られるモノも得られません。」

アンジュ

「私は確かめたいの！アルゼナルがどうなったのか！モモカや皆が無事なのか！」

タスク

「アンジュ、気持ちは分かるけど・・・。」

すると、アンジュはタスクに目を向けた。

アンジュ

「あなたも、あの女が待ってるから早く帰らないと不味いんでしょ？ヴィルキスの騎士さん。」

タスク

「・・・そうさ、俺は命に代えてでも君とヴィルキスを守る。」

アンジユ

「リベルタスのためでしょ？ サリアと同じ、私を利用する事しか考えてないあの女の犬。」

タスク

「違う！俺は・・・。」

アンジユ

「帰れないなら、それでいいんじゃない？」

タスク・天馬

「えっ？」

アンジユ

「だって、あんな最低最悪のゴミ作戦、どうせうまくいかないし。」

タスク

「ゴミ・・・？」

アンジユ

「だってそうでしょ？ 世界を壊してノーマを解放する。そのためなら、何人犠牲にして

も構わないなんて、それでいったい何が解放出来るんだか？・・・笑っちゃうわ。」  
タスク

「・・・じゃあ、俺の父さんや母さんも、ゴミに参加して無駄死にした。そういうことか？」

アンジュ

「えっ?」

タスクの表情が一変し、タスクはアンジュに対する怒りに満ちていた。

タスク

「俺たち古の民は、エンブリヲから世界を解放するために戦ってきた。父さんと母さんは、俺たちやノーマが生きていける世界を作ろうとして死んだ!」

死んでいった仲間や両親の想いも、全部ゴミだというんだな君は!」

タスクの初めて見せた怒りの眼差しにアンジュは恐怖し、タスクはその場から静かに離れた。

天馬

「タスクさん……。」

アンジュ

「……。」

次の日になっても、タスクは朝からアンジュと目を合わせなかった。

アンジュ

「タスク……。」

タスクはアンジュの呼び掛けに答えず、天馬と共に黙々とヴィルキスの修理を続ける。アンジュは背を向け静かにその場から離れ、天馬は心配そうな表情を浮かべた。

天馬

「……俺、ちよつと出かけてきます。」

タスク

「何処行くの？」

天馬

「ちよつとそこまでです。」

天馬は走り出し、その場を後にした。



く地下街く

アンジュは古い地下街にいた。天井は一部陥没して大穴が開き、空が見えている。

アンジュ

「フンだ、無視なんて幼稚なんだから。あそこまで怒らなくても……。」

すると、穴の上に天馬がやって来た。

天馬

「ここに居たんですか。」

天馬は穴の上からアンジュに向けて言った。

アンジュ

「天馬……。」

天馬は飛び降り、アンジュの近くに着地した。

天馬

「タスクさん、相当ムキになってましたよ。」

アンジュ

「そうは言っても、どうすれば……。」

天馬

「……。」

天馬もどうしていいか分からず言葉を詰まらす。すると・・・。

アンジュ

「・・・あ。」

アンジュが目の前のアクセサリー屋で何かを見つけた。青いクリスタルの蝶があしらわれた髪止めだ。

アンジュ

「これ、可愛い！」

アンジュはアクセサリーを手に取り天馬に見せた。

アンジュ

「ねえ、これ可愛くない？」

天馬

「ホントだ。ヴィヴィアンさんが喜びそうですね。」



アンジュ

「ヴィヴィアン……。」

『起きなさい！この役立たず！』

だって、あんな最低最悪のゴミ作戦、どうせうまくいかないし。』

アンジュの脳裏に、昨夜二人に言った言葉が過った。

アンジュ

「私、二人に酷いこと言っちゃったなあ……。二人とも、一生懸命頑張ってたのに……。」

天馬

「アンジュさん……。」

アンジュは天馬が今まで見たことが無いくらい落ち込んでいた。

アンジュ

「・・・ねえ、ちよつといい?」

天馬

「はい?」



◇新宿大ガード下交差点◇

その日の夕方、タスクは相変わらずヴィルキスの修理をしていた。

タスク

「ふうく・・・ん?」

ふと振り向くと、足場の手摺にペンダントにかけてあった。さらに向こうにはゆつくりとその場を離れるアンジュと天馬の姿が。

タスク

「アンジユ? 天馬君?」

アンジユ・天馬

「ギクツ!」

アンジユと天馬はタスクに呼び止められた。

アンジユ

「に、似合うかなって思って、天馬と見つけてきた・・・それだけ。」

タスク

「・・・。」

タスクは微笑み、足場から下りアンジユのくれたペンダントを身に付けた。

タスク

「どう?」

アンジユ

「いいん・・・じゃない?」

アンジユは少し微笑んだ。

タスク

「ありがとう。」

アンジユ

「それと、昨夜はごめん……。」

タスク

「っ!!」

アンジユの突然の謝罪にタスクは驚いた。だが、直ぐに笑顔になった。

タスク

「俺の方こそ、キツく当たってごめん……。」

アンジユ

「タスク……。」

するとそこへ、昨晩から姿を消していたヴィヴィアンと信助が帰って来た。

ヴィヴィアン

「ウ〜！」

信助

「アンジユさん！」

アンジユ

「ヴィヴィアン！」

アンジユはヴィヴィアンを優しく抱きしめた。

アンジユ

「昨夜はごめん。私、言い過ぎたわ。ありがとう、ヴィヴィアン。」

ヴィヴィアン

「ウ〜？」

信助

「・・・ねえ、いったい何をしたの？」

天馬

「何にも。アンジュさんが自分で見つけた答えだよ。」

信助と天馬は三人を優しく見守った。



「ホテル夢有羅布楽雅前」

それから数日後のある日の夜、雪が降りしきる中、五人はとあるホテルにいた。

天馬

「配電盤との接続、完了しました！」

タスク

「OK！電源入れるよ！」

天馬はタスクのエアバイクとホテルの配電盤を繋ぎ、タスクがエアバイクの発電装置を起動。

ジジジ・・・!

ネオンに光が灯り、ホテルの設備が動き出した。

天馬

「やった!動いた!」

—————

く310号室く

部屋に入ると、まるで長い時間が経っていることを感じさせないくらい綺麗だった。ベッドもソファーも無傷である。

天馬

「凄い!屋根もあるしベッドもあるし風呂まである!」

タスク

「奇跡的な保存状態だね。」

アンジュ

「見つけたヴィヴィアンに感謝しなくちゃね！」

ヴィヴィアン

「ウ〜！」

それから五人は暖かい湯船に浸かり、ヴィヴィアンと信助は隣の部屋で眠りについた。アンジュはバスローブ姿で窓の外を眺め、タスクはバスローブ姿で天馬とドライヤーの修理をしていた。

アンジュ

「タスク、天馬、ありがとう。」

天馬・タスク

「えっ？」

アンジュ

「私より色々知ってるし、優しいし、頼りになるし。私つてば、すぐ感情的になって、意



地になって、パニックになっちゃう。ダメね……。」

天馬

「無理も無いですよ。こんな状況なら、だれだってそうなります。」

タスク

「そうだね。皇女様がノーマになって、ドラゴンと戦う兵士になって、変な兵器に乗せられて、気付いたら500年後……。」

天馬

「色々な事がありましたね……。」

アンジユ

「でも、悪いことばかりじゃなかった。天馬やタスクやヴィヴィアンや信助、色々な人達に会えて、色々な事を知った。最後まで解り合えなかった人もいたけど……。」

アンジユは静かにベッドに腰を下ろした。

天馬

「ジュリオ皇帝か……。ところでタスクさん、あのエンブリヲって人は誰なんですか？」

タスク

「文明のすべてを陰から掌握し、世界を束ねる最高指導者。俺たちが打倒すべき最大の敵だった。」

アンジュ

「だった？」

タスク

「500年以上前の話さ。」

タスクはふと窓の外を見た。

タスク

「随分と遠くまで来ちゃったなあ……。」

天馬

「でも、俺達は間違いなく生きてる。生きてさえいれば、何とかあります。」

アンジュ

「何とかなるか……。なんか、天馬がそれ言うと妙に説得力を感じるのよねえ。」

天馬

「バカにしています？」

アンジュ

「誉めてるの！」

タスク

「ハハハッ！」

アンジュと天馬のやり取りを見て、タスクは笑った。

タスク

「さてと……。」

タスクと天馬は立ち上がり、歩き出した。

アンジュ

「二人とも何処行くの？」

タスク

「俺達は廊下で寝るよ。」

天馬

「アンジュさんはベッドでグッスリ寝てください。」  
アンジュ

「二人もここで寝ればいいじゃない。ソファもベッドもあるんだし。」  
タスク・天馬

「いや、でも……。」

アンジュ

「いいでしょ?」

タスク・天馬

「……じゃあ、お言葉に甘えて。」

タスクと天馬はしびしび戻り、ソファに腰かけたが……。

バキバキバキ……!

タスク・天馬

「でええええええ!!」

ドスンッ！

タスク・天馬

「どわはー！」

腰かけた瞬間ソファァーが倒壊し、二人は勢いよく転倒した。アンジユはベッドの上で爆笑した。

アンジユ

「ハハハハハハッ！もう、二人とも何してるのよ！」

タスク・天馬

「アハハハ・・・。」

すると、アンジユはそつとベッドの端へと移った。

アンジユ

「二人とも、こつち来たら？」

タスク・天馬

「えっ!?!」

アンジュの発言に二人は驚き、顔を赤くした。

タスク

「さ、流石にそれは……。」

天馬

「お、俺はやめておきます!俺は……。」

それから数秒後。

ヴィヴィアン

「ウゝ……(何の音?)」

信助

「何事ですか?」

天馬とタスクが転倒した衝撃で目を覚ましたヴィヴィアンと信助が、部屋の窓から顔を出しアンジュ達の部屋の様子を見た。

ヴィヴィアン・信助

「っ!？」

二人は部屋の様子を見て仰天した。アンジュはタスクと共にベッドに入り、天馬はフットボードにもたれて床に座っていた。タスクは少々緊張している様子だ。

アンジュ

「静かね……。世界には、本当に私達しかないのよね？」

タスク

「う、うん。」

アンジュ

「こんな穏やかな気持ち、何時ぶりだろう……。」

天馬

「ひよつとすると、ウイルスがアンジュさんや俺達を、戦いの無い世界へ逃がしてくれ

たのかも知れませんか。」

タスク

「そうだね……。」

アンジユ

「ヴィルキスに、感謝しなきゃ……。」

アンジユは寝返りをうち、タスクに背中を向けた。タスクはアンジユが背中を向けている内にベッドから下りそつと動く。

アンジユ

「……タスク、しないの？」

タスク

「えっ!?!」

タスクは足を止め振り向いた。

タスク



「いやいやいや!!お、俺はヴィルクスの騎士だ!!君に手を出すなんてそんな・・・!!」

アンジユ

「・・・もしかして、私のこと嫌い?」

タスク

「そんなわけ無いだろ!!」

アンジユ

「じゃあ、何で?」

タスク

「いや・・・その・・・お、恐れ多くて。」

アンジユ

「・・・え?」

天馬

「どういう事ですか?」

タスク

「・・・10年、いや正確には548年前か。リベルタスが失敗して、アレクトラは右腕を失って二度とヴィルクスには乗れなくなり、俺の両親も仲間も死んで、俺にはヴィルクスの騎士としての使命だけが残された。でも、俺は見たことも会ったこともない誰か

のために戦って死ぬ、その使命が怖くて、あの深い森に逃げた。戦う理由も、生きる理由も見つからずに……。

でも、そんな時にアンジュと天馬君と出会った。」

天馬

「俺達と？」

タスク

「アンジュは、小さな身体で勇敢に戦い抗っていた。そして天馬君は、大切な誰かを守りたい一心で戦っていた。二人のおかげで、目が覚めたんだ！ やつと騎士である意味を見つけ、歩き出せたんだ！ 押し付けられた使命じゃなく、自分の意思で！ だから俺は、天馬君のようにアンジュを守ればそれで良いって言うか……。」

アンジュ

「ヘタレ。でも、純粹……。」

タスク

「え？」

アンジュは立ち上がり、タスクにそっと近づいた。

アンジユ

「私は、血塗れ。人間を殺し、ドラゴンを殺し、兄ですら死に追いやった。」

スルツ：

タスク

「えええっ!？」

アンジユはバスローブの紐をほどき、一糸纏わぬ姿になった。

アンジユ

「私は血と罪と死に塗れてる。あなた達に守られる資格なんて……。」

タスク

「そんな事無い！アンジユは綺麗だ！君がどんなに血塗れになろうとも、俺だけは君の傍にいる！」

アンジユ

「暴力的で、気紛れで、好き嫌い激しいけど……それでも？」  
タスク

「ああ、それでも！」

タスクの真つ直ぐな目を見て、アンジユは優しく微笑んだ。

天馬

「……アンジユさん。」

天馬は立ち上がり、アンジユとタスクの前に姿を見せた。が、直ぐに背中を向けた。

天馬

「……あ、いや、その、すみません！」

アンジユ

「いいわよ、こつち向きなさい。」

アンジユに言われ顔を向けた。

天馬

「アンジュさん、俺もいつまでもアンジュさんの傍にいます！アンジュさんは俺にとって、大切な友達です！俺はこの命が尽きる日まで、アンジュさんとアンジュさんの大切な存在を守り続ける！それが今の俺の使命であり、俺が自ら見つけ出した信念です！」

アンジュ

「天馬……。」

天馬は笑顔で答え、アンジュは笑顔を見せた。

アンジュ

「……ありがとう天馬。これからも、頼りにしてるわ。」

天馬

「はい！」

アンジュ

「床じゃ寒いでしょ？一緒にどうぞ？」

天馬

「えっ!?! いや、それは……。」

ギャアアアアアアア!!

突然、窓の外からドラゴンの鳴き声が聞こえてきた。

タスク

「ドラゴンの鳴き声?」

アンジユ

「ヴィヴィアンじゃないの?」

天馬

「……っ!?! 二人とも伏せて!」

天馬は二人にのし掛かり、二人を押し倒した。

ドーン! ガシャーン!

突如、物凄い轟音と共に部屋中の窓ガラスが一斉に砕け散った。

ヴィヴィアン・信助

「うわあ!？」

ヴィヴィアンと信助は衝撃によって部屋の奥へと吹き飛ばされた。

天馬

「大丈夫ですか!？」

タスク

「大丈夫、ありがとう・・・。」

アンジユ

「それより、いったい何なの?」

ガラスが無くなった窓の向こうにはガレオン級大型ドラゴン。その頭の上には二人の女性が立っていた。

???

「救難信号を発していたのはお前達か？」

天馬・信助

「ああっ!!」

天馬と信助は二人を見て思わず叫んだ。

天馬・信助

「あなた達は、あの時の!!」

二人の女性は、以前天馬と信助がアルゼナルで戦った二人だったからだ。

???

「……まさか、こんなところでお前達と再会するとはな。まあいい。」

???

「ようこそ、偽りの民よ。私達の世界、本当の地球へ。」

天馬



「本当の・・・地球？」

To Be Continued...

## E p. 17 / 遭遇！アウラの民！

くコンテナく

ホテルで謎の女と遭遇したアンジュ達は、コンテナに乗せられある場所へと連れていかれていた。

タスク

「何処へ連れて行く気だろうか？」

天馬

「分からないですけど、あの人は前にアルゼナルがドラゴンの襲撃を受けたときに戦った人達です。」

信助

「言葉は問題なく通じるみたいですから、もしかしたらこの世界の事とか分かるかもしれませんよ？」

アンジュ

「そうね。偽りの民だとか本当の地球だとか言ってたけど、どういう意味なのかしら?」

ドシーン!

突如、地面に落ちたような音が響いた。

天馬

「着いたのかな?」

ガコン!

扉が開き、例の二人が姿を見せた。

???

「着いたわ。出なさい。」

五人は恐る恐る外へ出る。目の前には以前天馬と信助が戦った機体。その向こうに

は巨大な滝の上にそびえ立つ塔と、神殿とおぼしき和風な巨大建造物。そして、赤い翼と尻尾を生やした大勢の女性の姿があった。

天馬

「うひゃー、凄いなこれ。」

五人は思わず目を奪われた。すると……。

プスッ

ヴィヴィアン

「ウ……」

突然ヴィヴィアンの背中に吹き矢が刺さり、ヴィヴィアンは眠ってしまった。

アンジユ

「ちよっと、ヴィヴィアンに何するの!？」

???

「安心しろ、手荒にはせん。それよりも、奥で大巫女様がお待ちだ。コチラへ。」

ヴィヴィアンを残し、二人の女はアンジュ達を神殿へと案内した。

天馬

「……ところで、名前聞いてもいいですか?」

???

「私は《ナーガ》。そちらは《カナメ》。」

信助

「みんな翼と尻尾が生えてますけど、何でなんですか?それに、ここが本当の地球つて……。」

カナメ

「いづれ分かります。近いうちに。」

-----

く神殿　大巫女の間く

ナーガとカナメはアンジュ達を大巫女様のところへと連れてきた。大巫女様は雛壇の最上部で自身の姿を簾で隠し、下の段には同じく簾で姿を隠した幹部とおぼしき人影が八人見える。

大巫女

「異界の女と・・・男か。名は何と申す？」

アンジュ

「人に名前を聞く前に、まず自分から名乗りなさいよ！」

ナーガ

「なっ！大巫女様に何たる無礼！」

ナーガは腰に身に付けた二本の刀を鞘から抜き、カナメは背中に背負っていた薙刀を手を取った。

タスク

「ちよつとアンジユ!」

大巫女

「特異点は開いておらぬはず。どうやってここまで来た?」

アンジユ

「……」。

大巫女様の問いにアンジユは答えなかった。

「大巫女様の御前ぞ! 答えよ!」

「あの機体、あれはお主が乗ってきたのか?」

「そこにいるのは本物の男?」

「あのシルフィスの娘、どうしてお主らと共にいる?」

アンジユは幹部達から質問攻めにされ、ついにストレスが限界に達した。

アンジュ

「うるさい!!こっちだつて分からない事だらけなんだから、聞くなら一つずつにして!」  
「ここはどこ?!今はいつ?!アンタ達は何者?!」

???

「フフツ、威勢の良いことで。」

突如、大巫女様の左下の人影が立ち上がり、アンジュ達の前に姿を現した。

アンジュ・天馬・信助

「っ!!」

アンジュと天馬と信助はその人を見て驚愕した。現れたのは桃色の衣装を纏った長い黒髪と青い瞳の女。以前アンジュが戦った赤い機体のパイロットだった。

???

「真祖アウラが未裔にして、フレイアの一族が姫、近衛中将《サラマンディーネ》。」



天馬

「サラマンディーネ……。」

サラマンディーネ

「ようこそ、真なる地球へ。偽りの星の者達よ。」

大巫女

「知っておるのか？」

サラマンディーネ

「この者ですわ。先の戦闘で我が機体と互角に戦った、ヴィルクスの乗り手は。」

「この者は危険です！生かしておいてはいけません！」

「処分しなさい！今すぐに！」

アンジユ

「やりたきややれば？死刑には馴れてるから。」

ナーガ

「言わせておけば……！」

ナーガは両手の刀を振り上げ、アンジユに向けて勢いよく振り下ろした。

アンジユ

「でも……。」

キーン！

ナーガ

「なにつ!？」

天馬が右手にナイフを装備し、ナーガの刀を弾いた。

アンジユ

「私を殺せば、彼が黙ってないわよ？」

ナーガ

「カナメの薙刀でも受け止められなかった私の攻撃を、あんな刃物一本で弾いたと言う

のか!？」

天馬はナイフをホルスターに収納し、ナーガも刀を鞘に納めた。アンジユの自信と天馬の戦闘力に幹部達は動揺した。

サラマンディーネ

「お待ち下さい、皆様！」

大巫女

「サラマンディーネ？」

サラマンディーネは雛壇を下り、アンジユ達へと近づいた。

サラマンディーネ

「この者はヴィルキスを動かせる特別な存在。あの機体の秘密を聞きだすまで、生かしておく方が得策かと。」

「この者達の命、私にお預け下さいませんか？」

大巫女

「……いいだろう、任せよう。」



〈寝室〉

サラマンディーネはその後、ナーガとカナメを連れてアンジュ達を寝室へと案内した。寝室には布団が人数分用意され、茶道用の畳と釜等の茶道道具一式用意されていた。

サラマンディーネ

「二人は御下がりなさい。」

ナーガ・カナメ

「はい。」

ナーガとカナメは静かに寝室を離れた。

アンジュ

「随分と洒落た監獄ね。」

サラマンディーネ

「あなた方を、捕虜扱いする気はありません。」

サラマンディーネの発言に四人は驚いた。

サラマンディーネ

「シルフィスのあの娘とも、治療が終われば会えます。皆様の機体も、責任をもって修理いたしますので。」

五人は畳の上に移り、サラマンディーネは腰の刀を下ろし、茶碗に茶を点て、アンジュ達に茶を振る舞った。

サラマンディーネ

「長旅でお疲れでしょう?」

信助

「ありがとうございます！」

信助はたまらず茶碗の茶を真つ先に飲み干した。

信助

「は、おいしい。」

信助は幸せそうな表情を浮かべ、サラマンディーネは微笑んだ。

タスク

「俺はタスク。アンジュの騎士だ。」

信助

「僕は信助。タイタニアスのメイルライダーです。」

天馬

「俺は天馬。ペガサスのメイルライダーで、アンジュさんの友人です。あの、質問してもいいですか？」

サラマンディーネ

「何なりと。」

天馬

「ここは、本当に地球なんですか？」

サラマンディーネ

「はい。そして我々も、あなた方と同じ地球の民、人間です。」

タスク

「だが、地球は俺達の星で人間は俺達だ。だとしたら、ここは……？」

頭を悩ませるタスク。すると……。

天馬

「……平行世界にある、もうひとつの地球。」

天馬の発言に、サラマンディーネ以外全員が驚いた。

サラマンディーネ

「いい掴みです。ここは平行宇宙に存在する、もうひとつの地球。一部の人間がこの星を捨てて移り住んだのが、別宇宙にあるあなた方の地球なのです。」

信助

「地球を捨てた!?! どうして!?!」

天馬

「過去の人間達によって引き起こされた戦争と汚染。住めなくなつたこの地球を捨てて、俺達の地球へ移り住み繁栄して、今に至る。そうですよね?」

サラマンディーネ

「はい。」

アンジュ

「……つまり、こう言うことでしょ?」

バリーン!

アンジュは茶碗を壁に投げて割り、大きい破片をサラマンディーネの背後から首に近づけた。



アンジユ

「あなたがここに居て地球が二つあるって事は、帰る方法もあるって事でしょ!？」  
タスク

「アンジユ!!」

ナーガ

「姫様!」

カナメ

「サラマンディーネ様!」

危険を察知し、ナーガとカナメが武器を持って入ってきた。

アンジユ

「近づいたら命は無いわよ?」

ナーガ

「野蛮人め!早々に処刑すべきだった!」

ナーガは天馬と信助の首に刀を近づけ、カナメはタスクの首に薙刀の刃を近づけた。

カナメ

「姫様を離せ！さも無くばこの男達の命はないぞ！」

タスク・信助

「えええっ!？」

タスクと信助は恐怖し怯えたが、天馬は恐怖も怯えもしなかった。

天馬

「いいですよ？少なくとも、俺はいつでも死ぬ覚悟は出来てる。」

ナーガ・カナメ

「えっ!？」

天馬の発言に、ナーガとカナメは驚いた。

天馬

「俺は、アンジュさんを守るためな命も惜しくない！アンジュさんのためなら、喜んで死

んでやる!」

覚悟を決めた天馬を見て、カナメは驚愕しナーガは動揺した。

ナーガ

(何たる気迫。コイツ、こんなにも若いというのに死を恐れないのか?)

サラマンディーネ

「・・・帰ってどうするのです?機械に乗って我が同胞を殺す日々が、そんなに恋しいのですか?」

アンジユ

「黙ってて!」

サラマンディーネ

「偽りの地球、偽りの人間、そして偽りの戦い。あなたは何も知らなさすぎる。」

サラマンディーネは刀を取り、その場から立ち上がる。

サラマンディーネ

「参りましょう、真実を見せて差し上げますわ。ナーガ、カナメ、留守をお願いしますわ。」

ナーガ・カナメ

「姫様！」

サラマンディーネは部屋の入り口へと歩き、アンジユは慌てて追いかけた。

サラマンディーネ

「天馬殿、あなたも御一緒に。」

天馬

「えっ？俺も？」

サラマンディーネ

「あなたの、誰かを守るためなら死を恐れないという覚悟に尊敬いたしました。よって、あなたにも真実を見せて差し上げます。」

アンジユ

「ちよっと、主導権は私よ！」

サラマンディーネとアンジュは部屋を後にし、天馬は慌てて二人を追いかけた。

信助

「行っちゃった・・・。」



く 竜の里 外れく

サラマンディーネはアンジュと天馬をある場所へと連れてきた。三人の目の前には見覚えのある巨大な塔がそびえ立っている。

天馬

「暁ノ御柱だ。」

サラマンディーネ

「《アウラの塔》、私達はそう呼んでいます。かつての、ドラグニウムの制御施設ですわ。」

アンジュ

「ドラグニウム？」

—————

くアウラの塔 内部く

三人は塔の中へと入り、エレベーターで地下へと向かった。

サラマンディーネ

「ドラグニウムとは、22世紀末に発見された、強大なエネルギーを持つ超対称性粒子の一種。世界を照らすはずだったそのエネルギーは、すぐに戦争に投入されました。そして、環境汚染、民族対立、貧困、格差・・・何一つ解決しないまま、人類社会は滅んだのです・・・。」

アンジュ・天馬

「・・・。」

サラマンディーネ

「一部の人間たちは新天地を求めて旅立ち、残された人類は、汚染された地球で生きていくために一つの決断を下します。」

天馬

「その決断とは?」

サラマンディーネ

「遺伝子操作によつて自らの体を作り変え、生態系ごと環境に適応すること。」

—————

くアウラの塔 最深部く

エレベーターは最深部に到着した。最深部は巨大な球状の空間が広がり、中央には巨大な穴が開いている。

アンジユ

「何?」

サラマンディーネ

「ここに、アウラがいたのです。」

天馬

「アウラ？」

サラマンディーネ

「汚染された世界に適応するため、自らの肉体を改造した偉大なる始祖。あなた達の言葉で言うなら、最初のドラゴンです。」

アンジユ・天馬

「最初のドラゴン……。」

サラマンディーネ

「私達は罪深き人類の歴史を受け入れ、アウラと共に贖罪と浄化のために生きることを決めたのです。男たちは巨大なドラゴンに姿を変え、世界の浄化のためにその身を捧げ……。」

アンジユ

「浄化？」

サラマンディーネ

「ドラグニウムを取り込み、体内で安定化した結晶にするのです。女達は時に姿を変えて男達と共に働き、時が来れば子を宿し産み育てる。私達はアウラと共に、世界の浄化



と再生のために歩み始めたのです。

ですが、アウラはもう居ません・・・。」

アンジユ

「どうして?」

サラマンディーネ

「連れていかれたのです。ドラグニウムを発見し、ラグナメイルを生み出し、全てを破壊した元凶、エンブリオによって。」

天馬

「エンブリヲ!」

サラマンディーネ

「あなた達の世界は、どんな力で動いているか知っていますか?」

アンジユ

「マナの光よ?」

サラマンディーネ

「では、そのエネルギーは?」

アンジユ

「マナの光は無限に産み出されているって聞いてるけど？」

天馬

「・・・ん？」

天馬は疑問に思い、これまで聞いてきた内容を整理してみた。

『神様は繰り返される戦争とボロボロになった地球に、うんざりしていました。』

平和、友愛、平等。口先では美辞麗句を歌いながらも、人間の歴史は戦争と憎悪と差別の繰り返しです……。

それが人間の本質。このままでは、世界は滅んでしまいます。そこで神様は、新しく作ることにしたのです。新しい人類を。争いを好まない穏やかな人間。あらゆる物を思考で自在にコントロール出来る高度情報化テクノロジ、マナ。

あらゆる争いが消え、あらゆる望みが叶い、あらゆる物を手にすることのできる理想郷が完成したのです。』

『文明のすべてを陰から掌握し、世界を束ねる最高指導者。俺たちが打倒すべき最大の敵だった。』

(今まで聞いてきた話を纏めると、アウラを奪い俺達の世界を作った神様はエンブリヲで間違いない。でも、アウラを奪った理由が分からない。それに、いくら無限にマナの光を生み出すにしても、そのエネルギー源は何処から?)

『ドラグニウムを取り込み、体内で安定化した結晶にするのです。』

天馬

(大きいドラゴンは体内でドラグニウムを結晶化させる役目を持っていた……)

結晶……?)

『ドラゴンの心臓からこんなものが出てくるなんて、知らなかったわ。』

『触った感じは特に害は無さそうだな。』

『ですが、何だかマナに近いような力を感じます。』

天馬

「・・・サラマンディーネさん、少し話を戻しますけど、その安定化したドラグニウムの結晶って、何色なんですか？それで、結晶は何処へ行くんですか？」

サラマンディーネ

「安定化したドラグニウムは赤い結晶へと姿を変え、大部分は心臓へと送られます。」

天馬

「っ!!」

サラマンディーネのこの言葉で、天馬の予想は確信となった。

天馬

「そういうことだったのか!」

アンジュ

「えっ? どういうこと?」

天馬

「エンブリヲがアウラを奪った理由は、俺達の地球を発展させるため。俺達の世界で発展しているマナの光の源は、アウラの放つドラグニウムのエネルギー。でも、エネルギー源となるドラグニウムは補充する必要がある。そのドラグニウムを採取するために、俺達ノーマがドラゴンを狩るハンターとしてパラメイルに乗り、ドラゴンから世界を守るという偽の理由で、俺達の世界に侵攻してきたドラゴン達を殺し、心臓からドラグニウムを取り出しアウラに与える。」

俺達の命懸けの戦いは、マナの世界を維持するために必要な、ドラグニウム集めの一貫に過ぎなかつたんだ!」

天馬は拳を握り激情した。

アンジユ

「そんな……。」

サラマンディーネ

「……分かっていただけましたか？偽りの地球、偽りの人間、偽りの戦いと言った意味が。それでも偽りの世界に帰りますか？」

アンジユ

「当然でしょ？私の世界はあっちよ！」

サラマンディーネ

「では、あなた達を拘束します。これ以上私達の仲間を殺されるわけにはいきませんかー！」

サラマンディーネは翼を広げた。

アンジユ

「やるの？」

サラマンディーネ

「殺しはしません。私達は残虐で暴力的な、あなた達とは違います。」

アンジユ

「アルゼナルをぶっ壊しておいて、何を言うの!?!」

サラマンディーネ

「あれは龍神器の起動実験です。あなた方はアウラ奪還の妨げになる恐れがありましたから。」

アンジユ

「それで何人死んだと思ってるの!?!」

サラマンディーネ

「許しは請います。私達の世界を守るためです。皇女アンジユリーゼ、あなたも同じ立場なら、同じ選択をしたはずですよ。」

アンジユ

「えっ?」

サラマンディーネ

「あなたの事はリザーディアから聞いていました。近衛長官リイザ・ランドックと言えは分かりますか?」

アンジユ

「あいつ、あなた達の仲間だったの!?!・・・バカにしてえ!!」

アンジユは拳を握り、サラマンディーネに殴りかかる。

サラマンディーネ

「あなたは、知らなすぎただけですわ。」

ドカツ!

アンジユ・サラマンディーネ

「えっ!?!」

だが、アンジユの拳はサラマンディーネには当たらず、いつの間にかアンジユの前に立ちはだかった天馬の腹に命中した。

天馬

「グハッ!」



天馬は腹をおさえ、地面に膝を着きうずくまった。

天馬

「アンジュさん・・・やめてください・・・腹が立つ気持ちには分かりますけど・・・今は争ってる場合じゃ・・・。」

ドサツ

天馬は気を失い倒れた。

アンジュ

「天馬!」

サラマンディーネ

「天馬殿!」



く 神殿 寝室く

天馬

「う．．．う．．．」

目が覚めると、天馬は寝室の布団の中で眠っていた。

天馬

「ここは．．．？」

「お？起きた？」

隣から聞き覚えのある声が聞こえてきた。身体を起こし隣に目を向けると、そこにはアンジュと人間姿のヴィヴィアンがいた。

天馬

「ヴィヴィアンさん!?ど、どうして人間に!?!」

ヴィヴィアン

「実はね、えつとく・・・何だっけ?」

「彼女のD型遺伝子を調整しました。これで外部からの投薬無しで人間の姿を維持できます。」

ヴィヴィアンの後ろから、オレンジ色のおかっぱ頭でゴーグルと黒と薄緑の縞々のストッキングを着用した女性が説明をした。

天馬

「あなたは?」

ゲッコウ

「私は《ドクター・ゲッコウ》。天才御殿医にして、遺伝子工学の権威です。以後お見知りおきを。」

天馬

「は、はあ・・・」

アンジュ

「天馬、さつきはゴメン！私、ついカツとなっちゃって…」

天馬

「だ、大丈夫ですよ大丈夫！」

「助けてー！！」

突然、部屋の外からタスクと信助の悲鳴が聞こえてきた。

天馬

「タスクさんと信助の悲鳴？何があつたんだ？」

天馬はベッドを下り、四人は廊下へと出た。すると、前方からタスクと信助がこちらに向かって走っていた。

天馬

「タスクさん！信助！」

信助・タスク

「天馬(君)！」

タスクと信助は大急ぎで天馬の背後に隠れた。

天馬

「え?ど、どうしたんですか?」

「キヤー!!」

天馬

「え?キヤーつて・・・。」

今度は前方から大勢の女達が押し寄せてきた。

天馬

「でえええええええ!?!」

ナーガ・カナメ

「者共待たれい！」

丁度そこへ武器を持ったナーガとカナメが現れ、女達を寸前で止めた。

天馬

「あの、いったい何が？」

ナーガ

「……実は、サラマンディーネ様とお前達が留守の間、ゲツコーが自分の研究所の研究員達に二人を紹介したらしいのだが……。」

カナメ

「どうもその目的は、勉強用のデータを録るためだったらしくて……。」

天馬

「勉強？」

ゲツコー

「性教育についてです。」

アンジユ・天馬

「えっ!?!」

性教育と聞いた途端、アンジユと天馬の顔は真っ赤になった。

ゲツコー

「なんせ人形の男性なんて珍しいですから。」

信助

「で、僕達はナーガさんとカナメさんのおかげで研究所を抜け出したんだけど……。」

タスク

「抜け出したのがバレてこのありさま……。」

アンジユ

「へえく……。じゃあ随分と楽しんだんじゃない? タスク。」

バキツ! ボキツ!

アンジユは指を鳴らし、タスクを殴る準備をする。

タスク

「ヒイツ!？」

信助

「おおお落ち着いて下さい！僕もタスクさんも何もされてません！」

ゲツコー

「という訳で……。」

トンツ

ゲツコーは急に天馬の右肩に手を置いた。

天馬

「ゲツコーさん？」

ゲツコー

「天馬さんには、タスクさんと信助さんの代わりになっていただきます。」

天馬

「え？」



ドンッ!

天馬

「うわあああ!?!」

ゲツコーは天馬を前へと押し飛ばした。天馬はナーガとカナメの間を抜け、女達が見事に受け止めた。

「うわあ、可愛い♥」

「髪型面白〜い!」

ゲツコー

「皆さん、行きますよ。」

「はーい!」

天馬

「ええええええつ?!ちよちよつと!ちよつと待ってください!誰か助けて!ちよつと?!ちよつとー!」

天馬はそのままゲツコー達に連れ去られてしまった。

アンジユ・ヴィヴィアン

「あー…」



く 神殿 中庭 く

天馬はその後無事に解放され、夕方にはアンジユ・ヴィヴィアン・タスク・信助と共に中庭にいた。が、物凄くぐったりしていた。

アンジユ

「ねえ、大丈夫?」

天馬

「一足先に地獄見てきました・・・。」

タスク

「いったい何されたの・・・?」

すると・・・。

サラマンディーネ

「申し訳ありません。ドクター・ゲツコーは医師としての腕は確かなのですが、少しマツドサイエンティストな性格でして・・・。」

サラマンディーネとナーガとカナメ、さらにヴィヴィアンと同じ色の赤髪と黄色い瞳をした優しそうな女性が現れた。

天馬

「サラマンディーネさん。」

アンジュ

「ムツ……。」

アンジュはサラマンディーネを睨み、サラマンディーネはアンジュではなくヴィヴィアンに目を向けた。

サラマンディーネ

「ラミア、彼女です。遺伝子照合で確認しました。あなたの娘に間違いありません。」

アンジュ・天馬・タスク・信助

「えっ!？」

ヴィヴィアン

「ほえ？」

アンジュと天馬とタスクと信助は驚いて一斉にヴィヴィアンに目を向け、ヴィヴィアンは自分を指差した。

サラマンディーネ

「行方不明になったシルフィスの一族。あなたの娘、ミイよ。」

ラミア

「ミイ・・・本当にミイなの!？」

ラミアは嬉しくてヴィヴィアンに抱きしめるが、ヴィヴィアンは混乱していた。

ヴィヴィアン

「いや、アタシはヴィヴィア・・・ん?」

ヴィヴィアンは何かを感じたのか、ラミアの匂いを嗅いだ。

ヴィヴィアン

「この匂い知ってる。エルシャの匂いみたい。あんた誰?」

ラミア

「あなたの、お母さんよ。」

ヴィヴィアン

「お母さん・・・さん?」

サラマンディーネ

「あなたを産んでくれた人ですよ。」

サラマンディーネはヴィヴィアンに説明をし、ナーガとカナメは涙を流していた。

信助

「ヴィヴィアンさんのお母さん？」

サラマンディーネ

「ええ、彼女はお母さんを追って、あちらの世界に迷い込んでしまったのでしょ。」

信助

「そうだったんだ…」

サラマンディーネ

「祝いましょう、仲間が10年ぶりに帰ってきたのですから。」



くアウラの塔 正面く

夜、アウラの塔の前に竜の里の人々が集まった。皆直方体の灯籠を手に持ち、中には小さな火が灯っている。

「サラマンディーネ様!」

「サラマンディーネ様ですわ!」

サラマンディーネが塔の前に姿を見せ、人々は歓声を挙げる。

ヴィヴィアン

「何するのこれから?」

ラミア

「サラマンディーネ様の真似をすればいいの。」

サラマンディーネ

「殺戮と試練の中、この娘を彼岸より連れ戻してくれたこと、感謝します。」

サラマンディーネは灯籠を空へ飛ばし、ラミア、ヴィヴィアン、里の人々も一斉に飛

ばした。

サラマンディーネ

「アウラよ！」

「アウラよ！」

灯笼はゆっくりと空高く上り、星に紛れていった。

天馬

「綺麗ですね……」

信助

「不思議な光景だなあ……」

タスク

「もうひとつの地球……か。」

アンジユ

「夢なのか現実なのか、分からない。私達、これからどうなるの？こんなものを見せて、ど



うしろつて言うわけ?」

カナメ

「知ってほしかったそうです、私達の事を。そして、あなた達の事を知りたい。それが、サラマンディーネ様の願いです。」

いつの間にかアンジュ達の後ろにはナーガとカナメがいた。

アンジュ

「知ってどうするの? 私達はあなた達の仲間を殺し、あなた達も私達の仲間を殺した。それが全てでしょ?」

カナメ

「怒り、悲しみ、報復。その先にあるのは滅びだけです。でも人間は受け入れ、許すことが出来る。そして、その先に進むことも。・・・全て姫様の受け売りですが。」

どうぞごゆるりと御滞在下さい。と、姫様より伝言です。」

そう伝えると、ナーガとカナメは頭を下げその場を後にした。

タスク

「ごゆるりと……だつてさ。」

アンジュ

「信じるの？」

タスク

「分からない。けど……。」

四人は楽しそうにしているラミアとヴィヴィアンを見た。

信助

「楽しそうですね、ヴィヴィアンさん。」

天馬

「……俺達、帰るべきなのか？アルゼナル、リベルタス、そしてエンブリヲ。もし、もう戦わなくていいのだとしたら……。」

天馬は一人、空に輝く月を見つめながら一人呟いた。



く妖魔界く

その頃、妖魔界のエンマ大王は手鏡でアンジュ達の様子を見ていた。

エンマ大王

「ここまでは大方予定通りだが、問題はあいつが何処で手を出してくるかな。」

『エンマ大王、稲妻町にて最初の少女の搭乗が完了しました。』

エンマ大王

「よし、では次にエンデラント連合のロボット工学研究所跡地に向かってくれ。二人目の少女はそこにいる。」

『了解。』

T  
o  
B  
e  
C  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
:

# Ep. 18 / 対決! アンジュ vs サラマンディーネ!

## 《前編》

～ 神殿 食堂 ～

アンジュ達が竜の里にやって来た次の日の朝、神殿の食堂ではヴィヴィアンとラミアが朝食を食べていた。

ヴィヴィアン

「おかわり!」

ラミア

「もう、ちゃんとよく噛んでね。」

ヴィヴィアン

「はーい! お母さんさん!」

アンジュ

「あ、ヴィヴィアン。」

そこへ、アンジュ・天馬・信助・タスク・サラマンディーネ・ナーガ・カナメがやって来た。

ヴィヴィアン

「おう！おはようさーん！」

信助

「おはようございます、ヴィヴィアンさん。」

ラミア

「おはようございます、サラマンディーネ様。」

サラマンディーネ

「昨日はよく眠れましたか？」

ラミア

「それが、朝までミイとお喋りをしていました…」

ヴィヴィアン

「だから寝不足〜！」

ヴィヴィアンは両手で頬をおさえながら言った。

サラマンディーネ

「それは何よりですわ。」

一同はヴィヴィアンとラミアが食事をしている隣の座卓に集まり、腰を下ろした。座卓の上には白ご飯と味噌汁、刺身や天ぷらやすき焼き等、朝食にしては豪華な料理が並んでいた。

天馬

「凄い…」

信助

「リアルに高級旅館の料理だよ、これ…」

天馬と信助は並べられた料理に圧倒され苦笑いをしていた。

サラマンディーネ

「さあ、冷めないうちにどうぞ。」

タスク

「い、いただきます・・・。」

タスクは箸を手に取り、恐る恐る刺身をつまみ醤油を付け口に運ぶ。

タスク

「・・・ッ！」

口に入れた途端、タスクは目を見開いた。

サラマンディーネ

「お口に合いました?」

タスク

「す、凄く美味しいです!」

天馬

「ホントですか!?!」



信助

「じゃあ僕も!」

天馬と信助も箸と茶碗に手を伸ばす。

パシンツ!

天馬

「あてっ!」

パシンツ!

信助

「いたい!」

ドスツ!

タスク

「ぐほっ！」

突然、天馬と信助はアンジユ手を叩かれ、タスクは腹部に肘打ちを食らった。

アンジユ

「何普通に食べてるのよ!? 毒でも入ってたらどうするの!？」

アンジユが小声で語りかけた。

タスク

「びっ、ごめん…」

天馬

「すみません…」

信助

「ずっと非常食だったからつい…」

アンジユ

「・・・ヴィヴィアン、大丈夫かしら？」

タスク

「えっ？」

アンジュ達はヴィヴィアンの方を見る。ヴィヴィアンはラミアと楽しく食事をして  
いた。

アンジュ

「情報を得るために敵を解錠するなんて、常套手段じゃない。母親なんて、本物かどうか  
怪しいし・・・。」

天馬

「まさか・・・。」

信助

「他人には見えませんが・・・。」

グウウ

突然、アンジュの腹の虫が鳴いた。

アンジュ

「あ．．．。」

サラマンディーネ

「冷めないうちに召し上げれ。」

天馬・信助

「はいい♪」

アンジュ

「わ、分かってるわよ！」

-----

く 神殿 広場く

食事を終えた後、一同は神殿前の広場にいた。

アンジュ

「家に帰る?」

ラミア

「この子が生まれた家を見せてあげたくて。」

ヴィヴィアン

「てことで、ちよつくら行ってくるね!」

ラミアは翼を広げ、ヴィヴィアンを抱え飛び立った。

タスク

「親子水入らずか。」

天馬

「羨ましいですね。俺の親、小6の頃から単身赴任で家に居ないんです。」

信助

「そういえばそうだったね。」

アンジュ

「・・・茶番はもう十分よ。それで、私達をどうするつもり?」

一同が笑顔で見送る中、アンジユはサラマンディーネに問いかけた。

サラマンディーネ

「……」腹が減つては戦は出来ぬ」と言います。お腹はいっぱいになりましたか？」

アンジユ

「えっ？ いっぱいだけど……。」

サラマンディーネ

「では、参りましょう。」

-----

く都の外れ スタジアムく

サラマンディーネはアンジユ達を連れて、都の外れに設けられたスタジアムにやつて来た。スタジアムは今まで見てきた建造物とは違い、最近作られたかの様に綺麗だった。

アンジュ

「何(なに)こ(こ)?」

サラマンディーネ

「古代のスタジアムです。ある競技を行うために作られ、かつて多くの戦士達が集い、強さを競い合ったそうです。」

天馬

「まさか、500年前の施設ですか!？」

タスク

「凄い、完璧な保存状態だ!」

スタジアムを見て興奮する天馬とタスク。

ナーガ

「姫様自らが復元されたのだ。」

信助

「えっ? 復元!?!」

ナーガ

「サラマンディーネ様はその頭脳で旧世界の文献を研究し、様々な遺物を現代に甦らせておられる！」

天馬

「じゃあ、もしかして三人の乗る龍神器って機体も？」

カナメ

「はい。詳しくは言えませんが……。」

アンジユ

「で、ここで何をするの？」

サラマンディーネ

「……共に戦いませんか？私達と。」

アンジユ

「……は？」

サラマンディーネ

「私達の目的は、アウラを奪還し失われた調和と安定を取り戻すこと。アウラを奪い、あなた達を戦わせ、私達の仲間を殺した全ての元凶はエンブリオです。彼の者を打倒すれば、私はアウラを、あなたは自由を。目的は違えど倒すべき相手が同じなら、協力でき



る。」

アンジユ

「……なーんだ、結局あなたも私を利用したいだけなんだ。戦力として。」

アンジユはサラマンディーネを睨んだ。

アンジユ

「知ってほしかっただの、解り合いたかっただの、全部打算だったんでしょ?」

天馬

「ちよつとアンジユさん。いくら何でもそれは……。」

天馬はアンジユの前に立ち、アンジユを抑えようとする。

アンジユ

「悪いけど、もう誰かに利用されるのはうんざりなのよ!」

サラマンディーネ

「ならば勝負しましょう、アンジユ。」

アンジュ

「勝負？」

サラマンディーネ

「そのためにここにへお連れしたんです。このスタジオアムの中で、私とあなたで勝負をします。あなたが勝てば、皆様は無条件で解放いたします。私が勝てば、あなた達は私の所有物になっていただきます。」

アンジュ

「奴隷か自由か、自分の力で掴み取れって訳ね……いいわーやってやろうじゃない！」

サラマンディーネ

「そう来なくては。」

アンジュとサラマンディーネの交渉は成立した。

ナーガ

「……サラマンディーネ様、その勝負、私達も加えてください！」

突然、ナーガが口を開いた。

サラマンディーネ

「お二人もですか? それでは3対1になりますが・・・。」

カナメ

「いえ、私達が行うのは3対3の勝負です。」

アンジュ

「3対3? いったい誰と?」

ナーガとカナメは答えず、天馬と信助に目を向けた。

ナーガ

「天馬! 信助! 私達と勝負しろ!」

天馬・信助

「えええつ!」

カナメ

「私達は以前、不覚にも龍神器に乗っていないながら、あなた達に敗れました。その時の屈辱を晴らさせていただきます!」

信助

「……つまりリベンジしたいって訳ですね？」

天馬

「いいですよ。その挑戦、受けて立ちましょう！」

ナーガ

「話が早くて助かる！」

アンジユ

「それで、何で勝負するの？」

サラマンディーネ

「これから説明いたします。どうぞこちらへ。」

サラマンディーネは一同をスタジアムの中へと案内した。

—————

くスタジアム内く

スタジアムの中には2階まである沢山の観客席。中央に六角形の巨大なプロジェクトターとおぼしきマシンが設置してあった。

天馬

「何ですかこれ?」

サラマンディーネ

「このスタジアムでかつて大々的に行われていた競技、『ガンプラバトル』のシステムです。」

タスク

「ガンプラバトル?」

サラマンディーネ

「ガンプラバトルとは、21世紀中頃から戦争が起きるまでの間、世界中で大流行した競技です。20世紀末から登場した『機動戦士ガンダム』という空想物語に登場した機体を模したプラモデル『ガンプラ』を、このバトルシステム内に入っている『プラフスキー粒子』と呼ばれる、プラスチックを流動化する特殊な粒子を使用して動かし戦わせ、勝敗を決めます。」

アンジュ

「何よそれ？それじゃタダのおモチヤの遊びじゃない！」

サラマンディーネ

「遊びと思つて侮つてはいけませんよ？私が調べたところ、ガン普拉バトルは世界競技にも選ばれた由緒正しき競技なのですから。」

アンジユ

「はあ!？」

サラマンディーネの発言にアンジユ達は驚いた。

サラマンディーネ

「しかも、このガン普拉バトルは互いを傷付ける事も無く本気の勝負が可能。おまけに勝敗は操縦技術だけでなく、機体の完成度等の様々な要素が兼ね合います。どうですか？」

アンジユは少し考え……。

アンジユ

「・・・ねえ、組み立て前のガン普拉ってある?」

サラマンディーネ

「ええ、多数揃えていますよ。」

アンジュ

「なら条件。自分の使うガンプラは自分で作ることに。いい?」

サラマンディーネ

「えっ!?!・・・いい、いいですよ?」

—————

くスタジオム 売店く

一同は売店へと移動した。売店には様々なガンプラが並んでいる。

アンジュ

「うわあ、ガン普拉ってこんなに種類があるの?」

タスク

「ある意味凄いな…」

一同は売店内を見て回る。

天馬

「……ん？」

天馬の目に1つのガンブラが入った。天馬は商品棚から目に入ったガンブラを取り出す。

天馬

「これって……！」

アンジュ

「どうしたの？」

天馬

「アンジュさん、これ！」



天馬は取り出したガンプラをアンジユに見せた。

アンジユ

「《ガンダムAGE―FX》?これがどうかしたの?」

天馬

「よく見てください!」

アンジユは外箱に描かれたガンダムAGE―FXをよーく見る。すると突然、目を見開いた。

アンジユ

「これって、前にミスルギで見た奴じゃ!?」

天馬

「俺もそう思ったんです。でも、サラマンディーネさんの言い様ならガンダムは空想の存在。それが実物として俺達の前に現れたなんて・・・。」

アンジユ

「うーん・・・。」

二人が悩んでも何も出ず、アンジユと天馬はガンプラ探しに戻った。それから数分後、全員のガンプラが決まった。

信助

「これにしよう！強そうだ！」

信助が選んだのは、HGUC ZZガンダム。

カナメ

「私はこれにしよう。」

カナメが選んだのは、HGAW ガンダムXX

ナーガ

「私はこれだ。」

ナーガが選んだのは、HG デステイニーガンダム。

アンジユ

「これがいいなあ。何だかヴィルキスに似てるし。」

アンジユが選んだのは、HGCE ストライクフリーダムガンダム。

サラマンディーネ

「これにいたしましょう。」

サラマンディーネが選んだのは、HG ダブルオークアンタ。

タスク

「俺はこれ。」

タスクが選んだのは、HG ガンダムサバーニャ。

天馬

「俺はこれだ！」

そして天馬が選んだのは、HG ウイングガンダムゼロEW。

信助

「早速作ろうよ！」

アンジユ

「そうね。ねえ、作り方教えてくれない？」

アンジユはサラマンディーネに話しかけたが、サラマンディーネは少し困っていた。

サラマンディーネ

「・・・アンジユ、1つよろしいですか？」

アンジユ

「何？」

サラマンディーネ

「ガン普拉バトルを提案しておいてアレなんですが、実は私、まだガンプラを作ったことが無いのです……。」

ズコッ!

一同が一斉にコケた。

アンジユ・タスク

「なんじゃそりゃ!?!」

天馬

「それじゃあ、どうすれば……。」

「ここは私の出番の様ですね。」

突如、一同の後方から聞き覚えのある声でした。振り向くとそこには、ドクター・ゲツコーがいた。

ゲッコー

「サラマンディーネ様、ここは私にお任せ下さい。私が皆様に、ガンプラ作りを教えてください上げましょう。」

サラマンディーネ

「本当ですか？ お願いいたします！」

ナーガ

「だが、大丈夫なのか？」

ゲッコー

「ご安心を。実は私、サラマンディーネ様がガンプラとバトルシステムを復元されてから、作業の合間を縫ってガンプラ作りとガンプラバトルの研究をしていたのです！」

タスク

「それって、ある意味マニアでは……。」

—————

〈 売店 工作室 〉

一同は工作室に移った。作業用の大きなテーブルの上にはプラスチック用ニッパー、紙ヤスリ、ピンセットが人数分用意してあった。

ゲッコー

「ではこれより、ドクター・ゲッコーのガンプラ製作教室を行います。解りやすい様に、作りながら説明致しますね。」

ゲッコーの前には、BB戦士 武者頑駄無が置いてある。

ゲッコー

「返事をする時は“サーイエツサー”。よろしいですね?」

一同

「サーイエツサー!」

◇其ノ壺 組み立て説明書◇

ゲッコー

「ではまずガンプラの箱を開け、中に入っている組み立て説明書を取り出します。」

一同は箱を開け、説明書を取り出す。

ゲッコー

「説明書を熟読！時間は1分です！」

信助

「いや無理でしょー！」

◇其ノ式 内容物の確認◇

ゲッコー

「作る前に、説明書に記載されている内容物が全て入っているかを確認します。ポリキャップや付属のシールも忘れずに。」

サラマンディーネ

「ランナーAは問題無し。次はBですね。」



◇其ノ参 ランナーからの切り離し◇

ゲッコー

「説明書の組み立ての手順、1番から製作します。ニツパーの扱いには要注意。パーツとランナーを繋ぐゲートは少し長めに切り、はみ出た部分をもう一度切ります。」

アンジュ

「こういう細かい作業、苦手なのよねえ…」

◇其ノ四 パーツ組み合わせ◇

ゲッコー

「切り取ったパーツを説明書通りに組み立てます。ポリキャップの入れ忘れに注意してください。」

パチンツ

タスク

「しまった！ポリキャップ入れ忘れた！」

◇其ノ伍 シール貼り◇

ゲッコー

「シールの貼り直しは粘着力低下の大きな原因。慎重に位置を合わせて貼ること。エンプレム等の貼り込むタイプのシールは、綿棒等で押さえてあげれば効果的です。」

ナーガ

「慎重に・・・慎重に・・・。」

◇其ノ六 最終組み立て◇

ゲッコー

「出来上がったパーツを組み合わせながら、機体の可動範囲を確認します。ガンプラを深く理解すれば、バトルを有利に進められます。」

天馬

「肘はここまで曲がるのか。」

◇其ノ七 最後の工夫◇

ゲッコー

「マーカーでスミ入れを施し表面のモールドを強調させ、仕上げにつや消しスプレーを吹きます。たったこれだけで、ただ組んだだけの時よりも見栄えが良くなります。」

カナメ

「スミ入れ終了! お次は・・・。」

そして数分後、全員のガンプラが完成した。

天馬

「やったー! 完成!」

ゲッコー

「素晴らしい! どれも初めてとは思えない出来です!」

アンジュ

「カッコいい！」

サラマンディーネ

「スミ入れとつや消し処理を行う前でもカッコ良かったですが、少し手を加えたただでここまで見栄えが変わるとは。」

ゲッコー

「ガンプラは手を加えれば加えるほど、それに答えてくれます。カラーリングや武装の変更、機体改造、創意工夫は無敵大です。それがガンプラの面白さでもあり、奥深さでもあります。」

天馬

「よし、じゃあ早速動かすとしましよう！」

アンジユ

「そうね！行きましよう！」

一同は各自製作したガンプラを手にし、バトルシステムのところへと向かった。

# E p. 18 / 対決! アンジユvsサラマンディーネ!

## 《後編》

くスタジオム バトルシステム前く

ガンプラを作り終えた一同は各々バトルシステムの端に集まった。

サラマンディーネ

「ルールは、4対4のチーム戦。制限時間は無し。先に敵の機体を全て破壊した方の勝利です。よろしいですね?」

アンジユ

「OKよ。」

タスク

「あの、4対4って事は俺とゲツコーさんも参加するの?」

ゲツコー

「良いと思います。せっかく一緒に作ったのですから、使わないと勿体ないではありません

せんか。」

サラマンディーネ

「では、始めましょうか！」

サラマンディーネはバトルシステムの電源を入れる。

バトルシステム

『GUNPLA BATTLE COMBAT MODE STARTUP！』

MODEL DAMAGE LEVEL SET TO "C"・

BEGINNING PLAVSKY PARTICLE DISPERSAL.』

システムからプラスキー粒子が放出。フィールドが構成され、大量の隕石が浮かぶ宇宙空間が現れた。

『FIELD 1. SPACE.』

天馬

「凄い! 宇宙空間だ!」

『PLEASE SET YOUR GUNPLA.』

一同は自分のガンプラをセットする。セットすると、ガンプラが動き出し、目が発光。コックピットと光球状の操縦桿と各種パネルが出現し、そしてカタパルトが現れた。

『BATTLE START!!』

アンジユ

「アンジユ、ストライクフリーダムガンダム!」

タスク

「タスク、ガンダムサバーニャ!」

信助

「信助、ダブルゼータガンダム!」

天馬

「天馬、ウイングガンダムゼロ!」

サラマンディーネ

「サラマンディーネ、ダブルオークアンタ！」

ナーガ

「ナーガ、デステイニーガンダム！」

カナメ

「カナメ、ガンダムダブルエックス！」

ゲツコー

「ドクター・ゲツコー、武者頑駄無！」

アンジユ

「チーム・アンジユ、行くわよ！」

サラマンディーネ

「チーム・サラマンディーネ、参ります！」

一同のガンプラは勢いよくフィールドへと放たれ、いよいよバトルが始まった。





「隕石」

アンジュ達は宇宙空間に浮かぶ隕石の1つに着地した。

アンジュ

「さーてと、目標は……。」

ビー! ビー! ビー!

突然、コックピット内に警告のブザー音が響いた。辺りを見回すと、前方からサラマンディーネ達の機体が接近していた。

タスク

「アンジュ、作戦は?」

アンジュ

「散開して各々一機ずつ相手をするわ。でも援護はしちやダメよ。」

信助

「何故です？」

天馬

「横槍を射れるなって事だよ。ナーガさんは俺、カナメさんは信助、サラマンディーネさんはアンジユさんと真剣に勝負をしたがってたから。」

タスク

「なるほど、表面上はチーム戦でも内容は各々の個人戦で勝敗を決めたいって訳か。」

アンジユ

「あっちがノツてくれるかどうかの問題だけだね。」

一方、サラマンディーネ達は……。

ナーガ

「姫様、作戦はどうされますか？」

サラマンディーネ

「各々戦いたい機体と自由に戦ってください。ただし援護は禁止です。」

ナーガ

「何故です？皆で力を合わせれば、敵を落とすのは容易です。」

カナメ

「ナーガ、あなたは彼にリベンジがしたいんでしょう? なのに多数で落としちゃったら、実力で勝てた事にはならないんじゃない?」

ナーガ

「うっ、た、確かに……。」

サラマンディーネ

「むこうもそれを望んでいるはずです。散開して気を引かせましょう。」

ゲッコー

「了解です。」

サラマンディーネ達は散開し、上下左右の四方向に分かれて飛行する。

アンジュ

「どうやら、向こうも同じ考えみたいね。こっちも散開して迎え撃つわよ!」

アンジュ達も散開し、アンジュはサラマンディーネ、天馬はナーガ、信助はカナメ、タスクはゲッコーの機体を追いかけた。

「月面 クレーター」

数分後、天馬のウイングガンダムゼロEWは月面のクレーター内に着地した。正面にはナーガのデステイニーガンダムがいる。

ナーガ

「待っていたぞ、天馬。」

天馬

「その声、ナーガさんですね？」

ナーガ

「この間は龍神器に乗っていないながら、不覚にもお前とお前の機体に敗れた。その時の屈辱、晴らさせてもらおうぞ！」

デステイニーガンダムはアロンダイトを右手に装備し、ウイングガンダムゼロEWは

両手にビームサーベルを装備し構えた。

天馬・ナーガ

「いくぞー!」

2機はクレーターの中心に向かって同時に走り出した。

ナーガ

「この勝負!」

天馬

「負けるわけにはいかないんだ!」

ガキーン!



宇宙コロニー 第一搬入口

その頃、タスクのガンダムサバーニャはコロニー内にいた。

タスク

「この扉の先が、コロニーの中か。」

タスクは搬入口の扉を開け内部に侵入。すると侵入して早々、向かい側の第二搬入口にゲツコーの武者頑駄無がいた。

ゲツコー

「御会いできて光栄です、ミスター・タスク。」

タスク

「まさか、俺とあなたで対戦とはね。」

ゲツコー

「あなたには会ったときから興味がありました。どうでしょう？この勝負で私達が勝つた暁には、タスクさんには私の実験台になっていただくというのは。」



飛行していた。

信助

「えーっと、僕のお相手は……。」

バキューン！

突然、頭上から黄緑色のビームが現れGフォートレスの機首をかすめた。

信助

「上から!?!」

信助はGフォートレスをダブルゼータガンダムに変形させ頭上を見る。上空にはバスターライフルを構えたカナメのガンダムダブルエックスがいた。

カナメ

「待ってたわよ、信助君!」



信助

「カナメさんですね?」

カナメ

「私、実はあなたに興味があったの。パワーで私に張り合える人なんて、今まで居なかったから。」

ガンダムダブルエックスは左手にハイパービームソードを装備。

カナメ

「もし私が勝てたら、あなたのパワーの秘密を教えて。」

信助

「いいですよ?ただし、勝てたらですけど!」

ガンダムダブルゼータは右手にダブルビームライフル、左手にハイパービームサーベルを装備。

信助

「いきますー！」

そして上空のガンダムダブルエックスめがけて飛び立った。



く地球 成層圏く

ガキーン！

そして地球の成層圏では、アンジユのストライクフリーダムガンダムとサラマンデーネのダブルオークアンタが刃をぶつけ合っていた。

サラマンデーネ

「中々ですわね、アンジユ。」

アンジユ

「そっちもね！」

ガキーン!

2機は離れ、一旦距離をとった。

サラマンディーネ

「実は、少し楽しみだったのです。今まで私と互角に戦える相手など、いませんでした。だから、凄く楽しいのです!」

アンジュ

「確かに、何でご先祖様が私達の地球にこの技術を持ってきてくれなかったのか、不思議なくらい楽しいわ!」



く月面 クレーターく

ガキーン!

天馬のウイングゼロEWはデステイニーガンダムにビームサーベルで攻撃を仕掛けていたが、避けられ防がれで傷一つ与えていない。

天馬

「くそっ！」

ナーガ

「剣の使い方が成ってないぞ。そんな程度では、あのアンジュという女を守るのは無理だ。」

天馬

「何を！」

キーン！

ウイングゼロEWはデステイニーガンダムのアロンドイトを弾き飛ばした。

天馬

「どうだ!」

ナーガ

「甘い。」

た。  
デステイニーガンダムは一旦距離をとり、両肩のフラッシュエッジ2を両手に装備し

ナーガ

「足腰を使え!」

天馬

「えっ?」

ナーガ

「剣を扱ううえで必要なのは足腰だ! 剣を振る度に、身体が安定する位置を探し出せ!」

天馬

「は、はいっ!」

ウイングゼロEWはビームサーベルを構え走り出す。

ガキーン！ガキーン！

そしてデステイニーガンダムに連続攻撃を繰り返した。

ナーガ

「そうだ！いいぞ！」

天馬

「でりゃあ！」

ドーン！

さらに回し蹴りを叩き込み、デステイニーガンダムを蹴り飛ばした。

ナーガ

「くっ！」

天馬

「これでー!」

ウイングゼロEWはビームサーベルを投げ捨て、バスターライフルを両手に装備し構えた。

ナーガ

「なんのー!」

デステイニーガンダムも体制を建て直し、ビームライフルを右手に装備し、バックの高出力エネルギー長射程ビーム砲を展開し構えた。

バキューン! ガシャーン!

2機は同時にビームを放ち、お互いの胸部と腹部を撃ち抜いた。

ドカーン!

2機は機能を失い、爆発した。



くコロニー 市街地く

バキューン！バキューン！

タスクのサバーニャはライフルビットを展開し、武者頑駄無を攻撃していた。

タスク

「くそっ！何で当たらない!？」

だが、1発も当てられていなかった。

ゲッコー

「私はガン普拉バトルの全てを知り尽くしています。当然、全ての機体の特性や癖もで



す!」

武者頑駄無は種子島雷威銃を収納し、武久丸と薙刀を装備し真正面から接近する。

タスク

「正面からなら!」

バキューン!

サバーニャは武者頑駄無に向かってビームを放つ。

ドカーン!

ビームは命中し、武者頑駄無は爆煙の中に消えた。だが爆煙が消えると、武者頑駄無は姿を消していた。

タスク

「なにつ!?どこ行った!？」

《CAUTION》

ガシャーン!

タスク

「のわっ!？」

武者頑駄無は突然サバーニヤの正面に現れ、薙刀と武久丸をサバーニヤのボディに突き刺した。

ゲツコー

「これで勝負は……。」

タスク

「いや、まだだ!」

ガシン!

サバーニヤは武者頑駄無の腕を掴み、全てのライフルビットの照準を自分と武者頑駄無に向けた。

ゲッコー

「っ!?! ミスター・タスク、まさか!?!」

タスク

「俺はあなたに勝てなかったが、あなたも俺に勝てなかったって事だ!」

バキューン!

ライフルビットの銃口が一齐に火を吹く。

ドカーン!

2機は全身を撃ち抜かれ爆発した。



く軌道ハイウエイく

信助

「ミサイル発射！」

ズドドドドドドン！

信助のダブルゼータはダブルエックスに向けて大量のミサイルを放つ。

カナメ

「全部撃ち落とす！」

ダダダダダダダダダッ！

ダブルエックスは頭部に搭載されたバルカンでミサイルを全て撃ち落とすとした。

《CAUTION》

ダブルゼータがミサイルの爆煙を通り抜けダブルエックスに急接近。

信助

「これでどうだ!」

そしてハイパービームサーベルを振り下ろした。

ガキーン!

だがダブルエックスもハイパービームソードを装備し受け止めた。

カナメ

「まだまだだよ!」

2機は距離をとり静止。そしてお互い剣を収納した。

カナメ

「これで決める！」

ダブルエックスは全身のリフレクターを展開し、ツインサテライトキャノンを両肩に固定。月からマイクロウェーブが発射され、ダブルエックスに受信された。

信助

「だったら僕も！」

ダブルゼータはダブルビームライフルを両手で持ち、ダブルビームライフルと両肩のビームキャノン、さらにハイメガキャノンの照準をダブルエックスに向け、ハイメガキャノンにエネルギーを充填させる。

カナメ

「ツインサテライトキャノン!!」

バツシユウウウウウウウ!!

信助

「ハイメガキャノン・フルバースト!」

バツシユウウウウウウウ!!

ダブルエックスからツインサテライトキャノン、ダブルゼータからハイメガキャノン・フルバーストが同時に発射され、2機の光線は中間でぶつかり合った。

ドカーン!

信助・カナメ

「うわあああ!!」

ドカーン！

光線は巨大なエネルギーの塊を形成し大爆発。2機は爆発に巻き込まれ破壊された。



く地球 成層圏く

サラマンディーネ

「本気で参ります！・トランザム！」

キイイイイインツ！

サラマンディーネのダブルオークアンタはトランザムを発動。機体が赤に変わった。

サラマンディーネ

「ソードビット！」



さらにソードビットを展開し、ストライクフリーダムに接近する。

アンジユ

「だったらこつちも! スーパードラグーン!」

アンジユのストライクフリーダムはスーパードラグーンをパージし、スラスタの出力を最大にした。

アンジユ

「真っ向から突っ込む!」

ガキーン! ガキーン!

2機は超高速で辺りを飛び回りながら刃をぶつけ合った。

サラマンディーネ

「ならばー！」

ダブルオークアンタは一旦距離をとり、GNソードVにソードビットを合体させ、GNバスターライフルを形成した。

サラマンディーネ

「これでー！」

バツシユウウウウウウウ！！

GNバスターライフルから強力な粒子ビームを発射された。

アンジユ

「やばっー！」

ストライクフリーダムは粒子ビームをギリギリで回避。

ドカーン!

だがスーパードラグーンは巻き込まれ全て破壊された。

アンジユ

「だったらこれで!」

バツシユウウウウウウウ!!

ストライクフリーダムガンダムは高エネルギービームライフル、カリドウス複相ビーム砲、クスイファイアス3レール砲を一斉発射。

ドカーン!

ダブルオークアンタはGNバスターライフルを盾にし攻撃を凌いだ。

アンジユ

「今！」

ゴオオオオオオオオツ!!

ストライクフリーダムは両手にビームサーベルを装備し、スラスター出力全開でダブルオークアンタに突っ込む。

サラマンディーネ

「させません！」

ダブルオークアンタはGNバスターライフルをGNバスターソードに変形させ応戦した。

ガキーン!

そして両機の刃が激しくぶつかり合った直後。

《LOW ENERGY SYSTEM DOWN.》

ヒユウウウウ…

ダブルオークアンタとストライクフリーダムは同時に機能を停止した。

アンジユ

「エネルギー…。」

サラマンディーネ

「切れですって…。」

《BATTLE END.》

バトル終了の表記が現れ、バトルシステムは停止。結果は引き分けとなった。



くスタジアム ロビーく

その後、一同はロビーに移り休憩をとった。

天馬

「あー楽しかったあー！」

信助

「引き分けだったけど、いい勝負だったね。」

サラマンディーネ

「感服しましたわ、アンジュ。」

アンジュ

「あなたもやるじゃない、サラマンデ。」

サラマンディーネ

「サラマンディーネ・・・です。」

アンジュ

「エアリアでも、あそこまで白熱した事は滅多に無かったわ。」

ナーガ

「エアリア?」

タスク

「俺たちの世界で流行しているスポーツさ。」

カナメ

「じゃあ、次はそのエアリアで勝負いたしましょう!」

アンジュ

「それは無理。エアリアは、マナの光が無いと出来ないから……。」

アンジュの表情が少し暗くなった。

ゲツコー

「ノーマ……マナが使えない、人間ならざる者でしたね?」

天馬

「今思えば、凄く歪ですよ。マナを持たないだけで、俺たちノーマと人間に大きな差があるんですから。」

サラマンディーネ

「アンジュ、あなたはそんな歪んだ世界を知りながら、何も思わないのですか?」

サラマンディーネの問いに、アンジユは答えなかった。

サラマンディーネ

「私は知っていますよ。あなたが元々皇女として、人々を導く立場にいたことを。世界の歪みを直すのも、指導者としての指名では？」

アンジユ

「・・・私はもう皇女じゃない。大体、歪んだ世界でも満足してる人間がいるんだからいいんじゃない。結局、世界を変えたいのはあなた達。私には関係ないわ。」

サラマンディーネ

「では、これからどうするのですか？ 真実を知りながら、何処へも行けず、何もしないつもりですか？」

アンジユ

「・・・。」

ドーン！



突然、スタジアムを巨大な揺れが襲った。

天馬

「な、何だ!?!」

—————

くスタジアム 屋上く

一同はスタジアムの屋上に上り、外を見た。空は厚い雲に覆われ、辺りには強い風が吹き、アウラの搭の周りに巨大な竜巻が発生していた。

天馬

「これは……。」

信助

「どうなってるの!?!」

竜巻はさらに巨大化していき、辺りの建物を次々と瓦礫へ変えていく。



〈神殿前〉

一同は神殿へと戻り、サラマンディーネは自身の機体《焰龍號》へと乗り込んだ。

サラマンディーネ

「カナメは大巫女様に報告！ナーガとゲツコーは皆様を安全なところへ！」

アンジュ

「サラマンダー!?!」

サラマンディーネ

「アンジュ、勝負の続きはいずれ。」

焰龍號は飛び立ち、都へと向かった。その直後、アンジュ達は各々の機体に取り込みシステムを起動させた。



「どうすれば……。」

『撤退するのじゃ、サラマンディーネ。』

突然、焰龍號に通信が入った。

サラマンディーネ

「大巫女様!？」

大巫女

『龍神器はアウラ奪還の中心戦力。万が一があつてはならぬ。』

サラマンディーネ

「民を見捨てると言うのですか!?! 私にそんな事は……。」

大巫女

『これは命令じゃ。』

サラマンディーネ

「ですが!!」

アンジュ

『何をポケットとしてるのよ!? サラマンドリル!』

通信にアンジュが割り込んできた。

サラマンディーネ

「アンジュ!?!」

ヴィルキス・ペガサス・タイタニアスが焰龍號と合流した。竜巻は次々と都と民を飲み込み瓦礫へと変えていく。だが、瓦礫の中には都の物ではない物が紛れていた。

天馬

「どうなってるの!?!」

信助

「建物の瓦礫の中に、違う建物の瓦礫が混ざってる!」

タスク

「エンブリオだ! エンブリオは、時間と空間を自由に操ることが出来る! 俺の父さんも仲間も、あんな風に岩に埋められて死んだんだ!」

天馬

「……!?みんな、あれ！」

天馬が都の大通りを指差した。指差した方向にはヴィヴィアンとラミアが居たが、ラミアは下半身が瓦礫の下敷きになり身動きが取れなくなっていた。

アンジユ

「ヴィヴィアン！」

天馬

「信助、タスクさん、ヴィヴィアンさんを助けに！」

信助・タスク

「おう！」

天馬・信助・タスクはヴィヴィアンとラミアの近くに着地し、ヴィヴィアンとラミアの救出に向かった。

タスク

「ヴィヴィアン!」

ヴィヴィアン

「タスク! 信助! 天馬!」

天馬

「今助けます!」

天馬・信助・タスクは瓦礫を退かそうとしたが、瓦礫はびくともしない。

タスク

「ダメだ! びくともしない!」

天馬

「くそっ! どうすれば・・・。」

そうこうしているうちに、竜巻は5人の近くへ迫っていた。

ラミア

「ミイ、あなただけでも逃げなさい・・・。」

ヴィヴィアン

「嫌だ！お母さんと一緒じゃなきや嫌だ！」

ラミア

「ミイ……。」

天馬

「……信助、ここは任せた！」

信助

「天馬!？」

天馬は竜巻に向かって走り出した。

天馬

「……はあああああああつ！」

天馬は両手を広げて叫び、化身を呼び出した。

天馬



「魔神ペガサスアーク!」

ペガサスアークは両手を突き出し、竜巻を受け止めた。

信助

「そうか! うおおおおお!!」

信助は拳を強く握り叫び、化身を呼び出した。

信助

「護星神タイタニアス!」

信助はタイタニアスを操り瓦礫を動かした。ラミアは直ぐ抜け出し、ヴィヴィアンを抱き締めた。

ラミア

「ミィ!」

ヴィヴィアン

「お母さん！」

信助

「タスクさん、二人を安全なところへ！」

タスク

「わかった！」

信助とタイタニアスは天馬とペガサスアークの援護に向かい、タスクはヴィヴィアンとラミアを連れてその場を離れる。だが……。

ドーン！ガシャーン！

落雷によって建物が倒壊し、逃げ道を塞いでしまった。

タスク

「そんな……！」

その頃、上空のアンジュとサラマンディーネは……。

アンジュ

「どうすんのよ! サラマンド!」

サラマンディーネ

「事態の原因が分からない以上、どうすることも……。」

アンジュ

「……そうだ! アルゼナルをぶっ飛ばしたアレで竜巻を消せば!」

サラマンディーネ

「ダメです! 収斂時空砲の破壊力では都はおろか、神殿ごと消滅してしまいます!」

アンジュ

「三割引で撃てばいいじゃない!」

サラマンディーネ

「そんな都合よく調節できません!」

ドーン!

天馬・信助

「どわあああ！」

突如、天馬と信助の正面に落雷が落ち、二人は吹き飛ばされた。

タスク

「天馬君！信助君！」

二人は傷つきながらも立ち上がる。

信助

「化身のパワーでも抑えられないなんて……。」

天馬

「こうなったらあれだ！アームド！」

ペガサスアーク

『オオオオオオオオオオオ!!』

天馬が叫ぶと、ペガサスアークは雄叫びと共に藍色のオーラへと姿を変え、天馬の身体を包み込む。そしてオーラが消えると、天馬は白いペガサスの鎧を身に付けていた。

信助

「よし、僕も! アームド!」

信助が叫ぶと、タイタニアスも藍色のオーラへと姿を変え、信助の身体を包み込む。そしてオーラが消えると、信助はタイタニアスを模した鎧を身に付けていた。

タスク

「化身が・・・!」

ヴィヴィアン

「鎧になった!」

天馬・信助

「いくぞー!」

天馬は両手に気を溜め、巨大な右手と左手のオーラを出現させ突き出す。

天馬

「《ゴツドハンドW》!!」

信助は頭の上で両手を合わせ、背後に手のオーラをいくつも作り出す。そして手のオーラを伸ばして張り付ける。

信助

「《ムゲン・ザ・ハンド》!!」

天馬のゴツドハンドWと信助のムゲン・ザ・ハンドは竜巻を受け止めた。

アンジュ

「・・・そうだわ、あなたが撃つたのを、私が打ち消せばいいのよ!!あの時みたいに!!」

サラマンディーネ

「ぶつけ合う?ですがそんなやり方・・・。」

アンジュ

「どんなやり方でも、それしか方法が無いでしょ!？」

サラマンディーネ

「ですが!」

アンジュ

「あなたお姫様なんでしょ!?! 危機を止めて民を救う、それが上に立つ者の使命よ!!」

天馬

「アンジュさんの言うとおりだ! 民を救えないで、世界を救うなんて出来る訳がない!

僅かな可能性でもそれしか方法が無いのなら、考え悩むより先に行動するんだ!」

サラマンディーネ

「・・・分かりました! 参りましょう!」

焰龍號とヴィルキスは共にアサルトモードに姿を変え、竜巻へと突っ込んだ。

サラマンディーネ

「〜♪」

サラマンディーネはアルゼナルを破壊した時と同じ歌を歌う。

キイイイイイインツ！

すると、サラマンデーネの歌と共鳴するかの様に焰龍號のボデイが金色に変わり、肩の装甲が変形した。

アンジユ

「〜♪」

アンジユはタイミングをずらし永遠語りを歌い始める。

キイイイイイインツ！

アンジユの指輪とコックピットのディスプレイが光り出し、徐々にヴィルキスのボデイが金色に変わり、肩の装甲が変形した。

バツシユウウウウウウウ！！



焰龍號は収斂時空砲を竜巻に向けて発射。その少し後にヴィルキスが収斂時空砲を竜巻に向けて発射。

ピカアアアア!

2機の収斂時空砲がぶつかった瞬間、辺りは強い光に包まれた。そして光がおさまると、竜巻は消え、厚い雲が晴れて青空が広がっていた。

天馬

「・・・終わった? はあく・・・」

信助

「助かったあく・・・」

天馬と信助は安心し、その場に腰を下ろした。

アンジュ

「みんな！」

二人の前にヴィルキスと焰龍號が着陸し、アンジュとサラマンディーネが姿を見せた。

天馬

「アンジュさん！」

タスク

「アンジュ！」

アンジュはヴィルキスから下り、駆け寄った。

アンジュ

「良かった、無事だったのね。」

サラマンディーネ

「・・・アンジュ。」

サラマンディーネはアンジュを呼び、アンジュは振り向いた。

サラマンディーネ

「あなたとあなたの御友人のおかげで、民は救われました。感謝します。」

アンジュ

「友達を助けただけよ。」

サラマンディーネ

「ですが、まさかあの歌に助けられるとは……。」

ヴィヴィアン

「アンジュの歌、知ってるの?」

サラマンディーネ

「はい、あの歌はかつてエンブリオがこの星を滅ぼした歌。あの歌を何処で?」

アンジュ

「お母様が教えてくれたの。どんな時でも、進むべき道を照らすように。」

サラマンディーネ

「私達と同じですね。あの歌は、アウラが教えてくださった歌なのです。」

アンジュ

「そうだったんだ。」

サラマンディーネ

「・・・なんて愚かだったのでしょうか。あなた方を私の所有物にだなんて・・・みんなを守り危機を止める。指導者とは、そう有らねばならないと教えられました。」

天馬

「サラマンディーネさん・・・。」

サラマンディーネ

「私、あなた方の友達になりたい。共に学び、共に歩く友人に。」

アンジュ

「・・・長いのよね。サラマンデンデンって。」

サラマンディーネ

「えっ?」

アンジュ

「サラ子」って呼んでいいならいいけど?」

サラマンディーネ

「・・・では私も、あなたのことはアン子と。」

アンジュ

「それは駄目。」

信助

「ハハハハハハッ！」

二人のやり取りを見て、信助は爆笑した。タスク・ヴィヴィアン・ラミアもつられて笑ったが、天馬だけが笑わなかった。

アンジュ

「天馬、どうしたの？」

天馬

「・・・みんな、助けられなかった・・・。」

天馬は暗い表情で瓦礫と化した都とアウラの搭を見ていた。すると・・・。

キーン！キーン！

天馬・信助

「えっ？」

突然、天馬と信助の鎧が光り出した。

キイイイイインツ！

二人の鎧は強い光を放ち、一同は思わず目を瞑った。そして光がおさまると、二人の鎧は消えていた。

天馬

「あれ？アームドが・・・っ!？」

辺りを見た一同は目を疑った。

サラマンディーネ

「これは・・・。」

倒壊した建物とアウラの搭は竜巻が起こる前の状態に戻り、瓦礫に埋もれた人々もまるで何事も無かったかの様に立っていた。

ラミア

「いつたい、何が……。」

ヴィヴィアン

「街も人も元に戻ってる!」

「これは……。」

一同の後方からあまり聞き覚えの無い声が聞こえてきた。振り替えるとそこにはナーガとカナメ、そして巫女服を身に付けた赤い瞳と薄紫色の髪の毛の小柄な少女がいた。

天馬

「あの子、誰だろう?」

サラマンディーネ

「大巫女様!」

アンジュ

「えっ？この人が？」

天馬・アンジュ・信助・タスクは驚き、大巫女様は天馬と信助に目を向けた。

大巫女

「天馬の巨人と雷の護星神。各々の巨人の力を持つ少年。そして先程の、時を戻し世界を修復する力。やはり……。」

サラマンディーネ

「大巫女様、まさか!？」

大巫女

「うむ、我らの地に伝わる、伝説の五大巨人」の力とみて間違い無かろう。」

大巫女様の一言に、サラマンディーネ・ナーガ・カナメ・ラミアは驚いた。

天馬

「伝説の、五大巨人？」



T  
o  
  
B  
e  
  
C  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
:  
:

## E p. 19 / 伝説の五大巨人

く 神殿 大巫女の間く

巨大な竜巻が都を襲った日の翌日、天馬・アンジュ・信助・タスクは大巫女様呼び出されていた。

大巫女

「アンジュ、天馬、信助、お主らの働きのおかげで都と民は救われた。民を代表して、心より礼を申し上げますようぞ。」

天馬

「ありがとうございます、大巫女様。」

アンジュ

「・・・まさか、わざわざ私達を呼び出したのって、お礼を言いたかったから？」

大巫女

「それだけではない。1つ、確認したい事があるのじゃ。」

大巫女様は天馬と信助に目を向けた。

大巫女

「天馬、信助、お主らが昨日呼び出した巨人。あれはいったい何じや？」

天馬

「あれは化身と言つて、人の心の強さが気の塊として形になったものと言われている。」「」

信助

「僕たちの世界では、化身が出せる人は化身使いつて呼ばれていて、凄いパワーを発揮できるとは思います。」「」

天馬と信助が化身の事を話すと、幹部達が騒ぎだした。

大巫女

「やはりそうか・・・サラマンディーネ。」「」

サラマンディーネ

「はい！」

雛壇の影からサラマンディーネが一本の剣を持って現れた。剣は鞘に納められ、柄が全て金色で、鏢には赤い宝石が埋め込まれ、鎖を巻かれ封印されていた。

天馬

「これは？」

サラマンディーネ

「アウラの民に古くから伝わる聖剣、《ラグナセイバー》です。」

天馬

「ラグナセイバー……。」

アンジユ・信助・タスクはラグナセイバーが気になり群がった。

アンジユ

「見た目は古ぼけた剣みたいだけど？」

サラマンディーネ

「無理ありませんよ。何百年も封印されていた物ですから。」

大巫女

「天馬、その剣を抜いてみよ。」

天馬

「えっ?」

大巫女様は雛壇を下り天馬に近づいた。

大巫女

「お主らが出した化身という力。あれは間違いなく、我々の大地に古くから伝わる伝説の五大巨人の力と見て間違いはない。」

天馬

「その、伝説の五大巨人って何なんですか?」

大巫女

「かつてこの地球には、お主らの様に己の気を巨人としてこの世に召喚し、自由に操る能力を持つ人間が存在した。じゃがその中でも、より強い気を持つ五人の人間から生み出された強大な力を持つ五体の巨人が、後に伝説の五大巨人と呼ばれるようになった。」

信助

「僕たちよりも前に、化身使いみたいな人がいたんだね。」

サラマンディーネ

「そして、このラグナセイバーは五大巨人の力を一つにするために生み出された聖剣なのです。」

タスク

「巨人の力を一つに？何のために？」

サラマンディーネ

「いずれ訪れる巨大な災い。それに立ち向かうためだと伝えられています。」

アンジュ

「でも、その五大巨人と天馬達の化身にどういう接点があるの？」

大巫女

「これを見ておくれ。ラグナセイバーと共に封印されていた物だ。」

大巫女様は天馬に一本のポロポロの巻物を渡した。中を見ると・・・。

天馬

「……これはー!」

巻物には天馬達が使う化身、魔神ペガサスアーク・護星神タイタニアス・劍聖ランスロット・奏者マエストロ・戦旗士ブリュンヒルデに良く似た巨人達が描かれていた。

天馬

「俺達の化身にそっくりだ。」

大巫女

「四本の腕を持ち、戦場に勝利の音楽を奏でる奏者の巨人。銀色に輝く鋼の甲冑を身に纏い、戦場に勝利をもたらす騎士の巨人。雷鳴を轟かせ、その腕はどの様な災いからも我々を守るとされる雷の護星神。気高く力強い声援で闘志を奮い立たせ、自陣を勝利へと誘う戦旗士の巨人。力強く大空を舞い、白き翼で風を操り、戦場に嵐を巻き起こす天馬の巨人。それぞれの巨人の力を持つ少年達が現れ、二人の女神が歌うとき、巨人の力は一つとなり、あの世とこの世、全ての民を救う存在とならん……。」

ラグナセイバーと共に、我々に古くから伝わる伝説じゃ。」

天馬

「じゃあこれは……。」

大巫女

「伝説の五大巨人の姿を描いた巻物じゃ。お主にラグナセイバーを抜いてみよと言ったのは、お主が五大巨人の中心的存在である天馬の巨人の力を持つ少年であると思っただからじゃ。ラグナセイバーは天馬の巨人の力を持つ少年にしか扱えぬと伝えられておるからのう。」

天馬

「俺が、伝説の天馬の巨人の力を持つ者……。」

大巫女

「もしお主がその剣の封印を解き、剣を抜くことができれば、その剣はお主にくれてやろう。」

大巫女様の発言に、幹部達は驚いた。

「よろしいのですか!？」

大巫女



「構わぬ。私の決めたことじゃ。」

「ですが、彼は偽りの地球の住人です！いくら五大巨人の力を持っていても、そんな者に私達の宝であるラグナセイバーを預けるなど……！」

大巫女

「この者は巨大な災いから、身を挺して我々と都を守ってくれた。誰かの命令ではなく、自分の意思で。そして、我は思った。この者ならラグナセイバーの力を、きつと正しい事に使ってくれる。我はお主の可能性に掛けたのじゃ。」

天馬

「大巫女様……。」

大巫女

「天馬、お主の戦う理由は何じゃ？」

天馬

「えっ？」

大巫女

「お主は何のために戦うのじゃ？自身の願いのためか？誰かを守るためか？」

天馬

「・・・俺はアンジュさんを、俺の大切な友達を守りたい。アンジュさんの大切な存在を守りたい。それが、俺の願いであり俺の信念・・・俺の戦う理由だ！」

天馬は左手で鞘を持ち、右手でラグナセイバーの握りを握った。

キーン！

ピキツ　ピキツ　バキーン！

鏢に埋め込まれた赤い宝石が光り出し、封印していた鎖が切れ落ちた。

天馬

「っ!?!」

シャキン！

天馬は鞘からゆつくりとラグナセイバーを引き抜く。剣身は黄金でキラキラと輝き、中央の樋には、赤・白・黄色・青・紫・ピンク・水色の宝石が1つずつ埋め込まれていた。

天馬

「これが、ラグナセイバー……。」

ラグナセイバーの封印が解かれ、アンジュ達とサラマンディーネと幹部達は驚いた。

大巫女

「お主ならきつと、ラグナセイバーを意のままに扱えるはずじゃ。……戦うのじゃ天馬！お主の願いと、信念のために！」

天馬

「……はい！」



く 神殿 広場く

夕方、天馬は広場の端でラグナセイバーを眺めていた。

天馬

「俺の願いと、信念のためか……。」

天馬は腰につけた鞘にラグナセイバーを納め、その場から歩き出した。すると、向こうにエアバイクを修復するタスクとアンジユの姿が見えた。

天馬

「アンジユさんとタスクさんだ。」

天馬は二人のところに駆け寄った。だが近づいてみると、アンジユの表情は暗かった。

タスク

「やあ天馬君。」

天馬

「アンジユさん、どうしたんですか？」

タスク

「アンジユは今、悩んでるんだ。」

天馬

「悩んでる？」

アンジユ

「あなたがその剣を貰った後、サラ子から聞いたの。ミスルギ皇国の地下に、例のアウラが封印されていたって。」

アンジユの話聞いて天馬は驚いた。

天馬

「アウラが、ミスルギ皇国の地下に!？」

アンジユ

「サラ子達は明朝、シンギュラーを開いてミスルギに侵攻するらしい。私はてつきり戦線に加わって言われると思ったけど、サラ子は何をしても自由だって言ったわ。ここ

に残るのも、向こうへ帰るのも、サラ子達と一緒に戦うのも……。」  
タスク

「俺は、ドラゴンと一緒に戦うのも悪くないと思うよ？アウラを取り戻せば、エンブリヲの世界に大打撃を与えられるからね。」

アンジユ

「でも、それでいいのかしら？」

タスク

「えっ？」

アンジユ

「信じられないのよ、何もかも。ドラゴンが人類世界に侵攻する敵だったのも、ノーマの戦いが世界を守るためだったのも嘘。あれもこれも嘘ばっかで、ウンザリなのよ。仮にドラゴン達と一緒に戦って、それが間違いだったら？ていうか大体、元皇女がドラゴン達とミスルギ皇国へ攻め入ろうなんて、悪い冗談よ……。」

分からないわ、何が正しいか……。」

天馬

「……何が正しいかなんて、誰にも分かりませんよ。」

アンジユ

「えっ?」

天馬

「大切なのは、何が正しいかじゃなくて、自分がどうしたいかじゃないですか?」

タスク

「君は自分を信じて進めばいい。俺と天馬君が全力で支えるから。」

アンジユ

「・・・バカ。」

アンジユは頬を赤くして呟いた。

アンジユ

「でも、救われるわ。あなた達のそういう能天気なところ。」

タスク

「お褒めに預かり、光栄で（ズルツ）す!?!」

タスクは誤って足元のドライバーを踏みバランスを崩した。

ガシツ！

天馬がタスクの背後に廻り、タスクを支えた。

天馬

「ふうく、危なかったあ…」

タスク

「あ、ありがとう天馬君。」

天馬

「気をつけてくださいよ？タスクさん、アンジュさんの近くだと何するか分からないんですから…。」

タスク

「酷いなあ…」

アンジュ

「アハハハハハハッ！」



アンジュは二人のやり取りを見て笑い、二人もアンジュにつられて笑った。



く都 広場く

その日の夜、都の広場では盛大にバーベキューが執り行われていた。

ラミア

「ありがとうございました、街と私達を守って頂いて。」

ラミアはアンジュに助けてもらった礼を言った。ラミアの右足には包帯が巻かれ、左手で杖をついていた。

アンジュ

「私は、サラマンディーネを手伝っただけです。それに、私だけの力じゃありません……。」

アンジユは天馬と信助を見て言った。

ヴィヴィアン

「信助、アーンして。」

信助

「アーン♪」

信助はヴィヴィアンとバーベキューを楽しみ……。

「タスクさん、よければ私達と一緒に。」

タスク

「いや、それはちよつと……」

タスクは女達から逃げ……。

天馬

「……。」

天馬は一人、階段に腰かけていた。

アンジユ

「……。」

アンジユは串焼きを何本か取ると、天馬のところに向かい隣に腰かけた。

アンジユ

「みんなと食べないの？」

天馬

「この間みたいになるのはアレなんで……。」

アンジユ

「そっか。」

アンジュは串焼きを天馬に渡した。

アンジュ

「はい。」

天馬

「えっ？」

アンジュ

「なに？ いらなの？」

天馬

「……いえ、ありがとうございます。」

天馬は串焼きを受け取り食べ始めた。

アンジュ

「ここ、良いところよね。」

天馬

「へ？」

アンジュ

「辛いことがあっても、マナなんて無くて、みんな力いっぱい生きてる。」

天馬

「確かに。まるで、アルゼナルみたいですね。」

アンジュ

「アルゼナル・・・。」

『アンジュ、命だけは大事にしなよ。』

『ここに・・・アンジュリーゼ様の御傍に、居ても良いのですか？』

ふとアンジュの脳裏に、ヒルダとモモカの姿が浮かんだ。

アンジュ

「私、帰るわ。モモカやヒルダ、みんなが待ってるもの。」

天馬

「アンジュさん。」

「そう、それがあなたの選択なのですね…」

突然、サラマンディーネがナーガとカナメを連れて現れた。

アンジユ

「サラ子…」

サラマンディーネ

「また戦うことになるかもしれないですね、あなたと…」

ナーガ

「やはり、この者達は危険です！この者達は秘密を知りすぎました！あちらに返せば、どのような驚異になるか分かりません！今すぐ拘束すべきです！」

ナーガは腰の刀に手を沿え構えた。

カナメ

「でも、アンジユさん達は私達と都を守って…！」

アンジユ

「私、もうあなた達とは戦わないわ。」

ナーガ

「ほらみる！やはり私達と戦わ・・・えっ？」

ナーガは予想外だったのか、アンジユの返事に驚いた。

サラマンディーネ

「では、明日開く特異点より、あちらへお戻りください。」

アンジユ

「サラ子・・・！」

サラマンディーネ

「戦いが終わった暁には、今度こそ決着をつけましょう。」

アンジユ

「ええ、約束よ！」

アンジユとサラマンディーネは握手を交わした。

サラマンディーネ

「お達者で、アンジュ。」



〜ラミアの家 リビング〜

バーベキューの後、アンジュ・タスク・天馬・信助・ヴィヴィアンはラミアの家にいた。

ラミア

「では、明日の朝発つのですね？」

ヴィヴィアン

「オー！じゃあアタシも支度しなきゃ！みんなどうなったか心配だし。」

信助

「でもヴィヴィアンさん、良いんですか？せつかくお母さんに会えたのに・・・。」



ヴィヴィアン

「あ……。」

ラミアの表情は暗かった。

ヴィヴィアン

「お母さん……。」

ヴィヴィアンも表情が暗くなった。

ラミア

「……大丈夫。」

ラミアは立ち上がり、ヴィヴィアンに近づき笑顔を見せた。

ラミア

「しばらく見ないうちに、大きくなったわね。」

ヴィヴィアン

「えっ？」

ラミア

「その分たくさんの人たちと出会って、たくさんの思い出もできたんでしょ？なら帰らなくちゃ、皆の所へ。」

ヴィヴィアン

「お母さん……！」

ギユツ

ラミアはヴィヴィアンを抱きしめた。

ラミア

「帰ってきてくれてありがとう、ミイ。あなたともう一度会えて本当に嬉しかった。もう一度、”お帰り”って言わせてくれたら、嬉しいな……。」

ヴィヴィアン

「……うん！必ず、”ただいま”しに帰ってくるね！お母さん！」

ヴィヴィアンとラミアは静かに涙を流した。そしてヴィヴィアンは決意した。必ず、お母さんのところへ帰ると。

アンジユ

「ヴィヴィアン……。」

天馬

「羨ましいですか？」

アンジユ

「あなたもでしょ？」

天馬

「へへっ。」

アンジユ達はヴィヴィアンとラミアを優しく見守った。



く 神殿 広場く

次の日の朝、神殿に大勢のドラゴンが集まった。

ヴィヴィアン

「凄い！ドラゴンのフルコースだ！」

天馬

「こりや壮观だなあ……」

すると……。

ナーガ

「天馬、信助。」

アンジュ達のところにナーガとカナメがやって来た。

カナメ

「いよいよですね。」

天馬

「ナーガさん、カナメさん。」

ナーガ

「ゲツコーから伝言を預かった。二人の機体を少し改造したそうだ。天馬のペガサスの盾は以前より吸収率を上げた。ラグナメールの放つ収斂時空砲でも問題無いそうだ。信助君のタイタニアスは、腕部に小型のビーム砲を増設したらしい。」

信助

「わざわざありがとうございます。」

カナメ

「それと念のため、天馬君の機体にラグナメールの情報をインプットしておきました。」

天馬

「ありがとうございます。」

ナーガ

「戦いが終わったら、またここに来い。そして決着をつけよう！」

天馬

「はい！」

天馬とナーガ、信助とカナメは固く握手をし、一同は各々の機体のところに戻った。そして数分後、すべての準備が整った。

### 大巫女

「誇り高きアウラの民よ、アウラという光を奪われ幾星霜、遂に反撃の時は来た！今こそエンブリヲに、我らの怒りと力を知らしめる時！我らアウラの子！例え地に落ちるとも、この翼は折れず!!」

「ウオオオオオオオ！」

### サラマンディーネ

「総司令、近衛中将サラマンディーネである。全軍、出撃！」

サラマンディーネの乗る焰龍號が先陣を切つて飛び立ち、ナーガの《蒼龍號》、カナメの《碧龍號》、ドラゴン達、アンジュ達の順に続いた。

ヴィヴィアン

「ねえねえ、ドラゴンさん達が勝ったら戦いつて終わるんだっけ？」

タスクの後ろに乗るヴィヴィアンが問いかけた。

アンジユ

「えっ？そ、そうね・・・多分。」

ヴィヴィアン

「そしたら暇になるね。そしたら、どうする？アタシはね、サリア達をアタシん家に招待するんだ！信助は？」

信助

「僕ですか？うーん、特に考えてないなあ。天馬は？」

天馬

「俺は、第一中隊のみんなとサッカーがしたい！いつかみんなでチームを作って、雷門イレブンやイナズマジパンのみんな、太陽達と試合がしたい！」

アンジユ

「天馬らしいわね。でも、楽しそう。」

天馬

「タスクさんは？」

タスク

「俺は、海辺の町で小さな喫茶店を開くんだ。アンジュと二人で。店の名前は、”天使の喫茶店アンジュ”。人気メニューは海蛇のスープ。2階は自宅で、子供は4人、それで……。」

天馬

「タスクさん、ちよつと話進めすぎですよ……」

タスク

「いやただ、穏やかな日々が来ればいい……そう思ってるだけさ。」

ヴィヴィアン

「なるほど。アンジュは？」

アンジュ

「私は……。」

『特異点、開放！』



突然、一同の前に巨大なシンギュラーが現れた。

サラマンディーネ

「全軍、我に続け！」

焰龍號、蒼龍號、碧龍號が先陣を切つてシンギュラーを潜り抜け、後からドラゴン達  
が次々と続いた。

アンジユ

(悪くないかもね、喫茶アンジユも、みんなでサッカーも……。)

ヴィルキス達はスピードを上げ、ドラゴン達と共にシンギュラーを潜り抜けた。

く太平洋く

シンギュラーの先には、青空と海が広がっていた。

アンジュ

「……は……！」

信助

「帰って来たんだ！僕たちの世界に！」

ビー！ビー！

《WARNING！ WARNING！》

突然、各機に警告アラームが鳴り響いた。

天馬

「警告？！」

天馬達は辺りを見回す。すると、前方にヴィルキスと同型の黒いパラメイル5機が待

ち構えていた。

ヴィヴィアン

「何ぞあれ？」

アンジュ

「黒い、ヴィルキス？」

To Be Continued:

## E p. 20 / 激突！破壊天使 VS 機動戦士！

〜太平洋〜

ビー！！ビー！！

《WARNING！ WARNING！》

突然、各機に警告アラームが鳴り響いた。

天馬

「警告？！」

天馬達は辺りを見回す。すると、前方にヴィルキスと同型の黒いパラメイル5機が待ち構えていた。

ヴィヴィアン

「何ぞあれ?」

アンジュ

「黒い、ヴィルキス?」

天馬

「まさか……!」

天馬は前方のパラメイルをスキャンし、ゲッコーがインプットしてくれたラグナメイルのデータと照合した。

天馬

「ライトブルー・ストレート、《クレオパトラ》。グリーン・スピード、《テオドーラ》。クロス・オレンジ、《レイジア》。ビクトリー・ピンク、《ヴィクトリア》。

イエロー・ストレート、《エイレーネ》。間違いない、あの時シエルターで見た映像に映ってたラグナメイルだ!」

バキューン!バキューン!

クレオパトラ達はライフルを構え、ドラゴン達に向けてビームを乱射。ビームはドラゴン達に命中し、ドラゴン達は次々と海へ落ちていく。

信助

「まさか、待ち伏せ!？」

サラマンディーネ

「これより敵機の排除に参ります！突撃！」

焰龍號、蒼龍號、碧龍號はアサルトモードに変形し、右手にライフルを装備しラグナメイル集団に突っ込んだ。後から多数のドラゴン達も続く。

天馬

「アンジュさん！信助！」

アンジュ

「分かってる！サラ子を助けに行くわ！」

タスク

「待て!相手はエンブリヲだぞ!」

信助

「それでも黙って見てられるわけ無いですよ!」

ヴィルキス・ペガサス・タイタニアスはスピードを上げ、サラマンディーネ達の援護に向かった。

ヴィヴィアン

「タスク、アタシ達も!」

タスク

「つたく、しょうがないなあ!」

タスクもエアバイクのスピードを上げ、アンジュ達に続いた。

ガキーン!

その頃、サラマンディーネの焰龍號はクレオパトラと剣をぶつけ合っていた。

カナメ

『右翼、損耗三割を超えました！』

ナーガ

『左翼、整然が維持出来ません！』

サラマンディーネ

「相手はたったの五機ですよ!?!」

焰龍號は一旦距離をとり、クレオパトラにライフルを向けてビームを発射。だがクレオパトラの動きは素早く、ビームを全て避け一気に接近された。

サラマンディーネ

「速い!」

クレオパトラは剣を装備し、勢いよく振り下ろす。

ガキーン!



ヴィルキスが焰龍號の正面に割り込み、クレオパトラの剣を受け止めた。

アンジユ

「サラ子、大丈夫!?!」

サラマンディーネ

「え、ええ…」

バキューン!バキューン!

一方、蒼龍號はレイジアとテオドーラ、碧龍號はヴィクトリアとエイレーネと交戦していた。

ナーガ

「くそっ!速い!」

すると突然、蒼龍號の前にペガサスが、碧龍號の前にタイタニアスが現れた。

天馬

「大丈夫ですか!？」

ナーガ

「天馬!」

信助

「ここは僕たちが引き受けます! 皆さんは早急に撤退を!」

サラマンディーネ

「出来ません! エンブリオからアウラを取り戻すまでは!」

アンジユ

「何言ってるの!! あなた司令官でしょ!?! 周りをよく見なさい!!」

周りではドラゴン達がラグナメールの攻撃を受け、次々と海へと落ちて行く。

天馬

「今は引いて、戦力を立て直すんです! 勝つために!」

サラマンディーネ

「……全軍、編成を縮小しつつ特異点へ撤退せよ！」

サラマンディーネの指示により、ドラゴン達はシンギュラーへと戻り始めた。だが、ヴィクトリアとエイレーネが追跡してくる。

天馬

「信助はヴィクトリアとエイレーネの足止めを！レイジアとテオドーラは俺が引き受ける！」

信助

「わかった！」

信助はタイタニアスを操作し、ヴィクトリアとエイレーネの前に立ちはだかる。

ナーガ

「天馬、これを！」

ナーガの蒼龍號は自身の装備している手甲剣を取り外し、ペガサスに向けて投げた。

ペガサスは右腕を伸ばし手甲剣を装備した。

天馬

「これは……!」

ナーガ

「お前の機体には近接戦用の装備が無いだろ? 使え!」

天馬

「ありがとうございます!」

ペガサスは刃を展開し、レイジアとテオドーラめがけて突っ込んだ。

ダダダダダダダダダダ! カチツ

一方、ヴィルキスはアサルトライフルでクレオパトラを攻撃していたが、ついに銃弾が尽きてしまった。

アンジユ

「くそっ!」

サラマンディーネ

「アンジユ、これを!」

サラマンディーネの焰龍號は自身のビームライフルをヴィルクスに投げ渡した。ヴィルクスはライフルを受け取り構える。

サラマンディーネ

「どうか、ご無事で・・・。」

アンジユ

「いいから速く行きなさい!」

バキユーン!

ヴィルクスはクレオパトラに向けて銃を放ち、その隙に焰龍號はシンギュラーへと急いだ。

シユウウ：

生き残ったドラゴンと龍神器は全てシンギュラーへ撤退し、撤退完了と同時にシンギュラーは消えた。

???

「・・・やっぱり、間違いない。」

クレオパトラはビームを避けながら急接近する。ヴィルキスは急いでフライトモードに変形しその場を離れた。クレオパトラもフライトモードに変形してヴィルキスと平行に飛行。

アンジュ

「・・・!?!」

その時、クレオパトラのメイルライダーが姿を現した。

アンジユ

「まさか、サリア!?!」

クレオパトラに乗っていたのは、以前パラメール第一中隊隊長だったサリア。

サリア

「あんた、何で・・・?」

そこへ交戦中だったペガサス・タイタニアス・レイジア・テオドーラ・ヴィクトリア・エイレーネ、そしてタスクが合流。ペガサス達はフライトモードに変形しヴィルキス達と並走。そして各々のラグナメールのメールライダーが姿を見せた。

天馬

「エルシャさんに、クリスさん!?!」

信助

「第三中隊のターニャさんにイヌマさんまで!!」

ヴィヴィアン

「何で？何でみんながここに？」

レイジアにはエルシヤ、テオドーラにはクリス、ヴィクトリアにはターニヤ、エイレーネにはイヌマが乗っていた。

エルシヤ

「本当に、アンジュちゃんなのね？」

クリス

「おまけに天馬と信助とヴィヴィアンまで一緒。マジでビックリだよ。」

イヌマ

「でも、何で？」

ターニヤ

「何でドラゴンと一緒に戦ってるの？」

天馬

「みんなこそ、何でラグナメールなんか？」

ピピッ



突然、クレオパトラに通信が入った。

サリア

「こちらサリア・・・はい、了解しました。」

サリアは通信を終えると、クレオパトラをアサルトモードへと変形させた。

サリア

「アンジユ、あなたを拘束するわ。みんないいわね?」

エルシヤ・クリス

「イエス、ナイトリーダー!」

レイジア・テオドーラ・ヴィクトリア・エイレーネもアサルトモードへと姿を変える。

アンジユ

「やばい!」

天馬

「ここは逃げましょう！」

アンジユ・天馬・信助・タスクは機体のスピードを上げ、猛スピードでその場から離れた。

サリア

「逃げてでも無駄よ！」

サリア達も後を追いかける。

サリア

「アンジユ、あなたをエンブリヲ様のところへ連れていく！」

アンジユ

「エンブリヲ様ですって!?!あんだ、あの気持ち悪い髪型のナルシストの愛人にでもなったの!?!」

サリア

「あの方を侮辱するのは許さないわよ！」

《WARNING! WARNING!》

突然、再び警告音が鳴り響いた。

信助

「もう、今度は何だよ!?!」

すると、前方に巨大な人影が見えた。

天馬

「あれって……!」

一同は人影を見て仰天した。

天馬

「AGE―FXにウイングゼロ、それにダブルゼータ!?」

前方にいたのは、以前天馬とアンジユがミスルギ皇国で遭遇した巨大ロボ、ガンダムAGE―FX。さらに同サイズのウイングガンダムゼロEWとダブルゼータガンダムだった。

サリア

「何なのあれ!？」

エルシヤ

「パラメイルとは違う……。」

クリス

「それに、パラメイルより大きい……。」

すると突然、FX達がビームライフルを装備しアンジユ達に銃口を向けた。

アンジユ

「まさか、敵!？」

だがヴィルキス達が接近しても何もせず、最終的にヴィルキス達はFXの横を通過した。

天馬

「攻撃してこない?」

バキューン!バキューン!バキューン!

すると、FX達がクレオパトラ達に向けて発砲を開始。クレオパトラ達はシールドを展開してビームを防ぐ。

信助

「僕たちを、助けてくれるの?」

キイイイイインツ!

突然、FXのビームの刃が強く光りだし、辺りは光に包まれた。そして光が消えると、FX達とアンジュ達は姿を消していた。

サリア

「消えた!?!」

エルシャ

「何処に行ったの・・・?」

天馬

「う、うん…」

気が付くと、天馬はペガサスの上で気を失っていた。辺りは暗く、空には無数の星が

輝いていた。

天馬

「( )は・・・？」

天馬は体を起こし辺りを見た。下には地面があり、辺りには海と崖と倒壊したカタパルトとおぼしき構造物。隣にはヴェルキスとタイタニアスとタスクのエアバイク、さらにAEG-FXとウイングゼロ、ダブルゼータが止まっていた。

天馬

「まさか、アルゼナル？」

すると、向こうの方で誰かが焚き火をしていた。天馬はペガサスを下り向かうと、アンジュ・信助・タスク・ヴィヴィアンが火の前に腰を下ろし魚を食べていた。

天馬

「みんな・・・。」



天馬は近づき声をかける。アンジユ達は声に気付き振り向いた。

アンジユ

「あら、気が付いたのね？」

タスク

「天馬君もどう？お腹空いてるだろ？」

天馬はアンジユとタスクの間に座り、焚き火の周りに刺してあった魚を手を取った。

「天馬君！」

「よかった、目が覚めたのね。」

ふと焚き火の向こうから聞き覚えのある少女の声がした。天馬は顔を上げ、焚き火の向こうに目を向ける。

天馬

「ナオミに、葵!？」

声の主は、以前天馬達とアルゼナルを脱走しその後行方不明になったパラメール第一中隊のメンバー、ナオミ。そして雷門中サッカー部のマネージャーの一人、空野葵だった。

天馬

「な、何で二人がここに？」

「俺が二人をダブルゼータとウイングゼロに乗せたんだ。」

今度は聞き覚えの無い声でした。声のした方を見ると、見覚えの無い一人の少年が魚を食べていた。少年は寝癖のように一部が跳ね上がった黒い髪と黒い瞳。下半身は白のスニーカーと藍色のハーフパンツ、上半身は無地の白いTシャツの上から青色のジャケットを羽織っていた。

天馬

「君は・・・?」

タスク

「彼が、あのガンダムAGE—FXのパイロットさ。」

タスクの言葉に天馬は驚いた。

???

「無事で良かったよ、松風天馬君。」

天馬

「何で、俺の名前を?」

???

「君達の事は粗方調べさせてもらったからね。」

アンジュ

「ねえ、天馬も無事に起きたわけだし、話してくれる?」

???

「いいけど、何から話せばいい?」

アンジュ

「全部よ。あなたは何者なのか。何故ナオミと葵と一緒になのか。何故実在しないはずのガンダムに乗っているのか。洗いざらい吐いてもらうわ。」

???

「・・・わかった。」

少年は残った骨と棒を火の中に捨て、語り始めた。

???

「じゃあ最初に、俺は《稲森明日人》。伊那国島にある伊那国中学校サッカー部の2年生だ。」

天馬

「伊那国島って、日本の南にある離島だね？俺もアンジュさんと会う前に、一回だけ伊那国中サッカー部と練習試合をしたけど、君をサッカー部で見かけた事は1度も・・・。」

明日人

「当然さ。俺は君達とは違う世界から来たからね。」

明日人の発言に天馬達は驚いた。

アンジユ

「違う世界って、まさかサラ子達の?」

明日人

「いや、俺は君達の世界ともアウラの民の世界とも違う、三つ目の世界の住民なんだ。」

タスク

「三つ目の!?!」

明日人

「うん。俺の住んでいた世界は君達の世界と分岐した世界で、君達の世界では10年前、円堂守率いる雷門イレブンがフットボールフロンティア全国大会で優勝した後、エイリア学園という組織が襲撃に来たと思うんだけど、俺の世界はそのエイリア学園の襲撃が無かった場合の1年後になるんだ。」

アンジユ

「そんな世界のあなたが、何でガンダムに乗ってこんなところへ?」

明日人

「頼まれたんだ、エンマ大王に。」

信助

「エンマ大王って、あのエンマ大王？」

明日人

「そうだよ。ある日、俺はエンマ大王の力によつて妖魔界に召喚された。妖魔界は一言で言うなら、妖魔達が住まう別世界ってところだ。」

~~~~~

妖魔界

エンマ大王

「稲森明日人だな？」

明日人

「そうですけど、あなたは？」

エンマ大王

「俺はエンマ大王。この妖魔界を治める者だ。明日人、お前をここに召喚したのは、お前に頼みたい事があるからだ。」

明日人

「俺に頼みたい事?」

エンマ大王

「こことは違う別の世界へ行き、人類を滅ぼそうと企む者、エンブリヲを倒せ。」

~~~~~

天馬

「何でエンマ大王がエンブリヲを敵視してるの?」

明日人

「エンブリヲは君達の世界とアウラの民の世界を融合して、一つの地球に作り直そうと目論んでいる。君達がアウラの民の世界で見た竜巻は、そのデモンストレーションだったんだ。」

ヴィヴィアン

「ちよつと待った!何であの竜巻の事を知ってるの?」

明日人

「エンマ大王は妖魔界から君達の世界をずっと監視していたんだ。エンブリヲがいつ何

をするか分からないからね。」

ヴィヴィアン

「ふくん。」

明日人

「仮にエンブリヲが二つの世界の融合を行えば、君達人類やドラゴン達は岩や瓦礫に埋もれ死んでしまう。」

タスク

「俺の父さんや仲間達みたいにか……。」

明日人

「そして融合が完了すると、人類は完全に絶滅。さらにその副作用で時空が歪み、他の平行世界に甚大な被害をもたらす危険性がある。地殻変動や異常気象ならまだ良い方だ。下手をすれば超新星爆発や、巨大ブラックホールを招く可能性もゼロじゃない。」

信助

「そんな……。」

明日人

「エンマ大王はエンブリヲの世界融合を食い止めるために、俺にこのガンダムAEG―FXを預けて、こっちの世界に送った。必ずエンブリヲを倒せと命じてね。」



アンジユ

「じゃあ、このガンダム達は?」

明日人

「エンマ大王がエンブリヲのラグナメイルに対抗するための戦力として作ったコピーさ。」

信助

「コピー?」

明日人

「君達の世界では機動戦士ガンダムという作品は架空の話って事になってるけど、実は他の平行世界で実在していたんだ。」

明日人の発言にアンジユ達は驚いた。

明日人

「エンマ大王は数ある平行世界の中からモビルスーツという架空の兵器が実在する世界を探しだし、その世界にある機体をコピーして産み出したんだ。」

タスク

「まさか、あのダブルゼータやウイングゼロも？」

明日人

「エンマ大王の作ったコピーさ。どれもラグナメイルに対抗出来るだけの性能を持つてる。でも俺のAGE—FXには、他の機体には無い能力がある。」

アンジユ

「他の機体には無い能力？」

明日人

「空間跳躍、いわゆるワープ移動さ。この前のミスルギや昼間のバトルで見たあの力がその証拠。」

アンジユ

「ふーん。」

信助

「じゃあ、ナオミさんと葵ちゃんが一緒なのは何故？」

明日人

「さつきも行った通り、俺が二人にお願いして乗ってもらったのさ。ドラゴン達がこのアルゼナルを襲撃したあのとき、俺はエンマ大王からこのダブルゼータとウイングゼロを預かった。その後俺はエンブリヲに気付かれないように、ダブルゼータとウイングゼ

口のパイロットに相應しい人物、空野葵ちゃんとナオミ・東雲ちゃんを探した。」

天馬

「何で葵とナオミをパイロットに選んだの?」

明日人

「エンマ大王が予め二人をマークしてたんだ。君達と共に戦うに相應しい人物としてね。最初は稲妻町で葵ちゃん、その後はエンデラントでナオミちゃんに接触して、同意を得たうえでガンダムに乗ってもらって、今に至るってことさ。」

葵

「最初、明日人君に会った時はパニックになっちゃったけど……。」

ナオミ

「天馬君の力になれるならって思って、乗ることにしたの。」

天馬

「そうだったんだ……。」

アンジュ

「……そういえばナオミ、あれからお父さんとお母さんには会えたの?」

ナオミ

「……。」

ナオミは表情を暗くして俯いた。

ナオミ

「・・・ヒルダと劍城君と別れた後、私はお父さんのロボット工学研究所に向かったの。でも研究所はほとんど取り壊されて、家に行ったら、もう違う人の家になってたの。ダメ元でお父さんとお母さんの事を聞いたら、数ヶ月前に交通事故で亡くなったて・・・。」

天馬

「そうだったんだ・・・。」

ナオミ

「・・・でも、もう大丈夫。」

ナオミは顔を上げ、笑顔を見せた。

ナオミ

「明日人君のおかげで、こうやってみんなにもう一度会えたんだもん！ありがとう、明日

人君!」

明日人

「(ち)ち(ち)そ。」

明日人は静かに微笑み、一同も微笑んだ。

アンジユ

「・・・でも、これからどうするの?この様子だと、もうアルゼナルには誰も居ないみたいだし・・・。」

ザバーン

突然、海の方から水の音がした。一同が音のした方を見ると、海からカタパルトを登り近づいてくる三人のダイバーが見えた。ダイバーはシユノーケルマスクをしていたが、真っ暗でマスクの下の顔は見えなかった。

タスク

「お、お化け!？」

明日人

「幽霊!？」

天馬・信助

「海坊主!？」

アンジュ・ヴィヴィアン・葵・ナオミ

「いやああああああ!!」

一同は恐怖し、アンジュはタスクに、ヴィヴィアンは信助に、葵とナオミは天馬にしがみついた。

「アンジュリーゼ・・・様?」

アンジュ

「ち、違う! 私は・・・え?」

聞き覚えのある声が出たと思ったら、ダイバーの一人がマスクを外しフードを取っ

た。

アンジュ

「モモ・・・カ？」

モモカ

「アンジュリリーゼ様ああ！」

ダイバーの一人はアンジュの侍女、モモカだった。モモカは嬉しさのあまりアンジュに抱きつき、アンジュもモモカを抱きしめた。

アンジュ

「モモカ！」

モモカ

「良かった、アンジュリリーゼ様が御無事で！」

二人のダイバーもマスクを外し素顔を見せる。正体は同じパラメイル第一中隊のメイルライダー、ヒルダとロザリーだった。

ヴィヴィアン

「ヒルダ！ロザリーも！」

ヒルダ

「アンジュ！」

ロザリー

「うわあ！ドラゴン女！」

ヒルダはアンジュのところへ駆け寄り、二人は再開を喜んだ。

ヒルダ

「ホントに、ホントにアンジュなの？」

アンジュ

「もちろんよ、ヒルダ！」

ふと、ロザリーは天馬達に目を向けた。ロザリーは笑顔になり、天馬達に近づいた。



ロザリー

「天馬!信助!ナオミ!お前ら生きてたのか!」

信助

「ロザリーさんこそ!」

天馬

「よかつたあ、もう会えないかと思いましたよ。」

ロザリー

「そいつはこっちのセリフだったの!あの妙な黒いパラメイルの攻撃を受けてロストしたんじゃないかって思ってたんだぞ!それにナオミ!お前に限ってはアルゼナル脱走してから消息不明だったんだからな!」

ナオミ

「えっ!? そうなの!」

ヒルダ

「・・・ん?」

ふとヒルダの目にタスクと明日人と葵、さらにガンダム達の姿が目に入った。

ヒルダ

「・・・見覚えの無い男二人と女一人、でもって見たこと無いロボットが三機か。いったい全体、何があつたんだ？」

ヒルダはアンジュに向けて言った。

アンジュ

「話せば恐ろしく長くなるけど、いい？」

ヒルダ

「こんな格好で長話なんか聞いたら風邪ひくつての。」

すると、ヒルダはダイビングスーツの中から通信機を取り出した。

ヒルダ

「こちらヒルダ。浮上してお客さんを収容してくれ。」

連絡を終えると、通信機を仕舞った。

ヒルダ

「直ぐ迎えが来る。詳しい話はそれからにしようぜ。」

葵

「迎え?」

ザバーン!

海から巨大な水飛沫と共に、巨大な銀色の船が一同の前に現れた。

天馬

「これは・・・!?!」

ヒルダ

「潜水母艦アウローラ。アタシ達の船だ。」

アンジユ

「アウローラ・・・。」

T  
o  
B  
e  
C  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
:

# E p. 21 / 深海の攻防! 天馬 v s ジル! 《前編》

「アウローラ ミーティングルーム」

ヒルダ達と再会し、アウローラへ乗船したアンジュ達。乗船して早々、第一中隊のメンバーとジル達に今までの経緯を話した。

ジル

「平衡宇宙ともう一つの地球。ドラゴン……いや、遺伝子改造した人間の世界。我々の世界から分岐した三つ目の世界。パラメイルとは全く異なる技術で作られた機動戦士、ガンダム。そしてそれを生み出した妖魔界の長、エンマ大王か。」

アンジュ

「ドラゴンは……いや彼女達は人間と違って、話し合いの出来る相手よ。だから、ドラゴンと手を組むべきじゃないかしら?」

アンジュの発言に、一同は驚いた。

ヒルダ

「おいおい、正気か？」

天馬

「ドラゴン達の目的は、アウラを奪還することです。成功すれば、マナの光のエネルギーが断たれ、世界は停止するらしいです。そうなればシンギュラーも開けなくなるし、パラメイルの必要も無くなる。何より、マナのエネルギー源であるドラグニウムを得るために、ノーマがドラゴンを狩る。そんなバカげた戦いを終わらせることが出来る。」

アンジユ

「でも、サラ子達の侵攻作戦は失敗した。向こうの被害は甚大よ。お互いの目的のためにも協力するのが一番だと思うわ。」

ジャスミン

「なるほど、敵の敵は味方って訳だね。」

神童

「確かに、今はそれが有効な手段かもしれないな。」

ジャスミンと雷門メンバーは納得した様だが、第一中隊の女性メンバーは納得がいつ

ていない様だ。

ロザリー

「おいおい、冗談だろ!?! アイツらは今まで仲間を殺してきた化物なんだぞ!?!」

ヴィヴィアン

「ムッ!」

ロザリーの発言にヴィヴィアンはムカついた。

天馬

「それは俺達も同じです。いくら仕組まれた運命だったとしても、俺達も大勢のドラゴン達を殺してきた。向こうからすれば、俺達も仲間を殺してきた化物です。」

ロザリー

「た、確かにそうかも知れないけど……。」

天馬

「怒り、悲しみ、報復。その先にあるのは滅びだけです。でも人間は受け入れ、許すことが出来る。そして、その先に進むことも出来る。」

ミランダ

「何それ？」

天馬

「向こうの世界のお姫様が言つてた言葉です。お互い殺し合つてきた関係ならば、お互いを許す事だつて出来る。ここは協力して一緒に戦うべきです！お互いの未来のため！お互いの贖罪を果たすために！」

ジル

「無駄だ、ドラゴン達は信じるに値しない。アウラだか何だか知らんが、ドラゴン一匹助けたところで、リベルタスが終わるとでも思っているのか？」

ジルは立ち上がり、アンジュ達に目を向けた。

ジル

「神様気取りのエンブリオを抹殺し、この世界を壊す。それ以外にノーマを開放するすべはない。

忘れた訳ではあるまい、アンジュ。祖国、兄弟、民衆に裏切られてきた過去、人間へ



の怒りを。差別と偏見にまみれたこの世界を壊す、それがお前の意志ではなかったのか？」

アンジユ

「それは……。」

メイ

「でもジル、アタシ達の戦力が心もとないのも事実だよ?」

マギー

「サリア達が寝返つちまったからねえ……」

ジャスミン

「アンジユ、ドラゴンとコンタクトは出来るかい?」

アンジユ

「ヴィルキスなら、シンギュラーを開かなくても向こうへ行けるわ。」

ジャスミン

「そりや凄い。ドラゴンとの共闘、考えてみる価値はあるんじゃないのかい?」

ジル

「……いいだろう。情報の精査の後、今後の作戦を伝える。」

ジルは歩きだし、通路へ通じる扉へと向かう。すると扉の前で足を止め振り向いた。

ジル

「一つ聞き忘れていた。明日人、お前はこれからどうするつもりだ？」

明日人

「しばらくの間は、この船でお世話になるつもりです。」

ジル

「ほう、なら大歓迎だ。我々も戦力は欲しいからな。」

明日人

「でも、あなたに従うつもりはありません。俺が従うのはエンマ大王だけです。」

ジル

「わかった、肝に銘じておこう。」

ジルはそう言うと、ミーティングルームを後にした。



〈食堂〉

その後、アンジュ達は食堂へ場所を移した。近くにはモモカとヒルダとロザリーと神童と剣城と霧野、さらにマギーと見覚えの無い三人のメイルライダーがいた。

ヴィヴィアン

「いやあ、流石はモモカ飯!不味いノーマ飯が懐かしい!」

マギー

「しつつかし、大した科学力だねえ。キャンディーや薬無しでドラゴン化せずに済むなんて。」

ヴィヴィアン

「そういえばさ、向こうのみんな翼と尻尾あったんだけど、なんでアタシには無いの?」

マギー

「バレルから切ったよ。」

ヴィヴィアン

「うわー!ひでー!」

タスク

「アウローラ、まだ生きてたんだ。」

アンジユ

「知ってるの？」

タスク

「古の民が作ったらリベルタスの旗艦。俺達はこの船で、エンブリヲと戦ってきたんだ。」

モモカ

「ベッドは少し狭いですが、とても快適ですから御安心を。」

アンジユ

「そう、良かった。」

ヒルダ

「何にも良くねえよ。戦場からロストとして、帰ってきたら新しい男と女連れで、しかもガンダムなんて言う見たこと無いロボットまで一緒なんて、どんだけ自分勝手なんだよ？」

アンジユ

「ごめんね、ヒルダ。」

アンジュはヒルダに笑顔を見せた。

ヒルダ

「なっ・・・フンッ!」

ヒルダは頬を赤くしてそっぽを向いた。

劍城

「何イライラしてるんです?」

ヒルダ

「別に!てか、アンタらが居なくなっただから大変だったんだぞ!」

神童

「アルゼナルは壊滅して、仲間は大量殺され、おまけにサリアさん達が敵になり、もう散々さ・・・。」

天馬

「でも、どうしてサリアさん達がエンブリオに?」

ロザリー

「こつちが聞きてえよ！容赦なくボコボコ撃つてきやがるし……あんなのもう、友達でも何でもねえよ！」

アンジュ

「じゃあ、今戦えるのはあなた達だけって事？」

ロザリー

「アタシ達だけじゃないよ。」

ミランダは見覚えの無い三人を指差して言った。

ロザリー

《ノンナ》、《マリカ》、《メアリー》、戦力不足でメイルライダーに格上げされた新兵達だ。ゾーラ姉様がミッチリ訓練してやったから、かなりの腕になつてゐるぜ。」

すると、ノンナ・マリカ・メアリーはヴィヴィアンの周りに集まつた。

メアリー

「あの、お会い出来て光栄です!」

ヴィヴィアン

「えっ?アタシに?」

ヴィヴィアンは状況が飲み込めず戸惑う。

マリカ

「第一中隊のエース、ヴィヴィアンお姉様ですよね!」

ノンナ

「ずっと憧れてたんです!」

ロザリー

「ちよ、ちよっとお前ら!アタシにはそんなの一言も!」

食事が騒がしくなる傍ら、タスクは少し悩んでいた。

信助

「どうしました?」

タスク

「いや、アレクトラの様子少し気になってね。」

ヒルダ

「アレクトラ・マリアフオン・レーベンヘルツだろ？」

ヒルダの発言にアンジュ達は驚いた。

ヒルダ

「みんな知ってるよ。司令が全部ぶちまけたからね。自分の正体も、リベルタスの大義って奴も。」

霧野

「私は必ずやエンブリオを倒し、ノーマをこの呪われた運命から解放する。その日まで諸君らの命、私が預かる。」あの時、司令が言った決意の言葉だ。」

ヒルダ

「意気込みは分かるけど、ガチ過ぎてちよつと引くわ…」

「あなたにあの人の何が分かるのよ!？」



突然厨房の方から声がしたと思ったら、カウンターの下から酷く酔ったエマ監察官が現れた。

ナオミ

「エマ監察官さん!?!」

エマ

「監察官さんねえ、懐かしいけど、私もう監察官じゃないのよお。だから、エマさんでいいわよお? エマさんでえ。」

天馬・明日人

「うわっ、酒臭っ!」

モモカ

「この船に乗られてから、ずっつとこんな感じなんです……。」

信助

「やけ酒……ですか……。」

エマ

「しよーがないでしょー! 殺されかけたのよ!?! 私、同じ人間に……。」

と、今度は泣き出した。

エマ

「なのに……なのにね、司令つてば私をこの船に乗せてくれたのよ？今までノーマに酷いことばっかりしてきた私を……。」

天馬

「あの、エマさん？」

エマ

「あの人だけよー！この世界で信用できるのは！」

マギー

「はいはい、その辺にしときな……。」

マギーは酔ってベロベロになったエマを連れて食堂を後にした。

アンジユ

「ありや重症ね……。」

ロザリー

「でも、監察官の言う通りだ。私達にとってこの世で信じられるのは司令だけだからな。」

アンジュ

「……。」



「シャワールーム」

その後、アンジュはシャワールームでシャワーを浴びていた。

アンジュ

「何か、しみる……。」

ヒルダ

「少し海水が混じってるからねえ。」

そこへヒルダが突然現れた。

アンジュ

「ヒルダ。」

ヒルダは自身の胸をアンジュの背中に押し当てた。

アンジュ

「ちよ、ヒルダ！」

ヒルダ

「つたく、何にも連絡よこさないでさ。」

アンジュ

「仕方ないじゃない……。」

ヒルダ

「心配ばつか掛けさせやがって……したの？」

アンジュ

「えっ？」

ヒルダ

「天馬や、あの男と。」

アンジユ

「はいいい!? してないわよ!」

ヒルダ

「本当に?」

アンジユ

「本当よ! そういうアンタはどうなの? この船に乗ってから、剣城や神童達としたの?」

ヒルダ

「はあ!?! んなわけねえだろ!」



く 寝室 く

一方、天馬は寝室のベッドで横になっていた。

天馬

「良かった、みんな無事で……。」

プシユー

突然扉が開き、ココとナオミが入ってきた。

天馬

「ナオミ、ココさん。」

天馬はゆつくりと体を起こす。すると起き上がった途端、ナオミとココが天馬に抱きついた。

天馬

「えっ？ちよ、ちよつと二人とも？」

ナオミ

「良かった、また会えた。」

ココ

「天馬さんが居なくなつて、凄く不安だったんです。でも、無事で良かった。」

天馬

「二人とも……。」

ココ

「ところで、あの葵って人とはどういう関係なんですか?」

天馬

「えっ?」

ナオミ

「もしかして、天馬君の彼女?」

天馬

「そ、そんなんじゃないよ! 葵は俺の幼馴染で、同じサッカー部のマネージャーつて関係で!」

ココ

「本当ですか?」

天馬

「ホントにホントですつて!」

プシュー

またもや扉が開き、今度は葵が入ってきた。

天馬

「あ、葵……。」

葵

「天馬、何してるの？」

天馬

「えっ？あ、いや、この、それは……。」

と、ナオミとココは天馬から離れ葵に近づいた。

ナオミ

「葵ちゃん、あなた天馬君のことどう思ってるの？」

葵



「えっ?」

ココ

「天馬君の幼馴染で同じサッカー部のマネージャーって聞きましたけど、ホントですか?」

葵

「そうだけど・・・。」

ココ

「それ以外には?」

葵

「それ以外と言うと?」

ナオミ

「天馬君のことが好きかどうかって事だよ!」

葵

「ええっ!?!」

葵は頬を赤くして驚いた。

葵

「わ、私はただ天馬と小三の頃から仲が良かっただけで、マネージャーになったのも天馬をサポートするためで、その……。」

ナオミ

「その何？」

葵

「と、とにかく、天馬とは幼馴染でマネージャーってだけです！それ以上でも以下でもありません！」

葵は顔を赤くして叫んだ。



くパラメール格納庫く

夜、皆が寝静まった頃、タスクは明日人を格納庫へと呼んだ。

明日人

「こんな時間に、何ですか？」

タスク

「君に手伝ってほしい事があってね。」

タスクはエアバイクのトランクから小さな丸い機械を取りだし、明日人に渡した。

タスク

「催眠ガス発生装置だ。これをあちこちのダクトに仕掛けてほしい。」

明日人

「いいですけど、何で？」

タスク

「念には念を入れてって事さ。」



くミーティングルームく

次の日、ジルはアンジユ・タスク・天馬・明日人をミーティングルームへと呼んだ。ジルの左右には、ジャスミン・マギー・メイがいる。

ジル

「よく眠れたか？」

アンジユ

「ええ。」

ジル

「ではアンジユ、お前に任務を与える。」

ドラゴンと接触。交渉し、共同戦線の構築を要求しろ。」

ジルの思いもよらぬ発言に、一同は驚いた。

ジル

「どうした？ お前の提案通り、ドラゴンと一緒に戦うと言ってるんだ。」

アンジュ

「本気？」

ジル

「リベルタスに終止符を打つためには、ドラゴンとの共闘が最も合理的だと判断した。」

その言葉を聞いてアンジュとタスクは笑顔を見せたが、天馬と明日人は少し疑っていた。

ジル

「では、作戦の概要を説明する。」

ジルはデスクのディスプレイに地図を映し出した。地図には赤い印が五つ映っている。

天馬

「これは？」

ジル

「サリア達と交戦した際に、機体に撃ち込んだマーカーの反応だ。マーカーの反応を追跡して判明した奴等の帰島位置がここ、ミスルギ皇国の暁ノ御柱だ。恐らくエンブリオもここにいる。」

アンジユ

「アウラもそこにいるはずよ。」

ジル

「それは心強い情報だ。我々はまず、敵の戦力を削ぐ。アンジユ、ドラゴンどもには南西方向からミスルギ皇国へ侵攻させ、ラグナメイルを誘き出させる。アウローラはその隙に、ラグナメイルが探知不能な深々度を航行。ドラゴンどもと交戦中の背後に浮上し、挟撃する。敵兵力を排除した後、全兵力をもって暁ノ御柱へ侵攻する。」

タスク

「でもこれじゃ、ドラゴンに多大な負担を強いることになるぞ？」

ジル

「播導とはそういうものさ。」

アンジユ

「サリア達は助けないの?」

ジル

「持ち主を裏切るような道具はいらん。」

天馬

「道具?」

ジル

「そうだ、我々はリベルタスを成功させる道具に過ぎん。お前も私も、ドラゴンもな。」

明日人

「・・・あんた、いったい何を企んでるんだ? ドラゴンに何をさせるつもりだ!？」

明日人は立ち上がりジルに問う。

ジル

「・・・フフフツ、ハハハハハハッ!!」

突然、ジルは顔を手でおさえ笑いだした。

明日人

「何が可笑しい!?!」

ジル

「ドラゴンと共闘だと?アウローラの本当の浮上ポイントはここ、暁ノ御柱の北東だ。アンジユ、お前はドラゴンどもとラグナメールが交戦してる間に、パラメール隊とガンダムを率いて暁ノ御柱へ突入し、エンブリオを抹殺しろ!」

アンジユ

「はあ!?!」

タスク

「ドラゴンは捨て駒か!?!」

ジル

「切り札であるヴィルキスを危険に去らす様な真似は出来んからな。」

アンジユ

「冗談じゃないわ!こんな最低の作戦、協力出来ないわ!」

ジル



「ほう、これを見てもか?」

ジルはディスプレイを操作し、ある映像を映し出した。映像には手足をロープで拘束されたモモカが映っていた。

天馬

「モモカさん!?!」

予想外の出来事に、マギー・ジャスミン・メイは驚いている。

ジル

「お前の侍女は今、減圧室の中にいる。減圧室のハッチを開けば、お前の侍女は一気に水圧で押し潰される。救いたければ、作戦を全て受け入れ、行動しろ!」

アンジュ

「自分が何をしているのか分かってるの!?!」

ジル

「リベルタスでは全てが道具であり駒だ。あの侍女はお前を動かす道具。お前はヴィル

キスを動かす道具。そしてヴィルキスはエンブリヲを倒す究極の武器。」

アンジユ

「ふざけるな!!」

アンジユはジルに銃を向ける。

ドカッ!

アンジユ

「ぐっ!」

するとジルはデスクを乗り越え、アンジユに膝蹴りを叩き込んだ。

ジル

「上官への犯行罪だ。」

ジルは右腕でアンジユの首を掴み持ち上げる。

タスク

「やめろ! アレクトラ!」

タスクはジルを止めようと走り出す。

ドカッ!

だがジルに返り討ちにされてしまった。

タスク

「くそっ……。」

ジル

「さてアンジユ、お前の返事を聞こうか?」

アンジユ

「……くたばれ!」

ジル

「ほう、痛い目に会いたい様だな。」

ジルは左手を力強く握る。その時だった……。

プシュー

ミーティングルームの扉が開き、一人の少女が現れた。アンジュ達は少女の姿を見て目を疑った。

ジル

「っ!?!」

アンジュ

「モモ……カ?」

モモカ

「アンジュリーゼ様を放しなさい!」

キーン!

モモカはジルの右腕をマナの光で操り、アンジユを解放した。

ドンッ

アンジユ

「ぐっ!」

アンジユは放された途端床に倒れ込んだ。

ジル

「くそっ!」

天馬

「今だ!」

すると、今度は天馬と明日人がジルに向かって走り出す。

天馬・明日人

「うおおおおおお!!」

ドーン！ ドカッ！

ジル

「ぐはっ！」

二人はジルに強くタックルし、ジルは吹き飛ばされ壁に激突した。

モモカ

「アンジュリーゼ様、大丈夫ですか!?!」

モモカは慌ててアンジュに駆け寄る。

アンジュ

「大丈夫よ、モモカ……。」

ジル

「な、何故だ？モモカは確かに減圧室に……。」

「僕達がモモカさんの拘束を解きました。」

すると突然、扉の方から声がした。一同が扉の方をみると、そこには信助・ヴィヴィアン・ナオミ・葵がいた。

ジル

「お前達！」

天馬

「悪いですけど、さっきの会話、みんなの耳に入ってます。」

天馬はポケットから無線機を取り出した。

天馬

「万が一に備えて、あなたとの会話を盗聴させてもらってたんです。」  
ジル

「貴様、ふざけた真似を．．．!?」

突然、ジルの体から力が抜け倒れ込んだ。

ジャスミン

「な、何だいこりや．．．。」

ジャスミン・マギー・メイは気を失った。

ジル

「まさか、ガスか？」

タスク

「出来れば、使いたくなかったよ。」

タスク達はガスマスクを装着し、タスクはアンジュにガスマスクを付けた。



ジル

「タスク、ヴェルクスの騎士であるお前が、リベルタスの邪魔をするのか!？」

タスク

「俺はもうヴェルクスの騎士じゃない。アンジュの騎士だ!」

タスクはそう言うと、アンジュと天馬達を連れてミーティングルームを離れた。

ジル

「色気付いたか・・・だが、これで終わったと思うなよ!」

## E p. 21 / 深海の攻防！天馬 VS ジル！ 《後編》

くアウローラ コックピットく

ミーティングルームを離れた後、アンジュ達はコックピットへ向かった。

タスク

「アウローラ浮上開始。海面到達まで30分だ。」

アンジュ

「急いで格納庫へ向かいましょう。」

アンジュ達はコックピットを離れ、格納庫へと向かった。

-----

く通路 格納庫前く

数分後、アンジユ・ヴィヴィアン・ナオミはライダースーツを着替え、一同は格納庫の近くまでやって来た。

アンジユ

「海面に出たら、各々の機体で脱出するわ!」

天馬

「了解!」

ガコン!

突然、格納庫入り口のハッチが閉じ始めた。

タスク

「ハッチが!」

アンジユ

「急いで!格納庫まであと少しよ!」

アンジユは急いで格納庫へ走る。

信助

「うわっ!？」

ドタツ!

だが途中、信助が躓き転んでしまった。

天馬

「信助!」

天馬・葵・ナオミ・明日人は慌てて信助に駆け寄る。

アンジユ

「はあ……はあ……」

その隙に、アンジユ・タスク・ヴィヴィアン・モモカは格納庫へと到着。

アンジユ

「みんないる？」

モモカ

「アンジュリリーゼ様!天馬さん達が!」

天馬達は急いで格納庫へと向かう。

ガコン!

だがあと少しというところで、ハッチが閉じてしまった。

アンジユ

「天馬!」

「また敵前逃亡か？」

その直後、ヴィルキスの影からジルが現れた。

アンジユ

「ジル！」

ジルは腰のホルダーからナイフを取り出したと思うと、剣身を伸ばし剣へと変えた。

ジル

「逃がさんぞアンジユ、リベルタスを成功させるまではな！」

アンジユ

「リベルタスって、私がいないと出来ないんでしょ？なのに私の意志を無視するの？」

ジル

「道具に意志など要らん！」

アンジユ

「私達のことを無視して戦いを強要するなんて、人間達がノーマにしてきた事と同じ

「じゃない!」

ジル

「司令官は私だ!命令に従え!」

アンジュ

「・・・ねえ、勝負しましょ。」

ジル

「なに?」

アンジュ

「サラ子は人質なんて、卑怯な真似はしなかった。あなたが勝ったら命令に従うわ。タスク、モモカとヴィヴィアンと下がって。」

タスク

「気を付けろよ。」

タスクとモモカとヴィヴィアンはその場を離れ、レイザーの影に隠れた。

ジル

「この期に及んで、まだわがままとはな!」

ジルは走り出し、勢いよく剣を振る。

キーン！

アンジユはナイフを装備し、ジルの剣を受け止めた。

アンジユ

「傲慢なのはそっちでしょ!？」

ジル

「エンブリヲを倒さん限り、リベルタスは終わらん！」

アンジユ

「そのためなら、どんな犠牲も許されるって言うの!？」

ジル

「その通りだ！」

キーン！



ジルはアンジユのナイフを弾き飛ばし、剣を大きく振り下ろす。

バシッ!

アンジユは白刃取りでジルの剣を受け止めた。

ジル

「皇女アンジユリーゼ、お前なら分かるだろ!? 全てを奪われ、地の底へ叩き落とされたお前なら、私の怒りが! お前は私だ! お前がエンブリヲを殺し、リベルタスを成功させ、全てを取り戻すんだ!」

アンジユ

「誰かに自分を託すなんて、空っぽなのね!」

ジル

「黙れ!!」

ドカーン!

突然、物凄い爆発音と共に通路へ通じるハッチが破壊された。

ジル

「なにっ!？」

破壊された拍子に砂煙が舞い上がり、明日人・ナオミ・信助・葵が砂煙の中から現れた。

明日人

「タスクさん！」

明日人達はタスクのところへ向かう。

タスク

「明日人君！あれ、天馬君は？」

カンツ・・・カンツ・・・カンツ・・・

煙の中から天馬がゆっくりと姿を見せた。だが天馬の髪はクリーム色に近い金髪になり、後ろの髪が外ハネに伸びていた。

ジル

「お前は・・・!」

アンジユ

「天馬・・・なの?」

アンジユとジルは天馬の姿に混乱し、天馬は二人の前で足を止める。そして腰からラグナセイバーを引き抜き右手に装備した。

天馬

「・・・ジル司令、俺が相手だ!」

天馬はジルに向かって叫ぶ。その瞳は赤く輝き、強いオーラを放っていた。

ジル

「アンジユに続いて、お前まで私に楯突く気か？」

天馬

「楯突くですつて？ ジル司令、俺は最初からあなたの部下になつたつもりはありません。俺は最初から、アンジユさんを守るために自分の意志でアルゼナルへ来ました。今はそれが俺の願いであり、俺の信念。」

ジル

「信念だと？」

アンジユ

「やめて天馬！これは私とジルの戦いよ！あなたには関係無いわ！」

天馬

「アンジユさんを守ることが俺の信念だと言つた筈。アンジユさんの戦いは俺の戦いだ！」

アンジユ

「っ!!」

ジル

「つまらん男になりおって・・・。お前もアンジユの味方なら考えは同じはずだ。我々の仲間を大勢殺したドラゴンどもと、そんなに手を組むのが大事か？」

天馬

「もちろん。アウラを解放しエンブリヲを倒すため・・・いや俺達ノーマと人間とアウラの民、そして明日人達の明日を守るため。」

天馬はラグナセイバーを両手で握り構えた。

天馬

「ジル司令・・・いや、アレクトラ！アンジユさんに代わって、俺があなたを倒してみせる！」

ジル

「無駄だ。お前の力では、私は倒せんぞ！」

天馬

「やってみないと分かりませんよ！」

ジルは剣を構え、二人は互いに睨み合った。

天馬

「アンジュさんは下がって下さい！」

アンジュ

「え、ええ…」

アンジュはタスク達のところへ向かった。

ジル

「…いくぞ！」

天馬

「おうっ！」



〈通路〉

その頃、目を覚ましたジャスミンとマギーが格納庫へと向かっていた。

マギー

「ジルのヤツ、モモカを人質にするなんて聞いてないよ!」

ジャスミン

「とにかく急ぐんだよ!いくらアンジュやタスクでも、ジルが相手じゃ圧倒的に不利だ!」

マギー

「いや、天馬ならジルに勝てるかもしれない。前に調べて分かったんだが、天馬は化身以外に別の力を持つてる。」

ジャスミン

「別の力?」



く格納庫く

ガキン！

天馬とジルは勢いよく剣をぶつけ合った。

ジル

「その剣、その姿・・・私の知らぬ間に、いったい何処で手に入れた？」

天馬

「剣はドラゴン達の長から、そしてこの姿はアーサー王から授かった力だ！」

アンジュ達はレイザーの影から二人を見張っていた。

明日人

「凄い気迫だ・・・。」

ナオミ

「ここに居るだけでもピリピリ来るわね・・・。」

キーン！



天馬とジルは一旦離れ、互いに距離をとる。だが直前に天馬は右腕、ジルは右頬に傷を負った。



く太平洋 上空く

一方、太平洋上空ではクレオパトラ・レイジア・テオドーラがアウローラを探していた。すると……。

エルシャ

『ソナーに反応あり。』

クリス

『きつとあの船。』

サリア

『直ちにポイントへ向かう。』



くアウローラ 格納庫く

ガキーン！ガキーン！

天馬

「チイツー！」

天馬は手に力を込め、ジルの剣を押しえ込んだ。

ジル

「くっ……！」

天馬

「己の力を過信してた様だな、アレクトラ。自分に敵うヤツは、少なくともアルゼナルには居ないと思ってたんでしょ？これが己の信念のため、願いのため、そして大切な人を

守るために命懸けで戦う戦士の力だ!思い知ったか!!」

ジル

「ほぎけ!!」

シャキーン!

ジルは力一杯剣を振り上げ、ラグナセイバーを弾き飛ばした。

天馬

「しまった!」

ジル

「食らえ!」

ジルは剣を横に力一杯振る。天馬はギリギリのところまで真上へ大きくジャンプし回避。

ガシツ!

そして空中で舞うラグナセイバーを掴んだ。

ジル

「何だと!？」

天馬

「うおりゃあああああ!」

天馬はジルの真上から落下し、着地と同時にラグナセイバーを勢いよく振り下ろした。

ドカーン!

ジルは後方へジャンプし、間一髪で天馬の攻撃を避けた。

ジル

「なるほど、そのつまらん信念や願いとやらにも少しは敬意を払わねばならんな。」

天馬

「あんたのつまらない意地にもな。」

ジル

「フツ・・・教えてくれないか？何故お前はアンジュのために命を掛けられる？アンジュを愛しているのからか？」

天馬

「愛しているとか、そんなのは関係ない！アンジュさんは俺にとって大切な友達だから、俺はアンジュの考えが正しいと信じているから戦っている！それだけだ！」

ジル

「アンジュを信頼していると言うことか。だが、そんな信頼などでは私を倒せんぞ！」

ジルは剣を構え走り出す。天馬も剣を構え走り出し、二人はすれ違い様に剣を振った。

ガシャーン！

天馬はジルの義手を切断し、ジルは破損した右腕をおさえしやがみこんだ。

ジル

「クッ！」

天馬

「勝負ありましたね、司令。」

天馬はラグナセイバーを鞘に戻した。その途端、髪と瞳がもとの色に戻った。

天馬

「何が正しいかは誰にも分からない。でもジル司令、あなたのやり方は大嫌いだ。」

ジル

「何故だ・・・何故分からない!？」

天馬

「あなたのやり方じゃ、俺達のやりたい事が出来ないんですよ。」

ジル

「なに・・・？」

天馬

「ヴィヴィアンさんが実家にサリアアさん達を招待することも、第一中隊のみんなでサツカーをすることも、タスクさんがアンジュさんと一緒に喫茶店を開くことも、アンジュさんがサラマンディーネさんと再びバトルをすることも、何も出来ないからですよ。」

アンジュ

「天馬……。」

ザバーン!

アウローラが海面に浮上し、辺りに轟音が響いた。

天馬

「海面に出たか。」

ジャスミン

「決着は、着いたようだね。」

そこへ、ジャスミンとマギーがやって来た。

天馬

「ジャスマミンさん、マギー先生も。」

マギー

「行くんだろ？天井を開けてやるから、準備しな。」

天馬達はそれぞれの機体に取り、システムを起動。モモカはタスクのエアバイクの後ろに乗り、マギーが天井のハッチを開けた。

ジャスマミン

「それで、これからどうすんだい？」

アンジユ

「私がやるわ、リベルタスを。」

アンジユの発言に、ジャスマミンは驚いた。

アンジユ

「あの人のやり方は間違ってたけど、ノーマの解放は必要なもの。だから・・・。」



アンジユはふと、天馬に目を向ける。

アンジユ

「私がやる。私が信じる人、私を信じてくれる人と一緒に。」

アンジユはそう言うと、ヴィルキスのエンジンを吹かし離陸。ペガサス達やガンダムも後続く。

—————

く太平洋上く

アンジユ

「じゃあ明日人、頼むわね？」

明日人

「えっ?頼むって?」

アンジュ

「サラ子達の世界に行くから、FXの力で連れてって。ピンチにならないとヴィルキスは飛べないから。」

明日人

「そう言うことか、了解。」

《WARNING! WARNING!》

突然、各機に警告アラームが鳴り響いた。

バキューン!

警告アラームが鳴った途端、前方から緑色のビームが二発こちらへと向かってくる。

天馬

「なにっ!?!」

一同は散開しビームを避ける。

天馬

「緑色のビーム……まさか!？」

遙か前方には、レイジア・テオドーラ・ヴィクトリア・エイレーネがこちらに銃を向けていた。

エルシヤ

「見つけたわよ。」

天馬

「やっぱりサリアさん達か!」

クレオパトラ達はフライトモードに変形し、レイジアとテオドーラは浮上したアウローラに、クレオパトラ・ヴィクトリア・エイレーネはヴィルキス達へと真っ直ぐ突っ込んでくる。

天馬

「ナオミ、葵！アウローラを守って！」

ナオミ

「分かった！」

ウイングゼロとダブルゼータはアウローラの救援へと向かった。

天馬

「明日人君はヴィクトリア、信助とヴィヴィアンさんはエイレーネを！クレオパトラは俺とアンジュさんが引き受ける！」

天馬の指示で其々散開した。

サリア

「二機で私に勝てるんでも？」

アンジュ

「やってみなきゃ、分からないでしょ！」

ペガサスとヴィルキスは変形し、武器を装備しクレオパトラに襲いかかる。

ザバーン!

だがその途端、海中から無数の円盤型ドローンが姿を見せた。

アンジユ・天馬

「っ!?!」

バシユーン!ガシツ!

ドローンは一斉にアンカーを射出し、さらに接触し動きを封じた。

アンジユ

「しまった!」

天馬

「まさか、あなた達が囿だったのか!？」

サリア

「そうよ、残念だったわね。」

プシユー

ドローンから紫色のガスが放出された。ガスは隙間からヴィルキスとペガサスのコックピットに侵入。瞬く間にコックピットにガスが充満した。

天馬

「まさか、毒ガス!？」

アンジュと天馬はガスを吸うまいと口を塞いだ。が、徐々に意識が薄れ、視界が暗くなっていく。

アンジュ

「ぐっ……!」

天馬

「くっそお……。」

そして、二人は気を失った。

サリア

「さようなら、二人とも……。」

T o B e C o n t i n u e d …

## E P. 22 / 世界の調律者、エンブリヲ 《前編》

アンジュ

「う、う〜ん…」

アンジュは目を覚ますと、ベッドの上で横になっていた。妙に寝心地が良く、懐かしい匂いがしていた。

アンジュ

「( )は・・・？」

「アンジュさん！アンジュさん！」

アンジュは自分を呼ぶ声に気づき、ゆっくりと身体を起こした。服はライダーズーツから桃色のベビードールに変わっており、横には心配そうにアンジュを見る天馬と笑顔



のモモカがいた。

アンジュ

「天馬？それにモモカ？」

モモカ

「おはようございます、アンジュリーゼ様！」

天馬

「アンジュさん！良かった、はあく。」

天馬は安心して胸を撫で下ろした。

アンジュ

「ねえ、ここは？」

モモカ

「ミスルギ皇国、アンジュリーゼ様のお部屋です！」

アンジュ

「えっ!？」

アンジユはベッドから降り、窓の外を見た。外には見慣れた街と巨大な塔が見える。

アンジユ

「ホントだ。でもどうして？」

天馬

「俺にもさっぱりです。目が覚めたら俺はこの床に倒れてて、直ぐ隣でモモカさんの声が聞こえてそれで……ん？」

ふと天馬は机の上に置かれた手紙を見つけた。机の周りには沢山の花が飾られている。

天馬

「手紙？」

天馬は手紙を手に取り読むと、顔をしかめた。

天馬

「・・・なるほど。」

アンジュ

「えっ？なるほどって？」

天馬はアンジュに手紙を見せる。

アンジュ

「っ!!エンブリヲ・・・。」

送り主のところにエンブリヲの名前が書かれていた。

天馬

「・・・。」

突然、天馬は頬を赤くして目を反らす。

アンジュ

「天馬？」

天馬

「と、取り合えず着替えませんか？流石にベビードールのままで居られるのはちょっと……。」

アンジュ

「あ、ごめん……。」

天馬はアンジュに背を向け、アンジュはモモカに手伝ってもらいドレスに着替えた。

アンジュ

「にしても、サリアは何で私達をここへ連れてきたのかしら？タスクや明日人達は無事かしら？」

天馬

「きつと大丈夫ですよ。みんな強いですから。」

モモカ

「……はい、終わりました！」

アンジユ

「ありがとう。天馬、もういいわよ。」

天馬は身体をアンジユに向けた。

天馬

「おっ？懐かしいですね、そのドレス。」

アンジユ

「懐かしい？」

天馬

「稲妻町で初めて出会ったときも、そのドレスだったじゃないですか。」

アンジユ

「あ、そっか。フフツ。」

アンジユは微笑み、天馬とモモカも微笑んだ。

アンジユ

「・・・さてと。」

アンジュは机の引き出しを開け、万年筆やペーパーナイフ等を手に取りドレスに隠した。

アンジュ

「本当はライフルかグレネードが欲しいところだけど、無いよりマシか。」

モモカ

「アンジュリーゼ様、何を？」

アンジュ

「襲撃よ。この花の送り主のところへ。」

ガチャ

「それは許可出来ないわ。」

突然ドアが開き、御揃いの黒い制服に身を包んだサリア・ターニャ・イヌマが現れた。

天馬

「サリアさん！それに、ターニヤさんにイヌマさんまで！」

サリア

「アンジユ、天馬、あなた達はエンブリオ様の捕虜よ。勝手な行動は許さないわ。」

アンジユ

「エンブリヲ様ねえ……。サリア、一体何があったの？あんなに司令が大好きだったあなた、何故エンブリヲに？」

サリア

「別に、目が覚めただけよ。」

天馬

「目が覚めた？どう言うことですか？」

サリア

「あの人は自らの手で私を救ってくれた。私を生まれ変わらせてくれたの。アレクトラは私を必要としていなかった。いくら頑張っても、決して報われる事は無かった……。でも、あの人は私を価値を分かってくれた。私を必要としてくれた。私は見つけたのよ、本当に守るべき人を。」

サリアは左手の中指の指輪を見て微笑んだ。指輪にはアンジュの指輪と同じ形の青い宝石が埋め込まれている。

サリア

「エンブリヲ様の親衛隊、名付けて《ダイヤモンド・ローズ騎士団》。私が騎士団長のサリアよ。」

モモカ

「ダイヤモンド……。」

天馬

「意味は何となく分かりますけど、長いなあ……」

アンジュ

「要するに、路頭に迷っていたところを新しい飼い主に拾われたってことね？でもまさか、あんたに司令を捨てる勇気があったなんて、感心したわ。」

サリア

「……。」



カチッ

サリアはアンジユに銃を向けた。

サリア

「私はエンブリヲ様に愛されているの。誰にも愛されていないあなたと違ってね！」

アンジユ

「それは良かったわね・・・！」

ガシッ！ゴンッ！

天馬はサリアから銃を奪い、背中に強烈な肘打ちを叩き込んだ。サリアはバランスを崩し前へよろける。

バシッ！

その隙にアンジユがサリアの腕を掴み、ベッドへと投げ飛ばした。

サリア

「ぐはっ！」

ターニャ・イヌマ

「騎士団長！」

ターニャとイヌマは即座に銃を抜く。

バーン！

天馬

「ハイヤツ！」

ドカツ！

だが天馬がターニャの銃を撃って弾き飛ばし、イヌマを蹴り飛ばした。イヌマは気を失い倒れ、ターニャは手に激痛が走りうずくまった。

天馬

「アンジュさん、今のうちに！」

アンジュ

「分かったわ。行きましょ、モモカ。」

モモカ

「は、はい！」

天馬はターニヤの銃を拾い、3人は急いで部屋を出た。

サリア

「ま、待ちなさい！」

サリアは急いでアンジュ達を追いかける。だが廊下に出ると、アンジュ達の姿は何処にも無かった。

サリア

「何処に消えたの!? アンジュ!!」

〜 皇宮 裏庭 〳

ガコツ

天馬達は隠し通路を通り、裏庭へと出た。

天馬

「よいしょつと。」

飛び石の蓋を開け、天馬・モモカ・アンジュは順番に外へと出た。

モモカ

「隠し通路があつて助かりました!」

アンジユ

「サリアったら、今頃必死に走り回ってるでしょうね？」

コツン

アンジユ

「どおつとお!!？」

天馬

「うわあ!!？」

ドサツ

アンジユは穴から出る際につまづき、天馬に覆い被さる様に倒れた。

モモカ

「アンジュリーゼ様！」

アンジユ

「だ、大丈夫よモモカ。」

「フゴフゴ・・・！」

アンジュ

「ん？」

妙な音が聞こえアンジュは下に目を向けると、天馬が仰向けでアンジュの下敷きになっていた。天馬の顔はアンジュの胸に埋まり、天馬は息が出来ず苦しんでいる。

天馬

「フググググ・・・。」

アンジュ

「うわあああああ!?!」

天馬

「プハア！・・・ゲホッ！ゲホッ！」

アンジユは急いで立ち上がり、天馬は咳き込みながら上半身を起こした。

天馬

「ああ、苦しかったあ。」

アンジユ

「え、つとその、ごめん天馬！」

天馬

「だ、大丈夫ですよ。」

天馬は立ち上がり、辺りを見た。

天馬

「それよりも、何処ですかここ？」

アンジユ

「多分、裏庭だと思うけど……。」

すると……。

「あ！アンジュお姉様と天馬お兄様だ！」

庭で遊んでいた女の子達がアンジュを見つけ集まってきた。女の子達は皆、アルゼナル幼年部の制服を身に付けている。

エルシャ

「あらあら、アンジュちゃんと天馬君を追い詰めるなんて、みんな凄いいじゃない。」

そこへ、サリア達と同じ制服姿のエルシャが現れた。

天馬

「エルシャさん！」

エルシャ

「久しぶりね、みんな。良ければ一緒にお茶しない？」

3人はエルシャに連れられテラスに移り、エルシャは3人に紅茶を入れた。



天馬

「・・・あの、エルシャさん。」

エルシャ

「なにかしら、天馬君？」

天馬

「何でエルシャさんがここに？」

エルシャ

「私、今はこの”エンブリヲ幼稚園”の園長さんなの。」

天馬の問いにエルシャは笑顔で答えた。

アンジュ

「エンブリヲ幼稚園？」

エルシャ

「そう、本当は幼年部の子供達みんな連れて来たかったんだけど・・・。」

天馬は庭で楽しそうに遊ぶ子供達を見た。

天馬

「でも、あれだけの惨劇を受けてよく無事でしたね。」

天馬がそう言うと、エルシヤも子供達に目を向けた。

エルシヤ

「・・・ねえ、信じられる？」

アンジユ

「何が？」

エルシヤ

「あの子達、一度死んでるの。」

エルシヤの言葉に3人は耳を疑った。

エルシヤ

「でもね、エンブリヲさんが生き返らせてくれたの。」

アンジュ

「生き返らせた!？」

モモカ

「そんなの、マナの光でも不可能です!」

エルシャ

「信じられないでしょ?でもね、私見たのよ。エンブリヲさんが目の前で、あの子達の傷を治し、生き返らせたところを。」

天馬

「バカな……。」

エルシャ

「エンブリヲさんはね、あの子達が安心して暮らせる世界を作るんだって。私は、それに協力するって決めたの。あの子達を守るためだったらなんだってやるわ。人間どもの抹殺だって、アンジュちゃんと天馬君を殺すことだって。」

エルシャは真剣な表情を見せ、アンジュと天馬はエルシャの覚悟が本物だと思った。

天馬

「エルシャさん……。」

「ママー！一緒に遊ぼう！」

エルシャ

「……久しぶりにお喋りが出来て楽しかったわ。またね。」

エルシャはそう言うのと席を立ち、子供達のところへ向かった。

アンジュ

「……天馬、モモカ、エンブリヲを探すわよ！」

天馬・モモカ

「はいっ！」

「一緒に来る？」

すると、今度は庭の木の影から同じ制服姿のクリスが現れた。

アンジユ

「クリス！」

—————

〽図書室〽

クリスはアンジユ達を図書室へと連れてきた。

天馬

「ここは？」

クリス

「図書室。エンブリヲ君、よくここで本を読んでいるんだ。」

アンジユ

「・・・ねえ、クリス。」

クリス

「別に無理に話しかけなくていいよ。あんた、私に興味無いでしょ？」

アンジュ

「ヒルダとロザリー、スツゴく怒ってたわよ？」

アンジュがそう言うと、クリスは顔をしかめた。

クリス

「怒ってるのはこっちだよ。アイツら、私のこと見捨てたんだよ？」

天馬

「クリスさん、実は……。」

クリス

「でも、エンブリオ君は違う。彼は命懸けで私を助けてくれて、私と仲良くなりたいて言ってくれたんだ。私にとって、エンブリヲ君だけが本当の友達さ。」

「この役立たず!!」

パシン！

突如、図書室に少女の声とムチの音が響き渡った。

天馬

「何だ？」

四人が声を頼りにその場へ向かうと、シルヴィアがリイザにムチ打ちをしていた。リイザは口を鋼鉄製のマスクで塞がれ、シルヴィアの前で四つん這いにされていた。

アンジユ

「り、リイザ!？」

リイザ

「・・・!!」

リイザとシルヴィアはアンジユの声に気付き目を向けた。

モモカ

「これは、いったい……。」

シルヴィア

「あ、あなた達は!!」

シルヴィアはアンジュ達に驚き後ろへ下がる。アンジュは心配そうな表情でシルヴィアを見た。

アンジュ

「シルヴィア……。」

シルヴィア

「私を殺しに来たのですね？お父様、お母様、お兄様を殺め、最後に私を！」

天馬

「シルヴィア様、落ち着いてください！俺達何も……。」

シルヴィア

「助けて……助けてください叔父様ああ！」

アンジュ・天馬・モモカ



「叔父様？」

ガチャン！

突然図書室の大扉が開き、サリア・ターニャ・イヌマが現れた。

サリア

「見つけたわよ！」

天馬

「つたく、しつこいなあ！」

天馬は銃を両手に持ち構えた。

「騒がしいねえ。読書中は、少し静かにしてくれとありがたいのだが。」

突然、聞き慣れない男の声が聞こえてきた。声の主を探すと、図書室の二階にエンブリヲの姿があった。

天馬

「あなたは……！」

エンブリヲ

「やはり本は良い。これには宇宙の全てが詰まっている。それに比べ、世界の何と詰まらん事か……。」

エンブリヲは階段を降り、アンジユと天馬の前で立ち止まった。

エンブリヲ

「久しぶりだよ、本より楽しいものに出会えたのは。」

アンジユ

「エンブリヲ……。」

エンブリヲ

「久しぶりだねアンジユ。そして天馬。手荒な真似をしてすまなかった。」

天馬

「……何故、俺達をここへ？」

エンブリヲ

「君達と話がしたくてね、サリア達に連れてきてもらったんだ。来たまえ。君達も私に聞きたい事があるのだろう?」

天馬

「どうします?」

アンジユ

「行きましょう。」

エンブリヲはアンジユと天馬を連れて大扉へと向かう。すると、エンブリヲは途中で足を止めた。

エンブリヲ

「すまないがサリア、しばらく3人だけにしてくれ。」

サリア

「いけません!」

エンブリヲ

「サリア……。」

エンブリヲは優しい眼でサリアを見つめ、サリアは仕方なさそうに後ろへ下がった。

エンブリヲ

「では行くかうか？」

エンブリヲはアンジュと天馬を連れて図書室を離れた。

# E p. 22 / 世界の調律者、エンブリヲ《後編》

「アウローラ 医務室」

一方、アウローラの医務室ではジルがマギーに怪我の手当をしてもらっていた。

ジル

「アンジュと天馬はサリア達に捕まり、他の連中はロスト。大暴れして出てった結果がこれとは、実に滑稽じゃないか。」

ジャスミン

「何を言ってるんだい？あの子達が守ってくれたからこそ、この船は沈まずに済んだんだよ。」

ジル

「知ったことか。ウイルス無しにリベルタスの完遂は不可能だ。だからアンジュを行かせてはならなかったのに、まさかあのタスクが裏切るとは思わなかった……。」

――――  
↳ 通路↳

通路では、ヒルダ・ロザリー・劍城・神童がドアに耳を近づけ盗み聞きをしていた。

ジル

『失敗だったよ。アンジュはもっと柔順になるように仕込むべきだった……。』

ヒルダ

「……。」

――――

↳ 寝室↳

その後、ヒルダ・ロザリー・劍城は寝室に移り、ゾーラ・ココ・ミランダを呼び話を

した。

ロザリー

「アイツら、戻ってくるなり何もかもシツチャカメツチャカにしやがって……何考えてやがんだ？」

ゾーラ

「きつと何か理由があつたんだよ。この船から逃げ出したくなるような理由がさ……。」

ミランダ

「私達、これからどうすればいいのかな？」

ココ

「例のリベルタスって作戦、ヴィルクスとアンジユ様がいないと出来ないんですよね？」

劍城

「だったら、答えは1つですね。」

ヒルダ

「ああ、アンジユを取り返すしか無い。だがそのためには……。」

ヒルダは何か思い付いたのか、怪しく微笑んだ。



「暁ノ御柱 最深部」

エンブリヲはアンジュと天馬を暁ノ御柱の最深部へと連れてきた。目の前にはアンジュ達が今まで目にしたことの無い、巨大なドラゴンの姿があった。

アンジュ

「これは……!!」

天馬

「まさか、これがアウラ?」

エンブリヲ

「そう。リィザやドラゴン達が探し求めている、神聖にして原初のドラゴンだ。この世界におけるマナのエネルギーは、アウラがドラグニウムを食らう事で生み出されている。」

アンジュ



「神聖なドラゴンであるアウラを、あなたがただの発電機にしたのね？」

エンブリヲ

「人間達を路頭に迷わせる訳にはいかないからね……。」

天馬

「まさか、この間の待ち伏せは……。」

エンブリヲ

「もちろん、ドラグニウムを手に入れる為さ。サリア達の活躍のおかげで大量のドラグニウムが手に入った。これで私の計画を……。」

カチャ

エンブリヲ

「ん?。」

天馬

「今すぐアウラを解放してください。」

天馬は右手に銃を持ち、エンブリヲの後頭部に突き付けた。

エンブリヲ

「おやおや、ドラゴンの味方だったのかい？」

アンジュ

「違う、私達はあなたの敵よ。兄を消し去り、タスクを殺そうとし、ドラゴンを大勢殺した。敵と考えるには十分だわ！」

エンブリヲ

「なるほど・・・断ると言ったら？」

天馬

「この場であなたの頭を撃ち抜きます。」

エンブリヲ

「そうか、では撃つてみたま（バンッ！）グッ!？」

エンブリヲは頭を撃ち抜かれ、血を流し倒れた。

「気が済んだかい？」

アンジユ・天馬  
「っ!？」

だが、いつの間にかアンジユと天馬の後ろにはエンブリヲが何事も無かったかの様に  
悠々としていた。

天馬

「何で!？」

エンブリヲ

「アレクトラから私の事を聞いているのだろうか？」

アンジユ

「神・・・様・・・？」

エンブリヲ

「チープな表現で好きじゃない・・・私は調律者だよ。世界の音を整えるね。」

シュンツ!

突然、周りの景色が一瞬にして変わり、一同は湖畔の小さな庭にいた。

天馬

「いつの間に!?!」

エンブリヲ

「君達は、私を殺してどうする気だい?」

アンジユ

「世界を壊し、ノーマを解放する!」

エンブリヲ

「そうか。でも、ノーマは本当に解放されたがっているのかな?」

アンジユ

「えっ?」

エンブリヲ

「確かにマナの使えない彼女達の居場所はこの世界には無い。だが、ノーマにはドラゴンと戦う役割が与えられている。居場所や役割が与えられれば、人は満足し安心できるものだ。自分で考えて自力で生きる、それは人間にとって、大変な苦痛なんだよ。」

アンジユ

「何を言つて……!!」

天馬

「アンジユさん？」

アンジユは徐々に顔が赤くなり、意識が朦朧とし始めていた。

アンジユ

「私に……何を!?!」

エンブリヲ

「なるほど、君の破壊衝動は不安から来ている。奪われ、騙され、裏切られ続け、何処に行くのかも分からない。」

アンジユ

「だ、黙れ……。」

エンブリヲ

「だが恐れる事はない、アンジユ。私が君を解放してあげよう、不安から。」

アンジユ

「あ．．．。」

アンジュの目が虚ろになり、動きを止めた。

天馬

「アンジュさん？」

エンブリヲ

「愛情、安心、友情、信頼、居場所、好きなものを何でも与えよう。だから全てを捨てて、私を受け入れたまえ。身に着けているもの、全て．．．。」

アンジュ

「．．．。」

アンジュは背中に手を回し、ドレスのホックに手を伸ばす。

天馬

「っ!!」

ガシツ！

天馬はアンジュの後ろに回り、アンジュの腕を掴み動きを止めた。

天馬

「ダメだアンジュさん！目を覚ましてください！エンブリヲの言いなりになっちゃダメだ！」

エンブリヲ

「無駄だ。今のアンジュには、私の言葉以外は届かない。」

「それはどうか？！」

エンブリヲ

「ん？」

突然、エンブリヲの後ろから天馬と同じ声が聞こえてきた。振り向くとそこには…。

エンブリヲ

「な、ナニツ!？」

そこには、もう一人の天馬の姿があつた。

テンマ

「・・・ハアアアアア!!」

テンマは大声で叫ぶ。すると、アンジユが意識を取り戻した。

アンジユ

「・・・あれ？私、いったい何を・・・えっ!？」

アンジユも、もう一人の天馬を見て驚いた。

アンジユ

「て、天馬が二人!？」



エンブリヲ

「貴様、何者だ!？」

テンマ

「・・・ある時は、松風天馬の気から生まれし化身として・・・ある時は松風天馬を守る鎧として共に戦った、俺の名は・・・！」

突然、もう一人の天馬を藍色のオーラが包み込み、もう一人の天馬は全く別の姿へと変身した。背中から真っ白な翼を生やし、強固な肉体とポリウムのある長い赤髪を持ち、頭にペガサスを模した装飾を着けた男。その者は・・・。

???

「大空を舞う風の魔神、ペガサスアーク！」

アンジユ

「ペガサスアーク？でも、あれって天馬の化身じゃ・・・。」

天馬

「あれは《デュプリ》と言って、本来はサッカーの試合の人数合わせに生み出す化身です。」

エンブリヲ

「……まさか、このような力を隠し持っていたとは……。」

カチャ

シヤキン

天馬はアンジュに銃を渡し、腰からラグナセイバーを引き抜き右手に持った。

アンジュ

「……生憎だけど、私は与えられたもので満足できるほど空っぽじゃないの。」

アンジュは銃をエンブリヲに向けた。

アンジュ

「神様だか調律者だか何だか知らないけど、死ぬまで殺して、世界を壊すわ！」

エンブリヲ

「・・・っ!!」

エンブリヲは驚いた様に見開くと、今度はまるで喜びの笑みを見せた。

エンブリヲ

「ドラマティック!!」

天馬・アンジユ

「えっ?」

エンブリヲ

「アンジユ・・・私は、君と出会うために生きてきたのかもしれない!この千年を!」

天馬

「せ、千年!?!」

エンブリヲの発言に天馬達は驚いた。



「アウローラ シャワールーム」

一方、アウローラのヒルダと劍城はシャワールームにいた。

劍城

「こんなところに、何があるんですか？」

ヒルダ

「あそこ。」

ヒルダは天井を指差す。指した先には通気口があった。

ヒルダ

「あそこから、タマに司令の声が聞こえてくるんだ。」

劍城

「あそこから？」

ヒルダ

「この部屋の上には、司令の部屋がある。だから、ダクトを通って司令の声が漏れてるのや。」

すると……。

『うう……うう……。』

ヒルダ

「噂をすれば……。」

ヒルダと劍城は通気口の声に耳をすます。

『ごめんなさい……ごめんなさい……エンブリオ様……。』

ヒルダ・劍城

「!!?」

ヒルダと劍城は、思わず自分の耳を疑った。

劍城

「今、確かにエンブリヲ様って……。」

ヒルダ

「ああ、まさか司令……。」

ビー！

『総員に継ぐ！ たった今、パラメイルの救難信号を受信した！ 手の空いている者は救助に協力せよ！』

劍城

「パラメイルの救難信号？」

ヒルダ

「まさか……!？」

T  
o  
B  
e  
C  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
:

## E p. 23 / 時空融合 《前編》

「アウローラ 収容区画」

救難信号を追って向かった先で、ヒルダ達は消息不明になっていたタスクとヴィヴィアンと信助を発見した。だが……。

ジル

「よく救難信号など出せたものだな！お前のせいでアンジュは逃亡し、我々はヴィルキスを失ったんだぞ!!」

ジルはタスクを牢へと放り込み、タスクに自身の怒りをぶつけた。

ジル

「お前がリベルタスを終わらせたんだ！ヴィルキスの騎士であるお前が!!」

タスク



「アンジュは君の道具じゃない！」

ジル

「黙れ！」

ドカッ！

ジルはタスクの顔を殴り、タスクはふらつきベッドに倒れた。

ジル

「ヴィルキスが無ければエンブリヲは倒せない。それを教えてくれたのはお前の父親だった。それを台無しにするとは、大した孝行息子だなお前は!!」

牢の外にいるメールライダー達とジャスミン・マギー・メイ、隣の牢のヴィヴィアンと信助はただ見ているだけだった。

ヒルダ

「まだ終わってませんかよ？アンジュを助け出すべきです。」

ヒルダが口を挟む。

ジル

「逃げ回るだけで手一杯の戦力ですか？」

ヒルダ

「まだ見つかってない明日人達と合流出来れば、大きな戦力アップになるはずですよ。」

ジル

「確かに。だが助け出したところで無駄だ。奴はもう、私の命令には従わん。」

「進路をアルゼナルへ。今後の作戦は補給後に通達する。」

ヒルダ

「……。」



くミスルギ皇国 サリアの部屋く

翌日、ミスルギ皇国の皇宮にあるサリアの部屋では、エンブリヲはサリアにある事を話した。

サリア

「アンジュと天馬をダイヤモンド・ローズ騎士団に!？」

エンブリヲ

「アンジュはラグナメイルを操れる。世界を変えるのに必要な人材だ。それに天馬と天馬のパラメイルも、ラグナメイルに劣るが強力な戦力となる。」

サリア

「ダメです!アンジュも天馬も、エンブリヲ様に従いません!それどころか・・・。」

エンブリヲ

「嫉妬してるのかい?」

エンブリヲはフツと笑いサリアに問う。

サリア

「えっ？いい、いえ、そんな・・・。」

エンブリヲ

「心配する事は無い。二人はただ道具として必要なだけだ。一番大切なのは君だよ、サリア。」

—————

〈廊下〉

その後、サリアは1人廊下を歩いていった。

サリア

「エンブリヲ様・・・。」

すると・・・。

「あれ？サリアさん。」

T字路の影からアンジユ・天馬・モモカが現れた。サリアは通路の真ん中に立ち道を塞ぐ。

アンジユ

「通してくれる?」

アンジユと天馬はサリアにあるものを見せる。エンブリヲからの招待状だ。

サリア

「帰ってきてくれる?」

サリアはナイフを手取る。

アンジユ

「勝手な事したら、ご主人様に叱られるわよ?」

サリア

「だったら断つて！エンブリヲ様に何を言われても！」

サリアは3人を睨むが、アンジユと天馬は笑顔を見せた。

天馬

「御心配無く。間違つても俺達は”マッドローグ”騎士団に入る気は全く無いので。」

天馬がそう言うと、アンジユ・天馬・モモカはサリアの横を素通りしその場を後にした。

サリア

「ダイヤモンド・ローズ騎士団よ……。」

〱 図書室 〱

図書室に着くと、エンブリヲはアンジユと天馬に紅茶を入れた。

アンジユ

「・・・ふーん、ダージリンのセカンドフラッシュユね。」

天馬

「えっ？匂いで分かるんですか？」

アンジユ

「まあね。皇室に居た頃は色んな紅茶を飲んできたから。」

アンジユと天馬はティーカップを手に取り、紅茶を飲む。

アンジユ

「美味しい・・・とても言うと思った？」

エンブリヲ

「ん？」

アンジユ

「確かに紅茶選びのセンスは良いわ。でも入れるのはイマイチね。モモカの入れてくれ

た紅茶の方が何百倍も美味しいわ。」

モモカはアンジュに褒めてもらい微笑み、エンブリヲは悔しいのか少し表情が険しくなった。

天馬

「・・・それで、俺達をここに呼んだのは紅茶の自慢のためですか？”エンジンブロス”。」

エンブリヲ

「エンブリヲだ。まあいい。」

エンブリヲは渋々ティーセットを片付けた。だが、四人は窓の外からサリアが様子を伺っているのに気づいていない。

エンブリヲ

「・・・では率直に言わせてもらおう。」

エンブリヲはアンジュに目を向け、優しい表情を見せた。



「エンブリヲ  
アンジユ・  
・  
。」

君を我が妻に迎えたい。」

アンジユ

「はあっ!？」

天馬・モモカ

「ええっ!？」

サリア

「っ!？」

エンブリヲの思わぬ発言に、アンジユ・天馬・モモカ、さらに窓の外のサリアは仰天した。

エンブリヲ

「君は私がこれまで出会ってきた誰よりも、強く賢く美しい。新世界の女神、我が妻に相応しき存在だ。私は、妻の望みを叶えてあげたいと思っっている。」

天馬

「妻・・・アンジユさんの望み？」

エンブリヲ

「君はこの世界を壊すと言ったね？」

アンジユ

「えっ？ええ・・・。」

エンブリヲ

「実は私も同じ意見だったんだよ。」

エンブリヲの発言に、アンジユと天馬は驚いた。

エンブリヲ

「旧世界の人間達は野蛮で好戦的でね、足りなければ奪い合い満たされなければ怒る、まるで獣の様だった。彼らを滅亡から救うには、人間そのものを作り替えるしか無い。そこで私はこの世界を作ったんだ。高度情報ネットワークで結ばれた賢い人類と、光に満たされ物に溢れた世界をね。だが、今度は墮落した。与えられることに慣れ、自ら考えることを放棄してしまったんだ。君達も見ただろ？誰かに命じられれば簡単に差別し虐殺する、彼らの本性を。」

アンジュ・天馬・モモカ

「……」

アンジュ・天馬・モモカの脳裏に、以前の断罪の儀の時の光景が浮かんだ。

エンブリヲ

「人間は邪悪で愚かなまま、何も変わっていない。だがアンジュ、私達の生み出す人類ならば、きつと良きものとなるはずだ。」

アンジュ

「でも、世界を壊すってどうやるの?」

天馬

「なるほど、そのための時空融合ってことか。永遠語りでラグナメイルの力を増大させ、そのラグナメイルをアウラのエネルギーと組み合わせ、俺達のこの地球とドラゴン達の地球を融合させて、人類を抹消してゼロからやり直す。そして……。」

天馬はエンブリヲに目を向ける。

天馬

「エンブリヲとアンジユさんが、新世界のアダムとイヴとなる。」

エンブリヲ

「鋭いな。その通りだよ。」

エンブリヲはフツと笑い眩くと、アンジユにゆっくりと近づき眩いた。

エンブリヲ

「どうかなアンジユ、協力してくれるかな？」

アンジユ

「・・・新世界ねえ。」

ガシツ！

エンブリヲ

「っ!？」

グサツ！

エンブリヲ

「グッ!?!」

天馬・モモカ

「っ!!」

アンジユはエンブリヲの左手首を掴むと、左手をテーブルに押し付け手の甲にナイフを深く突き刺した。

アンジユ

「この世界に未練は無いわ。でも調律者さん、あなたの妻になるなんて死んでも御免よ！」

エンブリヲ

「ま、待て！」

グサツ！

アンジュはエンブリヲの首の付け根にナイフを突き刺した。エンブリヲは刺された部分から大量の血を吹き出し、そして意識を失った。

モモカ

「アンジュリーゼ様……。」

モモカはアンジュの突然の行動に啞然とした。

天馬

「……アンジュさん、今のうちに。」

アンジュ

「えええ！」

天馬・アンジュ・モモカは急いで図書室から離れようとする。だが……。

ガシッ！

天馬

「なにつ!？」

突然、天馬とアンジユの背後に謎の黒い人影が現れ二人を拘束した。

アンジユ

「・・・ねえこれ、もしかして。」

天馬

「仮面・・・ライダー?！」

二人を拘束したのは、共通の黒いアーマーと黒い腰マント、さらに妙なベルトを装着した仮面の戦士。だがアンジユ側の戦士は額に海賊のようなドクロがあり首に銀のマフラーのようなものを巻き、天馬側の戦士は額にドクロが無く首に赤いマフラーのようなものを巻き、左腕の肘から先が義手になっていた。

エンブリヲ



「どうかな、私の忠実な僕《仮面ライダー幽汽スカルフォーム》と《仮面ライダー幽汽ハイジャックフォーム》は？」

二人の目の前には、先ほどアンジユが倒した筈のエンブリヲがいた。

エンブリヲ

「しかし、血の気の多いことだ。だがそれでこそ妻にし甲斐がある。」

天馬

「アンジユさんを妻にさせるもんか！」

天馬は幽汽ハイジャックフォームを振り払い、霊汽ハイジャックフォームとアンジユを拘束する幽汽スカルフォームを蹴り倒した。

アンジユ

「ありがとう！」

エンブリヲ

「ほう、中々やるな。ではこれならどうだ？」

パチン！

エンブリヲは指を鳴らす。

天馬・アンジユ

「っ!?うわああああ!!」

すると突然、天馬とアンジユの全身に激痛が走った。

モモカ

「アンジュリーゼ様！天馬さん！」

天馬は激痛のあまり倒れ、アンジユはのたうち回る。

エンブリヲ

「流石にこれには君達でも敵わないか。」

天馬

「グッ・・・いつたい、何をした!？」

エンブリヲ

「君達二人の痛覚を50倍に引き上げた。・・・ではこれならどうだ?」

パチン!

アンジユ

「っ!？」

エンブリヲはもう一度指を鳴らす。すると、アンジユの様子が変わった。顔が赤く染まり、息が荒くなり、自分の胸や股間に手を当てていた。

アンジユ

「あ・・・あ・・・。」

モモカ

「アンジュリーゼ様!？」

エンブリヲ

「痛覚を全て快感に変換した。君を操るなど簡単なのだよ、アンジュ。」

モモカ

「姫様と天馬さんを元に戻してください！今すぐ！」

シュン…

モモカ

「えっ?」

エンブリヲ・天馬・アンジュはその場から一瞬で消えた。

モモカ

「ひ、姫様?!天馬さん!?!」



「アウローラ 居住区」

一方、深海に停滞中のアウローラ内では、ヒルダ・ロザリー・劍城・神童・霧野が話をしていた。

ヒルダ

「司令が助けに行かないってんなら、アタシ達でアンジュと天馬を助けに行こうぜ！」

霧野

「でもどうするんです？司令がこの艦を仕切ってる以上、海上へ上がるのは無理ですよ？」

劍城

「だったら方法の一つ。俺達の誰かが司令の座を奪えばいいんですよ。」

神童

「司令の座を奪うだど!？」

ヒルダ

「アタシと劍城は、アンジュと天馬と約束したんだ。みんなでこの世界をぶつ潰そうつてさ。だから、その約束を果たすためにも、アンジュと天馬は助け出さねえと……。」

ヒルダの発言に黙り混む一同。すると……。

ロザリー

「……ヒルダ、マジでアンジュのこと好きなんだな？」

ヒルダ

「えっ?!」

ロザリーが突然、思いもよらぬことを呟いた。ヒルダはそれを聞いて頬を赤くした。

ロザリー

「分かるよ、アイツとは長い付き合いだもんな。アタシもさ、クリスがいないとダメみた  
いなんだ。アイツいつもビビってるからさ、アタシと一緒に居てやらねえとなつて思っ  
てただけど、違つた。アイツはアタシなんかいなくても全然強くて、全然平気で、な  
のにアタシは相変わらずへタレでさ……。」

ロザリーは話ながら、涙を浮かべていた。

ロザリー

「クリスがいないとダメなのは、アタシの方だったんだ……。」

ロザリーの話を聞いて静まる一同。

「だったら、取り戻すしか無いな。アンジユも天馬も、そしてクリスマスも。」

そこへ、ゾーラがココとミランダを連れて現れた。

ゾーラ

「話は聞いた。アタシらも手を貸そう。アンジユと天馬にはデカイ借りがあるからね。」

ロザリー

「ゾーラ姐様。」

ココ

「……でも、私達はこれからどうすれば?」

ミランダ

「司令じやなきや、この艦を動かせないし……。」

ヒルダ

「先ずはタスクとヴィヴィアンと信助を収容区画から出す。司令の座を奪うのはそれからだ。」

ビー！ビー！

突然、アウローラ内に警報が鳴り響き、通路の隔壁が次々と閉じていった。

神童

「何だ？緊急事態か？」

ヒルダ

「いや違う。多分司令の仕業だね。」

ロザリー

「どうする？これじゃ居住区から出られないぜ？」

「だったら、俺達にも手伝わせてくれよ。」



突然、ヒルダの後方から男の声がした。振り向くとそこには、収容区画に監禁されてる筈のタスク・ヴィヴィアン・信助がいた。

ヒルダ

「タスク！それにヴィヴィアンに信助まで！」

タスク

「話は全部聞いた。この騒動もアレクトラの仕業と考えて間違い無いと思う。」

ロザリー

「それよりお前ら、どうやって牢屋から出たんだ!？」

信助

「あの人が、僕たちを牢屋から出してくれたんです。」

信助の後方には、首に掛けたトイカメラのフリンダーを覗く一人の男がいた。

タスク

「紹介するよ、彼は門矢司。又の名を通りすがりの仮面ライダー、デイケイドだ。」

司

「よろしくな、お嬢さん方。」

カチヤ

# E p. 23 / 時空融合《後編》

「アウローラ 格納庫」

艦内が騒ぎになっている中、パラメール格納庫には黒と赤紫のライダースーツに身を包んだジルの姿があった。

ジル

「……」

ジルは少々ふらつきながら、一緒に格納されたエルシャのハウザーに向かう。

「気合い入れておめかしして、何処に行くんだい？司令。」

ジル

「っ!？」

ジルは自分しか居ない筈の格納庫で誰かの声を聞いた。慌てて辺りを見ると、タスク・ヒルダ・ロザリー・ヴィヴィアン・ゾーラ・ココ・ミランダ・劍城・神童・信助・霧野がハウザーの周囲を取り囲んでいた。

ジル

「お前達……。」

ヒルダ

「エンブリオ様のところでも行くつもり？」

ジル

「っ!？」

ジルはヒルダの発言に驚いた。

ヒルダ

「聞いちゃったんだよ、司令が寝言で魘されてるところ。」

ジル

「そうか、なら……。」

カチツ

「おっと、動くなよっ?」

ジルがホルスターに手を伸ばそうとした途端、後頭部に冷たい鉄の感触、後方から聞き慣れない男の声でした。

ジル

「っ!?!」

ジルは恐る恐る後ろを向く。ここではガンモードに変形させたライドブツカーを右手に構えるデイケイドの姿があつた。

ジル

「お前は……?」

デイケイド

「それ以上動けば、お前さんの頭の上半分が無くなるぞ？」

プシユー

メイ

「よし、開いた！」

隔壁が開き、メイ達整備班とマギー達医療班、さらにジャスミン・バルカン・パメラ・ヒカル・オリビエが格納庫にやって来た。

ジャスミン

「何だいこりや？」

ジャスミン達はデイケイドと格納庫の現状を見て驚いた。

マギー

「あんた、何者だい？」

マギーはデイケイドに問う。

デイケイド

「通りすがりの仮面ライダーだ。覚えておきな。」

マギー

「仮面……？」

メイ

「ライダー？」

聞き慣れない言葉に混乱するマギーとメイ。すると、デイケイドは右手に構えていたライドブツカーを左腰に戻し、デイケイドライダーを転回し変身を解いた。

司

「さ、役者は揃ったことだし、大人しく観念して吐いてもらうぜ？ アンタの知ってる事全部な。」

ジル

「・・・くっ！」



↳皇宮 地下牢↳

その頃、モモカはアンジユと天馬の行方を追って地下牢へと来ていた。

モモカ

「アンジュリーゼ様ー！天馬さんー！どちらですかー！」

モモカは更に奥へと進む。すると・・・。

モモカ

「・・・あれ？」



真つ暗な牢の中で一ヶ所だけ、奥にある牢の灯りが灯っているのに気づいた。

モモカ

「誰か居るのでしょうか？」

モモカは灯りのある牢へと向かう。

モモカ

「・・・っ!？」

牢の中では、リイザが天井から鎖で吊るされ気を失っていた。身体中には鞭で打たれたかの様な無数の傷がある。モモカは急いで牢の扉を開け、リイザを下ろし拘束を解く。そして近くにあった杯に水を注ぎ、リイザに与えた。

リイザ

「・・・ん。」

リイザは直ぐに目を覚まし、モモカは安心した。

モモカ

「気が付きましたか？」

リイザ

「・・・何故だ？何故助けた？」

モモカ

「・・・ジュリオ様とアンジュリーゼ様とを貶めた事は、決して忘れません。ですから、アンジュリーゼ様に謝ってください。それまでは絶対に死んではダメです。」

リイザ

「・・・皇宮西側の地下、皇族専用シエルター。恐らく、二人はそこに居る。」

モモカ

「えっ？」



くアウローラ 司令室く

その頃、アウローラではジルへの尋問が行われようとしていた。ジルは手錠で左腕とベッドの手すりを繋がれ拘束されている。

ジル

「私はエンブリヲの人形だった。奴に心を支配され、全てを奪われたんだ。誇りも使命も純潔も……。」

タスク

「……。」

ジル

「怖かったよ。リベルタスの大義、ノーマ解放の使命、仲間との絆……それが全て奴への愛情、理想、快楽に飲み込まれてしまったんだ……。」

劍城

「その事を、話さなかったのか？」

ジル

「フツ……エンブリヲを殺しに行ったが、逆に身も心も奪われましたなんて、話せると思うか？」

全部私のせいさ。リベルタスの失敗も、仲間の死も……こんな汚れた女を助けるために、みんな死んだんだ！だから私に出来る弔いは一つ、この手でエンブリオを殺すだけ。」

タスク

「だから、一人で行こうとしたのか？」

ジル

「ああ、今頃奴は新しい玩具に御執心だろう。奴を殺すのは今しか無いと思ったんだ。まあ、それもお前達のせいで無駄になったがな。」

ジルは静かに笑いながらヒルダ達を見た。だがその笑顔はヒルダ達には寂しそうにも、悲しそうにも見えた。

マギー

「……ジル、いやアレクトラ。」

ジル

「？」

ジルはマギーに呼ばれ振り向く。

パシンツ！

一同

「っ!？」

次の瞬間、マギーはジルの左頬をひっぱたいた。

マギー

「アタシは、アンタだから……アンタのダチだから、何時までも一緒に戦ってきたんだ。なのに、ずっと利用されていただなんて……。」

ジャスミン

「ジル、悪いが真実を知っちゃった以上、アンタをボスにしちゃおけない。」

ジル

「分かっている……。」

ジルは静かに呟くと、ヒルダに目を向けた。

ジル

「ヒルダ、指揮権をお前に預ける。今後はお前が司令官だ。お前なら、間違える事は無いだろう……。」

ヒルダ

「イエス・マム！」



く 皇宮 皇族専用シエルターく

その頃、エンブリヲと共に消えたアンジュと天馬は、皇族専用シエルターにいた。だが、アンジュはエンブリヲから幾度となく感覚変換の拷問を受け続け、心身共に既にボロボロだった。

エンブリヲ

「美しい者が苦しみ、強いたげられ、絶望する姿を見るのは実に楽しい。」

エンブリヲは床に倒れるアンジユに近づき、優しく問いかけた。

エンブリヲ

「そろそろ、素直になれたかな？」

アンジユ

「ハア・・・はい・・・エンブリヲ・・・さ・・・。」

天馬

「ダメだアンジユさん!!」

アンジユ

「っ!？」

天馬の声で正気を取り戻した。天馬は柱に鎖でぐるぐる巻きに拘束されている。

天馬

「エンブリヲの言いなりになっちゃダメだ！」

アンジュ

「そ、そうよ！誰がアンタみたいなクス野郎なんかに・・・！」

エンブリヲ

「全く・・・。」

パチンツ

エンブリヲは呆れた顔で指を鳴らす。すると、アンジュの身体を激しい暑さが、天馬の身体を激しい痛みが襲った。

アンジュ

「いやあああああ!!」

天馬

「ぐああああああ!!」

アンジュは暑さに耐えきれず、身に纏っていたドレスと下着全てを脱ぎ捨てた。



エンブリヲ

「君も中々しぶといな。今の君の痛覚は通常の百倍。君を拘束するその鎖も、今の君にとっては身体中に突き刺さる刃そのものだ。並みの人間が耐えられるレベルではない。」

天馬

「俺は、アンジュさんを守るために戦うって決めたんだ！アンジュさんを守るためなら、この程度の痛み、どうってこと無い！」

エンブリヲ

「ほう、ではこれでどうか？」

パチンツ！

エンブリヲは更に指を鳴らす。

天馬

「つ!?ぐあああああ!!」

その直後、天馬の身体を更に激しい痛みが襲った。

エンブリヲ

「痛覚を更に百倍に上げた。これ程の痛み、耐えられるかな？」

エンブリヲはそう言うと、再びアンジュに目を向けた。だが……。

天馬

「放セ……！」

エンブリヲ

「ん？」

突然、エンブリヲは天馬から今まで感じたことの無い力を感じ取った。天馬の瞳は赤く染まり、身体中から赤いオーラが出ていた。

エンブリヲ

「これは・・・!?!」

天馬

「アンジュさんを放せ、エンブリヲ!!」

バキーン!!

天馬は自身を拘束していた鎖を意図も簡単に引きちぎり、引きちぎったと同時に部屋一帯に衝撃波を放った。

ドーン!

エンブリヲ

「なにっ!？」

バンツ!

エンブリヲは衝撃波で吹き飛ばされて倒れ、アンジユは身体中の感覚が全て元に戻った。

アンジユ

「天・・・馬?」

エンブリヲ

「くっ・・・!」

ガチャ! バタン!

エンブリヲは立ち上がり、逃げるように部屋から脱出した。

天馬

「待てっグツ!？」

天馬がエンブリヲを追おうとした途端、天馬はアンジユの目の前に倒れた。目は元の青に戻り、赤いオーラも消えた。

アンジユ

「天馬!？」

天馬

「大丈夫です・・・それより、急いでここから出ないと・・・。」

天馬はゆっくりと立ち上がり、エンブリヲが出ていった扉を目指す。

ガチャ

だがドアノブに触れようとした途端、ドアが開き、見慣れた藍色の髪の少女が現れた。

天馬

「サリア・・・さん？」

サリア

「退いて。」

サリアは天馬を押し退け、アンジユを見下ろした。その顔は険しかったが、少し悲しんでいる様にも見えた。

サリア

「・・・無様ね。エンブリヲ様に齒向かうからよ、バカ。」

アンジユ

「バカは・・・そつちでしょ？あんなゲス野郎に心酔しちやって・・・。」

サリア

「私にはもう、あの人しか居ない。でもアンジユ、アンタは違う。ヴィルキスも、仲間も、自分の居場所も、何だつてある。変身なんてする必要も無い。」

アンジユ

「サリア？」

サリア

「出ていきなさい、エンブリヲ様が戻ってくる前に。このまま抵抗を続けければ、そのうち心を壊されるわ。」

天馬

「サリアさん、貴女……！」

サリア

「勘違いしないで。私はただ、これ以上アンジユに何かを奪われるのと、アンタ達の無様な姿を見るのが嫌なだけだから。」

サリアはそう言うと、小さなピンク色のカプセルと、折り畳まれた黒い布を投げ捨て静かに部屋から去っていった。

アンジユ

「これは……？」

アンジユはカプセルを拾い、カプセルを開けた。

アンジユ

「っ!!」

カプセルの中には、アンジユが大切にしていた指輪が入っていた。そして黒い布の正体は、ダイヤモンド・ローズ騎士団の予備の制服だった。

天馬

「……ありがとうございます、サリア隊長。」

アンジユは制服を身に纏い指輪を左手中指に通し、天馬の肩を貸り共に部屋を出た。

天馬

「大丈夫ですか？」

アンジユ

「ええ、ちよつと胸がキツイけど、大丈夫……。」

そして通路を少し進んだところで……。



モモカ

「アンジュリーゼ様！」

アンジュ

「モモカ！」

天馬

「モモカさん！」

二人はモモカと合流した。



く 暁ノ御柱 最深部く

一方、エンブリヲはヴィルキスを含めたラグナメール7機とアウラを使い、時空融合の準備を進めていた。

エンブリヲ

「・・・準備が整った。総員ラグナメイルに騎乗！暁ノ御柱を守れ！」

ダイヤモンド・ローズ騎士団

「イエス・マスター！」

サリアを除くダイヤモンド・ローズ騎士団四人は各々のラグナメイルに向かった。

エンブリヲ

「・・・ん？」

エンブリヲはふと監視カメラの映像を見る。そこには先程アンジュと天馬が居た部屋の様子が映っていたが、既にもぬけの殻と化していた。

エンブリヲ

「逃げたか。だが逃がさんぞ、アンジュ。」

To Be Continued...

# E p. 24 / 対決!創造主 v s 破壊者 《前編》

「アウローラ 格納庫」

アンジュ達が皇宮からの脱出を始めた頃、アウローラではアンジュとヴィルキス奪還に向けて、パラメールの発艦準備が行われていた。

ロザリー

「ミスルギ皇国に突っ込むだつて!?!」

タスク

「人間の世界の防衛は全て、エンブリヲ任せだ。大した防空兵器は存在しないから、突入自体は難しくくない。」

ヒルダ

「となると、問題はエンブリヲとサリア達か・・・よし、じゃあ作戦を伝える!先ずアタシとロザリー、劍城、神童、霧野が先行してミスルギ皇国に侵入し、サリア達に陽動を掛ける。」

劍城・神童・霧野

「了解！」

ロザリー

「お、おう！」

ヒルダ

「その隙にヴィヴィアンと信助は、別方向から皇国中枢を強襲し、アンジユ達とヴィルキスの居場所を突き止める。信助はヴィヴィアンがアンジユを探してる間、ヴィヴィアンの護衛だ。」

ヴィヴィアン・信助

「了解！」

ココ

「でも、どうやってアンジユ様を探すんですか？」

ヴィヴィアン

「簡単だよ！匂いで探すの！」

ミランダ

「えっ!?!じよ、冗談でしょ・・・!?!」

信助

「大丈夫! ヴィヴィアンさんの鼻は鋭いんですから!」

ヒルダ

「そしてタスク、アンタはアンジュの位置を特定次第、デイケイドと共に超低空から侵入しアンジュを強奪。ヴィルキスに乗せてミスルギ皇国から脱出しろ!」

タスク

「分かった!」

司

「よし・・・!」

ヒルダ

「ゾーラ、ココ、ミランダ、ノンナ、マリカ、メアリーは国境付近上空で待機。アンジュの脱出を援護しろ!」

ノンナ・マリカ・メアリー

「い、イエス・マム!」

ノンナ達三人は少々緊張してる様だ。

ゾーラ

「おいおいどうした新兵？もしかして緊張してんのかい？」

ノンナ

「だ、だって…」

マリカ

「に、人間の世界を飛ぶなんて…」

メアリー

「は、初めてですから…」

ココ

「大丈夫です。私達がついてますから！」

ミランダ

「アンジュを守って、一緒に帰ろう！」

—————

くミスルギ皇国近海く

ザバーン!

アウローラが海面に姿を現し、格納庫のハッチが開いた。

司

「よし、じゃあ俺も準備すつか。」

司はデイケイドライダーを腰に装着し、デイケイドのライダーカードをセットした。

《KAMEN RIDE 『DECADE』!》

司

「変身!」

司の周囲に十体の残像が現れ、残像は司に集まる。そして、司は仮面ライダーデイケイドへと姿を変えた。デイケイドはタスクのエアバイクの後ろに乗り込んだ。

デイケイド

「隊長、いつでもOKだ！」

ヒルダ

「よし、ヒルダ隊出撃！アンジュとヴィルキス奪還作戦開始だ！」

ヒルダは新たなパラメイル、《アーキバス・ヒルダカスタム》と共に発艦。それに続くようにパラメイル隊各機は順に発艦。アンジュとヴィルキスを取り戻すため、ミスルギ皇国へと飛び立った。



く 皇宮 庭園く

その頃、アンジュは天馬とモモカの肩を借り共に庭園へと出た。

『何処へ行くの？アンジュちゃん、天馬君。』



突然、上空から聞き慣れた声がした。上を見ると、黒いラグナメールが2機飛行していた。

天馬

「レイジアとテオドーラ・・・エルシャさんとクリスさんか!」

クリス

「エンブリヲ君が探してるよ。一緒に戻る?」

天馬

「仕方ない。アンジュさん、俺の背中に!」

アンジュ

「え、ええ・・・」

天馬はアンジュを背中に背負い、モモカと共に走り出した。

エルシャ

「あらあら、仕方ないわね。」

エルシヤは三人の後方へと移り、ライフルの照準を合わせる。すると、次の瞬間……。  
キイイイイイインツ！

アンジユの指輪が強く光り出し、三人の正面にヴィルキス、後方にペガサスが現れた。

エルシヤ

「ヴィルキス!？」

クリス

「それにペガサスまで!？」

ヴィルキスとペガサスはフライトモードに変形し、アンジユとモモカはヴィルキスに、天馬はペガサスに急いで乗り込む。

アンジユ

「モモカ、天馬、行くわよ！」

モモカ

「はい!」

天馬

「了解!」

そして直ぐさまエンジンを吹かし上空へと逃げた。

エルシャ

「クリスちゃん。」

クリス

「分かってる。逃がさないよ!」

エルシャのレイジア、クリスのテオドーラ、そして合流したヴィクトリアとエイレーネはヴィルキスとペガサスの後を追う。

ゴゴゴゴゴゴ・・・!

突然、雷鳴と共に上空に巨大なシンギュラーが現れた。

アンジユ

「シンギュラー？何で？」

『遅くなりました、アンジユ。』

アンジユ

「っ!？」

シンギュラーの向こうから、聞き覚えのある声と共に見覚えのある3つの機体が姿を見せた。アンジユと天馬はそれを見て驚いた。

天馬

「焰龍號に蒼龍號に碧龍號・・・サラマンディーネさん達ですか!？」

焰龍號達はアサルトモードに変形し、レイジア達の前に立ち塞がる。そして、ヴィルキスのコックピットのディスプレイにサラマンディーネの姿が映し出された。

サラマンディーネ

『お久しぶりです、アンジユ。』

アンジユ

「サラ子？ ホントにサラ子なの!？」

モモカ

「お知り合いですか？」

サラマンディーネ

『あの時の借りを返す時が来ました。ここは私達が引き受けます。御二人はその隙に

！』

アンジユ

「・・・じゃあ、お言葉に甘えさせてもらおうわ！ 天馬！」

天馬

「はい！」

ウイルキスとペガサスはエンジンの出力を上げ、その場から急いで離脱した。レイジア達はアサルトモードに変形し、焰龍號達と対峙する。

サラマンディーネ

「二人とも、準備はよろしくして?」

カナメ・ナーガ

「はい、サラマンディーネ様!」

サラマンディーネ

「では参ります。通して頂きましょう、アウラのもとに!」



くミスルギ皇国 上空く

一方、ミスルギ皇国上空に到着したヒルダ達は、到着と同時に既に戦闘が開始されている事態を知った。

ロザリー

「おいヒルダ、もう戦闘が始まってるぞ!」



『タスク、聞こえるか？ アンジュはもう皇宮には居ないらしい。』  
タスク

「何だって!?!」

ヒルダ

『作戦変更だ。これより追跡に移る!』

タスク

「分かった!」



くミスルギ皇国 上空く

一方、アンジュ達は・・・。

アンジュ

「モモカ、追っ手は?」

モモカ



「今のところは……。」

天馬

「アンジュさん!前方から複数の機影が!」

天馬は前方からやって来る機影に気付いた。

アンジュ

「あれって、もしかして!?!」

機影を見たアンジュは、驚いて目を見開いた。前方からやって来る機影は、ヒルダ隊のパラメイルだった。

アンジュ

「ヒルダ!みんな!」

ヴィヴィアン

「アンジュと天馬いたー!」

ロザリー

「スツゲー、マジで居たよ！」

信助

「だから言ったでしょ？ ヴィヴィアンさんの鼻は鋭いつて！」

バシユーン！

だが喜んだのも束の間。突然、ヴィルキスの遙か後方から緑色のビームが放たれた。

神童

「っ!? 天馬、アンジユさん後ろ！」

アンジユ・天馬

「えっ?」

ドカーン！

天馬

「どわっ!？」

ガンッ！ ヒュウッ…

アンジユ

「ウソ!？」

ビームがペガサスの左翼に命中し、左翼の3分の1を破壊。さらに左翼の破片がヴィルキスのボディに当たり、その衝撃でヴィルキスは機能を停止した。ヴィルキスは推力を失い、急降下を始めた。

アンジユ・モモカ

「うわあああああ!!」

天馬

「アンジユさん!」

天馬はペガサスを操作し、ヴィルキスの下へと回り込みヴィルキスを受け止める。

天馬

「くっそおおおお!!」

ザバーン!

だが降下の勢いに押され、ヴィルキスと共に川に落ちた。

ヒルダ・ロザリー・ヴィヴィアン

「アンジュ!」

劍城・神童・信助・霧野

「天馬!」

『退いて。』

通信機からクリスの声がする。辺りを見ると、前方からクリスのテオドーラが接近して来ていた。

クリス

「アンジユは、連れて帰るから。」

ヒルダ

「アンジユは私が貰つてく。邪魔すんな！」

クリス

「へえ、助けに来たんだ・・・私のことは、見捨てたくせに！」

バキューン！ バキューン！

テオドーラはライフルを装備し、ヒルダ隊に向けてビームを連続発射。

神童

「避ける！」

ヒルダ隊は散開しビームを避ける。

ヴィヴィアン

「ぬおおおおお!?」

ロザリー

「ま、待てよクリス！」

信助

「はああああああ!!」

信助のタイタニアスはアサルトモードに変形し、全面にシールドを展開。テオドーラにタツクルを仕掛ける。

信助

「タイタニアスタツクル!!」

ビュン!

クリス

「邪魔しないでよ!」

ガンツ!

だが、テオドーラはタイタニアスのタックルをかわし、直後タイタニアスの背面に後ろ蹴りを叩き込んだ。

信助

「うわあああああ!?!」

ドーン!

タイタニアスはバランスを失い、皇宮の裏庭へ墜落した。

霧野

「信助!?!」

ヒルダ

「邪魔してんのはお前だろ!」

ヒルダはアーキバスをアサルトモードに変形させ、アーキバスの左手に剣を装備し、テオドーラに急速接近。テオドーラも左手に剣を装備し、アーキバスと激しく剣をぶつめた。

ヒルダ

「あんた、アタシに勝てると思ってるの？」

クリス

「変わんないね、そういうところ。私のことなんて、弱くて使えないゴミ人形くらいにしか思ってないんでしょ？でもね、私は変わったんだ！」

ガンツ！

テオドーラはアーキバスの腹部にキックを叩き込み、アーキバスを蹴り飛ばした。

ヒルダ

「どわああああ!?!」



劍城

「ヒルダさん!」

劍城はランスロットを操作し、ヒルダのアーキバスを受け止めた。

劍城

「大丈夫ですか!？」

ヒルダ

「ああ、サンキュ。」

クリス

「これ以上邪魔をするなら、本当に殺すよ?」

ロザリー

「クリス・・・!」

ヴィヴィアン

「ひひひひひひっ!」

クリスの放った言葉にロザリーは動揺し、ヴィヴィアンは怯えた。だが、この言葉がヒルダの闘争心に火を付けた。

ヒルダ

「へっ！殺れるもんなら殺ってみな!!」



く河川敷く

一方、ヴィルキスが落ちた川の河川敷にはアサルトモードのペガサスの現があった。

天馬

「ふう、助かった。二人とも大丈夫ですか?」

モモカ

「ええ、何とか…」

アンジユ

「私も大丈夫。でもヴィルキスが……。」

ペガサスのコックピットには天馬の他に、アンジユとモモカもいた。だが肝心のヴィルキスは水没し、川に沈んでしまった。

天馬

「参ったなあ。水没したせいでエンジンと通信機がダメになってる！これじゃ飛べないよ……。」

モモカ

「これからどうしましょう?」

アンジユ

「取り敢えず、海に向かいましょ。ヒルダ達が来たって事は、アウローラが近くまで来る筈よ。」

天馬

「分かりました。えーっと、海はあっちか。」

天馬はコックピット内のコンパスで方角を確認し、三人を乗せたペガサスは海へと歩き始めた。



く 皇宮 裏庭く

その頃、皇宮裏庭に墜落した信助とタイタニアスは……。

信助

「いつてって……墜落しちゃったよ。何処だろうここ？」

信助はコックピットのハッチを開けて辺りを見る。すると、タイタニアスの周りをエンプリヲ幼稚園の子供達を取り囲んでいた。子供達の手にはモップやバケツ、フライパンやお玉等が握られていた。

少女

「悪者を追い出すよ!みんなかかれー!」

「やああああああ!」

一人の少女を筆頭に、子供達は手持ちの道具でタイタニアスを叩きまくる。

信助

「えーっと、誰か説明してくれませんか?」

バキューン! ドーン!

突然、皇宮の屋根にラグナメールの放ったビームの流れ弾が命中。瓦などが瓦礫となつて降ってきた。

「きゃあああああ!?!」

信助

「つ!!危ない!」

信助はタイタニアスを操り、自身と子供達の周りにドーム状のバリアを展開。バリアは瓦礫を防ぎ子供達とタイタニアスを守った。

少女

「お、お兄ちゃん?悪いやつじゃないの?」

信助

「今はそんなこと言ってる場合じゃないよ!」

タイタニアスのバリアの周囲には、瓦礫やラグナメールの放ったビームの流れ弾が次々と降ってくる。

信助

「堪えてよ、タイタニアス!」



く河川敷く

一方、タスクとデイケイドはヴィルキス墜落の報告を受け、墜落現場へと来ていた。

タスク

「アンジューー!天馬くーん!」

タスクはアンジューと天馬を大声で呼ぶが応答が無い。すると・・・

デイケイド

「おいタスク!」

デイケイドが何かを発見した。

タスク

「どうしたの?」

ディケイド

「これを見ろ。」

ディケイドは地面のある部分を指差す。そこには大きな足跡が残っていた。

タスク

「パラメイルの足跡だ！」

ディケイド

「ああ、しかもまだ新しい。まだ遠くへは行ってないはずだ。」

タスク

「足跡を辿ってみよう！」



く中心街 メインストリートく

同じ頃、天馬達を乗せたペガサスは中心街を駆け抜けていた。



アンジユ

「この通りを真っ直ぐ行けば、海へと出られるわ!」

天馬

「はい!」

天馬の操るペガサスは、アンジユのナビゲートでメインストリートを走る。すると……。

『逃げられないよ? アンジユ。』

アンジユ・天馬

「っ!」

コックピットの何処かからエンブリヲの声がした。アンジユがコックピット内を見回すと、モモカの目が虚ろになっていた。

『忘れたのかね?』

さらに今度はエンブリヲの姿が映ったマナのディスプレイを呼び出した。

アンジュ

「エンブリヲ！」

エンブリヲ

『この世界の人間達を作ったのが誰なのか？』

ガシツ！

天馬

「ちよ、モモカさん！」

モモカは天馬の左腕を掴み、操縦棺をデタラメに動かす。

ガシヤーン！

ペガサスはその拍子でバランスを失い、前のめりで倒れた。

天馬

「どわっ!!」

アンジュ

「くっ、モモカ!」

バリーン!

アンジュはマナのディスプレイを破壊。すると、モモカが意識を取り戻した。

モモカ

「・・・あれ? 姫様、私は・・・。」

アンジュ

「天馬!」

天馬

「分かっていますよ!」

天馬は急いでペガサスを立ち上がらせる。だが倒れた拍子でコックピットのハッチが壊れ、ハッチが落ちた。そして、外の様子を見て天馬とアンジユは驚いた。

天馬・アンジユ

「なっ!？」

『怪我は無いかい？アンジユ。』

街中の人々が、先程のモモカと同じ状態になっていたのだ。

『帰っておいで、アンジユ。』

天馬

「くそっ、どうすれば……。」

# E p. 24 / 対決!創造主 v s 破壊者 《後編》

↳市街地 上空↳

アンジュ達がメインストリートで足止めを食っている頃、上空ではヒルダ率いるパラメール隊とテオドーラが交戦していた。

ロザリー

「待ってくれクリス!何で私達が殺し合わないといけないんだよ!」

クリス

「私のこと見殺しにしたくせに、よく言うよ。」

劍城

「違う!あの時は俺もヒルダさんもロザリーさんも、みんな助けに行きたくても行けなかったんだ!」

クリス

「助けに行く価値も無いから、でしょ?アンタ達はいつもそうだった。」

クリスはテオドーラをフライトモードに変形させ、ヘルメットを脱ぎ素顔を見せた。

ヒルダ

「クリス？」

劍城

「何のつもりですか？」

クリス

「ヒルダ、ロザリー、これ覚えてる？」

クリスはヒルダ達に自分の後ろ髪を見せた。髪は長く、三つ編みのテールで纏められ、赤い髪止めで止められていた。

クリス

「七年前のフェスタでさ、三人でお小遣い出してプレゼント買って、プレゼント交換したじゃん。で、その時にヒルダから貰ったこの髪止め、一つしか無いからどうしようって

困ってたら、ヒルダが自分と被るからお下げ一つで良いじゃんって言ったじゃん。酷いよね?あの髪型、気に入ってたのにさ……。」

ヒルダ

「はあ?それが今更何だって……。」

クリス

「それだけじゃない。ずっとずっと我慢して、何でも受け入れようとしてた。アンタ達のがままも、自分の立ち位置も、ずっと友達だと思ってたから……。」

ロザリー

「クリス……。」

クリス

「でも、アンタ達に分からないでしょ?人の気持ちも分からない女と、何も考えない馬鹿には。」

でも、エンブリヲ君は違う。エンブリヲ君は私のこと、誉めてくれた。私の気持ち、分かってくれた。私のこと、友達だって言ってくれた。これが、永遠の友情の証。」

クリスは左手の中指にはめた指輪を掲げる。そして、髪止めを外し投げ捨てた。

クリス

「アンタ達は、友達でも何でも無かったんだ!!」

クリスは即座にテオドーラをアサルトモードに変形させ、ロザリー達へと襲い掛かる。



く 国境付近く

その様子は、国境付近にて待機中のゾーラ達のところにも届いていた。

『頼むクリス！アタシの話を聞いてくれ！』

メアリー

「ロザリー御姐様！」



マリカ

「私達も行くこう!」

ノンナ

「ちよつとマリカ!」

ゾーラ

「落ち着け、私達の命令は待機だ。下手に動くのは不味い。」

マリカ

「でも、御姐様が危ない!」

マリカはグレイブのエンジンを吹かし飛び立つ。

ミランダ

「ちよつと、マリカ!」

ココ

「ゾーラ姐様、私達も!」

ゾーラ

「仕方ない・・・いくぞヒヨツ子ども!」

ゾーラ達も飛び立ち、マリカの後を追いかけた。



く 暁ノ御柱く

一方、暁ノ御柱付近のサラマンディーネ達は、アウラを奪還するためレイジア・ヴィクトリア・エイレーネと交戦していたが、レイジア達の攻撃に押され、暁ノ御柱に近づけずにいた。

サラマンディーネ

「やはり今の戦力では……ナーガ、カナメ、一旦引きますよ！」

ナーガ・カナメ

『ええっ!?!』

サラマンディーネの撤退命令に、ナーガとカナメは驚いた。

サラマンディーネ

「現有戦力でのアウラ奪還は不可能です。一度引いて、体勢を立て直します。」

サラマンディーネは暁ノ御柱のある一点に目を向ける。目線の先には、物影に隠れ身体を休めるリイザの姿があった。

サラマンディーネ

「リイザ、聞こえていますか？あなたに何があったのか、今は問いません。ですが、

多くの仲間を死なせたことを悔やんでいるなら、より多くの仲間を救うため、共に戦いなさい。」

リイザ

「サラマンディーネ様……。」

リイザは物影を離れ、翼を広げ飛び立つ準備に入る。だが……。

バーン！

リイザ

「っ!?!」

後方から何者かが発砲し、銃弾がリイザの翼をかすめた。振り向くとそこには、ライフルを構えるシルヴィアの姿があった。

シルヴィア

「大人しく地下牢に戻りなさい!さもないと、エンブリヲ叔父様に折檻して頂きますわよ!」

リイザ

「…哀れな子。ジュリオ…あなたのお兄さんを殺したのは、あの男だというのに…。」  
シルヴィア

「えっ? な、何を…。」

シルヴィアは言い切る前に、リイザは翼を羽ばたかせ飛び立った。そして近くを通り掛かった碧龍號に飛び乗り、サラマンデーネ達はその場から離脱した。

ターニヤ

「くそつ、逃がすか!」

ターニヤのヴィクトリアは後を追おうとするが、レイジアに止められた。

エルシヤ

「深追いはダメよ。．．．ん?」

エルシヤはふと、皇宮の裏庭の光景が目に入った。裏庭は炎に包まれ、その中でタイタニアスがシールドを展開し、子供達を炎から守っていた。

エルシヤ

「アレはタイタニアス．．．信助君? 何で信助君が子供達と一緒に?」



くビル 非常階段く

その頃、メインストリートで足止めを食っていたペガサスは、道沿いのあるビルの非常階段を梯子代わりにしてビルの屋上を目指していた。

モモカ

「あの・・・姫様、私さつき・・・。」

アンジユ

「知らない・・・。」

天馬

「アンジユさん、屋上までもう少しです！」

ガチャ

すると、非常階段の扉が開き、エンブリヲに操られた人々がぞろぞろと出てきた。

『逃げられないよ、アンジユ。』

天馬

「何っ!？」

『懸命な君だ。薄々気付いているのだろうか？ マナを使う人間どもはすべて、私の支配下にあると。』

アンジユ

「っ!？」

『その侍女が近くに居る限り・・・。』

アンジユ

「だから知らないって言ってるでしょ！ 天馬、速く！」

天馬

「はい！」





《ATTACK RIDE 『BLAST』!》

ドドドドドツ!

突然、謎のコールと共に上空から複数のエネルギー弾がエンブリヲと幽汽を襲った。

ドカーン!

エンブリヲ

「ナニっ!?!」

幽汽はエネルギー弾を食らい爆発し消滅。そして、上空に舞った幽汽のベルトとパスをある一人の男がキャッチした。

タスク

「アンジュ!天馬君!」

デイケイド

「おい、お前ら無事か!？」

アンジユ

「タスク！」

天馬

「司さん！」

上空からタスクとデイケイドがエアバイクに乗って現れた。エアバイクはペガサスの直ぐ横に着地し、二人はエアバイクを降り、天馬達もペガサスを降りた。

タスク

「遅くなってゴメン！」

アンジユ

「タスク、無事だったのね!？」

デイケイド

「ようやく会えたぜ、エンブリヲ。」

エンブリヲ

「ほう。貴様が噂の世界の破壊者、仮面ライダーデイケイドか?」

デイケイド

「悪いが俺はこの世界を破壊する。それが俺の、この世界での成すべき事みたいだからな!」

エンブリヲ

「面白い、ならばやってみるがいい。」

エンブリヲはそう言うと、幽汽の着けていたベルトと少し形状の異なる銀のベルトを装着。

デイケイド

「《デンオウベルト》?」

エンブリヲはベルトの赤いボタンを押し、ダークな待機音が流れ始めた直後ベルトにパスを翳す。

エンブリヲ

「変身！」

《《NEGA FROM!》》

パスを翳した途端、赤黒い光の粒子がエンブリヲを包み込み、エンブリヲは黒と銀のライダースーツへと姿を変える。さらにアルファベットのNをモチーフにした模様が描かれた紫色のアーマーと仮面を装備し、エンブリヲは仮面ライダーへと変身した。

アンジユ・天馬・タスク・モモカ・デイケイド

「変身した!？」

???

「《仮面ライダーネガ電王》。一応言っておくが、強さは別格だ。」

タスク

「アンジユ、君達はエアバイクに乗って逃げろ。」

アンジユ

「でも、タスクは？」

タスク

「俺はアイツに用がある。」

タスクは幽汽のベルトを装着し、ベルトにパスを翳した。

タスク

「変身!」

《SKULL FROM!》

パスを翳した途端、黄色い光の粒子がタスクを包み込み、タスクは仮面ライダー幽汽スカルフォームに変身した。

デイケイド

「天馬、お前も行け!」

天馬

「でも、ペガサスはエンジンが・・・!」

デイケイド

「なら俺に任せろ！」

デイケイドはペガサスのボディを思いつきり蹴る。

ガンツ！

キイイイイイイブウオオオオオオン！

その直後、ペガサスのエンジンが息を吹き返した。

デイケイド

「これで飛べる。早く行け！」

天馬

「はいー！」

天馬はペガサスに、アンジュとモモカはエアバイクに乗り込み、急いでその場から飛



さは、彼らの予想を越えていた。

ヴィヴィアン

「くっそお、クリス強い！」

神童

「パラメイル6機が束になっても敵わないとは……。」

霧野

「なんて性能なんだ……。」

ヒルダ

「くそっ……。」

すると、タスクから通信が入った。

タスク

『ヒルダ、アンジュと天馬君を見つけた！』

ヒルダ

「ホントか!? ヴイルキスは？」



タスク

『水没して直ぐには回収出来そうにない!こっちは今手が放せない!二人の保護を!』

ヒルダ

「分かった!」

ヒルダはタスクとの通信を切り、ロザリー達に回線を繋いだ。

ヒルダ

「総員撤退!アンジュと天馬と合流し、アウローラに帰投する!」

ヒルダの指示で、一同は反転しその場を離れる。

クリス

「逃がさないよ!」

クリスはテオドーラを操作し、ヒルダ達を追いかけ照準を合わせる。

ダダダダダダダダダッ！

突然、進行方向から無数の弾丸がテオドーラに襲い掛かってきた。

クリス

「ナニっ!？」

マリカ

「御姐様ああああ!!」

発砲主はマリカの操縦するグレイブだった。

ロザリー

「マリカ!?!何で・・・。」

マリカ

「御姐様の援護に！」

マリカはライフルを撃ちまくり、テオドーラの足止めをする。

クリス

「邪魔!」

テオドーラは左肩の剣に手を伸ばす。

バキューン!

すると、今度は上空からピンクのビームが降ってきた。テオドーラはビームをギリギリで避け上空を見る。

クリス

「アレは・・・!」

上空には、行方不明になっていたガンダムAGE-1FX、ダブルゼータガンダム、ウイングガンダムゼロEW、さらに撤退した筈の焰龍號、蒼龍號、碧龍號の姿があった。

ヒルダ

「明日人！それにあの機体は・・・！」

ヴィヴィアン

「サラサラさん！」

サラマンディーネ

「サラマンディーネです、ヴィヴィアン。」

明日人

「ゴメン！遅くなった！」

ゾーラ

「おいマリカ！ヒルダ！大丈夫か!？」

さらにマリカを追いかけたゾーラ達も合流。

クリス

「チツ、流星にここまで集まられちゃ分が悪い・・・今日はこの辺にしておくよ。」

そう言うところクリスはテオドーラをフライトモードに変形させ、その場から撤退した。

ロザリー

「クリス・・・。」



くビル 屋上く

キーン!キーン!

一方ディケイドとタスクの変身した幽汽は、エンブリヲの変身したネガ電王と激しい戦いを繰り広げていた。

ネガ電王

「ハッ!」

ドカ!

幽汽

「のわっ!?!」

ネガ電王は幽汽を蹴り飛ばし、デイケイドと刃をぶつけつばぜり合いに持ち込んだ。

デイケイド

「ネガだかベガだか知らねえが、声だけじゃなく見た目まで奴そっくりになりやがって  
!」

ネガ電王

「言った筈だ。私の強さは別格だと。」

ネガ電王は左手にパスを持ち、パスをベルトに翳す。

《FULL CAGE!》

ベルトからエネルギーが剣に注がれ、光り輝く刃と化した。

ガキーン!

ネガ電王

「ハアッ!!」

ジャキーン!

デイケイド

「どわあああああああ!?!」

ドーン!

デイケイドは剣を弾かれ、ネガ電王の光り輝く刃の攻撃を食らった。攻撃を食らった拍子でデイケイドは吹き飛ばされ、コンクリートの塀を突き破り屋上から落下した。

幽汽

「ダイケイド！」

ネガ電王

「よそ見をするな！」

ジャキーン！

幽汽

「だああっ!？」

ネガ電王は幽汽に斬撃を与えベルトを破壊。ベルトを破壊された幽汽は変身を解き  
タスクへと戻った。

タスク

「くそっ．．．。」

ネガ電王



「何がアンジユの騎士だ？旧世界の猿ども、テロリストの残党が私に敵うわけ無かろう。無駄な事を……。」

タスク

「無駄じゃないさ……ハイゼルベルグの悪魔、不確定世界の住人！少しでも、お前の足止めが出来るなら……。」

ネガ電王

「ほう、猿も少しは賢くなったと言うわけか。」

カチャ

ネガ電王はベルトを外し、変身を解いた。

エンブリヲ

「だが、所詮は猿……。」

バンツ！

エンブリヲは自身が持っていた拳銃で、自ら自身の頭を撃ち抜き倒れた。

エンブリヲ

「しまった……！」



〈海岸線 上空〉

夕方、天馬とアンジュ達はやっとの思いで海岸線へと辿り着いた。

天馬

「アンジュさん、海です！」

アンジュ

「えええ！」

ガシッ

突然、後ろからモモカがアンジユの右腕を掴み強引にスロットルを操作し始めた。

アンジユ

「モモカ?」

モモカの目は先程と同じ様に虚ろになっていた。モモカの向かう先には海岸線の側の崖に設けられたカフェ。そのカフェのテラスでは、一人の男が優雅に紅茶を飲んでいた。

天馬

「エンブリヲ・・・!」

アンジユ

「・・・!」

-----

くカフェテラスく

アンジュ達は半ば強引にカフェテラスに降り、エンブリヲと対面した。

エンブリヲ

「怒った顔もまた美しいよ、アンジュ。」

アンジュ

「……。」

アンジュはエンブリヲに怒りの眼差しを向けている。

エンブリヲ

「……教えてくれ、君は何故私を拒絶する？そこに居る天馬の影響か？それとも、あのタスクと言う男か？」

シュン！

エンブリヲは突然目の前から消え、アンジユの真後ろに瞬間移動した。

アンジユ

「えっ!?!」

ガシツ!

アンジユ

「グッ!」

エンブリヲはアンジユの腕を掴み、アンジユの動きを封じる。

天馬

「アンジユさん!」

モモカ

「・・・。」

ドカツ!

モモカは天馬に回し蹴りを叩き込み、天馬を蹴り飛ばした。

天馬

「どわっ!？」

アンジユ

「天馬!!」

「アンジユを放せ!」

その直後、カフェの屋根からタスクが姿を見せ、タスクは天馬の直ぐ横に飛び降りた。

天馬

「タスクさん!」

エンブリヲ

「フツ・・・。」

モモカ

「……。」

エンブリヲはモモカを操り、モモカは剣を持つとタスクと天馬に襲い掛かる。

タスク

「モモカ!?!」

シユバババババババツ!

モモカはタスクと天馬に連続突きを繰り出す。タスクと天馬は何とか避けようとするが、徐々に服の袖や頬や腕に切り傷が見え始める。

エンブリヲ

「肉体の限界まで身体能力を高めた。愚かな男の末路を見るがいい。」

アンジユ

「やめて……やめなさいモモカ!」

エンブリヲ

「無駄だよ。創造主の命令には抗えない。」

アンジュ

「違う……モモカは、私の筆頭侍女よ！目を覚まさない、モモカ!!」

モモカ

「……っ！」

アンジュが叫んだ直後、モモカは突如動きを止めた。

天馬・タスク

「っ?」

モモカ

「アンジュリーゼ……様。」

瞳に輝きが戻り、モモカは目を覚ました。

モモカ



「天馬さん、タスクさん、姫様をお願いします。」

天馬

「モモカ・・・さん？」

モモカは剣をエンブリヲに向けて構え、エンブリヲに向かつて走り出す。

モモカ

「逃げてください、姫様！」

アンジユ

「っ!!」

ドンッ!

エンブリヲ

「ぐっ!?!」

アンジユはエンブリヲに頭突きをし、エンブリヲの手を振り払う。

エンブリヲ

「馬鹿な!?!」

バーン!

エンブリヲは拳銃をモモカに向け発砲。銃弾がモモカの胸に撃ち込まれた。

モモカ

「マナの光よ!!」

キイイイイイイイイン!

ガシャーン!

モモカはマナの光を最大展開し、塀の向こうに停車していたトラックを呼び寄せた。

エンブリヲ

「何だと!？」

ガーン!

トラックはモモカとエンブリヲをはね飛ばし、デッキを突き破りモモカとエンブリヲと共に崖の下へと落ちていった。

アンジユ

「モモ・・・カ?！」

ドカーン!

トラックは地面に激突し爆発した。

アンジユ

「モモカあああああ!!！」

天馬

「モモカさん!!」

アンジュと天馬はデツキから崖の下を見下ろす。崖の下は既に日の海と化していた。

天馬

「そんな・・・。」

タスク

「・・・。」

タスクは静かに立ち上がり、アンジュを抱き抱えエアバイクへと向かう。

アンジュ

「待って！モモカが！タスクお願い！」

「いやはや、驚きだよ。」

アンジユ・タスク・天馬

「っ!？」

た。  
いつの間にかデッキには、何事も無かったかの様に銃を構えるエンブリヲの姿があつた。

エンブリヲ

「まさかホームンクルスの中に、私を拒絶する者が居るとは……。」

天馬

「エンブリヲ!」

アンジユ

「よくも……よくもモモカを!」

カチャ

アンジユ

「えっ?」

いつの間にか、タスクの手によってアンジュの腕とエアバイクのハンドルが手錠によつて繋がれていた。タスクはエアバイクの自動操縦をオンにし、ロックを掛けた。

タスク

「ここは俺が引き受ける。君は生きるんだ、アンジュ。」

アンジュ

「タスク・・・ダメよタスク！」

タスク

「大丈夫、必ず戻るから、君のところに・・・。」

タスクはそう告げると、アンジュの手にあるものを握らせ、アンジュの唇に優しくキスをした。

アンジュ

「っ!!」

キイイイイイイ!

エンジンが唸り、アンジユを乗せたエアバイクは飛び立った。

アンジユ

「タスク!」

タスク

「天馬君、アンジユを頼んだ!」

天馬

「タスクさん……御武運を!」

天馬はペガサスに乗り、アンジユの後を追った。そしてペガサスを見送ったタスクは、エンブリヲと対峙した。

エンブリヲ

「下牢が……!」

タスク

「しつこい男は、嫌われるよ。」

カチツ

タスクは手に隠し持っていた赤いスイッチを押した。

ピツ・・・ピツ・・・

エンブリヲ

「お前・・・まさか!？」

ピーツ!

ドカーン!

大爆発が起き、テラスは炎と黒煙に包まれた。



アンジュ

「タスク……!？」

天馬

「タスクさん……そんな……。」

上空のアンジュと天馬は、テラスの爆発を見て言葉を失った。だがそのすぐ後……。

ジジジ……ドカーン!

天馬

「どわっ!？」

アンジュ

「天馬!？」

ペガサスのエンジンが遂に限界を迎え爆発。ペガサスは推進力を失い、海へと急降下を始める。

天馬

「クソ、こんな時に……！畜生……畜生……チツクシヨオオオオオオ!!」

ザバーン！

ドカーン！

天馬とペガサスは海へと落ち、ペガサスは爆発した。

アンジユ

「天馬……ウソでしょ……。」

アンジユは絶望した。タスク、天馬、モモカ、大切な人を一度に三人も失ったのだから。

アンジユ

「ウソ．．．ウソよね？モモカ、タスク、天馬．．．私を．．．一人にしないで．．．うわああああああああ!!」

To Be Continued . . .

Ep. 25 / Stand by Me    〈本当に大切な

もの〉 《前編》

　　〈 皇宮    エンブリヲの部屋〉

　　ヒルダ達の作戦は失敗し、タスク・モモカ・天馬が消息不明となった日の夜、皇宮にあるエンブリヲの部屋では、タスクと共に爆発に巻き込まれた筈のエンブリヲが地下にいるアウラとラグナメールの様子をモニターで見ながら時空融合の準備を進めていた。

　　エンブリヲ

　　「ラグナメールコネクター、パージ。耐圧隔展開。ドラグニウムリアクター、エンゲージ。Dフレーム共振器接続。全出力、供給開始。」

　　ラグナメールの模様が浮かび上がり、暁ノ御柱にエネルギーが送られ、柱の回路が輝き出した。

エンブリヲ

「準備は整った。だがアンジユが居ないとは……。」

エンブリヲはふと、部屋の一角に目を向ける。

エンブリヲ

「サリア、そこに居るのだろ？」

エンブリヲが呼ぶと、カーテンの影からサリアが姿を見せた。だが、サリアの顔は険しかった。

サリア

「お呼びですか？」

エンブリヲ

「何故アンジユを逃がした？嫉妬か？」

サリア

「……。」

サリアはエンブリヲの問いに答えず、黙り混んだ。

サリア

「どうして、アンジュが必要なのですか？」

エンブリヲ

「・・・？」

サリア

「私はずっと、エンブリヲ様に忠誠を誓ってきました。エンブリヲ様の為に戦ってきました！なのに・・・なのにまた、アンジュなのですか？私はもう、用済みなのですか!？」

エンブリヲ

「・・・。」

エンブリヲは立ち上がり、サリアを見る。

エンブリヲ

「私の新世界を作るのは、強く賢い女たちだ。だから私は君達を選んだ。アンジュも同

じ理由だ。だが、愚かな女に用は無い。」

サリア

「っ!!」

エンブリヲ

「アンジュは私を殺すために必ず戻ってくるだろう。サリア、君が私の思う賢く強い女なら、やるべきことはわかるね?」

サリア

「・・・アンジュを捕らえ、服従させます。」

エンブリヲ

「期待しているよ、私のサリア。」

エンブリヲはそう言っつて部屋を離れた。

サリア

「くっ・・・!」



（地下牢）

一方、地下牢にはエルシャとエンブリヲ幼稚園の子供達、そして鉄格子の向こうには信助がいた。

エルシャ

「ごめんね、信助君。子供達を助けてくれたのに、こんなところに入ってもらおう事になっちゃって……。」

信助

「エルシャさん……。」

エルシャ

「でも安心して。エンブリヲさんには私が捕虜として捕らえたって事にしてあるから、直ぐに殺されるって事は無いハズよ。タイタニアスも格納庫にちゃんと置いてあるから。」

信助

「ありがとうございます……。」



エルシヤ

「じゃあ信助君、またね。」

少女

「お兄ちゃん、バイバイ。」

エルシヤは子供達を連れて地下牢を離れた。

信助

「僕、これからどうなるんだろう?」



くアウローラ 格納庫く

同じ頃、アウローラでは帰艦したヒルダ達と、戦場で合流した明日人達とサラマンデーネ達がリイザから話を聞いていた。

ヒルダ

「二つの地球を融合？」

リイザ

「制御装置であるラグナメールと、エネルギーであるアウラ。エンブリヲは二つの地球を時空ごと融合させ、新しい地球に作り変えようとしている。二つの地球が混ざり合えば、全てのモノは滅びる・・・ゴホッ！ゴホッ！」

マギー

「コレ以上は無理だ！休ませるよ？」

ヒルダ

「ああ、頼む。」

サラマンディーネ

「・・・。」

-----

く休憩所く

リイザは病室に移され、ヒルダ達は場所を変えた。

明日人

「ついに始める気だな、エンブリヲ。」

サラマンディーネ

「・・・司令官殿。」

サラマンディーネはヒルダに声をかける。

ヒルダ

「何だ？」

サラマンディーネ

「我々アウラの民は、ノーマとの同盟締結を求めます。」

ヒルダ

「同盟？」

サラマンディーネ

「現在の我々の戦力だけでは、エンブリヲの防衛網を突破するのは困難。ですが、それは

貴女方も同じハズです。」

ヒルダ

「確かに、アタシ達だけじゃラグナメールには手も足も出ない。明日人達のガンダムを加えても、勝てる望みは薄いだろう……。」

ヒルダは目を閉じ考え始める。そして数秒後、サラマンディーネに目を向けた。

ヒルダ

「良いよ。でも、同盟を結ぶのはアンジユを連れ帰ってからだ。」

『おや？アンジユは来ていないのか？』

突然、近くからエンブリヲとおぼしき声があった。ヒルダ達が声のした方向を見ると、そこにはエマが居た。だが、その目は虚ろになっていた。

エマ

『やれやれ、我が妻は何処へ行ってしまったのやら……。』

葵

「エマさん？」

サラマンディーネ

「いえ、アレはエンブリヲです！」

ジャスミン

「エンブリヲだつて!？」

バルカン

「グルルルッ！」

ヒルダ達は驚き、ジャスミンとバルカンは立ち上がり構えた。

ヒルダ

「トチ狂ったかアンタ！」

サラマンディーネ

「違います、彼女は操られているだけです。」

サラマンディーネはエマを睨み付け、エマを通してエンブリヲに語りかける。

サラマンディーネ

「逃げた女に追い縋るなど無様ですわね、調律者殿？」

エマ

『ほう、ドラゴンの姫か？』

サラマンディーネ

「焦らずとも、近々アンジュと伺いますわ。その首、貰い受けに！」

ラアアアアア!!」

サラマンディーネは突如大声と共に、エマに向けて音波を放つ。エマは音波を受けた途端瞳に輝きが戻り、その場で気を失い倒れた。

サラマンディーネ

「司令官殿、エンブリヲは形振り構わずアンジュを探している御様子。貴女はその目をかわし、アンジュを助け出す事が出来ますか？」

ヒルダ

「そ、それは……。」

サラマンディーネ

「焦らずとも、アンジュは必ず帰ってきますわ。」

劍城

「根拠は？」

サラマンディーネ

「簡単です。彼女は私の友ですから。」



く 皇宮 図書室く

エンブリヲ

「やれやれ、野蛮な女だ……。」

ガチャン

エンブリヲは憑依時に使っていたのか、電話の受話器を戻し、テーブルの隅に置いてあつた本を手に取る。

ガチャ

本を手に取つた瞬間、図書室の扉が開きエルシヤが現れた。

エルシヤ

「失礼します。」

エンブリヲ

「エルシヤ、どうしたんだい？」

エルシヤ

「いえ、その……信助君に何か食べ物を持って行ってあげようかと思ひまして、エンブリヲさんに許可を……。」

エンブリヲ

「信助?……ああ、捕虜の少年か。いいだろう、彼は君の手柄だ。生かすも殺すも君の好きにするがいい。」



エルシヤ

「ありがとうございます。」

エンブリヲ

「・・・聞きたい事はそれだけか？」

エンブリヲに問われ、エルシヤは少し俯いた。が、直ぐに顔を上げ、エンブリヲに目を向けた。

エルシヤ

「エンブリヲさん、新しい世界が完成したら・・・。」

エンブリヲ

「ん？」

エルシヤ

「新しい世界が完成したら、幼稚園の子供達も一緒に連れて行ってくれるんですよ？」

エンブリヲ

「・・・。」

パタン

エンブリヲは本を閉じテーブルに置く。そして椅子から立ち上がり、窓の外に目を向けた。

エンブリヲ

「すまないが、それは出来ない。新しい世界は新しい人類のモノ。彼女達を連れては行けない。」

エルシヤ

「えっ?」

エルシヤはエンブリヲの話聞いて耳を疑った。

エンブリヲ

「君には、新たな世界で新たな人類の母になって貰いたい。分かってくれるね、エルシヤ?」

エンブリヲは振り向き、優しく問いかけた。だが、その問いを聞いたエルシヤは呆然としていた。

エルシヤ

「そんな・・・イヤ・・・イヤアアア!!」

エルシヤは号泣し、エンブリヲに泣き縋った。

エルシヤ

「あの子達は、あの子達は私の全ての

なんです!!私はどうなっても構いません!!だからどうか・・・!!」

ドスツ!

だがエンブリヲはエルシヤを蹴り飛ばした。

エンブリヲ

「やれやれ、もう少し物分かりの良い女だと思っていたが……。」  
エルシヤ

「エンブリヲ……さん。」

エンブリヲ

「これ以上無駄な手を掛けさせないでくれ。私は忙しいんだ。」

エンブリヲはそう言って図書室を離れた。残されたエルシヤは絶望し、泣いていた。

エルシヤ

「嘘、だったのね？平和な世界も、平等な暮らしも、何もかも……。」

「ごめんなさい、みんな……うう……。」



くアウローラ コックピットく

一方、アウローラのブリッジではヒカルとオリビエが行方不明になったアンジュ・天馬・タスク・信助を捜索していた。

ヒカル

「レーダー、反応無し。そっちは？」

オリビエ

「ダメです。通信及び救難信号、共にありません。」

オリビエの見る画面には、各メイルライダーの通信状況がモニターされている。だがアンジュ・天馬・タスク・信助の枠には《LOST》と表示されていた。

—————

くミーティングルームく

ミーティングルームでは、ヒルダ達メイプルライダーと明日人が集まり、今後の事について話し合っていた。

ロザリー

「なあヒルダ、マジでアンジュを待つ気なのか？」

ゾーラ

「世界がヤバいんだろ？ どうすんだよ、隊長？」

ヒルダ

「分かってる。でも、どの道アンジュとヴェルキスが居ないと太刀打ち出来ない。」

神童

「今、オリビエさんとヒカルさんがアンジュさんと天馬達を探しています。」

ナオミ

「私達、これからどうなるんだろう・・・？」

葵

「天馬・・・。」

ロザリー

「・・・アタシ、ドラゴンと戦うよ。」

ヒルダ

「えっ?」

突然のロザリーの発言に、ヒルダ達は驚いた。

ロザリー

「何だってやるよ、クリスを倒せるなら。アタシ、アイツの事ずっと友達だと思ってた。なのに・・・。」

ロザリーは目から大粒の涙を流し泣いていた。

ロザリー

「何で・・・何でこうなっちゃったんだらうな？」

ヒルダ

「ロザリー・・・。」

劍城

「・・・。」

-----

く司令室く

司令室では、ヒルダ達の纏めたレポートをジャスミンがジルに報告していた。

ジャスミン

「ヴィルキスとペガサス、そしてタイタニアスを落としたのはクリスだそうだ。」

ジル

「なに？」



ジルはジャスミンの発言に驚いた。

ジャスミン

「エンブリヲの部下は優秀だね。兵隊も隊長さんも。」

ジル

「・・・何が言いたい？」

ジャスミン

「いや・・・。」

ジャスミンは静かに立ち上がる。

ジャスミン

「サリアにもっと優しくしていれば、あの子が敵になることは無かったんじゃないかってね・・・。」

そう言うと、ジャスミンは部屋を離れた。

ジル

「・・・。」



く無人島く

そして、タスクのエアバイクで脱出したアンジユは、とある無人島へとたどり着いた。

シユーン・・・カチャ

エアバイクは着陸し、着陸と同時にアンジユの腕の手錠が外れた。

アンジユ

「う・・・ん？」

アンジュは気を失っていたが、手錠が外れたと同時に目を覚ました。

アンジュ

「……は……。」

アンジュは直ぐ、あるモノを見つけた。目線の先には、タスクが住んでいた住処があった。アンジュはエアバイクを降り、住処へ向かった。住処は以前タスクと天馬と共に過ごした時から、何一つ変わっていない。

アンジュ

「あの日のまま……。」

チャリン

突然、アンジュの服のポケットから何かが零れ落ちた。

アンジュ

「・・・っ！」

零れ落ちたのは、アンジユ達がドラゴン達の世界に迷い混んだ時、タスクにプレゼントしたペンダントだった。

アンジユ

「・・・。」

アンジユは静かに、ペンダントを手にした。

『何処か懐かしくて、嬉しいような、不思議な歌だった。また聞かせてね。』

アンジユ

「タスク、帰る時にはいつも貴方が。」

『アンジュリーゼ様、どうかご無事で。』

アンジュ

「モモカ、帰る場所にはいつも貴女が。」

『大切なのは、何が正しいかじゃなくて、自分がどうしたいかじゃないですか？』

アンジュ

「天馬、戦うときにはいつも傍に貴方がいた。なのに・・・なのに・・・ううう・・・。」



く 皇宮 サリアアの部屋 く

同じ頃、サリアは自分の部屋に居た。だが彼女は今、エンブリヲに対する怒りと、アンジユに対する嫉妬、憎悪、そして殺意に満ちていた。

サリア

「アンジユは私を殺すために必ず戻ってくるだろう。期待しているよ、私のサリアですって？嘘ばかり……。」

サリアはベッドを降り、腰のホルスターからナイフを抜き取った。

サリア

「でもねアンジユ、アンタがいなくなれば……アンタより私の方が強いって分かれば……。」

グサツ！

サリアは腕を大きく振り上げ、ドレスを着たマネキンの胸にナイフを突き刺した。

サリア

「エンブリヲ様は私の価値を認めてくれる。それが出来るなら・・・」

何も要らない！」



Ep. 25 / Stand by Me    〈本当に大切な

もの〉 《後編》

　　〈アウローラ　医務室〉

アウローラの医務室には、ベッドで横になるリイザとエマ、そしてマギーがいた。リイザは自分が知り得ているマナとドラゴンの関係をエマとマギーに話し、エマはマナでドラゴンとマナについての資料を調べていた。

リイザ

「お前達の持つマナの光には、我らアウラの民、つまりドラゴンの声に干渉し人を狂わせるという副作用がある。」

マギー

「なるほど、だからマナを持たないノーマしか、ドラゴンと戦えなかったと言う事か。」

エマ

「そんな事、何処にも載っていません！」

リイザ

「当然だ、この世界は嘘で塗り固められている。だがマナを破壊する事が出来るノーマは、その嘘を全て暴いてしまう。だから人間達に本能的にノーマを憎むようプログラムを与え、ノーマを差別し隔離させる存在にしたんだ。」

エマ

「そんな・・・それじゃ、私達は只の操り人形みたいじゃない!!」

バリーン!

エマ

「キヤッツ!」

突然、エマが展開していたマナのディスプレイが砕け散った。

マギー

「どうした!?!」

エマ

「わ、分かりません！急にマナの光が使えなくなってしまつて……。」

マギー

「何だつて!？」

リイザ

「……ついに始まつたか。」



くミスルギ皇国 ホテルく

「な、何が起こつたんだ!？」

「分からん！マナの光が急に!」

「なんでマナが使えないんだよ!!」

「どうなつてるんだ!？」

ミスルギ王国を始め、世界各地ではマナを失い国民達が混乱を起こしていた。次々と事故が起き、火災が発生し、マナが消えた事で助けを呼ぶ事も出来ず、人々はただ逃げ惑うしか無かった。

ミステイ

「これは・・・いったい何が起こっているのですか？」

偶々ミスルギ王国を訪れていたミステイは、ホテルの外の状況が上手く飲み込めず戸惑っていた。

「どうやら始まったみたいだね。世界の破壊と再生が。」

ミステイ

「っ!？」

突然、ミステイの背後から男の声があった。振り向くとそこには、黒とシアンのメカメ

かしい銃を持った青年がいた。

???

「君がローゼンブルム王国の王女、ミステイだね？」

ミステイ

「そ、そうですけど・・・貴方は？」

???

「僕は《海東大樹》。世界中のお宝を集める通りすがりの仮面ライダーだ。」

ミステイ

「仮面・・・ライダー？」

海東

「そ。そしてミステイ、僕は君を頂くためにやって来た。」

ミステイ

「わ、私を？」

海東

「そうさ、君は二重の意味で凄なお宝だからね。ローゼンブルム王国の王女であり、彼女にとつてたった一人の大切な友達だからね。」

海東は右手に持っていた銃、《デイエンドライバー》に1枚のカードをセットしスライド。

《KAMEN RIDE》

そしてデイエンドライバーを天井に向け引き金を引いた。

海東

「変身！」

《DIE END!》

音声と同時に銃口から青いカード型のエネルギー体が跳び、周囲に赤・青・緑の三体の残像が現れた。残像は海東に集まり、エネルギー体は頭部と合体。海東はブラックとシアンのボディをした、《仮面ライダーデイエンド》に変身した。

ミスティ

「そ、その姿は!？」

デイエンド

「一緒に来てもらうよ?」

シュン…

二人の前に不思議な光のカーテンが現れ、デイエンドはミスティを連れてカーテンの向こうに消え、光のカーテンも同時に消えた。

ガチャ

光のカーテンが消えて直ぐ、メイド達がミスティの部屋に来た。

メイド

「ミスティ様!急いで…ミスティ様?ミスティ様!」



く 皇宮 廊下く

一方、シルヴィアは皇宮内を車椅子に乗って移動していた。

ガタツ

シルヴィア

「キャツ!?!」

突然車椅子が動かなくなり、シルヴィアは転倒した。

シルヴィア

「もう、いったいどうなって・・・。」

シルヴィアはマナで車椅子を動かそうとするが、車椅子は全く動かない。



シルヴィア

「えっ? どうして・・・!? 誰か! 誰か居ませんか!? 私は第一皇女・・・いえ、女帝シルヴィア二世ですよ! 誰か私を助けなさい!!」

シルヴィアは真つ暗な廊下で助けを呼ぶ。すると・・・。

エンブリヲ

「シルヴィア、どうしたかね?」

闇の中から火の灯ったランタンを持ったエンブリヲが現れた。

シルヴィア

「え、エンブリヲ叔父様!」



く地下牢く

その頃、地下牢の信助は外が騒がしい事に気付いていた。

信助

「妙に外が騒がしいなあ．．．。」

ガシヤン

突然、通路の扉が開きエルシヤが現れた。

信助

「エルシヤさん？」

エルシヤ

「．．．。」

信助の呼び声にエルシヤは答えない。だがエルシヤは今まで見せた事が無い程、悲し

い表情を浮かべていた。

ガチャ ガシヤン

エルシヤは信助の牢の鍵を開けると、牢に入り信助の隣に腰を下ろした。

信助

「どうしたんですか？」

エルシヤ

「信助君・・・私ね、分からなくなっちゃったの。私は、エンブリヲがあの子達が安心して暮らせる世界を作るって言って、私はそれに協力するって決めて、貴方達と戦うって決めた。でも、エンブリヲさんは言ったわ。新しい世界にあの子達は連れて行けないって・・・。」

信助

「ウソ、それって・・・。」

エルシヤ

「そう、全部嘘だったのよ。平和な世界も、平等な暮らしも全部。私にはあの子達しかい

なかつたのに・・・あ。」

この時、エルシヤは気付いた。自分はただ、利用されていただけだという事に。

エルシヤ

「だから、利用されたんだ・・・！」

信助

「えっ?！」

エルシヤ

「全く、何て馬鹿だったのかしら?何も無い、浅くて薄くて、ちよろい女。」

カチャカチャ

エルシヤは信助の拘束を外した。信助はエルシヤの突然の行動に驚いた。

エルシヤ

「帰りましょう、信助君。ヒルダちゃんにロザリーちゃんにヴィヴィちゃん、みんなの居

るところに！」

信助

「・・・はい！」

エルシヤは信助を連れて牢を出る。すると、階段の近くで子供達が行く手を塞いでいた。

エルシヤ

「みんな・・・！」

「エルシヤママ、行かないで！」

「ママが居なきや、アタシ達・・・！」

子供達は必死にエルシヤに訴えた。エルシヤは一瞬驚いたが、笑顔を見せ子供達に語りかけた。

エルシヤ

「大丈夫よ。みんなを置いてきぼりにはしないわ。みんなでお引越しましよう。」

「お引越し？」

エルシヤ

「そう、ここはもう安全じゃない。だから、みんなでお引越しするのよ。」

「……でも、どうやって？」

エルシヤ

「大丈夫、ママと信助のお兄ちゃんがいれば問題無いわ。」

-----

〈裏庭〉

エルシャと信助は子供達を連れて裏庭へやって来た。エルシャは子供達を裏庭の中央に集め、エルシャはレイジア、信助はタイタニアスを近くに配置した。

エルシャ

「信助君、良いわよ！」

信助

「はい！頼むぞタイタニアス！バリア最大展開！」

信助はタイタニアスを操作し、周囲にドーム状のバリアを展開。

信助

「よし、行きます！」

ゴゴゴゴゴゴ……！！

バリアを境に内側の地面が宙に浮き始める。そして、巨大な球体が姿を現した。球体は塀を越え、空に暗雲が立ち込める市街地の上空を飛行し海へと向かう。

「スゴーい！」

信助

「よし、このまま！」

『ちよつとエルシャ!!』

突然、レイジアの通信機から聞き慣れた声が聞こえてきた。辺りを見ると、球体の直ぐ横をテオドーラが飛行していた。

エルシャ

「クリスちゃん……。」

クリス

「エルシャ、いったい何やってるのさ！」

エルシャ

「帰るのよ。私達の本当の居場所に。」



クリス

「帰るだつて？もしかして、そこに居る信助に感化されたの？」

エルシヤ

「違うわ！これは私の意思よ！」

エルシヤはクリスに真剣な眼差しを向けて訴える。それを見てクリスは驚いた。

エルシヤ

「ねえ、クリスちゃんはいいの？このまま友達を・・・ヒルダちゃんとロザリーちゃんをこころすことになつても。」

クリス

「友達い？ああ、もちろんさ！あんな奴ら、もう友達じゃない!!」

エルシヤ

「・・・そう、分かった。」

エルシヤはそう言うと、クリスに背を向けた。クリスはこれ以上何を言つても無駄だと思つたのか、皇宮へと引き返して行つた。そして海に出て一時間後、前方にアウロ―

ラを發見した。

信助

「見えた、アウローラだ！」

エルシヤ

「みんな、お願い！」

エルシヤは子供達に伝えると、子供達は何故か手に持っていた白い下着を振り回し始めた。

信助

「・・・今聞くのもアレなんですけど、何で下着なんです？」

エルシヤ

「それが、白い布系のモノを探してたらコレしか無かったのよ。ハンカチやタオルは全部燃えちやっただけだったし・・・。」

信助

「ああ、なるほど・・・。」

エルシャは苦笑いで説明し、信助は苦笑いで納得した。信助はアウローラと回線を繋ぎ、通信を始める。

信助

「さてと・・・こちら信助。アウローラ、聞こえますか？」

オリビエ

『こちらアウローラ。信助君、貴方なの!？』

信助

「はい、エルシャさんと子供達も一緒です！」

オリビエ

『今映像で確認したわ!・・・て言うか、何で子供達は白ブラとパンツ振り回してるの?』

エルシャ

「違うわ、白旗よ。」

オリビエ

『白旗?じゃあもしかして・・・。』

エルシャ

「ええ・・・ダイヤモンド・ローズ騎士団エルシャ、現時刻をもって投降致します。」



～無人島 住処～

一方、タスクの住処にたどり着いたアンジュは、住処にあったタスクのYシャツに着替えベッドで横になり身体を休めていた。

アンジュ

「水・・・。」

アンジュはベッドを降り立ち上がる。

ガンッ！

だが上手く立つ事が出来ずフラつき転倒した。

パタッ

アンジュ

「いったあ……ん？」

転倒した衝撃で、机の上の本棚から1冊のノートが落ちてきた。ノートの表紙には《DIARY》と書かれていた。

アンジュ

「タスクの……日記？」

アンジュは日記を開き、読み始めた。

11月? 日

今日、モーガンさんが死んだ。これで俺は一人になった。

無理だったんだ、エンブリオに戦いを挑むなんて……世界を壊そうだなんて……何をしても独り。孤独に気が狂いそうになる。人は、一人では生きていけない……。

ペラッ

アンジュ

「っ!!」

アンジュは次のページを見て、驚いた。

――〇月?日

今日、浜に女の子が流れ着いた。ウイルスともう一機のパラメイルと共に。かなり凶暴で、人の話をまるで聞かない女の子だけど……アンジュは光だ。外の世界から差し込んだ光。

父さん、母さん、やっとな見つけたよ。

彼女を守る。それが俺の……俺だけの使命だ。行ってきます。

日記はここで終わっていた。

アンジュ

「タスク……。」

アンジュは握り締めていたタスクのペンダントを見つめ、そして涙を流し泣き出した。  
だ。

アンジュ

「ずっと守ってくれてた……なのに私、傍に居てあげられなかった……。」

お願い、タスク……モモカ……天馬……私を一人にしないで……ううう……。」

アンジュはふと、床に脱ぎ捨ててあったダイヤモンド・ローズ騎士団の制服から拳銃を抜き取った。マガジンには銃弾が一発だけ残っていた。

アンジュ

「みんな・・・。」

カチャ

アンジュは拳銃の撃鉄を起こし、銃口を自分の顎へ近づけ眼を閉じ、震えながら引き金にゆっくりと指をかける。

『あんた、本気で死にたいと思ってるのか!? あんたも人間だろ!? 人間なら、命ある限り生き続けるよ!!』

『君は生きるんだ、アンジュ。』



『生きるのです…アンジュリーゼ…』

『人間いつ死ぬかは分からない！だからこそ、最後の時を迎えるその時まで全力で生きるんだ！自分よりも先に死んでいった人達の方も！志半ばで倒れた仲間の方も！』

アンジュ

「っ!!」

突如、アンジュの脳裏に嘗ての思い出と、天馬、タスク、そしてソフィアの言葉が過った。

アンジュ

「うう…うう…うう…」。

アンジュは銃を下ろし、その場で泣き崩れた。

ガサガサガサ・・・

アンジュ

「っ!?!」

突然、茂みから物音がした。音は徐々にアンジュの居る住処へと近づいて来る。

アンジュ

「何か・・・来る!」

アンジュは恐怖で震えながら茂みに銃口を向ける。そして、人影が見えた途端・・・。

アンジュ

「ヒイツ!!」

バシューーン!

アンジュは人影に向けて発砲。

ザシユツ！

「うわっ!?!」

ドサツ！

銃弾は人影の頬を掠め、人影は驚いて声を発し後ろに倒れた。だが、アンジュは人影が発した声に聞き覚えがあつた。

アンジュ

「今の声……。」

すると、今度は上空の雨雲が晴れ、太陽が無人島を照らし出す。そして人影の姿が露になった。



アンジュ

「天……馬？」

天馬

「イツテエ……ん？」

人影の正体は、爆発したペガサスと共に海に落ちた天馬だった。天馬は身体中煤と傷と痣だらけで、ユニフォームの一部が煤で汚れボロボロ。左の頬には先程アンジュの放った銃弾による切り傷があり、血を流していた。

天馬

「アンジュさん!!」

天馬はアンジュを見るなり喜び、立ち上がり駆け寄った。

天馬

「良かった、無事だったんですね？」

アンジュ

「天馬……うう、うわああああああ!!」

天馬

「どわあ!!」

アンジュは大泣きし、天馬に抱き付いた。天馬は抱き付かれた拍子に後ろに倒れた。

天馬

「アンジュさん!? どうしたんですか!? アンジュさん!!」

天馬はアンジュに呼び掛けるが、アンジュには自身の泣き声のせいで聞こえていなかった。

〳〵 棧橋 〳〵

夕方、天馬とアンジユは栈橋で海に沈む夕日を眺めていた。近くの砂浜には左腕と右脚を失ったペガサスが打ち上げられていた。

天馬

「落ち着きました?」

アンジユ

「うん。ゴメンね、急に撃つわ抱き付くわ大泣きするわで……。」

アンジユは天馬の頬の傷に手を沿えた。

天馬

「これくらい大丈夫です。それより、アンジユさんが無事で良かった。」

二人は互いに微笑み、共に海に眼を向けた。

天馬

「綺麗ですね。」

アンジュ

「うん……。」

『……君の方が、綺麗さ。』

アンジュの脳裏に、タスクの姿が過った。

アンジュ

「バカ！何で私なんか……。」

『俺はもうヴィルキスの騎士じゃない。アンジュの騎士だ！』

アンジュ

「タスク、貴方はそれで良かったの？使命のために全てを失っても……それで望んだのは、どんな世界？」



『穏やかな日々が来ればいい．．．そう思ってるだけさ。』

大丈夫、必ず戻るから、君のところに．．．。』

アンジュ

「貴方が居なくなったら、何も意味無いじゃない！」

天馬

「アンジュさん．．．。」

アンジュ

「タスク．．．貴方が好きよ．．．。」

天馬

「．．．。」

ガシツ

天馬はアンジュを優しく抱き寄せた。

アンジュ

「天馬・・・？」

天馬

「アンジュさんは俺が守ります。この先、何があっても・・・。」

アンジュ

「・・・ありがとう・・・うう！」

アンジュは泣き出した。

アンジュ

「こんなことなら、彼に最後までさせてあげればよかった・・・！」

「ホントに？」

アンジュ

「うん・・・えっ？」

突然、後ろから聞き覚えのある声がした。二人が恐る恐る振り向くと、二人は目を疑った。

天馬

「た、タスクさん!?!」

二人が目にしたのは、爆発に巻き込まれ死んだ筈のタスクの姿だった。アンジュと天馬は立ち上がり、タスクに駆け寄った。

タスク

「よかった、二人とも無事で。」

アンジュ

「タスク・・・何で?」

タスク

「アンジュの騎士は、不死身なのさ。」

天馬

「本当に・・・本当にタスクさんなんですか!？」

タスク

「ああ、俺だよ。」

パシン!

天馬

「ええっ!？」

突然、アンジュはタスクの左頬を勢いよく引つ叩いた。

タスク

「痛ッ!えっ?」

タスクは何故引つ叩かれたのかわからず戸惑う。

アンジュ

「タスクは・・・死んだわ！」

パシン！

タスク

「アタツ！」

さらに右頬に往復ビンタ。

アンジユ

「これは、エンブリヲが見せてる幻！絶対そうよ！」

タスク

「ち、違うよ!!」

アンジユ

「だって・・・天馬はボロボロになって戻ってきたのに、タスク・・・貴方には爆発の痕も、斬られた傷も無いもの・・・。」

タスク

「俺は生きてる！こうやって、君のところに戻ってきたじゃないか！」

天馬

「そ、そうですよアンジュさん！」

アンジュ

「信じない！タスクは・・・タスクは死んだの!!」

ガシッ

突然、アンジュはタスクの襟元を掴みタスクを押し倒した。

アンジュ

「確かめるわ、自分で！」

アンジュはタスクの上に乗れ、Yシャツのボタンを外し、Yシャツを脱ぎ捨てた。

天馬

「あ・・・。」

た。  
タスクと天馬は頬を赤く染め、天馬はアンジュに背を向け静かに棧橋の下へ移動し

タスク

「あ、アンジュ？」

チュッ

タスク

「っ!？」

アンジュはタスクに優しく唇を重ねた。

アンジュ

「少し黙ってて！」

タスク

「えっ?」

アンジュ

「お願いだから!」

タスク

「・・・アンジュ。」

タスクはアンジュの背中に手を伸ばし、アンジュを優しく抱きしめた。

そして夜、三人は栈橋で仰向けになり星空を見上げていた。

アンジュ

「綺麗ね・・・。」

天馬

「はい・・・。」

タスク

「ああ、あの日と同じだ・・・。」

アンジュ



「実はね、天馬が来る前に私、死のうとしてたの。」

タスク・天馬

「えっ?」

アンジユ

「でも無理だった。人は、独りじゃ生きていけない。罵り合う事も抱き合う事も、何も出来ない。」

タスク

「日記、読んだんだね?」

アンジユ

「ホントに、生き返らされたんじゃないのよね?」

タスク

「もちろん、俺は生きてるよ。」

天馬

「・・・あ!」

突然、天馬が立ち上がり後ろを向いた。

アンジュ

「どうしたの？」

天馬

「見てください！」

アンジュとタスクは天馬の示す方向に目を向ける。示す先には、山裾から上る太陽があつた。

タスク

「夜明けだ。」

アンジュ

「不思議……何もかもが、新しく輝いて見えるわ。」

天馬

「ええ。」

アンジュ

「……私ね、アイツに言われたの。世界を壊して、新しく作り直そうって。でもね、私はこの世界が好きみたい。どれだけ不完全で愚かでも、この世界が。」

天馬

「俺も、この世界が好きです。沢山の友達や仲間達との沢山の思い出が詰まった、この世界が……。」

タスク

「俺もアンジュと一緒にだ。いつまでも……。」

アンジュ

「私の騎士だから？」

タスク

「違う。君が好きだからだ。」

タスクはアンジュと静かに手を重ねた。

天馬

「……守りましょう、この世界を。そして生きましょう、モモカさんの分も。」

アンジュ

「うん、そうね！」

タスク

「あつ・・・実はその事なんだけど・・・。」

---

く住処く

モモカ

「皆様お待ちしておりました！」

住処に戻ってみると、そこには朝食を作り終えたモモカの姿があつた。

モモカ

「本日のメニューは・・・」

川魚の燻製

木の実と茸のポタージュ

猪のジビエ く山葡萄のソースを添えてく

になります！オススメはコチラのポタージュで、12時間程コトコト煮込んで・・・。」

タスク

「12時間……。」

タスクは目線をそらしながら苦笑いし、アンジュと天馬は又しても目を疑った。

アンジュ

「も、モモカ!?!」

天馬

「ええっ!?で、でででも、どうして……!?!」

ゴソゴソ……。

と、モモカは服の中からある物を取り出した。銃弾がめり込んだフライパンだ。

モモカ

「このフライパンのお陰です!いつでもお料理出来るようにと思い、携帯しておいて良かったです。」

アンジュ・天馬

「……プツ、アハハハハ！」

モモカの話聞いて、アンジュと天馬は笑った。

アンジュ

「流石、私の筆頭侍女ね！」

モモカ

「はい！……あ、大変です姫様！私、マナが使えなくなってしまったんです！」

アンジュ・タスク・天馬

「えっ？」

ドーン！

突然、海の方から轟音が聞こえてきた。一同が海に向かうと、遙か彼方に見える陸に、不気味な色の暗雲が立ち込め、あちこちで落雷が起きていた。

天馬

「ついに始まったんだ。世界の破壊と再生が・・・！」



「倉庫」

朝食を終え、タスクは黒いフライントスーツ、アンジュは住処にあった古いライダーズーツに着替え、一同は島の外れにある古い倉庫へと来た。

ギギギギギ・・・！

扉を開けると、中には桃色のパラメイルが眠っていた。

アンジュ

「これって・・・！」

天馬

「パラメール……しかもアーキバスじゃないですか！」  
タスク

「《アーキバスバネツサ・カスタム》。10年前、アルゼナルのメールライダーだった母さんが使ってた機体だ。まずはミスルギ皇国に戻って、ヴィルキスを回収しないと。」

アンジュ

「大丈夫、その必要は無いわ。」

と、アンジュは左手を天に掲げる。

アンジュ

「おいで、ヴィルキス！」

キイイイイインツ！

アンジュの呼び声に反応するかのように左手の指輪が光だし、そしてアンジュの目の前にヴィルキスが現れた。



タスク

「ヴィルキスだ！」

天馬

「凄い！」

アンジユ

「さあ、みんな行くわよ！」

モモカ・天馬

「はい！」

タスク

「オツケー！」

アンジユはヴィルキス、タスクはアーキバス、天馬はペガサス、モモカはタスクのエアバイクに乗り、そして一同は飛び立ち無人島を離れた。

アンジユ

「みんな、今行くからね！」

T  
o  
  
B  
e  
  
C  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
:

## E p. 26 / 発動!ラストリベルタス

ミスルギ沖 53キロ

無人島を飛び立ったアンジユ達は、アウローラを探してミスルギ沖を飛行していた。

アンジユ

「こちらアンジユ!アウローラ、応答して!」

アンジユは飛行しながら、アウローラに通信を試みる。すると・・・。

『こちらアウローラ!アンジユ、無事だったんだな!』

アンジユ

「その声、ヒルダ!」

通信機からヒルダの声が聞こえてきた。

ヒルダ

『待つてろ！今浮上して回収してやるからな！』

アンジユ

「ええ、お願い！」

ザバーン！

遙か前方で巨大な水飛沫が上がリ、アウローラが姿を見せた。

—————

くアウローラ 格納庫く

ヴィルキス達はアウローラに収容され、アンジユ達は格納庫でヒルダ達と再会した。

アンジュ

「ただいま、みんな。」

ヒルダ

「アンジュ!」

ヴィヴィアン

「お帰り、アンジュ!」

アンジュ達が戻ってきてヒルダ達は喜び、同行していたジャスミンとマギーは、タスクのアーキバスを見て驚いた。

マギー

「タスク、このアーキバスって!」

タスク

「ああ、母さんの機体だ。」

ジャスミン

「驚いた、まだ飛べたんだね。」

と、そこへ雷門メンバーと明日人達がやって来た。

信助

「天馬！」

葵

「天馬！」

劍城

「無事だったんだな。」

天馬

「劍城、みんな・・・。」

「モモカさん！無事だったのね！」

そこへ、今度はエマが現れた。

モモカ

「監察官さん！・・・あ、お酒止められたのですね？」

エマ

「まあね、飲んでる場合じゃないから……。」

「アンジュリーゼ様！」

すると、今度は聞き慣れない少女の声が聞こえてきた。声のした方へ目を向けると、そこにはミスティがいた。

アンジュ

「ミスティ!？」

天馬・モモカ

「ミスティ様!？」

アンジュ達は突然のミスティの登場に驚いた。

アンジュ

「な、何でアンタがこの船に!？」

「僕が連れてきたんだ。」

と、今度はミスティの背後から司と海東が現れた。

タスク

「司！無事だったんだ！」

司

「お前こそ、よくあの爆発で生還出来たな。」

天馬

「あの司さん、その人は？」

司

「コイツは俺の知り合いで、海東大樹。世界中のお宝を盗みまくってる泥棒で、俺と同じ仮面ライダーだ。」

海東

「よろしく。狙った獲物は逃さない、トレジャーハンター海東大樹だ。」

司



「しかし海東、お前ついに誘拐にまで手を染めやがったか?」

海東

「失礼だね。僕は単に彼女、ミスティ・ローゼンブルムというお宝を救ってあげただけさ。逆に感謝してもらいたいねえ?」

司

「泥棒に感謝も何もねえよ!」

アンジユ

「どういうこと?」

ミスティ

「私、海東さんに・・・仮面ライダーデイエンドさんに助けて頂いたんです。」

ミスティは自分が海東とアウローラに来るまでの経緯を話した。

天馬

「そうだったんだ。」

ミスティ

「はい。それで、エマさんと話し合って決めた事があるんです。」

アンジユ

「決めた事？」

ミスティ

「私達、リベルタスに参加します！」

ミスティの放った言葉に、アンジユ達は驚いた。

アンジユ

「本気なの？」

ミスティ

「私達は知ってしまった、人間とマナの真実を。マナを失ってしまった以上、些細な事ではお手伝い出来ませんが、このまま何もしないで終わるのは嫌なのです！」

エマ

「この船に乗った以上は、出来る限りお手伝いさせて頂くわ。」

司

「俺も参加させてもらうぜ？ 乗り掛かった船だしな。」

海東

「無論僕もだ。まだこの世界のお宝を手に入れてないからね。」

天馬

「みんな……!」

新たな仲間が加わり、アンジユと天馬は喜んだ。すると、格納庫の一角に見覚えのある黒い機体を見つけた。

アンジユ

「あれって……?」

天馬

「レイジア……エルシャさんの機体じゃないですか!何でこんなところに?」

「あら、アンジユちゃんも天馬君も無事だったのね。お帰りなさい。」

と、レイジアの奥から聞き覚えのある声と共に、見慣れた懐かしい人物が姿を見せた。

アンジユ

「エルシヤ!？」

現れたのは、アルゼナルの制服に身を包んだエルシヤと子供達だった。

天馬

「どうして、エルシヤさんが子供達と此処に？」

エルシヤ

「目が覚めたのよ。私達の本当の居場所は何処なのか、本当に戦うべき相手は誰なのか、本当に守らなきゃならないのは何なのか……。あの戦いの時、信助君が子供達を助けてくれていなかったら、子供達は死んでいた。エンブリヲさんは最初から、子供達が安心して暮らせる世界を作るつもりなんて無かった。私を利用するために、子供達を利用したのよ。」

エルシヤの放った言葉に、一同は驚いた。

エルシヤ

「私の事が信用出来なくてもいい！でも、私は大切な子供達を守りたいの！だから!!」

ヴィヴィアン

「もう、エルシヤつてば大袈裟だなあ。」

エルシヤ

「えっ?」

ヴィヴィアン

「信用しないも何も、エルシヤはアタシ達の仲間でしょ?ね、みんな!」

ヴィヴィアンはアンジュやヒルダ達に目を向ける。みんな誰一人として、疑いの目はしていないかった。

エルシヤ

「みんな・・・ありがとう!」

エルシヤは嬉しさのあまり、涙を流した。

「随分と賑やかですわね、アンジュ。」

と、今度はサラマンディーネ、ナーガ、カナメが現れた。

アンジュ

「サラ子！」

サラマンディーネ

「我々アウラの民とノーマは、同盟を結びました。アンジュ、貴方はどうなされますか？」

アンジュ

「そうねえ、参加してあげてもいいわよ？あの変態ナルシスト男に、世界を好き勝手にされるのは嫌だからね。」

アンジュとサラマンディーネは握手を交わす。すると、アンジュはナーガとカナメの陰に隠れるリイザを見つけた。

アンジュ

「リイザ！」

リイザ

「……。」

リイザは気まずくなくなったのか、アンジユから目をそらした。

天馬

「モモカさんから聞きました。俺達の居場所、教えてくれたんですよね？ありがとうございます。」

リイザ

「……。」

アンジユ

「忙しくなるわよ？あの男を抹殺しなきゃいけないからね。」

リイザ

「ですが、私は……。」

アンジユ

「くよくよしてても仕方無いじゃない。この船に乗った以上、貴方ももう私達の仲間です。」

リイザ

「仲間……?」

アンジュ

「そうよ!一緒に頑張りましたよ、リイザ!」

アンジュはリイザに右手を差し出す。

リイザ

「……はい、アンジュリーゼ様!」

リイザは涙を流し、アンジュと握手をした。と、天馬がある異変に気付く。

天馬

「あれ?ジル司令の姿が見えませんか?」

ヒルダ

「今は自分の部屋に籠ってる。あと、今はアタシが司令だよ。」

アンジュ・天馬

「えっ?」





〜司令室〜

ヒルダはアンジュ達に事情を話し、アンジュはアルゼナルの制服、天馬は雷門中のジャージに着替え、ヒルダと共にジルのいる司令室へ来た。

ジル

「よく帰って来られたな。」

アンジュ

「ええ、みんなのお陰よ。」

ジル

「それで、私に何の用だ？笑いに来たのか？」

アンジュ

「笑われる様な事した自覚はあるのね？ま、エンブリヲに手箆めにされたなんて、言える訳無いか。」

アンジュの言った事に、ジルは少しムカついた。

ジル

「喧嘩を売りに来たのか？」

天馬

「聞きたい事があるんです。どうすれば、エンブリヲを倒すことが出来るんですか？」

ジル

「ナニ？」

天馬

「タスクさんと明日人から聞きました。エンブリヲは殺される度に、不確定領域の多重存在と入れ替わる。貴方は以前、ヴィルキスじゃないとエンブリヲは倒せないってタスクさんに言いましたよね？」

ジルはタバコを少し吸うと、アンジュに目を向けた。

ジル

「ああ……その不確定世界の何処かに、奴の本体が居る。私は辿り着けなかったが、歌を知り、ヴィルクスを解放したお前なら、辿り着けるだろう。」

アンジュ

「そう、分かったわ。それで、貴方はどうするの?ここでずっと引き籠ってるつもり?」

ジル

「司令官はヒルダに譲った。」

アンジュ

「……!」

ガシツ

アンジュは怒り、ジルの胸ぐらを掴む。

アンジュ

「腑抜けた事言ってるんじゃないわよ!!アンタの復讐に巻き込まれて、どれだけの人が人生狂わされたと思ってるの!?!」

ジル

「私に何が出来る？革命にも復讐にも失敗した、この私に……。」

パシンツッ！

ヒルダ・天馬

「ツ!？」

アンジユはジルの胸ぐらから手を放し、ジルの左頬にビンタした。

アンジユ

「……一つ教えてあげる。私と天馬を逃がしてくれたのは、サリアよ。」

ジル

「ツ!？」

アンジユ

「哀れだったわ。貴方を忘れるため、エンブリオに入れ込んだんやって……責任無いなん  
て言わせないわよ？ジル……いや、アレクトラ・マリア・フォン・レーヴェンヘルツ

!!」

アンジユはそう言うと、ヒルダと天馬と共に司令室を離れた。

ジル

「・・・。」

-----

く休憩所く

司令室を離れた後、アンジユ達は休憩所で少し休んでいた。

ヒルダ

「つたく、オツかねえ女・・・。」

アンジユ

「責任も果たさずに逃げるのが我慢出来ないだけよ。」

ヒルダ

「・・・やっぱ、違うんだな。」

アンジユ

「えっ?」

ヒルダ

「アンタも司令もドラ姫様も・・・生まれながらのリーダーってのは、黙ってても皆が集まってくるっつーか・・・ねえアンジユ、アンタが司令官やんなよ。」

アンジユ

「はあ?」

天馬

「えっ?」

ヒルダの放った言葉に、アンジユと天馬は一瞬驚いた。

ヒルダ

「人の上に立つのは馴れてんだろ? アタシはやっぱ、鉄砲持って蹴り混む方が似合ってるっつーか・・・。」

天馬

「・・・ヒルダさん、もしかして拗ねてます?」

ヒルダ

「はあ!? べ、別に拗ねてねえよ!!」

アンジユ

「いや、絶対拗ねてる! 言いたい事があるなら言いなさいよ。」

アンジユはヒルダに語りかける。すると、ヒルダは頬を赤く染めアンジユに背を向けた。

ヒルダ

「言ったら、嫌われる・・・。」

アンジユ

「?」

ヒルダ

「アンジユ、アンタはね・・・」





私の・・・王子様なんだ・・・。」

アンジユ・天馬

「・・・ええ?」

ヒルダの突然の告白に、アンジユと天馬は困惑する。

ヒルダ

「でも、アンタにはお姫様のダチも、男も居て・・・変だよな、女同士なのに・・・世界が終ろうって時にこんな・・・。」

チュツ

ヒルダ

「ツ!?!」

天馬

「ええっ!?!」

突然、アンジュはヒルダの両肩を掴み、ヒルダと唇を重ねた。

アンジュ

「変だなんて誰が言ったの? そういう下らない世界をぶっ潰すんでしょ? 私達で。」

ヒルダ

「ツ!」

アンジュ

「新しい世界には、貴方も居てくれないと困るわ、ヒルダ!」

ヒルダ

「アンジュ!」

アンジュとヒルダは互いに抱きしめ合った。

天馬

「アンジュさん……ヒルダさん……。」

天馬は二人を優しく見守った。だがその一方で、そんな二人を通路の向こうから悲しそうな眼で見るもう一人の男の存在があった。

劍城

「ヒルダさん……。」



く展望テツキ

その後、アンジュは一旦ヒルダと天馬と別れ、タスクと共に展望テツキにいた。

タスク

「さつきサラマンディーネさんに聞いたんだ。アウラもアウローラも、光を意味する古い言葉なんだって。」

アンジユ

「へえー、そんな意味があったのね。」

タスク

「闇に包まれし世界に光を取り戻すか：生きて帰ろう、アンジユ。必ず俺が守るから。」

「俺も忘れないで下さいね？」

と、そこへ天馬が現れた。

アンジユ

「天馬！・・・あれ、なんかユニフォーム変わってない？」

天馬は何時の黄色い雷門中サッカー部のユニフォームから一転、左胸に黄色い稲妻が描かれた白と青のユニフォーム姿に変わっていた。

天馬

「これは、俺がイナズマジヤパンに居た頃に着ていたユニフォームです。葵が万が一の為に、持ってきてくれてたんです。」

タスク

「そういえば、雷門のユニフォームはボロボロだったもんね。」

天馬

「俺も全力で、アンジユさんを守ります!それが、今の俺の願いであり信念ですから!」  
アンジユ

「・・・なんか、貴方達に守られてばかりね、私。何かしてあげられる事って無いかな?」

タスク

「君が無事なら、それで良い。」

アンジユ

「そう言うのは良いから!」

タスク

「えっと・・・天馬君先どうぞ!」

天馬

「えっ!？」

突然指名されて戸惑う天馬。

天馬

「・・・じゃあ、戦いが終わったらみんなで稲妻町に引っ越しませんか？」

アンジユ

「稲妻町に？」

天馬

「はい。稲妻町に行けば、三国さんや天城さんや狩屋に輝、水鳥さんに茜さん、円堂監督に秋姐、それに前に白竜が助けてくれたアルゼナルのみんなだってきつと居ます。みんなで稲妻町に引っ越して、雷門サッカー部やジャパンのみんなとサッカーして、それで・・・。」

アンジユ

「・・・要はサッカーがしたいって事よね？良いわ、約束ね。」

天馬

「はい!」

アンジユ

「じゃあ次は、タスクの番ね。」

タスク

「えつと、じゃあ御守りのな何かが貰えれば、なんて……。」

アンジユ

「御守りね……じゃあ、二人ともあっち向いて。」

天馬・タスク

「えつ?は、はい……。」

タスクと天馬はアンジユに背を向ける。すると、アンジユはタスクのズボンのポケッタに何かを詰めた。

タスク

「えつ?あ、暖かい?」

アンジユ

「いい?絶対に見たり出したり調べたりしないで!それと、帰ったら必ず返して!でな

いと風邪引くから！」

そう言うと、アンジュは赤面しながら走り去った。

タスク

「風邪引く……まさか!？」

タスクはポケットに手を入れようとしたが、寸前で手を止めた。

天馬

「タスクさん？」

タスク

「いや、アンジュの騎士である俺が、約束を破る訳にはいかないよな……必ず、返さなきゃね。」







「いよいよですね。」

ロザリー

「ああ、待ってろよクリス！」

そして格納庫では、各マイルライダーはライダーズーツに、雷門メンバーはユニフォームに着替え各々のパラメイルに乗り込み、サラマンディーネ達も各々の龍神器に、明日人達も各々のガンダムに、タスクもフライトズーツに着替えアーキバスに乗り込んだ。

天馬

「それにしても、よくペガサスの修理出来ましたね。」

天馬のペガサスは、破損した左翼はそのままだが、失った左腕と右脚がノーマルグレイブのパーツで修復されていた。

メイ

『前にナオミのグレイブがドラゴンにバラバラにされた事があつたでしょ？実はアルゼ

ナルがミスルギの襲撃にあった時、他のパラメイルと一緒にナオミのグレイブの残骸をアウローラに詰んでおいたんだ。何かしらの役に立つだろうと思ってるね。』

天馬

「そうだったんだ。じゃあ、ペガサスが治ったのはナオミのお陰って事ですね。」

メイ

『そうなるな。ナオミに感謝しとけよ?』

ナオミ

『そ、そんな感謝だなんて……。』

通信の向こうで照れるナオミ。すると、アンジユから通信が入った。

アンジユ

『天馬、戦いに行く前に伝えておきたい事があるの。』

天馬

「俺に?」

アンジユ

『天馬、貴方を副司令官に任命するわ。』

アンジユの言葉に、その場に居た全員が驚いた。

天馬

「俺が、副司令官に!？」

アンジユ

『貴方は私がアルゼナルに来てから、誰よりも私の傍に居てくれた。私が道に迷った時は、正しい道を示してくれた。だから貴方をお願いしたいの。貴方ならきつと、どんな窮地でも正しい判断が出来ると思うから。』

天馬

「……分かりました、その大役引き受けましょう!」

ビー! ビー!

艦内に警告を知らせるアラートが響き渡る。

パメラ

『敵艦隊、十二時の方向、距離3000!』

《KAMEN RIDE 『DECADE』!》

《KAMEN RIDE 『DE—END』!》

司と海東は各々仮面ライダーに変身した。

デイケイド

「こっちは何時でもOKだ。」

天馬

「了解。アンジュさん!」

アンジュ

「ええ……みんな聞こえる? 総司令官のアンジュよ。私達はこれから、ミスルギに侵攻。時空融合を止めるため、暁ノ御柱への強行突入作戦を敢行する。反社会的な化け物と呼ばれたノーマ……互いに戦い合っていたアウラの民……私達と一緒に来てくれる人達と、古の民……迫害されてきた私達が世界を守るために一緒に戦うなんて、痛快じゃ

ない？

・・・戦いましょう！私達が、私達の意味で生きるために！

作戦名、《ラスト・リベルタス》。相手が神様だろうが何だろうが・・・殺して・・・勝つて・・・生きるわよ、みんなで!!」

「おおー!!」



くミスルギ皇国近海く

ザバーン！

アウローラが海面に姿を現し、敵艦隊とミスルギ皇国を視界に捉えた。

ジャスミン

「全システム航空モード!機関出力80%!離水と同時にフィールドを展開!」

ヒカル

「イエス・ママ!」

ゴオオオオオオオオツ!!

アウローラのエンジンが唸り声を上げ、アウローラは飛び立った。

パメラ

「敵艦隊、本艦に向けて移動を開始!同時に、暁ノ御柱より飛行物体多数接近!」



格納庫

ヒルダ

「アンジユ、来たぞ！」

アンジユ

「パラメイル隊及びモビルスーツ部隊、全機出撃！」

「イエス・マム！」

格納庫のハッチが開き、全パラメイルとガンダムが出撃。いよいよ最後の戦いが幕を開けた。

To Be Continued:



E p. 27 / 世界消滅へのカウントダウン 《前編》

ヒルダ

「アンジユ、来たぞ！」

アンジユ

「パラメイル隊及びモビルスーツ部隊、全機出撃！」

天馬

「いくぞみんな!!」

「イエス・マム！」

格納庫のハッチが開き、全パラメイルとガンダムが出撃。いよいよ最後の戦いが幕を開けた。

明日人

「行け、Cファンネル！」

ミランダ

「シールドビット、行っけええ!!」

明日人の乗るガンダムAGE-1FXは全身に装備されたCファンネルを、ココとミランダの乗るグレイブココ・カスタムはシールドビットを展開し、オールレンジ攻撃でドローンを次々と落とす。

ディケイド

「さて、俺達もいっちょ派手にやるか！」

ディケイドとディエンドは甲板に上がり、ディケイドはライドブッカーから二枚のカードを取り出し、一枚をディケイドライバーに装填。

《KAMEN RIDE『RYU-KI』!》

ディケイドに三体の残像が集まり、ディケイドは炎の力を持つ紅き龍の戦士、《仮面ラ

イダー龍騎《の姿に変身した。

D—龍騎

「焼き雅言はウエルダンでいこう。」

さらに二枚目のカードを装填。

《ATTACK RIDE 『STRIKE VENT』!》

デイケイド龍騎はドラゴンの頭部を模した手甲《ドラグクロ》を右腕に装備。

D—龍騎

「でりゃあああああ!!」

ボオオオオオオオツ!!

デイケイド龍騎は右腕を突き出し、ドローン軍団に向けて火炎放射攻撃。ドローンを

次々と消し炭へと変えて行く。

デイエンド

「僕も出血大サービスだ！」

デイエンドはデイエンドライバーに二枚のカードを装填。

《KAMEN RIDE 『G3—X』！ 『IBUKI』！》

新たに二人のライダー、警察が未確認生命体と戦う為に開発した、《仮面ライダーG3—X》。清めの音で魔化魍と戦う風の音撃戦士、《仮面ライダー威吹鬼》を召喚した。

デイエンド

「頼んだよ、御二人さん？」

G3—Xは専用のガトリング式機銃《GX—05 ケルベロス》を、威吹鬼はトランペット型の銃《音撃管・烈風》を装備し、腰のバックルからディスク型のアイテム《音

撃鳴・鳴風《》を取り外し合体させる。

ダダダダダダダダダダ!!

プウ!!

G3—Xはケルベロスから無数の弾丸を、威吹鬼は烈風から衝撃波を放ち、アウローラに近づくドローンを次々と落とす。

《ATTACK RIDE 『BLAST』!》

デイエンド

「ハッ!」

ドドドドドドツ!

デイエンドも負けじと加勢する。

ジャスミン

「私の奢りだ！全弾発射！」

ダダダダダダダダダダ！！

負けじとアウローラも全兵器をフル稼働させ、ドローンと艦隊を攻撃。パラメイル隊も負けじと奮闘する。

葵

「ツインバスターライフル、発射！」

ナオミ

「行っけええええええ！！」

葵のウイングガンダムゼロはバスターライフルを、ナオミのGフォートレスは機首に搭載されたダブルビームライフル、バックパックに搭載されたダブルキャノンを発射し、敵艦を次々と攻撃。

アンジュ

「沈みなさい！」

ジャキーン！

天馬

「デカイのをくれてやる！」

バツシユウウウウウウウウ！！

アンジュと天馬も負けじと、次々と敵艦を沈めていく。



く 皇宮 エンブリヲの部屋 く

その様子を、エンブリヲは自室から監視する様に見ていた。

エンブリヲ

「アンジユ?・・・私達も出るとしよう。」



くアウローラ コックピットく

ヒカル

「暁ノ御柱、間もなく射程圏内!」

ジャスマミン

「零線砲、発射準備!」

エルシヤ

「了解! 零線砲、発射準備! エネルギー充填開始!」

ガコン!



アウローラの下部が開き、巨大な大砲が姿を見せた。

ディケイド

『ジャスミン、柱の前に何かいるぞ！』

ジャスミン

「ナニツ!？」

モニターには、エンブリヲの乗るヒステリカと、レイジアを除くダイヤモンド・ローズ騎士団のラグナメールが映っていた。

ジャスミン

「ついでに出たね、エンブリヲ！」

エンブリヲは永遠語りを歌い出し、ヒステリカの収斂時空砲を展開。照準をアウローラに合わせる。



上部甲板

デイケイド

「奴の狙いはアウローラか。」

デイエンド

「そう簡単には殺らせないよ？」

デイケイドとデイエンドは各々、ドライバーにカードを装填。

《FINAL ATTACK RIDE『DE・DE・DE DECADE』!》

《FINAL ATTACK RIDE『DE・DE・DE DE-END』!》

デイケイドの目の前に金と青の巨大な10枚の光のカードたちが現れ列を成し、デイ

エンドライバーの銃口から青緑色の光のカードたちが渦を巻くように伸びヒステリカをロックオンする。

デイケイド

「食らえ！」

ドーン！

デイケイドはライドブッカーからエネルギー弾を発射。エネルギー弾は光のカードを通り抜ける度に大きくなり、巨大なエネルギーの弾と化す。

デイエンド

「この距離で届くかな？ハッ！」

ドーン！

デイエンドはデイエンドライバーから強力なエネルギー波を放ち、二人の攻撃は真つ

直ぐヒステリカへと向かう。

エンブリヲ

「ん?」

ドカーン!

二人の攻撃は見事ヒステリカに命中。ヒステリカは攻撃を真面に受けた衝撃で吹き飛ばされた。

ターニャ・イヌマ

「エンブリヲ様!」

クリス

「エンブリヲ君!」

ヒステリカは体勢を立て直すのが、攻撃を受けたショックで収斂時空砲が止まってしまった。

エンブリヲ

「ちっ、小癩な真似を！」

エルシャ

「エネルギー充填、100%！」

ジャスミン

「N式零線破壊砲アブソリュート・ゼロ、発射!!」

バツシユウウウウウウウ!!

アウローラのN式零線破壊砲から超強力な冷凍光線が暁ノ御柱に向けて放たれ、暁ノ御柱は瞬く間に凍り付く。

ガシャーン！

暁ノ御柱は中央から真っ二つに折れ、みるみる内に崩れていく。そして、地下へ通じ

る巨大な穴が姿を見せる。

サラマンディーネ

「見えた！アウラへ続くメインシャフトです！」

アンジュ

「全機、我に続け！！」

アンジュのヴィルキスを先頭に、一同はメインシャフトへと向かう。だがアンジュ達がメインシャフトへ向かうと同時に、ドローンが一斉にアウローラへ向かい始めた。

ヴィヴィアン

「アウローラが！」

天馬

「信助、神童さん、霧野さん、葵、ナオミ、明日人、ココさん、ミランダさん、ヴィヴィアンさん、ゾーラ隊長、ノンナさん、マリカさん、メアリーさん、みんなはアウローラを守って！」

「イエッサー！」

天馬の指示により、信助達13人はアウローラの護衛に、残りはメインシャフトへと向かう。

天馬

「三方向に別れて、ラグナメールを引き付けましょう！」

アンジユ

「OK！みんな聞いたわね？」

「イエス・マム！」

アンジユ達は3チームに分かれ、サラマンディーネ・ナーガ・カナメは東側から、剣城・ヒルダ・ロザリーは西側から、そして天馬・アンジユ・タスクは正面からシャフトに向かう。

ターニャ・イヌマ

「ここから先へは行かせない！」

だが、行く手にはダイヤモンド・ローズ騎士団のラグナメイルが立ち塞がる。

サラマンディーネ

「ナーガ、カナメ、彼女達の御相手をお願いします！」

ナーガ・カナメ

「はい、サラマンディーネ様！」

サラマンディーネはターニャとイヌマの相手をナーガとカナメに任せ、一人メインシャフトへ向かった。



く市街地く

一方、剣城達は西側を大きく迂回し市街地を低空で飛行していた。



劍城

「ヒルダさん、前方にラグナメイルです！」

ヒルダ

「クリスか！」

前方から一機のラグナメイルが接近。クリスの操るテオドーラだ。

クリス

「アンタ達、また来たの？」

ロザリー

「クリス！」

劍城

「うおおおおお!!」

劍城のランスロットが先陣を切って突っ込む。

クリス

「邪魔だよ！」

ガツン！

劍城

「どわっ!？」

ドーン！

テオドーラはランスロットを蹴り飛ばし、ランスロットは知覚のシヨツピングモールへと突っ込んだ。

ヒルダ

「劍城！」

ロザリー

「いっくのおおおおお!!」

ロザリーのグレイブはアサルトモードに変形して剣を装備し、テオドーラに向けて突っ込む。



〜 皇宮上空 〜

そして皇宮上空を飛行中のアンジュ達の前に、エンブリヲとヒステリカが現れた。

エンブリヲ

「お帰りアンジュ。やはり私達は、再会する運命の様だ。」

アンジュ・天馬

「エンブリヲ！」

タスク

「ここは俺が引き受ける！二人はアウラのところへ！」

アンジュ

「分かったわ！」

タスク

「お願いします！」

アンジュと天馬はメインシャフトに向かい、タスクはアーキバスをアサルモードに変形させヒステリカと対峙する。

エンブリヲ

「ほう、生きていたのか。」

タスク

「アンジュの騎士は不死身なのさ！」

だがアンジュと天馬の行く先には、サリアの乗るクレオパトラが待ち構えていた。

サリア

「待ってたわよ、アンジュ！」

アンジュ

「サリア!？」



くアウローラ 上部甲板く

アウローラ上空では信助達が、甲板上ではデイケイドとデイエンド達仮面ライダーがドローンからアウローラを守っていた。

デイケイド

「くそっ、コイツら次々湧いて来やがる！」

ドカーン！

ドローンの内一機がデイケイドの側で爆発。

デイケイド

「どわっ!？」

デイエンド

「司!？」

爆発の衝撃でデイケイドは吹き飛ばされた。

デイケイド

「つてて、んにやろー!!」

ガコン!

突然、格納庫のハッチが開いた。格納庫の中央にはレイジアと、黒のライダースーツに身を包んだジルの姿があった。

デイケイド

「アレは、ジルか?」

デイケイドは甲板から格納庫に下り、ジルに近づく。

デイケイド

「おい、いったい何の真似だ？」

ジル

「・・・終わらせに行くのさ、私達のリベルタスを。」

デイケイド

「・・・覚悟は出来てるのか？」

ジル

「ああ、10年以上昔から、とつくに覚悟は出来てるさ。」

ジルは左手の中指に指輪を通す。すると、そこへマギーが現れた。

マギー

「アレクトラ、アタシはアンタを許しちゃいない。だから帰ってきたら、ちゃんと愚痴に付き合いな！」

ジル

「ああ、いくらでも聞いてやる！」

ジルとマギーは拳をぶつけ、ジルの乗るレイジアは飛び立った。

ヴィヴィアン・ココ・ミランダ・ノンナ・マリカ・メアリー

「司令!？」

神童・信助・霧野・葵・明日人・ナオミ

「ジル総司令!？」

ゾーラ

「ジル!？」

ジル

「お前達良く見とけ。銃とはこうやって使うモノだ!!」

ダダダダダダダッ!!

レイジアは両手にライフルを装備し乱射。ドローンの大半を落とす。



ジル  
「後は頼んだぞ！」

ジルはそう言うと、レイジアと共に飛び去っていった。

ヴィヴィアン

「司令、スゲー！」

デイエント

「ああ、しかもカッコいい！」



く ショッピングモール エントランスく

一方、ショッピングモールに突っ込んだ剣城とランスロットは・・・。

劍城

「くそっ、急いでヒルダさん達のところに戻らないと！」

「そこに誰か居るの!?!」

突然、何処かから女性の声がした。

劍城

「……っ!?!」

「お願い、誰でも良いから助けて！」

今度は助けを求める少女の音がする。

劍城

「……あつちか。今行くぞ！」

劍城はランスロットをアサルトモードに変形させ、声の主を探す。

劍城

「此処か。」

ランスロットは瓦礫を退かす。だが瓦礫を退かして直ぐ、劍城は眼を丸くした。

劍城

「貴方は・・・!？」

声の正体は、以前エンデラントで会ったヒルダの母エミリアと、妹ヒルダだった。

ヒルダ

「ロボット?」

エミリア

「っ!？」

劍城

「……。」

劍城はランスロットのハッチを開け、エミリアとヒルダの前に姿を見せた。

エミリア

「貴方は、確かあの時の……。」

劍城

「久し振りですね、お母さん。」

エミリア

「助けてくれてありがとう……ねえ、もしかしてヒルダも近くに居るの?」

劍城

「ええ。今丁度、俺達の真上で戦ってる筈です。」

エミリア

「あの子……元気にしてるかしら?」

劍城

「聞いてどうするんです?あの日貴方がヒルダさんを否定した様に、ヒルダさんもあの後貴方を否定した。もう家族の縁は切れてる筈ですが?」

冷たい言葉をかける劍城と、何も言い返せず黙り込むエミリア。すると、ヒルダは劍城にこう伝えた。

ヒルダ

「あのね、ママ本当はお姉ちゃんに会えて凄く嬉しかったんだよ。」

劍城

「ナニ？」

ヒルダ

「お兄ちゃん達が家を出ていった後、ずっと言っていたんだ。何であの時、あの子にお帰りって言ってあげなかったんだろう・・・何であの子に会えた事を喜べなかったんだろうって。」

エミリア

「・・・あんな態度を取ってしまったんですもの。今更言っても、信じてはくれないわよね。マナを失った今なら分かるわ。あの子はずっと頑張ってきたのに、私が全て台無しにした・・・私には、あの子の母親を名乗る資格なんて、最初から無かったのよ・・・。」

エミリアはその場で泣き崩れた。

劍城

「……。」

エミリア

「……ねえボク、名前は？」

劍城

「俺？劍城です。」

エミリア

「じゃあ劍城君、娘は貴方をお願いするわ。貴方みたいな人が居れば、きっとヒルダも幸せになれるわ！」

劍城

「お母さん……。」

劍城は一瞬驚いたが、直ぐに笑顔を見せた。

劍城

「……はい！ヒルダさんの事は、俺に任せて下さい！」

エミリア

「……ありがとう、劍城君。」

ヒルダ

「お兄ちゃん、コレ！」

と、ヒルダは一冊のノートを劍城に投げ渡した。ノートの中には、様々な料理の作り方が書いてあった。

ヒルダ

「ママがお姉ちゃんの為に作ったレシピ帳だよ！帰ったら、お姉ちゃんに渡してあげて！」

劍城

「ありがとうございます。では、俺はこれで……。」

劍城はランスロットのハッチを閉め、ショッピングモールを離れ空へと飛び立った。そしてランスロットを見送った後、二人はモールの外へ出た。

ヒルダ

「お兄ちゃん、良い人だったね。」

エミリア

「ええ．．．。」

ヒルダ

「あんなお兄ちゃんが一緒なら、お姉ちゃんもきつと大丈夫だよね？」

エミリア

「ええ、きつと大丈夫よ．．．ヒルダをお願いね、剣城君。」

暗い空の下、二人は共に空を見上げた。



く 皇宮上空く

皇宮上空では、ヴィルキスとペガサスがクレオパトラと交戦していた。



天馬

「クツ、パラメイル2体相手でも強い！」

アンジユ

「こっちは急いでるのよ！邪魔しないで！」

サリア

「ねえアンジユ、新しい世界ってどんなのだと思う？」

アンジユ

「はっ？」

サリア

「じゃあ教えてあげる・・・それは、貴方が居ない世界よ!!」

クレオパトラは剣を振り上げ、ヴィルキスに向けて勢い良く振り下ろす。

ガキーン！

だが突然目の前にレイジアが現れ、レイジアはクレオパトラの剣を受け止めた。

アンジュ

「あれって、レイジア!？」

天馬

「いったい誰が・・・？」

クレオパトラは一旦後ろに下がる。するとレイジアのハッチが開き、ジルが姿を見せた。

ジル

「エンブリヲの騎士と言うから、どれほど強くなったかと思えば・・・期待外れだなサリア。」

突然のジルの登場に、三人は驚いた。サリアもクレオパトラのハッチを開け、ジルと対面した。

ジル

「久し振りだなサリア。元気にしてたか？」

サリア

「今更何しに来たの？」

ジル

「何って会いに来たのさ、昔の男に。」

サリア

「えっ？」

ジル

「なんだ、聞いてないのか？私はエンブリオの愛人だったんだ。」

サリアはジルの言葉に動揺していた。

ジル

「さあ、退いてくれるかい？」

サリア

「貴方の言葉はもう信じないわ！私はエンブリオ様の騎士、ダイヤモンドローズ騎士団団長、サリアよ！あの方の所へは行かせない！」

ジル

「・・・だそうだアンジュ、天馬。アウラの所へは行つて良いらしい。」

アンジュ

「じゃあ、遠慮無く行かせて貰うわ！」

天馬

「ありがとうございます、ジル総司令！」

ヴィルキスとペガサスはフライトモードに変形し、メインシャフトへ向かった。

サリア

「待ちなさい！」

クレオパトラはヴィルキスに銃を向けるが、レイジアが立ちはだかった。

ジル

「おっと、私の相手をしてくれるのだろうか？」

サリア

「邪魔をするなら、斬るわ!!」

ジル

「ほう・・・そこまで言うなら、殺ってみるがいい!!」

ガキーン!

## E p. 27 / 世界消滅へのカウントダウン 《中編》

ダダダダダダッ!!

アンジュ達がラグナメールと戦っている一方、ヴィヴィアン達はドローン軍団からアウローラを守っていた。

ヴィヴィアン

「飛んで火に入るカブトムシー！」

だが、いくら落としてもドローンが減る気配が無い。

ココ

「落としても落としてもキリが無いよ…」

霧野

「いったい何処から湧いてくるんだコイツら！」

ゾーラ

「泣きごとと言ってんじやないよ！この船でみんなと一緒に帰るんだ！お前ら、しっかり守りな!!」



〜 皇宮上空 〜

皇宮上空では、サリアのクレオパトラとジルのレイジアが激しくぶつかり合っていた。

ジル

「ラグナメールと騎士の紋章・・・それで強くなったつもりか？」

サリア

「エンブリオ様は、私に全てを与えてくれたわ！強さも、愛も、全て！」

ジル

「愛だど？ヤツは誰も愛したりはしない。利用するためだけに餌を与え、可愛がるだけ

だ。私もそうやって弄ばれ、全てを失った．．．目を覚ませ、サリア！」  
サリア

「言つたでしょ？ 貴方の言葉は信じないって！アレクトラ、私を利用していたのは貴方の方よ！」

ガキーン！

クレオパトラとレイジアは激しく刃をぶつける。

サリア

「私には何も無かった！皇女でもなければ歌も知らないし、指輪だって持ってない！どんなに頑張つても選ばれなかった！ヴィルキスにも、貴方にも!!」

ガンツ！

クレオパトラはレイジアを蹴り飛ばした。



ジル

「チイツー！」

サリア

「でも、エンブリヲ様はそんな私を選んでくれた!! だからアレクトラ、貴方なんかもう要らないのよ!!!」

ガシャーン！

クレオパトラは剣を振り下ろし、レイジアの光の盾を破壊し、左足を切断した。

ジル

「クッ！なるほど・・・強くなったじゃないか、サリア!!」

サリア

「っ!!うるさい!!!」



く市街地上空く

市街地上空では、ロザリーのグレイブとヒルダのアーキバス、そして劍城のランスロットがテオドーラと戦っていた。

ロザリー

「こんのおおおおお!!」

ズドーン！　ズドーン！

グレイブは肩の連装砲から砲弾を発射する。だがテオドーラは光の盾を展開し砲弾を防いだ。

ヒルダ・劍城

「はあああああ!!」

ガキーン！

今度はアーキバスとランスロットが剣で攻撃するが、テオドーラは光の剣を出現させ二機の剣を防ぎ、二機を蹴り飛ばした。

ヒルダ

「くそっ！」

劍城

「以前より、更に強さが増している！」

クリス

「弱っ・・・その程度で殺すとか、笑わせないでよ！」



くメインシャフト入口 上空く

そしてメインシャフトの真上では、エンブリヲのヒステリカとタスクのアーキバスが交戦していた。

エンブリヲ

「全く無駄な抵抗をする。世界の崩壊は止められないと言うのに・・・。」

タスク

「いや、止めてみせる！この世界を守るって、アンジュと約束したからな！」

エンブリヲ

「哀れな男だ・・・アンジュは、私と共に新世界に行くのだよ!!」

ガキーン！

ヒステリカとアーキバスは剣をぶつけ合い、火花を散らす。

エンブリヲ

「決して汚されることの無い美しき、しなやかな野獣の様な気高き、実に飼い慣らし甲斐がある。タスク、お前は知るまい。アンジュの乱れた姿・・・彼女の生まれたままの姿を。」

タスク

「知ってるさー！アンジュの、内腿のホクロの数まで！」

エンブリヲ

「ナニ？」

タスクの発言に、エンブリヲは少し動揺した。

タスク

「お前は何も知らないんだな？じゃあ教えてやるよ。アンジュは乱暴で気紛れだけど、よく笑って、直ぐ怒って、思い切り泣く、最高に可愛い女の子さ！彼女を飼う慣らすだつて？寂しい男だな、お前は!!」

ガキーン！ ドーン！

アーキバスはヒステリカの剣を弾き、キックを叩き込んだ。ヒステリカは少し後退りしバランスをとる。

エンブリヲ

「貴様、アンジュに何をした？」

タスク

「アンジュとしたんだよ、最後までね！」

エンブリヲ

「ナニイ!？」

タスク

「触れて、キスして、抱きまくったんだ！」

エンブリヲ

「貴様、下らんホラ話で我が妻を愚弄するか!？」

タスク

「真実だ！彼女は、俺を受け入れてくれた・・・だからもう、俺は何も怖くない!!」

エンブリヲ

「何と卑猥で破廉恥な真似を・・・。」

キイン！

エンブリヲの怒りに反応するかの様に、ヒステリカの目が一瞬だけ強く光った。

エンブリヲ

「許さんぞ、我が妻を凌辱するなど……貴様の存在、全ての宇宙から消し去ってくれる  
!!」



くアウローラ 上空く

一方、ヴィヴィアン達も全身全霊を尽くしてアウローラを守っていた。

ヴィヴィアン

「飛んでけ、ブンブン丸!」

ドドドドドンッ!

信助

「うおおおおお!!」

ドカーン!

ヴィヴィアンのレーザーはブーメランブレードを投げドローンを次々と攻撃。信助のタイタニアスは両手に巨大なバリアを展開し、ドローンを挟み込み破壊する。

ドカーン!

だが生き残った数機がアウローラのフィールドを突破し、エンジンを攻撃。

信助

「しまった!アウローラが!」

ザバーン!

アウローラはエンジンを損傷し、推進力を失い急降下。沿岸部の入江に着水した。





「アウローラ コックピット」

ジャスミン

「状況報告！」

オリビエ

「先の攻撃により、第一エンジン損傷！着水時の衝撃により、第二・第三・第七ブロック破損！」

エマ

「防御システムダウン！フィールド消失しました！」

エルシャ

「対空火器も沈黙！」

ジャスミン

「丸腰って事か・・・。」

ジャスミンは慌ててメイに連絡を入れる。

ジャスミン

「メイ、治せるかい？」

メイ

『任せて！20分で片付ける！』



くアウローラ 上部甲板く

アウローラが機能を失い、ドローン達は一斉に襲いかかる。

デイケイド

「海東、アウローラの対空火器が沈黙した！」

デイエンド

「よし、分かった！」

シユン！

G3—Xと威吹鬼が甲板から消え、デイエンドはドライバーに三枚のカードを装填。

《KAMEN RIDE 『ZOLDA』！ 『KAIXA』！ 『PSYGR』！》

デイエンド

「出血大サービス第二弾！」

デイエンドは新たに三人のライダー、鏡の世界ミラーワールドで戦う13人の戦士の一人《仮面ライダーゾルダ》と、彼の契約モンスターである《マグナギガ》。一度死んだ人間が覚醒し蘇ることで生まれる人類の進化形態オルフェノクと戦う為に生み出された、己の信念だけに生き愛する者の為に戦ったX（カイ）の戦士《仮面ライダーカイザ》と、彼の専用マシン《サイドバツシャー》。そして同じく、帝王のベルトの1つである「天のベルト」を持つΨ（プサイ）の戦士《仮面ライダーサイガ》を召喚した。

ゾルダ

「こういうゴチャゴチャした戦いは好きじゃないが、まあ仕方ない！」

ゾルダはマグナギガの背中に専用武器《機召銃マグナバイザー》をセット。そして目標をドローン軍団に定め引き金を引くと、マグナギガの装甲が開き、ミサイルやレーザー、砲弾が次々と発射され、ドローンを次々と破壊。

カイザ

「俺に帰る場所なんかねえ。だがせめて、アイツらの帰る場所くらいは守ってやる！」

カイザはサイドバツシャーをビークルモードからバトルモードへ変形させ、右腕の4連装濃縮フォトンブラッドバルカン砲《フォトンバルカン》と、左腕の6連装ミサイル砲《エグザップバスター》を一斉発射し、ドローンを攻撃。

サイガ

「Let the game begin！」

サイガは背中に装備したバックパックで飛行しながらドローンを次々落としていく。

霧野

「スッゲー！」

だがドローンは次から次へと現れ、一向に無くなる兆しが無い。その時だった。

ギヤアアアアアアア!!

突然、ミスルギ皇国の上空に幾つものシンギュラーが出現し、大量のドラゴン達が現れた。

神童

「ドラゴン！ いったい何故・・・？」

その様子は、コックピットのジャスミン達にも見えていた。

ジャスミン

「何が起きてるんだい!？」

リイザ

「恐らく時空融合の影響で重力場が脆弱になり、特異点が自然開放したのでしょうか。」

すると、コックピットのディスプレイに一人の人物が映し出された。

大巫女

『聞こえるか、ノーマの民よ。我はアウラの巫女。』

リイザ

「大巫女様!」

大巫女

『我らアウラの民は、これより貴艦を援護する!』

ドラゴン達は一齐に攻撃を開始し、ドローンを全て破壊。そして動けなくなったアウローラを、三体のガレオン級ドラゴンが引き上げた。

デイケイド

「スツゲエ……。」

デイエンド

「ここまで来ると、もうサービスは必要無いかな？」

その様子は、タスクとエンブリヲの目にも入っていた。

タスク

「形勢逆転だな、エンブリヲ！」

エンブリヲ

「そう見えるか？」

そう言うと、ヒステリカはドラゴンの軍勢に手を伸ばす。

タスク

「エンブリヲ、いったい何を？」

キーン！

シュン！

すると又してもヒステリカの目が一瞬光り、同時にサリア達がラグナメールと共にドラゴンの軍勢の中に瞬間移動した。

サリア・ジル

「っ!？」

ターニャ・イヌマ

「っ!？」

クリス

「エンブリヲ君、これは!？」

エンブリヲ

「君達は、私のために時間を稼いでくれ。私は花嫁を迎えに行かなければならない。頼んだよ。」



エンブリヲがそう言うと、ヒステリカはメインシャフトへと向かった。

ターニャ

「コントロールが効かない!?!」

イヌマ

「どうなってるの!?!」

サリア

「エンブリヲ様、お待ちください!」

ギャアアアアアア!

突然コントロールが効かず暴れまわるヴィクトリア、エイレーネ、クレオパトラにドラゴンが襲いかかる。

ガシツ!

だが、間一髪でヴィクトリアをウイングゼロが、エイレーネをダブルゼータが、そしてクレオパトラをレイジアが救った。だがレイジアはドラゴンの攻撃を受け、右スラスターを失った。

ジル

「これがエンブリオの本性だ！目を覚ませ、サリア！私のように全てを失う前に！」

サリア

「アレクトラ……。」

ジルはそう言い残し、ヒステリカの後を追いかけた。

クリス

「嘘……嘘だよね？エンブリヲ君……。」

クリスは絶望していた。友達と信じていた者に捨てられ、裏切られた事に。

クリス

「また捨てられた・・・また裏切られた・・・！うわああああ!!」

ババババババツ!

クリス

「もう・・・もう何も信じない!みんな死んじやえ!!」

絶望し自暴自棄となったクリスは銃を乱射し、ドラゴン達を次々と落としていく。

ガシツ!

だがヒルダのアーキバスがテオドーラを背後から拘束、動きを封じた。

ヒルダ

「やめろクリス!自分から友達だって言う奴が、本当の友達なわけ無いだろ!」

クリス

「アンタ達が、私を見捨てたからでしょ!」

テオドーラはアーキバスを振り払い剣を振り下ろす。だが今度はロザリーのグレイブがテオドーラの剣を受け止めた。

ロザリー

「聞いてくれクリス！私は見捨ててなんかない！」

クリス

「よって集って私の事馬鹿にして、私がこんな苦しんでるのに……どうして分かってくれないのよ!？」

ガンツ！

テオドーラはグレイブを蹴り飛ばす。だが、今度は劍城のランスロットが背後からテオドーラの動きを封じ、テオドーラのハッチをひっぺがした。

劍城

「ある男が言っていた！友達ってというのは、言葉を交わし、思いをぶつけ合ううちになる

もの、それが本当の友達だつて！」

ロザリー

「そうだよ！言わなきや分からないよ！アタシ、馬鹿なんだから!!」

ロザリーはグレイブをフライトモードに変形させ、テオドーラに急接近。

ロザリー

「クリス!!」

そして自らテオドーラに向けてジャンプし、クリスに抱きついた。だがその拍子でクリスはコックピットから放れ、二人は共に落ちて行く。

クリス

「離して！落ちてるよ！」

ロザリー

「良いよ、一緒に死んでやる！」

クリス

「えっ?」

ロザリー

「アタシは、アンタが居なくちゃ駄目なんだ! アンタが好きなんだよ、クリス!!」

クリス

「私の事、見捨てたクセに……!」

ロザリー

「見捨ててねえ! 信じてくれよクリス! アンタがアンタのこと、見捨てるわけねーだろ!? だって、アタシ達だけじゃねーか! アンタの胸のサイズも、弱い所も、ヘソクリの隠し場所も全部知ってるのは!」

ギユツ

ロザリーはクリスを思い切り抱きしめる。

ロザリー

「もう一回、信じてくれよ……もう一回、友達になってくれよ……クリス……!」

クリス

「ロザリー……!!」

ヒルダ

「でりやああああ!!」

ヒルダのアーキバスは落下するロザリーとクリスを受け止め不時着。

劍城

「ヒルダさん!?!」

ランスロットはフライトモードに変形し、アーキバスの側に着地。劍城はランスロットを降りアーキバスに向かう。アーキバスは不時着の際に左右のスラスタを失い、ロボロになっていた。ヒルダはハッチを開け、外に出る。

劍城

「大丈夫ですか!?!」

ヒルダ

「ああ、大丈夫さ。アタシも、アイツらもな……。」

アーキバスの手の中で、ロザリーはクリスを抱きしめ泣いていた。

ロザリー

「ごめんよ……クリスマス！」

クリス

「許さない……新しい髪留め買ってきてくれるまで……。」

ロザリー

「全部片付いたら、一緒に探しに行こうぜ？一番良いヤツ買ってやる！」

クリス

「ゲームする時、ズルしない？」

ロザリー

「ああ、しない！」

クリス

「お風呂の一番、譲ってくれる？」

ロザリー



「ああ、もちろん！」

クリス

「ロザリー……！」

クリスは涙を流し微笑み、ロザリーを優しく抱きしめた。

クリス

「馬鹿みたい……世界が終わるって時に、私達何やってるんだらう？」

ヒルダ

「仲直り……だろ？」

ヒルダはアーキバスを降り、ロザリーとクリスに近づく。ロザリーとクリスは立ち上がり、三人は笑顔を見せる。

ロザリー

「ヒルダ、アタシの台詞盗ったな？」

ヒルダ

「悪い、言わねえように黙っとくつもりだったんだけど、つい出ちまったよ。」

クリス

「変なの。」

ヒルダ

「お前には言われたくねえよ。お帰り、クリス！」

クリス

「ただいま、ロザリー！ヒルダ！」

元の三人に戻り、三人は喜び、剣城は微笑んだ。

『全く、使えない女だ……。』

突然、何処かからエンブリヲの声がする。辺りを見回すと、上空に黒いパラメイルが数機浮遊していた。

ロザリー

「何だよアレ!？」

ヒルダ

「黒い、グレイブ?」

クリス

「《ダークグレイブ》。エンブリヲが作ったラグナメールの量産機だ!」

エンブリヲ

『クリス、もう君には用は無い。ここで消えるがいい。』

ダークグレイブは手に装備していたライフルを構える。

ガシン!

だが突然、ランスロットがヒルダ達の前に立ち、上空のダークグレイブ達と対峙した。

ヒルダ

「剣城!？」

ロザリー

「何やってんだよ剣城!？」

剣城

「俺がアイツらの相手をします! その隙に、皆さんは退避を！」

クリス

「何言ってるの!?! アレだけの数が相手じゃ、勝ち目無いよ！」

剣城

「・・・ヒルダさん。」

ヒルダ

「?」

剣城

「今このタイミングで言うのもアレですが、言わせてください。」

俺・・・ヒルダさんの事が好きだ。  
ヒルダ  
「は、はあ!?!」

劍城の突然の告白に、ヒルダ達は顔を赤く染め仰天した。

劍城

「ヒルダさんにとってアンジュさんが王子様なら、今の俺にとってヒルダさんは俺のお姫様なんだ。俺が初めて愛おしいと思った女性……俺にとって誰よりも傍に居たい、守りたい大切な存在……それがヒルダさんだった。」

ヒルダ

「劍城……。」

劍城

「ヒルダさんがアンジュさんを好きなのは知っています！だから、俺の想いは貴女に届くことは無いかも知れない！だがそれでも、俺は何があっても貴女を守る！例えば、この身が亡びる事になろうとも……貴女は俺にとって、やっと見つけた最愛の人だから!!」

キイイイイインツ！

劍城

「っ!?!」

突然、ランスロットとヒルダのアーキバスが光りだした。

ヒルダ

「な、何だ!?!」

アーキバスは光の粒子となり、ランスロットの翼と背面を中心に集まりだした。翼は戦闘機を思わせる形状に変化し、マント型スラスターは二基の大型スラスターに変化し、さらにアーキバスと同形状の二基の翼型スラスターを装備。そして赤いフレームは黒に、アーマーは銀色から全体的に赤を基調としたカラーリングに変化した。

ヒルダ

「ランスロットの……。」

ロザリー・クリス

「姿が変わった!?!」

劍城

「これが俺の新しい力、《ランスロット・スクリーム》だ!!」

ガコン！

ランスロット・スクリームは背面の大型スラスタをキャノン砲へと変形させ両肩に装備。砲門にエネルギーが集まり、劍城は照準をダークグレイブに合わせる。

劍城

「食らえ！ 《ナル光線キャノン》！！」

バツシユウウウウウウウ！！

ランスロット・スクリームはキャノン砲から強力なビームを発射。ダークグレイブ達はビームに巻き込まれ消滅した。

ヒルダ

「スツゲェ……。」

ロザリー



「何だよ、あの威力……。」

クリス

「ダークグレイブを、一瞬で……。」

ランスロット・スクリームの方に圧倒され、ヒルダ達は言葉を失った。

劍城

「ヒルダさん、大丈夫ですか？」

ヒルダ

「えっ？あ、ああ大丈夫、ありがとな。」

劍城

「一旦アウローラに戻りましょう。ここに居ては危険です。」

ヒルダ

「わ、分かった。」

ランスロット・スクリームはフライトモードに変形し、ヒルダは僅かに動揺しながら劍城の後ろに乗り込んだ。そしてロザリーはグレイブに、クリスはテオドーラに乗り込

み、三機は飛び立った。

ヒルダ

(劍城・・・。)

この時、ヒルダの中に劍城に対する謎の感情が生まれた。だがヒルダ自身、その感情には覚えがあった。

ヒルダ

(この感じ、アンジユの時と同じ・・・。そっか、アタシも劍城のこと・・・。)

何かに気付き、ヒルダは静かに優しく微笑んだ。

# E p. 27 / 世界消滅へのカウントダウン 《後編》

く 暁ノ御柱 最深部く

その頃、サラマンディーネの乗る焰龍號はメインシャフトを進み、アウラの居る暁ノ御柱地下最深部に到着した。

サラマンディーネ

「アウラ・・・アウラなのですね！」

焰龍號はアウラに近づく。だが、アウラの周囲は強力なバリアで包囲されていた。

アンジユ

「サラ子！」

天馬

「すみません、遅れました！」

そこへアンジユのヴィルキスと天馬のペガサスが合流。

天馬

「いっけええええええええええ！」

バッシユウウウウウウウウ!!

ペガサスはソニックバレットから高出力のビームをアウラに向けて放つ。だがバリアには効果が無い。

天馬

「俺のソニックバレットが効かない!？」

アンジユ

「何て強力なバリアなの！」

と、今度は天井の穴から大量のドローンが出てきた。

サラマンディーネ

「仕方ありませんね・・・アンジュ、天馬殿、あの円盤の相手をお願いします！」

天馬

「サラマンディーネさん、まさか収斂時空砲を撃つつもりですか!？」

サラマンディーネ

「それしか、アウラを救う方法はありません！」

アンジュ

「アウラごと吹き飛ばさない？」

サラマンディーネ

「3割引きで撃ちますから、御安心を！」

アンジュ

「じゃあ、さっさとやっちゃいなさい！」

天馬

「コイツらの相手は俺達が引き受けます！」

焰龍號はアウラから距離をとり、ヴィルキスとペガサスは焰龍號に近づこうとする物

を中心にドローンを落としていく。

サラマンディーネ

「〜♪」

サラマンディーネはアウラに狙いを定め、永遠語りを歌う。

キイイイイイインツ！

サラマンディーネの歌と共鳴するかのように焰龍號のボディが金色に変わり、肩の収斂時空砲が展開した。

バツシユウウウウウウウ！！

焰龍號は収斂時空砲をアウラに向けて発射。

ピカアアアア！

収斂時空砲がバリアにぶつかった瞬間、辺りは強い光に包まれた。光はメインシヤフトを通り地上に放たれ、ついにアウラが地上に姿を見せた。

サラマンディーネ

「アウラ！」

天馬

「やったー！」

アンジユ

「これで時空融合を止められるわー！」

アンジユ達は急いで地上へ向かう。そしてアンジユと入れ違いになるように、エンブリヲとヒステリカが最深部に到着した。

エンブリヲ

「フツ、やってくれるじゃないか．．．。」

ジル

「アンタの負けだね、エンブリヲ。」

そこへジルとレイジアが到着した。

エンブリヲ

「アレクトラ……。」

ジル

「出ていくんでしょ？勝とうが負けようが、この世界を捨てて……お願い、私も連れて行ってよ。」

エンブリヲ

「ナニ？」

エンブリヲは驚いた。今まで散々自分に牙を向けていた女が、突然掌を反したのだから。二人は各々の機体を降り、エンブリヲはジルに問い返した。

エンブリヲ

「どういう風の吹き回しだ？アレクトラ。」



ジル

「分かったんだ。私、まだ貴方を……。」

エンブリヲ

「そうか……だが済まない、残念だが君を連れていく事は出来ない。」

ジル

「どうして？あんなに愛してくれただじゃない？」

エンブリヲ

「私は、君を救ってあげただけだ。だって、見ていられなかったからね。あの頃の、許されぬ恋に見悶える君の姿が……。」

ジル

「……そうやって、私から全てを奪ったんじゃない。心も、誇りも、全て！」

ジルはエンブリヲの本心を知り、右腕と怒りの目を向ける。

エンブリヲ

「その右腕で、私を殺すつもりかい？」

ジル

「違うわ。だって、貴方は死なないでしょ？だから・・・。」

カチャ

ジル

「こうするのさ!!」

バンツ!

ジルは右手を外し、右腕から凍結バレットを放ち、エンブリヲの身体に撃ち込んだ。

エンブリヲ

「こ、これは凍結バレット!?!」

エンブリヲは瞬く間に凍り付いた。

ジル

「コレで、もう何処にも逃げられまい。」

『なるほど、こんな手を考えていたとはね。』

突然ヒステリカが動き出し、エンブリヲの声を発しだした。

ジル

「ナニッ!？」

エンブリヲ

『だが、まだ詰めが甘いな。』

ヒステリカは頭部の女神像の目からレーザーを放つ。

ドーン!

だが突然、ジルの目の前に巨大な火の玉が落ち、レーザーを防いだ。

エンブリヲ・ジル

「!?」

炎が消え、ジルとヒステリカの前に一人の青年が姿を見せた。赤褐色の肌に赤い衣を纏った美青年・・・そう、エンマ大王だ。

ジル

「お前は・・・?」

ヒステリカは凍り付けになったエンブリヲをレーザーで破壊。その直後、ヒステリカの肩に新たなエンブリヲが現れた。

エンブリヲ

「貴様、いったい何者だ?」

エンマ大王

「我はエンマ大王! 妖怪の頂点に君臨する者だ!」

エンブリヲ

「エンマ大王?」

エンマ大王

「エンブリヲ、お前の目論みは全て絶たれた!今すぐ投降し、世界を元に戻せ!」

エンブリヲ

「フツ、果たしてそうかな?」

エンマ大王

「何?」

エンブリヲ

「貴様は知るまい。アウラを解放したところで、時空融合を止める事は出来んよ。」

そう言い残し、エンブリヲとヒステリカは飛び立った。

ジル

「どういう事だ?アウラが解放されれば、時空融合を止められるのでは無かったのか?」



く 皇宮 上空く

その頃、アンジユ達はメインシャフトを抜けタスクと合流していた。だが、時空融合は止まる事無く、進む一方だ。

アンジユ

「ねえ、これってどういう事？」

天馬

「アウラを解放したのに、時空融合が止まらない！何で・・・？」

「アウラのエネルギーはあくまで時空融合の起爆剤だ。後は無限宇宙の位相エネルギーによって、勝手に融合は進むのさ。」

いつの間にか、アンジユの後ろにはエンブリヲが居た。

アンジユ

「っ!？」

シュン！

エンブリヲはアンジユが振り向くと同時に、アンジユの指輪とライダーズーツをヴェルキスに残し、アンジユと共に消えた。

天馬

「アンジユさん!?!」

キイイイイイインツ！

すると突然、ペガサスが光り出した。

天馬

「っ!?!」

シュン！

そしてアンジュとエンブリヲと同様に、一瞬で姿を消した。

タスク

「アンジュ!?!」

サラマンディーネ

「天馬殿!?!」



くアウローラ 格納庫く

タスクとサラマンディーネはヴィルキスを回収、ジルはエンマ大王を連れて地上に戻り、一同はアウローラに帰還した。そこにはサリア、ターニヤ、イヌマの3人の姿もある。

サリア



「ごめんなさい、アレクトラ・・・私・・・。」

サリア達はジルに、今までの事を深く謝罪する。だがジルは、そんなサリアの頭を優しく撫でる。

サリア

「えっ?」

ジル

「・・・ホント、アンタは私そっくりだよ。まるで妹みたいだ。真面目で、泣き虫で、思い込みの激しいところから、男の趣味まで。だからアンタを巻き込みたく無かったんだ・・・。」

サリア

「アレクトラ・・・!」

ギユツ

サリアはジルを抱きしめ、ジルもサリアを優しく抱きしめる。そしてサリアはジルの

胸の中で、思いつきり泣いた。

サリア

「ごめんなさい．．．ごめんなさい．．．！」

ジル

「私の方こそ、キツく当たってゴメン．．．。」

一同はサリアとジルを優しく見守る。一方その傍らでは、エンマ大王が手鏡でアンジュと天馬を探していた。

エンマ大王

「ダメだ、何処にも二人の姿が見えん！」

明日人

「くそつ、何処行っちゃったんだ二人とも．．．。」

ドーン！

突然、轟音と共にアウローラが強く振動し始めた。

タスク

「何だ!?!」

デイケイド

「恐らく、時空融合の終わりが近づいてるって事だろう!」

だが、揺れは少しずつ小さくなり、そして止まった。

ナオミ

「止まった?」



『時間と空間の狭間・・・虚数の海・・・エンブリオはそこにいます。』

突然、格納庫内に謎の女性の声が聞こえてくる。

ヒルダ

「だ、誰だ!？」

サラマンディーネ

「この声は、まさかアウラ!？」

声の主はアウラ。アウラは自身の周りに結界を張り、生き残ったドラゴン達とアウローラを時空融合から守り、同時に時空融合の進行を抑えていた。

葵

「ねえ、さつきエンブリヲは時空の狭間に居るって言ったよね？ 天馬とアンジュさんもそこに？」

アウラ

『恐らく。ですが彼らが居るのは、あらゆる宇宙からも孤立した、特異点からも辿り着けない場所。』

ヴィヴィアン

「そこまでどうやって行けば良いのさ!？」

アウラ

『ヴィルキス・・・時空跳躍システムが解放されたあの機体と、デイケイドとデイエンドの世界を渡る力。それらが合わされば、エンブリヲの居るところへ辿り着けます。』

タスク

「でも、ヴィルキスを使えるのはアンジュだけだ・・・。」

アウラ

『いいえ。ラグナメイルは本来、人類の未来を照らす光として作られし物。強き意志、人の想いに、必ず応えてくれるはず。私が時空融合を抑えている間に、早く!』

タスク

「強き意思・・・。」

ヒルダ

「タスク、アンタがやりな。悔しいけど、アンジュとはアンタが一番強く繋がってる。」

タスク

「分かった、やってみる！」

タスクはアンジュの指輪を左手の中指に通し、ヴィルキスに乗り込んだ。

タスク

「頼むヴィルキス、俺に力を貸してくれ！」

タスクはヴィルキスの起動スイッチを押す。

タスク

「っ!？」

だが、ヴィルキスは動かない。

サリア

「動かない!?!」

信助

「そんな・・・!」

タスク

「動け!動け動け!動けよヴィルキス!」

タスクはヴィルキスに問い掛けるが、ヴィルキスは動かない。

タスク

「どうして・・・どうして動いてくれないんだ!?!」

ガンツ!

タスクはヴィルキスのボディを殴るが、それでもヴィルキスは動かない。

タスク



「ヴィルキス、お前もずっとアンジュを守って来たんだろ!?なのに、あんな奴に奪われて良いのかよ!?!目を覚ませよ、ヴィルキス!!俺に・・・俺達に力を貸してくれ!!」

『タスク……。』

タスク

「っ!？」

突然、タスクの耳に僅かだが、アンジユの声が聞こえてきた。

ヒルダ

「どうした!？」

タスク

「今、確かにアンジユの声が聞こえた！」

キイイイイイインツ！

突然、アンジユの指輪とヴィルキスのコックピットのモニターが光り出し、遂にヴィルキスが起動。白く美しいボディは、赤いラインの入った黒いボディへと変化した。

明日人

「ヴィルキスが！」

ヴィヴィアン

「スゲー！」

サラマンディーネ

「今です！ 私達も共に！」

ヒルダ

「おう！ クリス、アンタのテオドーラを貸してくれ！」

クリス

「分かった！」

ロザリー

「必ず、生きて帰つて来いよな！」

ヒルダはロザリーから指輪を受け取り、テオドーラに乗り込む。

ジル

「サリア、お前の後ろに乗せられ！私はアイツと決着をつけないならならぬ！」

サリア

「分かつたわ！」

サリアはクレオパトラに乗り込み、サリアの後ろにジルが乗り込む。

エンマ大王

「明日人、我々も共に行くぞ！」

明日人

「はい！」

葵

「私達も！」

ナオミ

「うんー！」

明日人とエンマ大王はガンダムAEG-FX、葵はウイングガンダムゼロ、ナオミはダブルゼータガンダムに乗り込む。

ターニャ

「ヴィヴィアン、エルシャ、私達のラグナメールを使つて！」

イヌマ

「私達の代わりに、エンブリヲを倒して！」

ヴィヴィアン

「おしつ、任されたー！」

エルシャ

「分かったわ！」

ヴィヴィアンとエルシャはターニャとイヌマから指輪を受け取り、ヴィヴィアンはヴィクトリア、エルシャはエイレーネに乗り込む。

デイケイド

「海東、俺達も行くぞ！」

デイエンド

「ああー！」

デイケイドとデイエンドは各々、タッチパネル式携帯電話型アイテム《ケータッチ》を取り出し、各々カードを装填しパネルを操作。

《『KUGA』！『AGITO』！『RYUKI』！『FAIZ』！『BLADE』！

『HIBIKI』！『KABUTO』！『DEN—O』！『KIVA』！》

《『G4』！『RYUGA』！『ORGR』！『GLAIVE』！『KABUKI』！『CAUCASUS』！『AAC』！『SKULL』！》

そして最後に自身のマークをタッチ。

《FINAL KAMEN RIDE 『DECADE』!》

《FINAL KAMEN RIDE 『DE—END』!》

二人は新たな姿に変化し、デイケイドは9枚のカードを胸部と肩に、デイエンドは8枚のカードを胸部に出現させる。さらに各々頭部に自身のカードを出現させ、ケータツチをベルト中央にセットし、デイケイドはバックルを右腰に装着。《仮面ライダーデイケイドコンプリートフォーム》と、《仮面ライダーデイエンドコンプリートフォーム》に変身し、デイケイドはヴィヴィアン、デイエンドはエルシャの後ろに乗り込む。

神童

「俺達も行くぞー!」

劍城・霧野・信助

「おうー!」

劍城はランスロット・スクリーム、神童はマエストロ、霧野はブリュンヒルデ、信助はタイタニアス、サラマンディーネは焰龍號に乗り込み、そしてタスクの後ろにモモカ

が乗り込んだ。

タスク

「モモカ!?!」

モモカ

「私も連れて行つて下さい! 私はアンジュリーゼの筆頭侍女です! 例え地の果ても、アンジュリーゼ様の御側に!」

タスク

「モモカ・・・よし、分かった!」

タスクはヘルメットを被り、一同は各々の機体を起動させる。

タスク

「みんな行くぞ!」

「おう!!」



タスクはヴィルキスのスロットルを回し、デイケイドとデイエンドはドライバーにカードを装填。

《FINAL ATTK RIDE 『DE・DE・DE DECADE』!》

《FINAL ATTK RIDE 『DE・DE・DE DE—END』!》

キイイイイインツ!

各々の機体が目映い光りに包まれ、そして一瞬にして格納庫から消えた。

ナーガ・カナメ

「皆様、どうか御武運を!」

To Be Continued:

## E P. 28 / 最終決戦！俺達の世界を救え！！ 《前編》

アンジユ

「う、うくん……」

エンブリヲと共に消えたアンジユ。気が付けば、彼女はベッドの上で仰向けになっていた。

アンジユ

「……………は？」

アンジユはゆっくり身体を起こす。彼女は以前ミスルギで着ていた皇女時代のドレスに身を包んでいた。

アンジユ

「そうだ！私、アイツに連れて行かれたんだ！」

ガチャ!

突然、部屋のドアが勢いよく開き、天馬が現れた。

天馬

「アンジュさん!」

アンジュ

「天馬!?!」

天馬

「良かった、やっと見つけた……。」

天馬は息を切らしながら、アンジュの無事が確認できた事に安堵した。

アンジュ

「それより天馬、ここは何処なの?」

天馬

「俺にも分かりません。気が付いたら俺、廊下で倒れてて……。」

アンジユ

「取り敢えず外に出ましょう。」

天馬

「はい！」

アンジユと天馬は部屋を出て、廊下に差し込む光を頼りに外へと出る。だが外に出た途端、二人は言葉を失った。

天馬・アンジユ

「っ!？」

二人の目の前に飛び込んで来たのは、重なり合う二つの地球と、7つの惑星が浮かぶ宇宙……見慣れた広大な墓地……見慣れた施設……そしてそれらが存在する宙に浮く島。

アンジユ

「ここっつて……!!」

天馬

「もしかして……!!」

「そう、アルゼナルだよ。オリジナルのね。」

啞然とする二人の前に、エンブリヲとヒステリカが姿を見せた。

天馬・アンジュ

「エンブリヲ!」

エンブリヲ

「二つの地球と二つの人類、マナの光と調律者、全てはここから始まったんだ。そして、間もなく全てが終わる。」

ヒステリカは二人の前に降り立ち、エンブリヲはアンジュに優しく手を差し出す。

エンブリヲ

「おいでアンジユ。特等席から新世界の誕生を鑑賞しよう。」

アンジユ

「冗談じゃないわ！」

アンジユと天馬は走り出し、アルゼナル内部へと逃げ込む。

—————

くアルゼナル グラウンドく

だが内部を通りグラウンドに到着すると、既にエンブリヲとヒステリカが待っていた。

エンブリヲ

「逃げてても無駄だよ。此処は君達の知るアルゼナルではない。」

アンジユ

「なっ!？」

天馬

「チイツー!」

天馬は左腰のラグナセイバーに手を伸ばす。

エンブリヲ

「まあ待て。少し、昔話をしよう。」

エンブリヲは語り始めた。

エンブリヲ

「この島は世界最高の素粒子研究所でね、当時こここの研究者だった私は、ここで多くのモノを発見し生み出した。君達が永遠語りと呼ぶ、宇宙を支配する法則をメロデーに変換した統一理論・・・超対称性粒子ドラグニウム・・・そして多元宇宙。別世界への進出は、新たな大航海時代の幕開けとなる。」

有人次元観測機ラグナメール、その試作零号機であるヒステリカ。この機体で、別世

界の扉を開く計画だった。だが突如発生した極所的インフレーションによってシステムが暴走し、この島は時空の狭間に取り残された……。」

スタツ

エンブリヲはヒステリカを降り、地上に降り立つ。

エンブリヲ

「だが、それこそが全ての始まりだった。ここは、時が止まった世界だったからね。」

天馬

「時が止まった世界？」

エンブリヲ

「そう、無限の時間を持つ私だけの庭……宇宙で最も安全な場所……それが此処だ。私は此処からラグナメイルを操り、世界への干渉を始めた。人類を導く調律者として、戦争を終わらせ、新たな地球を用意し、人間を作り直したんだ。残念ながらマナによる高度情報化社会は失敗した。だがアンジユ、君だけは違った……。」



エンブリヲはゆつくりと、アンジュに近づく。

エンブリヲ

「私の妻に相応しい女・・・イレギュラーから生まれた天使・・・私と共に、人類の新たな千年を作ろうじゃないか。」

エンブリヲはゆつくりと、アンジュに手を伸ばす。

アンジュ

「御断りよ！誰がアンタなんかと・・・！」

ガシッ

だがアンジュに触れる直前に、天馬がエンブリヲの腕を掴んだ。

エンブリヲ

「ん？」

天馬

「アンジュさんには、指一本触れさせない！」

天馬の瞳は赤く輝き、強いオーラを放っていた。

エンブリヲ

「ほう、面白い・・・！」

ガキン！

エンブリヲは左手に剣を持ち振り上げる。天馬は右手でラグナセイバーを引き抜き、剣を受け止めた。

天馬

「アンジュさん逃げて！」

アンジュ

「分かったわ！」

る。  
アンジュは走り出す。だがアンジュの目の前に、エンブリヲの操るヒステリカが現れ

ガンツ!

だが突如、上空から天馬のペガサスが姿を見せ、ヒステリカを殴り飛ばした。

ガキン!

ガキン!

天馬とエンブリヲは激しく剣をぶつけ合い、火花を飛ばす。

エンブリヲ

「・・・なるほど、君のその力は仲間を傷つけられる怒りから来ているのか。しかし、君の怒りはそれだけかな?」

天馬

「ナニツ？」

エンブリヲ

「君は密かに恨んでいるんじゃないのかね？誰よりも近くで共に戦い、共に同じ時間を過ごし、命を掛けて守ったにも関わらず、自分ではない者を選んだアンジユを……。」

天馬

「そんな事無い！俺はアンジユさんを心から信頼している！だから……だから、俺は……俺は……！」

エンブリヲの発言によって、天馬に迷いが生じ動きが鈍る。

エンブリヲ

「フツ……。」

バンツ

アンジユ

「っ!？」

エンブリヲは隙を突き、天馬の身体に銃を向け、赤い光線を撃つ。だが天馬は倒れず、その場で立ち尽くしたままだった。

アンジュ

「天馬!？」

アンジュは急いで天馬に駆け寄る。

ドカツ!

だがアンジュが天馬の肩に触れようとした途端、天馬は振り向き、アンジュを殴り倒した。

アンジュ

「天馬、いったい何す・・・天馬?」

アンジユは殴られた右頬を押しええ天馬に叫ぼうとした。だが天馬の目は、輝きを失っていた。アンジユは立ち上がり、天馬はゆっくりと、アンジユに近づく。

アンジユ

「アンタ、天馬に何をしたのよ!？」

エンブリヲ

「簡単だよ。彼の感情を消し、君に対する恨みを露にしたのさ。」

アンジユ

「天馬の、私への恨み?」

エンブリヲ

「彼は君に信頼を寄せる傍ら、密かに君を恨んでいたんだ。全身全霊を尽くして君を守り続け、誰よりも君の側に居続け支え続けた。しかし君は彼ではなく、あのタスクを選んだ。その結果がコレだ。」

アンジユ

「そんな・・・!」

ザシユツ!

アンジユ

「キャツ!?!」

天馬はラグナセイバーを振り、アンジユのドレスの胸元を切り裂いた。

ザシユツ!

続いて腹部。

ザシユツ!

更にスカート。

アンジユ

「天馬、お願い止めて!正気に戻って!」

エンブリヲ

「無駄だよ。今の彼には君の声は届かない。」

天馬から逃げるアンジュ。だが遂に崖へと追いやられ、逃げ道を失った。

アンジュ

「しまった！」

エンブリヲ

「助かりたくばアンジュ、私の愛を受け入れるんだ。そうすれば君達二人の命は保証する。だが断れば、彼自身の手で君を殺す。」

アンジュ

「だったら殺らせなさいよ！アンタの妻になるくらいなら、天馬に殺された方が何億倍もマシよ！」

エンブリヲ

「……ならば仕方あるまい、殺れ！」

天馬はラグナセイバーを大きく振り上げ、アンジュは身体を天馬に向け、大きく両腕



を広げた。

アンジュ

「…天馬、ごめんなさい…私は貴方の想いに、気付いてあげる事が出来なかった…ずっと傍に居てくれた貴方より、タスクを選んだ…貴方が私を恨んでいるのなら、私はそれを受け止めるわ! さあ来なさい、天馬!」

アンジュは覚悟を決め、ギョツと目を閉じる。

カチャン

アンジュ

「え．．．？」

エンブリヲ

「ナニツ？」

だが天馬はアンジュを斬らず、静かに右腕を下ろしラグナセイバーを鞘に納めた。

エンブリヲ

「貴様、いったい何を．．．？」

シャキーン!

エンブリヲ

「っ!?!」

だが次の瞬間、振り向くと同時にラグナセイバーを引き抜き、背後から近づいてきたエンブリヲの頬を斬りつける。エンブリヲは咄嗟に後ろへジャンプし避けたが、アンジュとエンブリヲは天馬の予想外の動きに驚いた。

アンジュ

「天・・・馬?」



天馬

「・・・約束しましたよね? 何があっても、アンジュさんは俺が守るって!」

天馬は振り向き、アンジュに笑顔を見せる。その瞳は青く輝いていた。

アンジュ

「天馬！」

アンジュは天馬に抱き付き、エンブリヲは仰天した。

エンブリヲ

「馬鹿な!? 貴様の感情は、全て消し去った筈だ！」

天馬

「あれ? もしかして知らないんですか? 俺や信助達の持つてる化身には、マインドコン  
トロールみたいな攻撃を跳ね返す力があるんです！」

アンジュ

「えっ? じゃあ、さっきのは……。」

天馬

「敵を欺くには先ず味方から」 って言うでしょ? だから、感情を失ったフリをしてた  
んです！」

エンブリヲ

「おのれ、小癩な真似を・・・!!」

シユン：

突然、天馬とアンジユの後方に光のカーテンが出現し、カーテンの向こうからヴィルキス達が現れた。

タスク

「アンジユ!!」

アンジユ

「タスク！それにみんなも！」

エンブリヲ

「ナニツ!?!」

ヴィルキス達はグラウンド中央に着陸し、天馬とアンジユはタスク達のところへ向かう。

エンブリヲ

「貴様、どうやって入ってきた!？」

タスク

「ヴィルキスが．．．いや、みんなが力を貸してくれたんだ！」

アンジユ

「タスク、みんな！」

タスク

「ごめんよアンジユ、遅くなって．．．。」

アンジユ

「タスク．．．ありがとう、来てくれて！」

アンジユは嬉しさのあまり涙を流し、タスクに抱き付いた。

エンブリヲ

「おのれ、こうなれば切り札を使うまで．．．。」

シュン！



エンブリヲは自身の隣に、車椅子に乗った一人の少女を召喚した。

シルヴィア

「・・・こ、此処は一体?」

アンジュ

「シルヴィア!?!」

アンジュ達の前に現れたのは、アンジュの妹シルヴィア。

カチッ

エンブリヲはシルヴィアの頭に銃口を向ける。

シルヴィア

「え、エンブリヲ叔父様!?!」

アンジュ

「っ!？」

エンブリヲ

「ハハハッ、形勢逆転だなアンジユ！君の大事な妹の命は、我が手の中にある！」

エンブリヲの行動に困惑するアンジユ達。だがたった一人、困惑する事無く、必死に笑いを堪える男が居た。

天馬

「フッフッフ・・・ハハハハハハハハハハッ!!」

突然、天馬は自身の腹と顔を押さえ、大声で笑い出した。

アンジュ

「て、天馬?」

ヒルダ

「おい、大丈夫か?」

突然の天馬の笑いに更に困惑するアンジュ達。

エンブリヲ

「貴様、何が可笑しい！」

天馬

「ハハハハハハッ！はあく……。」

ひとしきり笑った天馬はひと息つくと、再び赤い瞳をエンブリヲに向けた。

天馬

「形勢逆転ですって？エンブリヲ、その人を人質にしたって何の意味も無いですよ？その人、もうアンジュさんの妹でも何でもありませんから。」

エンブリヲ

「ナニツ？」

天馬の思わぬ発言に、その場にいた全員が驚いた。

天馬

「前にアンジュさんの目の前で、大声で言ったんです。 ”あなたなんて姉でも何でもありません!この化け物!大ツッキライ!!”ってね。」

アンジュ

「天馬?」

天馬

「大丈夫、俺に任せてください。」

天馬はアンジュに笑顔でそう言うと、シルヴィアに目を向け銃を右手に持った。

天馬

「その車椅子はエンブリヲが操っています。今すぐ降りて、逃げてください。」

シルヴィア

「私が歩けないのはご存知でしょ!?!あの人のせいで私は!」

天馬

「っ!!」

ガチャ！ バーン！

天馬は銃の激鉄を起こし発砲。銃弾はシルヴィアの車椅子に命中した。

シルヴィア

「ヒイツ!!」

アンジユ

「天馬!?!」

天馬

「つたく、黙っていれば何でもかんでも誰かのせいにしてやがって……甘ったれた事を言うな!!」

天馬の怒りの言葉に、一同は動揺した。

天馬

「前にミスルギ皇国に居たとき、モモカさんから聞いた！ 宮廷医師によれば、あんたの怪我はとつづくに歩ける状態まで回復してるそうだ。」

シルヴィア

「えっ……?」

天馬

「じゃあ何故今まで立てなかったと思う? あんたが自分の意思で立とうとしなかったからだ!」

シルヴィア

「助けて……助けてください! アンジュリーゼお姉様!!」

天馬

「……」

天馬は静かに銃を下ろした。

天馬

「……シルヴィア様、あなた今でもアンジュさんを姉だと思ってるんですか? あれだけアンジュさんを化け物呼ばわりしておいて。」

シルヴィア

「も、もちろんです!」

天馬

「だったら証拠を見せて下さい。」

シルヴィア

「しよ、証拠・・・？」

天馬

「自分の力で地上に立ち、自分の脚で走り、自ら過ちを認め、アンジュさんに心の底から謝るんです。」

シルヴィア

「謝る・・・。」

天馬

「アンジュさんだって、本当はあなたを失いたくないんだ。あなたはアンジュさんにとってたった一人の大切な妹だから、同じミスルギの血を引く最後の家族だから・・・。」

シルヴィア

「・・・!!」

シルヴィアはアンジュに目を向ける。アンジュはシルヴィアに優しい笑顔を見せていた。



天馬

「あなたがアンジュさんを本当に姉だと思っ  
ているなら出来るはずだ。女帝シルヴィア一世・  
いや、皇女シルヴィア・斑鳩・ミスルギ！」

シルヴィア

「わ、私は・・・私は・・・！」

シルヴィアは怯えながらも勇気を振り絞り、  
車椅子を降りた。

スタツ

そして、思わず自分の目を疑った。

シルヴィア

「立てた・・・？」

アンジュ

「シルヴィア！」

シルヴィアはアンジュの呼び声を聞く。アンジュは笑顔で両手を広げ、走り出す。

シルヴィア

「お姉様・・・アンジュリーゼお姉様あああ!!」

シルヴィアも大粒の涙を流し走り出す。

ギョツ！

そして二人は力強く抱き合った。

アンジュ

「シルヴィア。」

シルヴィア

「ごめんなさい・・・私、お姉様の事を化け物と・・・私、お姉様が大好きです！」

アンジュ

「私もよ、シルヴィア……。」

天馬

「良かった、アンジュさん、シルヴィア様……。」

天馬の瞳が青に戻り、一同はアンジュとシルヴィアを優しく見守った。

エンブリヲ

「……まさか姉妹の絆を修復するとは、恐れ入ったよ天馬。」

エンブリヲは、アンオウベルトを装着。

《NEG A FORM!》

エンブリヲ

「変身。」

ライダーパスをかざし、ネガ電王へと変身した。

天馬

「ネガ電王……！」

するとネガ電王の後ろから、幽汽ハイジャックフォームを含む5人の仮面ライダー、マスクドライダーシステムの第零号として作られた《仮面ライダーダークカブト》。ファンガイアの王が変身する闇の戦士《仮面ライダーダークキバ》。魔法使いの国を取り仕切る金色の魔法使い《仮面ライダーソーサリー》。黄金の果実の力を持つ、新世代の神の騎士《仮面ライダーマルス》が姿を見せた。

タスク

「あれは幽汽！それに、新しい仮面ライダー？」

更にグラウンドの上空に巨大な魔方陣が出現し、魔方陣から大量の怪物や怪人が現れた。

ジル

「おい、いったい何がどうなっている!？」

怪物や怪人達は、アンジュ達の周囲を囲むようにどんどん現れる。

デイエンドCF

「これもエンブリヲの力って事かな？」

デイケイドCF

「こうなったら、俺も切り札を出すとしよう。」

サラマンディーネ

「切り札・・・ですか？」

デイケイドCF

「ああ、こんな事もあるうかと、密かに用意しておいたのさ。この窮地を脱する事が出来る、取って置きのジョーカーをな！」

## E p. 28 / 最終決戦！俺達の世界を救え！！ 《中編》

デイケイドCF

「こうなったら、俺も切り札を出すでしょう。」

サラマンディーネ

「切り札・・・ですか？」

デイケイドCF

「ああ、こんな事もあるうかと、密かに用意しておいたのさ。この窮地を脱する事が出来る、取って置きのジョーカーをな！」

デイケイドはそう言うと、ベルトからケータツチを外し電話を掛ける。

デイケイドCF

「俺だ。出番だぞ、お前ら！」

フアーン！

突然、辺りに列車の警笛とおぼしき謎の音が響き渡る。

ヴィヴィアン

「ほえ? 何の音?」

明日人

「列車?」

フアーン!

その時、上空にシンギュラーとは異なる巨大な穴と謎の線路、そして謎の穴からその線路の上を走る謎の列車が現れた。

エルシャ

「何あれ!?!」

葵

「もしかして、電車!?!」

デイケイドCF

「時を越える列車、《デンライナー》だ。」

デンライナーは地上の怪人達を突き飛ばし、天馬達の後方で停車。ドアが開き、中から赤・青・金・紫・白の5人の怪人が現れた。

???

「ようデイケイド！呼ばれて来てやったぜ！」

???

「まったく、相変わらず君は人使いが荒いね・・・。」

天馬達は新たな怪人の出現に驚く。

天馬

「か、怪人!？」

デイケイドCF

「ああ、コイツらは《イマジン》って言う怪人達だ。赤いのが《モモタロス》、青いのが



《ウラタロス》、金のが《キンタロス》、紫が《リュウタロス》、そして白いのが《ジーク》。安心しろ、コイツらは味方だ。」

と、ウラタロスとジークはアンジュ達に目を向ける。

ウラタロス

「ねえ君達、もしかしてお困りかな？」

ジーク

「コレはコレは何と御美しい方々！そなた達のお力添えが出来るとあらば、このジーク、喜んで力を御貸し致そうではないか！」

アンジュ

「・・・なんか、妙に既視感がある二人ね？」

アンジュの問いに『うん』と頷く一同。すると、今度はリュウタロスとキンタロスが近づいてきた。

リュウタロス

「僕リユウタロス！一緒に戦ってもいい？答えは聞かないけど！」

キンタロス

「俺はキンタロス。デイケイドに呼ばれて来てみたんやが、コイツは戦い甲斐がありそうやな！」

と、今度は赤いカブトムシ型の小型メカと銀のカブトムシ型の小型メカ。さらに大きな赤い目を持つ金のコウモリっぽい小さなモンスターと、金のドラゴンっぽい小さなモンスターがデンライナーから出てきた。

サリア

「また何か出てきた!？」

デイエンドCF

「赤いカブトムシは《カブトゼクター》、銀の方は《ハイパーゼクター》。それからあのコウモリは《キバット》で、ドラゴンは《タツロット》。安心したまえ、彼らも味方だよ。」

キバット

「よう！俺様はキバットだ！力になるぜ！」

タツロット

「ビュンビューン!私はタツロツト!ドラマティックに行きますよおお!」

と、今度は大量のアメの入った籠を持った黄色い顔に黒と緑の身体をしたイマジンがデンライナーから出てきた。

???

「ごめん!キャンディの準備してたら、遅くなっちゃった!」

モモタロス

「遅いぞオデブ!」

信助

「オデブ?」

ディケイドCF

「いや、アイツは《デネブ》。モモタロス達と同じ、味方のイマジンだ。」

デネブ

「どうも、デネブです!よろしく!あの、よかったらキャンディをどうぞ。」

デネブはデンライナーを降り合流すると、天馬とアンジュ達にキャンディを配り始め

る。

モモカ

「これは、ありがとうございます！」

ヴィヴィアン

「やったー！キャンデイだキャンデイ！」

『テレポート！プリーズ！』

今度は謎の音声コールと共に赤い魔方陣が出現し、魔方陣から二人の青年が姿を見せた。右手の形をした黒いバックルと黒いジャケットを身に付け、ドーナツを片手に持った青年と、銀の鎧を全身に纏った白い髪の青年だった。

アンジユ

「今度は誰？」

ディケイドCF

「アイツは《操真晴人》。又の名を指輪の魔法使い、《仮面ライダーウィザード》で、隣

に居るのは《葛葉紘汰》。又の名を《仮面ライダー鎧武》。」

晴人

「やあ、君達かな?俺達の助けを必要としてる少年少女達は。俺は操真晴人、よろしく  
!」

紘汰

「俺は葛葉紘汰。事情はディケイドから聞いている。アイツをぶつ倒せば良いんだな?」

紘汰はネガ電王に目を向け、ディケイド、ディエンド、紘汰、晴人、モモタロス達は  
天馬達の前に並び立つ。

モモタロス

「天馬って言ったか?雑魚と連中の相手は俺達に任せな!」

天馬

「はい!助かります!」

アンジュ

「シルヴィア、貴方は安全なところに隠れてて!」

シルヴィア

「……いえ！お姉様、私も共に戦います！」

シルヴィアの放った言葉に、アンジュ達は驚いた。そしてシルヴィア、タスク、モモカ、ジルは、デイケイド達と共に並び立った。

シルヴィア

「エンブリヲ叔父様、貴方は我が愛しき兄ジュリオを殺した。いえ……それ以前に、貴方のせいで私達家族はバラバラになった！その罪、償って頂きます！」

モモカ

「貴方は我が主アンジュリーゼ様を玩んだ男……この筆頭侍女モモカ・荻野目が、絶対に許しません！」

ジル

「私のために散っていった仲間達の無念、私の怒り、私の受けた屈辱、その代償を支払ってもらうぞ！」

タスク

「お前は絶対に、俺が倒す！アンジュとの約束を果たすため……共に戦った仲間達のため！」

アンジユ

「みんな・・・!!」

モモタロス

「・・・タスクだっけか?お前達の望み、バッチリ聞いたぜ!」

モモタロス・ウラタロス・キンタロス・リュウタロス・ジークはタスクに、デネブはモモカに、キバットとタツロットはシルヴィアに、そしてカプトゼクターとハイパーゼクターはジルに近づいた。

モモタロス

「俺達が力を貸してやる!アイツにお前の全部をぶつけな!」

タスク

「モモタロス・・・分かった!」

モモタロスはタスクにライダーパスと、赤い携帯電話型のツール《ケータロス》が合体したデンオウベルトを渡す。タスクは二つを受け取りベルトを腰に装着。装着と同時に軽快な待機音が流れ、タスクはベルトにライダーパスをかざす。

タスク

「変身！」

《SUPER CLIMAX FORM!》

パスを翳した途端、七色に輝く光の粒子がタスクを包み込み、タスクは黒と銀のライダースーツへと姿を変える。さらに上半身に赤いアーマーを装着し、直後にモモタロスは、キンタロスが変身した漢字の「金」と斧を模した金の仮面を左肩に、リュウタロスが変身した龍の顔を模した紫の仮面を胸部に、ジークが変身した白鳥の翼を模した巨大な水色の仮面を背面に、そしてモモタロスが変身した2つに割れた桃を模した赤い仮面を頭部に装着。同時に複眼部分が左右に展開。イマジン5人の力が集結した時を駆ける最強の絆の戦士、《仮面ライダー電王 超クライマックスフォーム》に変身した。

電王SCMF（タスク）

「俺、参上！なんてね。」



モモタロス

『おい、勝手に俺の決め台詞取るな!』

デネブ

「モモカさん、俺が君の助けになる。一緒に戦おう!」

モモカ

「はい!デネブさん!」

デネブはモモカに、自動改札機を象った変身ベルト《ゼロノスベルト》と、赤い模様が描かれた《ゼロノスカード》を渡す。モモカはベルトとカードを受け取り、ベルトを腰に装着。ベルト上部のレバーをスライドし、ゼロノスカードをベルトに装填。

モモカ

「変身!」

《CHARGE AND UP!》

カードを装填した途端、赤く輝く光の粒子がモモカを包み込み、モモカは黒のライダースーツへと姿を変え、金の差し色が入った赤銅色のアーマーと、2頭の牛の頭のような形状をした赤銅色の仮面を装着し、さらにデネブが変身したガトリングガン型武器《デネビツクバスター》を装備。幾多の人に忘れられながらも、愛する者の為に戦い続けた時の戦士、《仮面ライダーゼロノス ゼロフォーム》に変身した。

ゼロノスZF（モモカ）

「最初に言っておきますね。私、こう見えてかーなり、強いんですからー」

デネブ

『その通り!』

カブトゼクターとハイパーゼクターは、ジルに《ライダーベルト》を預ける。

ジル

「私に、力を貸してくれると言うのか?」

カブトゼクターとハイパーゼクターは頷き、ジルはベルトを受け取り腰に装着。

ジル

「よし、では行くぞー!」

ジルはカブトゼクターをベルトにセットし、カブトゼクターの角を展開。さらにハイパーゼクターを左腰に装備し、ハイパーゼクターの角を倒す。

《HYPER CAST OFF!》

ジル

「変身!」

音声コールと共にジルは黒いスーツと、全身に赤と銀のアーマーを、頭部に巨大な角を持つカブトムシを模したマスクを装着。天の道を行き全てを司る高速の戦士、《仮面ライダーカブト ハイパーフォーム》に変身した。

《CHANGE!HYPER BEETLE!》

シルヴィア

「一緒に戦ってくれるのですか？」

キバット

「ああ！アンタならきつと、俺達の力を使える！」

タツロツト

「テンシヨン・フォルテシモ！共に戦いましょう！」

シルヴィア

「・・・はい！」

シルヴィアはキバットを右手で掴み、キバットを左手に噛ませる。

キバット

「キバって行くぜ！ガブツ！」

キバットが左手を噛んで直ぐ、左手から顔に掛けて謎の模様が浮かび上がり、腰に赤いベルトが現れる。

シルヴィア

「変身!」

タツロツト

「行きますよ!変身!」

シルヴィアはベルトにキバツトをセットし、タツロツトを左腕に装備。黄金に輝く鎧を身に纏った、エンペラー・オブ・ヴァンパイア。《仮面ライダーキバ エンペラーフォーム》に変身した。

紘汰

「晴人、俺達も行くぜ!」

晴人

「ああ!」

紘汰はオレンジの錠前《カチドキロックシード》が付いた黒いバックル《戦極ドライバー》を装備し、カッティングブレードを倒しロックシードを展開。さらに右手に7つ

のフルーツが刻まれた金の錠前《極ロックシード》を持ち、極ロックシードを起動。

《フルーツバスケット！》

起動して直ぐ、絃汰の頭上に巨大なフアスナーの様な裂け目が出現し、そこから13の果实を模した鎧が出現。絃汰は極ロックシードをカチドキロックシードに合体させ、極ロックシードを回し展開。

《LOCK OPEN！》

13の鎧が絃汰と融合し、絃汰は白銀の鎧武者、《仮面ライダー鎧武 極アームズ》へと変身した。

《極アームズ！ 大・大・大・大・大・大・大將軍！》

鎧武極

「ここからは俺達のステージだ！」

晴人は中央に右手の手形が付いた銀のバックル《ウイザードライバー》を腰に出現させ装備。レバーを操作し、手形を右手から左手に変える。

《シャバドウビ・タッチ・ヘンシーン!シャバドウビ・タッチ・ヘンシーン》

軽快な待機音声が流れ、晴人は水色の宝石の指輪《インフィニティーウイザードリング》を左手中指に通し、左手をドライバーに翳す。

晴人

「変身!」

《インフィニティー!プリーズ!》

晴人の足下に虹色の魔方陣が出現し、晴人が魔方陣を潜り抜け、ダイヤモンドを思わせる水色の宝石をちりばめた白銀の鎧を纏った、光輝く希望の魔法使い《仮面ライダーウイザード インフィニテースタイル》に変身した。

《ヒースイフドー！ボーズバビュードゴーン！！》

ウイザード∞

「さあ、シヨータムだ！」

最強のライダー8人が揃い、ネガ電王率いるライダー達と対峙する。

ネガ電王

「なるほど・・・ならば、私も切り札を使うまで！」

《FULL CAGE！》

ネガ電王はライダーパスをベルトに翳す。すると、ネガ電王から黒い紫色のオーラが溢れ出した。

鎧武極



「な、何だ!？」

ドシン!

ネガ電王の後ろにヒステリカが現れ、ヒステリカは収斂時空砲を展開。オーラは収斂時空砲に吸収され、ヒステリカの目とボディの紫の模様が赤く染まる。

ウラタロス

『ねえ、これってヤバくない?』

キンタロス

『ああ、嫌な予感がするなあ?』

リュウタロス

『やだ、僕怖い!』

ジーク

『何と・・・!』

ヒステリカはガンダムに匹敵する程に巨大化し、更にアルゼナル上空と周囲に無数の

ダークグレイブを出現させた。

サリア

「ダークグレイブ!?!」

エンマ大王

「まさか、これ程の力を隠し持っていたとは……!」

エンブリヲの秘めた力に動揺する一同。

天馬

「……こうなったら!」

天馬は走り出し、ペガサスに乗り込み飛び立つ。そしてペガサスをアサルトモードに変形させ、アンジュ達の後方に着地する。

天馬

「アンジュさん! サラマンディーネさん!」

天馬はコックピットから身体を出し、アンジユとサラマンディーネに声をかける。声に気付き一同は天馬に振り向く。

天馬

「永遠語りだ!永遠語りを歌って下さい!」

アンジユ

「永遠語り?どう言うこと?」

天馬

「それぞれの巨人の力を持つ少年達が現れ、二人の女神が歌うとき、巨人の力は一つとなり、あの世とこの世、全ての民を救う存在とならん。あの伝説を実行させるのは今しかありません!」

サラマンディーネ

「ですが、発動条件が不確定なのにそんな・・・!」

アンジユ

「やってみましょうサラ子!今まで天馬の言った事に間違いは無かった。アイツならきつと、この状況を何とかしてくれるわ!」

サラマンディーネ

「……いいでしょう、分かりました！」

ペガサスは上空に舞い上がり、アンジュとサラマンディーネは両手を合わせ瞳を閉じる。

ネガ電王

「フツ、何をしても無駄だと言うのに……。」

サラマンディーネ

「♪」

キイイイイインツ！

サラマンディーネの歌と共鳴するかのように焰龍號のボディが金色に変わる。天馬は立ち上がり、ラグナセイバーを右手に持ち天に掲げる。

アンジユ

「♪」

キイイイイイインツ!

アンジユの歌と共鳴するかの様に、ヴィルキスのボディが金色に変わる。すると、焔龍號とヴィルキスから光の筋が放たれ、ラグナセイバーに到達する。さらにランスロツト・スクリーム、マエストロ、タイタニアス、ブリュンヒルデが金のオーラに包まれ、各々の機体から光の筋が放たれラグナセイバーに集まる。

キイイイイイインツ!

ラグナセイバーは強い光を放ち、ペガサスを包み込む。

ガシャーン!

今までの白い翼が砕け、新たに巨大な金の翼が現れた。バイザーは黒から青に変わ

り、目は赤色に変化。さらに頭部は新たに青い目を持つ鷹を模した兜の様な形状に変化。腕部アーマーに鋭い爪が現れ、フレームは黒に変わり、アーマーは全て金色に変わり、そして赤く長い髪は青くより長くなった。

ヴィヴィアン

「みんな見て！」

神童

「ペガサスの・・・！」

劍城

「姿が変わっただど!？」

その場にいた全員が、ペガサスの変身に驚愕した。そしてペガサスの変身が終わり、焰龍號は元の姿に、ヴィルキスは赤いラインが入った白いボディに変わり、更にアンジユも傷だらけのドレス姿から、新たな白いライダースーツ姿に変身していた。

天馬

「コレが俺の新しい力・・・《グリフォン》だ!!」

天馬はラグナセイバーを鞘に納め、グリフォンのハッチを閉じる。

アンジユ

「みんな、私達も行くわよ!」

アンジユの一声で、メールライダー達は各々の機体に乗り込み飛び立った。そしてパラメール各機はアサルトモードに変形し、グリフォンを中心に列を成す。

キイイイイイインツ!

すると突然、マエストロ、タイタニアス、ブリュンヒルデのボディが光り出した。

神童・信助・霧野

「コレは?」

マエストロの第二の腕が巨大な翼に変化し、フレームは全てシルバーグレーに、アー

マーは全て青に統一され、目はオレンジに変わり、右半身に赤いライン、左半身に紫のラインが現れる。そして背面に巨大なブースターが現れ、《マエストロ・チェイサー》へと進化。

タイタニアスはアーマーが黒に、アーマーは信助のユニフォームと同じ、黒・白・黄色のトリコロールカラーに変わり、《タイタニアス・グランド》に進化。

そしてブリュンヒルデはフレームが全て白に、アーマーが黒に変わり、全身に金と赤のラインが加わる。そして旗はカジノのルーレットを連想させる金の杖へと姿を変え、《ブリュンヒルデ・ワルプルギス》に進化した。

ヒルダ

「マエストロ達も変わりやがった!？」

明日人

「エンマ大王、俺達も!」

エンマ大王



「ああ、やれ明日人!」

エンマ大王は明日人に剣形の鍵《エンマブレイド妖聖剣》を渡し、明日人は妖聖剣を A E G | F X のコンソールに装填。

明日人

「我に力を!エンマ大王!」

エンマ大王は炎となって A E G | F X に吸収され、A G E | F X はボディ全体が赤くなり、紫の衣を纏う。そして全身の C フォーアネルの刃が水色の炎へと変わり、《ガンダム A E G | E A ( E N M A A W A K I N G )》へと姿を変えた。

アンジュ

「行くわよ、みんな!!」

「イエス・マム!」

電王SCMF（タスク）

「みんな行くぞ!!」

「おう!!」

ヴェルキス達はヒステリカとダークグレイブに、ライダー達はネガ電王と怪人達に向かって真っ向から突っ込む。

ネガ電王

「来るか・・・ならば、迎え撃つのみ!行くぞ!!」

ネガ電王も幽汽達と怪人達を、ヒステリカはダークグレイブを引き連れて迎え撃つ。いよいよ、最終決戦の幕が上がった。

E p. 28 / 最終決戦!俺達の世界を救え!! 《後編》

アンジュ

「行くわよ、みんな!!」

「イエス・マム!」

電王SCMF(タスク)

「みんな行くぞ!!」

「おう!」

ヴィルキス達はヒステリカとダークグレイブに、ライダー達はネガ電王と怪人達に向かつて真っ向から突っ込む。

ネガ電王

「来るか・・・ならば、迎え撃つのみ！行くぞ!!」

ネガ電王も幽汽達と怪人達を、ヒステリカはダークグレイブを引き連れて突っ込む。  
いよいよ、最終決戦の幕が上がった。

天馬

「時間を操っているのは、あのヒステリカだ！ヒステリカとエンブリヲ、両方倒さないと世界は救えない！」

劍城

「なら、やることは一つだ！」

神童

「天馬とアンジュさんは、ヒステリカを頼む！」

信助

「ダークグレイブは僕達が引き受ける！」

霧野

「頼んだぞ、天馬！」

天馬

「はい!アンジユさん!明日人!」

アンジユ

「OK!」

明日人

「了解!」

天馬のグリフォン、アンジユのヴェルキス、そして明日人のガンダムAEG—EAはグレイブ軍団を潜り抜け、ヒステリカへと突っ込む。

デイエンドCF

「ここは僕に任せて、君達は行きたまえ!」

デイケイドCF

「サンキュ!頼んだぜ海東!」

デイケイド達は怪人軍団の中にデイエンドを残し、ネガ電王のライダー軍団へ向かう。

デイエンドCF

「出血大サービス第三弾！」

デイエンドは1枚のカードをデイエンドライダーに装填。

《ATTACK RIDE 『GEKIJOUBAN』!》

すると、デイエンドの周囲に8人のライダーが現れた。実験段階で判明した危険性が余りに高すぎたため、警視庁に封印されていた黒鉄の戦士、《仮面ライダーG4》。漆黒の炎の力を持つ、鏡の中の黒き龍の戦士、《仮面ライダーリュウガ》。新世代のライダーシステム「グレイブバツクル」を用いて変身する、新世代ライダーの一人、《仮面ライダーグレイブ》。帝王のベルトの1つ「地のベルト」オーガドライダーで変身するΩ（オメガ）の戦士、《仮面ライダーオーガ》。7人の戦鬼の一人、最愛の女性が鬼の身内だという理由から村人たちに暴行を受け殺された悲劇の戦士、《仮面ライダー歌舞鬼》。黄金の仮面ライダーの異名を持ち、その名に恥じぬスペックと戦闘能力を持つ青い薔薇の戦士、《仮面ライダーコーカサス》。体長3メートルを超える巨体を持つ黒き魔界城の王、《仮面ライダーアーク》。そして白い帽子とマフラーを身に着け、人知れず街を守り続けてきた

孤高のヒーロー、《仮面ライダーダースカル》。

デイエンドCF

「頼んだよ?」

デイエンド達は怪人軍団に向けて、各々攻撃を仕掛ける。

ネガ電王

「許さんぞタスク!貴様だけは!!」

電王SCMF (タスク)

「それはこっちの台詞だ!」

ガキーン!

電王はデンガツシャー ソードモードを装備し、ネガ電王と鏢迫り合いを繰り広げる。

《ATTACK RIDE 『BLAST』!》

ドドドドドドツ!

その隙に、デイケイドがネガ電王に向けてエネルギー弾を放つ。

シュツ!

だが命中寸前でネガ電王は瞬間移動し、デイケイドのエネルギー弾を避けた。

デイケイドCF

「瞬間移動? 厄介な技使いやがって!」

シュツ!

ネガ電王はデイケイドと電王の背後に突然現れ、剣を振り下ろす。



ガキーン!

デイケイドと電王は咄嗟に振り向き、ネガ電王の剣を受け止めた。だが怒りに燃えるネガ電王の力に押され、動くことが出来ない。

ネガ電王

「タスク、何故アンジュを抱いた!?!女など現実の世界にいくらでも居る・・・いくらでも選べた筈だ!私は千年待った・・・私にはアンジュしか居なかったと言うのに!」

電王SCMF(タスク)

「俺もそうさ!俺にもアンジュしか居なかった!だからアンジュを選んだんだ!!」

タスクはケータロスのボタンを押し、待機音が流れて直ぐパスをベルトにかざす。

《CHARGE AND UP!》

ガコン!

電王SCMF（タスク）

「吹き飛ばせ!!」

ドドドドドツ!

胸部の仮面が開き、大量のミサイルが放たれた。ネガ電王は至近距離からミサイルを全弾食らい吹き飛んだ。

ネガ電王

「下郎が・・・無限に殺し続けてくれる!!」

デイケイドCF・電王SCMF（タスク）

「殺れるもんなら殺ってみろ!!」

ガキーン!

一方、上空ではサリアのクレオパトラがダークグレイブの1機と交戦していた。

『戻ってきてくれると信じていたよ、サリア。』

ダークグレイブからエンブリヲの声がする。

サリア

「ええ・・・貴方を倒すためにね！」

エンブリヲ

『可愛いサリア・・・君は私に従っていけば良いんだよ。』

キーン！

突然、ヴィルキスを除くラグナメールとダークグレイブの目が光りだした。

サリア

「・・・あれ?どうして!?!」

ヴィヴィアン

「急に言うこと聞かなくなっちゃった!?!」

クレオパトラ・テオドーラ・ヴィクトリア・エイレーネは標的を焰龍號達に変え襲いかかる。

エルシャ

「コントロールが効かない!？」

ヒルダ

「何だよコレ!？」

その傍ら、ヴィルキス・グリフォン・AEG―EEAがヒステリカと交戦していた。

エンブリヲ

『アンジユ、君も人間だ。私が導かなければ幸福にはなれない。』

ガキン!

AEG―EEAはビームサーベルを装備し、ヒステリカと刃をぶつけ合う。

明日人

「だから無理矢理拐かし、暴力で支配しようとしたのか・・・。」

エンマ大王

『全く、聞けば聞くほど寂しい男だな!』

う。  
A E G — E A は距離を取り、今度はヴィルキスとグリフォンがヒステリカに刃を振る

天馬

「アンジュさんは、貴方みたいな男には絶対に屈しない!」

アンジュ

「そうよ!私は、誰の思い通りにもならない!・・・いや、私だけじゃない!」

サリア

「私も、もう誰の支配も受けない!」

ヒルダ

「アタシも、クソみたいな男の思い通りにはならねえ!」

ヴィヴィアン

「アタシだって、誰の言いなりにもならないんだから！」

エルシャ

「私もよ！もう迷わない・・・！」

「私は私よ！」

キイイイイインツ！

サリア達の心に答えるかの様に、四人の指輪とクレオパトラ達のコックピットのディスプレイが光り出す。すると、クレオパトラのボディが青に、テオドーラが赤に、ヴィクトリアがピンクに、そしてエイレーネがオレンジに染まった。

エンブリヲ

『ナニツ!?!』

突然起きた現象に、エンブリヲは驚く。

ヒルダ

「劍城!」

すると、ヒルダとテオドーラは劍城のランスロット・スクリームに近づいた。

劍城

「ヒルダさん?」

ヒルダ

「さっきの変事、まだだったよな?」

・・・ありがとう劍城。」

劍城

「えっ・・・?」

ヒルダ

「アタシも、アンタが大好きだ!だから、一緒に決めようぜ!」

劍城

「……はい！」

劍城はランスロット・スクリームのキャノン砲を展開。さらにテオドーラが背後にまわり、キャノン砲のグリップ部分を握る。

劍城

「行きますよ、ヒルダさん！」

ヒルダ

「ああ！コレがアタシとアンタの力だ！」

テオドーラはグリップを通してキャノン砲にエネルギーを送る。砲門にエネルギーが集まり、劍城は照準をダークグレイブに合わせる。

劍城・ヒルダ

「《ハイパーナル光線キャノン》!!」



バツシユウウウウウウウウ!!

ランスロット・スクリームはキャノン砲から超強力なビームを発射。ダークグレイブ達はビームに巻き込まれ消滅した。

サリア

「神童、悪いんだけど手を貸してくれないかしら?」

神童

「良いですよ?」

神童はマエストロ・チエイサーをフライトモードに変形させ、その上にクレオパトラが乗り込む。

キイイイイイイイッ!

マエストロ・チエイサーのスラスタが唸りを上げ、二機は猛スピードでダークグレイブ軍団に突っ込む。

神童・サリア

「必殺、《ライトニングローズアタック》!!」

マエストロ・チエイサーは青い薔薇の花卉を撒き散らしながら猛スピードで突撃し、クレオパトラが次々とダークグレイブ軍団に斬激を繰り返す。

ヴィヴィアン

「信助!」

信助

「はい!」

信助のタイタニアス・グランドはヴィクトリアの剣にバリアを纏わせ、超巨大なブーメランを形成する。

信助・ヴィヴィアン

「行っけえ! 《ジャイアント・ブンブン丸》!!」

タイタニアス・グランドとヴィクトリアはブーメランを投げ飛ばし、ダークグレイブ軍団を次々と攻撃する。

エルシヤ

「霧野君、前に2人で考えたあの技、試してみましよう!」

霧野

「よし、了解!」

ブリュンヒルデ・ワルプルギスはエイレーネの足の上に載り、エイレーネがブリュンヒルデ・ワルプルギスを蹴り上げる。

霧野

「炎の聖霊よ、契約に従い我が刃となれ!」

ビュウウウウウウ!

ブリュンヒルデ・ワルプルギスは上昇と共に高速回転し、巨大な炎の竜巻を出現させ、  
ダークグレイブ軍団を飲み込む。

エルシヤ

「行くわよ！ 《エルシヤ 天空竜巻蹴り》!!」

ドカーン！

エイレーネが上空から竜巻に向けて飛び蹴りを繰り出す。エイレーネは竜巻内を通り抜け、竜巻に飲み込まれたダークグレイブ軍団を破壊した。

エンブリヲ

『何故だアンジユ！無限の時間に無限の愛、私に支配される事の何が不満だと言うのだ!?!』

アンジユ

「人間だからよ！支配をぶっ壊す、好戦的で反抗的なイレギュラー、それが人間なの！」  
エンブリヲ

『ナニツ!?!』

アンジユ

「今なら分かるわ!何故ノーマが生まれたのか・・・それはアナタなんかには操作されないという、人間の遺伝子の意志!そして何故ノーマが女だけだったのか・・・それは愛する人と子を成し、あなたの世界を否定するため!だから、お母様は歌と指輪を託してくれたのよ!そんな創造主の作った、この腐り切った世界を壊すために!」

ガキン!

ヴィルキスはヒステリカと刃をぶつける。

エンブリヲ

『千年の中から選んでやったと言うのに・・・私の愛を理解出来ぬ女など、もはや不要!』

ドンツ!

だが背後から現れたグリフォンとAEG|EAがヒステリカを蹴り飛ばした。

天馬

「何が愛だ！貴方のやってる事は、愛なんかじゃない！」

明日人

「お前がやっている事は、只の支配だ！」

アンジユ

「そうよ！キモイ髪型でニヤニヤしてて、服のセンスも無くていつも斜に構えてる、恥知らずのナルシスト！1000年ヒキコモリの変態オヤジの遺伝子なんて、生理的に絶対ムリ!!」

ガキーン！

同じ頃、ライダー達の戦いも遂にクライマックスへと差し掛かっていた。

ゼロノスZF（モモカ）

「これで最後です！」

《FULL CAGE!》

ゼロノスはベルト上部のスイッチを押し、ゼロノスカードにエネルギーを充填。さらにカードを引き抜き、デネビツクバスターに装填。

ゼロノスZF（モモカ）

「《バスターノヴァ》発射!」

デネブ

『弁!』

ドーン!

デネビツクバスターから強力な光線が放たれ、幽汽の身体を貫通。幽汽は爆発し消滅した。

キバEF（シルヴィア）

「これで最後!」

キバはタツロツトの背中にあるルーレットを回す。そして、赤い蝙蝠のマークを揃える。

タツロツト

「ウエイクアップファイバー！」

キバは両足に赤いエネルギーを纏い、そして空へと舞い上がり、ダークキバに強力なキックを放つ。

《ウエイクアップ2!》

ダークキバも両足に緑色のエネルギーを纏い、そして空へと舞い上がり、キバに強力なキックを放つ。

ドカーン！



だが両者のキックがぶつかり合った途端、ダークキバは爆発し消滅。キバは爆煙を潜り抜け着地した。

カブトHF（ジル）

「コレで決める!」

カブトはハイパーゼクターの角を倒す

《MAXIMUM RIDER POWER!》

《ONE・TWO・THREE!》

さらにカブトゼクターの3つのボタンを番号順に押し、角をもとに戻す。ダークカブトも同様にダークカブトゼクターのボタンを押し、角をもとに戻す。

カブトHF（ジル）

「《ハイパーキック》!」

そして2人同時に角を再び展開。

《RIDER KICK!》

2人は空高くジャンプし、共に強力なキックを放つ。

ドカーン!

だが両者のキックがぶつかり合った途端、ダークカブトは爆発し消滅。カブトは爆煙を潜り抜けて着地した。

鎧武極

「行くぜ!」

鎧武は極ロックシードを回し武器を召喚。

《バナスピアー!》

皮を剥いたバナナ型の槍《バナスピアー》を装備し、ドライバーのブレードを一回倒す。

《ソイヤツ!極スカツシュ!》

地面にバナスピアーを突き刺し、マルスの足元からバナナ型エネルギーを出現させマルスを拘束。さらにバナスピアーを投げ捨て、極ロックシードを二回回す。

《火縄大橙DJ銃!無双セイバー!》

巨大な火縄銃形武器《火縄大橙DJ銃》と、鏢が銃身になっている片刃の銃剣《無双セイバー》を召喚し、火縄大橙DJ銃の銃口に無双セイバーの刀身を差し込み大剣モードにして装備。

《ソイヤツ!極オーレ!》

さらにブレードを二回倒し、大剣から複数のフルーツを模した虹色の斬撃をマルスに向けて放つ。

鎧武極

「セイツハー!!」

ドカーン!

マルスは斬撃を食らい爆発、消滅した。

ウイザード∞

「ファイナーレだ!」

ウイザードは右手中指にシューティングストライクウイザードリングを通し、ドライバーに翳す。

《チヨーイイネー!キックストライク!サイコー!》

ソーサラも右手中指にファイナルストライクウィザードリングを通し、ドライバに翳す。

《イエス!ファイナルストライク!アンドンスタンドウ?》

二人は各々足下に魔方陣を出現させ、右足にエネルギーを溜める。そして空高くジャンプし、共に強力なキックを放つ。

ドカーン!

だが両者のキックがぶつかり合った途端、ソーサラは爆発し消滅。ウィザードは爆煙を潜り抜け着地した。

ネガ電王

「ば、馬鹿な!?!」

電王とディケイドの元に、カブト・ゼロノス・キバ・鎧武・ウイザードが集まり、ネガ電王と対峙する。さらにグリフォン・ヴィルキスの元にA E G | E A・ウイングゼロ・ダブルゼータが集まりヒステリカと対峙する。

ネガ電王・ヒステリカ

「負けぬ・・・私は絶対に負けぬ!!」

《FULL CAGE!》

ネガ電王はベルトにパスを翳し、頭上に巨大なエネルギーの球を形成。同時にヒステリカは収斂時空砲を展開し、照準をヴィルキス達に合わせる。

《火縄大橙DJ銃!》

《チヨロイイネ! フィニッシュストライク! サイコー!》

## 《FULL CAGE!》

鎧武は火縄大橙DJ銃を装備し構える。ウイザードは《フィニッシュストライクウイザードリング》を使い、全身に金の鎧と、胸部にドラゴンの頭部、腕に爪、背中に翼、そして腰に尻尾を装備し、究極形態《インフィニティードラゴンゴルド》へ変身。さらにゼロノスは再びデネビックバスターにカードを装填し、バスターノヴァの体制に入る。上空のウイングゼロはツインバスターライフルの照準をヒステリカに向け、ダブルゼータはハイメガキャノンにエネルギーを集め、ヒステリカに照準を合わせる。

ネガ電王

「食らえ!!」

バツシユウウウウウウウ!!

ネガ電王は巨大なエネルギーの球を、ヒステリカは収斂時空砲を放つ。

鎧武極

「食らえ!!」

《極スパーキング!》

ドーン!

鎧武はブレードを三回倒し、火縄大橙DJ銃から七色の光線を放つ。さらにウイザードは胸部のドラゴンヘッドから強力な炎を、ゼロノスはデネビックバスターからバスターノヴァをネガ電王に向けて放つ。さらにウイングゼロはバスターライフルを、ダブルゼータはハイメガキャノンヒステリカに向けて放つ。

ドカーン!

両者の攻撃は共にぶつかり合い、巨大な爆煙を上げる。

《MAXIMUM HYPER TYPHOON!》



《ウエイクアップ!》

カブトは3つのゼクターが合体した究極武器《パーフェクトゼクター》を、キバは魔皇剣《ザンバットソード》を装備し、爆煙を潜り抜けネガ電王を切り裂く。さらにAGE—EEAは炎の剣を装備し、ヒステリカを切り裂いた。

電王・デイケイド・天馬・アンジユ

「コレで終わりだ(よ)!!」

《FULL CAGE!》

《FINAL ATTACK RIDE 『DE・DE・DE DECADE』!》

電王はベルトにパスを翳し、デイケイドはドライバにカードを装填し、共に空高くジャンプ。そして電王は巨大な光の翼を生やし、デイケイドはネガ電王との間に金と青の巨大な10枚の光のカードたちを出現させた。さらにグリフォンとヴィルキスも空高く舞い上がる。

電王・デイケイド・天馬・アンジュ

「いっけええええええええ!!」

電王とデイケイドはネガ電王に、グリフォンとヴィルキスはヒステリカに向けて急降下キックを放つ。

ガシャーン!

電王とデイケイドはネガ電王の身体を、グリフォンとヴィルキスはヒステリカのボディを貫き着地。そして電王とデイケイドの間に、天馬とアンジュが降り立った。

ネガ電王

「何故……この私が……貴様ら何ぞに……ぬあああああ!!」

ドカーン!

ネガ電王とヒステリカは大爆発を起こし、ネガ電王は炎と爆煙の中に消え、ヒステリカは残骸と化した。

シユウウ……

ネガ電王とヒステリカが倒された事により、地上の怪人軍団、上空のダークグレイブ軍団は塵となって消えた。

カチャ

ライダー達は変身を解き、パラメール達とガンダム達は全機着陸。ライダー達は機体を降り、一同はアンジュ達のところへ集まる。

「う、うう………」

だが、煙の中から残骸と化したヒステリカと、傷だらけで倒れるエンブリヲの姿があった。

エンブリヲ

「何故だ・・・何故分からぬ!？」

天馬

「エンブリヲ・・・。」

天馬はゆっくりと、エンブリヲに近づく。

アンジユ

「天馬?！」

サラマンディーネ

「天馬殿?！」

天馬はエンブリヲに近づき、エンブリヲを見下ろした。

エンブリヲ

「何度同じ過ちを繰り返せば理解する!?何度作り直せば正解に辿り着ける!?私が今まで

行ってきた事は、全て間違いだっただけなのか!? 私のこれまでの1000年は、一体何だったと言うのだ!」

天馬

「……。」

天馬はその場にしゃがみこみ、エンブリヲと目を合わせる。

エンブリヲ

「天馬……?」

天馬

「教えて下さい、エンブリヲ。何で時空を融合して、人類を全て消し去ろうなんて事を?」

エンブリヲ

「……。」

エンブリヲは少し黙り込む。そして語り始めた。

## エンブリヲ

「私は、世界の平和と更なる繁栄をずっと夢見ていた。だからドラゴン達の世界でドラグニウムを、アンジュ達の世界でマナの光を生み出した。しかし結果は知つての通り、どちらも失敗だった……。私の発見したドラグニウムによつて戦争が起き、人類社会は崩壊し、戦争を抑制するためにラグナメイルを送り込んだ筈が、逆に破滅の扉を開いてしまった。そして新天地にてマナの光と新人類を創造し、今度こそ争いの無い理想郷が完成したと思つた。だが今度は与えられることに慣れ、自ら考える事を放棄し墮落し切つてしまった。さらに人間達にノーマを差別させるプログラムを与えたのが仇となり、暗く歪んだ社会に作り変えてしまった……。そして最終的に私は、ある結論に辿り着いた。人間の邪悪な本質がある限り、平和な世界は訪れない。だから旧き世界をリセットし、新たな世界を作ろうと決めた。それしか方法が無いと思つたから……。」

## 天馬

「でも、だからつて全部リセットするなんて間違つてる。全部無かつた事にしてゼロからやり直すなんて、それじゃ意味ないよ！」

## エンブリヲ

「ではどうする？ 愚かな人間達だけでは、世界は滅びの路を辿る一方だぞー！」

## 天馬

「確かに俺達人間は、邪悪で愚かな存在かも知れない。みんな馬鹿で自分勝手に、考えてる事もバラバラ。でも、それだけじゃない。人は自分の過ちを認める事で、優しくなれる。だから誰かと手を取り合って、前に進める。誰かと一緒に居ることで、一人じゃ気付けなかつた可能性が見えてくるんだ。」

エンブリヲ

「可能性……だど?」

天馬

「人は何度も失敗を繰り返す。何十回も、何百回も、何千回も、何万回も……。でも、その失敗を受け入れて、諦めずに頑張つて努力すれば、いつか成功に繋げる事が出来る。」

エンブリヲ

「成功に、繋げる……。」

天馬

「エンブリヲ、貴方はずっと一人で世界を良くする為に頑張つてきた。でも、もうそれもお仕舞い。これからは、俺達みんな一緒です。」

エンブリヲ

「みんな……。」

天馬

「俺は貴方が描いた世界を見てみたい。だから、俺達と一緒に目指そうよ。貴方が思い描いた理想郷を！」

エンブリヲ

「ツ!!」

スツ

天馬は微笑み、静かにエンブリヲに右手を差し伸べる。アンジュ達は天馬のとつた行動に驚いた。

アンジュ

「天馬、いったい何考えてるのよ!?!」

サラマンディーネ

「そうです！其奴は全ての元凶、倒すべき敵なのですよ!?!」

天馬



「分かっています。でも、エンブリヲは誰よりも世界の平和をずっと目指していた。その事実は変わらない……でしょ?」

エンブリヲ

「……ツ!!」

エンブリヲは天馬の手を取り立ち上がる。

エンブリヲ

「……フフフフツ……ハハハハハハツ!!」

突然、エンブリヲは笑い出した。だがその笑い声は、嬉しさに満ちていた。

エンブリヲ

「ファンタステイック!!」

天馬

「えっ?」

エンブリヲ

「実に素晴らしい……私の追い求めていた理想の人類は、もう既にこの世に誕生していたと言うのか！」

そう言うと、エンブリヲは天馬に目を向けた。

エンブリヲ

「松風天馬、君こそが私の求めていた人類の理想形だ！」

エンブリヲの発言に、その場に居た誰もが驚いた。

エンブリヲ

「偏見も差別も無く他者を受け入れ、共に歩もうとするその優しい心。それこそ、私がずっと追い求めていたモノ！ああ、何でもっと早く気付けなかつたんだろうか……。」

天馬

「エンブリヲ……。」

心から喜ぶエンブリヲを見て、一同は何故か心が和らいだ。だがエンブリヲは直ぐ、

重なり合う二つの地球に目を向ける。

エンブリヲ

「・・・このまま時空融合を止めたとしても、二つの世界は崩壊したままだ。放っておけば全ての生命が、地球上から消えるだろう。」

天馬

「そんな・・・。」

エンブリヲ

「だがまだ手はある。」

エンブリヲは、残骸と化したヒステリカに目を向ける。

エンブリヲ

「ヒステリカと龍神器を含むラグナメール7機と、ラグナセイバーに宿りし世界を修復する化身の力を合わせ、真の時空融合を起こす。」

アンジユ

「真の時空融合ですって?」

エンブリヲ

「そうだ。真の時空融合によつて二つの地球の融合を果たせば、他の平行宇宙への複作用を抑制し、生命に溢れた新しい世界の構築が出来る。幸いにもアウラが時空融合を抑えてくれてお陰で、まだ融合は完了していない。ヒステリカのコアブロックも辛うじてまだ生きています。今を逃せば、チャンスは二度と訪れない。」

天馬

「なら急ごう！みんな手伝つて！」

アンジユ

「えっ、ええ……」

天馬とエンブリヲはアンジユ達の手を借り、ヒステリカの残骸の中からコアブロックを引つ張り出す。そしてヒステリカを中心に、ラグナメール5機と焰龍號が円を成す。

エンブリヲ

「準備は良いか？」

天馬

「はい！」

一同は遠くへ一時退避し、天馬はラグナセイバーを構え、地面に巨大な魔方陣を出現させる。すると、ラグナメール達と焰龍號の目から光が放たれ、光がヒステリカに集まる。

エンブリヲ

「今だ!!」

天馬

「うおおおおおおお!!」

グサツ!!

エンブリヲの合図で、天馬はラグナセイバーをコアブロックに突き刺す。

キイイイイインツ!

すると、コアブロックから目映い光が放たれ、光はアルゼナル全体を包み込み、空間

全体へと広がる。

天馬

「うわっ!!」

アンジュ

「いったい、何!!」

そして、全てが光に包まれた・・・。

To Be Continued...

## 最終回／そして始まる、新たな物語

天馬

「う、うーん……」

気が付くと、天馬は見慣れた懐かしい場所に居た。そこは彼が本来居るべき場所。

天馬

「……ここは……部室？」

天馬はいつの間にか、雷門中サッカー部の部室で眠っていた。

天馬

「……何で俺、部室に居るんだろう？俺はさつきまでアルゼナルに……」

天馬は自分が目覚めるまでの出来事を思い出そうとするが、思い出せない。

プシュー

天馬は部室を放れ、サッカー棟の外に出る。外では他の運動部の生徒達がトレーニングをしてたり、帰宅部の生徒達が集まって話をしていた。

天馬

「……そういえば、サッカー部のみんなは何処に行ったのかな？」

天馬は校舎の中を通り、正門前のグラウンドへと出る。グラウンドではサッカー部の仲間達が練習の真つ最中だった。だが、何故かメンバーの何人かが欠けていた。

三国

「遅いぞ天馬！もう練習始まつてるぞ！」

天馬

「はい！今行きます！」



天馬は急いで階段を降りグラウンドに向かう。だが、ふと裏山の方に目を向けた時、彼は足を止めて目を見開いた。

三国

「天馬？」

天馬

「あ．．．あれは．．．!?」

裏山には見覚えのある巨大な神殿と、見慣れた巨大な施設が聳え立っていた。

天馬

「アウラの神殿に、アルゼナル．．．!」

ザバーン!

すると、今度は川の方から巨大な水飛沫が上がる。水飛沫の中には、見覚えのある巨大な銀の船が見えた。

天馬

「アウローラ……！」

天馬は走り出し、正門を抜けて河川敷へと向かう。途中何人かの女性とすれ違ったが、ある人はアルゼナルの制服を、ある人はアウラの民の服を着ていた。

—————

く河川敷 グラウンドく

河川敷に着くと、川の中にはアウローラ、グラウンドには共に戦った仲間達の姿があった。

アンジユ

「天馬！」

天馬

「アンジュさん！みんな！」

天馬は嬉しさのあまり駆け出し、アンジュ達と再会した。

天馬

「良かった、無事だったんだ！」

アンジュ

「それはこっちの台詞！それよりも天馬、ここつてもしかして……。」

不思議そうに辺りを見回すヒルダ達と、驚きの表情を見せる剣城達。

剣城

「間違いない、ここは……！」

神童

「ああ……俺達の故郷、稲妻町だ！」

信助

「でも、何で稲妻町にアルゼナルとアウラの神殿があるの？」

「答えは簡単だ。此処は時空融合によって誕生した、松風天馬の理想の世界なのさ。」

突撃、背後から声がする。振り向くとそこには、見覚えのある男が居た。

天馬

「エンブリヲ！」

エンブリヲ

「真の時空融合を発動させた時、ラグナセイバーとヒステリカのコアが天馬の願いを感じ取り、この世界を作ったのだよ。」

アンジユ

「天馬の願い？」

エンブリヲ

「人間、ノーマ、そしてドラゴン、全ての民が同じ大地、同じ空の下で共に暮らす世界。それが彼の理想の世界。」

キラキラ……。

突撃、エンブリヲの身体が光の粒子となって消え始めた。

天馬

「エンブリヲ!?!」

エンブリヲ

「……どうやら、別れの時が来た様だ。すまない天馬、君と共に我が理想の世界を目指す事は、残念ながら不可能だ。だが君ならば、いつか私の理想郷を実現してくれると信じている。頼んだよ、天馬……。」

シユウウ……

エンブリヲは光の粒子となって消え、彼が消えた場所にはラグナセイバーが刺さっていた。

天馬

「エンブリヲ……。」

天馬はラグナセイバーを引き抜き、ゆつくりと鞘に納めた。

アンジユ

「終わったのね、私達のリベルタス……。」

タスク

「ああ……。」

サラマンディーネ

「……これから、どうされるのですか？ 貴方達が戦う必要も、私達が殺し合う理由も、もう無いのですよ？」

アンジユ

「決まってるじゃない？」

アンジユは天馬と目を合わせ、共に微笑み合う。そして、二人は仲間達に目を向けた。

アンジュ

「みんな聞いて。今日から私達は、この稲妻町の人間として生きていくわよ！異論はあるかしら？」

アンジュの問いに、誰も反論する者は居なかった。

ヒルダ

「反対ナシ。みんな賛成みたいだね。」

天馬

「よし、じゃあアレやろう！」

劍城

「アレか。」

神童

「アレだな。」

天馬達は円陣を組み、全員中心に手を重ねる。

天馬

「みんな、今日からここが俺達の世界だ。みんなで力を合わせて、頑張つて行こうぜ!!」

「オオー!!」



く 神殿 広場 く

戦いは幕を下ろし、彼らの物語は新たなスタートを切った。

ジル

「アルゼナル総司令官、ジルと申します。私達ノーマは、貴方達アウラの民と共に歩んで行きたい。」

アンジュは総司令官の座をジルに返し、ジルはアウラの神殿にて、人の姿を取り戻したアウラと会談した。



アウラ

「私はアウラ。我らアウラの民は、皆様を歓迎致します。」

ジル

「感謝する、神聖なるアウラよ！」

ジルとアウラは握手をし、共に歩んで行く事を約束した。



く河川敷 新ジャスミン・モールく

アンジュ達はアルゼナルを放れ稲妻町で暮らすことになり、役目を終えたアウローラは河川敷に停泊し、アンジュ達の新たな家となった。

ジャスミン

「いらっしやいらっしやい！新ジャスミン・モール、只今開店セール中だよ！」

ジャスマミンは河川敷の側で古い倉庫を借り、新ジャスマミン・モールをオープンさせた。ジャスマミン曰く、以前より仕入れがしやすくなった分、以前よりお買い得価格になったらしい。

ロザリー

「なあクリス、これなんかどうだ？」

クリス

「あつ、可愛い！」

そして買い物客の中には、クリスとロザリーが新しい髪止めを探していた。



くラミアの家 玄関く

ヴィヴィアンはサリアとエルシャを実家に招待した。

ヴィヴィアン

「お母さん！ただいまー！」

ラミア

「ミイ！お帰りなさい！」

ヴィヴィアンはラミアに抱き付き、ラミアはヴィヴィアンを抱きしめた。

ヴィヴィアン

「お母さん、友達を連れてきたよ！」

サリア

「サリアと申します。初めまして、お母さん。」

エルシャ

「エルシャです。よろしくお願いします。」

ラミア

「まあ、嬉しい！ミイの母親のラミアと申します。」

サリア

「・・・ところでヴィヴィアン、ミイって?」

ヴィヴィアン

「ミイって言うのは、こつちでのアタシの名前!」

エルシャ

「そうなの?じゃあ私達も、ヴィヴィちゃんじゃなくてミイちゃんって呼ばないとダメかしら?」

ヴィヴィアン

「アタシはどつちでも良いよ?でも、サリアやエルシャ達にはヴィヴィアンって呼んでほしいなあ?」



く商店街 アーケードく

コンツ! コンツ! コンツ!

天馬

「よし、これでOKです！」

タスク

「ついに完成したね。」

アンジユ

「ええ。私達のお店、喫茶アンジユよ！」

アンジユ・タスク・天馬はアーケードの空き店舗を改装し、喫茶アンジユをオープンさせた。ちなみに現段階のメニューは……

アンジユが考案した、モモカが煎れる《本日のオススメ紅茶》と《本日のオススメコーヒー》。

タスクが考案した、海蛇スープと焼き魚、そしてデザートに木の実を添えた《サバイバルプレート》。

ヒルダが考案した、懐かしき故郷の味、《手作りアップルパイ》。

エルシヤが考案した、愛情たっぷり《カレーライス》。

モモタロスが監修した《絶品プリン》。

デネブとヴィヴィアンが考案した《手作りキャンディーセット》。

晴人が監修した、《ブレインシユガードーナツ》。

紘汰が考案した、生クリームたっぷりの《フルーツタルト》と、イチゴたっぷりの《イチゴパフェ》。

キバツトとタツロットが考案した、《絶品トマトパスタ》。

天馬達雷門サッカー部が考案した《手作りおにぎり》。

以上12品目。今後メニューは増える予定らしい。ちなみに従業員は現在、アンジュ・タスク・モモカ・ミステイ・エマ・ターニャ・イヌマ・オリビエ・パメラ・ヒカ

ルの計10人。

そしてオープン前日の夜、店内で完成祝いのパーティーが行われた。

天馬

「賑やかですね。」

アンジユ

「・・・ねえ、天馬。」

アンジユはカウンターを挟んで天馬に語り掛ける。

アンジユ

「エンブリヲが言っていた事って、ホントなの？私が貴方を選ばなかった事、貴方は恨んでるって・・・。」

天馬は黙り込み、数秒程俯き、そして真剣な表情を見せる。

天馬

「確かに、アンジユさんが俺じゃなくてタスクさんを選んだ事を、心の何処かで微かに恨んでるかもしれません。でも……。」

天馬は顔を上げ、アンジユに笑顔を見せる。

天馬

「俺はアンジユさんを選ばれなくても、別に良いんです。アンジユさんが幸せで居てくれれば、俺はそれで十分幸せです。」

アンジユ

「天馬……!」

アンジユは突然顔を赤く染め、天馬に背を向けた。

タスク

「どうしたの?」

アンジユ



「……もう、私のバカ！」

天馬・タスク

「えっ?」

アンジユは恐る恐る、天馬に顔を向けた。

アンジユ

「私……天馬の事も……好きになっちゃったみたい……。」

天馬・タスク

「えっ?……えええっ!」

アンジユの突然の告白に仰天する天馬とタスク。

アンジユ

「て言うか反則よ! さっきみたいなさ言われちゃ、嫌いになれないじゃない! でも、私にはもうタスクが居るし、かと言って二股する訳にはいかないし……あ、そうだ!」

何か思い付いたのか、アンジユは天馬の手を強く握る。

アンジユ

「ねえ天馬、私の弟になってよ！」

天馬・タスク

「はいい!?!」

突然の発言に又もや仰天する天馬とタスク。

アンジユ

「私ね、ずっと弟が欲しかったの！貴方が私の弟になってくれれば、タスクや貴方とずっと一緒に居られるわ！何ならいつそのこと、私とタスクの名字も“松風”にしちやいましようか？」

天馬

「あの、ちよつと、えつ．．．?」

アンジユの話に付いて行けず混乱する天馬。すると．．．。

シルヴィア  
「でしたらお姉様、もっと良い方法がありますわ！」

そこへシルヴィアがやって来た。シルヴィアは天馬の隣に座り、天馬に急接近する。

シルヴィア

「私が天馬様の奥方になれば良いのです！そうすれば天馬様は自然と、お姉様の弟という事になりますわ！」

天馬

「ちよつとシルヴィア様、いきなり何言ってるんですか!？」

と、そこへ更に……。

ココ

「ズルいですよ、シルヴィア様！」

ナオミ

「天馬君は私達のなんですかからね！」

天馬

「ココさん!? ナオミ!？」

更に・・・。

モモカ

「天馬様のお世話は、私の勤めです！」

葵

「随分と楽しそうね、天馬？」

天馬

「葵!? モモカさん!？」

更に更に・・・。

ナーガ

「私との決着がまだなのを忘れてないか？」

天馬

「ナーガさんまで!？」

と、天馬はいつの間にか集まった美女達に板挟みにされていた。

アンジユ

「・・・ねえ、私もしかして不味い事言った？」

タスク

「言った・・・不味いじゃ済まされないよ、コレ・・・。」

アンジユとタスクはカウンターの向こうから見守るしかなかった・・・。



↳稲妻総合病院↳

剣城はヒルダを病院へと連れていき、恋人となった事を優一に報告した。

優一

「君が京介の彼女？」

ヒルダ

「はい、ヒルダと言います。劍城……いや京介君には、アルゼナルに居た頃から良くお世話に……。」

優一

「そうか。でもまさか、京介に貴女みたいな綺麗な彼女が出来たなんてなあ。俺は嬉しいぞ、京介！」

優一は劍城に彼女が出来た事を喜び、劍城は微笑み、ヒルダも恥ずかしがりながらも微笑んだ。その時……。

ガタツ

「「うわああ!!」」

突然病室の扉が開き、ロザリー・クリス・ゾーラ・ノンナ・マリカ・メアリーが倒れ込んで来た。

ヒルダ

「お前ら!?!」

ゾーラ

「不味い!お前達逃げるぞ!」

覗きがばれ、ゾーラ達は急いで病室から走り去る。

ヒルダ

「待てコノヤロー!」

ヒルダはゾーラ達を走って追いかける。

劍城

「ヒルダさん、病院では走っちゃダメですよ!」

と言いながら、剣城も走ってヒルダを追いかけた。そしてその光景を、診察室からマギーが酒・・・ではなくコーヒを飲みながら見ていた。

マギー

「平和だねえ・・・。」



くお日さま園く

エルシャ

「みんなー！今日からこのお日さま園でお世話になります、エルシャ先生です！よろしくねー！」

「「ハイー！」」



エルシャは円堂の勧めで、知り合いの運営する孤児院《お日さま園》の先生になった。

瞳子

「エルシャさん、子供達に大人気ですね。」

エルシャ

「瞳子さん！子供達を保護して頂いた事、本当に感謝しております！今後は全身全霊を尽くして、お日さま園の子供達のお世話をさせて頂きます！」

瞳子

「ありがとうございます。でも、無理の無いようお願いしますね？」

エルシャ

「はいー。」

瞳子の話によると、以前ジュリオがアルゼナルを襲撃した際に白竜達が保護したノーマ達は、全員お日さま園に保護してもらったらしい。そして一部のノーマ達は既に新たな里親を見つけており、7歳から18歳までのノーマ達は、お日さま園の子供たちが通う私立校《永世学園》の生徒となっているそうだ。ちなみにエルシャがエンブリヲ幼稚園から連れてきた子供達も、今ではお日さま園で仲良く暮らしている。



私立雷門中学校 1-A

担任

「全員注目！今日は転入生を紹介するぞ！」

ココ

「ココ・リーヴです！よろしくお願ひします！」

ミランダ

「ミランダ・キャンベルです！よろしくお願ひします！」

ヴィヴィアン

「ヴィヴィアンです！よろしくー！」

ナオミ

「ナオミ・東雲です！よろしくお願ひします！」

シルヴィア

「シルヴィア・斑鳩・ミスルギと申します！皆様、どうかよろしくお願ひ致します！」

ココ、ミランダ、ヴィヴィアン、ナオミ、そしてシルヴィアは、天馬達の通う雷門中学校に通うことになった。ただ五人の希望で、全員天馬と信助のクラスに入るようになった。

「なあ、あれ凄くないか？」

「松風の周り、可愛い子ばつかじゃん！」

「くううう、羨ましいいいいい！」

ヴィヴィアンとミランダは信助の隣の席となったが、ココ、シルヴィア、ナオミ、そして葵は、天馬の四方を囲む形の席位置となってしまった。さらに五人は転入と同時にサッカー部に入部。だがミランダ以外の四人は選手として入部した。

天馬

（俺、これからどうなるの・・・？）

先行きが怪しく見え、不安が絶えない天馬であつた。



く河川敷く

フアーン！

モモタロス

「じゃあな！」

リュウタロス

「元気でね！」

キバット

「俺達の事、忘れないでくれよー！」

戦いが終わり役目を果たしたモモタロス達は、後日デンライナーに乗って時空の彼方

へと去っていった。

《テレポート！プリーズ！》

晴人

「じゃあ、俺達はコレで。」

紘汰

「また会おうぜ、みんな！」

晴人と紘汰も、テレポートウィザードリングの力でその場を去った。

明日人

「みんなありがとう！元気でね！」

明日人とエンマ大王も、A E G | F X、ウイングゼロ、ダブルゼータと共に炎の裂け目の向こうに消えた。

司

「ここでお別れだな。」

天馬

「色々、お世話になりました。」

タスク

「ねえ司、また会えるかな？」

司

「さあな？だが会えると信じていれば、いつかまた会えるんじゃないか？」

海東

「じゃあね、みんな。僕達と共に戦った思い出を、大切なお宝にしたまえ。」

海東は密かに手に入れたラグナメールの設計図を持って、司と共に光のカーテンの向こうに消えた。

天馬

「ありがとう・・・通りすがりの、仮面ライダー！」



くアルゼナル 墓地く

そしてアンジュ達が稲妻町にやって来て約一ヶ月後、天馬とアンジュはアルゼナルの墓地に、ある人の墓を建てた。

アンジュ

「にしても、ホント貴方って物好きよね？態々アイツの墓を建てるなんて。」

墓にはこう刻まれていた。

《永きに渡り

世界の平和を願った調理者の魂

ここに眠る》

そう、二人が建てていたのはエンブリヲの墓。

天馬

「せめて、伴ってあげたかったです。」

天馬は墓に線香を添え、アンジユは花束を添える。

天馬

「いつか、貴方の思い描いた理想郷を実現してみせます。だから、見守ってて下さいね……エンブリヲ。」



そして時は流れ、とある街のとある喫茶店……。

「……済まない。紅茶のおかわりを頼めるかな？」

「はい、只今！」

一人の青年が、カフェテラスで本を読みながら紅茶を飲んでいた。辺りには高架道路が何本も伸び、巨大な摩天楼が幾つも聳え立っている。

『次のニュースです。地球連合が結成されてから丁度五百年目となる今日、ネオ・トキオ国際博物館では、松風天馬初代地球連合儀長の資料等が特別に一般公開されています。地球連合の創立者でもある松風天馬儀長は、地球上から国境を無くし世界を一つにすると言う偉業を成し遂げ、誰もが平等に暮らせる平和な世界を築き上げました。以後、松風天馬儀長の意志は歴代地球連合儀長に受け継がれ、今日までの五百年間、世界の平和は守られ続けています。』

近くの高層ビルの外壁に設置された大型ディスプレイに、ニュースが映された。青年はそのニュースを見て微笑んだ。

「あれから五百年・・・時間とは、実に早いものだ。」

青年は本を閉じ、紅茶を飲み干し、会計を済ませ喫茶店を後にした。

「さて、では行くでしょう。私の志を継いでくれた、彼の築き上げた世界を見に！」

青年は歩き出した。金色に輝く長い髪を、風に靡かせながら……。

T  
H  
E  
  
E  
N  
D

## 番外編①／激闘？天馬の妻に相応しいのは誰だ!?《前編》

く喫茶アンジユく

ロザリー

「だーかーらー、違うって!」

クリス

「違うのはロザリーの方だよ!」

エンブリヲとの最終決戦から数ヶ月が経ったある日、喫茶アンジユではロザリーとクリスが何やらもめていた。

アンジユ

「あの2人どうしたの?」

タスク

「また喧嘩か何かかな?」

カランカラン

店の扉が開き、ヒルダと劍城がやって来た。

ヒルダ

「ようアンジユ！」

アンジユ

「いらっしやいヒルダ。劍城もいらっしやい。」

さらに2人に続くように、サリアと神童、エルシャと霧野、ヴィヴィアンと信助、さらにサラマンディーネがやって来た。

アンジユ

「あら、みんな来てたんだ。」

一同はテーブルに着き、アンジユは皆に水を配って回る。

サリア

「こんにちははアンジュ。喫茶店の方はどう？」

アンジュ

「問題無いし順調よ。サリアの方こそ、コスチュームデザイナーの方はどうなのよ？」

サリア

「それがね聞いてよ！この間私がデザインしたコスチュームが、あの大人気アイドルグループ《ライディング・ガールズ》、別名《R・D・G・S》の衣装に採用されたの！」

ヴィヴィアン

「それマジ!? 凄いじゃんサリア！」

サリアの話に興奮するヴィヴィアン。

サリア

「でしょ? で、今度はある男性アイドルグループのコスチュームを依頼されてるの。神童、コスチュームが完成した時はよろしくね?」

神童

「分かってますよ、サリアさん。」

あの一件後、サリアはコスチュームデザイナーとして活躍し、日々様々なコスチュームを考案している。時にアンジュやヒルダ、さらには神童に自身の考えたコスチュームのモデルとして試着を依頼しているとか。

エルシャ

「そういえば、ヴィヴィちゃんはこの間サッカー部の一軍選手になったのよね?」

ヴィヴィアン

「うん!今はまだベンチだけど、このままレギュラー狙おうと思ってるんだ!」

信助

「ヴィヴィアンさんならきつと成れますよ!僕、応援してますからね!」

霧野

「俺も応援してますよ。」

ヴィヴィアンはつい最近、雷門サッカー部二軍から一軍のメンバーに選ばれた。と言っても今はまだベンチだが、ヴィヴィアン本人は信助と同じチームになれて凄く嬉し

いらしい。

サリア

「ヒルダはどうなの？家政婦業には馴れた？」

ヒルダ

「いや、まだ分からない所が多い。いつも京介の母さんに迷惑掛けてばかりで、正直申し訳ないよ……。」

劍城

「そんなことありませんよ。ヒルダさん家事も料理も凄く上手で、家に来てくれて凄く助かってるって母さんが言っていましたよ。」

ヒルダはアウローラを離れ、今は劍城の家で家政婦として同棲している。ここだけの話、いずれ劍城との結婚も視野に入れてるとかいなとか……。

ロザリー

「つたく、分かってねえなあクリスは！」

クリス



「分かってないのはロザリーの方でしょ!？」

と、一同は店の奥でもめるロザリーとクリスに気づいた。

サリア

「あの2人、どうしたの？」

神童

「また仲間割れですか？」

ヒルダ

「いや違う。あれは多分・・・自分達の選んだ男のどっちがイイ男かでもめてるんだ。」

ヴィヴィアン

「ナヌツ!？」

ヒルダの発言で一同は驚いた。

ロザリー

「アタシは断然錦だと思っぜ?言葉遣いとか少し変わってるけど、豪快で優しく、一緒

に居て楽しいからさ。」

クリス

「私は狩屋君だと思ふな。少し口が悪くて攻撃的などころがあるけど、一緒に居て面白いし、ちよつとツンデレっぽいのが何か可愛くてさ。」

実はあの一件後、ロザリーは錦と、クリスは狩屋と交流を交わすようになったらしい。

ロザリー

「なるほどなあ・・・そう考えると確かに狩屋も良いかも知れないな！」

クリス

「でしょ？でも、錦君も良いと私は思うよ？」

ロザリー

「だろ!？」

と、いつの間にかもめ合いは終息してしまった。

タスク

「いつの間にか終息したね・・・。」

ヒルダ

「本人達がさっきの会話聞いたら、どう思うかね？」



〜河川敷〜

錦・狩屋

「ヘックション！」

丁度その頃、河川敷でのんびりしてた錦と狩屋が同時にクシヤミをした。

狩屋

「あれ、錦センパイ風邪スか？」

錦

「おう……………それか、誰かワシらの噂でもしとるんじやろか？」

狩屋

「何となく誰がしてるかは検討が付きますけど……後で喫茶アンジュに寄ってみます？」

錦

「じゃな！」



く喫茶アンジュく

カランカラン

と、今度は天馬が喫茶アンジュにやって来た。

天馬

「お邪魔しまーす！」

アンジュ

「いらつしやい、天馬!」

天馬

「あ、アンジュさん!こんにちは!」

入店早々共に笑顔を見せる天馬とアンジュ。

劍城

「おい天馬、こつちに来ないか?」

天馬

「劍城!それに皆さんも!」

天馬は劍城達のテーブルに着いた。すると・・・。

カランカラン

ナオミ

「絶対私だと思えます!」

ココ

「いや、私です！」

シルヴィア

「いいえ、私に決まっておりますわ！」

今度はナオミ・ココ・シルヴィアの3人が何やら口論をしながらやって来た。

アンジユ

「いらつしや……って、いったい何事？」

ダンツ！

と、突然3人が天馬の前に立ち、シルヴィアがテーブルを強く叩いた。

シルヴィア

「天馬様！」

天馬

「な、何ですか．．．?」

ヒシヒシと伝わるプレッシャーに少し恐怖する天馬。

シルヴィア

「そろそろハッキリして下さい! 私達3人の中で、誰が天馬様の奥方に相応しいと思いますか!」

天馬

「えっ!? えーっと．．．。」

突然の質問に困る天馬。だが一方で、同じ空間に居たアンジュ達も少し困った表情をしていた。

アンジュ

「何、まだ決着ついてなかったの?」

劍城

「無理ないですよ。天馬は善くも悪くも博愛主義ですからね．．．。」

劍城が少し呆れ気味に話す。

天馬

「え〜つと、みんなとても良い人達ですから、俺なんかには勿体無いと言いますか、何と  
言うか……。」

ナオミ

「もう、またそうやってはぐらかす。これじゃ一向に進まないじゃん……。」

ココ

「そうですよ！全く……。」

天馬の回答に呆れ困るナオミとココ。

天馬

「いや、本心なんですけど……。」

「なるほど、これはこれは……。」





それから数日後、今では誰も使わなくなったアルゼナル食堂にて、あるイベントが開かれた。食堂の一角には大きなステージが設置され、ステージの前にはヒルダ達を始めとするメイルライダー全員や、剣城達を始めとする雷門中サッカー部とイナズマジャパンのメンバー。さらにアウラの民や、ミステイ達喫茶アンジュの従業員、円堂や豪炎寺といったサッカー部関係者達が集められていた。

ジャスミン

『アーアー、テストテス、マイクテス。』

突然、ジャスミンがマイクを持ってステージに現れた。

ジャスミン

『えー、この度は皆様様、御忙しい中御集まり頂いた事、実に感謝しております。只今より、ジャスミン・モール及び喫茶アンジュ主催による・・・。』

バツ！

ステージの一番上に掛けられた幕が外れ、タイトルが姿を見せた。

ジャスミン

『第一回、《松風天馬のお嫁さんに相応しいのは誰だ!?コンテスト》を開催致します!』

神童

「本当にやるとはな．．．。」

サリア

「ジャスミンって時々妙な事するのよね．．．。」

歓声に混じって不安そうな声がチラホラと聞こえてきた。

ジャスミン

『司会はこの私、ジャスミン・モール店主ジャスミン!解説は、元アルゼナル総司令ジル!審査員は、木枯らし荘の管理人木野秋さん、雷門中サッカー部顧問音無春奈さん、そして、アウラの民の姫ことサラマンディーネさんです!よろしくお願ひします!』

審査員席の秋と春奈とサラマンディーネ、実況席のジルは一礼をした。と、ジルの隣には何故か天馬の姿が。

天馬

「え〜つと、これって俺が居る必要有るんですか？」

ジル

「当然だ。コレはお前が主役のイベントだからな。」

ジャスミン

『それでは早速、出場者紹介と参りましょう！』

プシュー！

ステージの床から煙が吹き出し、1人目の出場者が煙の中から姿を見せた。

ジャスミン

『エントリーナンバー1番！元ミスルギ皇国第二皇女・・・シルヴィア・斑鳩・ミスルギ

!』

シルヴィア

「天馬様のハートを掴むのは、他でもないこの私です!」

プシュー!

続いて2人目の出場者。

ジャスミン

『エントリーナンバー2番!アルゼナルの鋼の戦乙女・・・ナオミ・東雲!』

ナオミ

「精一杯、頑張ります!」

プシュー!

続いて3人目

ジャスミン

『エントリーナンバー3番！アルゼナル第一中隊の癒しキャラ．．．ココ・リーヴ！』

ココ

「えっと、正々堂々頑張ります！」

プシユー！

続いて4人目

天馬

「つて、4人目!?! いったい誰が．．．。」

ジャスミン

『エントリーナンバー4番！雷門中サッカー部の蒼き女神．．．空野葵！』

天馬

「つて、葵!？」

まさかの人物の登場に天馬は驚いた。

葵

「雷門中サッカー部のマネージャー、空野葵です！よろしくお願ひします！」

プシュー！

更に5人目。

天馬

「今度は誰だ？」

ジャスミン

『エントリーナンバー5番！喫茶アンジユの看板娘・・・モモカ・荻野目！』

天馬

「モモカさんまで!？」

またしてもまさかの人物の登場に驚く天馬。

モモカ

「身の周りの御世話は、私にお任せ下さい!」

プシュー!

更に6人目。

天馬

「つて、まだ来るの・・・?」

だが、6人目の出場者を見て天馬は目を疑った。



ジャスミン

『そして、エントリーナンバー6番!喫茶アンジュの名物女将、血塗れの白き翼の天使・・・アンジュ!』

アンジュ

「この勝負、絶対に勝つ!」

天馬

「アンジュさん!?ちよつと、何で!?!」

天馬はこの場に出る筈の無いアンジュが出てきた事に今日一驚いた。だが、驚いたのは天馬だけではない。

ヒルダ

「アンジュ!?!何でお前がエントリーしてるんだよ?!」

ヒルダ達アルゼナルメンバーも同じくらい驚いていた。だが、誰よりも一番驚く筈のタスクは妙に冷静だった。

ヒルダ

「おいタスク！ いったいどうなってるんだよ!？」

タスク

「どうって、アンジュが出たいって言うから俺がエントリーさせたんだよ?」

ヒルダ

「良いのかよソレ!?! お前それでもアンジュのカレシか!?!」

タスク

「アンジュが欲張りなのは君も知ってるだろ? アンジュ、このコンテストやるって決まってるから、どうしても天馬君を自分のモノにしたいって聞かなくてさ・・・まあ仮にコレが浮気だったとしても、天馬君ならアンジュを安心して預けられるって俺自身も思ってる。だから俺自身も、アンジュがエントリーするのに反対はしなかった。」

神童

「まあでも、結婚を前提とするのなら一応、一人の女性が複数の男性との結婚が出来る一妻多夫制という制度がありますけど……。」

サリア

「そもそも、その制度ってこの国で通じるの?」

ジャスミン

『よし、それじゃルール説明だ!』

ドンツ!

天馬

「うわっ!?!」

突然、天馬の目の前に数本の札が入った抽選箱が現れた。

ジャスミン

『エントリーした6人にはこれから、天馬が選んだお題に沿ってバトルロワイヤルをしてもらう。お題は全部で7種類。一番多くポイントを獲得した者が勝者だ。て事で天馬、早速だがその抽選箱からお題を1つ引いてくれ!』

天馬

「は、はい! (もう、こうなったら成るように成れだ!)」

天馬は抽選箱から札を1つ引く。果たして最初のお題は・・・。

番外編①／激闘?天馬の妻に相応しいのは誰だ!?《後編》

ジャスミン

『天馬、早速だがその抽選箱からお題を1つ引いてくれ!』

天馬

「は、はい! (もう、こうなったら成るように成れだ!)」

天馬は抽選箱から札を1つ引く。

天馬

「え〜っと、最初のお題は《料理対決》です!」

ガコン!

天馬

「な、何だ!？」

突然ステージの床の一部が動き出し、下から人数分の調理台が姿を見せた。

ジャスミン

『さあ、最初のお題は料理対決! ルールは簡単。これから出題されるテーマに沿って、一番美味しい料理を作った人が勝者だ。』

アンジュ達はエプロンや割烹着を身に付け、各自調理台の前に立つ。

ガチャ ウイーン

調理台の一部が開き、中から白い四角い物体が入ったタツパーが現れた。

ジャスミン

『テーマは「豆腐料理」! 今回は木綿と絹ごし、二種類の豆腐を用意した。焼き物でも煮物でも汁物でも、調理法は何でもOKだ! それじゃ早速行くぞ? よーい・・・!』

バーン!

ジャスミンは勢いよく銅鑼を鳴らし、料理対決がスタートした。

トンツトンツ

葵はキクラゲを微塵切りに、長ネギを白髪ネギにし、干し海老とスライスし揚げたニンニクを醤油ベースのタレと共に煮詰め……。

ジュー!

アンジュは水切りした木綿豆腐をフライパンで焼き色が付くまで焼き、シルヴィアは微塵切りにしたニンニクとシヨウガを合挽き肉と共にフライパンで炒め……。

ジュワアアア!

ココは薄力粉と片栗粉を付けた絹ごし豆腐を油で揚げ……。

コトコトコト……

そしてモモカとナオミは、共に土鍋を火に掛けている。

ジル

「これは……何れも出来上がりが楽しみだな？」

天馬

「あの、もしかして試食は……？」

ジル

「無論、お前と私も参加だ。」

天馬

「デスよねー……。」

数分後、全員の料理が出来上がった。



葵

「中華風冷やつこです。」

アンジユ

「豆腐ステーキよ。」

シルヴィア

「麻婆豆腐になります。」

ココ

「揚げ出し豆腐です！」

ナオミ

「特製チゲ鍋です！」

モモカ

「こちら、湯豆腐になります。」

「えっ?」

モモカの意外なメニューに誰もが驚いた。

シルヴィア

「ゆ、湯豆腐？なんか、モモカらしくないわね？」

モモカ

「そうでしょうか？」

アンジュ

「うん！モモカなら何かこう・・・手の込んだ料理とか出してくるかなあって思ってたんだけど……」

モモカ

「確かに、普段の私に比べればシンプルでしょう。でも御安心下さい、食べて頂ければ理由が分かります。」

各々の料理が出揃い、天馬達は試食審査を開始。そして数分後……

ジャスミン

『さあ全員の試食が終了しました。では審査員の皆さん、採点をお願いします！』

秋・春菜・サラマンディーネは、手元のスコアボードに得点を記入していく。そし

て・・・。

ジャスミン

『勝者、モモカ・荻野目!』

なんと、湯豆腐で勝負したモモカが一回戦を勝利した。

モモカ

「やりました!」

葵

「うそ、何で!」

秋

「秘密はお豆腐よ。今回みんなに用意したお豆腐は、スーパーで売ってる普通のお豆腐じゃないの。」

ジル

「この豆腐は商店街にある老舗豆腐店の自家製豆腐。味、質、食感、全てにおいて一級品と称される程の人気商品だ。今回、モモカはこの豆腐が普通の豆腐でない事にいち早く

気付き、湯豆腐を選択した。」

モモカ

「美味しいお豆腐を味わうには、やはり湯豆腐が一番です。」

アンジュ

「なるほど、それなら納得出来るわ。流石私の筆頭侍女ね。」

と、突然ジャスミンが天馬に目を向ける。

ジャスミン

『ところで話は変わるが天馬、お前さんは誰の料理が一番だい?』

天馬

「えっ?どれも凄く美味しかったですよ?」

ジャスミン

『いやそういうコメントはいいから………まあいい、次行くぞ!』

二本目の札を引くと、札には「黒ひげ」と書かれていたが………

天馬

「……………つてちよつと待つて!何で俺が黒ひげなんですか!」

いつの間にか天馬は何故か隙間が均等に空いた樽に押し込まれ、正に《黒ひげ危機一髪》状態になっていた。

ジャスミン

『黒ひげ危機一髪つてのは元々、敵に捕まって樽の中で縛られた仲間を助けるために、樽に剣を刺してロープを切るつて設定なんだ。』

ジル

「二回戦はその黒ひげ危機一髪のルールに則り、その樽に全員が順番に剣を刺し、先に天馬を樽から出した者が勝者とする。」

ナオミ

「あの、ホントに刺しちやつて大丈夫なんですか!?もし天馬君が怪我でもしたら……………」

ジル

「大丈夫だ、安全は確保してある。」

ジャスミン

「そんじゃ二回戦、松風天馬危機一髪の開始だ！」

フアーン！

ジャスミンがホーンを鳴らし、二回戦が始まった。アンジュ達は剣を持ち、順番に樽に剣を刺し込んで行く。天馬は恐怖と緊張から冷や汗をかいていた。

ココ

「よいしょつと。」

そんな中、二週目でココが剣を刺し込んだ瞬間……………

ビヨーン！

天馬

「あーらー!?!」

ドシン!

天馬は樽から飛び出し床に打ち付けられめり込んだ。

ジャスミン

『おーつと大当たり!二回戦はココの勝利だ!』

ココ

「やったー!」

ココは勝利した事に喜んだ。が……………

シルヴィア

「天馬様!」

アンジュ

「ちよつと、大丈夫!」

シルヴィアとアンジュが天馬を床から引き剥がす。天馬はギャグ漫画でよくあるペ

ラペラ状態になっていた。

天馬

「イテテ……………俺、どうなってます?」

葵

「見事にペラペラ……………お煎餅みたい……………」

と、ジルが天馬の口にチューブを押し込み、空気入れで空気を送り、天馬を元の姿に戻した。

天馬

「ペっ! 助かった……………」

ジル

「よし、では次に行くでしょう。」

その後は……………



天馬

「問題！俺が最初に修得した必殺技は？」

ピコーン！

葵

「そよかぜステップ！」

ピンポーン！

三回戦の早押しクイズは葵が。

カンカンカンカーン！

アンジュ

「アイム・ウイナー！」

四回戦のアームレスリングはアンジユが。

ジル

「マツチ一本火事のもと。」

シルヴィア

「ハイッ！」

パシン！

五回戦のカルタはシルヴィアが。

ナオミ

「ご馳走様でした！」

六回戦の大食いはナオミが制し、全員一勝五敗のまま最終戦を迎えた。



くアルゼナル グラウンドく

ジャスミン

『最終戦は場所をグラウンドに移して、障害物競争だ!』

アンジュ

「つて言うかジャスミン!最初の料理対決はともかく、二回戦からほとんどお嫁さん選  
びに関係無いじゃない!」

モモカ

「でも、何だかんだ言いながら結構楽しかったですし。」

葵

「ここまでみんな一勝五敗。この障害物競争で全てが決まる。」

シルヴィア

「絶対に勝利して、私が天馬様の奥方に。」

ココ

「私が天馬さんの……………」

ナオミ

「天馬君のお嫁さんになるんだから！」

アンジュ達は体操着に着替え、スタート地点にスタンバイした。

春菜

「位置について、ヨーイ！」

パーン！

春菜のピストルを合図に、アンジュ達は一斉にスタートした。

ジャスミン

『さあ全員勢いよく飛び出した！先ず最初の障害は!?』

アンジュ達の前方には、紐に吊るされたあんパンが。

ジル

「最初の障害はパン食い競争だ」

天馬

「いきなり定番じゃないですか!」

アンジュ達は全員走りながら勢いよくジャンプし、あんパンを噛って獲得。すると……アンジュ達がパンを噛るや否や足を止め、パンを食べ始めた。

天馬

「あれ?みんなどうしたの?」

天馬が様子を見るため目を凝らすと、アンジュ達の近くに秋が立て札を持って立っていた。立て札には……

秋

「パンを食べ終わってから再スタートして下さい。」

と書かれていた。

アンジュ

「ゴクツ………ご馳走さま！」

アンジュが真つ先に食べ終え再スタート。その後にはオミ、ココ、シルヴィア、葵、モモカの順に続く。そして先頭を走るアンジュの前に次の障害とおぼしき、ヒト一人が通れるサイズの丸い穴が幾つも空いた壁が見えてきた。

サラマンディーネ

「第二障害は穴抜けです。」

アンジュが真つ先に穴に飛び込むが、何故か抜け出せない。

アンジュ

「あれ？ウソ、何で!？」

その隙に後続の六人も到着。だがオミとモモカが何故か抜け出せず、その間にコ

コ、シルヴィア、葵が抜け出し再スタートした。

アンジユ

「ちよ、何でシルヴィア達はすんなり通れたのよ!?」

ナオミ

「あ、分かった! 私たち胸が大きいから、穴につつかえちやうんだよ!」

モモカ

「そんなあ〜!」

ココ

「うう、何だか嬉しくなーい!」

ココは走りながら泣き叫び、ココ、シルヴィア、葵は最後の障害に到着。目の前には六つの封筒が置かれていた。

ジャスミン

『最後の障害は借り物競争だ!』

ココ達三人は各々封筒を拾い中身を見る。遅れてアンジュ達三人も到着し封筒を開け中身を確認。封筒の中身は……………

アンジュ・葵

「天馬!?!」

ココ

「天馬さん!?!」

ナオミ

「天馬君!?!」

シルヴィア・モモカ

「天馬様!?!」

何と全員の封筒の中から、「松風天馬」と書かれた紙が出てきた。

ジャスミン

『そゆこと。つまり最後の障害は、先に天馬と一緒にゴールインした者が征すって事さ  
!』



天馬

「何でもありですかこの競争！」

ジル

「と言うわけで、行ってこい！」

ゴトツ

天馬

「ああああああ!?!」

突然天馬が座っている部分の床が消え、天馬は暗い穴の中に消えた。

ジャスミン

『さあ誰が先に天馬とゴールインするのか……正真正銘のラストバトル開幕だよ!!』



く居住区 通路く

穴の中に消えた天馬は、居住区に居た。

ジャスミン

『聞こえるかい天馬？ 言い忘れたが、そっちの状況は常に監視カメラでモニタリングさせて貰ってる。だからエコヒイキなんて真似はするんじゃないよ？』

天馬

「わ、分かりました……………」

天馬は慎重に居住区内を歩く。すると、前方からナオミが現れた。

ナオミ

「天馬君見つけた！」

天馬

「うわあああああ!!？」

天馬は慌ててその場から逃げる。すると今度は突き当たりからモモカが。

モモカ

「逃がしません!」

天馬

「不味い!」

天馬はロッカールームに逃げ込み、扉の鍵を閉める。

天馬

「ふう、危なかった……………」

ゴトゴト……………ボタン!

だが今度は突然ロッカーの一つが開き、中からシルヴィアが出てきた。

シルヴィア

「お待ちしておりましたわ！」

天馬

「いや何処から出てくるんですか!？」

天馬は慌ててロッカールームを出て逃げる。シルヴィアが追いかけて、それに気づいたナオミとモモカも後を追う。

—————

くパラメイル格納庫く

何とか三人を振り切り、天馬はパラメイル格納庫に到着。

天馬

「流石にパラメイルで追ってくる何て事は……………」

と言う天馬の前に、何故かアサルトモードで腕を組むヴィルキスとグレイブココ・カ

スタムの姿が。

ココ

「見つけました!」

アンジユ

「逃がさないわよ?」

天馬

「嘘でしょ!」

ヴィルキスとグレイブは天馬に向けて手を伸ばす。天馬は二機の手を華麗に避け、自身の機体であるグリフォンに乗り込む。そしてグリフォンは格納庫から直接飛び立った。

天馬

「はあ………はあ………ホントに何でもありなの?」

フアーン!

すると今度はグリフオンの前方からギャラクシーノーツ号が姿を見せる。ギャラクシーノーツ号には葵が乗っていた。

天馬

「葵!?!」

葵

「逃がさないわよ、天馬!」

ビューン!

ギャラクシーノーツ号はグリフオンの真横を通過。グリフオンは通過時の突風に煽られバランスを崩し、アルゼナルのグラウンドに不時着。不時着の衝撃で天馬はコックピットから投げ出された。

天馬

「イテテ、いくら何でもやり過ぎだよ……………」

と、立ち上がる天馬の目の前に、アンジュ達六人が居た。

アンジュ

「はあああああああ!!」

モモカ・シルヴィア

「たあああああああ!!」

葵・ナオミ・ココ

「やあああああああ!!」

六人は一斉に天馬に向かって走り出す。

天馬

「ちよつと待って! 皆さん落ち着いて! うわあああああ!?!」







ガバツ！

天馬

「わあああ!?……………あれ?」

気が付くと、天馬は木枯らし荘の自室に居た。

天馬

「今の……………もしかして、夢?良かったあ……………」

天馬は先程までの出来事が夢だと分かり、安心した。

—————

く喫茶アンジュく

少しして、天馬は喫茶アンジユを訪れた。

カランカラッソ

天馬

「お邪魔しまーす!」

アンジユ

「いらっしやい、天馬!」

天馬

「あ、アンジユさん!こんにちは!」

入店早々共に笑顔を見せる天馬とアンジユ。店内には剣城達サッカー部のメンバーと、ヒルダ達第一中隊のメンバーが居た。

剣城

「おい天馬、こっちに来ないか?」

天馬

「劍城！それに皆さんも！」

天馬は劍城達のテーブルに着いた。すると・・・。

カランカラン

ナオミ

「絶対私だと思えます！」

ココ

「いや、私です！」

シルヴィア

「いいえ、私に決まっておりますわ！」

今度はナオミ・ココ・シルヴィアの3人が何やら口論をしながらやって来た。

アンジュ

「いらつしや……って、いったい何事?」

ダンツ!

と、突然3人が天馬の前に立ち、シルヴィアがテーブルを強く叩いた。

シルヴィア

「天馬様!」

天馬

「な、何ですか……? (あれ?この展開って確か……………)」

ヒシヒシと伝わるプレッシャーに少し恐怖する天馬。

シルヴィア

「そろそろハッキリして下さい！私達3人の中で、誰が天馬様の奥方に相応しいと思いますか!?!」

そしてシルヴィアのこの言葉を聞いて、思わず叫んだ。

天馬

「まさかの正夢!?!」

く完く

## 番外編②／対決!雷門vsアルゼナル!

く稲妻町 商店街アーケード 喫茶アンジユく

ある日の朝、アンジユはタスクと共に開店の準備をしていた。アンジユは表に出て、店の扉の札を『CLOSE』から『OPEN』にひっくり返した。

アンジユ

「これでヨシと!さて、今日も頑張つて……………ん?」

そこへ朝の練習だろうか、商店街をドリブルで走り、こちらに向かう天馬の姿が見えた。天馬はアンジユに気付くと、何故か右手を高く上げる。アンジユも天馬に体を向け、同じく右手を高く上げる。

パンツ!

そして天馬がアンジユの横を通り過ぎると同時に、二人はハイタッチ。天馬はそのまま走り去り、アンジユも店の中に戻った。

天馬

(いよいよ明日ですね……………！)

アンジユ

(いよいよ明日ね……………！)

天馬・アンジユ

(雷門とアルゼナルの練習試合！)



く河川敷く

しばらくして、河川敷のグラウンドにはライダースーツ姿のヒルダ・ロザリー・クリスが居た。グラウンドには何故かパラメイルの剣やライフル等の武器が無造作に置かれ、グラウンドの端にはジャスミンの姿があった。



ジャスミン

「スタート!」

ジャスミンの声を合図に、三人は各々ドリブルしながら武器の間を縫うように進み、そしてゴールに向けて一斉にシュート。だがボールは全てゴールポストに当たり跳ね返った。

ロザリー

「うち、惜しい!」

ジャスミン

「でも、だいぶ良くなって来たんじゃないかい?最初の頃とは大違いだよ。」

クリス

「うん!あともう少しだよ!」

ヒルダ

「よし、じゃあ練習再開だ!明日は絶対に勝つよ!」



くアウラの里 大通りく

ヴィヴィアン

「うおおおおおおおおお!!」

アウラの里では、ヴィヴィアンがタイヤを引きながら大通りを全力ダツシユで駆け抜けていた。その様子を、家のベランダから優しく見守るラミアの姿もある。



くアウローラ トレーニングルームく

アウローラのトレーニングルームでは、サリアがトレーニングに励んでいた。その傍らで、ジルもサリアに付き合う様にトレーニングをしている。

ジル

「おいサリア、明日は本番なんだぞ? 気持ちは分かるが過度なトレーニングは逆効果だ。少し休め。」

サリア

「そう言うアレクトラこそ、休んだらどうなの? ずっと私のトレーニングに付き合ってくれてるけど……」

ジル

「私はこの程度で音を上げる程、弱い女ではない。何ならお前がトレーニングし過ぎで動けなくなるまで、付き合っても構わないぞ?」

ジル

「なら私は、アレクトラが疲れて動けなくなるまでトレーニングしてやろうじゃない!」



く永世学園 グラウンドく

エルシヤは瞳子の協力の下、永世学園のグラウンドを借りてキーパーの特訓をしてい

た。エルシャの目の前には、かつて円堂が中学生時代に使用していたガトリング型の巨大サツカーマシンが置かれている。

瞳子

「準備はいいかしら？」

エルシャ

「ええ、お願いします！」

ガコン！ドーン！ガコン！ドーン！

瞳子がリモコンでマシンを遠隔操作。砲身が回転し、マシンからサツカーボールが連続で発射された。エルシャはタイミングよくパンチや平手打ち等を繰り返して、ボールを弾いていく。

園児

「エルシャ先生ガンバレー!!」

グラウンドの脇では、お日さま園の園児達がエルシヤを応援している。

エルシヤ

(アルゼナルのゴールは、私が守ってみせるわ!)



〜雷門中 野外グラウンド〜

そして雷門中のグラウンドでは、サッカー部が練習に励んでいた。中にはシルヴェイア・ナオミ・ココ・ミランダの姿もある。

天馬

「剣城!」

天馬がドリブルでボールを運び、剣城にパスを出す。

ナオミ

「いたadaki！」

だがナオミがパスをカットしボールを奪い、ナオミはボールをココに預け、更にココがシルヴィアにパス。

シルヴィア

「でええええええい！」

シルヴィアがダイレクトシュートを放ち、ボールは信助が守るゴールへ。信助は両手を突き出しボールをキャッチした。

信助

「ナイスシュートです！」

三国

「シルヴィアさん達、何時も以上に気合いが入ってるな。」

ミランダ

「そりゃそうだよ。だって明日は、楽しみにしてた雷門とアルゼナルの試合だもの。」

狩屋

「ついに明日か。くうー、俺も楽しみ過ぎて仕方ないって感じだよ!」

錦

「おうよ!ここんとこ色々あったからのう……明日は久し振りの楽しい試合じゃ!」

神童

「楽しい試合か……ああ、そうだな!」



くサッカー棟 グラウンドく

次の日、雷門中サッカー棟には多くの観客が集まっていた。観客の中には稲妻町でお馴染みの人々、豪炎寺・鬼道・壁山を始めとする雷門サッカー部OB、吹雪・佐久間・不動を始めとするイナズマレジェンドジャパンの選手達、イナズマジャパン基アースイレブンの選手達、マギー・エマ・ミステイを始めとする元アルゼナル関係者、白竜・太陽を始めとするホーリーロード及び元ファイフスセクター関係者、更にお日さま園の園児達

や関係者、サラマンディーネ・ナーガ・カナメ・ラミアを始めとするアウラの民の姿もある。そしてグラウンドには天馬率いるお馴染み雷門中サッカー部と、アンジユ・ヒルダ・サリアを始めとするアルゼナルのメイ尔ライダーによつて構成された《チーム・アルゼナル》が居た。メンバーの中にはヴィヴィアン・ココ・ミランダ・ナオミ・シルヴィア、そしてベンチにはタスクとモモカの姿もある。

タスク

「いよいよだね、アンジユ。」

アンジユ

「ええー！」

ヒルダ

「今日のために猛特訓してきたんだ。何が何でも絶対に勝つてやる！」

モモカ

「ところで、このユニフォームはサリアさんがデザインされたのですか？」

アンジユ達は赤地に白で大きく『A』の字が描かれた半袖のユニフォーム、エルシヤは黒地に黄色で大きく『A』の字が描かれた長袖のユニフォームを身に付けていた。



サリア

「そうよ。私達のチーム名、アルゼナルの頭文字をあしらってみたの。どう?」

アンジュ

「そうねえ……サリアにしては良い感じなんじゃない?」

サリア

「実は天馬が持ってた別のユニフォームをお手本にしたから、100%オリジナルって訳じゃないのよ。」

ヴィヴィアン

「えっ?天馬って、雷門とジャパン以外のユニフォームも持ってるの?」

そして、観客席の一角に設けられた実況席には、毎度お馴染みのこの方々。

歩

「さあ、まもなく始まります!雷門サッカー部vsチーム・アルゼナル!実況は私、角馬歩が御送り致します!!」

数分後、各々のチームがフィールドに出た。

雷門サッカー部

《フィールド》

信助 GK / 2 0

霧野 DF / 3

車田 DF / 2

天城 DF / 4

狩屋 DF / 1 5

天馬 MF / 8 《C》

神童 MF / 9

錦 MF / 1 4

速水 MF / 7

剣城 FW / 1 0

倉間 FW / 1 1

《ベンチ》



ナオミ MF / 6

シルヴィア MF / 7

サリア MF / 9

アンジュ MF / 11 《C》

ヒルダ FW / 10

ヴィヴィアン FW / 20

《ベンチ》

タスク FW / 12

ジル MF / 99

モモカ (マネージャー)

歩

「両チームがポジションに着きました！さあ、どのような試合になるのか!？」

大勢の観客が見守る中、天馬とアンジュは共にセンターサークルに立ち、そして握手をした。

天馬

「アンジユさん、今日はお互い全力で頑張りましたよね!」

アンジユ

「もちろん!全力で貴方達にぶつかっていくわ!覚悟しなさい!」

握手を終えると二人は各々自分のポジションに戻り、試合の準備が整った。

アンジユ

「みんな、私達の全部を雷門にぶつけるのよ!」

アルゼナル

「イエス・マム!」

円堂

「今日は俺からは何も言わねえ!その代わり、存分に楽しんで来い!」

雷門

「はい!!」

歩

「さあ、いよいよ試合開始です！」

ピー！

審判のホイッスルの音が響き渡り、雷門のキックオフで試合が始まった。剣城から倉間、倉間から天馬にボールが渡る。

天馬

「行きます！」

天馬はボールを受け取ると直ぐにアルゼナル陣内へ駆け出した。ヴィヴィアンとヒルダを華麗に躲し、倉間と共にゴールを目指す。

歩

「松風と倉間が、共にアルゼナルゴールに迫る！」

ロザリー

「行かせるか!」

ロザリーとクリスが正面から突っ込むが、天馬は倉間にパスを出し、倉間は更にサイドから攻め込んでいた剣城にパスを出す。

剣城

「でええりやああああ!!」

剣城がダイレクトシュートをアルゼナルゴールに向けて放つ。だがキーパーのエルシャがキャッチし受け止めた。

歩

「おっと!キーパーエルシャ、剣城のダイレクトシュートを受け止めた!雷門、先制点ならず!」

エルシャ

「良いシュートよ、剣城君!」

劍城

「エルシャさんも、やりますね！」

エルシャはボールをナオミに預け、ナオミはアンジュと共に雷門陣内へ蹴り込む。

歩

「今度はアルゼナルの反撃！ナオミとアンジュが雷門陣内へ蹴り込んで行く！」

錦

「おりゃああああ！」

錦がスライディングでナオミを襲うが、ナオミはアンジュにボールを預け回避。アンジュはボールを受け取ると、すぐさまヴィヴィアンにパスを出す。ヴィヴィアンはボールを受け取ると、信助と対峙した。

ヴィヴィアン

「行くよ信助！」



信助

「はいー!」

ヴィヴィアンが信助に向けて渾身のシュートを放つ。信助は持ち前の瞬発力を生かし、ジャンピングキックでボールを受け止めた。

歩

「止めたぞ西園! ナイスセーブ!」

信助

「天馬!」

信助は天馬に向けてロングパスを出し、天馬はボールを受け取ると再びアルゼナル陣内へと向かう。

サリア

「行かせないわよ!」

シルヴィア

「行かせません！」

だが行く手にはサリアとシルヴィアが立ち塞がる。すると天馬は両手を振り前方に大きな竜巻を発生させ、その中をくぐり抜けて二人を躲した。

天馬

「《風穴ドライブ》!!」

歩

「松風があつという間に二人を抜き去った！」

二人を抜き、天馬は剣城にパスを出す。剣城はボールにバイシクルシュートを叩き込み、黒いオーラを纏ったボールを放つ。

剣城

「《バイシクルソード》!!」

剣城のバイシクルソードはアルゼナルゴール目掛けて突き進む。

歩

「出たあああ! 剣城の必殺バイシクルソード! 雷門、先制点なるか!」

エルシヤ

「うふふ………それじゃ、私も少し本気出しちやおうかしら? はあああああ!!」

エルシヤは右手に力を溜め上に上げる。すると、エルシヤの右手に巨大なドリルが出現した。

エルシヤ

「《ドリルスマツシャー》!!」

エルシヤはドリルを突き出し、剣城のバイシクルソードを弾き飛ばす。そして落下してきたボールを優しくキャッチした。

剣城

「ナニツ!」

歩

「キーパーエルシャ、又しても劍城のシユートを止めました！」

ロザリー

「つか、今のドリル……………だったよな？」

クリス

「エグすぎる……………」

エルシャの必殺技が予想外過ぎたのか、フィールドにいる数名が唖然としていた。そんな面子を他所に、エルシャは観客席の一角に目を向け微笑む。目線の先には誇らしげに微笑む瞳子と砂木沼の姿があった。

円堂

「あの技、まさか瞳子監督と砂木沼が教えたのか……………」

皆がエルシャに唖然とする中、エルシャはボールを雷門陣内に向けて蹴り飛ばす。その先には、ヴィヴィアンとヒルダが居た。

車田

「させつか!」

車田・狩屋・霧野・天城がブロックに入るが、ヒルダがその場で真上に大きくジャンプ。時計回りに回転しながら赤い炎の竜巻を纏い、そして強烈なシュートを叩き込んだ。

ヒルダ

「《ファイアトルネード》!!」

ヒルダのファイアトルネードが雷門ゴールに向け勢いよく放たれた。

信助

「決めさせない!」

信助は一瞬でゴール前からコーナーへ移動し、再びゴールへと走る。そしてボールへ真横からジャンピングパンチを叩き込んだ。

信助

「《ぶつとびパンチ》!!」

信助のぶつとびパンチはボールに見事命中し、ボールは弾き返された。だが、弾き返された先にはヴィヴィアンが居た。ヴィヴィアンは大きく右足を振りかぶり、背後に出現した青い竜と共に渾身のシュートを放った。

ヴィヴィアン

「《ドラゴンクラッシュ》!!」

信助

「しまった!」

信助は急いでボールを追いかけたが間に合わず、ボールはゴールに突き刺さった。

歩

「ゴール!ヴィヴィアンの必殺シュートが炸裂!アルゼナル先制です!」

ヴィヴィアン

「ヨッシャー!!」

染岡

「いいぞヴィヴィアン!」

豪炎寺

「見事だ。」

シュートが決まったヴィヴィアンとアルゼナルのメンバー、そして観客席に居た染岡は喜んだ。

円堂

「なるほど、今度は豪炎寺と染岡か……コイツは想像以上に手強いぞ?」

数分後、雷門のボールで試合が再開。ボールは錦に渡り、錦はロザリーと対峙する。

ロザリー

「いくぜクリス!」

クリス

「オツケー！」

ロザリーは体を反転させ、両手を前で組み踏み台を作る。するとクリスが踏み台に乗り、次の瞬間ロザリーがクリスを空高く放り投げる。

クリス

「《シューティングスター》!!」

ドーン!

錦

「ドワアアアアッ!?!」

そしてクリスが錦の目の前に跳び蹴りを叩き込み、発生した衝撃波で錦を吹き飛ばした。



錦

「クウー!今のは中々効いたぜよ!」

錦が感心している間に、ボールはナオミに渡っていた。ナオミがドリブルで攻め込むと、目の前に天馬が立ち塞がった。天馬はポーズを決め、残像を発生させながらナオミに向かって走って跳躍。

天馬

「《ワンダートラップ》!!」

そしてナオミの目の前で残像と共に姿を消すと同時に、ナオミの後ろに現れスライディングでボールを奪った。

歩

「おっと、これは鮮やか!松風がボールを奪い返した!」

天馬はボールを剣城に預け、ゴールへ一気に駆け出す。

劍城

「《バイシクルソード》!!」

ボールを受け取った劍城は再びバイシクルソードをアルゼナルゴールに向けて放つ。だが、その先には天馬が居た。

劍城

「天馬！シュートチェインだ！」

天馬

「はあああああ!!」

天馬はボールと同じ速度まで加速し、追い付くと同時にボールにジャンピングボレーシュートを繰り出し、突風と共に黒と水色のオーラを纏ったシュートを放った。

天馬

「真《マツハウインド》!!」

エルシヤ

「《ドリルスマツシャー》!!」

エルシヤはドリルスマツシャーを繰り出し、マツハウインドを受け止める。

バキ……………バキバキ……………

エルシヤ

「っ!？」

バリン!!

だがバイシクルソードのパワーが加わったマツハウインドに押され、ドリルが崩壊。ボールはアルゼナルゴールに突き刺さった。

歩

「ゴール!! 剣城と松風のシュートチェインが炸裂! 雷門、同点に追い付いた!」

エルシャ

「まさかドリルスマツシャーが敗れるなんて……やっぱり凄いわね！」

その後、アルゼナルのボールで試合再開。ヒルダ・ロザリー・クリスが縦一列に並びながらゴールに走る。

クリス

「行くよー！」

最後尾のクリスがボールをシュートし、続いて真ん中のロザリーがボレーシュート、最後に先頭のヒルダがダイレクトシュートを叩き込み、三人のシュートのエネルギーを受けたボールが雷門ゴールに放たれた。

ヒルダ・ロザリー・クリス

「《トリプルブースト》!!」

信助

「《ぶっとびパンチ》!!」

ドーン!

信助

「うわあああああ!」

信助はぶつとびパンチで応戦するが、トリプルブーストのパワーに負け吹き飛ばされた。

ガンツ!

だがボールはゴールポストにぶつかり跳ね返り、得点には至らなかった。

歩

「おっと、ボールがゴールポストに!得点ならず!」

狩屋が跳ね返ったボールを取り走り出す。だがヴィヴィアンとヒルダがボールを奪

いに襲い掛かる。

狩屋

「丁度良いや。前に皆帆に教えてもらったアレ、使ってみつか！」

そういうと狩屋は突然、ある方向を指差し叫んだ。

狩屋

「《あそこにUFO》!!」

ヒルダ・ヴィヴィアン

「えっ!？」

ヒルダとヴィヴィアンは思わず狩屋が指差した方向に目を向け、その隙に狩屋が背後から二人を抜いた。

狩屋

「ニッヒツヒー、じゃあね！」

ヒルダ

「あ!野郎、騙しやがったな!」

シユン!シユン!シユン!ポンツ!

そして騙された事に気づいたヒルダと、未だU F Oを探すヴィヴィアンの後ろにU F Oが現れ、空へと消えた。

歩

「狩屋が二人を抜いたー!」

狩屋

「速水先輩!」

狩屋はボールを速水に預け、ボールは速水から錦、錦から神童、神童から天馬に渡り、天馬はエルシャと対峙する。

天馬

「真《マツハウインド》!!」

天馬は再び真マツハウインドを放つ。

エルシヤ

「次はコレよ！はあああああ!!」

エルシヤは全身に力を込め、自身を巨大化させる。

エルシヤ

「《ギガントウォール》!!」

そして拳を振り下ろし、ボールを地面に叩きつけた。叩きつけられた衝撃でボールは地面にめり込み、地面に亀裂が走った。

歩

「キーパーエルシヤ、今度は止めました！」



天馬

「ドリルスマツシャーの他に、あんな凄い必殺技が!？」

ヒルダ

「つてか、あれアリなのか!？」

色々突っ込みたいところかも知れないが、今は試合の真つ最中。エルシヤはボールをシルヴィアに預け、シルヴィアはナオミとココと共に雷門ゴールへ走る。

シルヴィア

「ナオミィ・ココー!」

ナオミ・ココ

「はい!」

三人はゴール正面で停止し、信助やデイフェンス陣と対峙。

ピューイ!

突然シルヴィアが指笛を吹き、それと同時にナオミとココが同時に走り出す。指笛が終わると、地面から五匹の可愛い皇帝ペンギンが顔を出した。

シルヴィア

「《皇帝ペンギン!!》」

シルヴィアがボールを蹴ると同時に、ペンギンがまるでミサイルの様に飛び立つ。そして先行のナオミとココが左右から同時に、ボールにダイレクトシュートを叩き込む。

ナオミ・ココ

「2号!!」

ゴールに向けて放たれたボールを追うように、五匹のペンギンが軌道を描きながらミサイルの様に信助に襲い掛かる。信助はヘディングでボールを受け止めると、足から炎を吹き出しまるでロケットの様に飛び立つ。

信助

「《ぎんがロケット》!!」

ボールを宇宙空間に運び、そしてヘディングでボールを銀河の彼方へ消し去った。

歩

「今度は止めたぞ西園!アルゼナル追加点ならず!」

ピピー!

ホイッスルが鳴り、試合は同点のまま前半戦を終えた。

歩

「ここで前半終了!両者共に得点は1対1のまま!果たして後半戦はどんな試合になるのか!?!」

-----

く一軍部室く

後半戦までの休憩時間、雷門は部室に移った。

天馬

「まさかアンジュさん達が、あんな凄い必殺技を持つてたなんて。」

水鳥

「まさしく、『男子、三日会わざれば刮目して見よ』ってヤツだな。つってもアッチは女  
だけど。」

神童

「前半戦で実力の全てを出したとは思えない。後半戦も全力で掛かるぞ?」

「はい!!」

-----

くミーティングルームく

一方、チーム・アルゼナルはミーティングを借りて休憩していた。モモカがメンバー全員にタオルとドリンクを配り、アンジユが後半戦の戦術を話す。

アンジユ

「後半からはヴィヴィアンとタスク、シルヴィアとジルを入れ替え。フォーメーションは私・タスク・ヒルダのスリートップで行くわ。」

タスク

「いよいよ出番か！ワクワクするなあ！」

ジル

「今のところ、我々の実力は雷門に劣ってはいない。このまま攻め続ければ勝機はある。」

ヒルダ

「けど、アイツらにはまだ化身って切り札がある。後半戦で化身を使ってくるって可能性もあるぜ?」

アンジユ

「そこは何かなるんじゃない?いくら化身が相手でも、必殺技のパワーが強ければ押

し倒せるって聞いたし。それにまだ切り札を見せてないのは、私達も同じだしね。」  
ヒルダ

「そう言やそうだったな。」

アンジュ

「勝つのは私達、チーム・アルゼナルよ！みんな、後半戦も頑張りましょう！」

「イエス・ママ！」

—————

くグラウンドく

数分後、各チームが再びフィールドについた。アンジュの言う通りヴィヴィアンとシルヴィアはベンチに移り、代わりにタスクとジルがフィールドへ。そしてアンジュ・タスク・ヒルダのスリートップにフォーメーションを変更した。

天馬

「タスクさんとジル総司令、しかもアンジュさんがフォワードのスリートップ、大胆にフォーメーションを変えてきた。」

ピー!

歩

「後半戦開始です!」

後半戦開始のホイッスルが鳴り、アルゼナルのキックオフでスタート。始まってしばらくはお互い大きな動きが無いまま迎えた後半10分、アンジュがボールを受け取りタスクとヒルダを従えて雷門陣内へ攻め込む。

天馬

「通しません!」

天馬はアンジュに正面から向かい、速水と浜野がタスクとヒルダを抑えに掛かる。

アンジュ

「《エンゼルボール》!!」

アンジュがボールを蹴り跳ばすと、ボールに白い翼と天使の輪が現れ、天馬の周りを浮遊。そして天馬の後方でアンジュの足下に戻った。

歩

「おっと、アンジュが松風を抜いた!」

アンジュ

「見せてあげるわ、私の必殺シュート!」

アンジュは蒼く輝く巨大な6枚の翼を展開し、ボールと共に空へと飛ぶ。翼が大きく広がるのと同時に空中に浮いたボールが青い炎を纏い、そしてアンジュがそれを力強く蹴りゴールに向けてシュートした。

アンジュ

「《デッドリールシフアー》!!」



ドーン!

信助

「うわあああああ!?!」

アンジユの必殺シュートに信助は吹き飛ばされ、ボールは雷門のゴールに突き刺さった。

歩

「ゴール!!アンジユの必殺シュートが炸裂!アルゼナル、ついに勝ち越し!」  
アンジユ

「どう?これが私の必殺技、デッドリールシフアの威力よ!」

天馬

「凄い、あんな必殺技を隠してたなんて……………」

数分後、雷門のボールで試合が再開。剣城から神童がボールを受け取る。

神童

「行くぞ！ 《神のタクト》!!」

神童は両手をまるでオーケストラの指揮者の様に動かし、フィールドに光の筋を描く。雷門イレブンは神童の光の筋を辿りながらパスを繋げ、アルゼナル陣内へ攻め込んで行く。

サリア

「これが神童のゲームメイク、凄いわ！」

だがボールが速水に渡ろうとしたところで、ジルがパスカットをしてボールを奪った。

ジル

「今度は私の番だ！」

ジルは自分の左右に多数のミサイルポッドを出現させる。ミサイルポッドの中からサツカーボール型のミサイルが現れ、ジルはボールをシュートと同時にミサイルを一斉に発射した。

ジル

「《アサルトシュート》!!」

ボールと共に大量のミサイルが雷門陣内へ降り注ぐ。すると天城がゴールの前に立ち、自身の足下を海へと変える。さらに海中から巨大な神殿を出現させた。

天城

「《アトランティスウォール (G3)》!!だど!!」

天城は自身の前に六角形のバリアを展開し、ボールとミサイルを防いだ。

歩

「止めたー!天城がアルゼナルの攻撃を阻止!」

天城は速水にパスを出し、さらに速水から天馬に渡った。

天馬

「マツハウインドが駄目なら、これでどうだ！」

天馬はボールにエネルギーを溜め、光り輝くエネルギーを纏ったボールを風と共に思い切りシュート。

天馬

「《ゴツドウインド》!!」

天馬の放ったボールは旋風を纏い、荒れ狂いながらゴールへ向かっていく。

エルシヤ

「《ギガントウォール》!!」

だがエルシャのギガントウォールには歯が立たなかった。

天馬

「ゴツドウインドも通じない!？」

ボールはエルシャからアンジユに渡り、さらにタスクがボールを受け取り、タスクは雷門ゴールに向かって走る。

錦

「行かせんぜよー!」

錦がスライディングで止めるが、タスクはジャンプして錦を避ける。そして雷門ゴールへ思い切りシュート。

信助

「うおおおおお!!」

信助がパンチで防いだが、ボールはゴールラインを越えて外へと出てしまった。

タスク

「惜しいー！」

アンジユ

「……………」

数分後、アルゼナルのコーナーキックで試合が再開。ヒルダがコーナーからボールを蹴りサリアが受け取る。サリアは腕組みをしてゴールを睨みつける。すると周りが南極の様になりオーロラが発生。そして冷気で凍りつかせたボールを後ろ回し蹴りの様に蹴りつけシュート。

サリア

「《ノーザンインパクト》!!」

すると、狩屋が両手を開きながら左腕を横に、右腕を縦に振り、巨大なネットを出現させた。

狩屋

「《ハンターズネット》V3!!」

信助

「《ぎんがロケット》!!」

狩屋のハンターズネットで威力が弱まり、さらに信助のぎんがロケットに弾かれた。ボールは中を舞いアンジユの足下に落ちる。そしてアンジユは天馬と対峙した。

アンジユ

「ねえ天馬、何で化身を出さないの?」

天馬

「え?」

突然のアンジユからの質問に、天馬は少し驚いた。

アンジユ

「貴方達には化身って切り札があるでしょ？なのに何で使わないの？」

圧倒的なパワーを持つ化身なら、試合を有利にする事は容易い。しかも雷門にはアンジユ達を知るだけで少なくとも5人の化身使いが居る。なのに雷門は今まで一度も化身を出していない。アンジユは不思議だった。

天馬

「決めたんです。今日の試合、俺達は化身を使わないって。」

アンジユ

「どうして？」

天馬

「俺達はアンジユさん達と、楽しくサッカーがしたい。楽しいサッカーをするのに、化身は必要ありません。だから俺達は、この試合で化身は使わない事にしたんです。」

アンジユ

「楽しくサッカーがしたいか……なるほど、天馬らしいわね。」

天馬

「でも、だからと言って負ける気はありませんよ？」



アンジュ

「それは私達も同じよ。私達だってこの日のために頑張ってきたもの。だから絶対、貴方達に勝つわ!」

そう言うのとアンジュは再び蒼く輝く翼を出現させ、デッドリールシフアーの体制に入る。

アンジュ

「これで決める! 《デッドリールシフアー》!!」

アンジュのシユートが雷門ゴールに迫る。すると天馬は右手で突風を起こし、デッドリールシフアーの炎を打ち消す。そしてボールに風を纏わせカウンターシユートを放った。

天馬

「《嵐・竜巻・ハリケーン》!!」

ボールの周囲の風は巨大な竜巻へと姿を変え、ゴールへと突き進む。エルシヤは必殺技を繰り出そうとしたが間に合わず、天馬渾身のカウンターシュートがアルゼナルゴールに突き刺さった。

歩

「ゴール!!天馬渾身のカウンターシュート炸裂!!雷門、再び同点に追い付いた!!」

ピツピツピー!

するとホイッスルの音が響いた。

歩

「ここで試合終了のホイッスル!白熱した試合でしたが、得点は2対2!引き分けです!!」

天馬・アンジユ

「ハア……………ハア……………」

最後の必殺シユート対決が効いたのか、天馬とアンジュはその場で仰向けに倒れた。

天馬

「引き分けか……へへっ、惜しかったなあ。」

アンジュ

「でも、楽しかったわ。まさか私の必殺シユートがシユートに返されるなんて、全く思っ  
てなかったわ。」

天馬

「俺もアンジュさんや皆さんがあんな凄い必殺技を持ってて、ビックリしました。次は  
絶対に、俺達が勝ちますからね!」

アンジュ

「それはこっちの台詞よ。私達だって、次は負けないから、覚悟しなさい!」

天馬とアンジュは拳をぶつけ、再戦を約束した。

『ワー!』

すると丁度、観客席から歓声が響き渡り、両チームのメンバー全員が二人の元へ集まった。

ヴィヴィアン

「みんなー！アンジュと天馬を胴上げだー！」

天馬

「えっ!?!ちよ、ちよつと!?!」

アンジュ

「ちよ、ちよつとお・・・!?!」

神童

「いくぞー！」

そして神童の掛け声で、天馬とアンジュを胴上げした。

「ワーツシヨイ！ワーツシヨイ！」

胴上げの掛け声と歓声がスタジアムに響き渡り、こうして試合は幕を下ろした。後日、喫茶アンジユの店内とサッカー棟には、茜が撮影した試合の写真が数多く飾られていた。

く完く